
機動戦士ガンダム SEED Destiny ~BlumenEinbrecher~

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム SEED Destiny ~Blumen Einbrecher~

【Nコード】

N1415S

【あらすじ】

人が人を滅ぼしかけた戦争を経てもなお人々は争いをやめようとはしなかった。人は人の無理解を嘆き、人は人の悪意を恐れる。人の血を糧として、人の争いを土壤に花々が咲き乱れる。人の暗き願いを吸い上げたその花は、互いの美しさを競い合う。これは人々が望んで咲かせた花々の物語。美しくも作為的な花々の物語。*これは機動戦士ガンダムSEEDの2次創作であるBlumenGartenの続編にして完結編です。そのため、SEED DEST

i n yの2次創作の形こそ採りますが設定から内容まで大きく異なっています。よって、原作を知っているという方はかえつて前作をご覧いただくか、設定資料集を読み済ませることをお勧めいたします。

第1話「戦争と平和」

世界のために戦いたいだとか、もう自分のような人を増やさないためだとか、そんな理想を抱いて軍人になつたわけじゃない。

これしか生きていく方法がなかつた。ただそれだけのことだつた。

そうして俺は、俺から母さんを奪つた軍人になつた。

暗い。宇宙の暗さをそのまま反映する形ですべてが闇に包まれていた。身の回りで計器の発するわずかな光だけがまるで星のように小さく瞬いている。

操縦桿を握りしめる手。フット・レバーを踏みつける足の感触だけがここが「クピットの中なのだと教えてくれる。

特に意味もなく、ヘルメットの内部電灯のスイッチを入れる。明るい光がヘルメット内に灯され、しかしそれは外の暗さを強調するでしかなかつた。フェイス・ガードに光が反射し、鏡のように作用した。

フェイス・ガードに写されたのは少年の顔である。向かつて左側、左の頬に大きな痣があつて、どこか目つきが悪い。それは目鼻立ちの特徴というよりも、いつも不機嫌そうに目を細めていることに原因がある。

自分の顔ながら、いつまでも見ていたいものでもない。ライトを

消す。そのタイミングで通信が入った。

「シン・アスカ軍曹、発進準備、お願ひします」

若い女性の声である。名前はアビー・ワインザー。地球上に國士を持たない宇宙の国プラントの軍隊であるザフトの軍人である。少年が所属する部隊の管制員を担当している女性だ。

シン・アスカ。

呼び上げられた少年の名。しかし少年はそれに何の感慨も示すことなく、操縦桿を握る手に力を込めた。

視界の四隅から光が一直線に放たれる。それは四角く空間を切り取つて、ここがカタパルトの上であることを知らしめる。光が導く先には宇宙の闇が広がる。暗闇のカタパルトの上では、20mほど鋼鉄の巨人が姿を見せぬまま腰を屈めた。

そのコクピットの中で、シンは叫んだ。

「シン・アスカ、インパルス2、行きます！」

始まる加速。突き進む機体。シンの体は、混迷極める戦いの空へと投げ出された。

その戦争にまだ名はない。まだ終わりを迎えていないからだ。それを歴史上の出来事と片づけてしまふには、世界はその準備も気構えもできていなかつた。

「コーディネーターと呼ばれる遺伝子を調整され、生まれながらにして麗しい容姿と優れた能力とを約束された人々が建国した国プラント。そこは楽園になると期待されていた。

しかし、楽園は歪んでしまった。

大西洋連邦をはじめとする地球の国々はプラントの完全独立を認めようとはしなかった。

そして、プラントはその理想に毒されていった。

C.E.61年に発生した、コーディネーター排斥を謳う過激思想組織ブルー・コスモスによる核攻撃によって、プラント、ユニウス市第7コロニー、ユニウス・セブンが破壊された。後に「血のバレンタイン」と呼ばれるこの事件は20万を超える死者を出し、両勢力の決裂を決定的なものとした。

その4年後、C.E.65年、プラントは無差別報復を開始する。ニュートロン・ジャマーと呼ばれる中性子ビーム抑制装置を地球全土に警告なしに投下したのである。原子力発電を封じられた地球では慢性的なエネルギー不足に見舞われ、少なくとも10億の人人がその命を落とした。

C.E.67年。この年に戦争が始められたのは、至極当然の成り行きであった。

当初、10倍を超える国力差から大西洋連邦軍の圧勝が予期されていた。しかしザフト軍はモビル・スーツと呼ばれる人型兵器を導入、その優れた技術力で戦争を圧倒的優位に進める。

その後3年にわたってザフト軍優位に進むも、国力の差は如何ともしがたいものであった。戦線は膠着。ザフト軍は補給線が伸びきり、大西洋連邦は反撃の糸口を見いだせずにいた。

それを変えたのは1人の技術者の登場であった。

ゼフィランサス・ズール。大西洋連邦に本社を置く軍事企業ラタスク社の技術者であり、ブルー・コスマスの幹部とも関係の深い才女である。ゼフィランサスが開発した機体群は優れた性能を発揮し、その技術を転用する形で兵器の高性能化、高火力化が進められていいくこととなる。

大西洋連邦軍もモビル・スーツの量産化に成功し、ザフト群はチームという破壊力に優れた兵器を手に入れた。

そして、さらなる力が解き放たれる。プラントへ亡命したゼフィランサスは、プラント最高評議会議員であるとともに技術者ともも知られるコーリ・アマルフィ議員の協力の下、ニュートロン・ジヤマーを無効化するフレア・ニコルの開発に成功。

戦況はさらなる苛烈さを深めることとなる。

大西洋連邦軍は核の封印を解いた。ザフト軍は大量破壊兵器ジエネシスを使用し、あわや地球全土を焼き払う寸前まで戦いは激化した。

戦いは壮絶な痛み分けとなつた。双方が戦力の大多数に深刻な損害を与えられ、なし崩しに休戦へと向かうこととなつた。

C・E・72・2・14。すべての始まりの地であるゴニウス・セブンの残骸の上で両国による休戦条約が締結された。これまでの戦闘があまりに加熱しすぎたことの反省として、モビル・スーツ保有台数の制限などを盛り込んだこの条約は第3国であるスカンジナビア王国の仲介によつてとりまとめられた。

戦争がこれ以上不要な犠牲を出さぬよう、戦いがこれ以上続かぬよう淡い期待をかけられたこの条約は、しかし平和を約束するものでは決してなかつた。

続く戦争。最前線ではいまだに小規模な戦闘が散見され、休戦の名を借りた兵器の開発競争は苛烈さを極めた。

戦いは決して終わりを迎えてなどいない。

休戦条約から3年を経たC・E・75年現在でもまだ、人々はナチュラルとコードイネーターに分かれて戦いを続けていた。

ナチュラルはコードイネーターを遺伝子を操作した化け物と蔑み、コードイネーターはナチュラルを劣等種と見下しながら戦いは続いていた。

ゼフィランサス・ズールが生み出した機体群、その名はガンダム。この戦場にさらなる破壊と戦火の種を撒いた機体の名はガンダム。

ガンダムもまた、戦いを彩る主役の座から引きずりおろされてはいなかつた。

新造コロニー、アポロン。

大戦勃発以後、宇宙ではコロニーの大規模建造は行われてはこなかつた。プラントには領土を拡張するほどの余力はなく、地球連合各団は徒にプラントを刺激することないようその建造を控えたためである。

しかし、まったく行われていないわけではない。

プラント船籍の航路とは関わらない場所に軍事目的に転用不可能な小規模コロニーの建造は細々と続けられていた。

「」アポロンはコーラシア連邦の所轄する建造途中のコロニーである。典型的なシリンドラー型コロニーであり、その姿は宇宙に浮かぶ両端が開いた筒である。内部は完全な空洞であり、内壁にはまだ数えるほどの建造物しか設置されていない。

単なる非軍事コロニーである。たとえ戦争状態が継続されていようとも、戦闘とは無縁。作業用小型ボッド、ミストレルが各所に見られる。横倒しにした卵に手足を取り付けたようなミストラルは單なる作業用であり、ここアポロンが単なる民間利用のコロニーであることを印象づけている。

「コロニーの中空に、ダーレス級MS運用母艦が停泊している」とさえ除けば。

3年前の大戦でガンダムの運用母艦として活躍したアーク・エンジエル級の設計思想が随所に見られるハッチを前に二つ構えたブロックに戦艦が後ろからドッキングしたような特殊な構造は、このダレス級がモビル・スーツの運用と戦闘行為を目的であることを顕

示している。单なる民間コロニーであると呼ぶには、これさか不似合いな艦影であった。

周囲にはGAT-01「デュエルダガー」の姿が散見される。簡素化された灰色の装甲に、右手のライフル、左手のシールドとごくありふれた装備を有するこのモビル・スーツは、それぞれが拡散してコロニーの壁にとりついている。

臨戦態勢ではない。警戒態勢をとっているのだ。

ただ、さほど慎重さは感じられない。1機のデュエルダガーはシールドを持つ手を振り、遠くの仲間に合図を送つているような仕草を見せていた。マニュアルはない、単なる遊びである。

いくら戦闘が散発しているとは言え、このような僻地でまでザフト軍が戦闘を仕掛けてくるとは誰も考えてはいないのだ。

完成したコロニーのように土が盛られている訳でもない打ちっ放しの鉄板の上を、20mにも及ぶ巨人が歩く。いまだ擬似重力の発生はされていないコロニーの内壁は相対的には静止状態にある。

デュエルダガーは推進剤の節約のため、内壁を歩いてコロニーの縁を目指していた。

まだ蓋は閉められていない。コロニーの巨大な円に縁取られた空間には、宇宙の星々が輝いている。その輝きの中に星とは異質な輝きが含まれていることに、デュエルダガーのパイロットは気づけないでいた。

70mにも及ぶモビル・スーツの足が内壁を踏みつけた時、静寂

はあつさりと崩壊した。

赤熱する金属板。形を失つて足下から膨れ上がった光が爆発へと姿を変え、デュエルダガーを瞬く間に呑み込んだ。

音を伝えぬ宇宙は静寂を保つたまま、しかし各モビル・スーツの間ではけたたましい警報音が鳴り響いていた。

デュエルダガーの姿は爆煙に包まれ完全に姿を消している。通信にも応じる気配がない。重力がないため好き勝手な方向に四散していく煙を眺めながら、スラスターを吹かせた警備のデュエルダガータチが集合しつつあった。

何が起きているのか。そう考えるデュエルダガーはすでに行動が後手に回っていた。何かが起きていると行動しなければならなかつたのだ。

煙の中から一筋の光が伸びた。戦場に一度でも出たことがある者ならば見たことがないはずなどないビームの輝きが致命的な威力をもつてデュエルダガーを目指す。とっさにシールドを構えようと、シールドはビームの一撃に斬り裂かれ、その余熱は左腕を破壊する。続いて煙を裂くビームの一撃は腕を失った胸部ジェネレーターを直撃し、派手な爆発を引き起こした。

敵が煙の中に潜んでいる。デュエルダガーたちは一斉にビームを放つ。量産型のライフルとは言え、従来の兵器の3倍の破壊力を有するビームは煙に突き立てられるなり次々と爆発を巻き起こす。発生した爆煙はさらに大きく視界を覆ってしまった。

これでは敵の姿を確認することさえできない。

止む攻撃の手。爆煙もまた収まる気配がない。

煙が膨らんだかと思うと、それは一直線に柱となつてデュエルダガーレをを目指した。

何かがいる。

煙が引きはがされ、それは姿を現した。

モビル・スーツである。胸部から肩にかけて青が鮮やかで、全体としては白を基調としている。兵器らしからぬその色はパイロットたちを驚愕させた。かつて、その高性能故に広く知られることとなつた機体群もまた、独特の色調が施されていた。

何より、額に2対のブレード・アンテナを備え、2つのデュアル・センサーを有するその顔はひどく擬人化されたものであり、その機体群の特徴を如実に示していた。

両手にモビル・スーツの身長ほどもある巨大なビーム対艦刀を装備したそれは、実体の刃の代わりに生じているビームの刃を振るうと、たやすく1機のデュエルダガーをシールドごと胴裂きにする。

生じる爆発。再び姿が爆煙の中に隠れて消える。

しかし、すぐさま煙を抜け出すと、それは次のデュエルダガーへと襲いかかる。

デュエルダガーのパイロットは恐怖のあまり操縦桿から手を離し顔を庇うように手で覆う。スクリーンに目一杯に映し出される顔の

あるモビル・スーツの姿に、パイロットは叫んだ。

「ガ、ガンダム！？」

ZGMF-56Sインパルスガンダム。ザフト軍が開発に成功した量産型のガンダムは、しかしガンダムとして定義される機構すべてを備えている。

ビーム兵器を備えること。

2機目のデュエルダガーをかけて頭上から2本の対艦刀を振りおろす。既存の装甲すべてをたやすく破壊するビーム・サーベルは肩からわき腹にかけて2筋の切断面をデュエルダガーに刻み込む。

フュイズシフト・アーマーに守られていること。

生じるモビル・スーツ1機分の爆発力にさらされながらも、損傷が発生したことを伝える警報音はコクピットに流れるのではない。衝撃を拡散、吸収するミノフスキーパーティクルと呼ばれる・に包まれた装甲は生半可な攻撃では傷つくことはない。

そして、アリスの加護に包まれていること。

補助システムの名はAdvanced Logistic & equipment；In-consequence Cognition Engine A.L.I.C.Eと呼ばれる。周囲の状況を把握し、パイロットに伝える機構を有している。特に同じガンダム同士では専用の回線

を有し、インパルスガンダムではガンダム同士のより密な連携可能としていた。

対艦刀を装備するインパルスガンダムが煙から姿を現すと、それに狙いを定めているデュエルダガーの姿がある。

インパルスは慌てることはない。煙に隠されていようと、敵の存在は知っていた。

別方向からの一撃がデュエルダガーの装甲を貫通する。まるで痙攣したかのように体を震わせ、デュエルダガーが爆散する。

攻撃のあつた方向には、別のインパルスガンダムが脇に抱えるよう大型のビーム・ライフルを構えていた。剣を持つものとは違い、バック・パックはスラスターを構える大型のものを装備している。

「シン、何ぼさつとしてるの？」

この通信はライフルを構えるインパルスから、剣を持つインパルスへと送られてものである。

友軍機の位置はアリスによって正確に伝えられている。位置がわかつていたからこそ、デュエルダガーを進んで破壊する必要はないと判断したのだ。

剣のインパルスのパイロット、顔に痣を持つ少年、シン・アスカは不機嫌そうに声を通信機へと吹き込んだ。

「作戦中は名前で呼ぶなよ、ルナ」

シンはエイブス隊の2号機のパイロットであり、作戦中は主にインパルス2の名称で呼ばれる。シンがルナと呼んだ相手はルナ・マリア・ホーク。インパルス3である。

「クピットのスクリーンにはシンと同じく赤いノーマル・スースを身につけた少女の顔が映し出されている。赤い髪をした少女は、戦場のただ中でさえどこか楽しげに笑っていた。あか抜けた様子のルナマリアは、機会をうががつてはシンをからかおうとしてくる。

その「」への反感は、後に回すべきであるようだ。

スクリーンにはテュエルダガーの姿が映し出されていた。シンの機体から見えてはいない。ルナマリアの機体が捉えた敵機の位置がアリスを通じてシンに伝えられているのだ。

シンはフット・ペダルを踏み込んだ。1対の大剣を所持するインパルスガンダムが加速し、たなびく爆煙を吹き飛ばして進むと、そこには間違いないテュエルダガーの姿があつた。

「こんな旧式！」ときで…

シンは対艦刀を敵へと、真空を断絶させながら叩きつける。

戦闘が続けられるコロニーのその奥に、ダーレス級MS運用母艦ガーティ・ルーは静かに浮かんでいた。

そのブリッジではコロニー内部で発生した戦闘の様子がモニターに映し出されている。決して広くはないブリッジは、1段高くなつ

た場所に艦長席、及びオブザーバーのための席が用意されている以外、クルーたちは壁際に座っているという簡素な作りをしていた。

クルーと艦長との距離が近く、デュエルダガーが撃墜されているという報告は確実に艦長の耳に届いていた。

地球連合軍の白い軍服に身を包み、軍帽を深々とかぶつた男である。如何にも堅物を思わせてその表情は堅く、張り付けた雰囲気を演出していた。

イアン・リーはガーティ・ルーの艦長である。その胸には少佐であることを示す階級章がある。しかし、彼の立場をより強く印象づけるのは、左腕に巻かれた青いスカーフだろう。これは、反コードネーター思想団体、ブルー・コスモスのメンバーである証である。

「状況は？」

「ストライクもどきです。数は2です！」

クルーの報告通り、ブリッジのモニターには2機のガンダムが写されていた。2機はコロニーの外れで戦闘を行っていた。

ストライクもどき。それを地球連合軍はストライクもどきと呼称していた。GAT-X105ストライクガンダム。C.E.71年に開発されたこの機体は50近い敵機を撃破し、未だに大西洋連邦軍製モビル・スーツの先駆けとして語られる機体である。その特徴はストライカーと呼ばれる3種のバック・パックを交換することで機体の性質を一変させることにある。これと同じ特徴を持つZGMF-X56Sインパルスガンダムは単なる猿真似であるとして、スト

ライクもどきの呼称が軍内では好んで使用された。

イアンは目を細める。それは奇襲を仕掛けられたことへの苛立ちではない。単純な疑惑である。

いくらガンダム・タイプとは言え、わずか2機。奇襲を仕掛けられたということは、それだけ規模の小さい部隊であるということを意味する。それが正面切って戦いを仕掛けてくるとは考えにくい。

「陽動と云ふことか」

どこかに残りの敵が潜んでいる。索敵を密に。そう指示を出している最中、艦長席後方の扉が開いた。スライド式の扉特有の音がして、イアンの鼻にはすぐに花の香りが届いた。すぐ隣のオブザーバー席の背もたれに手をついて体を止める少女の姿が目に入った。

無重力に漂う髪は波立つ桃色。豪奢に飾り付けられたスカートに隠される足にまで届くほどの長さである。全身をフリルトリボンで装飾された純白のドレスで飾りたてられた人形のような少女である。すでに歳は19を数え、少女から女性へと開花を始めた流麗な鼻梁は、しかしまだに少女という言葉がよく似合う。

座席の背もたれに手を突いたまま、着飾ったドレスほどには鮮やかでない表情を少女はイアンへと向けた。

「リー艦長？」

戦闘に巻き込まれたご令嬢ではない。少女、ヒメノカリス・ホタルはオブザーバーの席へと慣れた様子で座る。すぐにモニターを立ち上げ、戦いに臨む冷静な指揮官へと変わる。

イアンは戦艦にあまりに不釣り合いな少女の姿に顔色一つ変えることなく、その声音もあくまでも事務的なものである。

「ストライクもどきが少なくとも2。こちらは旧式のデュエルダガーしかありません。ご足労いただけませんか？」

デュエルダガーは休戦条約以前にその生産性の高さから主力を担つていたというだけの機体にすぎない。性能不足もさることながら、新機軸の設計思想が投入された第2世代型モビル・スーツにはあらゆる点で劣っているのだ。

ヒメノカリスは口元に軽く手をやつて、何か考えごとをしている風であったかと思うと、おもむろにオブザーバー席に備え付けられたモニターを立ち上げた。総数は3。それぞれに少年少女が1人ずつ映し出されている。

「3人とも、準備はいい？」

「ああ、いつでもいけるぜ」

1人目は少年。尖った髪型に細長の瞳。どこか剃刀を思わせる少年は、しかしヒメノカリスに対してもそのままぞしもどこか柔らかい。

ステイリング・オークレー。それが鋭い少年の名。

「ヒメノカリス姉ちゃんに見せてやるよ。俺が格好よく敵を倒すとこをさ」

2人目も少年。人なつっこい笑みを浮かべて、ステイニングとは対照的に柔らかい印象である。甘え上手な微笑みでヒメノカリスの歓心を少しでも引こうとしていた。

ステイニングとは違う少年は、アウル・ニーダ。

3人目からは反応がない。モニターの奥で少女が小さく不安げな表情を作っていた。年齢の割には表情が落ち着きなく豊かで、どこか子犬のような印象を与える少女である。ステラ・ルーシエ。その名前で、ヒメノカリスは声をかけた。

「ステラ、大丈夫？」

自分を奮い立たせるくらいの間を空けて、ステラはその顔を強ばらせながらヒメノカリスと視線を合わせる。

「大丈夫。ステラも戦える」

自信に満ちたステイニングと嬉々としたアウル。ステラは強がりながらも戦士の顔を作っている。

「3人とも無理はしないで。わかつた？」

まるで母が子にたしなめるように。

「おつ」

「りょーかい」

「うん」

「全機、出撃を許可します」

ヒメノカリスのその言葉に、3人は手慣れた様子で敬礼をしてみせる。その様子にヒメノカリスは口元のほんの少し綻ばせた。

そのことに気づいた者は誰もいない。すぐ横に座るイアンとて気づかぬまま、この艦を預かる艦長として尋ねた。

「ホテル大尉は如何なさいます?」

「たかだかインパルスガンダム程度。私が出るまでもない」

その頃には、ヒメノカリスの顔は表情に乏しい冷徹な指揮官然としたものに戻っていた。

ルナ・マリアのインパルス・ガンダムが装備する緑色をしたバック・パック・ブラスト・シエルエットと呼ばれる射撃に特化した装備である。に備え付けられた大型ライフルの銃底部分、ちょうどそこに設置された小型ミサイルがインパルスの肩越しに一斉に放たれる。

シールドを構えるデュエルダガーたちはミサイルをしつかりと受け止めるが、それでも爆煙に視界をふさがれたはずだ。

シンは一拳に距離をつめる。

ソード・シエルエット。それがシンのインパルスに装備されているバック・パックの名前である。対艦刀の台座である以外にも広く横

へ開いた赤い安定翼そのものが輝きながら推進器としても機能する。インパルスは素早い加速でデュエルダガーへ接近すると、シールドで庇い切れていない右腕の側からの攻撃で胸部ジェネレーターを直接斬り裂く。

インパルスガンダムの備えられた3種の換装機構、シルエット・システム。その中でシンは近接戦に特化したソード・シルエットを使うことを好んだ。同僚のルナマリアはブラスト・シルエット得意とし、2人の相性は決して悪くはない。

射撃機が牽制し、近接戦に優れた機体が強力な一撃を叩き込む。この戦法は現在において最も確立された戦法であるだけに、敵の対応も素早い。

ルナマリア機を警戒しながらも攻撃の目標をシンに絞っている。ビームが次々と飛来し、シンがかわす度、コロニーの外壁が赤く燃え上がる。

かわせないとは思わない。シンのインパルスはソード・シルエットの安定翼を輝かせながらなめらかで迅速な動きでビームの網をくぐり抜ける。

ユニウス・セブン休戦条約以後、モビル・スーツの性能の中で最も発展したのは攻撃力でもなければ防御力でもない。機動力そのものである。旧式のデュエルダガーで第2世代に属する - - しかもガンドムである - - インパルスを捉えることなどできない。

だが、接近の手だてを封じられてしまったことも事実に他ならない。

「隊長からの連絡は？」

シンは自らの声に焦りが含まれていることを自覚する。このまま決定打もないまま時間を稼がれてしまえば敵方の増援が到着してしまう。いつまでもかわし続けることなんてできるはずがない。

「マッド隊長？ マッド隊長！？ 黙日、繋がらない」

ルナマリアが呼びかけているのはマッド・エイブス小尉。シンたちの舞台の隊長である。はじめから別行動の予定であつたとは言え連絡さえつかないのは異常である。

そして呼びかけ続けることもできない。

通信機を通してルナマリアの短い悲鳴が聞こえた。見ると、肩の装甲に被弾したらしく、フェイズシフト・アーマーの輝きが見えた。フェイズシフト・アーマーは攻撃を受けた際、そのエネルギーを吸収し、光として拡散放射する。ルナマリアの装甲の発した輝きは強く、深刻ではないにしろ、ビームという大火力兵器の直撃を受けたことを意味していた。

徐々に相手の攻撃の精度が上がっている気がする。どうやら、体勢を取り戻しつつあるようだ。奇襲というアドバンテージは失われつつある。

「こいつしている内にも際どいところをビームが通り抜けた。

「ルナ、大丈夫か？」

「装甲が少し剥がれただけよ。それより、敵さんも必死ね。单なる

辺境の「ロニー」だと思つてたけど、隊長の読みが当たつたってこと
?」

「わからない。ただ、このままじゃまずい」

隊長が少しでも早く任務を達成してくれることを祈るばかりだ。
仮に地球連合軍の重要機密がここに隠されているのだとしたら、果
たして防備が手薄ということがあるだろうか。

「俺、隊長のところに行つてくる」

「ちょっと、私たちの任務は囮でしょ。まだ作戦時間はすぎてない
んだし、行かない方がいいんじゃない?」

ルナ・マリアのインパルスが再びミサイルをばらまく。煙幕として
の効果は十分であるが、相手はシンがいた方向にあたりをつけ、煙
があることを構わず撃ち続けていた。偶然の被弾も考えられる十分
な牽制であった。

同じ手は使えない。いつしている内にも事態は悪化している。

「敵の対応が想像以上に早い。嫌な予感がするんだ。それに、相手
がデュエルダガーだけなら、戦力を集中させない方がいい」

仲間の承諾も聞かずに、シンはインパルスを加速させる。ソード・
シリエットの赤い安定翼が強い輝きを放ち、インパルスを押し上げ
ていく。

「まったくもう!」

そんなシンに文句らしい文句を言つことなく、ルナマリアは援護射撃をしてくれた。ブラスト・シリエットの大型ライフルの銃身を下から前へと弧を描いて回転させ、両脇の下に1丁ずつ構える。通常のライフルよりも太いビームの輝きが煙を突き抜けデュエルダガーたちの間を通り抜ける。

敵の関心がそのビームに集中した頃合いを見計らい、シンは彼らの頭上を通り抜ける感覚で煙を突き抜け加速する。

フェイズシフト・アーマー。ミノフスキーパーティクルと呼ばれる微細な帶電粒子を装甲に塗布し、衝撃の緩和、拡散吸収を行わせることで強固な防御力を獲得した装甲の総称である。ゼフィランサス・ズールなる技術者によつて確立されたこの技術は、同じ技師の手によつてさらなる発展を見た。

ミノフスキーパーティクルが帶電する性質に着目し、フェイズシフト・アーマーに用いられているエフィールドとは反対の電位を有するエフィールドを噴射。その2層の静電気的な反発力を利用することで装甲そのものを推進器とすることに成功したのである。

ミノフスキーパーティクルと呼ばれる推進器はその特徴としてフェイズシフト・アーマーに輪をかけて消費電力が大きいため、それを全身に装備できる機体は限られていることが挙げられる。そのため、この恩恵にあずかりたいと願う機体の多くは一部の装甲にのみ採用するなどして妥協点を探る試みがなされている。

ダムでも例外ではない。シルエットと呼ばれるバックパックの一部にミノフスキー・クラフトを搭載することで稼働時間の確保と機動力の向上を両立させていた。

ミノフスキー・クラフトを搭載する機体は、まさに飛ぶように移動する。

未完成のコロニーの空に不釣り合いな戦艦が浮かんでいる姿を、マッド・エイブスはその目でとらえた。マッドは今、インパルスガンドムに搭乗し、戦艦の放つ対空砲火のただ中を縦横無尽に飛行している最中であった。

その背にはフォース・シルエット。横に伸びたウイングがミノフスキー・クラフトの輝きを放つ。3態存在するシルエット・システムの中で機動性に優れ、ビーム・ライフルとシールドを常備するとかた最も汎用性に長けた装備である。

緑のノーマル・スーツを身につけたマッドは、角張った無骨な顔つきのその上で鋭い眼差しを眼下の戦艦へと向けていた。

「こんな民間コロニーにダークス級とはな。やはり、ここは疑わしい！」

地球連合軍が使用するモビル・スーツ搭載空母としてありふれたものであるが、工作艦では決してない。

曳光弾の中を潜り、時には真横へと機動するなどスラスター推進ではあり得ない動きを披露しながら、エイブス機は汎用ライフルを向ける。

放たれたビームは一直線に戦艦のバルカン砲に命中し、**トロイ**と派手な爆発で呑み込んだ。

戦艦でモビル・スーツを落とすことなど、**ガンダム**を落とす」となどできはしないのだ。

ウイングを輝かせて、ミノフスキー・クラフトが機能している証である。マッドはその場を離れる。戦艦の反撃が殺到する頃には、マッドのインパルスはまったく別の場所にいる。

いつまでもこんなお遊びを続けている暇はない。早くブリッジを破壊しなくてはならない。

そんな決意をくじくように、警報が鳴った。アリスが戦況の変化を察し、そのことをマッドに伝えてきたのだ。モニターにはダーレス級の先端に取り付けられたカタパルトのハッチは開かれていた。

すでに敵のモビル・スーツは出撃している。しかし、その姿はない。アリスが後方からの攻撃があることを告げていた。

インパルスを飛びのかせ、宙返りでもする要領で後ろを向くとともにライフルを放つ。敵の放ったビームの輝きが頭上、先ほどまでマッドがいた場所を通り過ぎるのは見えた。

「新手か！？」

しかし、敵の攻撃に反撃する形で放ったビームが通り過ぎた頃には、そこに敵の姿はない。この機動性は、ある相手を示唆して不気味であった。

敵は素早く、そして足を止めることはできない。自然と相手の姿を正確に把握することができない。

「数は2、いや、3か……」

簡易レーダーを頼りに接近してくる機体を発見する。

それは奇妙な機体であった。縁を薄く乗せたような色をしたモビル・スーツの上に濃緑色をした大きな装甲が被さっている。硬質な質感と装甲の左右にアームで繋がれたシールドが蟹の腕にも見えることから、甲殻類を思わせる。被り物に取り付けられた1対のセンターが巨大な怪物の目のようにこちらを見つめている。

教本で見せられた機体とよく似ている。その名前さえ思い出す暇もなく、マッドは直進してくる不用心な機体めがけてビームを放つ。

現存する装甲すべてを破壊可能であるビームは、それでも敵のシールドにたやすく防がれた。破壊できなかつたのではない。ビームの軌道がシールドの手前でねじ曲げられ、敵の脇を通り抜けてしまったのだ。

驚く暇もなく反撃があつた。甲殻類の装甲の両脇に装備された開放式の銃身がインパルスを捉える。レールガン。その武装の正体に気づいた時には、マッドは体に強い衝撃を覚えた。

ライフルは撃ち抜かれ、直撃を受けた左肩はフェイズシフト・アーマーの強烈な輝きを放ちながらも損傷はない。

アリスが無遠慮に新たな敵の襲来を告げる。上。今度は猛禽を思わせる姿をした褐色のモビル・アーマーがマッドめがけて急降下し

ていた。まさに鷲の爪を思わせる鋭利な鋼鉄製の爪が光り、その手の平と言える部分に銃口が開いている。

降り注いだ弾丸の雨がインパルスを燐然と輝かせ、フェイズシフト・アーマーに包まれていないシールドが根本の部分を破壊され、インパルスの手を離れる。

落ちていくシールド。まるでそれを追いかけるように猛禽のモビル・アーマーがマッドの脇を過ぎ去る。

武装を失い、しかし敵は一切の手を緩めようとほしない。言葉を失わせるほどの絶望が歩み寄る。

アリスが警報とともに示すモニターの中に、毒々しい緑をした機体があつた。

右手にはバズーカ。左手には2連装の銃身を備えるシールド。バツクパックから伸びる長大な火砲は左右の肩越しに一対。一見しただけでも5門の重火器を備える破壊力の怪物のような出で立ちである。

そして、ガンダムであった。特徴的なV字のアンテナに擬人化の施された顔。

インパルスと同じガンダムである。最強のモビル・スーツの代名詞たるガンダムがガンダムへと向けて、その破滅的な力を向けようとしていた。

「後少しでお前たちの元に帰ってやれる。後少しだ……」

プラント本国においてきた妻と娘。マッド・エイブスは2人の姿を思い浮かべる。

「だから、みんなで暮らそう……」

残してきた2人に必ず叶えると約束していた言葉を口ずさみながら、マッドの体は輝きに消えた。

「エイブス隊長！」

シンがミノフスキー・クラフトの輝きとともに到着した頃には、すべてが遅かつた。

マッド・エイブスの搭乗するインパルス1号機は上半身を撃ち抜かれ、下半身だけが綺麗に残されていた。コクピットは腹部。生存は絶望的と言えた。

隊長機を撃墜した敵の姿はすでに戦にはない。ただ、1機を除いて。

隊長機の残骸を写していたモニターに入り込むように蟹の化け物が割り込んだ。緑色の装甲を輝かせて直進してくる。

「こいつもミノフスキー・クラフトを装備してるとかよー」

要するに休戦条約以後に開発された新型ということになる。デュエルダガーと同じよつこはない。

シンもまた、ソード・シリエットを輝かせて直進する。こちらから敢えて間合いを崩すことで相手の攻撃のタイミングを奪う。左右の手に握られた対艦刀を並列に並べて叩きつける。

蟹から伸びるシールド」と斬り裂いてしまつつもりであったが、それどころか、シールドを破壊することさえできずに防がれてしまつた。シールドの表面でビームが弾かれている。これではビームがシールドに届かず、単に金属の棒を叩きつけたにすぎない。

両者が衝突の勢いを殺すために必要な間を空けて、シンは急いでインパルスを飛び上がらせた。銃口は蟹の装甲の中央に1門、両脇に2門ついているだけである。それならば、正面にさえいなければ捉えられることはない。

「」のとつとの判断は、单なる急場しのぎの浅知恵でしかなかつた。敵は素早く反応し、執拗に追いすがつてくる。敵が蟹の装甲を引き倒した。モビル・スーツの背中に背負われる形で移動すると、それでようやく覆われていた顔が明らかとなる。

それは、インパルスとよく似た顔をしていた。

「連合のガンダム……！？」

敵対勢力に同名、同質の機体が存在する事実……それが既成のこととはいえ……は、思いの外シンの意識を奪つ。

敵のガンダムは蟹を脱いだことで自由になつた両手で、長柄の鎌を振るつた。ビームではない单なる实体剣が、ことあるごとに火花を散らしながらインパルスの足に食い込むと、フェイズシフト・アーマーなど構うことなく斬り裂いた。

片足を失いバランスを崩したことすでに飛び上がる勢いをつけていたことが災いし、インパルスの体は不規則な軌道を描いた。

この不測の事態に、シンは反応できず、ただ声をあげているほかない。

やがて、ロロニー内壁に設置されていた鉄筋に森に墜落したことによつやく機体の動きが止まる。

右足は完全に破壊されている。ソード・シルエットが鉄筋に絡めとられてしまつたらしく、インパルスは動かすことができない。落下の衝撃に定まらない視界が、それでも死神のように鎌をもつて迫りくる敵の姿と、そして下半身だけが残された隊長機の姿を目敏く捉えていた。

「隊長……」

地球連合のガンダムは3機。残りの2機はシン・アスカとは別の場所にいる。

ロロニーの隅で派手な爆発が繰り返されていた。

プラスト・シリエットを装備したルナマリアのインパルスが両脇の大型ライフルからビームを放つと、ロロニーの内壁をえぐるよう爆発を引き起こす。

全身に重火器を装備した敵のガンダムは背負つたビーム砲を放つ

と爆発が生じる。それでも構うことなく放たれた右腕のバズーカの巻き起こした爆発は以前のものを巻き込みながら大きく膨れていく。

「こんなところにガンダム・タイプがいるなんて、聞いてないわよ！」

火力に特化した2機のガンダムの戦いは互いの破壊力を比べ合うかのように炎と破壊をまき散らす。

民間コロニー、アポロン近郊の宙域。それは外壁から田と鼻の先の位置であった。

ここに、ザフト軍ローラシア級MS搭載艦バーナードがデブリに紛れて停泊していた。宇宙戦艦らしい航空力学を無視した独特の形状の戦艦で、下部に比べ上部が大きく張り出した構造が特徴的であった。

シン、ルナマリアの母艦であり、帰るべき場所である。ここに、第3のガンダムの手が迫りつつあった。

褐色の翼を持ち、鷲のような爪を構えたモビル・アーマーが突如その身を起こした。爪は腰部にまとめられ、体に寄り添わせていた腕を展開するとともに組み合わせていた足が左右に開かれた。それだけで、鷲は人へと、ガンダムへと姿を変える。

ガンダムの特徴である顔を見せつけるように、それはウイングを輝かせながらザフト軍バーナードへと迫った。

人は楽園を探し続けています。それは理想を追求する熱意の姿と言えるのでしょうか。それとも、いつまでも現実を受け入れられない弱さの現れかもしれません。理想への渴望と現実への失望。ただ、どちらにしても確かなことがあります。

それは、人は誰一人として楽園を見つけた人がいないということ。だから探しているのです。

それは、誰も楽園に足を踏み入れたことがないということ。だから夢想するのでしょうか。

現実の楽園がどのようなものか知りもしないで。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「樂園喪失」

ゴートピア。それはどこにもない国を意味します。

第2話「楽園喪失」

ソード・シリエットはコロニー内壁の鉄筋に噛まれ動かせる気配はない。すぐ目の前に敵が迫っているにも関わらず、シン・アスカの視線は下半身だけになってしまった隊長機の姿を探していた。

「クラピッドのモニターの中にその姿はあった。

上半身を消し飛ばされ、腰から上は残骸がこびりついている程度の有様である。ただ足だけが無重力の空に漂っていた。

「隊長……」

墜落の衝撃にいまだ落ち着きのないシンの瞳。マッド・エイブス隊長の死を悼んでいるようでありながら、しかしその腕には力がある。

「レッグ・ライヤー、お借りします！」

その眼差しが力強さを取り戻すとともに、敵が、連合製の縁のガンドムが斬りかかるてくる。フェイズシフト・アーマーの強固な装甲さえ易々と斬り裂く鎌が振り下ろされる。

迫りくる死を前にしながら、シンはしっかりと鎌の軌道を見据えている。そして、浮き上がる感覚。シンは鎌の上を飛び越えた。

鎌は、鉄筋の網に残されたソード・シリエットとNGMF-56Sインパルスガンダムの下半身を切断した。放たれるフェイズシフト・アーマーの輝きの中に、だがインパルスの上半身の影はない。

ただ下半身だけを残して、上半身は飛んでいた。正確には、1対の対艦刀を持したままの上半身と、コクピット・ブロックを有する戦闘機が軽快に飛行していた。

インパルスガンダム固有の分離合体機構である。上半身のチエスト・フライヤーに、腹部を構成する戦闘機コア・スプレンダー、そして下半身のレッグ・フライヤーのそれぞれが合体することでインパルスガンダムは1機のモビル・スーツとして完成する。

もはや戦闘機の「クピット」と化したコア・スプレンダーの中で、シンは必死に操作を続けていた。敵の放ったレールガンがすぐそばを通り抜けるも、小さい戦闘機にそうそう当たられるものではない。

チエスト・フライヤーは無事。コア・スプレンダーは言つまでもない。ソード・シルエットは破壊されたが、レッグ・フライヤーにはあてがあった。

命を失った亡骸が動き出す。

シンの部隊の隊長である撃墜されたマッド・エイブスの機体は下半身がほぼ無傷の状態で残されている。そう、シンは隊長機と利用して機体を完全な状態へと戻そうと企んでいた。

エイブス機のレッグ・フライヤーが腰の上に残されていた残骸を排出し、コア・スプレンダーと同様に飛行を開始する。

合体シークエンスを発動する。

コア・スプレンダーが大きく形を変えていく。ウイングと垂直尾

翼を機体内部へと折りたたみ、機首が180度回転して全体が箱のよう四角くまとまる。ガイド・ビーロンに導かれた上半身、下半身がコア・スプレンダーを挟み込むように上と下から。腰部でレッグ・ライヤーとドッキングし、チェスト・ライヤーがコア・スプレンダーを覆い隠すように合体を終える。

ソード・シルエットこそ失つたものの完全な姿を取り戻したインパルスガンダムは、すぐそこにまで迫っていた敵へと対艦刀をすぐさま叩きつけた。

ビームを弾くシールドに防がれ、ミノフスキーパーツに還元されるビームが光を発して暴れ回る。

「伊達に量産機乗つてないんだよ！」

「」の程度の緊急事態への対処など、これまでにも何度も経験した。

シンは勢いに任せ両手の対艦刀を交互に叩きつける。ビームから放出される光と熱が、しかし次々と防がれてしまう。

敵のガンダムは甲殻類様のバック・パックにアームで繋がれたシールドを器用に動かし、対艦刀をたやすくとめてしまうのである。おまけに表面に何らかのビームを弾く処理がされているらしく、ダメージはとともに通る気配がない。

ソード・シルエットを失い、ミノフスキーパーツを使用できない今のインパルスでは単調な攻撃しか行うことができない。

しかし、敵は大型のバック・パックを輝かせている。通常推進ではミノフスキーパーツに遠く及ばない。敵のガンダムは突然横

に飛んだかと思うと、普通はあり得ないほど繊細な動きでインパルスの後ろへと回り込んだ。

急いで振り向こうとアポジモーターを働かせるも、その振り向きに合わせるようにして鎌が振るわれた。鋭い切つ先がビームの刃を対艦刀の刀身に突き立てられるなり、一息に切断した。

破壊されたのは左腕の対艦刀。残された刀を両手に持ち変え力任せに振り下ろすが、シールドが何の遠慮もなく止めてしまつ。

シンの動きは完全に読まれていた。

「腕はあいつの方が上なのかよ……！」

「こいつは弱っちい。

それがアウル・ニーダの抱いた感想である。蟹の被りものを身につけたようなガンダム、GAT-X255インテンセティガンダム汎用型のコクピットの中、少年特有の人懐っこい笑みの中に残酷な色を含ませてアウルは笑う。

「あつははー！ めんね、強くってさあ！」

インテンセティが鎌を振り下ろすと、ザフトのガンダムはその象徴たるブレード・アンテナの片側が切断される。致命傷にはほど遠いが、敵パイロットもこれでわかつたことだろつ。勝てる相手ではないと。

ただ少し脅かしすぎたかもしねない。

敵のガンダム・インパルスとか言つただろうか・・は胸部脇に装備されたバルカン砲をでたらめに撃ち続けると無理矢理距離を開けようとする。フェイズシフト・アーマーに包まれるインテンセティをそんなもので傷つけられるはずがない。強引に接近しようとすると敵は対艦刀を投げつけてまできた。

シールドを手軽な操作で動かして壁を作る。鋭い実体剣の切つ先を向けて飛んできた対艦刀はそれだけで簡単に防ぐことができる。

敵はこちらに後ろ姿を見せて飛び去っていた。どうやら、完全に逃げを決めたらしい。

「逃げんのかよ」

ミノフスキ・クラフトのない機体に追いつくことは簡単だ。フット・ペダルを踏み込もうとして、アウルは1人の女性を思い浮かべた。

桃色の髪をした、その名前の通り花のような女性を。

インテンセティガンダム汎用型がインパルスガンダムを追いかけることはない。

「まあいいや。ヒメノカリス姉ちゃんから深追いはするなって言われてるしね」

アウルは嬉々とした様子で敵の後ろ姿を見送っていた。

インパルスガンダムの3つのシルエットの内、最も射撃力に優れるプラスト・シリエットを装備したルナマリア・ホークの機体が対峙するのは、同じく射撃に特化した機体であった。

上半身の持てるところこっぽいに大砲を担いだような厳つい風貌のガンダムは、近すぎず遠すぎず、適度な距離を保つて攻撃を続けていた。

腕は敵の方が一枚上手であるらしい。直撃こそされないものの、装甲は端々が削ぎ落とされていた。だが、敵は綺麗なものなのである。

「いい加減、しつこい！」

脇に構えた2丁の大型ライフルが2筋のビームを撃ち出す。狙いは敵ではなくコロニーのむき出しの大地。ほぼ垂直に落とされたビームは爆煙を外部にまで放出させる。たかがモビル・スーツの一撃がコロニーの外壁を破壊したのである。

まだ煙も治まらない中、ルナマリアはコロニーの六へと向けてインパルスガンダムを加速させた。

煙の中に飛び込んだインパルスの姿を、ステイニング・オーネクレーは黙つて見守っていた。搭乗するGAT-X133イクシードガンダム・バスター・カスタムも同じようなことはできるが、追いかけるつもりはないのだ。

ただし、敵が逃げたのだと確認はできていない。

ステイニングはその細長の目を油断なく動かし様子をうかがつ。機体の位置を変えたのは奇襲を警戒したことだ。

敵の反応はない。爆煙は落ち着き始めていた。

どうやら逃げたようだ。

入ってきた通信 - - アウルからのものだ - - はあちらでも敵が退避を決めたことを告げていた。

「ああ、こっちも逃げた。ステラにもそろそろ戻るよつとけ」

姉と慕うヒメノカリスの願いは敵の殲滅ではないのだから。

緑色の重厚なバック・パックを背にしたインパルスガンダム3号機。ルナマリアの機体である。

新造コロニー、アポロンの壁を突き破り、強引な脱出を果たしたルナマリア・ホークを出迎えたのは煙を上げる母艦、ローラシア級MS宇宙母艦バーナードの姿。

そして、輝くウイングを背負ったガンダムであった。

GAT-X370ディーゼヴィエイトガンダム特装型。ステラ・ルーシュの機体である。

「敵は、倒す！」

まだ幼さの目立つ顔に鬼気迫る氣迫を乗せて、ステラは機体をインパルスへと加速させる。

ディーゼヴィエイトの左腕には2連装ビームガン。小刻みにビームを撃ち出し、1発1発のビームの威力こそ低いものの、手数でインパルスを翻弄する。必死にかわそうと動くが、機動力ではディーゼヴィエイトが上である。うまく先回りするとインパルスのフェイズシフト・アーマーの端々が強烈な輝きを放つ。

ビームが命中したのだ。

動きを止めた敵へと、ディーゼヴィエイトは思いもかけない兵器を使用する。右手に細い鉄線で繋がれたそれは、まさに鉄球であった。鈍い複数の棘を輝かせて、底に取り付けられたスラスターがインパルスへと鉄の塊を突き進ませる。

インパルスガンダムは左腕に申し訳程度につけられた小さな盾で防ごうと構えた。フェイズシフト・アーマーはあくまでも装甲にしか取り付けられていない。

盾はひしゃげ、装甲が輝く。そしてフレームが破断した。鉄塊の質量に耐えきれなかつたフレームは肘を維持こそしているものの、肘から先は力なく垂れた。

腕に攻撃力の大部分を依存するモビル・スーツが片腕を失った。

それでもなお、ステラは攻撃を続行しようとクピットの中で吠

えていた。

遠くで見えるのは曳光弾とビームの輝き。

それが母艦が隠れているはずの場所であると、シンは機体を急がせた。

目に見えてデブリが多くなっていく中で、母艦の姿が明らかになつていく。ところどころに被弾の痕が残り、黒煙が不規則に立ち上っていた。

その周りを褐色のガンダムが自在に飛び回っている。ミノフスキー・クラフトの輝きを軌跡として描きながら。

バーナードの上でルナマリアのインパルスが応戦している。しかし、すでにミサイルを撃ち尽くし、左腕を損傷しているためだろう。右の大型ライフルだけでその弾幕は薄い。

もとよりミノフスキー・クラフトを搭載した機体を射撃で捉えること自体が難しいことなのだ。

荒鷺のガンダムがビームガンを照射する度、バーナードに1列の火の手が上がる。

「何なのよ、こいつ」

十分に接近することで通信がルナマリアの声を拾つ。聞くまでもなかつたことだが、焦りようが伝わってくる。

「ルナ、無事か！？」

焦つてこむ」とはシンも同じことである。声は自然と上擦つた。

「シンー！」

「アスカ軍曹……！」

ルナマリアからの通信に混ざり込んだのは管制のアビー・ワインザーの声。しかしそれもすぐに別の男の声に上書きされる。

「シン・アスカ軍曹、こちらアーサー・トラインだ。バーナードはこれから加速に入る。緊急着陸で構わない。何としても帰還してくれ」

インパルスの加速を続けながら指示に聞き入る。その視線の先ではローラシア級が加速しようとベースターに火を入れている光景があつた。

「アスカ軍曹、現在、緊急用ハッチは使用できません。通常のルートで帰還してください」

管制であるアビーの指示は、要するに加速する戦艦の前に回り込んで相対速度を合わせてから着陸しろというものであった。

「了解」

シンは覚悟を決める必要があった。息を飲み込む。その一瞬の隙に眼前を光が通り抜けた。

敵のガンダム。直感がそう告げ、インパルスは両腰に備えられたダガー・ナイフを抜く。

褐色のガンダムの姿を捉えることはできない。ミノフスキー・クラフトのもたらす機動性はモビル・スーツ戦術を根幹から搖るがせてしまうほど絶大なものである。深追いはするなと命令されているのだろう。敵は逃げ出すバーナードではなく、完全にシンに狙いを定めたようであつた。

インパルスの周りを飛び回りながら敵機は弾丸をばらまいてくる。嫌なことに後ろから。フェイズシフト・アーマーに守られている場所ならともかく、スラスター内部に被弾でもしようものなら最悪内部爆発の可能性がある。インパルスの向きを必死に変えて敵に背中を見せないよう絶えず動く。

インパルスのところどころが輝き、フェイズシフト・アーマーの被膜が強烈な輝きを放ちながら徐々に削り取られていく。

完全に相手に主導権があつた。こうしている内にもバーナードは徐々に加速している。

「こんなところで……！」

「のままでは悪くて撃墜」、よくても取り残されてしまう。

シンはインパルスガンダムを加速させた。スラスター推進のみの加速であり、そして敵はシンが目指す方向を知っている。

ウイングを持つガンダムがバーナードの姿を隠すように立ちふさ

がつた。

しかし、シンもまた、敵がこの行動に出る」とはわかつていた。

チエスト、コア、レッグ。三態で構成されるインパルスの合体を解除する。上半身であるチエスト・フライヤーが手のナイフを突き出した姿勢で飛んでいく。目標は敵ガンダム。30t近い質量とともに浴びればいくらガンダムでも何らかの破壊は免れない。

フライヤーを質量兵器として使用する正規マニュアルにはない。シンの奇策は、しかし相手の珍妙な武器によつて防がれる。

相手は冷静にハンマーをまっすぐ前へ射出すると、鋼鉄の塊は正確にチエスト・フライヤーを打ち付け、インパルスの首がもげた。目標を失いチエスト・フライヤーはそのまま付近を漂つていたデブリへと衝突する。

まだ終わつていない。チエスト・フライヤーの影に隠れるようにしてレッグ・フライヤーがさながら弾丸のごとく敵を目指していた。2段構えの攻撃である。さすがのガンダムもこれには反応できなかつたらしい。インパルスの下半身はまっすぐにガンダムを目指し、衝突する。

正直いえば、これでガンダムを撃墜できるとは考えてはいなかつた。しかし、予想通りの光景にでも、人は落胆できるものらしい。

ミノフスキ - クラフトの特徴として、柔軟な方向への機動というものが上げられる。敵のガンダムは機体を後ろへと下げながら衝突の衝撃を吸収し、腰に展開していた爪 - モビル・アーマー形態

で鷲の爪になる部位だ - - でレッグ・フライヤーを掴みとつていた。

攻撃は失敗。戦闘機の姿に変化したコア・スプレンダーの中でシンは敵の脇を抜けるようにバーナードを目指す。

確かに焦りがあった。敵はこちらを攻撃する機会が最低でも一度はあると確信している。戦場で培われた経験を保障するように、コア・スプレンダーが激しく揺れた。短い悲鳴を呑み込みながら眺めたモニターの中には、左翼に被弾したことが示されていた。

ウイングは大気圏内を飛行するためのもので、宇宙空間では飾りでしかない。飛行そのものは可能である。狂ってしまった重心のバランスを立て直そうと操縦桿を握りしめる。OSが重心位置を補正してくれるまでの間、操縦桿をやや右に倒して機体を水平に、左に曲がつてしまわないよう保つ必要があった。もちろん、バーナードの格納庫の床に対しても。

幸い、敵からの攻撃は続かない。コア・スプレンダーは順調に加速を続け、ローラシア級バーナードの脇を通り過ぎた。

ローラシア級の格納庫は艦体下部に取り付けられている。突き出した上部構造を頭上に眺める形でコア・スプレンダーをその前に回り込ませる。後方ではすでにハッチが開いている。後はゆっくりと速度を落として、バーナードよりもやや遅いくらいを維持する。そうすることでコア・スプレンダーは加速を続けながらも端から見ればゆっくりとバーナードの格納庫へと近づいているように見えることだろう。

後少し。後少しの間この体勢と速度を維持すればいい。腕が震える。不自然な位置に操縦桿を固定していたため、腕に軽い痺れが起

きていた。だが、後少し。

体力は保つという確信は、しかし悪い形で裏切られた。OSが重心位置の補正を完了し、操縦桿を水平に保っていても機体を安定させるよう修正してしまった。このタイミングで。

コア・スプレンダーが右へと傾く。シンが操縦桿を右に傾けるため、それは当然なことだった。

機体が右へそれ、その分だけ相対速度が引き離される。操縦桿を戻すとともに車輪を展開。スラスター出力を一気に絞る。機体が右に傾いたまま補正する時間もなく、コア・スプレンダーはバーナードの格納庫の床に不時着同然で車輪を叩きつける。右翼が床を擦り、ブレーキがかけられた車輪が火花を散らす。減速用 - 相対速度を考えるなら、加速用と言えなくもない - のネットがコア・スプレンダーを受け止め、加速を続けるバーナードからの加重を、シンは体中で感じていた。

つめきが声にならない。機体を襲う振動と衝撃に、声を出すと舌を噛む恐れがある。ただ耐えるほかなかつた。

やがて揺れが治まつた - バーナードとコア・スプレンダーの相対速度が一致した - 時、シンは自分が軽い脳震盪を起こしていると判断した。視界がぼやけ、その判然としない視界の中に斜めになつた床が見えている。コア・スプレンダーそのものが格納庫に対しうすめに傾いているのだ。そして、風防を白く染めているのは消化剤の泡。どうやら、翼の燃料に引火することもなくすんだよつだ。

「何とか、生きてるな……」

今日一日を、また生き延びることができたらしい。

敵が逃げていく。ディーゼルエンジンの映し出すモニターの中に、急速にこの宙域を離れようとしているローラシア級MS搭載艦の姿が見えている。まさに遁走である。消火作業さえ完全ではない。煙をたなびかせていく有様である。

このままでは逃げられてしまつ。

ステラは極度の興奮状態にあつた。呼吸がいつまで経っても落ち着かず、瞬きの回数が極端に少なくなつていて。ザフト軍へと向かられる眼差しからはいまだに敵意が抜け落ちてはいない。

「敵は、倒す！」

ディーゼルエンジンのウイングが強い輝きを放つ。今にも背中を見せる敵に襲い掛かるうとするステラを押し留めたのは、通信機から聞こえた少女の声であった。途端にステラが落ち着きを取り戻す。

「うん。わかった、お姉ちゃん」

その様子は気弱ささえ感じさせるほどしおらしい。その日にはまだローラシア級戦艦の姿を捉えてはいても、敵意は完全に消失している。

普段の様子を取り戻したステラに見送られるようにして、ローラシア級バーナードは傷だらけの体に鞭打つて命がけの敗走を続けて

いた。

ローラシア級MS搭載宇宙空母にはブリーフィング・ルームというものは存在しない。ブリッジ後方に様々な図面を映し出すことができるテーブル型のモニターが置かれ、作戦会議はそこで行われる。

艦長であるアーサー・トライインをはじめとする主立つた面々がそこには集まっていた。

「前回の作戦で確認された3機は、連合で運用されているガンダム・タイプのカスタム機であると思われます」

モニターにはお世辞にも映りがいいとは言えない映像で3機のガンダムが映し出されている。インパルスガンダムの映像から直接引っ張ってきたものである。写真写りは期待する方が酷であった。

説明しているのはアビー・ワインザー。まだ若い女性である。乳白色の髪が特徴で、お洒落を楽しみながら、それでも軍務に支障のない髪型にまとめられている。若い女性の容貌で、しかし軍人として事務的な口調でアビーは3機のガンダムの説明を行う。

トライイン艦長の他、パイロットであるシンヒルナマリアがそれに聞き入る。

シンが遭遇した蟹の被りものをしたようなガンダム。それは地球連合軍が所有するGAT-252インテンセティガンダムとよく似ていると説明される。ただし、細部の武装が異なり、カラーリングにしてもインテンセティガンダム本来の青ではなく緑系統であると

いう違いが見られた。

ルナマリアと戦った重装型のガンダムはGAT-131イクシードガンダム。ただし、本家本元のイクシードガンダムは格闘戦に特化した機体である。カラーリングも赤。「こちらはずいぶん違う。

最後にバーナードを強襲した可変機はGAT-333ディーヴィエイトガンダムと鉄球などの極端な武装さえ除けばカラーリングは褐色か水色かの違いしかない。

どのガンダムも正規量産型とは違いが見られた。

艦船クルーであることを示す黒い軍服を身につけたアーサー・トライン艦長が難しい顔をしていた。こちらも、艦長をしていると思えるほど歳にはなっていない。いい歳してアイドルが好きという一面があるらしいが、激務の連続で、少なくともシンはそんな艦長の顔を見たことはない。

「実験機といつことかな？ そうなると、あのコロニーは極秘実験施設だということになる」

「わかりません。ただ、そこにしてはコロニーの設備があまりに貧弱です」

まだ建造途中であるのならそこに実験機が運び込まれている理由が説明できない。筒の両端がいまだ閉じられておらず、内部が外から簡単に見渡すことができる。それでは極秘も何もあつたものではないだろう。

設備の貧弱さから軍事設備とは思えない。だが、それにしてもガ

ンダム・タイプが3機というのは不自然であると言えた。名前はアポロン・・どこかの神話の太陽の神の名前だ・・とか言つのだそうだが、謎のコロニーを何かと判断するには材料が少なすぎる。

シンの関心は自然と眼下の3機のガンダムに移っていた。どれも高性能で、ずいぶん宙間戦闘に慣れている様子だった。万全の状態であつても、果たして勝てるだろうか。

「これが、連合のガンダム……」

これまでガンダムとの戦闘経験はない。つい見入っていると、アーサー艦長は目を瞬かせた。

「アスカ軍曹、君は軍学校で敵の機体について学ばなかつたのかい？」

単純な疑問だろう。そこにシンの浅学を責める気持ちは含まれていない。それでも自然と口の端がつり上がり、自嘲じみた笑みが顔の痣を歪める。

「軍学校じゃ、必要最低限のことしか学んでません。本当は1年卒業のところを半年とちよつとで追い出されました」

成績優秀と認められ、赤服とNMGF・56Sインパルスガンダムを与えられたところで、シンは正規の軍人とは同列とは扱われない。

「俺、アブティエルですか？」

アブティエル。この言葉を使うだけで、アーサー艦長もアビー・

オペレーターもそれ以上のことは聞こうとはしない。2人ともばつが悪そうに目をそらして、アーサー艦長は自然な様子で話題を変えた。

「今後の作戦について説明しよう。あの襲撃の後、コロニーから敵の戦艦が3隻移動を始めたことが確認されている。ガンダムも、恐らく一緒だ。そこで、僕らはこの艦隊に追撃をかけることにする」

バーナードただ1隻で攻撃を仕掛ける。こんな無謀な作戦に対して、驚きを示したのはシンとルナマリアだけであった。アビーも、話は聞こえているはずのクルーたちでさえ反応は薄い。

「ちょっと待ってください！　たった1隻で勝てる相手じゃありません！　エイブス隊長だってもういないんですよ」

「危険すぎます。援軍を要請するか、戦力を整えてからでないと」

「いいや、作戦は決行する」

アーサー艦長は普段と同じ沈んだ調子で、しかし強い言葉でパイロット2人の意見を黙殺する。シンは、つい戸惑いを覚えた。しかし食い下がろうと息を吸い込んだところで、思いも寄らないところから声が挙がった。

「アスカ軍曹、ホーク軍曹、わかつてください！　私たちも、アブディエルだと叫びつことを……」

アビーはこちらを見ようともしない。うつむいたまま、わずかに見える瞳に決意というものは感じられない。アーサー艦長にしても同じだ。2人は、ここにいるクルーたちは信念だと決意によつて

動かされているわけではない。

アブディエルといつも、今度沈黙せざるを得ないのはシンの番であった。

作戦は決定した。わずか旧式の戦艦1隻、モビル・スーツ2機で敵の艦隊に攻撃を仕掛けるのだ。子どもだってこれがどれほど無謀なことかわかりそうなものだ。

シンは壁を強く殴りつけた。別にハッ当たりのつもりはない。

ここはパイロットに『えられる寝室である。2人部屋であるため、ある程度の広さはあるが、シンがいる反対側のベッドは整然として生活臭というものを感じさせない。戦死した同僚が使っていたものだ。

よつて、ここはシンの一人部屋である。

シンはもう一度壁を殴りつける。決してハッ当たりではない。

このローラシア級という戦艦そのものがシンの、アブディエルの境遇を如実に著しているからだ。

本来、合体機構を有するインパルスガンダムは専用の設備を持つ母艦を必要とする。だが、アブディエルにはそのような贅沢な艦は与えられず、装置を増設してご誤魔化しただけのこんな戦艦で満足しようと語りてくれる。

何もハツ挡たりではないのだ。

もう一度殴りつけてやろうか。シンが拳に力を込めるとい、部屋のインター ホンが鳴った。誰がこんな時に。壁を離れ、無重力を漂いながら扉横のボタンへと手を伸ばす。スライド式の扉が開き、そこには赤い髪をした同僚の姿があった。

シンと同じく赤い軍服 - - ただし、相手のは女性用である - - に、艦長たちに比べればまだ明るい表情で手を振つて見せるのはルナマリア・ホークである。

「何だ、ルナか……」

拍子抜けした。そんな気持ちがつい口を出た。

「何だはないでしょ、何だは

ルナマリアは怒った様子を見せながらシンを押し退けて部屋に入つてくる。すぐにベッドといつ座りやすいものを見つけたらしく、そこへと腰掛けた。

どうやら話があるらしい。シンもまた、ルナマリアとは反対側、自分のベッドに腰を下ろした。

話を促すまでもなかつた。

「艦長、本気みたいね」

やはり話題はそのこと。ルナマリアが少し声を潜めたのは、あまり他の人に聞かせたい話ではないからだらう。

「もうこれ以上危険な戦場をたらい回しにされるのが嫌なんだろ。みんな、そろそろ任期が切れてもおかしくない頃だから」

現在、ザフトは形式的には志願制を採用している。休戦条約以後、階級が登場するなど軍隊としての性質を一段と強めたが、それでも義勇兵出身といつ名残は残されている。

それは、徴兵制が敷かれていないと云ふことを意味しない。

シンは自分の境遇が自然と思い出された。

「俺も艦長たちも、アブティエルだからな……」

シン・アスカ。「コーディネーターではあっても出身はプラントではない。オープ首長国と呼ばれる地球の国家である。休戦条約以前に大西洋連邦への協力を拒み侵攻された国であり、現在主権を回復したとは言え傀儡でしかない。

シンはそんな国に生まれ、そして、国を出るしかなかつた。自分たちを見捨てた国にはいたくなかった。母を殺した大西洋連邦に行くことなんて考えもしなかつた。まさに流れ着くように、シンはプラントに移住した。

「コーディネーターの国は、しかしすべてのコーディネーターのためにあるわけではなかつた。

移民の多くは市民権を与えられず、様々な制約が課せられる。それに加えて、市民権の獲得には多大な労力を必要とする。プラント政府は救済策を用意していた。ザフト軍として1年の任期を戦い抜

けば無条件に市民権を『えるとしたのだ。シンのよつに身よりもあてもない移民は入隊するしか選択肢はなかつた。

事実上の徵兵である。そして、プラントは戦争で失われた人員の補充に務めている。軍学校を期間短縮で放り出されことなどそんなプラントの熱心な活動の一つだ。

マッド・エイブス隊長が戦死したのも、早く家族の下に歸りたいといつ思いに焦つたからではないだらうか。

シンはまだ半年近く任期を残している。しかし、アーサー艦長をはじめとするほかの移民たちはそろそろ任期が切れる。しかし、それが軍役からの解放を約束するとは限らない。あくまでも噂だと思いつながらも、なかなか頭から離れない。シンがつい顔をしかめていると、ルナマリアも同じことに考えが及んでいたようだ。

「除隊は本国でしか行えないから、任期切れが近い部隊は補給も前線基地でさせられるつていう噂、本当かな？」

ルナマリアがわかりやすく眉をひそめる。

「さあな。トライン艦長たちは信じてるみたいだけど。勲章ものの活躍して、本国に戻りたいって気持ちもわかるよ。いつまでも汚れ仕事や危険な戦場にばかり回されるなんてごめんだろ」

こんな噂話には事欠かない。他にも、シンのような移民がガンドム・タイプを与えられているのは戦力として期待されているからではなく、単に実力主義のプラントの正当性を主張するための宣伝でしかないなんて話もある。

何にしろ、移民の扱いなんてこんなものだ。

アブディエル。このプラントの移民を指す名前もプラントのコー
ディネーターが如何に移民を馬鹿にしているかよくわかる。

ミルトンの『失樂園』に登場する天使の名前なんだそうだ。天使の王が神に反逆すると表明したその場で、創造主である神に勝てるはずがないとただ一人その場を離れた天使、それがアブディエル。これはコーディネーターの創造主を騙るナチュラルへ、そして、これまでそんなナチュラルにおもねつていた国外コーディネーターに対する2重の皮肉なのだそうだ。

自分たちが人類の未来を守るために戦っている間、貴様等は何をしていた。今更仲間に加えてくれなんて虫が良すぎるんじゃないか。これはシンが実際、軍学校でプラント出身のコーディネーターから聞いた言葉だ。

自然と顔が険しくなる。

それを、ルナマリアは地球での生活を思い出していくと勘違いしたらしい。

「ねえ、シン。私はアブディエルじゃないけど、地球つて、やっぱ
りひどいところなの？」

「ひどい？　いや、そんなことはなかつたよ。ただ、3年前のジエ
ネシスだけ、あれはやっぱり印象悪かつたな。あれで一気に反コ
ーディネーター思想が台頭してさ、政治家が公の場でブルー・コス
モスのメンバーだって宣言することも珍しくなくなつたくらいだ」

休戦条約が締結されるきっかけになったのは、両軍が次第に殲滅戦の様相を呈してきたからということが大きい。ザフト軍はジエネシスと呼ばれるガンマ線照射装置で地球全土を焼き尽くそうとした。そのことを原因として地球では反プラント、反コーディネーターの流れが決定的になってしまった。

終戦ではなく休戦条約に留まつたのも、地球の各国が市民感情を考慮したことだ。

「みんな、そうして地球から逃げてきたのかな？」

「アブディエルの間で地球での話なんてしないけど、ルナはどうして何だ？」

「言つてから、ルナマリアが自分はアブディエルではないとつい先程言つていたことを思い出す。実際、ルナマリアがプラント出身のコーディネーターであるということは聞いたことがあった。しかし、外人部隊に配属されているのだ。まさかプラントの正規市民とも考え難い。」

思わず顔を見ると、今度乾いた笑みを見せたのはルナマリアの方だった。

「オナラブル・コーディネーターって知ってる？ ナチュラルだけど、コーディネーターとして扱つてやるつていう意味なんだけど、私、それなの」

田の前の同僚が実はコーディネーターではなかつたと聞かされて、シンは少なからず動搖した。

「驚いた？」

「少し。プラントって、みんなコーディネーターの国だと思つてたから」

シンを出し抜けたことでどこか楽しげに笑っていたルナマリアは、しかしすぐに表情が沈んでしまつ。

「実際、プラント国内に潜在ナチュラルは大勢いるわ。遺伝子調整にはお金がかかるからね。でも、時々私みたいにコーディネーターの中でもやつていけるようなナチュラルが現れると、名譽コーディネーターなんて呼んじゃつたりしてくれるわけ」

もう一つの徵兵制のことが自然と思い出された。

休戦条約後、プラントでは軍事費確保のための増税が行われた。ただし重税に耐えられない人には救済処置がつく。所帯の誰かがザフト軍に志願した場合、免税処置が施される。早い話が金がないなら命を差し出せということだ。富裕層は税金を支払い兵役を逃れ、貧困層ばかりが戦地に送られる。

プラントはいつじて、軍事費と兵隊を手早く集めている。

「つい貧乏だつたから」

最後にルナマリアの心からの笑顔を見たのはいつだつただろうか。思い出せない。もしかするとなかつたかもしれない。

「俺たちって、2人とも何か目的があつて戦つてるわけじゃないんだな」

もちろん、市民権を得る、免税など理由はあるが、それはあくまでも副次的なものでしかない。戦わなければ得られないものではないからだ。

戦死したルーム・メイトは、軍人であることを決して話題にしようとしなかった。きっとわかつていただだり。結論はどうせ暗くて、無為なものになってしまふことが

人は、気が沈むとどうしても視線も沈んでしまうらしい。もう一つの理由として、何も話し出せないままルナマリアの顔を見ていることが辛かった。

「でも、アブデイエルの人たちのこと、少しでも聞けてよかつた」

「ルナ？」

顔を上げると、ルナマリアは努めて笑つてゐるようだつた。手まで叩いて無理に明るさを演出してゐるようだ。

「ほら、これで田標ができたでしょ。アーサー艦長やアバーさんの任期を終えさせてあげようつて」

「そうだな。みんなにはお世話になつてゐるし、少しくらい恩返しでもしなきやな」

ルナマリアの努力を無駄にしないためにも、シンはそれに乗じることを決めた。明るく振る舞うことなんてできなくて、意見に賛同するくらいならできる。同じ境遇の仲間が一人でも多く救われてほしいところのは嘘偽りない気持ちである。

「じゃあ、私行くね」

立ち上がり、扉へと向かうルナマリア。まるで、明るい雰囲気を持続することができなくて、ボロを出すまいとするように。

2人の微笑みが無理に作られたものであることが証明される。2人とも、顔を合わせなくなつた途端、それ以上笑顔を作ることはなかつた。どこか空虚な表情だけが取り残される。

ルナマリアは出ていった。シンと話でもして不安を取り除きたかったのかもしれない。では、その望みは叶えられただろうか。

シンは上体を倒してそのままベッドに寝転がる。見慣れた天井は、どこかくたびれていて、外人部隊の母艦にふさわしい。

「人類の未来を切り開く理想郷か……。看板倒れもいいところだな……」

金と権利を餌に移民と貧者を戦地へと送り出す。それが、今のプラントの現実に他ならない。

ダーレス級MS運用母艦ガーティ・ルーの艦内に不釣り合いな歌声が染み渡っていた。

発振元はラウンジ・ルーム。休憩室として壁には森の映像が映し出され、備え付けられた円形のソファーアーが等間隔に並べられている。

その椅子の一つで、少女は歌っていた。波立つ桃色の髪が少女の膝枕で寝ているもう一人の少女の体を柔らかく撫でている。

歌われる歌は子守歌。

ステラ・ルーシュという妹を、ヒメノカリス・ホテルという姉が優しく寝かしつけている。

その様子を、イアン・リーは遠巻きに眺めていた。艦長席に座つていなにも関わらず、軍帽を田深にかぶり威厳ある艦長の印象を崩そうとはしない。

「美しいものだ」

まさに森の精がさえずっているかのように幻想的とさえ思える。

イアンとてそれを邪魔するほど不躾ではない。氣づかれぬよう身を翻し、通路を引き返そうとする。すると、すぐに2人の少年と鉢合わせする。

どちらも軍服を着崩してだらしがない。壁に臂をつけた少年、ステイング・オークレーは鋭い眼差しをそのままイアンへと向けた。

「姉貴のこと、やうしい田で見んなよな、おっさん」

ステイング少年が姉と慕うのはヒメノカリス大尉。イアンは少佐である。どちらにしろ、姉貴だとおっさんと呼んでよいわけではない。

「私は君たちの直属とは言えなくとも上官にあたる。少しは言葉遣

いを選べんのかね？「

「俺たちの階級なんてお飾りだろ。そもそも軍人してるつもりなんてねえしな。で、姉貴に何の用だ？」

少年の言葉はある意味では正しい。ヒメノカリス大尉をはじめとする4人は正規の軍人というよりは戦闘行為への参加を正当化するために軍籍を有しているに面があることは事実だからだ。

イアンにしても、彼らを軍籍というもので不必要に縛り付けようとは考えていない。

「今後のことについてミーティングがしたかったのだが、急ぐことではない。またの機会に回すことにする」

ステイングの脇を通り抜けようとすると、妙にすばしっこい動きでアウル・ニーダー・こちらも少年である・・が前へと回り込んだ。

「姉ちゃんをやらしい目で見てたこと、否定しなかつたけど、やっぱ気があるのか？」

姉と慕う女性をとられてしまつて嫌なのだろう。こんなところは子どもある。もっとも、そのような事実はなく、単なる杞憂にすぎない。

「小娘に興味はない」

「何だよ、姉ちゃんと魅力がねえって言つのかよー？」

アウルは急に激昂すると身長差も考えずイアンの胸ぐらにつかみ

かかる。その上まだ騒ぐことをやめようとした。

思いを寄せて「い」と言へば反感を買つことだらう。否定してもこの有様である。

「どう言えはいいのだ、私は？」

イアンは片手を額に当てながら騒ぐアウルに呆れた様子を隠すことができないでいた。

自分は特殊な軍人の扱いに苦慮しているのではなく、子どもの扱いに苦しめられているのだと、イアンはようやく気づかされた。

得難い宝が欲しいですか。誰もに賞賛される栄誉が欲しいですか。差し上げましょう。上げましょう。でも、代わりに対価をお払いください。得られるものに比類するほどの代償を支払ってくださいな。それでも宝があなたを満足させてくれるとは限りません。

だつて人は満足を得ると、そのために失つたものを惜しむようになりますから。

だから人はいつだつて後悔し続けます。失つてしまつたものへの未練ばかりが募ります。

次回、GUNDAMU SEED Destiny -Blum enEinbrechers-

「金色の羊」

フォイエリヒ。少年の慟哭こそが、あなたを得たことの対価なのでしょうか。

第3話「金色の羊」

格納庫はいつも暗い。外人部隊として危険な単独行動を行うことが多いザフト軍ローラシア級MS搭載艦バーナードは隠密性を優先するために極力光を外に漏らさない態勢がとられることが多い。

普段からコクピット越しに見える光景は黒一色に尽きた。

コクピット内のわずかな光の他、見えるものは何もない。それなのに耳にはおかしな曲が届いていた。通信から漏れ聞こえているのだ。

綺麗な歌声なのだが、コーディネーター贊美の歌詞が鼻につく歌である。

「何だよ、この歌？」

シン・アスカはヘルメットの上から耳を塞ぐようにして手を当てる。独り言ではない。こんな曲を好き好んで聞いている同僚へと尋ねたのだ。

暗くて視認はできない——モビル・スーツには暗視機能も備わっているため見ようと思つて見えないことはない——が、シンの搭乗するΖGMF-56Sインパルス・ガンダムのすぐ横にはルナマリア・ホークの機体がある。

「知らないの？　『自由と正義の名の下に』のテーマ・ソングよ」

鼻歌交じりの返事が聞こえた。

『自由と正義の名の下に』。プラントで2年前に封切られ、社会現象にまでなった映画のタイトルだ。シンもプラントに居住する以上、見ないわけにはいかなかつた。以前の大戦で如何にザフトが勇敢に戦い、どれほど地球軍が愚かであったかという内容の作品で、地球出身のシンには噴飯ものの内容であつた。

「ああ、あのプロパガンダ映画か」

ため息を交えながら応える。

「シン、私がこの映画の大ファンだつてこと、知ってる?」

「」めかみに力を込めているであろうことは声だけでわかる。このミーハーな同僚は、この映画の主役のモデルとなつた軍人の信者であることを公言してはばからない。

「アスラン・ザラのファンなんだる。ザフトの騎士。ラクス・クライン議員の婚約者で、ヤキン・ドゥーエの戦いを勝ち抜いた英雄で、気高い戦士。対艦戦からモビル・スーツとの格闘戦まで何でもできるエース・パイロット、だる」

すらすらと出てくるのは、それだけルナマリアに聞かせられていたからだ。戦死したマッド・エイブス隊長と一緒にアスラン・ザラの話を延々と聞かされた時は、幼い娘さんのいるマッド隊長に同情してしまつたほどである。将来、あなたの娘もこんなになるかもしませんよと。

「わかつてゐるじゃない

「何度も聞かされたからな」

返事からはすでに機嫌をよくした様子が見て取れる。ビニカこう、恋する乙女のようだ。

「一度でいいからお会いしてみたい」

要するに、一度も会ったことがないのだ。そんな相手によくそこまで好意を寄せられるものだと、シン浅くため息をついた。

アスラン・ザラはザフトの英雄である。現在のプラントでギルバート・デュランダル議長に並んで有名なラクス・クライン議員 - 元歌手で、この映画の主題歌は本人が歌っているそうだ - の婚約者で、ザフトでも指折りの戦士。インパルスガンダムのような量産品ではなくてゼフィランサス・ズールが直接開発したオリジナル・ガンダムに搭乗していたのだそうだ。

最高の環境に最高の装備。シンがどれほど羨んでも手に入れることができないものを生まれながらに持っているような人だ。

シンがこの映画が嫌いな理由の一つに、絶大な貧富の格差を人類の可能性というあやふやな憧憬に置き換えて強要するプラントの現状が見えて仕方がないことが挙げられる。君たちも努力すればアスラン・ザラのようになることができる人と人々を必死に説得しているだけだ。現実は、そんなこと決してないのに。

英雄が華々しい活躍をする画面の隅で爆散する名もなき兵士。それがシンの現実であつた。

格納庫に弱い明かりが灯される。それは四隅を切り取り宇宙へと

一直線にカタパルトの道筋を示す。

作戦開始時刻になつた。そのことはオペレーターであるアビー・ワインザーの声でも告げられる。

「出撃準備、お願ひします」

インパルスの足を1歩前進させる。ルナマリアの様子をうかがうと、僚機に動き出す気配はない。

「お先にどうぞ」

これから戦いに行くといふのに、ずいぶんと軽い調子である。もつとも、そうでもしなければやつていられないのが本音だろう。

比我戦力差は3倍を優に超える。援軍要請はすでに行つたと聞かされているが、そんなものを本当に期待しているのなら、援軍を待たずに作戦を開始する理由はない。

インパルスはシンの操縦の下、普段と変わらない足取りでカタパルトに足を乗せ、腰を屈める。

「シン・アスカ、インパルス2、行きます!」

70tもの機体が加速し、シンにのしかかる加重。

どのような危機的状況をも覆す知恵は、映画の中の英雄のように思いついてはくれない。

わずか1隻。わずか2機のモビル・スーツによる艦隊攻撃が始まった。

不意をつきバーナードの砲撃でまず1隻を撃沈する。その後、混乱に乘じてインパルスが追撃。一気に形勢をこちら有利に傾けると、この作戦は、初手からつまづきを見せた。

相手も馬鹿ではない。こちらの攻撃が当たるまで待つていてはくれない。ミノフスキーパーティーの電波障害が周知されたいる現在、ただでさえ、艦砲による遠距離射撃の命中精度の低下は著しい。当たるはずのない攻撃は、敵艦の脇を通り抜けていった。

すべてが成功することが前提の作戦は、こうして脆くも瓦解した。

ソード・シルエットを装備したシン機のすぐ後ろに、ブロスト・シリエットを背負ったルナマリア機が続く。

その前方にはダーレス級MS運用母艦からモビル・スーツが次々と出撃する様子があつた。

「ルナはバーナードを離れるな。俺が敵艦を叩く」

「了解」

ミノフスキーパーティーによる加速を続けるシンと、加速をやめたルナマリア。2人は急速に離れていった。

インパルスのモニターには次々と敵機を認識するカーソルが表示される。数は概算で10程度。大半はデュエルダガーのようだが、

シンの意識はすぐに1機の敵へと集束された。

蟹の甲羅を背負った緑のガンダムである。GAT-252インテンセティガンダムの特殊型。ビームを弾くシールドを持つ難敵である。

互いがミノフスキー・クラフトを持つ機体同士、振り切ろうとして振り切れるものではない。敵艦に近寄ろうとすると、その前に周り込む形で、フェイズシフト・アーマーさえ斬り裂く鎌をこれ見よがしに構えている。

「いつを倒さなければ撃沈どころか近づくことさえできない。

シンは覚悟を決める必要があった。ソード・シルエットから肩越しに大剣を1対、両手に握りしめる。現存するすべての物質を破壊するはずのビームの輝きが刃を構成し、しかし、そこには以前感じたほどの信頼感はない。

そして、時間もない。

加速するインパルス。敵はバック・パックにアームで繋がれたシールドを前面に2枚展開すると、余裕な様子で待ちかまえる。ビームの光を発しながら叩きつけられた対艦刀は、しかし強烈な輝きを放つばかりでシールドを破壊することはない。

通常のビーム・サーベルでは破壊できることが保証されない防御構造を一瞬の会敵で確実に破壊することが期待されたのが対艦刀である。そのため、こんなにも大型でとり回しの悪い武器が使用されているのだ。

「何のための対艦刀だよ！」

対艦刀がその存在意義をまるで果たせない現実に、シンは苛立ちを隠すことができなかつた。

プラス・シルエットの2丁の大型ライフルから太いビームがまっすぐに伸びる。直撃さえできれば時にはシールドを一撃で破壊することができるこの大火力も当たらなければ意味がない。

ルナマリアを取り囲む敵は、明らかに防御に専念していた。決して無理な攻撃はせず、盾にうまく胴体を隠しながらこちらの動きを注視している。

敵は4年前にもすでに性能不足が指摘されていたGAT-01デュエルダガー。現在は追加装甲が開発され、性能の底上げがなされているとは聞いているが、それでも今ルナマリアを取り囲んでいるのは通常型のデュエルダガーである。ビーム・ライフルとシールド。そんな最低限の装備しかないように小さな機体に、ルナマリアは翻弄されていた。

こちらは1機。敵機は6機。こちらが1撃放つと2機が避ける。すると4機が撃ち返してくる。直撃をくらえればフェイズシフト・アーマーとて破壊されてしまう。

アスラン・ザラならこんな時どうするだろうか。きっと颯爽と敵の攻撃をかわして、敵がまるで止まっているように撃ち抜くのだろう。

いくつもフスキー・クラフトの恩恵を受けているとは言え、今

のルナマリアに高機動中に敵を狙い撃てるほどの技量はない。

攻撃されたものは回避に専念し、攻撃されなかつたものが反撃に転じる。この完璧な連携の前に、ルナマリアは自由に動き回ることさえできていた。

徐々にバーナードから引き離されつつあるのである。

モビル・スーツを母艦から引き離し、まず艦を落とす。このセオリーをまざは敵が実践しようとしていた。

「！」のままじやバーナードが……

すでにザフトの戦艦は対空砲火が甚大な損害を受けている。曳光弾の輝きは疎らで、戦艦はモビル・スーツのように向きを変えて死角を補うといふこともできない。

顎で蠅を追うとは、まさにこのよくな有様であるのかもしけない。

2機のガンダムが易々とローラシア級バーナードの射程内へと入り込む。アポロンでの戦闘で被弾した砲塔は修復が施されていない。外部から防御網の死角は容易につかがいられた。

先を行くのはGAT-X133イクシードガンダム・バスター・カスタム。体中の至るところに重火器を担いだこのガンダムは甲板の上空を飛行しながら正確に砲塔を一つずつ破壊していく。目に見えて曳光弾の輝きが減つていく。

イクシードガンダムの「クピットにて、ステイニング・オーケレーはモニターの1つに映し出された僚機を確認する。

「ステラ、道は開けてやった。例の場所に穴を開ける

「うん！」

ステラ・ルーシュの搭乗するGAT-X270ディーヴィエイトガンダム特装型がモビル・アーマー形態でステイニングのイクシードを頭上を通り抜ける。

いくらフェイズシフト・アーマーが強固とは言え、艦砲の直撃は避けるに越したことはない。高速で飛行するディーヴィエイトを捉えるにはすでに砲塔は数を減らしきっていた。

ステイニングの思惑通り、ステラはローラシア級の後部。長大な上部構造の奥深くにまで飛び込んでいた。

ブースターがすぐ前にメイン・エンジンが存在し、下部に格納庫を配置する構造上装甲を十分に厚くすることができない。10年近くも前に初号艦の進水式を終えたような型落ちした戦艦がその構造上の欠陥を今まで知られてないはずがない。

薄い弾幕の中、ステラはあっさりと領空を侵犯する。ディーヴィエイトがモビル・スーツへと変形し、ガンダムの顔がローラシア級を捉えた。

通信機越しにステラの吠える声を聞きながらステイニングはディーヴィエイトの後を追う。

ディーゼヴィエイトガンダムの右腕に装備された鉄球が撃ち出される。それ自体が推進器を備える鉄球はローラシア級の装甲へと深々と食い込み甲板がいびつに隆起する。左腕の2連ビームガンが装甲の隙間に次々と撃ち込まれ、ビームのもたらした膨大な熱量は装甲を内側から吹き飛ばす。

「上出来だ」

ローラシア級を離れるステラのディーゼヴィエイトに入れ替わるようにしてイクシードガンダムが装甲に開いた穴を見下ろす。

右腕にはバズーカ。左腕には2連ビーム・ライフル。両肩に加え、胸部にもビーム砲が装備されている。まさに火力の怪物と言えるイクシードガンダム・バスター・カスタムはそのすべての火器のロックオンを終えた。

モニターには煙で覆われ下を見透かすことのできない穴。そのすぐ下にはすでに最低限の防備しか残されていないエンジンがあるはずだ。

「くたばれよ、旧式！」

イクシードの火力のすべてがローラシア級へと巨大な火の柱を打ち立てる。

「機関部に、火災発生！」

ローラシア級バーナードのブリッジに報告とは思えない悲痛な叫

び声が響きわたる。

「消火作業急げ！」

「駄目です！ 間に合いま……！」

指示を飛ばすアーサー・トライン艦長の声も、涙さえ流すアビー・ワインザーの姿も、ブリッジ後方の壁から吹き出た炎がすべて包み込み、焼き尽くす。

機関部から発生した火災が艦全体に類焼する形でローラシア級が焼け落ちていく。その様はダーレス級MS運用母艦のブリッジに光明に映し出されている。

敵の母艦を撃沈するという戦果にも、イアン・リー艦長は眉一つ動かすことはない。いつも通りに唇を固く結んでいた。

「まるで問題にならんな」

わずか1隻。護衛となるモビル・スーツも満足に持たぬ戦艦など現在の戦術では物の数に入らない。戻るべき場所を失ったモビル・スーツだけでどれほど戦えるものでもない。

イアンの顔に油断の色はない。それは普段からの心がけばかりではない。レーダーがこちらに接近中である艦隊を捉えていた。信号はない。味方以外の何か。敵の援軍と考えた方が妥当というものであろうか。

クルーから報告があつた。

「ミノフスキーパーティ濃度上昇異常です。索敵、行えません!」

ミノフスキーパーティは乱暴な言い方をするならビームの原料である。エネルギーを失ったビームがミノフスキーパーティに還元されるることは確認されている。それだけにしてはミノフスキーパーティ濃度の上昇が著しい。

レーダー攪乱のために意図的に散布されているのだと少々大げさと思える。

「2番、3番小隊を防御に当たらせる。今のうちに艦の向きを合わせておく!」

イアンの指示に、クルーたちは即座に反応する。体に横からのしかかる重みは艦が方向転換を始めたとの証である。

ミノフスキーパーティ上昇前に感知された敵はさほど大規模というほどではない。しかし先に撃沈されたローラシア級の援軍であるとすれば増援を待たずに行動を起こしたことの説明がつかない。偶然遭遇したにすぎない。それではできすぎている。

不気味さがないわけではない。イアンは、しかしすべて予定調和の範疇であるかのように振る舞う術を知っている。

艦長席の横で人形が動き出す。そんな事態にも表情一つ変えることなく対処する。

白いドレスを身につけた桃色の髪の塊がオブザーバー席の背もた

れを乗り越えていた。ただでさえ髪が長く、波立つていることから無重力では髪の毛が大変多く見える。

「私も出ます」

姉を気取つて弟たちの遊んでいる姿眺めていた。しかしあはり気になつて混じろうとするような。そんな気軽さでヒメノカリス・ホテルは自らの出撃を宣言する。

「わかりました。しかし……」

言葉に詰まる。そんな指揮官にあるまじき姿をさらしてしまったとしても許されるのではあるまいか。

「まさかそのお姿で？」

お人形を飾るよつたドレスのままモビル・スーツを操縦するのだと聞かされたなら。

イアンの唇がおかしな形で結ばれる。その目は無礼にならない程度にヒメノカリスの姿眺めていた。

愛するお父様以外の人物には微笑みさえ浮かべることはない。それがヒメノカリスというお人形である。表情に乏しいまま、その青い瞳はイアンを見る。

「ドレスは女性の戦闘服だから

そう言い残し、ヒメノカリスはブリッジを後にする。冗談なのか本気なのか、どちらとも判断できないイアンを残して。

バーナードが爆沈され、トライイン艦長たちは絶望的であると言えた。決して長くはないとは言え、ともにいくつもの死線を乗り越えた仲である。何にも感じない訳がない。悲しいとさえ思えた。

シンの搭乗するインパルスのすぐそばをレールガンの弾頭が通り抜けた。まともに視認できる速度ではないが、インテンセティガンダムの特殊な奴が放ってきたものである」とくらにはわかる。

これが現実である。悲しんでいる暇などない。生き延びる術さえわからない。

母艦が撃沈された。バーナードを落とした2機のガンダムがインテンセティの加勢に参上しようとしていた。ルナマリアにしても6機もの敵機を相手に満足な戦いができるはずにいる。

「どうすれば、どうすればいいんだよ……」

声はかすれ、涙さえ浮かんでいることを自覚する。

ガンダムに勝てるほどの実力はない。たとえこの戦いをぐぐり抜けたところでインパルスガンダムの航続速度では友軍と合流する前に酸素が尽きてしまう可能性の方が高い。そして、この戦いさえ逃げ出せるだらうか。

インテンセティが鎌を構え接近していく。ほとんど自棄になつて対艦刀を振り回す。ビームを弾くシールドはたやすく対艦刀を受け止めるが、鎌が振り下ろされるだけの隙がインパルスの正面に生じ

ていた。

ありとあらゆる実体剣を防ぐフェイズシフト・アーマーに包まれていることも構わず鎌がインパルスの頭部を斬り裂いた。左目が縦に斬り裂かれ、モニターの一部が不鮮明となつた。

その朧気な視界の中に、シンは光を見つけた。

「光る、ガンダム……」

この戦場にいる者はみなすべて、それに視線を奪われていた。

それはガンダムである。純白の装甲に、黄金の帯がかけられた姿をしている。その手には武装らしいものは何もなく、明らかに武器と思われるものは一切所持していない。

その背には環状の構造。正面からも見えるほどの大ささのリングが背負われていた。

そして、全身を淡く輝かせている。ミノフスキー・クラフトの発する光であることは誰の目にも明らかであった。それがガンダムであることは顔を見ればわかる。

だがそれは果たして兵器なのだろうか。それならば武器はビーム。完璧な円をなす光を背負い、純白の体にビームの黄金の帯を巻き付けたその姿は神々しくさえあった。

「何だよ、あいつ？」

アウル・ニーダの関心先程まで戦っていたインパルスガンダムからすでに純白の機体へと移っていた。インパルスから離れ、新手のガンダムを見やすい位置にまで機体を移動させている。

そのすぐそばではステイングの乗るイクシードガンダムが付近への警戒を怠らぬ動きをしていた。ステラのディーヴィエイトも純白のガンダムへの関心を隠そそうとはしない。

「見たことない機体だ。ゲルテンリッターか？」

「あんな機体、ない」

「7機全部見たことあるわけじゃないだろ」

ステイングとステラは相手の正体を把握できていない。その脇でアウルはすでに戦いの準備を始めていた。

インテンセティガンダムが重厚なバックパックで頭部を覆い隠す。それ自体がミノフスキーパーツに包まれるバックパックは甲殻類を思わせる形状で、鍔の代わりにシールドが腕の先には取り付けられている。細長のデュアル・センサーが1対で隠された頭部の目の代わりをしていた。

「味方じゃないなら……」

アウルの目には、モニターに映し出されるインパルスガンダムの姿が映る。ローラシア級に搭載されていたものとは違う。新たに目

算で6機のストライクもどきが白いガンダムの後ろから接近している最中であった。

ストライクもどきを率いる奴が味方であるはずがない。アウルは確信を持つて引き金に指をかける。

「敵だろー。」

蟹の口に当たる部分に設置された大型ビーム砲からビームが一直線に放たれる。直撃のコースである。それは、動かなければ。

純白のガンダムは動いた。全身を包む輝きを強め、滑るように滑らかな動きであつたりと射線上からその機体を逃がした。

全身をミノフスキーナ・クラフトで包み込む。それが意味することを誰もが知っている。アウルのインテンセティガンダムのような量産型ではない。眞の意味でガンダムと呼ばれるべき機体であるのだ。

と。

純白のガンダムが動いた。何かをしているわけではない。ただ背部のリングを動かして、それは頭上に飾られた。後光のごとき輝きが頭上から溢れ、その莊厳とさえ形容できる雰囲気に拍車がかかる。

とても攻撃とは思えない動きに、アウルは極度の緊張を強いられた。ガンダムがガンダムよりも弱いはずがない。シールドを前面に展開し、実弾もビームにさえも十分な防御力を発揮する鉄壁の守りで固める。それほど警戒すべき相手であった。

ガンダムという機体と対峙するということは。

それから、何かが起きたわけではない。それは認識にすぎない。アウルは確かに、敵が何かしたということを確認したわけではなかった。

それでも、光が満ちた。

シールドの内側。シールドと機体の間に位置するアームを突然光が包み込んだ。それは明らかにビームの輝きを放ち、フェイズシフト・アーマーが悲鳴のように強烈に輝いた。

そして、アームが破壊される。爆発の衝撃が機体を叩き、アウルはつめいて後ろへと弾きとばされる。アームを破壊されたシールドは勢いよくインテンセティから離れた。

何をされた。何があつた。

まったく理解できない。わかっているのはシールドを一つ、見えない攻撃で破壊されたということだけ。

「何だよ、これ！？」

逃げるように機体を動かすと、つこときほどまでインテンセティがいた場所に突如光の玉・・明らかにビームによるものだ・・が発生した。虚空からいきなりビームが出現したようにしか思えない。

声に明らかな焦りの色を含ませて、ステイニングがバズーカを発射する。

「魔法かなんかだろ！」

弾速が決して誉められたものではないバズーカの弾頭が、突然現れた光に絡めとられて爆散してしまう。

白いガンダムは輪を頭上にかざしたまま動こうともしない。動くこともなく、ステラたち3人を追いつめていた。

機動力に秀でるディーゼヴィエイトと、見えない攻撃はかわしうがない。いつ攻撃されるかもわからない恐怖は、ステラの幼い心をたやすく蝕む。

「お姉ちゃん……」

瞳に涙さえ溜めて、ステラは最も頼りにする人物の名前を挙げる。ディーゼヴィエイトの「クピット」に光が飛び込んできたのは、まもなくのことであった。

眩しくはあつても熱はない。思わず閉じた瞼をゆっくりと持ち上げた時、そこには黄金が巨大な存在感を放ちながら立っていた。明らかにステラを狙っていたと思われるビームがそれのわき腹の当たりで爆ぜた。黄金の輝きは損なわれることなく、ステラを守るようにディーゼヴィエイトの前に在り続ける。

それは、黄金のガンダムであった。

「お姉ちゃん！」

姉と慕うヒメノカリスの参戦に、ステラは破顔する。モニターには、ほんのかすかではあっても微笑もうとするヒメノカリスが映し出されていた。普段通りに着飾った姿のままで。

ヘルメットの奥で、さすがのステラも瞬きを繰り返せざるを得なかつた。

ZZ-X300A Aフォイエリヒガンダム。この機体は、ムルタ・アズラエルを名乗ったブルー・コスモスの3人の幹部の1人であるエインセル・ハンターが搭乗したことから反コーディネーターの象徴として認識されている。

全身を黄金の装甲で包み、その全長は通常のモビル・スーツの1・5倍ほど。細く長い手足に、バツクパックは大型のものが取り付けられ、シルエットだけでもほかのモビル・スーツとは一線を画す。

存在そのものが存在感を主張してやまない。そんな美しくも異形の姿であった。

シンとルナマリアも、果てには地球軍も増援のザフト軍でさえフォイエリヒから目を離すことができない。ただ唯一、白いガンダムだけが動いた。装甲を輝かせ、すべるように機動を開始する。

フォイエリヒもまた、一層黄金を輝かせた。25mにも達する機体が、やはりすべるよしひになめらかに動く。

互いのガンダムは淡い光に包まれたまま戦闘を始めた。

黄金が、フォイエリヒが動く。バツクパックが腕を伸ばした。メイン・スラスターを取り囲むよしひに配置されたユニットが多節アームに持ち上げられるように起きあがる。その様は蟹の被りものをしたインテンセティガンダムのシールドを彷彿とさせる。ただし、フ

オイエリヒは4機。そのすべてが黄金の輝きに包まれ、先端部分には銃口が開いていた。

各コニットから一筋のビームが伸びる。モビル・スーシ4機から同時に攻撃されているにも等しい猛攻を、白いガンダムは軽々かわしていく。

突然フォイエリヒの行く先にビームの塊が発生する。ビームを弾く黄金の装甲はビームを弾くはずだが、フォイエリヒはうまくその身を翻すとその姿勢のまま腕を伸ばした。表現ではない。先端に大型のビーム・サーベルを発しながら、腕が明らかに伸びて白いガンダムへと向かう。

白いガンダムは腰から取り出したビーム・サーベルで迎え撃つ。ぶつかり合つ2本のサーベルは、ビームを包むエフィールドの損傷によって互いにビームを垂れ流す。その輝きは極めて強く、両者の出力が尋常ではないことを物語る。

機動性。攻撃力。防御力。そのすべてをとってもインパルスガンダムでは遠く及ばない。そしてこんな戦闘でさえ、まだ互いの探し合いの段階である。

そんな前哨戦は、人々の意識をたやすく奪う。戦闘中であるというのに、戦っているのは2機のガンダムだけであり、ほかの機体は制止したまま、信じられないことに、その戦闘の様子を見守っていた。

輝く2機が信じられない性能と反射を見せて互いに一步も譲らない。

「す……」

シンの耳にはルナマリアの声が届いていた。あまり裏表のないルナマリアらしく素直に驚きを表現している。しかし、それをシンが認識することはない。

「あんたが……」

暗い声。小さくともそこに含まれる陰惨な抑揚ははつきりと聞き取れる。

「シン……？」

シンはルナマリアの心配げな声など聞いてはいなかつた。すべてが耳に届いてなどいない。

ただひたすらガンダムの戦いを見守っていた。正確には、黄金のガンダムの姿を、見ていた。

「あんたが！」

ペダルを思い切り踏み込み、シンは舌を噛む危険さえかまわず吼えた。左目を失ったインパルスがスラスターと、わずかなミノフスキー・クラフトを頼りに加速する。

白いガンダムなど問題にはしていなかつた。ただただひたすらにフォイエリヒを目指してスラスターが火を噴く。この程度の機動力で追いすがることができたのは、幸運か、それとも意地か。

インパルスは対艦刀を力任せにフォイエリヒガンダムめがけて叩

きつけた。

「あんたが母さんを殺したー！」

ビーム・サーベルはビーム・サーベルで防がれる。目を焼かんばかりの輝きが奔流となつてインパルスとフォイエリヒの間に流れた。シンの眼差しは閉ざされることはない。光を浴びていることも構わず、その瞳は怒りに蝕まれたまま、フォイエリヒへと向けられていた。

突然の乱入。そもそも、予定された乱入などないのではないだろうか。ヒメノカリス・ホテルは、あくまでも冷静であった。

がむしゃらに対艦刀を叩きつけてくるインパルスの攻撃は単調で、フォイエリヒの両腕から発生させたサーベルで防ぐことができる。同じガンダムとは言え、ゼフィランサス・ズールが直接手がけたフォイエリヒと単なる数うつとでは性能に雲泥の差があるのであるのだ。

そして、パイロットの腕前も。

ヒメノカリスは隙を的確に捉え、つま先から発生させたビーム・サーベルを敵インパルスの左肩へと下から突き立てた。フェイズシフト・アーマーの強烈な閃光が収まった時には、インパルスは左腕を根本から失っていた。

それでも、勢いそのものはまるで減じることがない。

「「J」のインパルス、私を狙つてる」

ただ加勢に訪れたにしては攻撃が執念じみている。左腕を失い、よく見ると左目も破壊されている。それなのに一向に衰えることのない気迫は、ヒメノカリスにある人物を思い出させた。

左半身の目と腕を失い、それでも前に進むことをやめようとしない男をヒメノカリスは知つている。

「どこかの馬鹿に似てる」

すると不思議と情もわく。

片手だけで対艦刀を降り下ろす一撃を、ヒメノカリスは、フォイエリヒはすり抜けた。正確には、端からはすり抜けたとしか思えないほどの近距離で攻撃をかわし、接触する限界の距離でインパルスの脇を通り抜けたのだ。

2機のガンダムは互いの位置を交換し、背中合わせの状態にあつた。

ミノフスキー・クラフトによる微細な機動と、卓越した操縦技術がなせる限界の見切り。ハウinz・オブ・ティンダロスと呼ばれる、世界で数えるほどしか体得者のいない絶技である。

そしてヒメノカリスはその1人に数えられない。これでは不完全なのだ。攻撃を完全に回避し、同時に反撃を行つてこそハウinz・オブ・ティンダロスは完成する。回避はあくまでも手段でしかなく、攻撃こそ本懐。

ヒメノカリスでは、せいぜいすれ違いざまにインパルスの左足を斬り落とすくらいであった。

それでも、相手のパイロットは足を斬り落とされたことさえ気づいていないかもしれない。たとえ不完全であつたとしても、凡夫には果てしない領域である。それに、インパルスは何事もなかつたかのように残された対艦刀を勢いよく薙ぎ、フォイエリヒへと追撃を続けようとしていた。

「あんたが殺したんだ。あの日、あの場所で！」

傷だらけのインパルスの中でシンは声がかされるほど大きな声を上げていた。ヘルメットの中で反響し、自らの耳を痛めても構わぬ。

フォイエリヒは、このガンダムの初陣をシンは知っている。

今から4年前のC.E.71年。大西洋連邦軍がオーブ首長国へと侵攻した際、フォイエリヒガンダムは投入されたのだ。

オーブの空に悠然と禍々しいまでの美しさをさらす姿を、シンは1日たりとも忘れたことはなかった。

「あんたが！ あんたが～！」

右腕にだけ残された対艦刀をどれほど振り回そうとも、フォイエリヒは完全な回避でかわしてしまった。しかし、今のシンの冷静な戦力分析など行う余裕はない。声を上げたまま攻撃繰り返す。

対艦刀の大きな一撃がフォイエリヒをようやく捉えた。それは認識であり、現実とは違う。攻撃したのはシンであるはずが、しかし傷ついているのはインパルスの方であった。

フォイエリヒのサー・ベルが右半身を直撃し、その熱量はシンに激痛としてコクピットにまで届くほどである。

薄れしていく意識。それでも敵意の眼差しは辛うじて生き残ったモニターに映し出されるフォイエリヒの姿を捉えて離さない。

「あんたが母さんを……！」

怒りと憎しみの中で、シンの意識は途絶えた。

C・E・71年に行われた大西洋連邦軍によるオープ侵攻は、現在においてもまだその明確な理由は明らかではない。

当時大西洋連邦はパナマ基地、及びオープ侵攻と同時期に行われたジブ・ラルタル攻略作戦において軍事目的に耐えうるマスドライバーを2基確保していた。オープの所有するマスドライバーの必要性は必ずしも高くはなかつたと分析されている。

では何故国際的信用を失う危険性を犯してまで中立国オープへと侵攻したのか、それは諸説分かれている。

反コーディネーター思想結社であるブルー・コスマスの代表を当時務めていたムルタ・アズラエルが軍需産業ラタトスク社の代表を兼任していたことから、新兵器の実験に使われたのではないかとの

説は根強い。

確かに当時最新機であったGAT-01A1ストライクダガーが大体的に投入された事実はそれを裏付けるが、それが国際世論を敵にする危険を冒すほど価値があるものかとの反論には有効な対抗手段を打てないでいる。

マスドライバーの確保がやはり目的であったのではないとする説は諸手を上げて肯定するほどでもないが、否定することもできない。

当時ジブラルタル基地はザフト地上部隊の中で最も戦力が集中した場所であり、陥落は難しいとされていた。では何故オーブ侵攻と時期を合わせて行われたのか。戦力の分散は、しかし軍が当時の内情を明らかにするはずもなく正確な戦力分析を行うことはできないでいる。

一番荒唐無稽とされる説で、しかし大西洋連邦が主張している学説が存在する。

オープが裏でプラントと手を組んでおり、大西洋連邦軍が反撃に打つてでた際には背後から奇襲をかけると密約で決まっていたとする説である。

この説は明確な証拠はなく、またザフト軍が行ったニュートロン・ジャマー降下によって多大な犠牲が生じた地球の国家がその首謀者に肩入れすることはありえないという国際世論の流れと逆行している。

ただし、中立を謳うはずのオープが大西洋連邦の技術を盗用する

形でモビル・スーツの独自開発を進めていたという事実や、マスドライバー及び技術力に優れたモルゲンレー・テ・社本社を自爆させると、大西洋連邦に技術を渡さない、プラントを利するとも考えられる行動があつたことがこの説を論争の座から引きずり落とすことはないとされている。

そして、たとえ政治学者が何を言おうとも変わらない事実がある。多数のオープの市民が犠牲になつた。この事実だけは何も変わらない。

あの日、シンは走つていた。爆音の中を、撃墜された戦闘機が頭上をかすめるような低空で煙をまき散らしながら通り過ぎて行つた。シンは走つていた。戦場のただ中を、母に手を引かれて。

これは夢。母とどんな会話をしたのか覚えていない。ただ必死な顔であつたことが朧気ながら思い出される。

母は仕事一筋の人だつた。優秀で、熱心で、オープの中でも指折りの大企業モルゲンレー・テ・社に務めるほどの人である。家にいる時でもいつも横に細長い眼鏡をかけて、厳しい表情で携帯電話にまくし立てている姿しか見たことがない。

そんな母が幼いシンの腕を引いて必死に走つていた。

政府が突然避難命令を出した。理由なんてわからない。戦場を突つ切つて逃げ出せと命令してきた。子ども心に民間人に戦場を走ら

せることのおかしさはわかつていた。

周りにはシンの他にも大勢の人が着の身着のままで走っていた。道路は損傷がひどくて車は支えない。思い出した。だからシンは走つていた。

陥没し、破壊され、瓦礫の山ができる道路をただ走つていた。

大きな音がする度、避難民が一斉に横を向く。道路自体が高台にあって、やや下に見える森ではモビル・スージが戦闘を続けていた。20mほどもある機体が巨大な剣をぶつけ合いながら戦っている。間合いを変えるために出された足にかすめられただけでも人なんてひとたまりもない。

流れ弾のビーム - 当時はビーム兵器のことをよく知らなかつた - がシンの後ろの道路へと着弾した。熱風に背中を押され、シンは思わず前のめりに倒れた。

シンを気遣う母の声。母に支えられながら擦りむいた膝を庇うよう体を起こす。夢の中の自分へ、シンは叫びたかった。後ろを振り向くな。

それでも、記憶は継続される。

シンは後ろを振り向いたのだ。クレーターのように陥没した爛れた穴と、その周りに残された何か。穴から離れるほど、それは人の形を残していた。はつきりと見えるほどシンの近くともなると、全身が爛れた、それでも死にきれない人のうめき声と白濁した眼球が見えてしまった。

それからどうしただろうか。確かに、狂乱して、母にしがみついたような気がする。マユ母さん、マユ・アスカ、母の名前を呼びながら。

それも長いことではなかつた。胴を両断されたORB-M1Mアストレイ - - 当時のオーブ軍の主力モビル・スーツで、技術盗用の噂がある機体だとは後から知つた - - が道路の方へと崩れてきた。機体そのものは直撃はしない。ビームの熱量が破壊された機体内部から一気に吹き出し、炎の波となつて道路を襲つてきたのだ。

何がどうなつたかなんてわかるはずもなかつた。熱くて痛い。それがシンの率直な感想であつた。

炎がくすぶり、焦げ臭い。ビームほどの熱量はない炎は人々を焼き焦がした。人が焼ける臭いの中、シンはゆっくりと立ち上がつた。

無傷ではなかつた。全身が熱にやられ、軽い火傷になつていた。左頬の痣はこの時のものだ。4年経つた今も決して消えてはくれない。

頬を伝う涙が火傷に染みた。こぼれ落ちる涙は、全身を焼かれた母を湿らせる。

「母、さん……」

まるで頬の涙を拭うような風が上空から落ちた。思わず見上げると、そこには太陽があつた。人の形をした太陽があつた。

太陽が燐々と降り注いでいるにも関わらず構いもせず空に漂う姿は傲慢。太陽を騙りながら、本物を前にしても自らの偉大さを誇示するかのようだ。

太陽へと挑む偽りの黄金は、オープの空を蝕んでいた。

熱に喉を焼かれ、声が声にならない。血を吐くような思いで、それでもシンは黄金のガンダムへと慟哭の限りを、憎悪の塊をぶつけずにはいられなかつた。

人を幸福にすることは難しくても、人を不幸にすることは簡単です。それは何故でしょう。それは、人の周りにあまりに災いが多いことに起因しています。人を嘆き、悲しませるものはあまりに多いのに、人を幸福にしてくれる出来事はあまりに少ないからです。結局、選択肢の多寡にすぎません。

だとすると、望んで特定の不幸になることも難しいのではないでしょうか。どんな不幸でもいいなら別として。

それは墮落とて同じこと。意図した墮落は幸福ほども選択肢が限られています。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
Einbrecher~

「墮落論」

プラント。意図した墮落を、人は狂信と呼ぶではありませんか。

第4話「墮落論」

「だから寝るのは嫌なんだ……」

あれから4年も経つのにいまだにこの夢につなされることがある。母を失った夢にも慣れたもので、以前のように飛び起ることはなくなつた。自分でも意外なほど冷静に瞼を開いた。

「ここはどうか。見慣れない形をした照明が見えた。どこかに寝かせられているようだが、自室でないことだけは確かだ。ローラシア級MS搭載艦バーナードは撃沈されてしまった。シン・アスカが帰る場所はもうない。母を失つた時と同じだ。胸に膨らむしこりは肺を圧迫する。起きあがる気にはなれなくてシーツの感触を背中で確かめていた。すると、照明の光を遮つてのぞき込んできた誰かがいた。

これだけは見慣れている。赤い髪に少女特有の丸い瞳。ルナ・マリア・ホークだつた。

「お目覚め、シン？」

「ルナ、ここは？」

シンが上体を起こすと広がつた視界には医務室特有の光景が広がつていた。様々な薬品がしまわれている棚や、空のベッド。普段はカーテンで仕切りが作られているのだろうが、ルナ・マリアが閉め忘れたのか、大きく開かれたままでシンの観察を助けてくれた。椅子についた白衣の男性がこちらを見ていることも気づくことができたのもそのためだ。

「ラヴクラフト級ミネルヴァの医務室だ。君は戦闘中に気を失つてここに運ばれてきた」

船医なのだろう。椅子を回して、体をシンの方に向けていた。その言葉の中に聞き慣れない単語を見つけると、シンがつい頼ったのはルナマリアの方であった。

「ラヴクラフト級？」

少なくともローラシア級とは違う。そもそもこれはどこなのだろうか。

シンには記憶がない。戦闘で母を奪つたモビル・スーツの姿を見つけて攻撃を仕掛けた。返り討ちにされて氣を失つた。それだけだ。

「シン、ついてきて。歩きながら説明するから

ルナマリアが手を引いてくる。無重力であるため簡単に体が浮き上がる。船医にはルナマリアが軽く会釈して、シンは医務室から連れ出された。

部屋の外には小綺麗な通路があった。いつも人手不足で薄汚れていたバーナードとは違う。

あれからどれくらい意識を失っていたのかわからないが、ノーマル・スーツを着せられたままであったので大して時間はかかっていないだろうと判断した。ルナマリアはすでに軍服に着替えている。赤い軍服であることから、どうやらこの艦にはルナマリアの他にも赤服の女性兵士が乗艦しているらしい。ルナマリアの軍服はバーナ

ーデとともに沈んだはずだから。

シンの先を行くるナマリアは体」と振り向いた。無重力の中、前も見すに漂つてゐる。危なつかしいこの上ない。

「あの戦いの時、援軍が来てくれたこと覚えてるでしょ」

「ああ。見たこともないような白いガンダムがいた」

リング状のバックパックに、白い装甲には黄金の帯が巻かれ、すべてがミノフスキ・クラフトの淡い輝きに包まれていた。

「そのガンダムの母艦がこのミネルヴァなの。私たちはそこに収容されたってわけ」

「トライン艦長たちは？」

この同僚は大変わかりやすい。ちょっと撃沈されてしまった仲間たちのことを挙げただけで表情を曇らせた。覚悟を決めるにはちょうどいい間をおいてから、ルナマリアは答えた。

「駄目だつたつて……」

あの爆発だ。わかつてはいた。理屈と感覚はやはり別物であるらしい。頭を曇らせる不快感はなかなか消えてはくれない。

後少しだつた。後少し戦い抜けば除隊が許可されたはずだ。ザフトが外人部隊の扱いを少しでも真っ当に対応してくれていたならみんな焦る必要なんてなかつた。家族の下へ帰ることができたはずだ。つい目を細め、表情が険しくなつてしまつたのは、通路を抜けて広

い空間からの強光にさらされたからばかりではない。

気づくと、シンは格納庫に足を踏み入れていた。格納庫なんてどこも大差ないのでないだろうか。それはシンの浅慮な思いこみでしかなかつた。

多数のΖＧＭＦ・５６Ｓインパルスガンダムが並んでいた。その脇には合体や変形を助けるためと思われる頑丈そうなガントリー・クレーンが1機に1台用意されていた。ローラシア級のように物資運搬用のクレーンを無理矢理使っているものとは違う。

シンは否応なしに思い出さざるをえなかつた。ラヴクラフト級は、インパルスガンダムを運用するために開発された専用艦なのだと。要するに、外人部隊には与えられなかつた戦艦である。この艦がなにからこそシンたちは苦しめられ、その艦がいてくれたからこそシンとルナマリアは救われた。

何とも皮肉ではないだろうか。同じはずのインパルスさえ、正規軍のものの方が立派なものに思えてならない。見比べてやろうかと自機を探していた時、例の機体を見つけることができた。

向き合つたインパルスの列の先にあつたのは、白いガンダムである。改めて見るとザフトが量産しているΖＧＭＦ・５６ＳインパルスガンダムともΖＧＭＦ・２３Ｓセイバー・ガンダム・・実物を見たことはないが・・とも共通点が見いだせない。まったく異質な機体だった。

「ほら、シン、あの人白いガンダムのパイロット」

ルナマリアの突然の声に前を向く。廊下から格納庫へと通じる通

路は、格納庫内をまっすぐに伸びて壁にへばりついてた。モビル・スーツの丁度胸くらいの高さの通路の先、ガンダムを眺めるよう手すりに体を預けた少女、いや、男性だろう。

その横顔は中性的で、髪は滑らかな金髪。歳のほどはシンたちと同じくらいか、少なくとも年下には見えない。赤い制服はその力のほどを証明している。そしてその実力に見合った静かな自信というものが、その顔から感じ取れた。

ルナマリアの声に気がついたのか、ザフトの赤服はこぢらへと向き直る。表情に乏しい顔は無感情というより、感情を冷たく押し殺しているかのような顔だ。シンたちが近くで止まつたタイミングで、彼は敬礼をした。

「レイ・ザ・バ렐大尉だ」

敬礼を返すルナマリア。つい反応が遅れているとルナマリアが小声で注意してきた。

「ほら、シン……」

「シン・アスカ軍曹です……」

軍学校で何度も習つてきたことなのに、なかなか敬礼は体に馴染まない。辛うじて形だけ取り繕つておくことが精一杯だった。

その理由の1つは、バ렐大尉の階級だろう。まだ10代と思える少年の階級にしては高すぎるようと思えた。シンとてまだ軍曹だ。軍学校では主席の成績を維持していたが、カリキュラムをすべて終えるまでに放り出された。そのため、赤服を与えて卒業扱い

にはされず、階級も新兵同然から始まった。

そんな反感があつたのだろう。それとも正当な抗議だろうか。バレル大尉の左の襟元には翼を模したエンブレムがあつた。間違いなく、正規兵の証である。

「どうしてですか……？」

敬礼の手が力なく落ちる。まるで、その力もひっくるめて激情に向かつてしまつたかのように、シンは自分が抑えられなくなる感覚を覚えていた。

「どうしてもつと早く助けに来てくれなかつたんですか！？ そうすればトライン艦長たちも死なずにすんだかもしれない！」

一体何のためにピカピカの制服を着て、豪華な戦艦に乗つて、本物のガンダムに乗つているんだ。

ルナ・マリアが心配そうに見ているのは気づいていたが、今は怒りが先立つ。シンが怒鳴り散らしてもバレル大尉は気味の悪さを覚えるほど冷静だった。

「こちらの到着を待たずに動いたのはこちらの判断だ」

「それもこれも、あなた方正規軍のしわ寄せじゃないですか！ これまで艦長たちがどれほど正規軍に要請を断られてきたか、あんたは知ってるのか！？」

「どうして欲しい？ まこと残念だ、このことは決して忘れはしないとも言えば満足するのか？」

何なんだ、この男は。何かが違う。まるで別世界の住民でもあるかのよう。田代の前の出来事への当事者意識が欠落している。シンのことなど相手にもしていない。

殴りかかることなく踏みどどまることができたのは、ルナマリアが強引にシンの腕を引っ張つてくれたからだ。ただ、それだけのことだった。

「ちょっと、シンー」

怒りが晴れたわけではない。それでも、ルナマリアを突き飛ばすことここまで冷静さを失っているわけではない。もちろん、冷たい静かさなら、バレル大尉にかなうはずもないが。

「艦長に顔を見せておけ。グラディス艦長なら、今は艦長室にいるはずだ」

ただそれだけだった。バレル大尉はまた手すりによりかかり、例の白いガンダムを眺めている。

「この男をどうすればいいのかわからない。すぐさま田をそらしてしまのは癪で、それでも、もう殴つてやるうとこいつ気持ちも起ららない。ルナマリアに促されたことをきっかけにして、シンは歩き始めた。つい気になつて振り向いても、バレル大尉は前を見たまま、すでにシンへの関心を失つてているようだった。

シンはこの艦の構造を知らない。ルナマリアが前を行く形は継続されると思ひきや、ルナマリアはシンの横に並んだ。

「どうしたのよ、急に……？」

「何でもない」

話してもきっとルナマリアは理解してくれない。いくな同じ外人部隊とは言つても、アブティエルとオナラブル・コーディネーターではやはり壁がある。

「でも……」

「何でもないって言つてるだろ」

お偉い方はいつも自分が正しいようなふりをして民を踏みつける。かつてシンがオープで政府に対し抱いた反感を、エリート兵士と外人部隊の関係に置き換えてしまった。このことを理解してくれる人は、恐らくここには誰もいない。

シンとルナマリアは気づいていないようであつたが、2人は思いの外格納庫の関心を集めていた。整備士も手を止めて拾われたパイロットの様子を眺めている。シンがバレル隊長に食つてかかった時も、パイロットの何人かはその様子を目撃していた。

開かれたままのインパルスのコクピット・ハッチ。その縁に腰掛けるのは赤いノーマル・スーツを着た少年であつた。ヘルメットはつけていない。橙色の髪が鮮やかで、その顔にはあどけなさが強く残る。いつ閉まるかわからないコクピット・ハッチという危険な場所に座っているところからも、この少年からは老練だと経験というものは深くは感じ取れない。

「あれがアブデイエルの赤服なんだろ、ヨウラン?」

少年はシンたちが去つていった方向を眺めたまま、すぐ側に漂つてゐる別の少年へと話しかけていた。

少年の名はヴィーノ・デュプレ。話しかけられた方はヨウラン・ケントである。

ヨウランは褐色の肌をしているせいばかりではなく、表情をうかがうことはヴィーノのように簡単ではない。どちらかと言えば落ち着いている方で、軽率な様子は見られない。

「女性の方はオナラブル・コーディネーターだ。言葉は正確にな

大して変わらないだろ。そんな軽い調子で、ヴィーノは返す。その様子はやはり表情豊かで変わりやすい。

「でも大丈夫なのかな? 結局どっちもコーディネーターの出来損ないみたいなものなんだろ?」

ヴィーノがシンたちへと送る瞳には、軽い猜疑が含まれる。ヨウランはどちらかと言えば友好的な眼差しをしていた。

「人はどう生まれるかじやない。何をするかだ。あの2人だって、プラントと人類の明日のために命をかける仲間だろ?」

しかしヨウランがシンのことを理解しているのかと言えば、その限りではなかつた。

「ルナマリア・ホーク、シン・シンもまた敬礼をしました」

敬礼するルナマリアの横で、シンもまた敬礼をする。

艦長室は、広く、寝室を応接間を隔てる扉があるほどであった。ここは応接間。ローラシア級の艦長室に入ったことはあまりないため、比較こそできないが、無駄に立派な机なんて少なくとも置かれてなかつた。そんな無意味とも思える豪華な机を挟んで、バ렐大尉がグラディス艦長と呼んでいた女性が座っている。

ザフト軍において指揮官やその部隊の代表者が着る白い軍服で、同じく白い軍帽は机の上に置かれている。年齢は30代前半だろうか。厳しい眼差しの似合つ人で、シンはふと母親のことを思い出していた。母であるマユ・アスカも、同じような顔をよくした。

「楽にしてちょうだい」

事務的と日常の間のよつたな声である。不必要に堅苦しくはないが、だからと甘えが許される雰囲気はない。

シンとルナマリアは休めの姿勢へと手際よく体勢を変える。

「IJの艦の艦長を務めるタリア・グラディスです」

グラディス艦長は明らかにシンのことを見ていた。ルナマリアの紹介はすでに終えているのだろう。休めの姿勢に敬礼はあわないと、そのままの姿勢で声を上げる。

「シン・アスカであります」

「アスカ軍曹、少しは状況も飲み込めてきたものと思いますが、あなたたちの所属する母艦は撃沈され、また我々にはあなた方をどこかに降ろしている余裕はありません。よつて、あなた方にはこの艦にパイロットとして乗艦してもらうことになります。おつて正式な命令が届くことでしょう。異論はありませんね」

「はいー。」

「軍隊において他に言える台詞などない。あるとすれば、了解です、わかりました、何にしあ、上官に逆らひとはできない。」

「「」の艦のモビル・スーツ部隊隊長はレイ大尉が務めています。今後、レイ隊長の指揮下で戦つてもらいます」

グラディスク艦長は手元の資料に目を落とし、「あらを見る」とはなくなつた。これで話は終わりといふことだらうか。あのバレル大尉の指揮下に入ると言つことについ嫌な感覚を覚えた。

「グラディスク艦長、お聞かせ願いたいことがあります」

艦長はシンの方を一瞥だけしてすぐに資料へと視線を落とした。決して好意的とはいえないまでも拒否されたわけでもないらしい。ルナマリアはどこか心配そうな様子だが、想像されてるよつなことを聞くつもりはない。

「」の艦は私の見た限り単独で行動しています。その理由は作戦内容と関係しているのでしょうか？」

正直、これが質問であったのか疑わしい。特殊なガンダムに、バ
レル大尉のエンブレムを見ればこの部隊が特殊任務を帯びているこ
とは容易に想像がつく。

翼のエンブレムはフェイス、プラント最高評議会議長にのみ選任
が許可されたエリート・パイロットにのみ与えられる紋章である。
見たことは初めてだが、軍学校ではフェイスがどれほど偉いのか耳
にたこができるほど聞かされた。以前は最高評議会議員なら誰でも
選任できたそうだが、ある議員が子息を選任するという公私混同を
やらかした挙げ句、息子の部隊から離反者を出すなどの問題を生じ
たことから議長特権になつたのだそうだ。驚くべきことに、その議
長は未だに最高評議会の議席を有している。

フェイスについての話を一通り思い出せるほどにグラディス艦長
の反応は遅かつた。今度は一警さえない。

「レイ大尉はギルバート・デュランダル議長に選任されたフェイス
です。この意味がわかりますね？」

要するに、それほど重要な任務をたかがアブディエルとともに話
す謂われはないということだ。君には知る資格がない。正規軍の決
まり文句だ。

「話は以上です」

「この艦が正当な期待に応えてくれる可能性を、シンは見いだせず
にいた。」

プラント最高評議会は設立当初から変わらないことがあった。議会には必ず円卓を用い、全12市からそれぞれ1名ずつ選出された議員が平等であることを示す。そして、その輪が露骨な形で砕けていることも。

かつては地球との戦争を主張する急進派と戦争反対を謳う穏健派、そしてそのどちらにも属さない中道派の3派に別れていた。

現在ではギルバート・デュランダル議長派とそれ以外の議員とに分けられている。

ギルバート・デュランダル。ユニウス・セブン休戦条約を取りまとめたアイリーン・カナーバ暫定議長から議長の椅子を譲り受けた若い男は、完全なダーク・ホースであった。議員ではあっても必ずしも政局に有利ではない地方議員の1人でしかなかつた。そんな男が - - プラント最後の砦であるヤキン・ドゥー工防衛戦にて主要議員の多くが失脚、あるいは命を落としたとは言え - - プラント最高評議会議長の椅子を手に入れるとは誰も想像していなかつたのである。

デュランダルは絵になる男であつた。まだ30を超えたばかりのその顔は若々しく、長く伸ばされた髪型と相まって巧みな弁舌をふるう様はプラント市民の熱狂的な支持を集めめた。議長席に座る姿勢一つとっても、如何に自身をよく見せる術を知っている。自信に溢れ、理想の指導者の姿がそこにはあつた。

最高評議会の9名はデュランダル議長率いるデュランダル派である。残りの議員とて中立こそ謳いながらも迎合する気配を見せてゐる。仮に議長の政策に真っ向から異を唱える者を挙げるとすれば、それはただ一人であつた。

かつて急進派と穏健派で議会が2つに割れている際にも中道派を貫き通した偉大な臆病者は、今なお議会に残された良心であり続けた。

タッド・エルスマン議員。デュランダル議長と同じく髪が長い。しかしだけに老年にさしかかった姿に議長のような霸氣は感じられず、代わりにしなやかな強かさを感じさせた。議長が堅牢な盾ならば、エルスマン議員は柳。どちらもそう簡単に打ち伏せることができやうがない。

好対照な2人は対角線上に向かい合わせで座っていた。

「デュランダル議長、あなたは現在、危うい綱渡りの上にいる。私はそう思えてならない。戦費拡大に予備役含めた兵員の増員。それを移民や貧困層を利用する形で補っている。戦時中とは言え、これはやりすぎではないかね？」

答えたのはデュランダル議長本人ではなく、その右隣に座る別の議員であった。アリー・カシム。アイリーン・カナー・バ暫定政権において副議長を務めたこの議員は、現在も副議長の役職についている。最年少はあくまでもデュランダル議長だが、アリーも若い部類に入る。ただし、議長と違い、若さは未熟さをも含んでいるようにも思えた。

「エルスマン議員、何故おわかりにならないのです？ 現在、プラントは未曾有の危機にさらされています。綺麗言ばかりでは立ちゆかないのです」

「そう言って持ち出されたジェネシスは危うく地球を滅ぼしかけた」

ここにはエルスマン議員の2重の皮肉があった。

休戦条約以前のヤキン・ドゥー工の決戦において巨大なガンマ線照射装置であるジョネシスが地球へと発射されようとした。地球の全生命の9割を死滅させるとの予測は、プラント国内ではあまり知られていない。それどころか、地球を救つたのが実はブルー・コスモスの幹部であることは意図的に伏せられている。

そのジョネシスを極秘に開発していたのは2代前の議長、稳健派筆頭であるシーゲル・クラインであった。そしてギルバート・デュランダル議長を初めとする現在の主流派はその稳健派の流れを汲んでいるのである。

稳健派であるという事実を思い出させることは戦費を拡大させることへの、ジョネシスの存在は敵の存在を盾に正当性を主張することへの皮肉である。

アリー副議員はすぐに言葉に詰まり、助けを求めるような視線でデュランダル議長を見た。デュランダル議長は副議長の視線には応えず、ただ真っ直ぐにエルスマン議員を見ていた。

「タッド・エルスマン議員。あなたは大変素晴らしいお方だ。かつて戦地に送った息子が行方しれずになろうとも決して志を曲げようとしなかった。まさに議員の鑑のよつなお方だ」

最高評議会では息子の戦死を契機として稳健派から急進派へと転身して悲劇の議員、ヨーリ・アマルフィ議員がいた。アマルフィ議員はその後大西洋連邦へと亡命してしまった。アマルフィ議員の行動は、子を愛する父のなせる業であったのか、政治家としてある

まじき愚行であったのか、現在でも評価は定まっていない。

エルスマン議員の場合、子息・フェイスが議長特権となつたのはこの息子の選任がきっかけである。無事帰国したが、安全が確認される前から中道派としての態度を曲げようとはしなかつた。

皮肉ではないが、政治家の言葉を額面通りに受け取ることはできない。エルスマン議員は特に反応を示すことはない。

「私もそう易々と考えを変えるつもりはない。私には議長としてこの国を守る義務と責務がある。もちろん、私とて今していることすべてが正しいとは言わない。しかしだね、無限に使える予算などなければ、無尽蔵に湧き出でてくる戦力なんてものはどこにもない。どこかで何かを犠牲にすることも必要だろ。そして、それが政治というものだ。こんなこと、エルスマン議員には釈迦に説法とは思う。私とエルスマン議員の違いは、所詮どこまでの犠牲を看過できるか、その線引きの違いでしかないのではないだろうか」

議長の笑みは妖しくともこ感的でさえあつた。

「戦争は悲しいかな、一人で始めることはできても一人で終わらせることはできない。我々がどれほど平和を求めようとただ一人の悪意で戦争は起きてしまう。私はね、その火の元を早く払ってしまいたいと考えている」

「議長。あなたはそうしてブルー・コスモスへの危機感を煽り続けた。とにかくブルー・コスモスが悪いとして。だが、油が燃え盛る中にそぞと気づかず水を注ぎ続ければ類焼を招くだけではないかね？ そして足下にくすぐる火の粉から田をそらし続けている」

現在、最高評議会は2分されていた。ギルバート・デュランダル議長、そしてタッド・エルスマン議員の2人によって。

急進派、穩健派はともに筆頭を戦死という形で失っている。加え、急進派はエザリア・ジュー・ル議員が政界を引退し、コーリ・アマル・フィ議員が亡命するなど主力議員を失い事実上瓦解した。穩健派議員はギルバート・デュランダル議長のカリスマ性に引きずられる形で徐々に発言力を吸収される形で低下させていった。今、議長に真っ向から意見するのはエルスマン議員だけであり、議会はこの2人の男の対立によって運営されていた。

議長室に過度な調度品や演出の類は必要とされていない。フローリング張りの床は黒一色。執務用の机の上には必要最低限のものしか置かれておらず、応接用の向かい合わせのソファーがある程度。

そこには生活臭というものが一切なく、議長が堅持する有能なりーダーといつイメージを一切崩すことはない。

床を響かせる足音の1つにまで気を使っているのではないか。そう思われるほど整然とした歩きで、ギルバートは議長室を歩く。知らされぬ来客の存在に気づいたのは、まもなくのことであった。

ギルバートに背を向けて、桃色の髪がソファーの背もたれの向こうに見えていた。笑いを含んで、議長は来客の正体を看破する。主なき議長室にいることを誰に見咎められることなくいられる人物。それは自然と限られる。

「やあ、ラクス。來ていたのか」

わざわざ確認はしない。ソファーを回り込み、反対のソファーに座るまでギルバートは相手の顔をわざわざ見ようとは考えなかつた。向かい合つて座ることで初めて、ギルバートは相手と顔を合わせた。

誰もが認めるほど美しい少女である。その容貌の美しさはさることながら、柔らかくも力強い瞳は大層魅力的であつた。人としての強さを持ちながら、それでいて男に守つてあげたいと思わせる、そんな一面性がほどよく共生している。

この少女を、ギルバートはラクスと呼んだ。

ラクス・クライン。かつての議長にして穏健派筆頭であったシーゲル・クラインの愛娘にして現在は自らも首都アブリリウス市選出の議員を務めている。

単なる議員の一人でしかないにも関わらず、議長を前にするその態度に物怖じした様子はない。強がりでないことを示すように、その微笑みはあくまでも自然である。

「如何でした、議会の方は？」

「エルスマン議員は人として尊敬できる人物だ。ただ、少々潔癖性がすぎるね」

ラクスはすぐに話題を変える。聞きたかったのは議会の内容ではなく、ギルバート議長がどのような人物にどのような印象を抱いているのか。ただそれを確かめたいだけであるかのように。

「どうして神は人に余りあるほどの富を与えてはくれなかつたので

「それならそれで、きっと人はさらなる富を求めて争うことになる。人々が際限なくその欲望を解放し続ける限り、争いは決してなくなるはずないよ」

ギルバートもまた、ラクスの話に応じる。

「人は皆平等であることを求める。問題は、誰と平等にありたいかという問いに対し、自分よりも上の人と平等でありたいと願うのです。世界のあり方を理解せず、学ぶこともできず、ただよりよい世界を、よりよい生活を求め続ける。それが人にとっての不幸なのでしょう」

「世界とはこういうものだ。そのことを、我々はみんなに教えてあげなければならない」

それはプラント最高評議会会議とよく似た構図であつたのかもしない。発言力を持つ議員が対面して座り、他から雑音が漏れ聞こえることはない。唯一違いを上げるとするなら、エルスマン議員ほど意見に対立は見られない。

「それが、わたくしたちのお父様の願いです」

「私の願いもある。君はそう考へて、田舎議員であつた私を議長にまで引き上げてくれたんだろ?」

「」のプラントはそのための礎とならなければなりません

「私はね、ラクス。君たちこそがそんな新世界を導く天使だと考へ

てこるよ

「この場にいるのはプラント最高評議会議長とただの議員が1人。2人がどのような顔で、どのような意図で言葉を交わしたのかを知る人物はだれ1人としていない。

ここには議長室。プラントの最高意思決定を担う者がいるべき場所である。

ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァでシンに与えられたのは個室であった。士官待遇というよりも、隔離されたような感覚で、シンは椅子に座っていた。ベッドが大半を占めるような狭い部屋が、しかしシンには唯一落ち着くことのできる部屋になっている。

どちらかと言えば社交的なルナマリアとは違つて、シンは正規兵と顔を合わされることさえ苦痛に感じていた。そのため必要な時以外はどうしても部屋に籠もりがちで、ルナマリアが訪ねてくる時以外誰とも口をきくことえない。

よつて訪ねてくるのはルナマリア。ルナマリアが訪ねてくる時は決まってシンが椅子、ルナマリアがベッドに腰掛けて簡単な話をすむ。この構図は、ローラシア級MS搭載艦バーナードの頃と何も変わっていない。

「何だが、よくわからないことになつたな

外人部隊として危険な戦場をたらい回しにされ、命の危機に瀕したと思えばいつの間にかラヴクラフト級なんて新鋭艦に乗っている。

ただそれで、何が変わるとは思えない。外人部隊の扱いも、仲間が命を落としたという事実も。

ルナマリアとて部屋の外では明るく振る舞つているようだが、この部屋では心なしか表情が沈んでいる。

「仲間を失う時つて、嫌なぐらじ呆氣ないから……」

仲間との死別はいくども経験してきたことである。その度思い知ることは、自分には何もできないこと、死神はドアをノックなどしてくれないとのこと。いつも突然で、思いがけない。そして残されるのは空虚な感覚。

「俺たち、これからどうなるんだ？」

気分を沈めたいわけではないが、自然と声は暗くなる。椅子に寄りかかって天井を見上げてみても、それで気分が上向くことはない。

「ねえ、シンって、家族はいる？」

「どうしたんだよ、急に？」

首を水平に戻しながら疑問が口を出た。これまで一度も家族のことについて話したことなんてなかつた。

「何となく。私にはお父さんにお母さん、それに妹がいるの。こんな戦争なんてなかつたら、私は今頃どうしてるんだろう。普通に学校に行つて恋人でも作つて、妹に自慢でもしてるのかな？」

ルナマリアに恋人がいたとしたら、それはどんな男だろう。勝手

にどこからくでもないような男ではないかと想像してしまつ。別にルナマリアの男を見る目がないとは言わないが、想像は勝手にそんな人物像を結んだ。

シンは自分の家族を思い出してから、戦争に関わらない自分というものを思い描いてみた。

家族は母一人に子一人。戦争のない自分は、どうしても想像できない。

「俺には母さんがいたよ。でも、4年前戦争で死んだ」

「もしかして、悪いこと聞いた?」

「んなところで声を潜めても仕方がないだろ?」、ルナマリアは口元に手を当てる。

「別に。ただ、戦争を意識してた時間が長すぎて、戦争がない自分を想像できないんだ」

もうあれから4年。人生の実に25%を戦争に関わって生きてきたことになる。さらにこの内の半分が軍学校なり、軍隊なりで直接戦争と関わってきた時間である。戦争に参加していない自分がいたとしたら、果たして何をしているのかどうしてもわからない。

あるいは戦争が終わってくれるとしたら、そんなことを考える余裕もできるのではないだろうか。

「ルナ。絶対に死ぬなよ」

「んなところで死んでほしくない。そんな気持ちが素直に出た。

ルナマリアは呆れたように笑う。

「馬鹿。何縁起でもないこと言つてんのよ」

一応、それもそうだと笑いながら答えておく。どれほど努力したつもりでも、心からの笑いというものは取り繕いようがない。どこか乾いたものになりがちで、そして持続しない。シンの顔はすぐには表情に乏しくなる。

悪い奴から死んでいつて、いい人が助かる。そんな綺麗な戦場なんて、どこにもなかつた。

真剣な表情で向き合う2人。休憩室のテーブルを挟んでアウル・ニーダとステイニング・オークレーが睨み合つ。

アウルは真剣であった。あどけない表情を、それでも賢明に凄ませてその手には5枚のトランプが扇状に広げられている。その視線は反対側に座るステイニングと手元のカードとを行き来する。ステイニングはトランプを片手で広げ、椅子から半身を乗り出すほどの余裕を見せている。

相手の表情を読みとろうとするアウル。目元には緊張が現れるが、口元からは笑みがこぼれた。カードを相手に見えるように倒す。スリーカードとワンペア。ポーカーで言つところのフルハウスが完成していた。

「フルハウスだ。俺の勝ちだな」

フルハウスは極めて強力な役とは言いがたいが、作り易さとの兼ね合いから安定した役である。アウルは勝利の自信を深めた。

ステイングはあくまでも余裕のある様子を崩さず、もつたいぶつた様子でカードを見せる。そこにはスリーカードと一枚のジヨーカー！。

「残念だが、俺はフォーカードだ」

すべてのカードの代わりとして使うことができるジヨーカーが使用されているとは言え、同じ数字のカードを4枚揃えるフォーカードはなかなか作ることのできない役である。フルハウスよりも難度が高く、無論強力である。

「5連敗かよ！」

テーブルに放り捨てられるフルハウス。アウルは力なく背もたれに寄りかかった。5連続の敗退である。ここでやめてしまうか、それともつきが戻るまで耐えるか、そんな岐路にアウルは立たされた。首を背もたれに乗せるようにして頭を逆さまに後ろを向く。すると、髪の毛の塊が浮かんでいた。

瞬きを一度。すると、それがヒメノカリス・ホテルであるとわかる。着ているドレスにしろ髪型にしろ、モビル・スーツの操縦どころか無重力空間で生活すること自体適していないのだ。完全にヒメノカリスの父の趣味である。

「何してるの？」

テープルのそばにまで来たヒメノカリスが一言。上体を前に戻す手間があるアウルに代わり、ステイニングが片手を振りながら対応する。

「ポーカー。姉貴もやる?」

その手を、ヒメノカリスは素早い動きで掴みとつた。すると、その袖口から数枚のトランプが飛び出し、中空を漂い始めた。アウルが目を丸くする。

「ポーカーって、袖にカードを入れて行うもの?」

姉と呼ぶヒメノカリスに手を掴まれたまま、ステイニングはぱつの悪そうに笑う。尖った印象を与えるステイニングだが、ヒメノカリスの前では丸い表情を見せることがある。

反対に、アウルの雰囲気が棘を持つ。

「全部イカサマかよ!」

「おい、ちょっと待て。確かに俺はイカサマをしようとしたことは認めてやる。だが、今初めてしようとしただけだ。それとも、これまでもイカサマだったって証拠もあるのか?」

あくまでも既遂ではなく未遂と主張するステイニング。すでにヒメノカリスの手は掴んでいない。ステイニングは余裕な様子で散らばったトランプを集めては手慣れた様子できり始める。

アウルは5連敗をイカサマをしていたからだと証明することがで

きない。

「死んだ親父が言つてたぜ。イカサマはばれなきやイカサマじやないつてな」

「俺の母さんは誠実こそ美德だつて言つてたんだよー。」

やつてられるか。アウルはそう言い残して席を立つ。残されたステイングはトランプを片づけ終えた。アウルを怒らせたことに特に感慨はないらしい。同僚が離れていった方向に目をやるよりも、ヒメノカリスが歩きだそうとした方に関心は向けられていた。

「姉貴はどいへ？」

「格納庫」

簡潔な姉らしく一言で。それでも、無愛想なのではなくて立ち止まって話に応じてくれるところも、ステイングは姉らしいと考えていた。

「俺も行く」

トランプをテーブルの上に放置してからステイングは席を立つ。ヒメノカリスはすでに歩きだしていたが、別に拒否されたわけではない。その証拠に、適度に追いつきやすい速度で移動していく。休憩室を離れ、長い通路を抜ける。するとステイングはちょうど追いついた頃、2人は格納庫の扉をぐぐり抜けた。まさか計算していたわけではないだろうが。

ヒメノカリスが何故格納庫に用があるのか。それは訪ねてみるま

でもなかつた。確かに足取り - - 無重力であるため語弊があるが -
- で目指したのは、黄金のガンダムの前であつた。

じうしてみるとその大きさがよくわかる。通常のモビル・スーツ
の1・5倍の大きさは伊達ではない。何より洗練されたデザインは
高尚で、ステイニングのGAT-X133イクシードガンダム・バ
スター・カスタムのように武器を全身に担いだような無骨な姿とは違う。
一言で言うなら格好がいい。

「これ、ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムだろ。ゼフィラ
ンサス・ズールが3人のマルタ・アズラエルのために開発したゼフ
ィランサス・ナンバーズと呼ばれる機体群、その初号機、だろ」

「そう。お父様の機体」

ブルー・コスマスの代表を務めた3人はマルタ・アズラエルと名
乗つた。3人のマルタ・アズラエルがいたのである。その内の1人、
エインセル・ハンターこそがヒメノカリスの養父であり、フォイエ
リヒガンダムの正式なパイロットである。

今エインセルがこの場にいない理由をヒメノカリスは知つてゐる。
ついステイニングの横顔を眺めたのは、どうして年端もいかない子ど
もが戦場にいなければならないのか。その責任の一端はヒメノカリ
スの父であるエインセルにある。

「ステイニングもアウルもステラも、本来は戦闘要員じゃない。戦う
ことは怖くない?」

戦うということは、あくまでも3人の持つ特殊な能力からの派生
的な作業にすぎない。戦うためにはいるのではなくて、戦うこともで

きるとする方が正しい。

「別に。」コーディネーターもと戦えるなら俺は何だつていいぞ」

ステイニングはフォイエリヒを見上げたまま答えた。ヒメノカリスも父の機体へとその視線を戻した。

「あなたたちはお父様とてもよく似た感じがする」

ヒメノカリスはその訳を、父とステイニングたちに共通する能力のためだと考えた。

現在格納庫は閑散としている。整備士の姿も疎らであり、少なくともステイニングたちの周りに人影はない。そのためであろうか。ステイニングが見せた顔はアウルほども人なつこいものであった。

「ならさ、俺にもいつかこの機体使わせてくれよ！」

口元を少し持ち上げる。そんなささやかな笑みを見せたヒメノカリスは、それでもきつぱりと弟の頼みを拒絶した。

「それは駄目。お父様の機体を使っていいのは私だけだから」

部隊長として戦術面からの判断だと兵器を玩具にしていいとう判断ではない。純粋に私欲と個人的事情のみで依頼を拒否されたステイニングは、呆れたような笑みを見せた。

「何だよそれ」

「フォイエリヒなどどうでもいい。所詮あれは旧式のゼフィランサス・ナンバーズに過ぎない。ゲルテンリッターではないのだからな」

手すりに体を預けながら、しかしレイの周りに人影の姿はない。レイ・ザ・バレルの視線は己の愛機である純白のガンダムを捉えたまま、そしてその口ぶりは決して独り言ではないとの実感を伴う。

レイは誰もいないにも関わらず、見えない誰かに話しかけていた。返事はない。姿えない。そんな誰かの様子に、レイは視線を冷たく鋭く尖らせる。

「やつだ。それでいい。お前はただ俺の言つとおりにしていればいい

神は森羅万象あまねくすべてをお創りになられた。病も災いも嘆きと悲しみもそのすべて。でも、悪いのは神ではありません。そんな災いを人へと振りかける悪魔のせいです。悪いのはみな悪魔です。すべてみな悪魔のせいです。

神は悪くはありません。悪いのは悪魔です。

私たちは何も悪くありません。悪いのは私たちに悪意を向けてくる悪魔です。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
nEi n b r e c h e r s~

「神の罰」

フィンブル。この悲劇は決して誰のせいでもありません、そうですよね。

第5話「神の雪」

大西洋連邦首都、ワシントンD.C.。この都市に地球最大国家の政治の中心は置かれている。大統領制を採用するこの国では記者会見の場で大統領の姿を見かけることは珍しいことではない。記者たちも慣れたもので大統領の姿を前にして今更体を固くすることもない。

しかし、今回ばかりは例外であった。

後ろに国旗が掲げられた会見台にはジョゼフ・コーブランド大統領の姿があった。薄い色をしたスーツのごく普通の中年男性、それがまず初めの印象であろう。会見台の前に並ぶ記者たちの視線を一身に集めながらも氣後れした態度は見せない。大統領は、あくまで大統領であつた。

「昨日の15時37分、小惑星が地球への衝突軌道に入っていることが確認されました。小惑星の名称はファインブルとなりました。直径は約7km。衝突予測日時は約10日後であると予想されています」

これは映画ではない。堅物で知られるコーブランド大統領にしては珍しい話しが出しあつた。

そう、冗談でもなければ映画でもない。隕石が地球に衝突しようとしている事実は紛れもない現実であった。

会見場に詰めかけた記者たちから戸惑いの声が漏れる。コーブランド大統領はあくまでも冷静に事実を並べる。

「現在政府では被害を受けると思われる地点への避難命令を発令しております、迎撃準備を行つておる最中であります」

「どのような地区にどのような対策が講じられているのか。また、どのように軍が動いているのかが一通り並べられた後、記者による質問が許可された。並ぶ記者の中から手が上がる。コーフラント大統領はその内の一人を手で指し示した。

立ち上がったのは禿げ上がった頭髪の代わりに豊かな顎鬚を蓄えた壮年の男性である。

「Hブリティ誌のルクス・クーラーです。今まで発表が遅れた理由をお聞かせください」

「まず、IJの小惑星の由来がはつきりしていないこと。また、その軌道がプラント領空をかすめると予測されることから、地球の観測では発見が遅れてしまったことが原因と考えられます」

突然現れ、そしてプラント政府を刺激しないようとの配慮から監視の緩い地点を小惑星が通過しているために発見が遅れた。戦争の弊害はこのようないろにまで及んでいた。

続いて質問を許可されたのは髪を後ろに書き上げた若い男性である。とは言えスーツは上物、やり手の記者を思わせる。

「リードバイ通信社のアダム・ヴァニコアと申します。被害ほどの程度と予測されていますか？」

「現在、試算中です」

食い下がろうとするヴァンコア記者に対して「オープランド大統領は算出中とだけ繰り返す。根負けしたのは記者の方であった。

次は若い男性である。ここにいる以上記者であることは間違いないのだろうが、メモをとることもなく、またジャケットを羽織った姿はスーツを着込んだ周りの記者とは明らかに違う雰囲気を醸し出していた。どこか潑刺と、堅苦しい雰囲気に包まれる職業記者とは違っている。

「モーニングサン誌のジエス・リブルです。現在、どのような対策を立てられているのでしょうか？」

「出撃可能な戦艦を動員し、破碎作業を開始する予定です」

「プラントとの連携はどうなっていますか？」

「現在、協議を打診しております」

「もし協力が得られない場合、衛星軌道内で破碎活動を行うということも考えられますか？」

矢継ぎ早に質問を繰り返すジエスに対し、コーブランド大統領は表情こそ変えないものの疎ましさを覚え始めたらしい。

「失礼ですが、質問は1人1つまでと区切らせていただきます」

ジエスの声を無視する形で大統領は次の質問者を指名する。新たな質問者が起立したことで、ジエスも座らざるを得ない。まだ若いが故か、口元を歪ませて残念さを隠そとしない。

その隣に座るのは少女であった。桃色の髪を首の後ろで束ね、スカートは長くあまり肌を露出させないその姿はあか抜けていない様子を示している。瞬きを繰り返すその顔は素直に驚きを表現してジエスを見ていた。

「いいんですか、ジエスさん？ モーニングサンの記者なんて言つても。私たち、ただの外注ですよね」

「これくらいしないと会見場にだつて入れてもらえないよ。でも、これから忙しくなりそうだ。これからいつでも出られるようにしていてくれないかい、アイリス」

現在、地球は隕石衝突の危機に瀕している。その情報はダーレス級MS運用空母ガーティ・ルーにも届けられた。誰もが地球が一夜にして危機的状況に置かれてしまったことを知らされたのである。

ステイリング・オークレーもその報告を聞いていた。

普段であれば同じ仲間であるアウル・ニーダかステラ・ルーシェとともにいるのだが、現在はただ一人である。そして、普段の尖った雰囲気はなりを潜め、落ち着きなく通路を漂つては、その瞳は震えながらある人物を探していた。

狭い船内である。探すことが難しい訳ではない。何より、目的の相手は目立つ姿をしている。

桃色の塊が動いている姿は長い通路の先に確認できた。

ヒメノカリス・ホテルの姿を見つけたステイニングは明らかに安堵の表情を見せると、すぐに駆け寄りうとした。

ステイニングに気づくには遠い距離でありながら、ヒメノカリスは誰かに気づいたように首を回した。ステイニングに気づいた訳では、やはりなかつた。

脇の通路からイアン・リー艦長が飛び出してきた時、ステイニングはつい近くの通路へと身を隠した。イアン艦長も、そしてヒメノカリスもステイニングのことには気づいた様子はない。

そうして2人は話をしだした。何か報告があるにしてもどうして艦長がわざわざ伝えにくるのだろう。そんな疑問は反感へとすり替わり、ステイニングを苛立たせた。

2人が話している様子を盗み見ながら、ステイニングはその場を離れることを決めた。

通路にて、イアン・リーは1つの幸運に恵まれていた。普段少女3人の誰かが一緒にいることでなかなか話ができるないヒメノカリス・ホテル大尉が、今日に限つて1人でいたのだ。

相変わらず、桃色の髪の毛が塊となつて浮かんでいるようである。

無重力の中、音もなく近づこうともヒメノカリス大尉はこちらに気づいたようだ。髪の毛が動き、コーディネーターらしいというべきか、澄んだ色を持つ青い瞳がイアンを見る。

「ヒメノカリス大尉。命令が下りました。我々は破碎作業に参加します」

「私たちまで？」

「我々は密命を帯びています。しかし、地球の大事に動かない船隊があるとザフトに気取られることを、上層部としても危惧したものと」

破碎作業に参加できながらしない艦が存在することをザフトに気取られる危険だけは避けなければならない。まるで艦隊がふるいにかけられているような気味の悪いさがあった。

だが、小惑星の落下は単なる偶然にすぎない。由来不明、プラント宇宙域を通り抜け、そして地球へと落ちてくる。出来すぎと言えば出来すぎの事件ではあるのだが。

「わかった

ヒメノカリス大尉は頷くことはなく、しかし了承する。

「今しばらく、彼らの力を借りることになります」

ステイニングたち3人のことである。彼らも言っていたが、あの3人は元々正規の軍人ではない。シミュレーター訓練では非常に好成績を記録したが、実戦経験には乏しい。そんな子どもたちを2度に渡つて戦場に駆り出したことに、ヒメノカリス大尉は相変わらず、表情乏しく落ち着いた様子を変えることはない。

「準備を怠らないように言つておく」

その理由をイアンは知っていた。ヒメノカリス・ホテルはかつてブルー・コスモスの代表を務めたエインセル・ハンターの養女であり、この部隊はそのエインセル・ハンターの意向によつて創設された。ヒメノカリスは養父の意志を優先しているのだと。

地球では落着が予想される東アジアを中心に住民の避難が進められていた。津波の発生が懸念される海岸線からは人々が離れ、シェルターへと避難する。

雨降り仕切る中、昼間だというのに薄暗い。人々は最低限の荷物を背負いレインコートを日深に被りながら列をなす。そのすぐ横では過密渋滞で立ち往生した車が並び、混乱をさけるために派遣された兵士の声が雨音に混ざり辛うじて聞き取れる。

そんな人々の流れと逆行する人の姿があつた。ただし、正確には人ではない。人の形をした巨人、モビル・スーツたちが地響きを響かせながら避難民とすれ違う。

GAT-01A1ストライクダガーと呼ばれる機体である。GAT-01デュエルダガー同様GATシリーズと呼ばれるガンダムの量産機に当たるこの機体は簡素ながらもオリジナルであるGAT-X105ストライクガンダムに近い明確に凹凸を持つ装甲が採用されている。その背には休戦条約以後に開発されたジェット・ストライカーハードランプを換装することで機体性能を変更するのはストライクガンダムから受け継がれた性質である--を装備し、大型の水平翼が左右へと飛び出していた。右手にラ

イフル、左手にはシールドが保持される。

避難民は見上げていた。振動が届かないほど遠くを歩くモビル・スーツは、それでもはつきりと武装している様子が見て取れる。避難誘導だと、災害救助を任務としていることは誰の目にも明らかであった。

混乱に乘じた暴徒の制圧。あるいは、ザフト地上軍との戦闘を視野に入れているのかもしれない。

また大規模戦争が始まるのだろうか。

人々の見上げる顔に、雨はまだ降りしきる。

衛生軌道を周回中であつた艦船が隕石の予想航路へと移動を開始した。

ダーレス級MS運用母艦を中心とした艦隊が、それでも最大船速とはほど遠い速度で運行を続けていた。

現在、地球連合軍は明確な目標地点を絞り切れていない。本来、地球から遠い地点で迎撃を始める事ができるのが理想である。しかし、地球から最も遠いラグラントジュー・ポイント - - 月の裏側にある - - にはプラントが存在し、軍を進める範囲には限界がある。

大西洋連邦のジョセフ・コーパランド大統領の言葉通り、政府はプラントとの協議が進められている。一時的に軍をプラント宇宙域にまで進めるることは許されないだろうか。さらに言うなら一時的にコ

ニウス・セブン条約を凍結し、核ミサイルの使用が許可されないかと打診しているのである。

艦隊の歩みが遅い理由は二つにある。プラント宇宙にまで移動が許されないのであれば時間的猶予は十分すぎる。月と地球の間、小惑星が衛星軌道内に入るまでの約30万kmの間に迎撃しなければならない。

艦内ではモビル・スーツが整備を終えている。ストライクダガーの他、ガンダム・タイプが積載量ギリギリまで搭載されている。艦体に横付けされる形で左右2機ずつメテオ・ブレイカーの名を持つ小惑星破碎用の大型重機が抱えられている。モビル・スーツの倍の高さを持つ3脚の形をしており、軸に円柱状のドリルが取り付けられている。

地球軍はこのメテオ・ブレイカーによつて小惑星を破碎、大気圏突入の際の熱で破壊されてしまうほど細かく碎いてしまう作戦を想定していた。

政治面においても様々な対策が講じられている最中であった。

プラント最高評議会が緊急召集され、ザフト軍の動向が今まさに決定されようとしていた。

ギルバート・デュランダル率いる議長派とも呼ぶべき一派は形式的な議論を続けていた。

「地球軍がプラント宇宙への進軍を求めるのはわからないではない

ません。しかし……」

「だがそのようなことを許せば……」

それぞれ各市から選出された議員であり、そしてプラント最高評議会の議席が円卓を構成しているように対等な権限を与えられている。しかし、それぞれの議員はデュランダル議長の様子をうかがうばかりで建設的な議論を成しているとは言い難い。

現在、議題は2つに集約されている。

地球軍のプラント周辺宙域までの進軍を許可するか否か。許可すれば小惑星迎撃にあてることができる時間が増えることになる。ただし、地球軍が本国周辺にまで進むことを快く思わない市民も多いことだろう。

ユニウス・セブン休戦条約を一時的に凍結し、核ミサイルの使用を許可するか否か。条約にはプレア・ニコルの兵器への搭載が禁じられている。それを一時的とは言え効力を停止できるとすれば、小惑星の破壊、あるいは軌道の変更に大きな力となる。

同じ派閥の議員がお飾りの議論を繰り返す様子を、ギルバート・デュランダル議長は目を閉じ、静かに聞き入っていた。議論が一段落する頃合いを見計らつて目を見開くのではなく、議長が目を開いた途端、議論が一挙にその熱を失った。

そして、風のような声が聞かる。

「熟議を重ね正しい結論を出すことも大切だろ。だが、貴重な時間を浪費することもできない。決をとろう。我々はプラント本国を

危険にさらしてまでもナチュラルの進軍を許すべきだらうか

デュランダル議長が首を回す。一通り眺めた後、その視線は正面に戻る。ただ首をなおしたのではない。正面に座るタッド・エルスマン議員を見たのだ。

「」の中で唯一議長に反対する議員がいるとすればそれたエルスマン議員、ただ1人に戻きた。

「勘違いではないでほしい。我々は地球がどうなつてもいいと言っているのではない。破碎作業には軍を参加させるべきだらうとも考えている」

それは議会全体へと向けられた言葉であるようでありながら、しかしその眼差しはエルスマン議員ただ1人へと向けられている。

エルスマン議員は椅子に深々と腰掛けたまま、その視線を重複に受け止めていた。

議会は2人の議員の対立に支配されている。

「しかし核を使わせてはならないことは明白だ。違つだらうか？」

他10名の議員などものの数にはいることはない。デュランダルとエルスマン。2人の間に流れる沈黙は、司会役を買ってでたアリ・カシム議員の言葉によつて中断させられる。

「では、地球連合の申し出を拒否することに賛成される方は起立願います」

次々と立ち上がる議員たち。票決は、たとえ1・2名と少人数とは言え、集計をとるまでもなかつた。

議長を含め議員は「ことじ」とく立ち上がり、ただ1人が座っているだけである。デュランダル議長は反対を表明した議員を探すまでもなかつた。真正面に座るタッド・エルスマン議員の姿があつたからだ。

「賛成11。反対1」

カシム議員が形式上、票決の結果を伝える。

ただ1人異を唱えながら、エルスマン議員は自らの行動に何ら負い目を感じてなどいない。唇を堅く結び、しかし敵意を露わにすることもない。ただ目の前の事実を平然と受け入れていた。

デュランダル議長はさも演説でもするかのような手振りをエルスマン議員へと示す。

「これでいい。これでいいんだよ。考えてもほしい。ナチュラルは……」

「ナチュラルは地球を救うことやめてプラントを攻撃してくるかもしれない。緊急事態から核の封印を解く前例を作つてしまえば、次はプラントとの戦争を緊急事態と勝手に解釈されてしまうかもしない」

ここは最高評議会ではない。議長室である。応接間を兼ねる簡素

な部屋に、少女の清らかな声が染み込んだ。

その言葉は議長が議会の場で発した言葉をいち早くなぞるものであつた。

少女は主なきはずの椅子に座る。桃色の髪と青い瞳。かつては歌姫としてプラントの民から賞賛を集めた少女の名はラクス、ラクス・クライン。

主なき議長の椅子に座り、机上に映し出されたディスプレイを通して会議の様子を見守っている。その顔は普段と変わらず、上品で、人々に安心感を与える笑顔で包まれている。その日は、票決に唯一反対票を投じた議員の顔を眺めていた。

「堪えてください、エルスマン様。あなたの苦悩と犠牲は、人々の未来を守る礎となるのですから」

今度、ヒメノカリスの姿は格納庫にあつた。アウルとステラ、この2人を前に何か話をしている。

その様子を、ティングは格納庫のキャット・ウォークの上から眺めているしかなかつた。手すりを両手で掴み、体重を預けるように下を覗き込む様子は、普段のティングらしさといつものが感じられない。

格納庫の床、3人はΖΖ-X300AAフォイエリヒガンダムの巨体を前に何やら深刻そうな様子である。フォイエリヒが直接関係しているのではない。小惑星のことに決まつていて。

ステイングはヒメノカリスとも、アウルともステラとも気心した仲である。

どうしても話に混ざるつもりにはなれない。そして、そのまま時間だけがすぎていく。

「なあ、姉ちゃん、隕石が地球に落ちるって本当か?」

「私たちも戦う?」

慌ただしい格納庫の中、ヒメノカリスは手元の資料に目を落しながら2人の弟と妹の話し相手をしていた。資料には合流部隊からの補給物資の一覧が記載されている。

モビル・スーツの補充はない。

すなわち、まだアウルとステラには戦つてもらわなくてはならないことを意味している。

資料から目を離し、ヒメノカリスの青い瞳は少年少女を見る。

「すでに破碎用のメテオ・ブレイカーの準備は始まってる。簡単な使い方くらいは目を通しておいて」

メテオ・ブレイカーはガンダム・タイプだけで4機がひしめく格納庫に置いておくことのできる大きさではないが、すでに補給物資としてガーティ・ルーの船側に取り付け作業が開始されているはず

である。メテオ・ブレイカーは自走式ではないため、モビル・スツで運ぶ必要がある。

地球連合とプラント政府の交渉は破綻したと聞かされている。作業にあてられる時間的猶予は決して潤沢ではない。

ほんの紙切れ一枚に書かれた作業マニュアルを手渡すと、アウルとステラは額をつき合わせて覗き込む。

「スティングは？」

姿を見かけない三人目の弟の姿を探そうとして、ヒメノカリスが首を回そうとする。そのタイミングにあわせたように声をかけてきた少女がいた。ヒメノカリスとともによく似た声が、ヒメノカリスのことを呼ぶ。

「お久しぶり、かしら。ヒメノカリス姉さん」

首は自然と声のした方向へと吸い寄せられた。格納庫にひしめく多くの人もまた、この光景に目を奪っていた。桃と黒、白と赤。異なる髪と色をして、それでも同じ顔をした少女が互いに向き合っている光景を。

黒い髪にロールを巻いて、身につける衣服は赤。しかし、それだけである。ヒメノカリスと少女との違いは、着ているのは色違いでありながら、デザインは同じドレス。その顔さえ、ヒメノカリスと同じである。違いは、色と髪型。敢えて付け加えるならば表情は相手の少女の方が豊かと言えた。

少女の後ろには大西洋連邦軍の制服を身につけた少年がつき従う。

そろそろ20を超えると思われる年齢に似合わず、表情が幼い。少年はどこかあどけないステラと似た面があった。そのためではないのだろうが、少女に一番早く反応したのはステラであった。

まるで子犬がじゃれるような様子で、少女へと駆け寄った。無重力であることを忘れ、つい浮き上がってしまった体を少女に抱き止めてもらわなければならぬほどである。

「ニーレンベルギア！」

明らかに嬉しそうなステラの頭を撫でる少女の名はニーレンベルギア・ノベンバー。ヒメノカリスの2つ下の妹に当たる。だが同い年であり、その顔は驚くほどよく似ていた。

「ステラはとても元気そうね」「げ！」

資料を眺め続けていたアウルは、ステラの嬉々とした声によらずやく顔を上げた。その目がニーレンベルギアを捉えるなり、まるで苦いものでも噛んだかのように口が歪む。

「げ！」

「げって何かしら、アウル？」

ニーレンベルギアが寒気をもたらす微笑みを向けると、アウルはアウルらしく大袈裟に警戒を露わにする。

「だつてよ、ニーレンベルギアの出すものみんなまずいもんばかりだつたから」

「人を料理下手みたいに言わないの」

「……」で言つましいものは薬品の類であつて、手料理のことを意味してはいない。そう、とりあえず、二ーレンベルギアが料理できないことを示してはいない。

ステラは二ーレンベルギアに抱きついたまま、その顔を上げた。

「料理、得意なの？」

何故か、二ーレンベルギアから返事はない。そしてステラと田を含ませようともしない。気のせいか、こめかみには悪い汗が光つているようである。

皆の疑惑が確信に変わりつつあつた頃、二ーレンベルギアの後ろにいた少年が明るいといつよりも幼い微笑みを見せながら言った。

「二ーレンベルギアは、サラダが得意だよ」

切つて盛りつけるだけじゃないか。その場の誰もが言外に語つていた。二ーレンベルギア本人でさえ表情を固めていた。少年だけが事態を理解できないように微笑んでいた。

「フォローありがとう、サイ」

皮肉ではないにしろ、お礼とも言い難い。しかしサイと呼ばれた少年はそこに気づくことはない。年齢に不釣り合いといつよりも、何らかの傷害の結果であると思わせる。その証拠に、サイの、サイ・アーガイルの額には鼻に及ぶほどの大きな傷跡があつた。

その傷の訳をヒメノカリスは知っている。4年前の戦闘で、サイは瀕死の重傷を負った。その命を救つたのが二ーレンベルギアの人體改造の技術である。サイはその技術の実験台として命を救われ、そして副作用からくる記憶障害から心を壊してしまった。

もうサイは元のサイ・アーガイルに戻ることはできない。

ヒメノカリスの瞳は、そんなサイを眺めた後、瞬きをはさんで二ーレンベルギアへと向けられる。

「こんな時に何？」

氣を取り直すよう二ーレンベルギアは笑う。

「ちょっとお話があつて。私、プラントに帰ることにしたわ」

二ーレンベルギアとヒメノカリス。2人は姉妹であり、しかし同じ場所で生まれ育つた姉妹とは思えないほど面識に乏しい。立ち話をするつもりにはなれず、休憩室に移つても、二ーレンベルギアは一体何から話していいものかわからないでいた。

話したいことは決まっている。ただ、物事には順序というものが
ある。

二ーレンベルギアとヒメノカリスはテーブルに座り、離れたソファーではサイたちがトランプに興じていた。サイはそろそろ20にもなる年齢だが、心は幼いくらいでステラやアウルとは気が合うらしい。ヒメノカリスも相変わらずえいしい表情ながらも3人の子ども

たちの様子を眺めている。

まるで子どもの遊んでいる様子を眺めながらおしゃべりをする母親のようだと考えるのは、少々所帯じみすぎている。それでも、二レンベルギアにとつて3人は子どものようなものである。見ているだけで気分が落ち着いてくることも事実であった。

ヒメノカリスはどのような気持ちで子どもたちを見ているのだろう。そう横顔を盗み見ると、青い瞳が器用に動いて二レンベルギアを捉える。

「話つて？」

「この人を相手に取り繕うことは余計なだけかもしれない。ため息をつきながら、それでもつい笑つてしまつ。

「私、プラントに戻ることにした。元々研究のために大西洋連邦に籍を置かせてもらつてただけだし、それに、私の技術は批判も大きくて。やっぱり、人体改造なんてするものじゃないわ」

ブーステッドマン。それがかつて二レンベルギアが研究していた技術の名前である。志願者を中心に薬物や外科手術によって肉体を強化し優れた兵士を生産する技術。ただしそれは、人に不自然に手を加えることの危険性に警鐘を鳴らすように副作用が続発し、その結果がサイのような重度の記憶障害に始まる様々な悲劇を生じた。

「私のしたことって何だつたのかしら？ 人の枠を壊してしまったら、それは人以外の何か。それなら機械を使った方がよほど優秀。卵を暖めて孵ることを早めることはできても、茹でてしまつたら目玉焼きにしかならないでしょ」

記憶を失っていてもサイは楽しそうに見える。アウルとトランプ
「ポーカーだろうか」をしてている様子は、見ていて微笑ましい。

「ポーカーって、手には5枚で、袖には何枚持つの？」

「ステイニングが前してた。それ、イカサマ」

どうやら、袖口にカードを隠し持つていたことをサイに見つけられてしまったようだ。アウルがばつが悪そうにカードを袖から取り出す。慣れないことはするものではない。このことは二ーレンベリギアにも当てはまつた。

「二ーレンベルギア、卵を茹でたらぬで卵」

料理のたとえ話なんてするべきではなかつた。ヒメノカリスは普段通りに表情に乏しく、それがかえつて皮肉がきいている。これでヒメノカリスが料理上手なんてことであればいたたまれない。機会があれば一品作つてもらおうか。それも、当分先の話になるのだが。

「ところでね、アウルやステラたちの名前だけど、エクステンデッドなんてどうかしら？ あくまで人としての枠を壊さないでその枠を拡張した、なんて意味合いなんだけど」

「名前なんて関係ない」

「そうね。ヒメノカリス姉さんはあの子たちのこと、弟や妹のようになにかわいがつてくれるみたいだし。私も、安心してプラントに帰ることができる」

ヒメノカリスは表情にえしくなかなか気持ちを読み解くことができない。それでも先程から二ーレンベルギアから田をそらそろしないのは興味の現れだらうか。

「私は、非人道的なことをしてきた。辛いことも悲しいこともたくさんあつたけど、それもお父様のためだと思えば耐えることができる。でも、もうお父様はいない」

3年前、父であるシーゲル・クラインは戦死した。娘たちに夢と理想だけを残して。

「もうわからなくなっちゃって。自分のしていることは、本当にお父様の望まれることなかつて。単に嫌なことから逃げ出す口實にお父様のだしにしてるだけかもしれないけど」

雰囲気が暗くなっていることを自覚して、無理に冗談を交えてみても自分さえ騙すことはできない。結局無理をしている部分だけが目立つだけであつた。

「この3年間、ヴァーリはみんな悩んでるみたいだつた。絶対者であるシーゲル・クラインを失つて、同じ方向に見ていっても同じゴールは見えてないみたいに」

お父様のことを呼び捨てにしてしまえる。ヴァーリとしてはあるまじき光景に、つい意識をとられてしまつた。

ヒメノカリスも二ーレンベルギアも同じヴァーリ。それでも、ヒメノカリスはみんなとは違う。絶対的な主として崇拜すべきお父様という存在は、ヒメノカリスにとってはシーゲル・クラインではない。そんな事実がいまだにあまりに奇異な出来事のように思われて

ならない。

ヴァーリはお父様に、シーゲル・クラインに逆らうことはできない。そんな絶対前提がヒメノカリスには通用しない。父との関係に悩む二ーレンベルギアとはあまりに異なっている。

二ーレンベルギアはつい笑いだしてしまった。きっと誰も理由を理解できないだろう。ヴァーリという存在を知らない人には話の内容からして理解できないことだろう。

でも、話したところで理解してもらえるだろうか。プラント最高評議会議長まで務めたシーゲル・クラインに娘が26人もいて、そのすべてがそれぞれ別々の遺伝子調整が施されたクローンであるという事実を聞かされてどれほどの人がすんなりと受け入れることができるだろう。

「」の呪われた姉妹のおどき話を誰が聞いてくれるのだろう。

花の慰め方は、花が一番よく知っている。

同じヴァーリに聞いてもらつたためか、二ーレンベルギアは不思議と気が和らぐ思いを感じていた。

ヒメノカリスは二ーレンベルギがひとしきり笑っている間、やはり表情を変えることなくこちらを見ていた。気を遣つてくれたのか、それとも単に呆れているだけか。26人姉妹の12女である姉は、14女である妹をただ眺めていた。

「ありがとう、ヒメノカリス姉さん」

姉はやはり表情を変えず、ただ2回だけ瞬きをした。

シン・アスカは再びノーマル・スーツに袖を通した。外人部隊にいた頃から、現在も境遇は改善されていないが、着用していたノーマル・スーツは体に馴染む。自然とこれから戦いが始まると心が引き締まる。

今回の任務は小惑星破碎作業の支援である。戦闘になることはない。ただ破碎計画の詳細を聞かされていないことへの不安が、かすかに頭をよぎる程度のことだ。

何も心配はないはずだ。

シンはパイロットたちが集まる待機室へと向かう足を早めた。

すぐ後ろにはルナマリア・ホークが続いていた。外人部隊に所属するとは言え正規のプラント市民であるルナマリアは、シンとは別のことになると不安を覚えているようである。

「ミネルヴァで初めての出撃だけど、うまく連携どれるかな？」

人当たりのいい性格すでにミネルヴァにとけ込んでいるように思えるルナマリアのことだ。言葉ほど心配している訳ではないだろうと勝手に判断しておく。

振り返ると狭い通路の中を漂つよつて歩くルナマリアの姿を確認できる。

「なあ、ルナ。バレル隊長の機体って、何て名前なんだ？」

シンたちの救援にかけつけたリングを背負った白いガンダムの名前を、よくよく考えてみると一度も聞いたことがないとふと気づいた。ルナマリアが口を軽く膨らませたところを見ると、タイミングが悪かつたらしい。

「私の相談は無視？ まあいいわ。バレル隊長に聞いたけど、確かローゼンクリスタルだつたかな」

やはり、聞いたことのない名前である。そもそも、シンがガンダムという名前を知ったのは軍学校に入つてからであり、モビル・スーツのこともそれ以前はロボットと呼んでいた。一体どんな機体があるのかなんて知りようがない。聞いたところでのレイ・ザ・バレル隊長が教えてくれるとは思えない。

シンは首を前に戻した。話に興味がなくなつたのではなく、單に目的地が近くなつただけだ。扉の前でうつく体止めて、スライド布きの扉を開いた。

中には2個モビル・スーツ小隊、合計6人のパイロット。全員が全員赤服である。 - - が思い思いのやり方で時間を潰していた。緊張感なんてものは感じられない。ずいぶんと和やかな様子で、シンたちのことを気にとめる者もいない。

その中で、シンはつい一番近くのパイロットの言葉を拾つてしまつた。

2人のパイロットが立ち話をしている。どちらもまだシンと同じくらいで、調子の軽い少年が一方的に話しかけ、褐色の肌をした少

年が静かに聞き役に回っていた。

名前は一度聞いたはずだが、どちらも思い出せない。ルナマリアに聞いてみる気にもなれず、その脇を抜けて部屋の真ん中へと進もうとする。

「あの時のJだった。言葉が聞こえたのは。

「隕石か、面倒なことになったよな」

少年の口調が事態の深刻さに反して余りに軽いものであったことに、シンの意識せらわれた。

「こっそこのまま落とせばいいんじゃないか？ そうすればナルなんてみんななくなつて問題みんな解決するだろ」

Jのひを向け。そう考えた時にはすでにシンの腕は少年の胸ぐらを掴んでいた。無重力下でつり上げることなんてできなくとも、間近で相手の顔をのぞき込むくらいできる。

「もう一度言つてみる」

シンの視界一杯に広がる少年の顔は明らかに狼狽えていた。その瞳にはJを見開いたシンの顔が写っている。

「もう一度言つてみるー。」

じつして地球なんて滅んでしまえばいいなんて言つことができる。それも、一度は危うく地球を滅ぼしかけたプランクトの民が。

「シンー。」

ルナ・マリアの声がした。しかし、体を引きはがしにかかったのは明らかに男の力である。待機していた他のパイロットが2人がかりでシンの体を少年から引き離していた。少年は苦しそうに首をさすつている。これ以上暴れるつもりもないが、パイロット2人はシンを離そうとしない。

息苦しいのは、少々興奮し過ぎてしまつたからだ。他の人が話しうれないのは、どうしてだかは知らないが。

空気を破つて、ずいぶんと落ち着き払つた声があった。

「何をしていい?」

バレル隊長が扉のところにいた。状況がわからないとはおもわないうが、まるで気にした様子はない。

シンを押さえていたパイロットたちの力が弱つたことを気にふりほどく。隊長の前でなら危険はないと判断したのか、再び抑えようとはしてこない。

あの少年は曖昧な笑みを浮かべて、シンをなだめでもしているかのような仕草を見せた。

「冗談だよ、冗談……」

「状況を考える、ヴィーノ。」

少年の頭を軽く叩いた褐色の少年はヴィーノと呼んだ。ヴィーノ・

デュフレ。これが少年の名で、もう一人は確かヨウラン・ケントだつただろうつか。思い出したところで何の意味もなかつたが。

隊長を前に隊員が整列する。訓練を受けた軍人たちとはさほゞの騒ぎなどなかつたように整然と列を組んだ。バ렐隊長もまた、動じることなく話を始める。

「作戦内容を説明する。我々は破碎活動を支援する」

共同戦線を張る交渉自体は決裂したらしく、プラントは自國宙域への地球軍の進行を認めようとしなかつた。これはせめてもの支援といふことなのだが。何にせよ、ザフト軍にいても地球のために戦うことはできる。

シンが密かに心奮い立たせているその日の前で、現実は冷たい否定を含んでいた。

「ただし、作業中に地球軍と遭遇した場合、これを優先的に撃破する。以上だ」

皆が返事をしながら敬礼する中で唯一シンだけが「了解」ところか敬礼の手を上げることができないでいた。

周りのパイロットたちは指示された内容の意味を本当に理解しているのだろうか。つい周りの様子をうかがうと、誰も何の疑いもなく前を向いていた。

声を上げるのは、結局シンしかいなかつた。

「ちょっと待ってください。作業中って、遭遇しないわけがないじ

やないですか！ それじゃ、手伝つビ」るか、妨害だ！ 「

小惑星の直径はわずか7km。そんな中でまさか半分ずつ破碎活動に参加するわけではないだろ？ 地球軍が均等に張り付き、そこにザフト軍が行くことになれば確実に遭遇する。破碎準備に集中している地球軍に対してザフト軍は通常装備、言ってしまうなら戦闘用の装備で襲撃をかけることと同義である。

プラント政府は本当にそんな命令を出したのか。あくまでも冷静なバレル隊長の瞳は、あまりに冷たく思えた。

「ナチュラルは奇襲と騙し討ちが得意なようだ。当然の処置だ」

この人はいつも同じだ。まるで別世界の住民であるかのように他人事で、まるで関心を払おうとしない。

「俺は反対です。そんな戯い方、地球の足を引っ張るだけだ」

「お前は作戦に意見できる立場にはない。嫌なら今回に限り作戦への不参加を許可する。臆病者は必要ない」

口を開いても適切な反論なんてできそうになかった。痛くなるほど歯を強く噛み合わせる。シンが悔しさを噛みしめている間、バレル隊長はあくまでも職務遂行を続けていた。

「各員、機体へ乗り込め。出撃の合図は追つてする」

部屋を出ていく隊長に続いて隊員たちが次々と待機室を後にすると、シンはなかなか動き出すつもりになれば、つい動くことが遅れた。すると、部屋にはシンとルナマリアだけが残された。

「シン……」

心配そうに話しかけてくるルナマリア。ではルナマリアが心配してくれているのは地球の危機だろうか。それとも、上官非服従で査定が悪くなることを心配してくれているのだろうか。どちらにしろ、ルナマリアに心配をかけてしまっている事実に変わりはない。

「わかつてゐる……」

ただこれだけ。これ以上話しても何もいいことはない気がして、シンは格納庫へと向かうこととした。

地球の危機を[冗談と片づけてしまえる仲間と肩を並べて戦つため
に]。

地球に小惑星が落ちるということを聞いた時、ステイングは自分が自分でなくなる感覚、正確には地球軍に参加する以前の自分に戻つてしまつたような気がしていた。

ジエネレーターに火が入れられていなにも関わらず手は操縦桿を握り締めて離さない。どんなことをしても愛機であるGAT-X133イクシードガンダム・バスター・カスタムは動き出すはずもない。

動かそつとしているわけではない。ただどうしても気が急いで落ち着かないのだ。

空が落ちてくる。

またあの日の光景が繰り返されようとしている。

目が乾き、喉が渴く。『クピットの暗闇の中、瞬きをすることさえ怖い。小惑星の報告を聞いてから何も口にしていなかつた。

怖いから求めて、時を惜しんで探し回つた。こんな気持ちを和らげてくれるかもしれない人の姿を。桃色の髪に青い瞳。静かな表情をたたえた人はイアン・リー艦長と、アウルやステラたち、そして二ーレンベルギアとともにいた。ステイングが求める度、手をすり抜けて行つてしまつ。

「ちきしじゅう……」

ただ話がしたいだけなのに。話を聞いてもらいたいだけなのに。

当たり前だつたものが突然得られなくなつてしまつ。こんなこともある日の光景とよく似てゐる。あの日とまったく同じだ。

突然目の前の光景が明るさを増したのは、瞳孔が拡散したから、目を一杯に見開いているから。鼓動が自分の耳にさえ届いて、開け放されたコクピット・ハッチから差し込むわずかな光さえ眼球を焼き尽くすのではないかと言つほどに眩しい。

そんな光が突然和らいだ。

「こんなところにいた

見上げると、そこには光を遮つて立つ人の影。そんなわずかな光

の中ではえ、波立つ桃色の髪はその色を主張してやまない。

「姉貴……」

ヒメノカリス・ホテルがそこにはいた。

森は人を惑わせます。しかし人を誘いません。森の中で道に迷ってしまうことはあっても、森が人をその中へと誘うことはありません。入るかどうかを決めるのはあくまで人です。森に迷ったことを嘆くより、どうして森に入ると決めたことを思い出すべきではないでしょうか。

災いと呼ばれる多くのものを招くのは、人だと思い出すべきかもしれません。

それでも、後悔は災いを乗り越える助けになることは決してありません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
nEi n b r e c h e r s~

「今宵、碧い森深く」

エイプリルフール・クライシス。森は入れても、抜け出すことはできません。

第6話「今宵、碧い森深く」

C・E・65年某日。大西洋連邦ラスベガス近郊。

乾いた大地に覆われた、なだらかな山岳帯を夜の闇が包み星明かりだけが地上を照らす。疎らな低木以外には何もない荒野の中、星に対抗できるはずもない小さな灯火が見られた。

テントが張られている。荒野の片隅にひっそりと。そこから漏れてくる明かりが、地上で唯一見られる光である。

そのテントの中では2人がランプの明かりを挟んで座っている。ランプの小さな明かりでさえ満たせるほどにテントは小さい。

「ほら、ファイブ・カードだ」

1人が手に持った5枚のカードを見せながら言った。無精髭を生やした口元を自慢げに歪ませた男性の手にはジョーカーと残り4枚のカードすべて同じ数のトランプがあった。

ポーカーをしているのだろう。

ハート、ダイヤ、スペード、クラブの同じ数のカード4枚に加えジョーカーを揃えることで完成するこのファイブ・カードは制作難度が高く滅多に見ることのできない役である。

相手……こちらはまだほんの子供である……は髪など望むべくもない幼い口元を尖らせてカードを見せた。カードは数字、種類ともバラバラで役は揃っていない。

「どうやつたらみんなに役を揃えることができるの、父さん？」

少年はショボくれた様子で父を仰ぎ見る。

「種を教えてやるうか」

父はそう言いつと袖をめぐり上げた。すると、何枚かのカードがそこにあった。

「初めから袖にカードを何枚か仕込んでおくんだ。手札からいらなりカードと袖のカードを入れ替えると役が作りやすくなる」

「僕にも教えてよ!」

少年は父への反感よりも裏技への興味がたやすく上回つたらしい。大きな瞳をわかりやすく輝かせて父のそばに這いつよいに近寄る。テントが狭く、立ち上がるほどでもないのだ。父は息子にも見やすいよう身を屈めた。

「言つておぐがこれはイカサマだぞ。絶対ばれないようにな

「うんー。」

素直な息子の額を撫でてから、父は悪巧みを息子に仕込まんとその手口を語り始める。

「まずはこうしてだな。コツとして……」

袖に仕込む方法から、仕込むべきカードの選び方、カードを入れ

替えるタイミングの読み方まで一通り話終えたところで、時間を告げるアラームが鳴り響いた。

「お、時間だな」

父と子。2人は揃つてテントの入り口から身を乗り出した。すぐ外にはなかなか立派な天体望遠鏡が夜空へと向けられていた。こんな寂しい場所に親子2人でいるのは息子を悪の道に誘うためではない。街の明かりに邪魔されないこの場所が天体観測にはうってつけなのだ。

まずは父が望遠鏡をのぞき込む。いつものことと、まず父が目的のものを見つけ、そしたらすぐに息子に譲ってくれる。父に導かれる星を眺めることを、息子は心待ちにする。

いつまで経つても、父は望遠鏡を息子に譲ろうとはしない。

「父さん……？」

父は望遠鏡をのぞき込んだまま、子どもにもわかるほど深刻な表情をしていた。

「あれは、何だ……？」

息子が空を見上げると、星が喰われていた。満天の星空の所々が欠け落ち、黒くくり貫かれていた。目に見えない何かが落ちてくる。

空が落ちてくる。

小惑星フィンブルはプラントの脇を抜けるようにして月軌道内へと侵入を果たした。地球まではわずか30万km。地球の直径わずか0・02%の岩と氷の塊が巨大な尾を引いて宇宙を駆ける。

地球全体から見れば石ころ程度でしかない小惑星とて甚大な被害をもたらす。かつて恐竜を滅ぼしたとされる小惑星とて、その直径はわずか10km程度とも言われている。

決して地球に落としてはならない。

地球軍は行動を開始していた月面基地を離れた艦隊が加速し、小惑星との相対速度を合わせた地点で接触しようとしていた。小惑星は絶えず地球へと向けて落ちている。そのため、破碎作業を行うものも同じ速度で落下していなければたやすく取り残されてしまう。

月を利用したスイング・バイによって加速した艦隊が小惑星と横並びになりながら徐々に接近していく。艦からは次々とGAT-01A-1ストライクダガーが出撃する。ジェット・ストライカーがミノフスキー・クラフトの輝きを放ち、後ろからストライクダガーを押し上げていた。

現在、換装機構とミノフスキー・クラフトの搭載はモビル・スリーブの基本設計と化している。ミノフスキー・クラフトによって十分な加速を得たストライクダガーは横滑りしながら宇宙に浮かぶ岩の塊へと接近していく。中にはモビル・スーツよりも大きな三角錐型のフレーム、メテオ・ブレイカーを数機がかりで運び入れようとする光景が見られる。

メテオ・ブレイカーでフィンブルを破碎。大きいままの破片を艦

砲で順次碎くという計画である。そのためにはモビル・スーシ部隊が少しでも早くフィンブルを碎かなければならぬ。

モビル・スーシ部隊を運んできた母艦の艦長は、アガメムノン級宇宙母艦の狭苦しいブリッジの中で祈るような気持ちで小惑星へと降りていく幾筋もの光を見つめていた。

たるみ、染みの目立つその顔は壯年の男の哀愁というものを漂わせていた。しかしそれとは対照的とも言えるほど確かな眼差しが輝くユーラシア連邦軍少将である。

男の名はウイーラード。

禿かかった頭頂を隠すように軍帽をしつかりとかぶり、その目は小惑星フィンブルへと向けられている。

モニターに映るフィンブルは細長い形に、いくつものクレーター跡をつけた典型的——人がよく想像するようなものとして——な小惑星であった。決して大きなものではない。長いところでせいぜい数kmほどしかない小惑星を、しかし見つめるウイーラードの眼差しは鋭い。

「ウイーラード艦長、ザフトの艦隊が接近中です！」

「気にするなという方が無理とは思うが、我々の任務は小惑星の破砕活動だ。ザフトのことは無視して構わん」

「了解！」

オペレーターからの言葉を言葉少なに返事する。その間、ウイラ

ードはモニターから目を離すことはなかつた。しかしその目は小惑星からザフト軍へと狙いを変更していた。

現在の主力艦であるナスカ級高速戦闘艦を中心としてローラシア級MS搭載艦の姿もある。どちらも宇宙戦闘を前提とした航空力学を無視した奇妙な形をした戦艦である。地球軍の戦艦は宇宙戦艦でさえ旧暦の洋上戦艦を思わせる形状をしたもののがいまだにあるとうのに。

「」のようないつも些細なことにも関わらず、ウイーラードはザフト軍といつもの異質感を覚えずにはいられなかつた。

それは、ウイーラード自身コードティネーターであることに起因しているのかもしぬれない。最初期に遺伝子調整を受けたウイーラードは、それでもプラントに加わろうとはしなかつた。理由は詳しくは覚えていない。ただ、あくまでも人の枠から外れることのないコードティネーターが新たな人類を名乗る姿に覚える違和感はいまだに払拭されていない。

中には地球に降りたこともないコードティネーターもいると聞く。そんなプランクトの民にとって、地球とは一体どのような場所なのだろうか。

ウイーラードの眼差しの中で、突然光が瞬いた。そして、艦を揺らす激震。

「何事だ！？」

艦長席の手すりに必死に掴まりながらウイーラードは声を張り上げる。

「ザフトからの攻撃です！」

「ドレイク級被弾！ 航続不能、離脱します！」

「ザフト軍、モビル・スーツの出撃を確認！」

「各機散開！ 迎撃にあたれ！」

矢継ぎ早に伝えられてくる状況の悪化は、ついには戦況報告へと姿を変えていた。そう、ここはすでに戦場である。ウイラードはすぐさま迎撃の指示を飛ばさざるを得なかつた。

回頭する地球軍艦隊。その間にも敵の攻撃は続いている。戦艦からの砲撃に加え、敵モビル・スーツが接近を許してはならないほど の距離にまで近づきつつあつた。

「モビル・スーツ隊を引き戻せ！」

「しかしそまだメテオ・ブレイカーの設置が！」

「構わん！ 起動は後続の部隊にさせねばよい！ 今はザフトを抑えねばならん！」

ウイラードの決断は早く、オペレーターの行動に迷いはなかつた。小惑星にとりついていたいくつもの推進剤の輝きが一斉に飛び立つた。

地球を知らぬ国。

「それがプラントだということか」

ヨーワス・セブン休戦条約では、10の項目が制定された。この中で最も非難された一文は、両国の戦犯を国際法廷に委ねることなくそれぞれの国で裁きにかけるというものであった。

犯人自らに判決文を書かせるに等しいこの決定は、それでは戦争の反省を促すこともなければ抑止にも繋がることないと非難の声があがつた。しかし、地球連合、プラント両国の指導者にとつては都合がよく、ヨーワス・セブン条約はこのままの形で締結された。

血の責任を誰も支払おうとはしなかった。

そして、この休戦条約そのものがすでに形骸化の兆しを見せ始めていた。

国力に合わせてモビル・スーツの保有台数を制限する。この取り決めは一見過剰な戦闘の抑制に繋がるものと期待された。しかし、軍事費については一切取り決められることはなかつた。

これまで300機を製造に当たっていた資金が生産保有台数を半分にしろと言われば、150機を製造できるだけの資金がまるごと浮くことになる。その使い道を条約は一切規制しなかつたのである。

その結果、国々のモビル・スーツ開発競争は激化した。

これまでコスト・パフォーマンスを考えなければならなかつた機

体が、突然1機あたりにかけられる額が跳ね上がったとすれば当然である。とある試算では、モビル・スーツ1機あたりの開発費を含めた資金は条約以前の3倍以上に跳ね上がったまでする説さえ存在している。

そうして量産されたのがガンダムであった。

希代の技術者であるゼフィランサス・ズールが開発したガンダムと名付けられたシステムの唯一とも言える欠点が高コストであった。条約はその最後の鎖を解いてしまったのである。

1本の高い槍よりも10本の安い槍の方が役に立つ。ところが槍を5本しか持てないのだとすれば、多少値がはるうとも高い槍を求めるようになる。

そして、高い槍はガンダムとして示されていた。

地球軍、ザフト軍はこそってガンダムの量産化を目指した。

地球軍は3機のガンダムの開発に成功。ザフト軍はZGMF-56Sインパルスガンダムの他、ZGMF-23Sセイバーガンダムの2種の量産している。

ユニウス・セブン休戦条約以前と以後のモビル・スーツの違いを上げるとすれば換装機構の普及、ムーバブル・フレームの搭載、大電力バッテリーの開発、ミノフスキー・クラフトに由来する飛行能力など挙げれば切りがないが、その最たるもののが、ガンダムが戦いの空を席巻する光景であると言えた。

敵対する勢力に同名、同じ特徴を持つ機体が存在する事実は、開

発者であるゼフィランサス・ズールへの敬意と、この戦争の特殊性を如実に示していた。

フィンブルを巡る戦いは、まさに現在の戦争の縮図であった。

地球軍はストライクダガーを出撃させる。その背中には新型ストライカーであるジェット・ストライカーの他、旧式のランチャヤー、ソードなど同一の機体でありながら多様な性能を実現している。

限られたモビル・スーツで可能な限りのことを。これも、ユニウス・セブン条約以後に見られる設計思想である。

対するザフト軍はZGMF - 1000 ジダを多数放っていた。ザフト軍特有のモノアイ型のデュアル・センサーを持ち、その全身は緑色の甲冑に包まれている。初期型のZGMF - 1017 ジンが鎧を着た巨人なら、後継機にあたるZGMF - 515 ゲイツは騎士。巨人から騎士を経て、ジダは戦士の如き屈強の体つきをしていた。その背にはミノフスキ - クラフトに輝く様々なバック・パックを装備していた。

地球軍、ザフト軍がともに同系列の技術を発展させてきたのである。

地球軍はGAT-X105ストライクガンダムより培われてきたストライカーと呼ばれる換装機構によって同種の機体がまるで異なった性能を見せつける。

ザフト軍はインパルスガンダムのシルエット・システムとジダの

ウェイザード・システムという換装機構の間に互換性こそないものの、優れた技術力では新型量産機の配備に手間取る地球軍に溝を開けている。

量産機が汎用性を担い、ガンダムが性能で他を圧倒する。

これこそがこの戦争の縮図である。

フィンブルを巡る戦いにおいても、それは現れていた。

フィンブルは地球へと突き進む。迎え撃つ地球軍はその戦力の大半をザフト軍の迎撃に使わざるを得ない。また、フィンブルの軌道上に戦力を展開することはできない。そのため、フィンブルの周囲で交戦が繰り広げられ、その中心部たる小惑星は静かなものである。

ブレイズ・ウェイザードを装備したジダが加速する。インパルスガンダム同様、バック・パックがミノフスキー・クラフトの輝きを放ちながらその推進力を保障する。

2機のジダが編隊を組んで飛行する。ブレイズ・ウェイザードは細長い2本の推進器を並べた構造をしており、その先端部分が並んで開いた。ウェイザードの内部には小型ミサイルが多数並べられており、2機が同時に撃ち放つ。ミノフスキーパーティクルによって電波障害が恒常化している現在、ミサイルと呼ぶよりもロケットのようにでたらめに放たれた弾頭は一定距離飛翔したところで一斉に爆発する。

立ちこめる爆煙。それを引き裂くようにシールドが突き出され、煙の中からジェット・ストライカーを装備したストライクダガー飛び出した。

それを待ちかまえるのは3機目のヅダ。ウイザードはスラッシュ・ウイザード。バック・パックには扁平な構造が一対取り付けられ、ミノフスキー・クラフトにとって必要な表面積の確保に努めている。その輝きに押し出され、その手には長柄の戦斧。三日月型の発振器からビームの光が刃を描く。

ストライクダガーは反応することさえできなかつた。ライフルを向ける間もなく、辛うじてシールドを突き出す。

ヅダは一息に斧を振るつた。光の戦斧が一瞬の躊躇を見せてシールド表面で踏みどどまる。それは気の迷いとビームはすべてを溶かし、シールド」とストライクダガーを引き裂いてみせた。

ビームを防ぐことができる材質はいまだ開発されていない。

それはヅダにも当てはまる。

飛来するビームが勝利の余韻に浸る間もなく、ヅダを襲う。飛び退くヅダに追いすがり、ビームは肩を直撃する。ヅダのシールドは両肩に小型のものが取り付けられてる。ビームを受けた表面は爛れ、あとビームの直撃を2度、3度と受け止められる保障はない。

この事実がヅダのパイロットを必要に焦らせた。無理に加速し、余計な慣性に囚われてしまつたのである。これでは動きを読まれるばかりか機動が大きく制限される。

その隙を見逃してくれるほど敵も甘くはない。

ソード・ストライカー？？以前から用いられているソード・ストライカーにミノフスキー・クラフトを搭載したものである…を

装備したストライクダガーの手には対艦刀が握られている。モビルスーツの身の丈ほどもあるビーム・サーベルが振り下ろされると、ジダの強固なはずの装甲がたやすく斬り裂かれ、巨大な火花へと変わる。

戦況は一進一退の様相を呈していた。

ファインブルへと近づきたい地球軍に對して一切攻撃の手を緩めることのないザフト軍。両者の戦力は拮抗し、ファインブルに近づくことができないでいる。

外から見たなら戦況はマーブル模様を呈していることだろう。中心にはファインブル。それを取り囲むストライクダガーとジダの群。そして量産機の織りなす円環は内側に行くにつれその雰囲気を色調を変えていく。

そこは選ばれたものの戦場である。混戦模様の外周部を力付くで通り抜ける者しか踏み入ることはできない。それはすなわち強者を意味し、この時代、この戦争で強者とガンダムとは同義である。

中心部に向かうに連れ、ガンダムの姿が増えしていく。

フォース・シルエットを装備したインパルスガンダムが持ち前の機動力で僚機とともに敵を追いかけ回す。ビーム・ライフルから放たれる輝きが宇宙空間に光の筋を描く。

2機のインパルスが放つビームを、GAT-333ディービエイトガンドムは背部のウイングを輝かせながら軽快な動きで回避していく。ステラ・ルーシュの使用する特装型とは違い薄い水色の機体がモビル・アーマー形態のままビームの軌跡の間をすり抜けた。

別の場所ではGAT-131イクシードガンダムが2本の、ソード・シルエットを装備したインパルスガンダムが1対の対艦刀を互いに構え斬り結ぶ。

異なる勢力に属する同じ顔を持つ機体同士が戦いを繰り広げる。

この異常とも思える光景こそが、まさにこの戦争を象徴していた。そしてさらなる内側。フィンブルの上空にまで至ると、やはり光景は一変する。ここに来るためには必要なことは力だけでは物足りない。

必要なのは確たる意志。フィンブルへと到達するという強い意志に他ならない。

ここは戦場である。力と思いを持つ者のみがたどり着ける聖域である。

フォース・シルエットによって加速するインパルスガンダム。これが今のシン・アスカの機体である。普段使い慣れているソード・シルエットの使用は足並みを乱すとして許されなかつた。

モニターにはすでにその全貌を捉えきることができないほどに大きくワインブルの姿が映し出されていた。全体が太陽の光を反射しその白さは眩しくさえある。

その眩しさの中に傷だらけのストライクダガーの姿があった。左

腕を失い、首から上がすでにない。どんなストライカーを装備していたのかわからないほどに破壊されている。

それでも向かってくる。シンへと挑みかかる。

「待ってくれ！」

聞こえるはずがない。届くはずがない。それでもシンは声の限りに叫ばずにはいられなかつた。破碎活動の邪魔がしたいわけではない。それを伝える術がない悔しさが歯と歯を強く噛み合わせる。

ストライクダガーは傷だらけの体をおしてライフルを向けてくる。量産機でも十分な攻撃力を発揮するビームが際どい場所を通り抜けた。

数打ち - - インパルスガンダムもその1種だが - - のモビル・スリーツでこんな戦場の奥地にまで来たパイロットが力と何より意志を兼ね備えていないはずがなかつた。

武器だけを破壊するような、そんな甘えた戦いができる相手ではなかつた。

ソード・シルエットを使用していた時の癖からついアクセルを強く踏みしめる。急速に接近していく中で相手のビームがシールドを捉えた。元々何度か被弾していたシールドはビームの膨大な熱量をさばききれない。ビームの輝きがシールドの裏でさえ確認できるほど表面が溶融する。

これだからシールドは。元々、ビームの攻撃力を完全に防ぐことができない材質など存在しない。攻撃は最大の防御。この言葉が今ほ

ど効力を持つ戦場もざらにはないだろ？

シンはやむなくやむなくライフルを向けた。

できることなら無力化したい。やや甘めに標準をつけたビームを発射すると、思いの他損傷の激しかった敵機はかわすこともできず、ジェネレーターを抱える胸部に直撃してしまった。

何度も見てきたモビル・スーツの爆発。

地球を命がけで守りたとした誰かが死んでしまった。

「ちくしょう！　ちくしょう！」

殺したかった訳じゃない。地球上にこんな石ころを落としたい訳じゃない。

ただでさえ不機嫌そうに見えると言われるシンの眼差しは、すでに憎しみさえ思わせてファインブルを睨みつけていた。

そのエネルギー効率の高さから戦術から戦略まで一変させてしまつたビームの破壊力を、今はファインブルへと向ける。ビームの輝きはほぼ垂直に小惑星の白い地面に突き立てられ、爆発を引き起こす。

確かに大きなクレーターはできた。だが、それは直径7kmの小惑星を破壊するにはあまりに微力である。

「人を殺すことはできても人を救うことはできないのかよ！　ガンダムは～！」

「クピットの中引き金を引き続ける。あまりに引き金を引きすぎてライフルが連續発射できる間隔を無視した発射指示にインパルスが抗議の声を上げた。そんなに命令されてもライフルの冷却、エネルギーの充填に時間がかかる。そう、アラームが聞こえていた。

普段は気にならないほどの間隔がずいぶんと冗長に感じて、ビームは次々と爆発を引き起こし、それでも内部にまで破壊は進まない。

先程からアラームが鳴りやまない。ライフルの使いすぎで銃身の冷却が追いついていないと怒鳴りつけてくる。その警告の中に別の意味合いが含まれることに、つい気づくことが遅れてしまった。

アラームは、敵機の接近を告げていた。

上半身のあらゆる場所に火器を備えたガンダムが驚くほどの速さで近づいてくる。反応するには完全にタイミングを逃している。これまで2度交戦したイクシードガンダムの特殊型はなんと蹴りを繰り出してきた。

胸部へと直撃する攻撃。フェイズシフト・アーマー同士の接触は激しい光輝をもたらし、比例する衝撃がインパルスを揺らす。

叫び声さえ上げられないまま、シンは体が吹き飛ばされる感覚を感じていた。70tもの機体が軽々と後ろへと投げ出されていた。

「……！」

これまでとは何かが違う。直接交戦したことないが、戦つたルナマリアの話ではとても距離を選んだ冷静な戦い方をすると聞いていた。それなのに射撃に特化した機体であるにも関わらずの突撃で

ある。

これまでとは何かが違う。

それが何なのか、考える余裕などない。

体勢を整えられないインパルスへ、イクシードガンダムはバズーカを撃ち放つ。シールドで辛うじて防ぐも、ただでさえ劣化していたシールドは脆くも崩壊してしまつ。

「のままで押される。反撃として無理な姿勢である」と構わずライフルを放つ。

イクシードは上に飛び上ることでビームをかわすと、宙返りの姿勢でそのままインパルスめがけて蹴りを放つ。相手のすねが頭部を直撃し、コクピット内のセンサーが一気に乱れた。どんな追撃があつたのかさえ確認できない。ただ、インパルスが弾き飛ばされる衝撃がシンの体を駆け抜けた。

もはや気迫としか言ひようがない。この敵は、あまりに必死に地球を守るとしている。

「シン、聞こえる？ シン！」

ルナマリア・ホークの声はシンに届いてくれない。

ミネルヴァ隊・ルナマリアを含む7機のインパルス・はシンの突出に引きずられる形で戦場の奥深くにまで進出せざるを得ない

状況であった。

周りはすべてガンダムだらけである。地球軍製のガンダムの中で唯一可変機構を有するディーゼヴィエイトたちがモビル・アーマー形態のままミネルヴァ隊の周囲を飛び交っている。

積極的に攻撃してくる」ではない。まるで何かを待つていてかのように「ディーゼヴィエイトはインパルスを取り囲むように旋回を続けていた。

たとえるなら、獲物が息絶えるのを上空で待ちかまえる禿鷲のよう。

ルナマリアはこれを单なる焦りの現れであると判断した。レイ・ザ・バ렐部隊長のガンダムの姿は見えない。シンはフィンブルへと単独で行ってしまった。隊長不在の不安と仲間への心配がディーゼヴィエイトの群を禿鷲に豹変させているのだと判断したのだ。

バ렐隊長なら一人でも大丈夫だろう。それでも、シンは放つておぐことはできない。

「私、シンの支援に向かいます。援護してくださいー！」

仲間の返事も待たずにルナマリア機はフォース・シルエット・ルナマリアもまた、使い慣れたブラスト・シルエットの使用を許されなかつたーのウイングを輝かせた。

「勝手なことをするな！」

アウラン・ケントの声を聞きながら、それでもルナマリアはディ

ーヴィエイトの群を強引に突破しようとする。禿鷲がその爪に当たる場所からバルカン砲を放ちながらルナマリア機の側を通り抜けた。逃がすつもりはないといふことか。ルナマリアは背筋に覚えた冷たいものの感触を敢えて無視する必要があった。

無理に機体を進ませようとすると、別のディーゼヴィエイトがより速い動きでインパルスを捉える。背中から突き出した機首部分のビーム砲の銃口をモニターで確認すると、ルナマリアはとっさに機体を引く。インパルスのすぐ前を駆け抜けたビームはシールドの表面をなぞるように溶かした。ビームを放つたディーゼヴィエイトがやはり通り抜けていくと、続いて別の機体が接近してくる。

隼に弄ばれる雀になつた気分である。

向かつてくる機体へと向けてライフルを向ける。すると、敵は突然方向を変え逃げ出した。

別にルナマリアの気迫に押されたわけではない。仲間のインパルスたちが援護射撃をしてくれたのだ。ルナマリア機との間にいくつもの光の筋が通り、敵機は接近を断念した。

「早く行つてやれ。ここは俺たちが引き受けんからさ」

普段お調子者のヴィーノ・デュプレの軽薄とも思える声もこんな時は頼もしく思える。援護してくれるのは、もしかするとシンとトラブルを起こしたことへの負い田を感じているからかもしれない。

「ありがとうー！」

仲間がつき崩してくれた包囲網の穴を、ルナマリアは一気に駆け抜けた。

「作戦行動中に勝手な行動を許すのか？」

『ウランはルナマリア機の背中を見送りながら「バイーノ」と通信をつないでいる。その口振りは辛辣なようでありながら、援護には『ウラン自身も参加している。

「隊長だって俺たちほつたらかしてどっか行ってるだろ。それに…」

「それに？」

「シンて奴、アブティエルなんだよな。それなら、やっぱり地球に仲間や友達がいるってことだよな」

調子に乗つて口走つたことを悔やむくらいなら始めから言動に気を使うべきではないだろうか。『ウランは不器用な仲間にいついため息を聞かせてしまった。

「少しでも軽率だったと思うんだつたら、後で謝つてもいいだ

囮みを狭めようとしていたディーヴィエイトにライフルを放つ。当たりはしないが、攻撃された分だけ、敵は距離を開けた。完全にこちらを封じ込めようとしているのだろう。

「ひらは6機。敵機は4機。無理に打つてでてもよいが、ここで

功を焦る理由はない。アブディエルには酷なことだが、たとえ小惑星が地球に落着しようと、プラントが被る被害・地上にはいくつかの軍事施設を所有するとは言え、は比べるまでもなく小さいからだ。

では何故、敵機は攻撃を仕掛けてこないのだろうか。青い猛禽の群は、不気味な旋回を続けていた。

そんなヨウランの不安をよそに、ヴィーノは気楽なものである。

「よし決めた。やっぱり俺、この戦いが終わったらあいつに謝る」

もう一度、ヨウランはため息をついた。

小惑星フィンブルの表面に三角錐の骨組みをしたメテオ・ブレイカーが3機設置されている。先発隊が残したものでまだ起動されてはいない。

斜めに傾いた骨組みの外側部分に起動装置が取り付けられており、それはモビル・スーツの手によつて起動させられる。

メテオ・ブレイカーの1機にモビル・スーツが取り付いていた。骨組みに手をかけ足を乗せ、その指が器用に骨組みに設置されたボタンを押している。

GAT-X255インテンセティガンダム汎用型である。戦闘時には鎌を縦横無尽に振り回す機体が、1つ1つ丁寧にボタンを押していく様子はひどく人間じみている。もっとも、ボタンは人が扱う

ものの10倍ほどの大きさがある。

「えーと、パスワードを入れて、システムを立ち上げてって、何で直接入力なんだよー!?」

インテンセティのコクピットの中で、アウル・ニーダはマニュアルを投げ捨てた。本来は無重力に引かれ漂うはずが、明らかに重力の影響を感じさせて紙は下へと沈んだ。それだけ地球が近いことを意味している。

仕方なく、アウルは作業に戻る。いつもなら鎌を握らせてさえいればいいマニピュレーターの人差し指が再びパスワードを入力していく。

「元々戦闘中に使うものじゃないから」

ステラ・ルーシュのGAT-X370は別の場所でメテオ・ブレイカーの起動にあたつていた。モニターで直接確認することができる。小惑星は決して大きなものではないのだ。

こんなちっぽけなものが落ちただけで地球には甚大な被害が発生してしまう。

何としてもこのままの落着は阻止しなければならない。アウルは子どもなりに使命感を抱く顔をする。

手順通りにパスワードを打ち込み起動開始のスイッチを押すと、メテオ・ドライバーの各所に取り付けられたライトが点灯しわかりやすく起動を示した。

「よし、動いた！」

インテンセティの腕を通して伝わる振動はメテオ・ブレイカーが採掘を開始した合図である。メテオ・ブレイカーは3本の足でしっかりと地表を捉えると軸部分から採掘用のドリルが堅い岩盤を削り少しずつ深く潜っていく。ドリルの先端が所定の深度に達したところで爆薬が炸裂し、小惑星を内部から破壊するのである。

本来ならば10本単位で細かく破碎する予定であったが、ザフトとの戦闘中にメテオ・ブレイカーを持ち込むことなどできはしない。大気圏突入で燃え尽きてくれるほど細かくは破碎できない。

どうすればいい。苦悩を解消する方法をまず外に求めるあたりに、アウルの未熟さが現れていた。

「ヒメノカリス姉ちゃんは？」

「警戒してる。ゲルテンリッターが来るかもしねりないって」

ゲルテンリッター。ゼフィランサス・ズールが直接手がけた7機のガンダムのことだ。アウルたちが搭乗しているような量産機とは違う。コスト、操縦性、整備性そのすべてを考えず徹底した高性能が約束された機体は、ガンダムのインフレ化が進んだ現在でさえ圧倒的な性能が約束されている。

アウルとステラ、それどころかステイニングをえた3人がかりでさえ相手にさえならないのではないだろうか。

量産機ではガンダムに溝を開けられ、ガンダムではゲルテンリッターには勝てない。

ガンダムは大人しくガンダムの相手をしておくべきだろ？

混沌とした戦場を飛び抜けてきた1機のインパルスガンダムがあつたのだ。外周部に比べればフィンブル上空は驚くほど静かなものだ。接近にはすぐに気づくことができた。

「ステラ、お前戦いになると変に興奮する癖がある。注意した方がいいぞ」

「うん……。わかつた」

返事はあつたが、すでにステラは恐怖を感じているようであつた。元々、ステラは戦いに向く性格ではないのだ。

かばい立てるつもりはなかつたが、アウルはステラよりも一足に小惑星から飛び立つた。何もスラスターを全開にする必要はない。インテンセティそのものが今地球へと向けて落ちているのである。ほんの少し逆運動をかけるだけでガンダムの体はフィンブルの地表を離れた。

その腕には鎌が握られ、甲殻種を思わせるバック・パックがガンダムの顔を覆い隠す。

こちらに気づいたインパルスがライフルを放つ。ビームは効かない。バック・パックにアームで連結されたシールドの表面にビーム化寸前のエフェィールドが張られ、ビームを弾くのだ。

敵の攻撃を無効化したアウルはすでに普段の調子を取り戻して笑っていた。

地球へと向かうファインブル。遙か先に見える地球の方が優に大きく、このようなちっぽけな小惑星がそれでも甚大な被害を生み出すという事実が滑稽に思えるほどである。

滑稽と言つたら、まさに田の前の状況そのものであるかもしけない。

ファインブル上空では戦いの光があまりに疎らである。恐らく両軍揃えても数えるほどの部隊しか参加していないのだろう。残りの大部分の戦力は外周で使い潰されているのだから。

これが地球の命運をかけた戦いの姿であろうか。

詮無いことだ。この光景を見下ろす者、レイ・ザ・バレルはすぐに関心を失った。

現在でも珍しい全天周囲モニターには敵機の接近を告げていた。音声は切つてある。元より、お喋りな方ではないが。よつて、モニターにはただ敵の存在がカーソルで示されているだけである。

「来たか」

「いつも絶対速度が速くてはあの機構は使えない。ΖGMF-X1 7Sガンダムローゼンクリスタルが背負う輪環を輝かせ、ついで純白の体を光らせて振り向く。その両手にはビーム・サーベルを構える。

飛来する機体もまたガンダムである。

赤い。全身を血で染めたように赤く輝かせている。バック・パックは大型水平翼を備え、細身のシリエットは兵器とするよりは彫像。ガンダム特有の美しさを兼ね備える。かつてザフト軍が開発したΖ GMF-X09Aジャスティスガンダムとひどく似た印象を与える機体である。

そして、大いなる裏切り者であった。

「いらんのだよ、使い道を違えた力など！」

普段表情に乏しいレイが歯を剥き出し、憎悪を露わにさせする。

赤いガンダムがその両手にビーム・サーベルを構えた。

今、真紅の剣と純白の環とが激突する。

青いガンダムが来る。

その姿は優雅とさえ言えた。4対の翼を持ち、白と青とで整えられた色調は兵器らしからぬ鮮やかな色を見せた。両手にビーム・ライフルを構え、完全な左右対称の姿は、ミノフスキ・クラフトの輝きに包まれる。

迎える黄金の輝きの中で、ヒメノカリスは新たなガンダムを確たる敵と認識した。

「ヤーテシユテルン。アスラン!」

ΖΖ-X300AΑフォイエリヒガンダムが全身を輝かせ動く。

今まさに滅びを『えられよつとしている星を背景として、黄金の炎と青の翼が向かい合つ。

そして、地球へ落ちよつとたぐらむ星の上でガンダムは戦つていた。

ΖGMF-56Sインパルスガンダム。ザフトの主力となることを期待された機体に搭乗するのは、アブティエルと蔑まれる少年である。

少年はフィンブルを破壊してしまいたいと考えていた。

GAT-X133イクシードガンダム・バスター・カスタム。ストライクガンダムの正当な後継機として開発されたイクシードガンダムに同じ100系フレームを採用したGAT-X103バスター・ガンダムのデータを反映させた機体である。この機体にはかつて空が落ちる光景を目撃した少年が搭乗している。

少年はフィンブルを落としたくないと願っていた。

2人は共に等しく地球のことを思い、そこに生きる人のことを思い描いていた。

そして、2人は殺し合つ。

イクシードが右腕のバズーカ、左腕の2連ビームを交互に間断なくうち続ける。途切れない射撃が雨となつて降り注ぐ。インパルスはファインブルの地表すれすれを滑空しながら爆発をかいくぐる。その回避の合間に、インパルスは機体を素早く180度回転させライフルを上空のイクシードへと向ける。

交差する2筋の閃光。イクシードを狙つたビームは虚空の彼方へ。インパルスの破壊をもくろんだ攻撃はファインブルの地表を吹き飛ばす。

上空へと逃れるインパルス。立ちふさがるイクシード。互いに銃を向け、射線が幾度となく交差する。それらは決して交わることなく、滅びの空の上、ただただ浪費されていく。

「まだ空を落としたいのか！　お前たちは！」

イクシードガンダム・バスター・カスタムのコクピットで、ステイングはいつになく感情を露わにしていた。

もう2度とあんな光景は繰り返されではならない。あんな、空が落ちてくる夜は見たくない。

そう、父に誓い、姉と約束したのだ。

ステイングは姉との、ヒメノカリスとの約束を思い出していた。

ファインブル落着の危機を知られステイングはどうしようもなく

助けを求めた。それが叶えられず失意の内にコクピットに籠もつて
いるしかできなかつたステイニングに、救いはあちらから訪ねて来て
くれたのだ。

暗いコクピットの中。それでもヒメノカリスの視線を確かに感じ
ながらステイニングは10年も前の昔話をぽつりぽつりと話し始めた。
「姉貴は知つてるだろ。俺の親父はエイプリルフール・クライシス
で死んだ。俺、見てたんだ。ニュートロン・ジャマーが落ちてくる
ところ。不気味な光景だつた……」

父と2人で荒野、星を見ていた。街の明かりの届かないその場所は
満天の星空が広がる特等席だつた。バケツ一杯の星々を一気にぶち
まけたみたいに粒状の光がところ狭しと並んでいる光景は何度見上
げてもその度にステイニングに新たな発見と驚きを与えてくれた。

あの日は、あの日だけは違つた。

思いだそうとして、ステイニングは手を握りしめ、脇を絞めた。こ
うしておかないと、何かに襲われそうな錯覚に憑かれる。

「星が見えなかつたんだ。空がえぐれて落ちたみたいに闇が蠢いて
た……」

今ならその正体がわかる。プラントが降下したニュートロン・ジ
ヤマーの影が星の光を遮つたのだ。ステイニングは父とまさに災厄が
落ちてくる光景を目撃した。

「まず街が死んだんだ。暴動の鎮圧のために軍が出てくると民衆と
の間に小競り合いが起きて一転大混乱さ。俺は親父に手を引かれて

嘘みたいな真っ暗闇の中を必死に逃げたんだ。銃声や悲鳴ばっかりでさ、聞こえてきやがるのは……」

街に明かりが一つも灯つてはいなかつた。燃える炎の明かりだけが混乱と無秩序のただ中に放り出された街を彩つていた。

「そんな時、親父とはぐれた。手が離れて、もう見つけようがない。結局、親父がその日に死んだことを知ったこと自体、数ヶ月後の話だった」

戦争孤児のお決まりとして施設に入れられた。特殊な才能があると二ーレンベルギア・ノベンバーのプロジェクトに志願することが認められ、軍籍やガンダムという力まで得た。

それでもあの日の光景はいまだに頭から離れてくれない。頭を両手で抑えるのは、いうでもないと空が落ちる光景が吹き出してきそうで手を離すことができない。

「俺怖いんだ。また空が落ちてくるつて。またあんなことが地球全体で繰り返されるんだって考えると、怖くて怖くて仕方がないんだ」

意識は現実へと戻ると、目の前にはすでに大気の熱にあてられ徐々に赤みを帯びつつある小惑星の姿。そして、滅亡を助長しようとするザフト軍の機体があつた。

ZGMF-56Sインパルスガンダム。シールドをなくし、それでもファインブル上空から離れようとしない姿に、ステイニングは憎悪の限りでもつて伝わりもしない声を、届きもしない思いを叩きつける。

「お前らは！ そんなに空を落としたいのか！」

フィンブルは、次第に着実に確実に地球へと落ちようとしていた。

滅びの光景が繰り返される。

太陽も月も掛け替えのないもの。この世に一つしかない人類の宝です。では、人はどうでしょう。その人という個人は世界に一つしかいません。それでも、人はそこに唯一無二の価値を見いだすことはできません。個性は一つでも、同様の性質を持つ個人ならいくらでもいるからです。

太陽と月の喪失は大きいなる損失。でも、個人の喪失はいくらでも換えのきくものでしかありません。

では問題です。太陽ほど希少なものではなくて、それでも月ほども尊いものとは何でしょう。

次回、GUNDAM SEED Destiny's Blume
nEi n b r e c h e r s

「LOST CHILD」

ステイニング。あなたは答えそのものなのかもしれません。

第7話「LOST CHILD」

小惑星フィンブル。この名前の由来を、ご存知だらうか。

スカンジナビア王国の地方神話に語られる人類を滅ぼす冬、その名前である。

フィンブルは3つに分けることができる。

まず訪れるのは風の冬。世界に吹雪が吹き荒れ、人類の3分の1が死に絶える。

続いて剣の冬。人々は互いに剣を取り殺し合つ。そして、また3分の1の人々が死に絶える。

最後に狼の冬。この世界に潜み、隠されていた悪意が目を覚ます。死者の船を駆り、その体躯は世界さえ包み込み、すべてはその顎の奥へと消える。

この名前は、スカンジナビア王国事務次官、マリア・リンデマンの提案によって命名された。

純白は光環を背負い、真紅は血塗られた剣にまみれる。

フィンブルの落着は決定的なものとなつていた。衛星軌道はとうに突破されている。それは、地球の重力自体が明白にフィンブルを引き寄せ始めたことを意味する。次第に視界の中で大きさを増して

いく地球の青さの中で、それでもミノフスキ・クラフトの輝きは激しさを増す。

NGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルは純白の体に黄金の線を引いた機体である。その特徴として背中に環を背負い、光の剣を構える姿は神々しくさえある。

対し、敵は神々しさとは無縁であった。

NN-X5N000KYガンダムラインルビーンは真紅の体をしていた。その背には翼と呼ぶには無骨なウイングを備えたバック・パックを備え、それは勇ましい闘士を思わせる。

神像と闘士。両者の戦いはあまりに現実離れしたものであった。人の視認速度を超えているほどに速く、しかしどちらもともにその速度に対しても明らかに反応してみせた。

ローゼンクリスタルがサーベルを振るつた。そう判断した頃にはすでにその攻撃は捌かれ、ラインルビーンが反撃に転じている。その反撃を確認した頃にはやはり両機は次の行動に移っていた。

フィンブルのその上で、2機のガンダムが距離を開ける。その動きは驚くほど速く、そして、全身をミノフスキ・クラフトの輝きが包んだと思うと、両者は再び円が回るほど速さで剣戟を打ち鳴らした。

ラインルビーンが難いだ一撃をローゼンクリスタルが受け止めるとともに押し返す。するとその反動を利用してラインルビーンは上体をひねると、反対側からウイングが横一文字に振るわれる。ウイングの縁にはビーム・サーベルが発生しており、ローゼンクリスタ

ルは先程とは反対のサーベルで受け止める。

純粹なる紅玉は、まさに全身が刃の塊であった。すでに足、つま先と膝の発振器を挟む形でビーム・サーベルが発生していた。蹴り上げる動作とともにサーベルがローゼンクリスタルを襲う。純白のガンダムは飛び上るとともに体を回転させ、宙返りの要領で回避する。体がちょうど1回転した時、ビームの輝きを伴う脚撃がローゼンクリスタルの顔面すれすれを通り抜けた。同時に、ローゼンクリスタルが反撃としてつきだしたサーベルの切っ先は、ラインルビーンの顔、わずか数cm横を突き進んだ。

外したのではない。外れたのでもない。互いが互いの間合いを完全に見切っていた。モビル・スーツのような巨体が行うにはあまりに卓越した絶大な回避術。

ハウinz・オブ・ティンダロスを体得している両者は再び距離を離した。

コスト、操縦性、整備性、生産性、果てには人が扱うことさえ想定されているかさえ疑わしいガンダムは兵器としてのあらゆる常識を超越する。

黄金は炎と名付けられた。蒼は翼を羽ばたかせる。

ZZ-X300AAフォイエリヒガンダム。かつてゼフィランサス・ズールがブルー・コスマス3幹部の1人であるエインセル・ハンターのために開発したゼフィランサス・ナンバーズの初号機である。エインセル・ハンターのために開発された機体である以前に、

この機体はエインセル・ハンターの事実上の専用機であった。

通常のモビル・スーツの1・5倍近い大きさを持ち、可変機構によつてモビル・スーツ形態、モビル・アーマー巡航形態、モビル・アーマー形態の3態を備える。また、時には8本ものビーム・サー贝尔を同時に展開するなどパイロットに要求される技術がすべてのガンダムの中でも群を抜いていた。こんな機体を完全に操ることができる者など、エインセル・ハンターを除いて存在しないのである。

エインセル・ハンターのために造られた、エインセル・ハンターにしか扱うことができない機体。それがフォイエリヒガンダム。

黄金は決して錆び付くことはない。しかし、その価値は永遠のものではない。

フォイエリヒガンダムは明らかに劣勢を強いられていた。これまでこの黄金の機体と対峙したことがあるすべての者が決して感じしたことなどなかつたもの。それは、大きさ故に愚鈍さ。

NN-X3N10AZガンダムヤーデシュテルンは速い。4対の翼を輝かせ、その輝きに比例して速度を増していく。フォイエリヒガンダムの後ろをあつさりと奪つと、振り向いてきたフォイエリヒヘと両手に構えたライフルを掃射する。

フォイエリヒの表面はエフィールドに包まれ、ビームを通さない。ヤーデシュテルンから発射されたビームはすべて表面の装甲を滑り通り抜けていく。

これは防御に成功したといつもりは回避に失敗したとする方が近い。

かつて両手足、バック・パックにアームで連結されたユニット4機からなる8本のビーム・サーベルで近接戦最強を誇ったフォイエリヒが両手足、わずか4本のサーベルを発生させただけでヤーデシユテルンへと斬りかかる。

それでも通常の格闘戦と比すれば極めて高い攻撃力を有しているはずが、ヤーデシユテルンはたやすく剣の網をかいぐぐる。ハウンド・オブ・ティンダロスの眼差しが完全にフォイエリヒの太刀筋を見切っていた。

離れるでもなく、しかしサーベルをかすらせしか - - それがハウンド・オブ・ティンダロスという回避術の真骨頂である - - しない。

ヤーデシユテルンがビーム・ライフルを腰部へと設置する。同時にその手には抜き放たれたビーム・サーベルが握られていた。フォイエリヒのものとは真逆の方向へと突き出されたサーベルは、ビームの輝きをかいぐぐり、黄金の光をかき分ける。

対ビームの性能を有する黄金の装甲の隙間へと、ビーム・サーベルが突き立てられた。

左腕の、肘に当たる部分である。関節部はどうしても装甲を開放せざるを得ない。そして、フレームはエフィールドに包まれてはないのである。

黄金の輝きに混じり、内部からビームの輝きが漏れだした。熱そのものが装甲さえ焼いて、フォイエリヒの左腕は肘から先が切断される。

大きな体のフォイエリビが目に見えて傾いた。その隙を逃さず、ヤーデシユテルンは左腰からレールガンを展開する。サイド・スライドのように足にそう形で下に向けられていた銃身が90度持ち上がり、銃口が前を向く。肉眼では捉えられないほどの速度で発射された弾丸は、対ビームに特化した黄金の装甲をたやすく引きちぎり、左足を失ったフォイエリビは地球の重力に引かれるままフィンブルへと落ちていく。

事態は、すでに深刻なほど進行していた。フィンブルが成層圏に差し掛かり、猛烈な速度で落下してくる小惑星に逃げることのできない大気が圧縮され、膨大な熱量を赤々と発生させていた。

フォイエリビが落ちていく後ろで、フィンブルが突然碎けた。メテオ・ブレイカーが予定されていた深度で爆薬を炸裂させたのだ。亀裂が斜めに走りそのから細々とした破片が飛び散る。やがて大気の圧力に屈した小惑星は大小2つの塊へと分かれた。

フィンブルがようやく崩壊を始めた。しかしそう足りない。これでは大きな破片が燃え尽きることなく地表を直撃する。残されたメテオ・ブレイカーは2機。1機の価値は今や10万の人命にも等しい。

「地球はやらせねえ！」

ステイング・オークレー搭乗するGAT-X133イクシードガンダム・バスター・カスタムが肩越しに2門のビーム砲を放つ。モビル・スーツが搭載する火器の中で最大に近い火力を誇るビームは、しかし敵モビル・スーツを捉えることはできずフィンブルに巨大な

火花を上げた。

敵機、ZGMF-X56Sインパルスガンダムはシールドを失い、しかし回避を続けることで戦闘を継続していた。

攻撃の命中率を少しでも上げたいステイリングと、中距離ではビーム・ライフルを所持しているとは言え、決定打を持たないインパルスのパイロット。両者は次第に距離を詰め、射撃に特化しているバスター・カスタムが接近戦をしなければならないほど距離は近づいていた。

そこまでしてこいつを地球に落としたいのか。

決して引かず、フインブルの落着が決定的になつた今でもインパルスは決して諦めようとしない。戦闘に挑む霸氣というものが他のザフトとは違つている。

2連ビーム・ライフルのビームがインパルスの左足を捉えた。フレイズシフト・アーマーが輝き、足がちぎれ飛ぶ。

それでも、インパルスは戦うことをやめようとはしない。攻撃が命中した瞬間さえ怯むことなく前へと進む意欲を見せていたほどだ。

インパルスは止まらない。あいている左腕はバック・パック・フォース・シリエット・からビーム・サーベルを抜き放ち、ミノフスキ・クラフトの加速を最大限に利用して接近してくる。インパルスに基準を置くと、周囲の風景にまともに焦点を合わせることができない。

それほどの速度でインパルスガンダムは一気に距離を詰めた。

ステイニングから見て右側、肩を狙つて斜めに振り下ろされる一撃を、イクシードを後退させてかわそうとする。しかし、速度が維持されているインパルスは執拗に追いすがり、サーベルがイクシード右手のバズーカを切断する。余熱が残弾に引火し、爆発がモニターを一気に覆い尽くした。

問題ない。見えてなどいないが、ステイニングはまったく問題とは考えていない。場所は覚えている。位置は掴めている。空間把握における絶大な認識能力。それが、認められた力。

バズーカは破壊されたが、フェイズシフト・アーマーに包まれた右腕は無事である。爆煙の中を、インパルスの頭部があるはずの位置へと右腕を突き出す。

腕を通して感じる振動。インパルスの勢いを受け止めた腕の装甲の輝きが薄くなりつつある煙を通して見えた。イクシードの腕がインパルスの頭を鷲掴みにしているのだ。

メイン・カメラを覆い隠され、それでもインパルスは冷静にサークルを振り上げた。右腕が切断され、肩越しに覗かせていたビーム砲の銃身までもが両断される。

腕がインパルスの頭を離れた。すでに爆発は落ち着いていた。腕を破壊されたことの爆発の規模は小さい。これで、奴は目撃したことだろう。イクシードガンダムの胸部に搭載されているビーム砲が今までに発射されようとしているということを。

煙が晴れた先には死が広がっていた。

悪意を持つて例えるなら、まるでカビでも生やしたような青緑色をしたイクシードガンダムの胸部、四角い発射口の中心に銃口が覗く。その一点を中心として熱源反応がモニターに映し出されていた。

「俺は……」

ビームに焼かれもしないうちから左頬の痣が焼けるように痛んだ。オープで植え付けられた炎の記憶が呼び覚まされる。

シン・ascaという人間の消滅にひどくあらがう意識が体を動かしてつき動かす。

回避する時間はない。どちらの方向へ逃げようと、敵の射線はインパルスのほぼ中心を捉えている。下に逃げれば頭部と、悪ければジェネレーターを撃ち抜かれる。上ではコクピットを直撃だろう。横に逃げたところでジェネレーターに甚大な被害が及ぶ。

それでも、シンの意識はあくまでも死を拒絶する。

「俺は、死ぬわけにはいかないんだ！」

マニュアルにはない。引いたレバーは、ドッキングの強制解除。

インパルスの上半身、チエスト・フライヤーが上へと浮き上がり、その反動がコクピット有するコア・スプレンダーとドッキングしたままの下半身のレッグ・フライヤーを下へと押し下げられる。

この両者の間に開いたわずかな隙間の中を、イクシードのビーム

は通り抜ける。ビームの輝きが解放されたコクピット一杯にその眩しいどころではない輝きで満たし、シンは全身に熱を感じたほどである。

田を開いていることなんてとでもできない。そして、その必要はないかつた。

インパルスにはすでに指示を出している。ドッキング解除の寸前、シンはライフルのトリガーを引いていた。下半身と離れたチエスト・フライヤーは敵のビームの上で、満足に狙いをつけることなくライフルを発射する。

ビームはイクシードの左肩に命中し、その爆発は背負っていたビーム砲 - - 先程斬り裂いたのは右側で、これは左側のものだ - - を根本から吹き飛ばした。

わずか1秒にも満たない時間の中で。

ジエネレーターが熱にさらされたイクシードはファインブルへと落ちていった。大した高度ではない。小惑星に叩きつけられたイクシードの姿は思いの外はつきりと見えている。

再びドッキングを果たしたインパルスは左足を失い、動作途中で無理矢理ドッキング解除したためかシステムが不安定になっていた。若干スラスターの出力に影響が現れていた。

仰向けに地表に倒れたイクシードガンダムは右腕を失い、ビームのあたりどころから考えるなら左腕さえ満足に動かせるか疑わしい。ジエネレーターにダメージがあるならジエネレーター直結式と思われる胸部ビーム砲を使うこともできないだろう。

見た目ほど両者にダメージの違いはない。どちらも満身創痍であった。

それ以上に、シンはこれ以上戦う意味を見いだせないでいた。

フィンブルの縁から赤い霧が揺らいでいた。すでに大気圏降下が始まっているのだ。

シンが何も言い出せないのは、ビームの熱にさらされたことの疲労故ではない。結果として、シンは消極的ながらフィンブル落着を助けてしまったことになる。地球を必死に守ろうとした誰かを傷つけてまで。そんな無力さが、染み込むようにシンの意識を支配していた。

「もういい……。戦う必要なんてない……」

第2のメテオ・ブレイカーが炸裂し、再びフィンブルに大きなひびが走る。それでも、フィンブルは割れないまま、その大きさを維持していた。大小2つのフィンブルは、いまだにその力を残していた。

戦いはすでに終息の兆しを見せ初めっていた。フィンブルはまだ落着をしていない。それでも、すでに成層圏に足を踏み入れ、離れた場所でさえ重を感じるほど地球に近づいていた。

ラヴクラフト級特殊戦闘ミネルヴァのブリッジで、タリア・グラディス艦長は久しぶりに体の重さというものを感じていた。

赤熱する地獄の釜にくべられたフィンブルは次第に地球へと引き寄せられている。すでに降下は免れない。戦闘が静まりつつあるのもそのためだ。

モビル・スーツはユニウス・セブン休戦条約以後目覚ましい発展を見せたが、大気圏への単機突入が可能な機体は限られる。高熱に耐えられるだけの装甲、フェイズシフト・アーマーに包まれたガンダムでなければ機体に深刻な被害が生じ、何よりパイロットが耐えられないのだ。

ガンダムが支配していた戦場は、やはりガンダムがその終わりを飾ろうとしている。

艦長席の上で、タリアは白い軍帽 - ザフト軍内において指揮官を意味する色である - を膝の上においていた。本来頭に乗せておかなければならぬが、考ごとをする際、帽子は気分として邪魔である。

では帽子の内側で考えようとしていたことは何なのか。それは上層部からの指示であった。フィンブルを地球へ落着させよ。

地球の混乱と破壊を狙つた極秘指令を受けていたのである。

現在フィンブルは2つに割れたとはい、そのどちらも十分な大きさを持つ。大気圏突入で燃え尽きることはない。成果としては十分と言えた。

それでもタリアを決断させたのは受けているもう一つの任務ゆえであった。

タリアは帽子を頭へと戻す。軍人としての体裁を取り戻した艦長はブリッジに響きわたる高らかな声を上げた。

「アリスを発動させなさい！」

「ミネルヴァに副艦長はいない。3人のオペレーターが実質的な副艦長の役目を果たし、こんな場合に指示をブリッジ全体に伝えるのもそのオペレーターたちの仕事である。

その内の1人が振り向かず、そしてあくまでも事務的な口調で疑問を投げかけてきた。

「しかし、アリスはまだ完全なものでは。それに、新たに加わった機体もあります」

「やりなさい。これは命令です」

優秀なオペレーターはこれ以上口答えしようとはしない。ただ艦長が意志を貫くという姿勢を見せただけで、ブリッジの意志は統一された。

「ミネルヴァはこのままの距離を維持し、フィンブルとともに降下。作戦時間、20分に設定。目標、敵戦力の消失。アリス、発動！」

タリアの声は、宇宙の真空中にさえ響きわたると思わせるほど、高らかで明瞭なものであった。

ルナ・マリア・ホークは不慣れなフォース・シルエットに軽い苛立ちを覚えながら声を通信機へと送り込む。搭乗するインパルスのモニターにはシン機の姿が映し出されていた。今、2機のガンダムから狙われている状況にある。声は自然と早口となる。

「シン、聞こえているんでしょ。そろそろ限界よ。帰還……

帰還しましょう。

ルナ・マリアがこの言葉を最後まで続けることはできなかつた。何が明白な原因を見いだすことはできない。ただモニターが突然これまでになかつた光り方をしたかと思つと、ルナ・マリアの意識は混濁した。

意識を失つたわけではない。いきなり夢現の中に放り込まれたようになり前の現実が現実味を失い、当事者としての意識だけが欠落していく。

ルナ・マリアは焦点の定まらない瞳で、まるで人形のようにパイロット・シートに座つっていた。それでも、操縦桿を握りしめる力だけは損なわれていない。

ガンダムを操る人形と化していた。

「こいつら、急に動きが！」

目の前のストライクもどきの動きが突然変わったことに、アウル・ニーダは驚きを隠すことができないでいた。アウルはそれほど戦闘

経験のないあくまでも新兵にすぎない。突然の事態に対応できないでいる。

混乱したこと。しかしそれだけでは説明がつかない。

大したことのない奴らだ。このアウルの評価を一気に覆して、インパルスガンダムは明らかに動きが洗練されたものとなっていた。

アウルのGAT-X255インテンセティガンダム汎用型の放つレールガンを、まるで初めから予期していたかのように無駄のない動きでかわすと、その反撃として放たれたビームはシールドで防がざるを得ないほど際どい狙いであった。

それどころかすぐさま次の攻撃が、シールドの脇をすり抜けるようにしてアームを直撃する。それ自体にはビームを弾く力のないアームはあっさりと破壊され、シールドが弾き飛ばされる。

アウルは声もなかつた。あまりに不気味な攻撃であつた。

正面のインパルスの攻撃ではなかつた。ビームが横というあり得ない方向から飛来したこと自体は特筆することは何もない。ただ敵の援軍が合流しただけの話である。左足を失い、シールドさえなくした別のインパルスが横からアームを撃ち抜いたのだ。

問題はそのタイミングである。まるで正面の1機が攻撃し、それが防がれることを前提として放つたとしか思えないほど間断のないタイミングで正確にアームを狙い撃つたのである。たとえ同じ人間が別々の機体に同時に搭乗していてもここまでタイミングを合わせられるものではない。

「アウル！」

ステラ・ルーシュのGAT-X370ディーゼヴィエイトガンダム
特装型がビームをばらまきながら接近してくる。

「ステラ、来るな！　こいつらおかしい！」

斬りつけてくるのは無傷な方のインパルス。サーベルを無事な方のシールドで受け止めると、その瞬間にはシールドの下を通り抜けたビームの一撃がインテンセティの右足を吹き飛ばした。

目の前のインパルスの真後ろに左足のないインパルスがいることはわかつていた。そのインパルスが仲間にすれすれの場所めがけてビームを放つたのだ。

仲間に当たる危険性を考えなかつたのか。仲間に危険な攻撃をされたことによる怒りはないのか。

左足のないインパルスは躊躇など示さなかつた。サーベルをもつインパルスとて、この攻撃を好機としか捉えていない。強引にサーベルを振るうと、残されたシールドでは庇いきれない左腕の肘から先が切断された。

全身をミノフスキー・クラフトで包むガンダムが傷つくということ。それは思いの外深刻な事態を招く。推進力のバランスが崩れてしまつ。アウルの叫び声さえ飲み込むほどの勢いでインテンセティが投げ出される。赤く熱を帯びた大気に包まれ、地球へと引かれて落ちていく。

余計な横やりが入った。レイ・ザ・バレルは乗機であるガンダムローゼンクリスタルをただ漂わせていた。

先程まで戦っていたガンダムラインルビーンは現在、レイの部下たちが搭乗するインパルスと交戦している。数は4。すでに2機が撃墜されていた。

お前たちにかなう相手ではない。そう言つたところで、今の彼らは聞き入れはしても受け入れることはない。

「アリスか。余計なことを」

レイが冷たく見つめる先で、インパルスたちは機械の「」とき完璧な連携を見せていた。

ガンダムラインルビーンの動きは人の常識というものを超越していた。

インパルスガンダムが正面から接近してくるラインルビーンへとビームを放つ。相手の動きを予測するまでもない。ただ一直線に接近してくるのだ。ビームはまっすぐに紅いガンダムの芯を捉えた。

そして直撃する。ビームは何事もなかつたかのようにラインルビーンを通り抜け、ラインルビーンには傷一つない。

再びビームを放とうとも、ビームはラインルビーンを通り抜けた。

これがハウinz・オブ・ティンダロスを得た者の動きである。敵に近づくためには一直線に加速し、敵の攻撃を最低限度の動きでかわしさえすれば瞬く間に接近することができる。そんな単純明快な絵空事を現実に体現する。

それがハウinz・オブ・ティンダロス。

インパルスにできることなど何一つとしてなかつた。ラインルビーンのサーベルがたやすく胴を斬り裂くと、まずフェイズシフト・アーマーの放つ強烈な輝きが、それから爆発が続いて。

この光景を、ヨウラン・ケントはコクピットの中で目撃していた。

今撃墜されたのは友人でもあるヴィーノ・デュプレの機体である。そのことをヨウランは認識している。しかし、それがヨウランの行動に変化を与えることは一切ない。

モニターから放たれる光を浴びたまま、ヨウランは焦点の定まらない目をしたままドライブルビーンへと攻撃を仕掛けた。

ビームが素通りする。敵は見る間に距離を詰めてくる。それでもヨウランは行動を変えない。力なく、表情のない顔は田の前の現実を、現実として認識しているかさえ疑わしい。

ビームの輝きがコクピット・ハッチを突き破り吹き出してきた時でさえ、ヨウランはただ前を向いたまま、表情をえることさえなく光に沈んでいった。

屍の戦士が戦う。

そんな形容が似合つほど、インパルスの戦い方は不気味とさえ言えた。

シンもまた生氣を失い、黙々と作戦に従事していた。

モニターにすでに爆薬を炸裂させ終えたメテオ・ブレイカー - 1機目のものはフィンブルを碎いた際に中空へと投げ出されているため、満足な破碎ができなかつた2機目のものである - の姿を確認した。

それはフィンブルを碎くために大切なものであるとシンは認識した。しかし理解してはいない。脳裏に敵性施設という言葉が浮かんだ。

シンは躊躇どじりか何の感慨を見せることなくロックオンし、引き金を引く。ビームはメテオ・ブレイカーに膨大な熱量を浴びせかけるとたやすく爆発させる。

続いて、シンは3機目のメテオ・ブレイカーを確認する。これが地球を守る最後の砦である。そうシンにはわかっている。しかし、その事実は現実離れしたものとして受け止められ、シンの行動に何ら制限を加えるものではない。

敵性施設。任務は敵戦力の消失。

すでに大気の影響を機体が覚え始めるほどになつても、シンは任務の達成を至上課題であると認識していた。

NGMF-56Sインパルスガンダムが突き進む。地球最後の希望を破壊するために。

優しい女性の腕が、悲嘆にくれるステイニング・オークレーの体を包み込むように抱いた。狭いコクピット一杯に広がる波立つ桃色の髪が寄り添った。

姉は、ステイニングが姉と慕うヒメノカリスは花のような香りとともにステイニングを抱きしめてくれていた。

「無理しなくともいいなんて励まして欲しい？」

普段から表情に乏しくて、口数も少ない。ただそれがヒメノカリスの冷たさを意味するものではないといふことをステイニングは知っている。

「怖いなら戦わなくともいいって言つてもらいたい？」

手と言葉で優しく撫でてくれた。言つてもらいたいことを言つてもらえた。

逃げ出したい訳ではない。それなら大西洋連邦軍になど、軍人になどならなかつた。逃げ道が欲しいわけじゃない。戦いから逃れたいわけじゃない。

ただ一言の言葉が欲しかつた。

「一緒に地球を守りましょう」

自分を奮い立たせてくれる言葉が。

「ありがとよ、姉貴……」

泣いているでしかなかつた自分に力を与えてくれた言葉を思い出しながら、ステイニングはイクシードガンダムを動かす。ワインブルへと叩きつけられていた機体が起き上がり、その足が強く地面に立つ。

機体が重い。もはやどんな力を使っても小惑星を離脱させることなどできないだろう。破壊するしかない。

イクシードの状態は劣悪であった。右腕を失い、左肩は満足に動かない。胸部ビーム砲はジェネレーター出力の不安定から動きそうにない。背部に背負つた2門のビーム砲はそもそも銃身がいかれている。

ステイニング自身、落下の衝撃で額を切つてしまつたらしい。フェイス・ガードに付着した血の跡を見て、ヘルメットを脱ぎ捨ててしまった。

メテオ・ブレイカーが残り1機。完全な破壊など望むべくもないが、少しでも被害を低減できるはずだ。

敵のインパルスがこちらへと、正確にはイクシードの後ろにあるメテオ・ブレイカーへと向かっている。先程まで交戦していた機体で、その証拠に左足がない。

スラスターに火を入れ、イクシードガンダムを飛び上がらせる。

武器は左手に残された2連ビーム・ライフルのみ。放つと、細長い2筋のビームがインパルスの方へと駆け抜けていった。

命中はしない。やはり肩がだいぶいかれているようだ。ロックオン・サイトとは別の場所に弾が行くほか、狙いを変えた後の追従性にも甘いものがある。まさかゼロイン処理をさせてもらえるとは思わない。

こうしている内にもインパルスはステイリングへと標的を変え、攻撃をかわしながら接近してきていた。

装甲な破損が機動力の低下に直結する - - 破壊された分だけミノフスキ - クラフトが機能しなくなる - - という矛盾に苛立ちを覚えながら、ヒメノカリスはフォイエリヒガンダムをステイリングの元へと向かわせようと急ぐ。

目の前にはインパルスが1機。ヒメノカリスには知る由もないが、ルナマリア機である。

普段なら問題にもならない相手だが、今のフォイエリヒには楽な相手ではない。左腕を失ったことによる重心位置の変化に加え、推力の偏重がより深刻で速度を上げることができない。ハウinz・オブ・ティンダロスを行いつるほどの機動力も確保できず、敵の攻撃を、ビームを弾く黄金の装甲を頼りに強引に突き進む。

インパルスは恐怖など感じていないように攻撃を続けるだけで動かない。距離を詰めたところで腕から発生させたビーム・サーベルを一息で振り抜く。

やはり狙いが甘いらしく、1撃で撃墜してしまつたりがインパルスの両足をまとめて切断する程度でしかない。それともかわされたのか。仕方なく、重量差を頼りに体当たりをくらわせる。

フォイズシフト・アーマーではないフォイエリビの装甲が損傷したことを告げるアラームが聞こえた。それでも、インパルスの体勢を崩し強引に道を開けさせることに成功する。

後少しで、後少しでステイニングの元に行くことができる。

「ステイニング……」

撃ち抜かれた左腕が2連ビーム・ライフルごと爆発した。その衝撃はコクピットを揺らし、開いた額の傷から血が目に入る。赤く染まつた視界が、それでも接近してくるインパルスの姿を明瞭に捉えていた。

イクシードのすぐ後ろにはメテオ・ブレイカーが、人々の命そのものがある。

慌てることはない。焦る必要もない。するべきことは決まっている。

そして、立ち向かうだけの力はすでに『えらべ』ている。

一緒に地球を守りましょう。

空は落とさせない。もう2度とあんな、暗闇が世界を包み込む光景なんかあつてはならない。

引くわけにはいかない。」の後ろにはメテオ・ブレイカーがあるのだから。

アクセルを踏み込むと、イクシードはステイリングの思いに応えてくれるかのように素直に機体を加速させた。

「お前たちなんかに……！」

もはや正真正銘最後の手段である。イクシードは蹴りを突き出した。

ガンダムを捉えるには、ガンダムは傷つきすぎていた。イクシードの蹴りを、インパルスガンダムは軽やかにかわすと左腕のビーム・サーベルをしならせた。

光の剣がイクシードのわき腹へと食い込む。フェイズシフト・アーマーを構成するミノフスキーパーツがビームの熱量を吸収し、それを光として目映い輝きを放出する。そして、フェイズシフト・アーマーがまかないきれいな熱量がチタン合金製の装甲を溶融していく。まだ「クピット」に達していないにも関わらず、ステイリングの体はビームに近い方から立ち上る白煙に包まれつづった。

「光を、返せ……」

まるで少年の心を象徴するみたいに傷だらけの姿をしていた。両手を失い、顔の半分は焼けている。

それでもイクシードは戦うことやめようとはしなかった。メテオ・ブレイカーを最後の最後まで守り抜こうとした。

インパルスのビーム・サーベルがイクシードガンダムの体を横に分けた時、ヒメノカリスは声にならない叫び声を上げた。

ヒメノカリスは普段感情の機微に乏しい。それは父として愛するエインセル・ハンター以外の人物に興味や関心を示せないということであって、無感情であるということを意味しない。

この時ヒメノカリスが示した反応は明らかに激昂であり、その青い瞳には込められた思いは怒りに他ならない。

斬るのではなく叩きつける。それほどの勢いでフォイエリヒのサーべルは振り下ろされる。最強の機体の名を欲しいままにしたフォイエリヒのサーべルはインパルスのサーべルをへし折ると、そのまま左半身を焼き払う。腕が碎けフォース・シリエットのウイングが消し飛び、不躾な乱入者は姉と弟の間から弾き飛ばされる。

ヒメノカリスの目の前には、無事な場所など残されていない傷だらけのイクシードの体があった。

「ステイング……」

こんなにも近い距離なのに、通信は繋がらない。ミノフスキーリー粒子による電波障害であるはずがなかった。

それでも諦めきれない思いがフォイエリヒに手を伸ばせる。イクシードを取り戻そうと手を伸ばした。

その腕に、一筋のビームが突き立てられた。半身を破壊されたインパルスがビーム・ライフルを向けていた。

フォイエリヒガンドームの装甲はビームを弾く。しかし、フレームはその限りではない。肘関節に正確に撃ち込まれたビームはフォイエリヒの腕を引きちぎる。

弟を掴む手を失い、その機会さえ永遠に消失しようとしていた。

第3のメテオ・ブレイカーがようやくその役割を果たそうとしていた。予定深度で炸裂し、その力は2機目のメテオ・ブレイカーによって傷ついていたフィンブルを一気に崩壊へと導く。

フィンブルという盾を失い、高熱を帯びた大気が一気にあたりに吹き荒れる。モニターが赤く染まり、大気の圧力は機体の自由をたやすく奪つた。

ヒメノカリスが見つめる先で、イクシードの体は遠く、遠く離れていった。

「ステイング……！」

今のヒメノカリスには、弟のために伸ばす手さえ残されてはいなかつた。

戦場において戦艦はもはや戦力に数えられるのではない。特に、モビル・スーツがその真価を發揮するような戦場ではなおさらである。

ダーレス級MS運用母艦のブリッジでは渋い顔をしたイアン・リー艦長がクルーたちの視線を集めていた。誰もが口惜しそうな顔をしている。

今まさに小惑星が地球へと落ちようとしている光景を前に、何もできないうじが歯がゆくて仕方がないのだろう。それはイアンと同じである。

だが、同時に皆が知っている。皆が知っていることを、敢えて口にすることもまた、艦長としての務めである。

「ダーレス級に大気圏突入能力はない。残念だが撤退せざるを得ない」

わかりきつていたことを、しかし渋々と受け入れたクルーたちが視線を前に戻す。

イアンは軍帽を深く被りなおした。たとえ誰も見てはいなとは言え、この艦長席の上で不安げな表情を見せるることはできない。ガーティ・ルーに搭載されていた各機ガンダムはそのどれ一つとして帰還してはいなかつた。

「ヒメノカリス大尉、どうかご無事で」

誰にも聞こえぬほどの中声で、イアンは地球へと落ちていく赤い塊の群を見送つた。

損傷の激しいインテンセティガンダムを底うようモビル・アーマー形態に姿を変えたディーゼヴィエイトガンダムの背中に乗つていた。赤熱する大気をディーゼヴィエイトのフェイズシフト・アーマーが光に変える」とで受け止め、また、かき分けることでインテンセティを守る。

「アウル？」

「俺は大丈夫だ……。それより、姉ちゃんやスティングは？」

「わからない……」

「そうか……」

寄り添う2機は、それでもこれ以上の会話を交わすゆとりもなくゆっくりと地球へと降りていく。

機動力の要であるフォース・シリエットには深刻な被害が及んでいる。加えて機体そのものの損傷が激しく、シンの乗るインパルスは燃える大気を纏いながら降りるのではなく落ちていく。

「くそ、メイン・スラスターもアポジ・モーターもやられてる！」

戦闘中も意識はあった。しかし目の前で起きていることを現実と、夢ではないという確信を持てぬまま、いつの間にか敵のガンダムを

撃墜していた。気づいてみる - - これもおかしな表現だが - - と突然自分が如何に危機的状況におかれているのかが鮮明となつた。

推進力を使う大半の機器が破損するなどして使用できなくなつて いる。このまま減速なしで大気圏に突入すれば燃え尽きる可能性があるとアラームが警告を発している。

発しているだけだ。何かしてくれるわけではない。

幸い、コア・スプレンダー本体は無事であるらしい。燃料も残つていれば、大気圏内の飛行も想定した造りとなつて いる。問題はフェイズシフト・アーマーを持たないコア・スプレンダーがこの高熱に耐えることができるのかと言つことである。

だが、このままで高熱に焼かれるか、でなければ地表に激突してバラバラになるだけだ。シンは覚悟を決める必要があつた。ドッキング解除用のレバーを握り、決意を再確認するために深呼吸をする。

レバーを引こうと深呼吸をした時、突然通信が繋がつた。

「インパルスのパイロット、ドッキングを解くなです！」

「女の子……？」

明らかに聞こえたのは女性、それも若い少女の声であつた。シン自身、まだ16という年齢で戦場に出て いる身だが、やはり子ども の声が聞こえたということには違和感を禁じ得ない。

モニターに、インパルスのすぐ前にどこからともかくモビル・ス

一ツが飛来している姿があった。

インパルスと同じガンダムの顔をしている。青と白を基調とした落ち着いた色合いの機体で、印象は「自由と正義の名の下に」で主役のアスラン・ザラが搭乗していたZGMF-X10Aフリーダムガンダムに似ている。前の前の機体もフリーダムガンダムと同じように戦のように鋭い翼を両対も持っていた。

「聞こえるか？ 幸いそのインパルスはフェイズシフト・アーマーが作動している。こちらで支えるからこのまま十分に減速がすむまでこのままにしておいた方が得策だ」

今度聞こえてきたのは凛とした雰囲気を持つ若い男の声。複座式のモビル・スーツは大変珍しい。そうなると、先程聞こえてきた少女の声は一体何だったのだろう。

今は返事をする方が先である。

「り、了解です」

つい敬礼をしてしまった。なかなか馴染まないと思いきや、慌てた時にはついこの動作をしてしまう。軍学校で培つた経験は、半年とちよつとだつたとは言え、どうやら無駄ではなかつたらしい。

「少し暑くなると思うが、我慢してくれ」

翼のガンダムがインパルスを後ろから抱えるように保持してくれたことで、温度上昇が許容範囲内に落ち着き始めた。パイロットの言葉通りフェイズシフト・アーマーが熱を吸収してくれていると言え、熱がコクピットの温度を上げていた。

まるで、地球を苛むことに荷担してしまったシンのことを苛んでいるよつこ、大気は高熱をインパルスへと浴びせ続けた。

フィンブルは大小9つの破片となつて地球へと降り注いだ。最も大きなものは1機目のメテオ・ブレイカーによつて破碎されたものであり、赤道同盟の都市、上海を直撃し甚大な被害をもたらした。

2機目、3機目によつて碎かれたフィンブルは8つに分裂。さらに細かい破片は大気との断熱圧縮によつて燃え尽きた。

結果として想定されていたほどの被害にはならなかつたとは言え、破片は太平洋西岸からインド洋にかけての広い地域に落着。4つの国と地域に渡つて多大な被害をもたらせた。

ヨーラシア連邦、赤道同盟、東アジア共和国。そしてオープ。

オープを除いてどれも皆反プラントを政策に掲げている国である。そしてオープもまた、中立とは言えその立場は反プラントの急先鋒大西洋連邦に近い。

プラントに理解を示す国が被害を受けなかつたことは、確率的に不自然ではない - - プラント寄りとされている国は全11力國中2力國しかない - - とは言え、誰もに暗い予想を強いた。

ザフト軍が露骨なほど妨害工作を行つたという事実は地球の反プラント感情をさらにも悪化させるという結果を招いた。

プラントとの関係は悪化の一途をたどり、誰もがフィンブル落着ですべてが終わつたと考えてはいな。

フィンブル。世界を滅ぼす長い冬は、その名の通り風の冬を終え、そして人と人などが殺し合ひ剣の冬を迎へようとしていた。

最愛なる魔王さま。あなたはとても誠実なお方です。誰かを欺こうとするおつもりがないからです。嘘しか言わぬ者のようにあなたは誠実です。誠しか述べない者のようにあなたさまは誠実です。どちらも人を欺くことはできません。

だからあなたは魔王です。『*血身の悪意と力を偽りつとされな*いから。

だからあなたさまは愛されます。時には殺してしまいたいほどに。

次回、*ガンダム SEED Destiny - Blumene inbrecher*

「最愛なる魔王さま」

自らを狩りたてる者。それが、魔王が自らに定めた名。

第8話「最愛なる魔王やな」

赤道同盟、旧ベトナム地区ソンニ市。

フインブルの落着によつてもたらされた被害が最も大きな場所の一つである。元々大きな街ではなかつたが、そのほぼ中央に欠片の一つが落下、そのため高層ビルが数基に渡つてなぎ倒され判明した死者だけで5000、行方不明者はその数倍に達するものと予測されている。

瓦礫の中、中腹で胴裂きにされたビルの亡骸が冷たい雨に打たれていた。雨粒は瓦礫を濡らし、人の死を嘆く涙のように滴となつて落ちる。

人々は郊外に張られたいくつもの簡易テントの下で雨をしのいでいた。寒さに震える者、傷の痛みを訴える者が時折散見されるだけで、多くの人は小さく座り、狭いテントの中で肩を寄せ合つている。

その多くが必死に何も考えまいとしていた。フインブルが、小惑星の欠片が落下してきてからまだ半日と立っていない。

空を切り取つて落ちてくる小惑星の塊がソンニ市最大の高層ビルを貫通して、街をえぐりとつた。ちょうど横腹を喰い取られたように変わり果てたビルはまもなく倒壊。大量の土煙と瓦礫をまき散らしながら街を破壊した。

この光景を誰もが思い出さないよう努めていたのである。

立ち上がるはずなどない。顔を上げることができぬほどの余裕

もない。

そんな中につつて、その声は風のよつに入々の間を吹き抜けた。

「痛くなつたらすぐ言つてください。包帯を取り替えましょ」

それは青年であった。丁寧な手つきで幼い少女の手に包帯を巻いている。身を包む純白のスーツは袖口が血に汚れ、背中は水に塗っていた。高級スーツを汚すことを厭わないほど、この青年が多くテントを周り、怪我人の応急手当に当たつていたことを物語る。

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

少女の屈託のない微笑みに、青年は微笑み返す。

雲に遮られたわずかな光にさえ、その黄金の髪は豊かな光沢を放つ。その肌は透き通るよつな白であり、瞳は澄んだ青。その微笑みは描かれた絵画のように完成されていた。

周りに座つている人々はまるで心奪われたように青年の行動に注目せざるを得ない。青年は少女の額を優しく撫でると立ち上がり、雨を構うことなく歩き出す。その様子に、人々の視線は引きずられ一斉に動く。それでも少女だけは視線を落とし、青年が巻いてくれた包帯に何か特別な意味でもあるかのように愛おしげに撫でている。

「いい人に治してもらえてよかつたね」

すぐ隣にすわる女性は、恐らく少女の母親であろう。本人もまた頬に血の跡を残しながらも少女が少しでも元気を取り戻した様子に安堵しているようである。

「天使さんで、もしかしたらお兄さんみたいな人なのかな」

そこは群衆に埋め尽くされていた。屋外の広場である。格式高い建物に囲まれたその場所は、まさに隙間が見えないほどの人々—その多くが若者である—が、しかしあわめきの一つなく同じ方向を見ている。

「これはプラントの首都であるアブリリウス市。そして人々が見つめる先には、この国の王が控える。

高くなつた会場。その上に演説台が置かれ、設置されたマイクの多さは王の言葉を余すことなく拾いあげんと待ち構えている。そして王は立つ。

ギルバート・デュランダル・プラント最高評議会議長が聴衆の前にその姿を現したのである。

物音一つない会場。しかし、それが冷めた空氣を演出することは決してない。それどころか集まつた若者たちの眼差しは瞬きさえ忘れ議長の一拳手一投足を見逃すことはない。

デュランダル議長は演説台に両手をついた。それは今すぐにでも飛び出してしまいそうな自身の体を抑えているかのように力強く、瞬く間に聴衆の歓心を掴み取る。

「小惑星落着は悲劇だった」

議長の声が広く深く染み渡る。

「しかし敢えて言おう。その悲劇はナチュラルの愚策によつて引き起こされたものであると。我々の平和への切なる願いを、彼らはコニウス・セブンの大地で、たつた1発の核によつて奪い去つた」

手振りを交え抑揚豊かに、そして、その声は耳に心地よい。

「その時我らは知つた。ナチュラルはコーディネーターを心の奥底では妬み、そして嫌つてゐるのだと！ よつて私はナチュラルの進行を許さなかつた、許すことができなかつた。これ以上、諸君らに血のバレンタイン以上の悲劇を田の当たりになどして欲しくなかつたからだ」

途切れの言葉。ギルバート議長はさも聴衆の1人1人と視線を合わせるよつて首を回す。

「信じよと言うのか？ 委ねよと言つのか？ かつて我らを縛り、命さえ呵責なく奪う者どもに何を任せることができるものか！」

机を叩く力強い音が響き、議長のお言葉は次第に熱を帯び始める。

「だから私は武器の使用を許した。結果として小惑星の落着という悲劇が起きようとも、私は兵に死を強要することはできない！ 我々は忘れない。ナチュラルの蛮行と血のバレンタインの悲劇を！」

ざわめきさえ起ることのない聴衆は、意志の統一が果たされてゐるにも等しい。すべてが議長の言葉に耳を傾け、自らの正當性を、相手の非を、議長の正しさを確認する。

「諸君らの平和への切なる願いは重々承知している。だが、今一度諸君らの力を貸して欲しい。私に奮い立つ勇気を『与えてもらいたい。悪魔と戦うために！』そしてそれを打ち破るために！」

何故地球に小惑星が落ちなければならなかつたのか。それは結果として妨害してしまつたザフトの責任ではない。仲間にそのような手段を取らせてしまつた敵のせいである。

ブルー・コスモスが血のバレンタインなど、20万を超える同胞の命を奪わなければこんな悲劇は起るはずもなかつたのだ。

そして悲劇はまだ終わりを迎えていない。世界を蝕む毒素は取り除かれてなどいない。戦わなければならぬ。たとえ、どれほど平和を希求しようとも。

ギルバート・デュランダルの後ろにはラクス・クラインが、かつて平和を望みながらも散つていつた穏健派代表シーゲル・クラインの愛娘の姿がある。デュランダルこそが平和の正当なる後継者であることが示される。

「気高きコーディネーターの英知と力は決して潰えてはならない。ブルー・コスモス、エインセル・ハンターの魔手に潰されてなどならぬ！」

議長から贈られる言葉は未来を担う重責と誇り。

「心折れそうな時は思い出せ。血のバレンタインに散つた同胞の慟哭を！」

それがすべての始まりであった。そして、それを引き起こしたの

はブルー・「スモスに他ならない。

「正義は我らとともにある」

「一デイネーターを率いる最高評議会議長は高らかにその右手をかざした。

「勝利を我らに」

もはや限界であった。堰を切ったように人々の声が広場を埋め尽くす。ある者はギルバートの名を高らかに呼びながら、議長を真似てその右腕をかざした。プラント万歳。そんな人々の声が響き合つ中、次第に人々の声が重なり、寄り合わせられていく。

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！..」

「勝利を我らに！..」

プラントの王は静かに、しかし誇らしげに群衆の熱意を全身で受け止めていた。

「一デイネーターの、一デイネーターによる、一デイネーターの国は、一デイネーターのためだけに立つのである。

世界安全保障機構。かつて地球上に見られた国際連合よりも北大西洋条約機構に近いこの組織は多数の国と地域によって構成される世

界規模の軍事同盟である。ヨーロッパ・セブン休戦条約以後、プラントという共通の脅威に対抗すべく8つの国と地域によつて結成されている。

本拠地を大西洋連邦旧アメリカ地区ニューヨークに構え、ここに集められた各国代表が今後の地球のあるべき姿を占つのである。

参加国の特徴として、無論であるがその大半を反プラントを明確にしている7カ国が名前を連ねている。唯一の例外はヨーロッパ・セブン休戦条約の仲介にあたつたスカンジナビア王国である。

よつて、中立を表明しているオープ首長国、また、比較的プラントへのシンパが多いとされる汎ムスリム同盟、アフリカ共同体の3カ国がこの椅子を並べてはいない。

各国が平等 - - たとえ形式的であつたとしても - - であることを示す円卓が置かれ、壁には参加各国の国旗とともに世界地図がかけられている。

ここが世界安全保障機構本部であり、並ぶ者の議題は決まりきつていふことであつた。

椅子から身を乗り出し熱弁を振るうのは赤道同盟代表ソル・リューネ・ランジュ。まだようやく30になつた程度の若者であり、赤道同盟内で確たる影響力を有するロームフェラー・グループの御曹司である。着こなすスーツと短くそろえられた髪は上品さを印象づけるが、それは同時にソル代表の若さを強調してゐた。

エイプリルフル・クライシスの際にはカオション国際空港を破壊され、この度のフィンブル落着では甚大な被害を受けた國らしく

その鼻息は荒い。ただそれは、まだ実績の伴わない若造が必死に声を荒げていると見えなくもない。

「今回のプランントの行動は許しがたい。」このことに異論を挟む者などいないことだらう」

協力を拒んだばかりか、あからさまとさえ思える妨害工作さえ行った。その結果被害の桁が跳ね上がってしまったことを語っている。

「東アジア共和国をはじめ、オープ首長国、コーラシア連邦、我が赤道同盟を中心として甚大な被害が生じている。死者行方不明者合わせて100万を超える未曾有、この言葉は聞き飽きたかも知れないが、それほどの被害が生じている」

エイプリルホール・クライシスでは約10億の人命が、ザフトが使用しようとしたガンマ線照射装置ジエネシスは試算では地球全土の生命の9割が死滅するとされていて。

赤道同盟代表の主張に一切の誇張はなく、反対意見を述べる国はない。もとより、反プランントを謳ひ國の集まりであるのだから。

「所詮プランントの『一デイネーター』もは地球のことなど何とも思っていないのだ。もはや残された道は一つしかない。戦争だ!」

しかし、いざソル代表が戦争という言葉を口にした途端、各国の反応は分かれた。フィンブルによる被害の大きい国は難色を示しかねてからプランントとの戦争を主導してきた大西洋連邦、コーラシア連邦の2カ国が意欲的である。

赤道同盟ほどの勢いはなく、どの国も立ち上がりうとはしない。

ソル代表のみが取り残されたように起立していた。

続いて発言した国は東アジア共和国である。フィンブル落着の被害が大きくはないが、決して国力潤沢とは言えない国である。その発言は、どこか一歩身を引いたものであった。

ラリー・ウイリアムズ首相。完全に禿げ上がった頭が特徴的な形をしている初老の男性である。不機嫌そうに顔をしかめ、しかしそれが普段の表情であるらしい。聞こえてくる声は静かに抑揚に乏しいものであった。

「しかし、現在地球の国は程度の差はあれ被害を受けています。までは被災地への救援と復興が肝要ではありますか？」

「そうしている内に今度はプレア・ニコル・キャンセラーとやらでも落とされるかもしませんな」

皮肉を言い放つのは南アメリカ合衆国代表、エドモンド・デュク口。礼装が似合わないほど無骨な顔に、隠しきれない屈強の肉体を持つ。明らかに武人を思わせるこの中年男性は南アメリカ軍准将の肩書きをもつ軍人である。

現在の地球ではフレア・ニコルによる原子力発電を再開している。ニコートロン・ジャマーの影響から解放され、慢性的なエネルギー不足解決を目前にしたフィンブル落着である。

エドモンド将軍の言葉に、意見するものはおりず、将軍はいつも剛毅な笑みを絶やすことはない。

意見が意見を潰し合つ。

赤道同盟のソルの代表はいつの間にか着席を果たしている。それをよいしきり直しと捉えたように、大西洋連邦が動く。

最大国家大西洋連邦からはいくら本部が置かれた国であるとは言え、ジョセフ・コーフラント大統領が参加していた。対プラントへの力の入れようが伝わるというものである。

「コーフラント大統領は、フィンブル落着の危機を告げた時と同様、どこか凡庸としながらもまるで動じることのない態度で会議の様子を見守っていた。

「どう対処するにしろ、プラントは地球にとつて脅威に他ならない。それだけは忘れてはなりません」

誰もが理解した。これは釘をさしているのだと。プラントへの抵抗の構えを崩すことは許さない。この静かな恫喝は、発言の少ない厭戦派の国々の動搖を招いた。

しかし、必要以上に威嚇することはない。それが、ジョセフ大統領のやり方である。表情を変えぬまま、しかし攻撃の手は緩まない。

世界地図を背にした場所に座る男がいた。それは、この男が国を代表している訳ではないことを意味している。色素の薄い髪と肌。ベージュ色をしたスーツが男の細面と相まって紳士的ながらひ弱な印象を演出している。

「コーフラントはその男へと声を発した。

「ブルー・コスマスとしては、本件をどうお考えですか？」

現ブルー・コスモス代表、ロード・ジブリーへと。

かつてブルー・コスモスには3人の代表が立っていた。しかし、ムウ・ラ・フラガがジェネシスと引き替えに命を落とし、ラウ・ル・クルーゼは体調不良を理由に代表職を退いた。また、最後の1人であるエインセル・ハンターはアラスカ基地における味方の犠牲を省みない作戦の責任者——ユニウス・セブン休戦条約によって戦犯として扱われてはいなかったとして自ら代表を退いた。

自らモビル・スーツを駆り戦場に出向く前任者に比べたなら、ロード・ジブリーは物足りない指導者として受け入れられている。

その下馬評正しく、ロード代表はネクタイを直す、そんなありふれた動作から話を始める。

「休戦条約からわずか3年。現在でもまだ宇宙戦力は十分とは言えません。復興をしつつ、プラントの様子に目を光らせておくべきでしょう」

この言葉は正しい。ジェネシスの2度の照射によって宇宙軍は壊滅的な被害を受け、月面のプトレマイオス基地は破壊された。復興にも時間と予算をとられたため軍の再編は必ずしも十分ではない。フィンブル落着に対しても十分に宇宙軍が活躍できなかつた理由の1つはその絶対数の不足である。

冷静で、正しく、しかしここが物足りない。

武闘派で知られる南アメリカ合衆国代表エドモンド将軍は大仰なほどに嘆いてみせた。叩かれた机が大きな音を立てる。

「何と弱気な。英雄エインセル・ハンター殿が代表を務めていた折りには、かような発言が聞かれることなどなかつた！」

文民であるロードにエインセルほどの覇氣を期待することはできない。しかしロードとて世界的な思想団体ブルー・コスモスの代表を務める男である。威圧できぬということが、だがたやすく折れるということではない。

「ブルー・コスモスとは元来NGOにすぎません。私としては武闘派としてではない、正規の思想団体であるブルー・コスモスの方の周知を望んでいるのです」

ロード・ジブリー代表とエドモンド・将軍の争いは、角を生やした羊と大熊の戦いにも似ている。

確かに先代の3者が代表を兼任しているラタトスク社の資金面、人材面でも支援によつてブルー・コスモスが影響力を拡大していく経緯は否定することはできない。

同時にブルー・コスモスは元々遺伝子操作を否定する思想団体であり、武力集団として見られていることには違和感を覚えるメンバーも少なくはない。

ロードにとつてエインセル・ハンターという偉大な先達は、時に厄介な存在である。ブルー・コスモスとエインセル・ハンターの印象が強く結びつきすぎて新しい一步が踏み出しにくくなっているのである。無論、エドモンド将軍のようにエインセルの強力なカリスマ性の再臨を求める者が多いこともその一因である。

それぞれプラントを野放しにできないという事実認識において共通していると、その意見は決して一枚岩ではない。国力、あるいはプラントへの敵対感情が大きい大西洋連邦、ヨーラシア連邦、南アメリカ合衆国などは徹底抗戦を主張するが、フィンブル落着の被害激しい地区は割れている。赤道同盟などは抗戦派であるが、発言の少ない東アジア共和国は現状維持の弱腰の姿勢が透けて見える。そして、フィンブル被害が少なく、国力も弱い南アフリカ統一機構、大洋州連合の姿勢は東アジア共和国の立場に近い。

結果、元から中立であるスカンジナビア王国を除いた国々の反応は抗戦派と現状維持派とで4対3とほぼ半分に割れていた。

この状態は1国でも主張を変えればたやすく情勢が定まる危うい数である。では、スカンジナビア王国はどうな反応を示すのか。各国を代表する7名の視線が自然と円卓の一角へと集中していく。

それを持ちかまえていたように、スカンジナビア王国代表、マリア・リンデマン。事務次官であり、あまり外には知られていないが、スカンジナビア王国の王女でもあるこの人物は、その静かな物腰を保つたまま、その眼差しを瞬かせる。宗教上の理由からブル力を被り、その全身の内、瞳しか露わとされているところはない。しかし、その視線だけでも、マリア・リンデマンがまだ若く、若くともこの場にいることのできる胆力を併せ持つ人物であることはうかがいられる。

「皆様ご存知の通り、地球は大変な被害に見舞われました。ここに戦線を拡大することは地球にさらなる損害を与えるかもしれません。こんな時こそ、私は引き締めが必要と考えます。ユニウス・セブン休戦条約は守られなければなりません」

単に条約の仲介国としてユニウス・セブン休戦条約の形骸化を警戒しているだけなのだろうか。事実、モビル・スーシの開発数などすでにその効力を疑問視する向きがある。

だが、単に自身の功績に拘泥しているだけにしては、マリアの眼差しは確かに光をたてている。物怖じせず、どのような反論さえ受け入れる構えを見せていた。

「この場の誰もが思い出さざるをえない。」のマリア・リングデマンこそが、リングデマン・プランと呼ばれることがあるユニウス・セブン休戦条約の起草者であるということを。

ソンミ市上空の雨がやんだ。しかし、それは何ら救いを意味する比喩ではない。空が晴れ渡り、瓦礫の山を赤く染めている。昼に流された血が惨状を染め上げていた。

下を向く人々は涙をこらえ、見上げる人々は不安におののいた。眼下には血に染まる瓦礫。上空にはヘリの一団が編隊を組んでいる。その一団もまた、夕日を浴びた赤。その色合い以上に、分厚い装甲を張り付けた明らかな軍用ヘリという出で立ちは、人々を不安がらせるに十分であった。

避難民の詰めかけるテント群の脇には救援用のヘリの白く、どこか優しげとも思える丸みを帯びたシルエットがあった。そのまま脇にエインセル・ハンターが手当をした少女が、その白い包帯が巻かれたままの手で強く隣に立つ母親の手を掴んでいた。

人を殺す兵器という存在に、少女をはじめとして誰もが恐怖さえ

覚えて見上げている。

そのヘリの中、場違いな椅子が置かれていた。木目さえも計算された見事な細工の施された椅子は、軍用どころかどのようなヘリにあつても不似合いなものである。椅子にはスーツ姿の男が腰掛け、すぐ脇には血のように赤いワインがグラスに注がれていた。

男はエインセル・ハンター。隣には妻である女性、メリオル・ピステイヌを侍らせている。エインセルとは異なり、大西洋連邦の軍服を身につけたメリオルは手元の資料を読み上げながらエインセルのすぐ側に立つ。秘書もかねるメリオルは、ただし単なる秘書以上の視線を、時折夫であるエインセルへと向けている。

「物資も医薬品も足りていません。この度の支援で届けた物資も、長くは保ちません……」

メリオルは眼鏡の奥で、それでもわかるほどに表情を曇らせた。エインセルが穏やかな表情を崩さないことと対照的に。

「香港空港の輸送機を使用してください、メリオル」

「しかし、それでは防衛力に問題が……」

「構いません。今は、1人でも多くの命を救うことが先決です。メリオル」

ヘリの駆動音が響く。だが、メリオルの声が聞こえなかつたのはそのためではない。この2人の関係なの。エインセルは常に正しく、メリオルはそれに従う。

そこには、1人でも多くの人を救いたいというエインセルの切なる願いが込められている。

エインセルが構わないと言つた以上、メリオルもそれに構うことを見めた。資料のページをめぐり、話題は次へと移っていた。

「各隊攻撃準備、整つたとのことです。ザフトの降下部隊を捕捉したと」

「では攻撃を始めてください。今は、一滴でも多くの血が見たい」

そう、エインセルはワインを口に含んだ。

血の色をした液体が、彫像のように美しい男の喉を潤す。人が夢想した夜の貴族が夜闇を待ちかまえているようにも錯覚させられる。

避難民のためにいち早く駆けつけた天使の姿はそこになく、魔王と呼ばれ恐れられた男の姿がそこにはあつた。魔王が飲み干した美酒は、いつだとて血の香りが漂つっている。

「これはどこの誰も知らない。

不気味なほどの静謐さが空間を占有し、金属の板が張り付けられた壁と床は時折冷たく鳴った。モビル・スーツが左右に3機、合計6機たたずむほどの広さを持ちながら、居並ぶ人々は誰一人として声を発しようとしていない。

ここは格納庫であるということは要として知れた。

機体はNGMF-23Sセイバー・ガンダム。それですべて統一されている。

何より赤い機体である。バック・パックには長大な銃身が1対、さも折り畳まれた翼であるかのように取り付けられ、地球軍のGA T-333ディーヴィエイトガンダム同様の可変機である。

仮にディーヴィエイトを猛禽と表現するなら、セイバーは禿鷲。死肉を求める赤い禿鷲であつた。

格納庫へと並ぶ人々とセイバー・ガンダムへと、奥から突然声が投げかけられた。高くなつたキャット・ウォークの上にザフトの軍服を着た軍人が右手を高く上げ、その声を張り上げていた。

「我々は危険な降下をくぐり抜け、今こうして敵の奥深くに潜むことに成功した！　これはまさに運命と言わざるを得ない。世界は我々による変革を期待しているのだ！」

ここには地球である。誰も知らぬ海の中なのだ。

ザフト軍はフィンブル落着の混乱に乗じる形で、多数の部隊を地球へと降下させた。ある者はアフリカ共同体の砂漠地帯に降下し、またある部隊は大量の物資を東アジア共和国の友軍へと届けた。そして、この部隊はボズゴロフ級潜水艦を直接海へと降下させ、そのまま戦力として戦うことが期待されている。

フィンブルの落着はまさに好機であったのだ。フィンブル迎撃に地球軍軌道艦隊の多くは出向かざるを得ず混乱し網に穴が開いた。その隙間を降下した部隊がいることに地球側が気づくのはいつにな

ることだろうか。多くはフィンブルの破片として片づけられてしまうに違いない。

降下のために必要な敵部隊の部隊の排除と攪乱をフィンブルは同時にしてくれたのである。

これを運命と言わず何とすべきか。

演説する男は声が枯れんばかりの力を腹に込める。

「デュランダル閣下は言られた。正義は我らにあるのだと！ 我らが立たねばならん！ 未来を担つ我らコーディネーターこそが唯一世界に正しき未来をもたらすことができるのだ」

そこにギルバート・デュランダル議長ほどの熱狂は感じられない。しかし、演説者が高らかに決まり文句を口にした途端、格納庫は興奮の坩堝に投げ落とされた。

「勝利を我らに」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

初めは誰かが同じ文句を続けただけであった。しかしぬくと声が続き、やがて大きな波となつてこの空間を支配する。自らの意志と力を示すため、誰もが右腕を高く掲げ、仲間と同じ志を共有することを確かめ合つ。

静寂とは、まったく音のことではなく、数少ない音しか聞こ

えないことであるのとするならば、ここは静寂に包まれている。ただ己の正義と力を贊美する声しか聞こえてこないのだから。

その静寂が、突如として破られた。

格納庫全体を大きな揺れが襲う。手を掲げ立ち尽くしていた人々が倒れるほどであり、演説者はキャット・ウォークの手すりに掴まり、耐えなければならなかつた。

「何事だ！？」

「敵襲です！」

どこからともなく聞こえてきた報告を確からしめるように、格納庫の天井が裂け、膨大な水が文字通り堰を切ったように流れ込み始めた。

水が人々を、その声ごと押し流す。中には気丈にもセイバー・ガンダムを目指し、コクピット・ハッチ備え付けのロープにしがみつくようにして機体へと乗り込む赤いノーマル・スーツのパイロットの姿もあつた。

ハッチの閉鎖。システムの立ち上げ。暗いコクピット内に明かりが灯り、モニターは床一面がすでに水没してしまった格納庫の様子を捉える。その中には溺れまいと貨物に必死にしがみつく整備士や、仲間を助けようと敢えて水の中に飛び込むパイロットの姿を確認できる。

だが、確認などしてはならなかつた。

一際大きく水が格納庫へと流れ込む。その水は輝く眼を持つていた。深海の暗い水が悪意を持つて動き出したような深い青をした何かがそこにはいる。そのことに気づいた瞬間、モニターが割れた。モニターばかりではない。ハッチも、装甲も、それからモニターが碎かれ、何かがパイロットを通り抜けるとセイバー・ガンダムを串刺しにする。

その光景を、周りのザフト兵は目撃していた。格納庫に突如現れたガンダム・・GAT・252インテンティ・ガンダム・・がその全身を青く染めた体で三叉戟を突きだし、セイバーを貫いた。

突然で、そして致命的。そんな凄惨な光景に人々は水に弄ばれている現状さえ忘れ、目を見開いていた。

表情のないガンダムの顔が、しかし血に酔つたような残酷な笑みを浮かべたように見えた。

インテンティ・ガンダムは背中の甲殻類を思わせるバック・パックを被ることもなく、ただ槍だけで殺すことを決めたようだ。セイバーの腹部から槍を引き抜くと、無造作に隣のセイバーの胸に突き立て、そのまま下へと撫で斬りにする。臓物でもまき散らすかのように内部部品がすでにガンダムの膝にまで溜まつた水へと落ちた。

ガンダムとて兵器にすぎない。パイロットのいない兵器を破壊することほどたやすいものはない。そして、頼みの綱のパイロットたちは今水にまみれ、生き抜くことだけで精一杯であった。

演説者は壁に備え付けられている通信機へと手を伸ばす。すでに水はキャット・ウォークの高さにまで達しそうとしていた。

「ブリッジ、何をしている！」

しかし、通じてはいるはずの通信機から返事が来ることはない。最悪の予感が、演説者の手から力を奪い、通信機が床に落ちるとともに水音をたてた。すでに水が乗り越えてきていた。

「私の部隊が……、馬鹿な、そんな馬鹿な……」

この場所から、先程まで精兵たちが居並んでいた精悍なる光景を目の当たりにできた。

しかし今はどうだ。水が兵たちを押し流し、全身を青く染めたガンドムが腰まで水に浸かりながらもなお水は天井から押し寄せている。

インテンセティガンダムがバック・パックで頭部を覆い隠す。怪物のように大きな頭部のちょうど口に当たる部分にビームの発射口があった。そこが熱を帯びている様子に、演説者は床に溜まった水中へと腰を落とした。

しかしその目が恐れているのはビームそのものではない。バック・パックにアームで繋がれた2つシールド、その表面に描かれた紋章であった。

1輪の青い薔薇が描かれた紋章が見えた。いまだに各国に対して強い発言力を持つブルー・コスモスが軍部に対して認めさせた特設部隊が存在する。それはすべてのパイロットに対してガンダムの使用が認められ、権限は正規部隊の1階級上に等しいとされる。何より軍上層部ではなく、ブルー・コスモスの意向を受けて動くとされる私兵にも近い。

その名はファンタム・ペイン。

「コーディネーター排斥を謳うブルー・コスモスの力そのものである。

青い薔薇を掲げるインテンセティの放つたビームが、強烈な輝きでもって演説者を包み込んだ。

海面に落ちた残骸を分け進み、燃え立ち上の煙を道しるべに、大西洋連邦軍ステイガラー級MS搭載型強襲揚陸艦は海上を進んでいた。

残骸とはZGMF-1000ΖΔのものである。そのすべてが破壊され、総数は明らかではない。煙の柱の数から、両手でも数え切れぬほどであることは明らかである。

ステイガラー級MS搭載型強襲揚陸艦はモビル・スーツ開発以前から使用されていた空母らしく、戦闘機の運用を意識した作りとなっていた。正面カタパルトの他、左右にサブ・カタパルトがV字に取り付けられている。そんな独特の形状を持つ甲板へと、モビル・スーツが次々と降り立つ。

薄い青をしたGAT-3333ディーヴィエイトガンダム。モビル・スーツ形態のまま、足を甲板へと下ろす。高い機動力で知られるディーヴィエイトをゆっくりと眺めることができる機会などそうはない。その背中にあるウイングに青い薔薇の紋章が描かれていることを田にできるのは、合計4機ものディーヴィエイトが直立不動のま

ま甲板に弧を描くように並んでいなければそつそつと眺めることなどできない。

そんな弧の中央部分へと降り立つのは、はつきりとした赤であった。青薔薇の紋章こそないものの、それはガンダムである。単なる雑兵に与えられるものではない。

NN-X5N000KYガンダムラインルビーン。それが撃墜したザフトの機体を鑑みたなら、それがファントム・ペインか否かなど大した違いには思われないことだろう。

飛行するコア・スプレンダーの中で、シン・アスカは様々な不安感を拭えないでいた。大気圏内を飛行すること自体初めてのことである。久しぶりに帰ってきた地球は、相変わらず広大な海という水たまりを持っていた。その上を、シン飛び続けている。

果たして母艦であるラ・クラフト級ミネルヴァと合流できるだろうか。降下したことは確認したはずで、その地点もわかつている。それでも不安感が拭えないのは、帰艦することそのものが初めてという不慣れの現れだろう。

そして、得体の知れない事実がひどくシンを困惑させていた。

フィンブル落着の際、シンは自分が自分でなくなるような、言葉にすることは難しいが、世界から現実感が損なわれる感覚を味わった。

少しでも被害を抑えるためにはメテオ・ブレイカーは壊してはな

らないうことはわかつっていた。それなのに、シンは自らの意志で引き金を引き、それを破壊したこと認識していた。

意識はあつたのに現実味がない。夢で奇妙な事実をそのまま受け入れてしまえるみたいに、シンは意識してメテオ・ブレイカーと、GAT-131イクシードガンダムの特殊な機体を破壊した。

あれは一体何だったのだろう。材料不足。考へても仕方がないとは思いながら、考へることをやめることができない。

無理に中断をしてくれたのは、コア・スプレンダーのすぐ横を飛ぶ機体からの通信である。

「君の母艦はミネルヴァなのか？」

返事よりも先につい横を向く。

青い8枚の翼を持つガンダムが全身を輝かせながらコア・スプレンダーの速度にも楽に併行している。NGMF-56Sインパルスガンダムのようなガンダムをシステムで真似ただけの機体とは違う、正真正銘のガンダムなのだろう。

眺めていて、返事をしていないことに気づかされた。慌てたように声が上擦る。

「は、はい……」

まさかここでアップティールであること、ミネルヴァには単に乗り合わせていくだけであることを教える必要もないだろう。

「じゃあレイの部隊だな。レイに会うのは久しぶりだ。やっぱり、どこかぶつきらぼうなままかな？」

「ええ。バレル隊長は、その、口数の少ない人ですから」

そんな人に人となりを知っているわけではないが、嘘もついていい。

そうしていると、ミネルヴァが肉眼でも確認できるようになつていた。

よくよく考えてみると、ミネルヴァを外から眺めたのはこれが初めてではないだろうか。初めは気絶している内に収容された。初めての出撃の際は前ばかり見ていたから。

他のザフトの艦船にはない優美な姿をしていた。槍の穂先を思わせる細く長い印象で、艦体前部からは大きなウイングが広げられていた。赤が縁取り、基調となる色は灰色。大気圏内での使用も想定されるラヴクラフト級らしい、人がよく想像する空母のような甲板ではなく、空力を考えた流線型の構造がシルエットを作っている。

ミネルヴァは海上に浮かんで制止していた。

通信で、着艦許可と、その場所が告げられる。艦体脇のハッチ - 左右対称の構造で、両側にある - の片方が開き、カタパルトが伸びる。

青いガンダムが道を譲るように体を引いたことを確認して、シンは速度を落としながらカタパルトを目指した。

「ア・スプレンダーは垂直離着陸が可能である。うまく速度を落とせば、後は機体をそのままカタパルトの上に置くことができた。車輪を頼りに格納庫の内部へ進む。整備士の指示するとおりにコレ・スプレンダーを停止させると、ヘルメットを取るなり風防を開く。

格納庫の中とは言え、潮風を感じたのは久しぶりのことだ。その匂いの元を確かめるように首を回すと、格納庫は、ずいぶんと殺風景であった。バール隊長のガンダムを含めて9機もあったのに、今は2機しか並んでいない。バール隊長の機体と、そしてインパルスが1機。

一体何があったのか。考えがまとまる前に、聞き慣れた声がした。

「シン！」

格納庫の床を鳴らす足音の方を見ると、赤い制服を着た女性、ルナマリア・ホークが駆け寄つて来ていた。

「ルナ！」

いくら気が急いても、まさかコクピットから飛び降りるわけにはいかない整備士がかけてくれた短い梯子を降りる必要があった。

床に足を着けると、重力というものを感じて膝が軽く折れた。まだ不慣れなだけだ。ルナマリアの方も無理に走つたせいか、バランスを崩し、シンが手を出して支えなければならないほどである。

だが、それ以外に傷らしい傷を受けた様子はない。あつさりとシンの助けを振り払うくらいである。

「無事だつたんだな」

「うん。私はね。ただ、他の人たちはみんな戦死したつて……」

出会つたばかりの仲間の死なら動じることはない。そんなことはなかつた。突然の消失というものは、いつになつても慣れることができない。閑散とした格納庫が、もの悲しさに虚しさを含ませた。

ヴィーノ・デュプレとは出撃直前に揉めた間柄である。戻つてきたら地球は無事だ、残念だつたなどでも皮肉の一つでもかけてみたかつたが、それはもう永遠に無意味な計画になつてしまつた。

図らすもヴィーノの言つていた、もめ事の当事者が死ねばすべて解決するという理屈のままになつてしまつた。

「あいつも満足かな……」

もつとも、死ねば何もかも終わりだ。本当にヴィーノが満ち足りているとは考へていない。

小声でつぶやいたため、ルナマリアはシンの話題をつなごうとはしない。

「本当は地球に降下した時も地球群に襲撃されたんだけど、これはバレル隊長がやつつけてくれたから」

どれほどの数に襲われたのかは知らないが、バレル隊長の実力は本物だ。本当は自分1人だけで十分、周りの助力なんて必要としていないのではないだろうか。

そう考えると、あの当事でありながらどこか一歩引いてみている
ような態度の説明が、少しはできるような気がする。

当事者でありながら当事者でない。この言葉は思いの外シンの意識を捉えた。まるで、戦闘中に体験した現象そのままであったのだから。戦闘がもたらせた一種の興奮状態であると説明できなくもない。それならルナマリアは同じ体験をしてはいないはずである。

「それよりルナ……」

尋ねようとして、その声を足音が遮った。ルナマリアの軽快な音とは違う。70tもの重さを持つ機体が歩いている。その音は人の声など容易に書き消してしまう。

翼持つ青いガンダムが、バレル隊長の白いガンダムの横へと並んだ。慣れた様子で、コクピット・ハッチはすぐに開かれる。見上げていると、赤いノーマル・スーツを来たパイロットがハッチ備え付けの乗降用ロープに足をかけ、ゆっくりと降りてきた。

そのノーマル・スーツの胸元には、当然のように翼を模した紋章があつた。議長直属の正規兵の証である。

彼はフェイスだ。

そのことについて反発心が芽生えたが、それは押さえ込むことにした。

フェイスのパイロットはシンの方へと落ち着いた足取りで歩いてくる。

「君だな、無茶なインパルスのパイロットは」

通信機越しに聞いた時と同じく、霸氣というものを感じさせるほどこえは力強い。自信に満ちてはつきりと聞こえてくる。

「あ、危ないところをありがとうございました。俺はシン・アスカつて言います」

とりあえず敬礼をしておくことにした。

相手はまずヘルメットを脱ぐ。思っていたよりも若い。シンと背丈はさほど変わらず、若干高い程度。年齢も同様で、まだ20歳にもなっていないのではないか。とても2、3歳の違いとは思えないほど確かに眼差しをした人で、凜々しさだと落ち着きだとか、シンが持ち合わせていないものをみんな持っているかのような人だった。

敬礼の仕方一つとっても堂に入っている。

「俺は……」

その人の声を、ルナマリアが突然遮った。

「アスラン！ アスラン・ザラさん、ですよね！？」

見ると、ミーハーな同僚は、これまで見たこともないほど目を輝かせていた。相手の人気がついたじろいでしまうほどだ。

アスラン・ザラ。この言葉をシンは知っている。映画、「自由と正義の名の下に」の主人公のモデルとなつた人物で、いまだに最前

線で活躍する歴戦の勇士。

「」の人がアスラン。ルナマリアを見ていたシンの視線は途端フェイスのパイロットに向けられた。

「ああ、俺はアスラン・ザラだ」

ルナマリアの熱狂ぶりに困った様子で、しかしその名乗る声ははつきりとした強さを持っていた。

「」の人アスラン・ザラ。ユニウス・セブン休戦条約以前の戦いを誇り高く戦い抜いた、ザフトの英雄。

牙をむく子猫より、寝息をたてる獅子の方が恐ろしい。それよりももっと怖いものを知っていますか。それは起きている獅子です。牙をむき、爪を光らせる獅子です。人の歴史はいつも眠れる獅子との付き合いでした。大きな災いに見舞われ、そうでない時はそれでも、また獅子が目覚めてくると怯えているしかできない。

戦後という言葉などなく、すべての時が結局戦前でしかありませんでした。

戦いの後は戦いが、その戦いの後には戦いが。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
n Einbrecher~

「眠れる城」

オープ。じれぼじ震えよつと去えよつと、齋威はまだ田覚めてさ
えいません。

第9話「眠れる城」

「感激です。まさかアスランさんにお会いできるなんて！ あ、サイン、もらえませんか？ 妹の分もお願いします」

そう、ルナ・マリア・ホークは一体どこで手に入れたのかわからなイサイン色紙とサインペンをアスラン・ザラへと押しつけた。

その様子を、シン・アスカはどこか呆れたような様子で眺めていた。

格納庫から休憩室に移つて以来これなのだ。小さな丸テーブルに3人で等間隔で座つてているはずが、ルナ・マリアがアスランの方に妙に体を乗り出すため、シンは1人孤立させられた気分であった。

シンがジュースを啜る目の前で、ザフトで最も著名なパイロットは手慣れた手つきで2枚のサイン色紙にサインを書き上げた。その後握手に応じる様子など、サインを何度も手がけてきたことをうかがわせる。

「ありがとうございます、映画、もう30回以上見ています！」

書いてもらつたサイン色紙を、それは大切そうに抱きしめるルナ・マリア。ミーハーだとは知つていたが、そんな人が実際アイドルを前にすればこんなものなのだろうか。

アスランは見ようによつてはどうともれる微笑みをしていた。言いようによつては、上品な笑い方だと言えなくもないが、愛想笑いだとも思える、そんな笑みだ。

「それは嬉しいな。まあ、あの映画は少々極端な演出が多いところが難点だから、あんな活躍は期待しないでもらえるとありがたい」

「そ、そつなんですか？」

NGMF-X10Aフリーダムガンダムがその10枚の翼を広げ、合計5門の重火器で迫りくる10機を超える敵機を一度に撃墜する。これは「自由と正義の名の下に」の中でも屈指の名場面として知られている。もつとも、少しでも戦争に詳しい者なら、ロックオンされた敵機が回避もせずに直進してくるなど、噴飯ものと片づけてしまつよくなシーンだ。

シン自身、映画のあのようなただ派手なだけの演出の仕方には首を傾げざるを得ない。

アスランもまた、そのことを認めていた。

「いくらガンダムでも、映画の中のよつに一度に10機の敵機を撃墜なんてさすがにできなによ」

さて、ルナマリアは失望するだろうか。そんなことを考えながら、シンはジュースの缶を飲み干した。

「でも！ ジブラルタル基地で脱出する仲間を助けるために最後まで残つて戦う場面、私感動しました」

今度はジブラルタルの黄畠とファンの間で言われる場面だ。大西洋連邦軍の大群に襲撃されたジブラルタル基地では仲間を逃がすために多くのザフト兵が地上に残り、そして全滅した。この場面はそ

れだけを専門に扱うファン・サイトがあるほど反響が大きかつたらしい。

本当に、ファンと言つものは引き出しが多い。

「ああ、あの時は本当に死にかけたよ。それに、結局俺は誰も助けることができなかつた」

アスランは乾いた笑みを見せた。よしやく、本当の表情を見せた。何となく、そんな気がする。

「失望させてしまったかな？ 英雄なんて呼ばれてるけど、実際はこんなものだ。目の前でたくさんの人々死なれて、それでもたくさんの人々に救われて、それでも戦い続けていたらいつの間にか英雄に祭り上げられていた」

映画でアスランを演じていた俳優よりも実物の方がよほど男前で、それに演技力もあるのではにだろうか。

アスランはいつの間にか仲間の死を悲しむ英雄の顔に戻っていた。憂いを帯びた顔も、時折見せる弱さは女心をくすぐるものらしいから。

「そんなことありません。私、尊敬します！」

「ありがとう」

何故か力強く敬礼するルナマリアに対して、アスランはさわやかな笑顔で返す。ルナマリアはとても嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、それでもトークは止まることがない。

「でも、キラ・ヤマトってひどい奴ですよね。何て言つか志がないで、いろんな勢力をふらふらしちゃって。あいつさえいなかつたらアスランさん、マルタ・アズラエルに勝てたのに！」

今度はアスランのライバル・キャラ、キラ・ヤマトの話がしたいらしい。作中では自主性がなく、ちょっとともつとももらしい言葉をかけられれば考えを変えるような節操のない男として描かれている。モビル・スーツの腕こそ確かだったが。結局最後の最後まで状況に流されるばかりで主義や主張というものは無縁であった。

ルナマリアが言っているのは、アスランと敵の総大将マルタ・アズラエルとの戦いで、敵の甘言にほだされたキラが突如意味の分からぬ理屈を持ち出し戦闘に仲介したことにある。そのせいでアスランはマルタ・アズラエルを取り逃がしてしまった。

「もし見かけたら私がぎつたんぎつたんにしてみます！」

アスランはルナマリアの熱狂に荷担こそしないものの、理解をして微笑んでいた。ファンといつもの扱いが、本当にうまい。

ジュースは飲んでしまった。空き缶をテーブルの上において、つい手持ちぶたさになる。

「アスランさんは、いつもガンダムに乗ってるみたいな印象ありますけど、やっぱり始めからガンダムをもらえたんですか？」

量産機とはまるで無縁のエリートお坊っちゃんだったんじゃないのか。とまでは聞かないことにする。

「いや、始めはジンからだつた。そもそも、ガンダムは実戦投入されて5年と経つてない新しい機体だ。元々は大西洋連邦軍が開発していたんだが、それを鹹獲して、それからずっと縁がある」

NGMF - 101フジン。これに映画でも、冒頭のわずか数分だけ今ではほとんど使われていない機体をアスランが使用していた場面がある。もともと、それからは全部ガンダムで、要するに、そういうことであるらしい。

「映画、俺も見ました。ジャン・カローロ・マニアーニでしたっけ？ ガンダムの開発者の名前って？」

「それは映画の中でのお話だ。実際はゼフィラントサス・ズール、女史が開発した。まあ、基本的にしていることは変わらない」

何故か妙なところでアスランは区切つた。まるでゼフィラントサス・ズールと呼び捨てにしようとして、しかしそれはおかしいと女史とつけなおしたみたいに。

「初めは大西洋連邦にいた癖にプラントでもガンダムを開発した。典型的な死の商人ですよね」

おまけにフレア・ニコルのデータを手土産に大西洋連邦に戻つた。そのせいで地球軍は核の封印を解き、人類は滅亡1歩手前まで追込まれた。そんどうしようもない奴だ。

そんなことを考えるシンを、アスランはただただ見つめていた。笑うことをやめ、その視線は伽すまされた鋭さを持つ。

「ずいぶん挑発的な口振りだな、アスカ軍曹」

「あ、いや、すいません」

ほとんど反射的に謝罪してしまった。

シン自身、自覚と無自覚の間に、フェイスであるアスラン・ザラへの反感が顔を出していたらしい。

「こちらが謝つたとみるや、アスランはすぐに表情を笑顔へと戻す。先程の雰囲気はすでに微塵もない。

「君も知っているとは思つが、ミネルヴァの任務はとてもゼフィランサスに縁の近いものだ。もしかするといつか出会う機会があるかもしれない。ゼフィランサスは、君が考えているほど悪い人じやない。ただ周りの人すべてが彼女の力を求めて、彼女はそれから逃れる術を知らなかつた。それだけなんだ」

ミネルヴァの任務など知つていてははずがない。それでもアスランがシンたちが知つていて当然と判断しているのは、アブディエルとオナラブル・コーディネーターだと知らないからだ。

シンは努めてそれ以上考えないことにした。また、正規軍エリート・パイロットへの反感が芽生えるだけだからだ。極力発言しないようにしていると、放つてもルナマリアが引き継いでくれる。

「じゃあ、ジャンみたいに悪い奴じやなくて、つてことですか？」

「いまだにサインが書かれた色紙を大切そつに抱きしめているままで。」

「映画化される際、複数の人物を1人の性質や行動として集めたから。ゼフィランサスの場合、ラタトスクやブルー・コスモスの幹部と混ぜ合わせられたことであんな守銭奴の嫌なおじさんにされたんだ」

映画では、キラを唆したのもジャン・カローロ・マニアーニだつた。何故わざわざ女性を男性として登場させたのかわからないが、ジャンのモデルとなつた人となると、どうしても意地の悪そうなおばさんくらいしか思い浮かばない。

だから、アスランのたとえ話には強い違和感を抱かざるを得なかつた。

「だが実際は花のような人だよ。どれほど綺麗でも、摘み取られることにあらがう術を知らような」

「補給は望めない」

ラヴクラフト級ミネルヴァの艦長室の雰囲気は、レイ・ザ・バーレルの端的な一言が象徴していた。

備え付けの机が置かれているだけで、他に調度品の類はない。せいぜい写真立てが飾られている程度の机には艦長であるタリア・グラディスがつき、その前、明らかにどこから持ち込まれたようなパイプ椅子にレイ・ザ・バーレル大尉は腰掛けていた。

どちらも特に表情をえるようなことはせず、非常に事務的である。

タリア艦長も、かつてシンが初めてミネルヴァを訪れた時と同様、
声音に抑揚をつけようとしない。

「元々インパルスを操縦できるパイロットの数は十分ではないわ。
それに、ザラ隊と合流することが決定しているから、不都合は起こ
らないでしょうね」

あのアスラン・ザラの部隊と合流する。現在のザフトにおいてそ
のことを不満と感じる者はいるはずもない。タリア艦長の声にわず
かながら自信がにじんだ。

「当面、あの2人がミネルヴァの戦力として使つことになるわ。そ
れとも、あの2人では不満?」

アブディエルとオナラブル・コーディネーターに偏見を示す正規
市民は少なくない。それも無理のないこととは言え、同じ部隊に非
正規の市民が含まれることを露骨に拒否する向きさえある。

「シン・アスカ軍曹の方は性能に劣るインパルスで地球軍のガンド
ムとの戦闘を乗り切つている。アリストの力があつたとは言え、撃墜
さえ果たした」

要するに戦力として不満を覚えてはいないということだ。レイは
乏しい表情ながら、そこにわざわざアブディエルへの皮肉を見いだ
すことはできない。

「あなたには、移民への偏見はないよね」

「興味がない。俺はただ、サイサリスの願いが叶えられるならそれ

でいい」

「J.J.にいながら、しかしどこか別の場所からここを眺めているようだ。レイはそんな独特の雰囲気を纏いながら、そして言葉通り移民といつものへ関心を示す」とはなかった。

NN-X3N10ANガンドムヤーテシユテルン。

格納庫の中で、その姿は静かにたたずんでいた。ZGMF-X10Aフリーダムガンダム、かつて英雄アスラン・ザラが駆った機械仕掛けの天使とよく似た姿をしたそれを、シンは一言も発することなく見上げていた。

ルナマリアはアスランを相手にいまだに映画の話に花を咲かせていることだろう。聴きたいことがあつたが、機会はどうしても訪れなかつた。

戦闘中に感じた違和感のことだ。自分が自分でなくなるような感覚は、極度の緊張状態に対するある種の脳の防衛反応であったのだろうか。それなら、2人以上の人人が同時に体験しているとは考えにくい。そのことを、ルナマリアに確かめてみたかった。

思えば、シンのようなアブディエルがミネルヴァのような特殊部隊にいること自体、不思議なことなのかもしれない。

単に使い潰される駒で終わるはずが、本物のガンダムを2機も目にしている。それこそが不思議なこととすべきかもしない。

ふと視線を下げて、ヤーテシュテルンの足下……とは言つても視線を人間にとつてじく普通の高さに戻しただけだが、へと移した。

すると、そこには小さな少女が浮かんでいた。

しかし瞬きの間に消えてしまつ。ほんの一瞬のことで、ろくに姿なんて確認できなかつた。ただ、大きさが明らかに小さかつた……せいぜい2、30cmだろう……ことと、足が地面にはついていかつたこと、そして、瞳が際だつて赤いことくらいは確認できた。

確かに見たはずなのに、しかし今はもう姿が見えない。

「妖精……？」

とりあえず思いついた少女の正体を口にしながら、シンは瞬きを繰り返した。

大西洋連邦軍ステイガラー級MS運用強襲揚陸艦アケルナルの格納庫にて、声だけで明らかにお調子者であると感じさせる声が響いていた。この声の大きさも、推測を確からしめている。

「まさかあのフォイエリヒがこんな姿になっちゃうなんてな」

「兵器なんだから壊れて当たり前でしょ」

男の声に、あつたらと返ってきたのは冷静な女性の声。

並ぶ1組の男女の前に黄金の巨人が横たえられていた。壁際に並

ぶ4機のGAT-333ティーヴィエイトガンダムと、ZZ-X5 ZOOOKYガンドムラインルビーンは格納庫中央の仲間を見守り、取り囲んでいるようである。

ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムは、傷だらけであった。

両腕は損壊し、片足も破壊されている。芸術品とさえ捉えられた黄金の装甲は大気圏突入の際の高熱に爛れ、いびつに輝きが曇つていた。

かつて最強のモビル・スーツと呼ばれた機体のこの有様を、大げさに嘆いて見せたのは男の方である。

名はシャムス・コーヴ。

自身の肌の色と近い薄いサングラスの奥に見える瞳はどこか軽薄そうな笑みをたたえている。珍しい黒い - - 通常は白である - - 軍服を着込み、肩には中尉の階級章。歳のほどはまだ20歳を超えたばかりだろう。軽薄さと若さとがほどよく適合している。

「でもよ、何か憧れない？ 扱いきれるのがたった1人の実質的な専用機つて奴」

「少なくともあんたにはそんな機体、造つてももらえないと思つけど」

シャムスが何かを言つ度に茶々を入れているのはミュー・ティ・ホルクロフト。歳のほど、着ている軍服の色などシャムスと共通点が多い。その顔はどこか不機嫌に思えるほど視線が鋭いが、それは単に同僚の言葉に飽き始めているだけかもしれない。

「釣れないな。どうせ俺はネオ隊長の足下にも及ばないさ」

シャムスという男は何かとリアクションが大きい。お手上げといつた様子で両手を胸の横で開いてから、その上ため息をつくほどである。

ミコーディの方はそろそろ本気で相手にすることをやめたいと考えているようである。首を回し、何か逃げ道を探っている様子を見せた。そして、それは絶好のタイミングで転がってきた。

格納庫の固い床を踏む足音が聞こえていたのである。

それは男性である。シャムス、ミコーディと同じ黒い軍服に、しかし肩の階級章は大尉であることを示している。何より、迂闊に表情を見せまいとするように、その口元は固く結ばれていた。シャムスのように表情豊かでもなく、しかしミコーディのように不機嫌さを漂わせてもらいない。

「スウェン。隊長たちは？」

「アーノルド副隊長の結婚相談だ」

ミコーディの言葉に、言葉少なしに、しかし必要な言葉を惜しむ様子はない。

スウェン・カル・バヤン。それが大尉の名であり、ネオ・ロアナーク少佐率いる部隊の平隊員のまとめ役である。

隊長のネオ・ロアナーク。まだ若干19の最年少少佐であり、ガンドムラインルビーンのパイロットである。副隊長の名はアーノル

ド・ノイマン大尉。そろそろ30になるこの隊の最年長であり、まじめな堅物として部下たちからは認識されている。

こんな2人の上司の姿を思い浮かべながら、シャムスは嘆息する。

「またか、あの2人は」

「アーノルド副隊長、結婚に本気で悩んでるみたいだから。何でも、恋人は10歳も年下なんだって」

「犯罪だな。堅物に見える人ほど何とやらだな」

ミゴーディの言葉に、シャムスは相変わらずである。ただ、それをスウェンが拾い上げることではなく、寡黙な大尉は同僚に並ぶ形で横たわるフォイエリヒを見上げた。

「ところでスウェン、このフォイエリヒどう思つ?」

「兵器は壊れるものだ。それ以外の感慨はない」

「おお、スウェン、お前もか」

やはり、シャムスは頭を抱え極端に嘆いてみせた。

物置にソファーを向かい合つて並べて、応接間としての一応の形式だけは整えたような、そこはそんな雑然とした部屋であった。宇宙母とは違い、絶えず重力の恩恵にあずかることができる洋上空母の床には様々なものが不規則に置かれている。

そんなことを、ソファーに対面して座る2人の男は気とした様子はない。2人とも黒い軍服を身につけ、若い方が少佐、もう1人は大尉の階級章を見せている。

若い男性、ネオ・ロアノークはくつろいだ様子でソファーに座っていた。サングラスをかけ、その眼差しを見通すことはできない。生真面目な青年のようでありながら、その態度はどこか自信に満ち、氣弱という評価とは無縁である。一語一句はつきりと淀みない。

「アーノルド。僕は君の結婚を反対していない。それどころか応援したいくらいに考えてる。でも、君はなかなか踏み切れないでいるんだね」

「私は軍人です。それ以外でも、それ以上でもありません」

アーノルド・ノイマン大尉は反対に生真面目さが前面に現れていった。神経質なほどに切り揃えられた前髪から覗く顔は真剣そのものである。ネオは不真面目な表情ではないにしろ、副官よりは余裕が感じられる。

軍人である以上、危険な任務に就かざるを得ない。そんな自分が果たして家族を持つてもよいものだろうか。その悩みが、アーノルドの表情を険しくする。

ロアノーク隊で唯一既婚者であるネオは、それ故ひどく現実的に応えてみせた。

「だったら君は世界の災いすべてを調伏してから妻を迎えるつもりかい？」

そんなことはできるはずもない。たとえ世界一安全な職業があったとしても、不慮の事故というものは起くるものだ。

アーノルドは伏せがちであつた顔をあげると、ネオのサングラスに隠された顔をうかがう。目は見えなくとも、その顔は微笑みかけているようであつた。

「僕には君の思いは不安ではなくて覚悟に思えるよ。妻を守りたいところね」

「ネオ隊長は結婚して、何か変わったことはありましたか？」

「変わったつもりはないけど、でも、家族を守りたいという思いは強くなつた。それだけは間違いないかな」

ネオ・ロアノークの結婚式にはアーノルド自身参列している。もう3年ほど前のことだが、それまでも、あれからも、ネオ隊長はよき夫であり続けようとしている。アーノルドはネオのようでありたいと感じながら、同時にそうなれるかどうかと不安を覚えていた。

結局はその狭間を行き来しているばかりで、結論はいつも先送りにしてしまう。今日も一の轍を踏むことになるらしい。古めかしい手動の扉が開く音がして、2人は揃つて首を回す。

普段着ている衣装とは比べるべくもないほど質素な入院着を纏つたヒメノカリス・ホテルであつた。大気圏突入の高熱にあてられ、乗機であつたフォイエリヒはひどく損壊している。パイロットであるヒメノカリス自身に影響が出ないはずがなかつた。

「ヒメノカリス、もう体調はいいのかい？」

長く - - とは言つてもせいぜい 1 日程度のことだが - - 寝ていたヒメノカリスに、ネオは軽い調子で話しかける。

「いつまでも寝ていられない」

2つのソファーの内、ヒメノカリスが選んだのはネオの隣であった。ウェーヴがかかった状態でさえ床に届くほどに長い髪を今は1つに束ねている。そんな髪の束を抱えるようにして膝の上に置き、ヒメノカリスは腰掛けた。

隣にはネオ。向かいにはアーノルド。アーノルドは握手こそ求めはしなかつたものの、それこそ 10 も年下の相手に慇懃な態度を崩そうとはしない。

「お会いするのは 2 度目になります。アーノルド・ノイマンと申します。現在はネオ隊長の副官を務めています」

「アイリスから話は聞いてる。ロリコンなんだって？」

思わず固まるアーノルド。ネオは笑いを隠そつとさえしない。

「恋人がちょっと若いだけだよ」

どう対応してよいものかわからないアーノルドに対して、ヒメノカリスはすでに興味を失っているようであつた。特に誰を見るでもなく疑問を発する。

「私が寝てる間に何があつた？」

「フィンブルが地球に落ちて、太平洋西岸を中心にひどいことになつたくらいかな。後は、世界安全保障機構の中にもプラントも本格的な戦闘を始めようとしている兆しがある」

答えたのはネオ。単なる大西洋連邦軍少佐が世界安全保障機構の会議の内幕を知っているはずがないが、そのことに言及するものは誰もいない。

戦争の兆しを見せてているのは大西洋連邦、コーラシア連邦、南アメリカ合衆国の3力国に、やや後ろに下がって赤道同盟が続いている。

特に南アメリカ合衆国のエドモンド・デュクロ将軍は鷹派として知られている。

「アウルとステラは？」

「アウル君はスティング君がM・I・A扱いされていることに相当ショックを受けたみたいで部屋から出てこない。ステラ嬢は人見知りする子みたいだね。慣れない環境に戸惑っている様子だった。できるだけ早く会って上げた方がいい」

ヒメノカリスは瞬きをしてみせる。かすかな反応であつたが、世界情勢を聞かされた時に比べれば、これでも大きな反応であると言えた。

「これからどうへ？」

「友軍と合流します。とにかくいきたいところですが、補給のため、

度ヤラファス港に寄港する予定です

3度目の質問に答えたのはアーノルド副隊長の方である。ヤラファス港という言葉に、この副隊長は妙な抑揚をつけ、ヒメノカリスが反応を示したのも同じ単語であった。

「ヤラファス港？」

知らないわけではない。ただ、ヒメノカリスとアーノルドにとつて、この場所は単なる異国の港ではない。2人が初めて出会った場所であり、約4年前、大西洋連邦軍とザフト軍ガンダムどが激戦を繰り広げた場所であった。

その事件に、ヒメノカリスとアーノルドは居合わせた。

「はい。当面の目的地はオープ首長国です」

サングラスの奥底でその眼を見せないネオ・ロアノーク隊長。しかし平靜に構えるネオこそがヤラファスという言葉に最も強く反応を示すべきであるかもしない。

ネオ・ロアノーク少佐こそが、その時大西洋連邦のガンダムに搭乗していたパイロット當人であるのだから。

特に何か目的があつたわけではなかつた。ただ、久しぶりに地球の海が見たくなつた、そんな何気ない気持ちで、シンは展望室を目指した。

観光地に見られるような上等なものではない。光景は硬質ガラス越しで、備え付けられた椅子は横一列に並ぶものが少し置かれる程度だ。保養用であつたとしても、軍艦は軍艦としての機能が優先される。それは仕方がない。たとえ潮風を感じることができなくとも、それくらいは気にしないつもりで、シンは廊下を進む。

開放式の展望室を見渡せる場所についた時、シンはすでに先客がいることに気づいた。くすみのない金髪の後ろ姿。レイ・ザ・バレル隊長であることは一目でわかった。

「バレル隊長……」

つい言葉を発してしまった。首だけで振り向き、バレル隊長はシンのことに気づいた様子であった。もつとも、それで特に何かしてくれるのではない。首を前に戻し、風景に目を向けている。

ついにここののは隊長とシンだけ。気まずさを覚えないではなかつたが、ここまで来ておいて立ち去ることはできない。シンもまた、椅子に座ることにした。ただし、わざわざ隣合つた席にする必要はない。席を2つほど離れた場所にどることにした。

目の前には晴れ渡つた空と海が広がっている。プラントについては絶対に見ることのできない巨大な水たまりは、昔と変わってはいなかつた。

バレル隊長は何を見ているのだろう。偏見とは思うが、どちらかと言えば即物的で、感傷に浸ることなんてないように思える人だ。次の戦闘に備えて下見でもしているのだろうか。

つい隊長の様子を横目でうかがつてみると、バレル隊長もこちら

に気づいた。何か話があるとでも思われたのだろうか。

「バ렐隊長、次の寄港地、オープに決まつたつて聞きました」

単に状況の確認をしただけだ。バ렐隊長はシンの経験を知つてはいないう。元々ミネルヴァにとつてシンは非正規の乗員にすぎない。資料が届いているとも考えがたい。

単に寄港地といつだけでいいのだ。

「そうだ。あの国は現在でも中立を表明している。これからどうなるかはわからないが、表だって拒否はしないだひつ」

相変わらず感情を見せない声。そんな声故だらうか、単語を正確に聞き取ることはできてしまつ。

シンが興味引かれたのは、ある何の変哲もない単語であった。

「これから?」

つい首を曲げてバ렐隊長の方を見ると、横田とは言え、律儀に視線を合わせてくる。

「世界安全保障機構との合流が懸念されるといつことだ」

「オープの理念は、一体どうなるんでしょうね?」

つい口をそらしたのは、何も気まずいからではない。口の端が歪んで、嘲笑を浮かべる時つい口をそらすこと癖がついてしまっただけの話だ。

オープは中立を謳い、すべての勢力との軍事的関わりを拒絶するとともに侵略戦争を否定した。それを利敵行為と大西洋連邦軍に敵視され、侵略を受けることとなつた。国を危険にさらし、民を犠牲にしてまで守りたかつた理念を、ちょっと危なくなるとかなべり捨てる。

「いぶん立派な理想もあつたものだ。どうせ捨てるなら、匕首でももつと早く捨てなかつた。

「理想を語るのは力あるものの特権だ。弱者の戯言など誰も耳を貸すことはないのだからな」

嘲笑も忘れ、シンは思わずバレル隊長の顔を見た。普段通り、綺麗なくらいに無表情な顔で何も変わつた様子はない。

アブデイエルの戯れ言など、それこそ聞き流せばいいものを、それでもレイは応えた。現実主義的なところはいつもと変わらない。それでも、まるで世間話に応じるかのようにシンに応えた。

この人は一体何がしたかつたのだろう。わからぬまま、バレル隊長は立ち上がる。別段話が途切れたとか、そんなことではなくて、ただ風景に満足しただけではないだろうか。

今度こそ、シンのことなど気にした様子もなく歩きだそつとする。

そのはずであった。

「一つ言つておへ

ふいに立ち止まり、バ렐隊長は座つたままのシンへ顔を向ける。

「俺のことはレイでいい

ただ一言それだけ。シンの反応さえ待たずには歩きだしてしまつた。この言葉の意図するものがわからず、つい反応が遅れてしまつた。

「り、了解です、レイ隊長」

果たしてこれでよいのかもわからないまま、シンは立ち上がり、敬礼の姿勢をとつた。

歩き去つていくレイ隊長の背中は、しかし何も語ることはない。

オープ首長国。

太平洋西岸に位置する島国である。大小様々な島で構成されてい
るが、その中で特に有名なものはヤラファス島とオノゴロ島である。

ヤラファス島は政治の中心であり、行政府もここにおかれている。

オノゴロ島は産業の中心である。かつての世界第3位の軍需産業
モルゲンレー社の本社はこの島に置かれていた。

そして、この2島に共通することは、戦火に焼かれたという事実
である。

ヤラファス島では港でモビル・スーツ同士の戦闘が行われ、街に甚大な被害をもたらせた。オノコロ島は大西洋連邦軍侵攻の際、最重要拠点として最も多くの被害を出している。

オーブは自衛権を强行に主張するとともに、しかし集団的自衛権を否定した。そのため、他国と政治的結びつきに乏しいとともに経済的には強く結びついているといつアンバランスな外交戦略を行っていた。

半官半民のモルゲンレー社はラタトクス社のガンダム開発に協力し、その技術を一部盗用していたことはすでに周知の事実である。侵略戦争の否定を謳いながら軍拡を続けるその姿勢に矛盾を覚える国家は少なくなく、そのことがオーブの社会的信用を低下させていた事実は否めない。

同時に、プラントとの戦争が泥沼化の様相を呈してくるにつれ、オーブの戦争への徹底した参加拒否は結果として成功しなかつたとは言え、的外れなものではないのではないかという評価もされつつある。

C.E.71年に大西洋連邦軍の侵略を受け、現在の政権はウナト・エマ・セイラン代表が引き継いでいる。大西洋連邦の傀儡と名高いウナト代表は、しかし現実的な政策実行者でもあった。オーブの主権回復、及び戦後復興に尽力し、中立国にしては大西洋連邦よりもされているという事実を認めたとしても、形式的にはオーブは独立国としての地位を取り戻している。

ただし、その政策は一貫しているとは言い難い。

民意の存在である。

世界安全保障機構はまさに集団的自衛権を組織化、拡大化を狙つたものであり、オープの理念にはそぐわないと感じる者は少なくはない。また、大西洋連邦によって侵略されたという事実が、オープ国民の中に反感を植え付けたままである。

大西洋連邦への協力姿勢を見せたかと思えば、民意の反対にあり距離を置く。その次はまた協力姿勢を見せると言つたように、その政策は揺れ動いていることが現実である。

それ故、オープは現在最も動向が注目されている国と言つても過言ではない。

民意の多くはオープの理念の堅守よりも大西洋連邦への反感から世界安全保障機構への参加を拒む者が多い。それは言い換れば、プラントへの危機感を大西洋連邦への反感が抑えている形であると言つてよい。

そんなオープが仮に世界安全保障機構に参加するとすれば、それはプラントへの反感が何よりも優先された結果であり、オープは間違いなく抗戦派に席を並べるであろうと多くの者が予測している。

現在、世界安全保障機構は加盟国8カ国中、抗戦派が4カ国、現状維持派が3カ国、中立であるスカンジナビア王国で構成されている。ここにオープ首長国の1票が加わったとしたら、会議の流れは抗戦に一気に傾くことになるのである。

オープ首長国。

この国は、今、世界の関心をその身に浴びていた。

「我々も世界安全保障機構に参与すべきであると私は考えます。今
のオープに自国を守るだけの戦力はありません！」

「大西洋連邦主導の組織に加わるなどいように使われるだけだ。
そもそも現在のオープの窮状は大西洋連邦の侵攻が原因ではないか
！」

長テーブルの置かれた会議室内に2人の男の怒号が響き合つ。テ
ーブルには他にも何名もの人の姿があつたが、発言しているのは2
人だけで、議論の様子を見守つているだけであつた。

両者はテーブルをはさんで対面で立ち、周りの様子を気にするこ
ともない。

「ジョネシスの発射未遂。フィンブルの落着。殴られたことよりも
殺されかけた事実の方が許せるとでも？」

オープ首長国の中には協力軍として大西洋連邦軍に同行し、ヤキ
ン・ドゥーエ攻防戦に加わった者も少なからず存在している。そん
なプラントの暴威を目の当たりにした民の意見を代表する議員は反
プラントを主張して譲らない。

「国民の多くは大西洋連邦への不信感を拭えていない！」

反対に、オープから出ることなく戦いの帰趨を見守つていた者た
ちはいまだプラントの脅威を現実のものと捉え切れていない。そし
て、その背後には親プラント派の勢力の暗躍が存在している。オー

「だがプラントと同盟を結ぶことなどできはしない。結局オープはこのままでは中立ではなく孤立させられてしまう！」

「そもそもジエネシスなど本当にあつたのかね？ 所詮大西洋連邦が主張しているだけではないか！ フインブル落着にしてもそうだ。都合のいい部分だけ取り上げて自らを正義の国だと気取っているだけだ！」

「ではニコートロン・ジャマーはどうなる！？ タしかにオープには大した実害が出なかつた。しかしそれでは自分に被害さえ及ばなければ他で何が起ころうと構わないと言つているでしかない！」

「大西洋連邦は明らかにオープの主権を侵害したのだぞ！ 言葉を返すようだが、殺人犯とは駄目でも強盗となら手を組むことができないわねがどこにある！」

この2人の交わす内容は、まさにオープの、オープ国民の悩みの縮図である。

長テーブルの先には男がざつしりとかまえて座つてゐる。禿かかつた頭に、しわのよつた顔。ともすれば单なる中年男性に他ならぬこの男こそがウナト・エマ・セイランである。比較的親大西洋連邦よりとされているウナト代表は、しかしどちらに汲みすることもない。ただ平然と構え、両者の首長に耳を傾けてゐるだけであつた。

新聞が翻る音がする。豪奢な執務室に、作りのしつかりとした机

が置かれている。いかにも年代ものを思わせるその机に、足が堂々と乗せられていた。

机と負けずとも劣らない椅子の背もたれを軋ませ、足を机に投げ出した人物が新聞を広げているのである。それは一見少年のようで、しかし目元の柔らかさは少女のもの。あまり手入れがされているとは考えにくいくらいすんだ金髪が男性的ではありながらも、それは間違いないく女性であった。

オープ首長国先代代表、ウズミ・ナラ・アスハの娘、カガリ・コラ・アスハである。

「フィンブル落着か。どうして私を行かせてくれなかつたんだ、エピメティウム？」

新聞を畳み、無造作に机へと放り投げる。すると、カガリが室内の様子を確認できるほど視界が開ける。するとそこには、応接間特有の対面式に対置されたソファーに腰掛けた少女の姿があった。

左右非対称。そんな言葉の合づ少女である。左右の瞳の色が青と赤で異なり、緑の髪は三つ編みにして、左の肩から前へと垂らしていた。ティー・カップを手に、その香りを楽しみながら悠然と紅茶を嗜んでいる。

「無茶言わないでもらいたいよ。そもそも君は戦うべき人じゃない」

「軍籍ならとつたぞ」

「無理矢理ね。それに、それならそれで、もつと上官の言つことを聞いてもらいたいよ」

」のエピメディウム・エローはカガリにとって妹にあたる。もつとも、互いが互いにその出生の特殊さを知っているだけに、2人の間に姉妹の情が芽生えることはなく、単に父を同じくする友人のように接している。

カガリは背もたれに強く体を預けたまま、天井を仰ぎ見た。無論、足は机に置かれたままである。

「それよりエピメディウム、オープはこれからどうするべきだと思つ?」

「プラントのために働いてもらいたいと考えてこるよ」

「本氣か?」

首だけが無理矢理背もたれを離れ前を向く。エピメディウムはティー・カップを口につけたままで答えた。

「半分はね。カガリも知っている通り、僕はプラントから送り込まれてきたエージェントだからね。お父様はオープを地球に巣くう獅子身中の虫にしたいんだよ」

とてもこのオープという国の行く末を案じているようには思えない態度である。もう飲み尽くしてしまったのだろう。ティー・カップを口から離し、目の前のテーブルに置いたといふで、エピメディウムは態度を豹変させた。突然口を閉ざし、瞬きさえ忘れて表情を強張らせる。

ただし、それは紅茶が切れたことを原因とはしていない。

「だがお前たちのお父様は死んだ。もつ誰も指図してくれる人はい
ないはずだな。そんな時、お前たちダムゼルはどう動く？」

首を持ち上げやすいよう、カガリは両手を頭の下に強いていた。
こちらもやはり大切な話をしているような態度ではない。しかし、
それがことの重要性を減じることはなかつた。エピメディウムは瞬
きせず、カガリの話を聞いていた。

カガリの言葉が、エピメディウムに少なからぬ緊張を与えていた。

「あれから3年。お前たちは外から見たなら大きくは変わっていな
い。シーゲル・クラインという水先案内人を失つたにも関わらずだ。
それはつまり、始めてから航路が設定されていたということだ」

エピメディウムは2人の父を持つ。オーブの姫君としてはウズミ・
ナラ・アスハ元代表を、そして、ヴァーリとしてはプラント最高評
議会議長を務めたシーゲル・クラインを父とする。

ここでは、シーゲル・クラインを問題としていた。

「お前たちは、いや、シーゲル・クラインは何をもぐりこんでいる？」

エピメディウムは答えない。快活で、誰に対しても気の置けない
エピメディウムにしては大変珍しいことであつたが、ことお父様が
関わると途端に口が重くなる事実をカガリは知つてゐる。知つてい
てなお、カガリは食い下がつた。

「もうシーゲル・クラインはいない。お前たちを縛り付けていた男
はない。そうだろ？」

短く息を吹いて、エピメディウムの時間が動き出す。屈託のない微笑みを見せたかと思うと、それだけの普段のエピメディウムであった。

「話して上げてもいい気もするけど、そろそろ時間じゃないかな？」

時間。何のことかわからず瞬きを2度、3度と繰り返すカガリに対し、エピメディウムは微笑みを強くする。

「ほら、とても時間に律儀な君の許嫁が来る頃だよ」

すると、突然部屋のドアが開かれた。

「カガリ、ちょっとといいかい？」

男だ。色の薄いスーツを着て、まだ若い。背が高いせいか、全体としてどこか弱々しい印象の男が扉を開けて、そして、その顔の横を通り抜けたナイフが壁へと突き刺さった。途端、男の顔が蒼白になる。もしかすると自分の顔に突き刺さっていたかもしれないナイフを見つめていた視線が、油の切れた機械のようにぎこちのない首の動きで部屋の奥を見る。

そこには座つたまま、何かを投げたような姿勢で右手を伸ばしたカガリが歯をむき出しにしていた。

「私を結婚前から未亡人にならなければ、次からはノックをしろ、いいな？」

「う、うん、わかった」

男は頷くことだけは素早く、正確である。ただし、部屋の中へと入つてくる様子はぎこちなく、軽く腰を抜かしているらしかった。

この男は、ユウナ・ロマ・セイラン。何と力ガリとは許嫁の間柄である。もつとも、時には自らモビル・スーツで戦場に出ていく力ガリとは違い、ユウナはデスク・ワークを専門とする。そのためか、主導権はいつも力ガリが握っている。

そんな2人の様子を微笑ましく見つめていたエピメディウムは立ち上がるなり、

「じゃあ、ここは若い2人に任せるべきかな」

「エピメディウム！」

「時間はあるよ。そんなに焦らなくてもね」

ユウナの脇を通り抜ける際、何故かウインクをしてみせてから、エピメディウムは扉を部屋の外側から閉めた。残されたのはいまだ死の恐怖から回復しきれていない男が一人。ちょっと目の前を肉厚のナイフが通り抜けただけで情けない。

親同士が決めた許婚の哀れな姿に、力ガリは隠す様子もなくため息をついた。

「それで、今日の話は何だ？」

多少持ち直したようだが、相変わらず力ガリの顔色をうかがつたような雰囲気は抜けていない。

「議会は曇り後雨、時折雷つていつとこりかな。世界安全保障機構に参加するか、プラントを敵視しないかでものの見事に割れてるよ」

父さんもこの頃白髪が増えた。そんな発言を付け加えることもコウナは忘れなかつた。父とは現代表ウナート・エマ・セイランその人であり、父の白髪と国の現状を重ね合わせ皮肉つていてるのだ。

「ソレではつまつとおしゃべりはしません。私はできることなら戦争に加わりたくない。お父様のご遺志にも反するし、発言力が弱いままで単なる戦力として使い潰されかねない」

「僕は同盟に賛成だよ。確かに中立性はなくなるかもしれない。でも、君のお父上が示した、侵略に関わらず、他国を侵略せず、他国の侵略も許さないという3つの理念は、より戦争回避という観点から見ればこうも解釈できる。戦争を助長するようなことはせず、侵略戦争を行わない、そして、侵略戦争には断固たる処置をとるともね。実際、オープは自衛戦争を否定していい。それならプラントという脅威を侵略と捉え、その猛威にさらされている国と協力しても決して理念には反しないんじゃないかな」

政治だの理屈の話をする時だけは、コウナは妙にしつかりとした目をする。普段は3枚目で落ち着きのない若造に過ぎないくせに。

先程とは正反対の意味で、カガリはため息をついた。

「そういう理屈じゃ、お前には勝てそうにないな

「まあ、理屈だけはね。ただ、民意がどう動くかわからない。何といつても、父さんは傀儡だから

ウナト代表は大西洋連邦の傀儡でしかない。そのことを吹聴しているのは、他ならぬカガリである。3年前の弟の結婚式では大西洋連邦の高官相手にはつきりとそう言つたこともあった。ユウナはもちろん、それを知つていて言つているのだ。

ナイフの衝撃からすっかり立ち直つたユウナはカガリへと微笑みかけていた。余談だが、ナイフはいまだ、ユウナの後ろの壁に突き立てられたままである。

「嫌みっぽい男は嫌われるぞ」

カガリは今日3度目のために息をつくはめになつた。

人の死を讃えましょう。それは死者のためではなくて、生きている人がこれからも生きていくために。命を落としてしまった人に、私たちはあなたを忘れてはいません、そう、言い訳をするために。死者の時間は凍りつきう、生者は前へと歩き続ける。もう決して交わらぬ道から目をそらし続けるために。

死者に花を捧げましょう。これは死に隔てられた絆の証です。

生者は歩みを進めましょう。もう死者はあなたの隣に立つことはありません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
nEi n b r e c h e r s~

「鎮魂頌」

ヤラファス。ここは死別と出会いの集まる場所。

第10話「鎮魂頌」

「オープも何考えてるんだる……？」

ザフト軍ラ・ヴ・クラフト級特殊戦闘艦ミネル・ヴァの展望室で、そうつぶやいたのはルナマリア・ホーク。その目は展望室のガラス越しに、すぐ外に見える光景を呆れ顔で眺めていた。

ここはオープ首長国ヤラファス港。ミネル・ヴァは中立国であるオープでの停泊を許可されていた。現在、ミネル・ヴァの大きな艦体は岸壁に横づけられている。その向かい側に停泊している艦が問題であつた。

ステイガラー級MS搭載型強襲揚陸艦が泊まっていた。地球軍が使用する航空母艦には、大西洋連邦の旗が揺らめいている。

それがすぐ目と鼻の先。オープは敵対する両国を隣り合わせに停泊させたのだ。

ルナマリアはもう一度、深いため息をついた。

そこで思い出しがある。ルナマリアのすぐ後ろ、横一列に並べられた椅子に座っている人物がいるということを。

「つて、シンの故郷つてオープだっけ！？」

慌てて振り返ると、左頬の痣に手を当てたシン・アスカの姿があつた。

「いや、別に気にする必要はないよ。ただ、ちょっとは気になるかな」

言葉通り、シンを取り乱した様子は見られない。国を捨てることことさせじつことなのだらつか。自分ばかり慌ててこじともばかりしひく、自然とルナマリアも落ち着きを取り戻す。

「なあ、ルナ、許可も下りていることだし、ちょっと街に出でみないか？」

シンはやはり何の感慨もなさず、本当に思いついたあるかのよひに話した。

「いいナビ、それってデートのお誘い？」

「や、そんなんじゃない！」

この時はばかりはむきになるシン。そんなことはつきつと言わなくて もよとそのものが、ルナマリアとしても気が楽になつたと言える。

「じゃあ、アスランさん誘つてもいいよね」

すでに疑問ではなくて事実確認。ルナマリアは明るく、シンへと微笑みかけた。

ミネルヴァに並ぶはΖΖ-X3Ζ10АЗガンダムヤーデシユテ
ルン、そして、NGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタル。

そして、それぞれのガンダムのパイロットたちがキャットウォークに並び、ガンダムを眺めている。

「そうか、ラインルビーンがいたか」

手すりに掴まつたまま、アスラン・ザラは隣を見ることなく愛機ヤーテシコテルンの青い翼を眺めている。

「やうなるとあいつもオープに来ている可能性が高いな。あいつは9つの名前と国籍を持つていろいろらしいが、オープはその内の一つだそうだから」

あいつが一体誰のことを意味しているのか。アスランはわざわざ語ろうとせず、聞き手もまた聞き返そとはしない。聞き手、レイ・ザ・バレルはアスランとは違う手すりに体を預けてはいない。それでも、自身のガンダムしか見ていないところは共通する。

「参考になる情報ではないな」

「確かに。ただ、あいつのことだからわざわざこちらの動きを気にしているとは思えない」

たとえば、敵がいると知っていたとしてもすぐ隣に接岸するくらいしかずのような男だ。すでにたとえ話にはなっていないなど、アスランは我ながら苦笑する。

「これはオープだ。思いもかけない出会いなど、いくらでも転がつていそうではある。

アスランはもう4年も前、この国を訪れた時のことを思い出していた。ヴァーリやドミニナント、大勢の仲間に再会して、一途な友人が、恋人が他の男とデートをしていると大騒ぎして皆で止めたりなどしたものだ。

それも、皆焼けてしまつた。

こんなこと思い出すべきではなかつたかと後悔を始めた時、格納庫へと通じる廊下からアスランの名を呼ぶ元気のよい声が聞こえた。声だけでもわかるが、敢えて振り向くと、やはり、ルナマリアが駆け寄つてきていた。その後ろにはゆっくりと後を追うシン・ドリとなく機嫌の悪そつた顔をしている・・の姿がある。

「アスランさん、ちょっと街に出ませんか？ シンが案内してくれるそうです」

走つてきたばかりといつて、息をきらした様子もなくルナマリアはまくしたてた。初対面でわかつていたことだが、この娘は本当に元気がいい。

「君はオープに縁があるのかい？」

「元々住んでましたから」

ルナマリアの後ろにいるシンへと声をかけると、何故かシンはなかなか一いちじりと田を合わせようとはしてくれない。

それよりも気になつたことは、シンがオープに暮らしていたということだ。ミネルヴァなど機密に近い艦は国籍条項がなかつただろうか。つまり、移民などを除いた正規のプラント市民で構成されて

いるはずである。

しかし、聞き直すほど時間は経えられず、ルナマリアの勢いに押されてしまう。

「行きませんか？」

身を乗り出して、元気ばかり押しも強い。これではシンに尋ねることができそうな雰囲気ではない。

手のひらでルナマリアをなだめるようにしてから、アスランはやんわりと断りを入れた。

「すまない。することもあるし、それに、あまりこの国にはいい思い出がないんだ。もうすぐ4年になるかな。ヤラファス祭事件と呼ばれる大きな事件があつてね」

「でも、映画じゃ、アスランさんがオープに来たなんてお話は……」

本当に、ルンマリアはよく映画を見ている。30回以上見たというのは嘘ではないだろう。

「映画じゃカットされてる部分だ。あの時、知り合ったばかりの友人がいたんだけど、事件に巻き込まれて亡くなつたことをは後から知つたんだ」

トール・ケーニヒと書つ名前だつただろうか。キラを通じて知り合つた友人のことは、もう顔さえ満足に思い出すことができない。混乱に巻き込まれはぐれて、それっきりだつたからだ。トールと恋人であつたミリアリア・ハウという少女のことを思い出すと、記憶

は像を結ばない癖に悲痛な感情ばかりが胸をつるぎへ。

オープに宛もなく降りてミリアリアに出会つとは考へていいが、それでも、気持ちが下艦を拒否していた。

「だから、俺のことは気にしなくてもいい

思い出していると、自分でも考へていた以上に悲しげな表情を作つてしまっていたのだろうか。ルナマリアの勢いは陰り、これ以上迫つてはこなかつた。

「じゃあ、その……」

ルナマリアが遠慮がちに見たのは、寡黙な同僚の方である。レイはやはり不機嫌にも見える無表情のまま、ルナマリアの視線に応じた。

「俺も行こう

「そうですね、じゃあ、2人で……って、えー！？」

俺はいい。そんな言葉が返つてくると信じて疑わなかつたのだろう。想定外の事態に、ルナマリアは驚きを隠せぬまま、大きく声を上げた。レイが部下たちに普段どのように思われているかうかがいしれる。

オープの街を歩く。4年前は私服で、現在は軍服を身につけている。昔は軍人として街を歩くなんて思いも寄らなかつた。今では、

まさかあのレイ隊長と一緒に街を歩くなんて考えてもいなかつた。

すぐ隣を歩くるナマリアが、少し後ろを歩くレイ隊長に気づかれ
ないよう小声で話しかけてきた。

「何でバレル隊長まで？」

「知らないよ。何か興味のあるものでもあつたんじゃないのか」

シンも様子を首を曲げたりげなく後ろを見てみると、レイ隊長が
何やら興味ありげに視線をせわしなく動かしていた。

オーブの首都であるオロファート市の街並みは観光地になるほどお
しゃれな建物が多い。4年前の事件の傷跡も残つてはおらず、完全
に元の姿を取り戻していた。ただし、レイ隊長の視線は低く、建物
を見ているといつよりは誰かを捜しているようだ。

田線が高い分、視線はどうしても合いやすい。ルナマリアと2人
して振り向いていたことに気づかれてしまった。

「どうした？」

「いえ！ その、ヤラファース事件が気になつて……」

話しかけられて答えたのはルナマリア。しかしシンもまた、つい
足を止めて振り向いてしまった。ここは往来があることに違いはない
が、車の入つてくることのない道路である。毎の時間帯とは言え
決して人は多くなく、立ち止まつっていても誰かに咎められることも
ないだろう。

「ヤラファス事件について、俺が話してやれる」とはない

軍隊としてしか国を出たことのないような隊長がオープのような片田舎の事件を知っているとは思えない。たとえ、事件にプラントが関わっていたのだとしても。

ルナマリアは当然の帰着としてシンの方を見る。

「ヤラファス祭、事件だ。ヤラファス祭つていうお祭りがこのヤラファス島じゃ毎年行われてたんだ。恋人が集まるようなお祭りで、オープのバレンタイン・テーマみたいなものかな。でも4年前、大きな事件があつたんだ」

「事件？ 事故じゃなくて？」

何をもつて事件と事故を分けるかは難しいが、少なくとも誰かが意図的に引き起こしたような出来事は、事件としてもいいだろう。

「俺も詳しいことは知らないけど、何でも秘密裡に持ち込まれたザフト軍のモビル・スーツが暴れて、当時停泊していた大西洋連邦軍と戦闘になつたらしいんだ。俺は当時オノゴロ島の方にいて、騒ぎ自体は知らないけど……」

「要するに、連れてきてあげられるような人がいなかつたってこと？」

「話の腰を折るなよ」

まったく、女といつのは・・偏見とは思うが・・恋愛の話となると鼻が利く。

「ともかく、それで死傷者が100人を超す大惨事になつたんだ。それ以来、ヤラファス祭は行われてない」

ただ、そんなルナマリアも死傷者の数には驚きを覚えたらしい。目を丸くして、瞬きを繰り返している。

「そんな話始めて聞いた。それで、プラントの秘密兵器って……？」

「それは……」

知つているはずがない。テレビでも満足に映像が流されず、報道管制が敷かれていたらしい。ただ、ザフトのモビル・スーツと大西洋連邦のモビル・スーツが戦闘したという事実だけが何の進展もないまま流れ続けた。

知らない。そう答えようとして、それよりも先に誰かが解答を示した。

「AMF-X000Aドレッドノートガンダム。ザフト初のガンダムであり、ブレア・ニコルを搭載した核動力搭載機のことだよ」

聞き覚えのない声。横を向くと、地球軍の黒い軍服を身につけた4人の男女が立っていた。先頭の1人はまだ少年と言つてもよいほど若く、答えたのは恐らくこの少年だろう。

階級章は少佐。サングラスを身につけた少年は一見気弱そうながら、その態度はどこか芯の強さを感じさせる。

「あなたは？」

シンは何気なく声をかけた。敵軍の制服を着ていようと、シンは中立地帯であるという安心か、それとも黒という見慣れない色が敵兵であるといつ事実を薄めてしまったのかかもしれない。とにかくシンの反応は鈍く、反対にルナマリアははつきりとしていた。

「ちょっとシンー！」

急に手を引かれ、ついルナマリアの方を振り向く。普段朗らかな人物が急に深刻そうな顔をするとひどく心急かされる。

「黒い軍服、これってファンタム・ペインでしょう！」

ファンタム・ペイン。その言葉を聞いた途端、シンはほととぎ反射的に首を回し、少年の姿を確認する。

黒い軍服。見たことは初めてだが、それが意味することは聞かされている。ブルー・コスマスが各国に新設した独立部隊。部隊としての戦闘力、士気は極めて高い狂信者の群。それがファンタム・ペイン。

ただ街で見かけただけなら何でもない若者たちである。それがコーディネーターを務める特務部隊であると聞かされた途端、シンは言葉を失つた。

ただレイ隊長だけがいつもの調子を維持している。

「サングラスがずいぶんと似合わないものだな」

先頭の少年へと。ただ、答えたのはその後ろの若者だ。

少年のものよりもずいぶん色の薄いサングラスをした褐色の肌の男性が、自分のサングラスを外しながらぼやいた。

「そりかな。これ最新式のモデルなのによ」

「流行物と似合うかどうかは別問題でしょ。それに、あんたじゃなくてネオ隊長のことよ」

「冗談だったのか。それにしては笑えないが。

男性をたしなめたのは女性で、女性は少年のことを隊長と呼んだ。よく見ると、レイ隊長は他の3人を一切気にすることもなくネオと呼ばれた少年を見ている。

「機密情報を往来で暴露とはどういうつもりだ?」

「確かに、立ち話は何だね」

まるで顔見知りのよつな気軽さで、ネオ少年はサングラスの下で笑った。

あれから、シンはなし崩し的に喫茶店に入ることとなつた。ルナマリアやレイ隊長はもちろん、何故かファンтом・ペインの面々も一緒である。

「じんまりとした綺麗な店内に、何故か2席借りてザフトとファンтом・ペインが分かれて……ただし、隣合っている……座つてい

る。そして何故かネオ少年だけはザフト側の席につき、何故かルナマリアと話に花を咲かせていた。

「ジブラルタルの黄昏は秀逸だと想つよ。アスラン・ザラが仲間を逃がすために傷だらけになつても戦う場面は鮮烈に焼き付いてるよ。特に逃げ延びた先で助けた少女から花を手渡される場面は涙なくしては見られないね」

「わかつてますね。そつそつ、その場面を務めた子役の女の子が可愛くて可愛くて、妹にしたいくらいですよ。まあ、現実の妹は別にいるんですけど」

「どうやらネオ少年も例の映画、「自由と正義の名の下」のファンであったらしく、ルナマリアといきなり意気投合したのだ。

ルナマリアははと言つと、テーブルに身を乗り出して話に没頭し、ネオ少年・・ネオ・ロアノーク少佐と名前は聞いていた・・もそれをしつかりと受け止めるように熱っぽい。

「僕にも年の近い姉がいるけど、がさつですぱりで、とても花なんて似合わない人だから」

「現実なんてそんなもんですよね~」

「ほんとに楽しそうなルナマリアの顔は初めて見た。

「そうそう、キラ・ヤマトはどう思います? あの渡り鳥、勢力をあつちこつちこふらふらふらふらふら。本当にどうもありませんよね」

「確かにあんな人には近くにいて欲しくないね。特に女性関係にだらしないところは幻滅かな。はじめに付き合つてた子が終盤に殺されてしまう場面があるけど、あれ、今更修羅場にしたくなくてわざと殺させたんじゃないかって疑つてるくらいだしね」

シンには2人の会話に入り込む余地がない。どの場面のことを話しているのかさえ、映画を流し見しただけではわかりようがない。レイ隊長にしてもまったく話に入ろうとはせず、静かに注文した紅茶をすすつていた。

シンの座っている場所は隣の席に近いため、話の内容を聞くことができた。

「なあ、隊長の発言内容にすさまじい違和感あるの俺だけか？」

ネオ・ロアノーク少年を覗いた3人の中で最もおしゃべりな印象がある、シャムス・コーナーと名乗った男性がいつも会話のきっかけを作つているらしい。

そしてそれを引き継ぐのが女性である。ミュー・ディー・ホルクーフトという名前だ。

「別にいいんじゃない？ どうせ映画の話だし」

つい気になつて隣のテーブルを覗き込むと、3人目、どこかレイ隊長を思わせる寡黙な男性が話始めるところだつた。他の2人はコーヒーを頼んでいるのにこの人だけオレンジ・ジュースを注文していた。甘党なのか、すでに2杯目である。どこかアンバランスなこの男性は、スウェン・カル・バヤンであつただろうか。

「単なる『マー・シャル・ムービー』であることを除いて、脚本の拙さにさえ目を瞑れば、自由と正義の名の下には演出が巧みな商品だ」
端から聞いていてはわからない。

「へいへい

これで話は途切れてしまつたらしい。シンは首を前に戻す。やはりルナマリアとネオ隊長の映画談義は収まつていない。ルナマリアとは軍学校時代からの付き合いだが、知らない一面というものはいくらでも出てくる。

きっとそのすべてを理解できる日なんて来ないだろう。何となくそんなことを考えながらテーブルに身を乗り出す仲間のことを見ていると、その後ろに時計が見えた。

思ったよりも時間がすぎている。このままでは門限に間に合わない恐れがあった。

立ち上ると、思いの外注目を集めてしまつたらしい。ルナマリアとネオ少年さえ話を止めてこちらを見てくる。

「すいません、俺、ちょっと用事があつて、失礼します

日が傾き始め、街並みが少しづつ朱に染まっていく。オープにい

た頃幾度も見たはずの夕暮れは、それでも妙に懐かしく、同時に心を急いだ。

もう門限まで時間がない。ただそれだけのことだと考えて、シンは足を早めた。

石造りの道路を歩いて、ふと田に付いたのは花屋。道にまではみ出す形で並べられた花が軽く香っている。花の名前なんて知らない。こんな日でなければ気づきもしなかつたことだらう。ましてや、花を買おうなんて思わなかつたに違いない。

店の前、どこか恥ずかしさも手伝つて少し離れた位置から店内を覗いて見ることにした。すると、店先に置かれていた花が目に付いた。何の花がなんてわからない。花言葉なんてもつてのほかだ。ただ小さくて、白い花びらを咲かせた花が売られていた。

店に入るまでの距離を妙な長さに感じながら、シンは店員とおぼしき男性に声をかけた。

「この花をお願いします」

見つけた、白い花を指さして。

店員は若い男性だつた。この仕事は長いのか、Hプロンを身につけた姿が様になる。ただ、それにしては、妙なほどに無愛想で無言のままシンが指した花を手に取ると、店の奥に置かれたテーブルへ。こちらに背中を向けているため何をしているのかは見えないが、花を包んでくれているのだろう。

話かけられたのは、本当に唐突なことだつた。

「君、ザフトの軍人だろ。あまり制服でうぶつかない方がいいと思
うけどね」

思わず男性の方を見る。男性は手を止めていない。

「ヤラファス祭事件のこと、じいじや忘れない人も多い。それ
に、プラントはまたやらかしたそひじやないか」

ヤラファス祭事件は、ネオ少年の言つていることが正しいならザ
フトの秘密兵器が暴れたことが原因であるらしい。そして、もう一
つはファインブルのことだ。

あの事件の時は俺もオープの住民でした。ファインブル落着には、
最前線で参加していた。ザフトの兵士として。こんなこと、言つて
も仕方ないことだ。

何も言ひ出す気にはなれなくて、ただ言われるままにしておく。

「こんなこと、君に言つても仕方がないとは思ひけどね」

語尾にため息をつけて、男性は作業を終えたようだつた。手には、
小さな花束が包装されている。男性はやはり表情を作らうとしない
ままで、シンの方へと花を差し出した。受け取つて、ポケットから
2枚の紙幣を取り出す。男性はその内1枚だけをシンの手から抜き
取つた。

「嫌な思いさせたお詫びだ。少しだがおまけしておこう」

それだけ言つと、男性は店の奥へと歩いていってしまう。お礼を

言つともりにはなれなくて、シンはそのまま店を出た。

ザフトでエリート・パイロットの証である赤い軍服とあまりに不釣り合いな白い花束。迫る夜の風が肌寒い。

「俺はもう、どこ行つても異邦人なんだな……」

4年前の事件があつても、街の構造そのものは何も変わってない。慣れた様子で街を歩く。それでも、以前とはどこか違った街並みは、シンの記憶とは重なつてくれない。

まるで目を背けるようにうつむいて、街を外れを目指して歩き続けた。やがて突然のように街が途切れ、目の前に光景が広がった。体はどどまつて、視線だけが眼下の階段を降りていく。

オロファト市の街外れには公園があつて、ヤラファス祭に合わせて毎年花々が綺麗に咲き乱れていた。4年前までは。

シンの目に映つたのは花ではなくて、冷たい質感を持つタイルばかりの床。通路の代わりに整えられていた生け垣は、今は規則正しく並べられた石碑にとつて代わられている。ヤラファス祭事件の犠牲者とオープ侵攻の際の戦没者の名前が石碑には掘られている。きっと、シンの母親、マユ・アスカの名前も。

そんな死者の名簿に挟まれた石造りの道を視線が通り抜けると、奥には献花台が用意されていた。公園の奥で、かつては大きな木がシンボルとして雄大に枝を広げていた。それも、4年前に焼けてしまつた。かつての恋人たちの憩いの場所に、死者を慰める花が手向かれている。

そして、シンの手にも白い花が握られている。

「ここまで来て引き返すことはない。初めの一歩が階段を降りる。すると、後は惰性で階段を降りていく。決して長くはない。あつさりと降りきつてしまつと、すぐに石碑に囲まれた道に足を踏み入れた。

もう夕暮れ時だからなのか、人影はまばらである。見ず知らずの誰かが、知らない誰かの名前を探して石碑の周りをさまよっていた。

シンはつい足を止めて、それでもここに母の名前を探すつもりには、なぜだかなかつた。ただし、石碑を眺めてみるとじつにに向かつたような気がする。

もうあれから4年近くも経つ。戦争で母を亡くした。自分が助かつたところで、もうオープにはいたくなかった。プラントがコーディネーターを受け入れている。そんなことを聞いて、プラントに向かつたような気がする。

オープよりはましなんじやないかと思つて、でも、結局大差なんてなかつた。

移民が市民権を得るには経済難民でないことの証明・・金を見せろということだ・・が必要になる。そうでなければ市民権もないままともな仕事にもつけず時間を過ごすか。一番手つとり早く市民権と金が得られるのは、軍人になることだ。

金はない。身よりもない。

シンが選ぶことのできる道なんて、せいぜい軍人になるくらいしか

かなかつた。

軍学校に入ったのはだいたい2年前。周りは自分とどこか似ていて、それでも違う事情を抱えた移民たちばかりだった。その多くは大洋州連合や東アジア共和国、稀に大西洋連邦やヨーラシア連邦から来ている人もいた。

それでも、オープから来た人には、出会うことはなかつた。

移民たちはそれぞれの出身地で派閥を作つて、中で一番大きかつたのは大洋州連合のグループだつただろうか。それでも所詮移民の中での最大グループというだけのことだ。シンも彼らからは除け者にされたが、それを恨んだりしたことはなかつた。

みんな、プラントという国の中では必死に生きようとしていた。

シンが軍学校を卒業ではなく放り出されてから軍に参加して実戦に出されるまで数ヶ月 - - この期間は任期として加算されない - - の後、ZGMF-56Sインパルスガンダムを与えられ戦場をたらり回しにさせられた。母艦を3度 - - アーサー・トライイン艦長の艦も含まれる - - も失つた。

そしてミネルヴァに乗つて、何故か捨てたはずの国にいる。

めまぐるしく変わる状況の中で、過去だけが変わらない。だから過去はいつも置いてけぼりで、そして風化して忘れ去られていく。シンがこの国の住民だつたなんて過去が、もう完全に忘却の彼方に追いやられてしまつたように。

道の左右に建てられた石碑から目をそらすとすると、視線は自

然と正面の献花台へと向いた。台の前には誰かいるようだ。人数は2人。服装からして女性だろうか。2人とも、ずいぶん艶やかな格好をしている。短い金髪の女性の方はゆつたりとした袖が特徴で、全体で羽衣でも纏っているような印象を受ける。もう1人は桃色の髪。波立つて長く、背中を覆い尽くすほどだ。

二人の人たちは誰を亡くしたのだろう。漠然とそんなことを考えながらシンは再び献花台へと歩きだした。

シンの手には白い花。女性2人は献花台から動こうとしない。声でもかけてどいてもらおうか。そんなことをする前に、女性の方がシンのこと気に気づいたようだ。

桃色の髪の女性が振り向こうとして、この女性のすぐ側にいて離れない金髪の女性が釣られるようにシンの方へ向き直ろうとする。

その瞳は、とても澄んだ青い色をしていた。薄暗さを覚え始めた、そんな時間であるにも関わらずその色ははっきりとした輝きを放っていた。思わず手にした花を後ろに隠そうとしたのは恥ずかしさからではない。ただ、何となくこの女性の前に花を並べることがためらわれたからだ。

女性は、まるで人形のように表情に乏しい顔をしたまま、そつと金髪の少女の手を取った。女性2人の体がもといた場所を離れて、献花台を遮るものがなくなる。単純に考えれば献花のために道を譲ってくれたということだろう。

ふと女性の顔を見ると、女性は表情を変えることなく献花台の方へとすでに視線を戻していた。何にせよ、これで献花できる。

「ありがとうございます……」

果たして聞こえただろうか。そして聞こえていたとしてもきっと反応はしてもらえない。そんな気がしてシンは足早に献花台へと献花をすませた。彼女たちが置いたであろう花のすぐ横に。

献花台の奥には小さな慰霊碑が置かれ、事の顛末がそこには描かれていた。

ヤラファス祭事件。あのネオ・ロアノーク少佐の言葉を信じるなら、ザフト軍のガンダムが暴れたことを原因として、港を中心に行きな被害を出した。その時の戦火がこの公園を焼いたのだ。

オープ侵攻の主戦場はオノゴロ島。産業と軍事の島だった。地球軍の主力モビル・スーツ、GAT-01A1ストライクダガーが初めて実戦投入されて、オープ軍は秘密裡に開発をしていたORB-M1 M1アストライというモビル・スーツを使用した。侵略戦争を否定しているはずのオープが、裏では過剰な戦力を濫用という形で開発していたことに、シンは子ども心に失望を覚えた記憶がある。

きっと、この女性たちも4年前にどこかで、大切な誰かを失ったのだろう。シンがそうであったのと同じよう。

「俺の母さん、あの大西洋連邦軍の侵攻の時亡くなつたんですね」

もう涙なんて出ない。

母は仕事に厳しい人だった。すでに時代遅れの言葉だが、キャリア・ウーマンとでも言うのだろうか。何事も仕事が中心で、シンはよく一人で過ごしていた。それでも誕生日の時はどんなに忙しくと

も必ず帰つてきてくれて、シンの誕生を祝つてくれた。

そう、4年前までは。

「オープの為政者たちは口では大層なこと言つてた癖に、いざ戦争が始まると何もできなかつた。俺たちは戦場のただ中を走らされた。すぐ上じやモビル・スーツたちが戦つて、流れ弾で何人もの人が死んだ。オープ軍も大西洋連邦軍も俺たち避難民のことなんて誰もかまつちやくれなかつた！」

大きな大きな独り言だ。彼女たちが聞いていてくれているかは問題ではない。

ただ前を、事実を淡々と書き連ねているだけの記念碑を見る。鋭い夕日が眩しい。冷たい海風を浴びていると、空しさばかりが強調されてやりきれない。

「すいません。初めて会つた人にこんなこと……」

振り向いても、もういないのでないだろうか。聞いていてもらいたかつた、聞かせたい過去ではない、そんな自分でもわからない交ぜになつた気持ちのまま、桃色の髪の女性の姿を探した。

女性は、もといた場所にいた。青い瞳がまっすぐにシンを捉えている。

「私は弟とも言える人、ステラにとつては大切な仲間を失つた

ステラと呼ばれた少女は、女性の腕にしがみついて何かをこらえるように体を震わせている。

「魂は実在すると思う？」

わかりやすい悲しみ方をしている訳ではない。今にも泣き出しそうな、そんなわかりやすい悲しみ方をしている訳ではない。女性は、まるで感情を乗せない空虚な話し方で、それは瞳と同様澄んだ音をしていた。

「もし存在しているのなら、ステイニングの魂はこの場所にたどり着いているのかも知れない。軌道計算してみたら、機体の墜落先はオーブ領内だったから。それなら、ステイニングもここにいるかもしれない」

一際強い風が吹いた。それとも、そう感じただけだろうか。開いた瞳孔は、女性の瞳の青さをより鮮明に際だたせる。

女性の言葉がわからない。理解できないのは魂のぐだりではない。遺体がここにはないにも関わらず花を捧げているのはシンも変わらない。

では、機体とは何だろうか。一体どこから墜落したと言うのだろうか。ステイニングという男性はパイロットだったとしても、それはおかしい。女性の年齢はせいぜいシンよりも少し上くらい。だとすると、4年前はせいぜい15、6。その弟となるととてもパイロットをしている年齢には思えない。

「あなたは一体……？」

「大西洋連邦軍所属。階級は大尉」

こんなにもドレスが似合う女性が軍人だという言葉を鵜呑みにした訳ではない。ただ、女性の言葉はとても嘘をついているようには思えない。

「じゃあ、ファンタム・ペインの、あのネオ・ロアノーク隊長の部隊の？」

女性は頷く。

先程まで一緒にいた大西洋連邦の軍人たちとはミネルヴァの向かい側に停泊していた戦艦の乗組員であった。同じ時期に同じ港に停泊しているのは共にファインブルの落着に関わったから。それなら、ファンタム・ペインと出会ったことも、きっとこの女性と出会ったことも偶然と片づけてしまつにはできない。

もしかすると、宇宙では知らぬ間に戦っていたかもしれない。

そう考えると、シンは妙に落ち着きを取り戻すことができた。緊張が一定以上に高まるとかえって心が冷たく落ち着く。それが、軍隊生活で培ってきた、ある種の処世術だからだ。

「ステイングって言う人、どうして亡くなつたんですか？」

アスランに指摘されたような、心のほの暗い部分がどうしても声となつて現れる。

「イクシードガンダムを壊されたから……。敵のインパルスに……」

ステラと呼ばれた少女が、こちらは今にも泣き出しそうな様子で女性にしがみついていた。そんなこともまるで気にならない。

まるで夢心地の中で、シンはインパルスに搭乗して射撃に特化したGAT-131イクシードガンダムの特装型を破壊した。この事実と偶然では片づけられないほど符合したことに、声が抑えようもなく暗い呟みを持つ。

「その」と口氣づいたように、ステラは女性の後ろへと体を纏すよう動く。

「黄金のガンダムの」と、知っていますか？以前、オープに攻め込んだできた奴です……」

「ZZ-X300AAフォイエリヒガンダム」

別に威圧しているつもりはない。それでも、女性はほんの少し手を伸ばせば届く場所に敵兵がいるというのに物怖じした様子を見せない。

そんなこともどうでもいい。

「パイロットは誰ですか……？」

「4年前は、エインセル・ハンター」

マコ・アスカの、母の仇の名前を女性はあつさつと口にした。

頭では理解している。この名前が、プラントにおいて最も有名なナチュラルであるということを。ギルバート・デュランダル議長が滅すべき悪魔だと声高に叫ぶ名前だと。世界最大の軍需産業ラタスク社の代表で、その座を追われたブルー・コスモスの幹部。この

戦争最大の戦争犯罪者としてプラントが勢力を上げて追いついている名だ。

4年前とこいつとは今は違つとこいつだらうか。

「あなたは、どうしてそんなことまで知ってるんですか？」

大尉と言えば現場では少々の階級だが、上層部に顔がきく階級とも思えない。何より、この若さで大尉の階級を与えられている方に違和感を覚える。

「エインセル・ハンターは、私のお父様だから」

シンの疑問を一瞬で払拭させる一言だった。同時に、理不尽な怒りに囚われている自分を自覚する。

仇の娘は仇そのものとは違う。別にこの女性に何かしようと考えたわけではない。それでも、沸々と湧き出る怒りを理性で薄めた泥水はシンの顔の筋肉をひきつらせ、左頬の痣に鈍い痛みを引き起こしていた。

女性がオープ侵攻を命じた訳でもなければ、女性が侵攻に参加していた訳でもない。

これ以上ここといってはいけない。

「今度お父さんに会つたら言つておいてください。俺は、あなたを絶対に許さない。そり」

ヒメノカリスの反応も待たず、シンは歩きだそうとした。しかし、

ほんの一歩足が土を蹴つたところで、足は止まつた。

「俺の母さんは、あの時死んだんです」

あなたの父親に殺されて。

「俺、シン・アスカって言います」

振り向きもせず、顔はこれから去つていく方向ばかり眺めている。

「私はヒメノカリス・ホテル。この子はステラ・ルーシュ」

2人の名前を聞いて、それでも顔を改めて見ようとは思わなかつた。

足は強く地面を踏んで一向に前へと歩き出す気配がない。自分の体のことなのに思い通りにならない。まるで、イクシードガンダムを撃墜した時のようだ。

別に卑怯者になりたくないわけじゃない。自分のことを正義感の強い人間だと考えたことはない。もしかすると単に復讐をしたいだけなのかもしれない。

「ステイングつて人殺したの、きっと俺だと思います……。フィンブルの上空で、変わった武装をしたイクシードと戦つたインパルスに乗つてたの、俺ですから」

足からようやく呪縛が晴れた。潮風に背中を押されて、丘の坂道に助けられ、シンは走り出した。

後に残されたのは2人の少女。シンがいなくなつたことで、ステラは小動物が巣穴から出てくる様を思わせるゆっくりとした動きでヒメノカリスの影から姿を現す。

シンのことが怖かつた。地球を壊すザフトの軍人で、ヒメノカリスのことを怒つていた。そして、ステイニングを殺したということも言つていた。

ステイニングはやつぱり死んでしまつたのだろうか。

ステラは今すぐにでも泣き出しちたくなる気持ちがわいて、それでも涙を流すことはなかつた。堪えられたわけではない。ただ、ヒメノカリスの顔を見た時、驚きの方が勝つたからにすぐない。

姉は、ヒメノカリスは泣いて、いや、涙を流していた。表情を変えず、ただ涙が白い頬を伝つてゐる。それを泣いているとすべきか、ステラには評価にためらわれた。

「お姉ちゃん、泣いてるの……？」

「涙？」

ヒメノカリス当人が気づいていなかつたらしい。指が自身の頬をなぞり、指先に確かにまとう涙に、弟を亡くした姉は瞳を大きくした。

「私、お父様以外の人のために泣けるの……？」

もうすっかりと日がくれてしまつた。温暖な気候で知られるオーブとて、夜露を含んだ潮風は肌寒い。鳥たちが巣穴に帰る頃、ミネルヴァ、そしてファンタム・ペインもまた母艦への帰路につく。

同じ岸壁を挟んで隣合つた場所に停泊しているため、両者の別れは自然と岸壁の上になつた。

「楽しかつたよ、今日はありがと」

ネオ・ロアノーク少佐はすでに薄暗いにも関わらずサングラスをとろうとはしない。そんなことを気にした様子もなく応じているのはルナマリアである。すっかり意氣投合した2人は、それはにこやかに別れの挨拶を交わす。

「いえいえ」

手を振りながら、ルナマリアは上機嫌な様子でミネルヴァの方へと歩いていった。スキップ混じりで、嘘偽りなく楽しげであった。

すでにスウェンを初めとするファンタム・ペインの隊員たちの姿はない。

ありふれた波止場らしく殺風景なこの場所で、残されたのは2人であつた。

赤い服のレイ・ザ・バレル。普段表情に乏しいその顔に明瞭な変化が生じていいわけではない。しかし、不機嫌にも見えるその顔そのまま、相手への敵愾心をにじませていた。

黒い服のネオ・ロアノーク。サングラスでアウトローを気取るにはあまりに優男じみた印象の強い少年は、そんなレイの視線を受け流しているようにその静かなたたずまいを変えようとはしない。

「とんだ茶番だな、テット・ナイン」

このレイの言葉を誰も聞いてはいない。ただ相手、テット・ナインを除いて。

「ザイン・セブン、互いにそんな名前で呼び合ひにじはよせり」
そして、テット・ナインの返事を聞くことができたのも、ザイン・セブンだけである。

「俺はガンダムを破壊する。ゼフィランサス・ズールの造った機体はすべてだ」

今はレイ・ザ・バレルと名乗るドミナントから、かつてキラ・ヤマトと名乗ったドミナントへと。

「僕はゼフィランサスを守る。たとえ、何を敵にしたとしても」

ネオ・ロアノークはおもむろにサングラスを外す。そのままルナマリアと談笑していた柔らかい様子に、どこか冷たい色を含ませていた。

シンは死者の名が書かれた石碑の間を通り抜け、階段を駆け上が

り街へと戻った。いや、逃げ込んだとする方が正解かも知れない。あのヒメノカリスと名乗った少女から。

「何様のつもりだ、お前は……！」

手短にあつた壁を殴りつける。頑丈な建物を叩いても手がただ痛くなるだけだ。それでもいい。それでよかつた。

シンは逃げた。ただ母親を殺された被害者として相手 - - しかも単に娘というだけだ - - に一方的にわめいて。掛け句に自分も相手にとつて仇であるという事実を棚上げにした。

そして逃げ出すことしかできなかつた。もう一度壁を殴りつけると、やはり手が痛い。建物はわずかながらも揺れはしない。

大した運動をしたわけでもないのに、妙に呼吸が荒い。不必要に興奮してしまつているらしい。呼吸を整えながら、思い出すのは母のことだ。

「俺、やつぱり母さんのこと、好きだったのかな……」

素直にそう言い切ることのできない自分がいる。しかしそうじでも考えなければ、激昂していくことに説明がつかない。

だからオープになんて帰つて來たくなかった。この国には何もない。そのくせに、置き去りにしてきた記憶の残り香ばかりが鼻につく。

一つの決まりを定めましょう。JJJではあらゆる暴威が許されます。人を殺してもかまいません。略奪をしてもかまいません。ありとあらゆることがここでは許されます。これはとても大きな矛盾です。決まりを破つてよいと決まりで定めてしまうのですから。

まるで密猟をさせるために用意された狩り場のようだ。

そんな矛盾に満ちた場所が、それでも世界には存在します。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
Number 1

「密猟区」

戦争。JJJは許された、そして許されざる場所です。

第11話「密猟区」

小さな山である。その斜面にほぼ垂直に落下したフィンブルの破片の1つは山の一角を崩し大きなクレーターを穿っていた。激突から日が経ちすでに火の手は上がっていない。なぎ倒された周りの木々だけが、それでもその被害の凄惨さを強調し続けている。

そんな地球の傷跡を目指す小型のトレーラーがあった。舗装もされていない悪路をものともせず突き進む。その屋根に生えた多数のアンテナが揺れている。道の倒木を踏みしめ、トレーラーは突き進む。

その内部には様々な機材が積み込まれ、それが報道車として利用されていることがわかる。

多数のモニターを有する机を前に、男がくつろいでいた。右手でコーヒーを傾けながら、左手だけで広げられた新聞を保持している。まだ若い男である。袖を肘のところにまでまくりあげたジャケットは、かつて大西洋連邦大統領の記者会見に出た時とは違う。少なくとも、公式の場では袖をしつかりと伸ばすくらいの良識を、男は、ジエス・リブルは兼ね備えていた。

外注とは言え、大手新聞社と契約するほどの記者であるとは到底思えない。ジョセフ・コーブランド大統領に食い下がった若者は、ずいぶんと気楽な様子で新聞を眺めている。

紙面には避難民の少女に手当を施す若い男性……一度見たら忘れることがげきないほどの美形だ……の写真があつた。

「エインセル・ハンター代表の慈善行為か。そもそもブルー・コスマスがプラントとの関係をこじらせてなければこんなことにならなかつたのにな」

カップを傾け、「コーヒーを口に含もうとする。その途端、車が急に揺れ、熱いコーヒーが少量とは言え顔にかかった。思わず新聞を取り落とすほど驚かされたが、コーヒーをこれ以上こぼすことだけは避けた。運転は、またすぐに落ち着きを取り戻す。

「フレイ、もう少し丁寧な運転をしてくれないか」

ジェフは運転席に座る少女へと声をかけた。

座席に隠れて姿はよく見えないが、運転手を務めるフレイ・アルスターはひらひらと片手を振つてみせた。

「はいはい、『めんなさい』『めんなさい』

今時のお洒落な女の子だが、どこで培つたのか運転の技術は秀逸である。どんな言葉がフレイの機嫌を損ねたのかわからないが、揺らしたのはきっとわざとだ。幸い服にかかることはなかつたが、まだ頬がひりひりする。飲み直す気にはなれずカップの中をついのぞき込む。すると、「コーヒーの水面に写つたのは、女性の顔であつた。

「あまりあの娘の前でエインセル代表の悪口は言わない方が賢明です、リブル所長」

短く整えられた髪に、細長の瞳。上品な化粧が施された顔は厳しそぎない程度に律儀さや真面目さというものを感じさせる。事実、ジェフの所属する事務所ではこの女性、ナタル・バジルールがまと

め役であり頭の上がらない存在であった。

ジェフは首の角度は変えずに、ただ視線だけでナタルの表情をうかがつた。フレイがエインセル・ハンターのファンだとは知らなかつたが、ナタルもまた声にどこか棘を含ませていたように思えたからだ。

フレイにナタル。そしてここにはいないが、アイリス・インディアを含めた3人はジエスが独立し、個人事務所を立ち上げた際に雇つた新規スタッフである。3人が知り合いであるとは聞いていたが、若干歳の離れた3人がどのように知り合い、どのような関係であるのかまでは聞いていない。

退役軍人であるらしいということまでは聞いているのだが。

所長が女性スタッフとの距離間に悩んでいる間に、車体が小さく揺れた。どうやら目的地についたらしい。

「ついたよ」

気のないフレイの言葉。車は止まっていた。

車載カメラが映す光景は何でもない森の様子である。森の中の隘路に車は止まっていた。そして、目の前の山並みを捉えるカメラには、フインブル落着の跡がまざまざと見せつけられている。本物の山なのだ。子どもの作った砂山とは訳が違う。それでも、砂山に石を思い切り投げつけたように、山には山肌を吹き飛ばして大きな穴が開いていた。

圧倒されている場合ではない。ジエスが気を取り直すすぐ横で、

すでにナタルが行動に入っていた。先程まで立っていたはずが、今はジエスの横に座っている。前にはジエスの椅子同様モニターが備えられ、そこにはモビル・スーツの姿が映し出されている。

GAT-001デュエルダガーをさらに簡素化したような特徴のない姿をしたモビル・スーツがモニターに捉えられていた。その姿は山の麓——岩が散乱し、とてもではないが人では近寄りようがない——にカメラを構えた状態で存在していた。

GAT-001ダガーレ。デュエルダガーからすべての武装を取り払い、性能全体をデチューンした民間仕様機である。主に土木作業に用いられるが、ジエフたちは撮影用にこれを使用していた。カメラもモビル・スーツの大きさに合わせた特殊なものである。

この機体のパイロットを、アイリス・インディアが務めている。
「アイリス、とりあえずクレーターを見渡せる場所を探してもらいたい」

アイリスに指示を飛ばすのはナタルの役割であるため、ジエスは目の前のモニターに集中している。ダガーレのカメラから送られてくる映像はここに映し出されている。アイリスはあくまでもカメラを現場に持ち込むだけ。撮影そのものはジエスの仕事なのである。

ここで手が開いているのはフレイだけ。そのためか、フレイは退屈そうな様子でアイリスと通信を繋いでいる。

「ねえ、アイリス、今回のことどうゆうつ？」

「フィンブル落着のビサクでザフトは部隊を降下させたなんて話

もありますよね

「ザフトならやりかねない。そのことについては私も同感だ」

応えるのはアイリスだけかと思いきや、ナタルまで話に加わるつと/orする。

3人は退役軍人とは言え、フレイとアイリスはまだ若い。とても前線に出たことなどなさそうなものだが、それでも敵対したことのある勢力が相手となると厳しい目を向けてしまいかになるのだろうか。

ジエスが依頼されていた見出し用の写真を撮り始めている間にも、2人の少女は会話を交わしている。

「実際、小惑星を落とすことは難しくないって話だしね。TNT火薬何十kgかで動かすことができるんでしょ」

「ジエスさん、ファインブルのサンプル持つて帰つてもいいですか？」

まさか自分に話が向いてくるとは思わず、やや不自然な間を開けてしまった。

「……ああ、いや、そんなことは学者先生がすると思つよ」

またシャッターを切る。なかなかいい写真が撮れたのではないだろうか。何の気無しにいい気になつていると、その時のことであつた。可愛らしい声をしているのに、妙に底冷えのする声が聞こえてきたのは。

「いい、ですよね？」

アイリスは、実は3人の女性陣の中でも押しが強い。

「わかりました……」

ジエスには、これ以上言い加えることはできなかつた。

商魂逞しい。それはたとえば、敵国同士が隣あつて接岸している港に、戦艦の乗員の需要を当て込んでオープン・カフェを開くようなことを言うのではないだろうか。

ザフト軍ラ・ヴ・クラフト級特殊戦闘艦と大西洋連邦軍スティングラー級MS搭載型強襲揚陸艦とに挟まれる岸壁にパラソルを備えた丸テーブルが並べられていた。こんな場所でオープン・カフェをしようとした店があつたのだ。

両軍の兵は、さすがに相席するほど神経の太さを持つものはそうはおらず、ザフト軍の緑と地球軍の白どが固まつて点在していた。それでも両軍が隣あつて座つていることに変わりはない。

その中にあつて、それでも相席を構わない人物はいるものである。ただし、こちらはザフト軍の赤と地球軍の黒。3人の少年が同じテーブルを囲んでお茶を嗜んでいる。

「まさかすぐに顔を合わせることになるとはな」

アスラン・ザラがカップを傾けながら。その隣ではレイ・ザ・バ

レルがまだ一度もコーヒーに口を付けぬまま、眉間に力を込めていた。その視線の先には、サングラスをかけたままのネオ・ロアノークが悠々と紅茶を喉に流し込んでいる。

「こんな近くに停泊していれば当然だよ」

つい先日宣戦布告を終えたばかりのレイを前に、ネオは、キラは平然と態度を崩すことはない。

「それより、ルナマリアがずいぶん遠いけど」

ネオがくるりと首を回す。それにつられるようにアスラン、レイが視線を移す。離れたテーブルに一人で座るルナマリアが3人の視線に気づくなり急に体を小さく、テーブルに隠れるように隠れてしまう。怯えた小動物のようにテーブルの上に頭だけだして様子をうかがっている。

アスランは呆れながら体の向きを戻す。

「キラ、今はネオか。お前自分のこと隠してキラ・ヤマトの悪口で盛り上がりつたらしいな。ルナマリアはすっかり萎縮してしまったよ。いつからそんなに悪趣味になつたんだ?」

「いや、僕は普通にあの映画は好きだよ。プロパガンダであることや、ただ玩具を売るための作品にしては演出は秀逸だよ。配給元も実力のあるところだしね。ただ、勢いだけの作品だから続編は作らない方が賢明だろ?」

「監督にはファンの意見として伝えておく」

キラとこう男はよくも悪くも嘘をつくことないことをしない。自分が周りからどう思われているかに興味がなく、そのため、映画でどうじき下ろされていようとも気にもしていない。レイやルナマリアとの関係など、その一端であるよつに思われる。

やはりキラは誰に断ることもなく突然立ち上がった。

「ちょっと知人に会つてくるよ。アスランも知つてる人だけ、くるかい？」

いや。そんなことを言しながら断ると、キラはサングラスの奥でかすかに笑つて、それから歩きだした。ミネルヴァのクルーの中にはファンтом・ペインの黒い制服が近づいたことであからさまに警戒する者もいるが、もちろんそんなことを気にしてなどいない。オープン・カフェを悠々と歩いていく。

そんな幼なじみの姿を見送りながら、アスランはつい曖昧な笑みを浮かべてしまう。

「こつでもじこでもゼフィランサスのことばかりだ。ユーワス・セブンにいた頃から何も変わつてないだろ」

「そうだな。……」の国にはカガリもいると聞いたが？

「こ」でレイは初めてコーヒーに口をつけた。その間だけ言葉が途切れた。それはレイなりに話題を変えるための間合いを計つたといふことであるのかもしれない。

「ああ。1に7、そして9と3もある。これで、ドミナントが全員、1力所にそろつたことになるな」

アルファ・ワン。今ではアスラン・ザラと呼ばれる初号機。3はギーメル・スリー、今の名はカガリ・コラ・アスハ。7はレイ自身。テット・ナインはいくつもの名前を経てネオ・ロアノークと今は名乗る。そして残りの5人は死亡したものとされている。

「いや、あと1人足りていない」

レイの言葉に、アスランは考えるまでもなく答えを導き出す。数えられないドミナントが存在する。最強にして始源、プロト・ドミニナントと呼ぶべき男の名前を知らないプラント国民は存在しない。

「エインセル・ハンターは何が何でも倒さなければならない。それこそがプラントの悲願だ。俺は、飽くなき正義を示す」

アスランが残りのコーヒーを口に含んだ時、すでにコーヒーは冷めきっていた。

人のいない閑散とした格納庫。ステイガラー級の格納庫であり、4機のGAT-X255インテンセティガンダム汎用型も修復されていた。中央に置かれているのはZZ-X300AAフォイエリヒガンダム。傷だらけのその姿はまるで修復された後がない。

また、GAT-X255インテンセティガンダム汎用型も修復されることなく格納庫の隅に寝かせられていた。大型のバック・パックは取り外され、足にはビームによって溶かされた切断面が痛々しいまま放置されていた。

アウル・ニーダがいるのは、ちょうどそんな傷口のあたりである。

癖の強い髪が、今は一層乱れている。仲間であったステイング・オーケレーがいなくなつてから満足に部屋を出ることがなかつたアウルはどこかとり憑かれたような様子で愛機の傷口からコードを引つ張りだしてはその状態をつぶさに確認していた。人の腕ほどもあるコードは完全に切断され、熱によって隣あつたコード同士が溶接されていた場所もあつた。これを修復するとなると、足をそのまま取り替える必要があるかもしれない。

修理のための計画を練るアウル。そんなアウルに唐突に声がかかつた。

「おい、何やつてんだ、坊主？」

振り向くと、いつのまにか男が資材を椅子代わりに座つていた。すぐ近くにはもう一人別の男が立つていて、声をかけてきたのは恐らく座つている方だろう。褐色の肌は関係ないが、伊達眼鏡にも見えるサングラスをかけたところがとにかく軽薄そうに見えるのだ。反対に、立つている男は全体に色素が薄い印象で、それとはまるで関係ないが厳格な印象があつた。

一応、パイロット同士として紹介くらいされたはずだ。褐色の方はシャムス・ゴーザ。色白はスウェン・カル・バヤン。

「見てわかんだろ、ガンダムの修理だよ」

「やめとけやめとけ。ちょっと乗れるくらいで整備や修理ができるほどモビル・スーツは単純じゃねえよ」

「『J』の艦の整備の連中がしつかり仕事しねえからだろー。」

フィンブル落着以来、まるで修理が進まない様子に、アウルはかまわず息を吹いた。

シャムスは面倒くさそうに頭をかいて、答えてきたのはスウェンの方である。

「『J』の艦には元々ディーヴィエイト用のパーティクルしか積載されていない。ガンダムは多少互換性がきくが、量産機のようにはならない。幸い、オープはインテンセティガンダムのライセンス生産をしている。今、アーノルド副隊長がパーティクルを融通してくれるよつ掛け合つてるところだ」

まるで取り扱い説明書のようて要点を押さえ、しかし味気ない言葉だ。同じ部隊でありながらシャムスとはあまりに違う態度に戸惑わないことはなかった。

何より、インテンセティを修復することはできないといつことがよく伝わる。

「まあ座れよ」

シャムスが椅子代わりの資材を叩く。別に従う義理はない。それでも、修理が事実上不可能であることくらいはわかる。

アウルはコードを手放した。それでも、シャムスの隣に座る気にはなれない。ほんの少しだけ2人に近づいたところで足を止めた。その様子には、スウェンは何の関心を示すことなく、シャムスはあからさまに肩をすくめてみせた。

「お前が仲間の仇を討ちたって気持ちもわかるがな、今焦つても機会をすり減らすだけだ。ただでさえ整備性の悪いガンダムなんだ。少し機械をいじれる気でいる素人が手え出しても性能を下げるだけだ」

何だよ、偉そうに。それがアウルの率直な感想である。

「ところで坊主」

「アウルだ」

「じゃあ、アウル。お前の姉さんだけどよ、恋人とかいるのか？」

サングラス男はいたつてまじめな様子で、そしてとんでもないことを言い出した。

「い、いるわけねえだろ！」

「よし！ いないんだな」

アウルが力強く否定する目の前で、シャムスは力強く手を握りしめる。そんな色眼鏡へとアウルは近寄りながら声を大にした。

「何企んでんだよ！？」

「子どもにはわからないかもしれないがな、お前の姉さんは美人だ。おまけに家は資産家。これで声かけない方が無礼つてもんだろ」「

「ざけんなよ！ お前なんか姉ちゃんとつり合いつわけないだろ！」

黒い軍服の胸ぐらを掴まれても、シャムスはにやけた表情を変えよつとはしない。

「わからんねえぞ～」

いくら睨んでやつてもそのしまりのない顔は変わる気配さえ見せない。そんな時、スウェンが唐突に声を出した。

「では、家族関係はどうする?..」

何を言つているのかわからず、アウル、そしてシャムスはそのままの姿勢で揃つてスウェンを見る。

「お父上、エインセル・ハンターはかなりの子煩惱だと聞く」

聞き覚えのある名前だった。ヒメノカリスから父一養父であるとのことだがーとして何度も聞かされた名前だからだ。何故かこの名前を聞かされた時だけ、シャムスは深刻そうに考え込み始めた。

「……そつか、舅か……」

婿舅問題に考えが及ぶほどアウルは年齢を経てはいない。結論として、ファントム・ペインでガンダムの操縦を任せられるほどのパイロットはどこかおかしい。何なんだ、こいつら。それがアウルの率直な感想となつた。

オープ、オロファト市の片隅の小さな喫茶店は、ひつそりと静ま

り返っていた。元々小さな店で、長引く戦争で観光客もあてにはできない。潰れるほどでもなければ、盛況とも言い難い。そんなひとつと大きな街ならどこにでもありそうな店であった。

オーナーの趣味でインテリアは、お茶を嗜む、そのための空間を演出しているように思える。椅子からテーブルなお洒落な意匠が施されている。

そんな店の中、若い女性が1人カウンターの奥で洗い物に手を濡らしていた。客がないのはそれほど流行っていないことはもちろんだが、何より、在庫整理のために午前で店を閉めてしまったためだ。無人の店内で、水音だけが淡々と染み渡る。

女性は独り言さえ発することなく、瞬きさえ忘れてしまったような虚ろな視線で洗い物を淡々と進めていく。その手が止まったのは、客の来店を告げる鈴の音一ードアに取り付けられたものだーが聞こえた時であった。

大きく開いた髪が特徴的で、素朴な印象。しかし、同時に刹那的な危うさを女性は持っていた。

「じめんなさい、今日は、もう、……」

店じまいにしている。そう告げようとした女性の言葉は、来客を見た瞬間に止まつた。

黒い軍服を着た若い男が、サングラスを外しながら女性に話しかけた。

「こんにちば、ミリアリア」

「キラ……」

女性にキラと呼ばれた少年は、店の中にまで入ってきたといひで水が流しつぱなしだと指摘した。ミリアリア、ミリアリア・ハウは自分の手が止まっていることに気づいて手についた洗剤を洗い落とすなり水を止める。身につけたエプロンで手を拭きながら、それでもその視線に光は灯つてはいない。

「何しに来たの？」

「君がここで働いてるって聞いたんだ。本当は昨日訪ねるつもりだつたけど、旧友に偶然再会してね」

ミリアリアは少年のことを知っている。キラ・ヤマト。現在はどんな名前を名乗っているのかは知らないが、4年前、ヘリオポリスのカレッジ・スクールに通っていた時の友人である。ただし、その後戦争に巻き込まれて以来、まともな付き合いさえない。

旧友の言葉に関心を示すことはない。ミリアリアは洗い物を再開しようとしたとして、蛇口へと手を伸ばした。

「まだトルのこと、引きずってるみたいだね」

「忘れられるわけ、ないでしょ……！」

蛇口を掴んだところで手が止まる。この時初めて、ミリアリアは心の機微といふものを明らかにした。嘆くように、しかし言葉を吐き捨てる。

「恋人の死を忘れないことと恋人の死に囚われていることは意味が違う」

恋人、トール・ケーニヒの死からすでに3年が経つ。最後のヤラファス祭でモビル・スーシの戦闘に巻き込まれ命を落としたのだ。公園跡の石碑にはかつての恋人の名前が刻まれている。

キラの言葉はミリアリアには届かない。その原因となつた戦闘を行つていた当事者の1人がキラであると知つたのは事故の後だつた。そして、ミリアリアは怒りに狩られ、復讐のために捕虜であつたザフト兵を殺害しようとさえした。その結果、大切な友人を巻き添えにしようとして、復讐するといふことの怖さを知つた。

あの時のこと思い出すと、ミリアリアの瞳は再び光を失う。

「帰つて……。お願いだから帰つて……」

うつむいたままでは、キラがどのようなことをしているのかわからぬ。ただ、視界の隅で近づいてくること、そして、カウンターに何かを置いたことだけはわかつた。

「ミリアリア。一度戦争を見てみないか？ この戦争はどうして起きたのか。何故戦わなければならないのか。その先にトールが死ななければならなかつた理由がきっと見えてくると思つんだ」

キラが置いたもの、それを盗み見ると、それは名刺の類であるようだ。ネオ・ロアノークーそれが今のキラの名前なのだろうーといふ名前と、大西洋連邦軍少佐という階級が書かれている。もつとも、ミリアリアには少佐がどれくらい偉いのかはわからないが。

「僕たちの艦はまだ数日は停泊している。その間にネオ・ロアノーク少佐を訪ねてほしい」

そうだけ言い残して、キラは、ネオ・ロアノーク少佐は静かに店を出ていこうとする。見送ることは、どうしてもできずにいた。

「俺たちはオープンを出航後、カーペンタリア基地を目指す」

ブリーフィング・ルームにパイロット全員 - - とは言え、現在ミネルヴァには4人しかいない - - を集め、アスランがまず口にしたのはカーペンタリアという言葉であった。作戦会議には欠かせない台に備え付けのディスプレイには東アジアの地図が表示されている。オーストラリア大陸北部に印が表示されていた。

ディスプレイを取り囲みながらシンはカーペンタリアのことを少しずつ思いだそうとしていた。

「カーペンタリアって言うと、東アジア共和国の？」

オーストラリア大陸北部に位置するカーペンタリア湾に設営されたザフト軍の地上拠点のことだ。プラントとは関係が劣悪である東アジア共和国のほぼ中央にあるため、非常に不安定であると聞いている。軍事力に乏しい東アジア共和国を無理に抑えつけているだけだからだ。

そんな不安が顔に出たのだろうか。アスランは軽く笑う。

「そんなに心配しなくとも、今は拡張工事が進んでる。だいぶ軍備が増強されたはずだ」

何と言つても、現在のザフトにおいてカーペンタリア基地は最重要拠点だからな。アスランはこいつも付け加えた。

「そこで俺が乗っていた艦と合流しよう。その後、レイや君たちには悪いが、少し俺の任務を手伝つてもいいことになる」

レイ隊長はともかく、任務についてはその内容さえ聞かされたこともない。ついよこのルナマリアを見ると、ルナマリアもルナマリアで助けを求めるようにシンのことを見ていた。

「このことを、アスランは勘違いしたらしい。」

「いや、君たちの任務の重要性は理解しているつもりだ。邪魔しようつて言つ訳じやない」

不満も何もない。どう答えてよいものかと苦慮している内に、これまで一言も発すことのなかつたレイ隊長が動いた。

「アスラン、この2人はミネルヴァの正規の搭乗員ではない」

「それじゃあ、任務について何も聞かされていないのか？」

「そのことはうすうす察していたのだろう。アスランは思いの外反応が薄く、同時に飲み込みが早い。」

「わかった。さすがに機密までは明かせないが、ある程度の範囲で話そう」

「いいのか？」

「訳も分からず引っ張り回すわけにはいかないだろ。グラディス艦長には俺から話しておく」

「まずその前に紹介しておきたい人がいる」

そう言つと、アスランは軍服のポケットから掌サイズの円盤 - - 形はコンパクト・ミラーの類によく似ている - - を取り出すなり、台の上に置いた。見た目よりも重そうで、側面にはセンサーの類が取り付けられたもので単なる手鏡であるはずがない。

紹介したい人とこの装置がどう繋がるのか。シンの疑問に答えを示して、装置の上部から光の柱が立ち上った。光の中に姿を見せたのは赤い瞳を持つ少女であった。

「思つたよりもずいぶん早いね」

ネオは感じた思いを率直に口にした。喫茶店で誘いをかけてからまだ2時間と経っていない。それなのに、ミリアリアはステイガラ一級MS搭載型強襲揚陸艦の格納庫に姿を現した。

まだエプロンを身につけたままで、旅行鞄からは衣類の切れ端が覗いている。よほど急いで準備をしたことがうかがえる。

「オーナーには怒鳴られたけど」

「ご両親には。そう尋ねるネオに対し、ミリアリアは後で連絡を入れておくとにべもない。

トールを亡くして以来どこか自暴自棄になりつつあるミリアリアの危うさが決断を早めたらしかった。ただ何にしろ、戦艦へと誘つたのはネオの方である。

「ようこそ、ミリアリア。簡単に僕の部隊を紹介しておこうか」

踵を鳴らし、ネオは格納庫の奥へと向き直った。疎らな整備組と違いパイロットは全員が揃っていた。パイロットなんて人種は時間さえれば自分の愛機を眺めたいような人ばかりだ。

まず目に付いたのは、積み込まれた資材の側で資料片手に在庫確認に余念がないアーノルド・ノイマン。足音だけで気づいて、アーノルドは振り向いた。足をとめ、ミリアリアが追いつくのを待つてから話を始める。

「アーノルド・ノイマン。僕の隊の副隊長で……」

「フレイとお付き合いされている方ですよね。以前遠巻きにデータしてゐる見ました」

もう4年近く前のことなのに、ミリアリアはよく覚えている。アーノルドはどう答えてよいものかわからず頬をかいていた。わかっているならもういいだろうと再び歩き始める。

続いて見えてきたのは3人の隊員たち。3機のGAT-333デイヴィエイトガンダムが見える位置にたむろしている。男性が2人に女性が1人。

「スウェン・カル・バヤンにシャムス・コーヴ。後、ミコーディー・ホルクロフト」

シャムスがミリアリアになれなれしい様子で手を振つている。

「何かわからないことがあつたらシャムス以外の誰かに聞くといいよ。シャムスは女性に手が早いから。まあ、3枚目だから危険はないよ」

「隊長、もう少ししましな紹介の仕方ないんすか？」

大げさに嘆いてみせるシャムス。あんな風によくも悪くも深刻な雰囲気が似合わない男なのだ。

同じ場所から、今度は破壊されたインテンセティガンダムの側で何やら話をしている少年少女の姿が見える。さすがにミリアリアも2人の様子を見るなり、表情を変えた。戦争をするには若すぎる。そう考えたのだろう。

「アウル・ニーダとステラ・ルーシュの2人はまだ合流したばかりでここにはあまり慣れてない。それに、仲間を失つたばかりだから少しでも氣を使ってもらえるとありがたいかな」

ミリアリアはすぐには納得できなかつたのだろう。しばらく子どもたちのことを眺めて、それからようやく首をネオの方へと戻した。そして、再び瞳孔を拡散させることとなる。

ネオのすぐ側にいつの間にやらヒメノカリス・ホテルの姿があつた。すでにいつものような白いドレスに身を包み、状態は万全であ

るらしい。どこか神出鬼没なところは、第3研の3姉妹の特徴のようないい氣がする。

ネオの旧友が驚いているのは別にヒメノカリスの姿が原因ではない。友人であるアリス・インディアとあまりによく似ていることが信じられないのだろう。同じ青い瞳をして、桃色の髪の鮮やかさは変わらない。表情以外であれば、ヒメノカリスとアリスはよく似ている。

「彼女はヒメノカリス・ホテル。アリスも、双子の姉だと思っておけばいいよ」

「（）では敢えて、ネオはすべてを語るつもりにはなれなかつた。ミリアリアにとつてはすべてが新しいことで、色々話して聞かせるには早すぎる。そう考えたからだ。」

「誰？」

「ミリアリア・ハウ。僕がオープにいた頃の友人だよ」

同じ顔であつてもヒメノカリスとアリスとではずいぶん様子が違うのは今更のことだろう。とりあえず名前を聞いただけで興味を失つたらしい。ヒメノカリスがそれ以上ミリアリアについて尋ねてくることなかつた。ミリアリアはまだ信じられない様子であつたが、ヴァーリについてここで話すつもりはない。

「最後に僕のパートナーを紹介しておくれよ」

ネオは自身の愛機を、NN-X5N000KYガンドムラインルビーンを見上げた。ここなら立体映像投影装置を使う必要もないだ

るつ。

「アウル、ステラ。君たちもこっちへ」

声をかけると、ステラは素直に来てくれるが、アウルはしぶしぶと言った様子である。きっと、ヒメノカリスがネオの近くにいなければ応じることもなかつたことだらう。

ミリアリアとヒメノカリスはすでにそばにいる。ステラとアウルの到着を待つてから、ネオはラインルビーンへと手をかざした。ラインルビーンの胸部のあたりから光が舞い降りた光がネオたちの目の前で像を結ぶ。赤い瞳と白い髪をした少女の姿が浮かび上がつた。

ハイネ・ヴェステンフルスはザフトの軍人であった。赤服とΖG MF-233Sセイバー・ガンダムを与えられるほど軍学校では優秀な成績を納め、初陣をGAT-01A1ストライクダガー3機撃墜といつ目覚ましい戦果を上げた。

鮮やかな金髪の手入れを欠かしたことはない。いつも人の前に出ようと心がけ、そのためか、周りからは伊達男だと思われていたようだ。

戦績は十分。後ろで隠れているなど性に合わない。そんなハイネが地球行きを志願したのは至極当然のことであつた。

フィンブル落着の時、ハイネは小惑星の欠片に紛れて地球へと降りた。地球の軌道艦隊はフィンブル迎撃に戦力を割かれ、レーダー網は破片がノイズとして書き込む。

安全かつ密かに地球へと降下するには絶好のタイミングであった。火事場泥棒同然の行為だが、ハイネは努めてそれを気には留めないこととした。相手の隙や弱点をつくるのは戦いの基本であり、中途半端な情けは戦場では足かせにしかならないとわかつていたからだ。

そして、それはすぐに証明されることとなつた。

大気圏降下用の特殊装備が施されたボズゴロフ級潜水艦は内部に多数のモビル・スーツを搭載したまま無事大西洋西岸へと降下を果たした。計画通り。そう確信した指揮官がギルバート・デュランダル議長に負けじと大演説を打つたところで、ハイネは自身の考えの確かさを確認することとなつた。

突如鳴り響く警報。事態を把握する間もなく天井が割け、大量の水が格納庫へと流れ込んできた。

敵襲だと即座に確信できた訳ではない。波に足を取られ体が壁へと押しつけられた。全身が水に濡れた頃、強い揺れが水を震わせた。GAT-252インテンセティガンダムが天井を突き破り膨大な水とともに格納庫へと突入してきたのだ。

再び押し寄せる水の塊。ハイネは流れ着いた小型コンテナにしがみつくことで辛うじて耐えた。水中戦に優れているとされるインテンセティは三叉戟を動かないセイバーガンダムへと突き立てるなり、フェイジシフト・アーマーが発動していない装甲を軽々と貫通する。その次の瞬間にはすぐ隣のセイバーが腹を引き裂かれた。

ハイネはコンテナを手放すなり必死に泳いだ。水の勢いは強く、すぐそばで仲間の腕が波に呑まれていく様が見えた。構つてなどい

られない。自分が溺れてしまわないよう精一杯で、とにかく手足を動かした。一つの幸運があつたのは、水の流れがちょうどコクピットの位置までハイネを運んだことだ。

水はすでにモビル・スーツの腹部にまで満ちている。開かれたままのコクピット・ハッチの縁に手をかけ、無理矢理体をコクピット内へと引き上げる。流れ込んでくる水とともに、ハイネはシートへと吊りつけられた。

ベルトを絞めている余裕はない。ハッチを閉め、システムを立ち上げるとともにハッチを閉める。「クピット内部に残された水は排出口を通じて機外へ。水位は見る間に下がっていた。

モニターが光を映し出すと、強烈な光が格納庫を包んでいた。

敵のインテンセティが甲殻類を思わせるバック・パックを被り、ビーム砲を放ったのだ。格納庫からブリッジの方向へと、内部にまで装甲を張り巡らせる戦艦などない。少なくとも、ビームの直撃に耐えられる強度があるはずがなかつた。

壁に風穴が開き、そこへと水が流れ込んでいく。急に潜水艦が沈み込んだのは、深刻なほど浸水してしまつたことを意味していた。この船は沈む。

ハイネはセイバーを動かした。全身が青いインテンセティとは正反対と思えるほど深紅の機体である。右手にはビーム・ライフル。左手にはシールド。そして、バック・パックには2門のビーム砲と翼を持つ。

どれも狭い艦内で使用できる兵器ではない。

迷っている暇はない。悩みは命取りだ。ハイネは歯を強くかみしめるなり、セイバーを突進させた。

腰まで水に浸かっているため動きが鈍い。ミノフスキ・クラフトで無理矢理機体を突撃させ、こちらを振り向きつつあつたインテンセティへと体当たりを食らわせた。シールドを前に、ガンダム同士を激突させたのだ。

合計140tを超える衝撃が波を立てた。インテンセティは2枚のシールドを構えこちらのことを受け止めていた。ナチュラルにしてはいい反応だ。

だが、この1撃の目的は攻撃ではない。ただ押さえすればそれでいい。セイバーは勢いをそのままインテンセティを押し切ろうとするも、2機のモビル・スーツは下半身が水に浸かっている。勢いやがて吸収され、シールドをぶつけ合ひ姿勢のままで止まってしまった。

インテンセティのシールドの表面には、青い薔薇のエンブレムが描かれていた。

これでいい。セイバーの体を水が濡らす。天井から降り注ぐ水が柱となつてセイバーを包んでいた。そう、すぐ真上には大きな亀裂が走り、真下のポジションを奪うことができたのだ。

水の中でミノフスキ・クラフトが輝きを放つ。ハイネは仲間への未練を振り切つてしまつ心地でアクセルを力任せに踏み込んだ。降り注ぐように叩きつける水の中をセイバーが無理矢理浮上する。インテンセティの放つたビームがつい先程までセイバーがいた場所

を通り抜けた。膨大な熱量に水が蒸発し、水蒸気が文字通り爆発的な速さで噴出する。

天井の穴を通り抜けた途端、セイバーを爆発に揺らされた波が襲う。ガンダムを、フェイズシフト・アーマーを引き裂くほどではない。ベルトを締めていなかつたことが災いした。ショック・アブソーバーでも堪えきれないほどの揺れガハイネへと降り懸かり、記憶があるのはここまでである。

目覚めた時、ハイネは病室に寝かせられていた。服は病院衣に着替えさせられているが、拘束具の類はない。拾ってくれたのはどうやら味方のようだ。

立ち上がり、ベッドの周囲に取り巻かれていたカーテンをどかす。状況を聞こうと医者の姿を探すが見つからない。左右見回して見ても医者らしい人物は見あたらない。ただ1人いるとすれば椅子に足を組んで座る女性が1人だが、とても医者には見えない。

緑の黒髪が長く背中にまで延びている。切れ長の目を細い顔のかなかの美人で、ハイネのことにはすでに気づいているようだ。服は黒を基調としたもので、敢えてたとえるなら魔術師のような凝った意匠が施されている。

さて、医者はどこだろうか。

「打ち身が3カ所。擦り傷が1カ所。ベルトもつけずに乗り回していた割に、君はずいぶんと悪運が強いようだ」

容貌に違わず凜々しい声をしている。その手にあるのはカルテだろうか。医者と言えば白衣が相場と考えていたが、何事も例外はある

るらしい。

「俺はハイネ・ヴェステンフルス。状況は理解しているかも知れないが、地球降下部隊の者だ」

「私はロンド・ミナ・サハク。この艦の船医をしている。そして君はその患者だ」

「俺の他に生存者は？」

「水深100m近い場所にいきなり投げ出された人間が助かる術があるなら教えてもらいたいものだ。それに、君とて我々が見つけたからいいものを、鉄の棺桶の中で鮫の餌にもならず漂うところだった」

格納庫にいた仲間はほぼ絶望的だと理解していた。艦内にも水が入りすでに深度を維持でいなくなっていた。

仕方がなかつた。水中戦を想定していないセイバーではインテンセティにかなうはずがない。格納庫での戦闘を継続していれば艦の寿命を縮めるだけだつた。割り切るしかない。

あの時、セイバーを離脱させる」とこそが最善の策であったのだ

と。

ハイネが表情を曇らせている間もロンド・ミナ・サハク医師は不敵な笑みを崩すことはない。

「状況を教えてもらえないか。俺のセイバーはどうなつた？　この部隊の所属は？　戦況はどうなつた？」

「セイバーは無事だ。多少フレームに損傷は見られたが、大したことはないそうだ。この部隊はカーペンタリア基地所属だ。今も基地に向かっている。大部分の降下はうまくいったようだ。カーペンタリアでは今頃大量の物資の相手に大わらわだろう」

では運悪くハイネが所属していた部隊がたまたま襲われた方に入つてしまつということか。青い薔薇のエンブレムを身につけたファントム・ペイン直轄のインテンセティ。地球に来て早々、目標ができたようだ。

「それで、次は何を聞きたい？」

言いながら医師は足を組み替える。タイト・スカートなので医者にしては不必要なほどに色っぽい。

では次は何を聞こうか。そう考え始めた途端、艦内に突如警報が流された。艦内放送で第1種戦闘配備への移行が告げられる。

「敵襲か！」

言つや遅しとハイネは医務室を飛び出した。艦内構造を見てすぐにわかった。この艦も同じボズゴロフ級である。構造は熟知している。呆気にとられる人々を避けながら通路を走る。ここがブリッジ。そう知っている扉——潜水艦故か昔ながらの鉄扉が採用されているを開けると、窓1つない薄暗いブリッジが見えた。

「艦長はどこにいる！？」

宇宙戦艦のようなわかりやすい艦長席などない。狭苦しいブリッジ

ジの中央の長髪の人物 - - 後ろからでは男女の区別がつかない - - が振り向いた。

「私だ」

その人物は目の前にいる。それでもハイネは思わず後ろを向いた。すると後ろにはいつの間にか追いついていたロンド・ミナ・サハク医師の姿があった。視線を戻すと、正面にもやはりロンド・ミナ・サハクの姿があった。もう一度振り返ると、やはり医者は妖しく笑っていた。

「彼は私の双子の兄でね。名はロンド・ギナ・サハク。サハクでは紛らわしい。ギナ艦長とでも呼ぶといい」

ギナ艦長は妹とほどよく似た笑い方をする。そして服装まで同じ。よく見れば多少違いがないような気がしないでもない。だが観察する時間もなく、艦が激しく揺さぶられた。

「何があつた?」

「敵ストライクダガーに発見された。どうやら、君を拾つたところを哨戒機にでも見つかつたらしい。恐らく東アジア共和国の機体だろ?」

カーペンタリア湾を押さえられても何もできない国の嫌がらせだ。

潜水艦が再び激しく揺れた。体が壁に叩きつけられた。どうやら、東アジア共和国もようやく本腰を入れることにしたらしい。大方大西洋連邦あたりが軍事支援を強化でもしているのだろう。

「俺のセイバーは出せるのか！？」

「君は病み上がりなんだがね」

「構わんさ。我々がどの程度の拾いものをしたのか、確認するのも悪くない」

この兄妹は立ち上がるこじりたくないにも関わらず、余裕をなくしてはいけない。

「格納庫へ急げ！ 詳しい指示は機内で行う！」

上空には合計6機のストライクダガーが飛行している。2機はジエット・ストライカーを装備しているが、残りの4機は砲撃に特化したドッペンホルン・ストライカーで統一されている。水面下のボズゴロフ級潜水艦を狙い撃つのはドッペンホルン・ストライカーの仕事である。大型の大砲を1対そのまま扱いだような無骨なストライカーはそれ自体がミノフスキー・クラフトの輝きを放ちながら機体を旋回させる。

ボズゴロフ級潜水艦は潜水艦というよりは潜水もできる輸送艦としての意味合いが強い。潜水深度は必ずしも深くはなく、航行しながらではさりと浅くなる。

合計4機のドッペンホルン・ストライカーから放たれる実弾は水中深くにまで楔を打ち込み、敵潜水艦を揺らした。

1Jの程度の間接攻撃を繰り返していても撃沈できるとは誰も考え

てはいない。ストライクダガーたちは待ちかまえていた。相手がモビル・スーツを出撃させるために浮上するその時を。

暗い水面に見える影が急速に大きさを増している。海が割れ、飛沫が白く柱を立てた。正面に4つの円筒状の構造を備えた、とても潜水に適しているとは思えない独特の構造をした潜水艦が斜め上に飛びださんばかりのいきおいでの姿を現した。

海を持たないザフト軍が独自の技術で開発した輸送潜水艦が巣穴から燃し出された。

「出撃許可は？」

ノーマル・スーツの上着を羽織つたままで、ハイネはセイバーガンダムのコクピットに座っていた。システムを立ち上げ、不備はないうことを確認するとともに通信はすでに繋がっている。

「ゼーゴック2機を出撃させるが、ケッテ・リーダーは君でいいかね？」

「了解」

ゼーゴックのパイロットたちと面識はないが、今は緊急事態だ。悠長なことは言つていられない。

ケッテ。元々は戦闘機の戦術用語のことだ、3機で1チームを組むことを言う。現在ではすでに2機で1組、ロットと呼ばれる戦術に取つて代わられているが、モビル・スーツ戦術ではまだにケッテ

が主流である。3機1組で1個小隊を作り、これがモビル・スーツの最小単位となる。そのリーダーとは、単に小隊長を意味しない。

セイバーの出撃準備は整っている。急速な上昇の後、ボズゴロフ級は落ち着きを見せた。浮上が終わり、今は浮力で水面を航行しているのである。艦体上部は水上に露出し、セイバー頭上のハッチが開かれる。ボズゴロフ級の6つのハッチの内、2つは垂直に取り付けられている。その内の1つを利用して、セイバーが頭上へと飛び上がった。

深紅の機体がまっすぐ上へと飛翔する。どこまでも広い青へと見渡す限りすべてが青い。どこまで見上げても果てがなく、広がり続けている。そのただ中を、セイバーは飛んでいた。

「これが地球の空か」

思わず見惚れていると、ロックオンされたと警報が鳴り響く。ドッペンホルン・ストライカーを装備したストライクダガーがビーム・ライフルを発射していた。

下図は合計6。恐らく2つのケッテからなる2個小隊の構成だろう。ガンダムとは言え分が悪い。

セイバーとストライクダガーとの間をビームが下から上へと通り抜けた。ゼーゴックによる援護射撃だ。

ZGMF-953ゼーゴックは、ザフト軍が開発した空戦用モビル・スーツである。すんぐりとした体に、それでも空気抵抗を考えた頭部は細く流線形をしている。バック・パックに畳まれていたウイング・ミノフスキー・クラフトの輝きに包まれている--を展

開し、足をえびぞりに畳むことでモビル・アーマーへと簡易変形をすませ飛行している。ビーム・ライフルを両手に構え、火力、推進力に限ればストライクダガーを超過する機体である。

ケッテ・リーダーはハイネである。このことを理解している友軍のゼーゴックは援護に集中しようとしている。敵もまた、ジェット・ストライカーを装備した2機を前面に出し、残りの4機は後退する。敵のケッテ・リーダーはこの2機だと見つことになる。

ハイネの目標は定まった。

セイバーのバック・パックが輝き、赤く飛び上がる。バック・パックの2門のビーム砲の銃口を頭上へと向けて回転させ、腕を、足を体の軸に合わせて固定する。背中では輝く赤い翼が水平に開くことでセイバーはモビル・アーマーへと姿を変える。推進力の後方への集中。航空力学の恩恵を受けやすい形状。

可変機構を「えられたセイバー」に機動力で勝てる機体など存在しない。

ストライクダガーの攻撃は単調で、しかもセイバーの動きにまるでついてこれていない。ビームの光はセイバーをまるで捉えていたかった。

そこへ、2機のゼーゴックからの援護攻撃は入る。小隊の間を抜けるようにビームが軌跡を描き、部隊行動をつき崩す。その隙を逃さず、ハイネはセイバーをジェット・ストライクダガーへと進める。

敵はビーム・ライフルを発射しセイバーを近づけまいとする。そ

れをかわしながら現在は双頭の機首を形作っているビーム砲を発射する。細長いビームの塊が飛び出すもミノフスキ・クラフトの機動力は絶大である。ストライクダガーはこの攻撃をかわした。

だが、回避に気をとられすぎている。

「モビル・スーツを腕の生えた戦闘機だと思うな！」

敵が逃げた方向へと加速させる。慌てた様子でライフルを構えようとするがもう遅い。セイバーは変形を解いた。人の姿を取り戻しライフルは右腰にマウントされている。そう、右手にライフルは握られていない。代わりに握られたビーム・サーベルが、輝く刃を構成していた。

ストライクダガーの最期の一撃。放たれたビームを上に飛び上がりかわし、宙返りの要領で敵機の後ろへと回る。セイバーが通り過ぎた頃にはジェット・ストライカーのウイングが斬り裂かれストライクダガーの背中に深く切り傷が刻まれていた。

小隊の中で攻撃力を一手に担う。それがケッテ・リーダー。

夢を叶えましょう。そのための方法は2つあります。人を従わせるか神に従うかです。人を従わせることもいいでしょう。でもそれは、決してままならない人の心に依った不安定な力に他なりません。神を信じることもいいでしょう。神は結局、人がどう信じたいかに左右されてしまいます。

夢を叶えましょ。たとえそれが茨の道としても。

夢を恐れましょ。それが、あなたを幸せにしてくれるとは限りません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ∫ Blume
nEi n b r e c h e r s

「赤と黒」

ダムゼル。それは夢と力を花言葉に持つ華々の名前。

第1-2話「赤と黒」

暗い闇が部屋に満ちる。中央をテラスわずかな光だけが照らしている。それは、光が必要とされていないから。ただ、六角形のテーブルを照らし出してさえいればいい。

花と名付けられた少女たちが集う。6つの辺の5つだけにそれぞれ少女たちがつき、座している。それは、最後の空席に誰も座ることを期待していないから。5人がそろえばそれでいい。

少女は5人。しかれど顔は1つ。

桃色の髪をした少女はG。上座など求めようもないテーブルにありながら、少女の座る場所こそが至上と誰もが認めている。ガーベラ・ゴルフとして生まれ、ラクス・クラインを名乗ることが許された。

テーブルの中央に描かれた稲穂を加える犬の紋章。クライン家を象徴するその象形を眺め、ラクスは顔を上げた。礼装のようで、そして儀礼的にも思える衣服と相俟つてその姿は神秘的とさえあつた。

「すべての時が集まるうとしています。お父様がお望みになられた夢が現実のものになるうとしています」

かつて歌姫と知られた当時そのままに、その声は澄んだ響きを持つ。

青い髪をした少女はP。白衣にワンピース。アンアランスな格好

はかつてと変わらず、しかしその顔には排他的な笑みが宿るようになりつつある。第3に数えられるダムゼル、サイサリス・パパ。

「私たちダムゼルはそのために生み出された」

緑の髪。青と緑のオッド・アイの少女はD。デンドロビウム・デルタはかつての約束通り、妹と変わらぬ服装をしている。異なるのは鏡合させのように対称であることと、いつも不機嫌そうな顔がたちのみ。

「そのためには、エインセル・ハンターを探し出してぶつ殺す、だろ」

「はい。革命には独裁者の血が必要です」

ラクスの言葉に曖昧な笑みを浮かべたのは黒髪の少女。アルファベットはD。ニーレンベルギア・ノベンバー。赤いドレスを身につけたその姿は、この場に参列を許されないヒメノカリス・ホテルと色が異なっているだけでしかない。

「エインセルさん、殺すにはもつたいないくらい格好いい人だけど」

言葉を発しないEを含めた5名の少女がクライン家の紋章を囲んでいる。当主たるラクス・クラインに睥睨されながら。

「わたくしたちは誓い合わなければなりません。お父様が望まれた、クライン家1000年の夢のため」

至高の娘にして最高のダムゼル、ラクス・クラインが立ち上がる。最初に従つたのはサイサリス。サイサリスが立ち上がった次の瞬間

にはテンドロビウムが行動を起こしていた。わずかに躊躇を見せたニーレンベルギアであつたが、ため息をつきながらも立ち上がる。

その中で最後まで立ち上がらなかつた少女は緑の髪とオッドアイの少女。テンドロビウムとは反対の瞳の組み合わせをして、反対側に三つ編みを垂らしている。少女はE。エピメティウム・エコーは立ち上がらない。

「エピメティウム」

ラクスの言葉に、エピメティウムは人なつっこく、同時に乾いた笑みを浮かべた。

「僕は、お父様の夢がこんな方法で実現できるとは確信が持てない」

「」の言葉は少なからず驚きをもつて迎えられた。お父様、今は亡きシーゲル・クラインの意向にダムゼルは決して逆らうことはない。その前提にはかつて大きな例外が存在し、そして今、揺らいでいる。

机を強く叩く音。エピメティウムにとって姉にあたり、同じ第2研出身のテンドロビウムが歯を剥き出してエピメティウムを睨んでいた。

「私たちが疑つたら、フリージアの死が犬死になる!」

1つの研究室から3体までロール・アウトされた姉妹の中で、2人の姉を助けるために命を落とした末妹の名前を上げられようと、エピメティウムは微笑みを崩さない。ただし、そこには寂しさが混ざり込む。

「それで間違つた結論を導いてしまつたらそれこそ大死に以下だよ」

「お父様の御心を疑うのですか？」

ラクスは努めて平静に、普段誰に見せるとも同じように爽やかな微笑みを崩すことはない。

「ラクスが頑張っていることも知つてゐるよ。それに、君は至高の娘だつて言うことも理解してゐる。でも、お父様を独占して欲しくないんだ」

ラクスはラクスであつてシーゲル・クラインではない。そして、シーゲル・クラインはもうどこにもいない。

「僕は賛成できない。まだ、ね。少し考える時間が欲しいんだ」

「時間ならあつたろ！」

再び、デンドロビウム姉さん、今のオーブは身の振り方に大変悩んでる。照明に乏しい部屋に響く。

「デンドロビウム姉さん、今のオーブは身の振り方に大変悩んでる。とても大切な時なんだ」

オーブが世界安全保障機構に参加すべきか否か。それはすなわち、プラントに協力しないことをも視野に入れていることを暗に示していた。サイサリスがその眼差しの暗さを増していくにも関わらず、ラクスは何も変わることはない。

「昔、神祖ジョージ・グレンは言つていた。足の速い子供もは幸せ

だって、賢い子どもは幸せだって、田のいい子どもは幸せだって。でも、本当にそつかな？」

かつて、すべてのコーティネーターの始祖とも言えるジョージ・グレンが世界に向けて遺伝子調整技術を公表した際に述べた言葉を知らない者などいない。あれからすでに50年あまりが過ぎようとしていた。

その間にあつた様々なこと。それをほんの少しだけ、エピメディウムは紐解いていく。

「昔、オープでドレッドノートガンダムが暴れたことがあったよね。その時、パイロット、フレア君だね、彼は本当に幸せだったのかな？ まだほんの10歳だよ。確かに優れた才能を發揮したけど、命を亡くすにしてはあまりにも若すぎるじゃないかな」

「会つたこともないガキのこと考えてお父様を裏切るつて言つのか？」

「確かに、僕よりもサイサリスや二ーレンベルギアの方がいいかもしないね。サイサリスはフレア君のことを直に知ってるし、二ーレンベルギアはいろいろな人を見てきただろうから」

サイサリスはプレア・レヴェリーの上司をしていたことがある。二ーレンベルギアが開発したブーステッドマンと呼ばれる強化人間は様々な弊害が指摘された。

どちらも、人を人と見ることを忘れ、単に数値の多寡によつて評価したことの悲劇を表している。少なくとも、エピメディウムはそう考えていた。

二ーレンベルギアは明らかな動搖を見せた。

「でも、僕だって苦労はしてるんだよ。オープのためにありたい、でも、それは時にお父様の意向に反してしまつ」

お父様に逆らつ」となんてできるはずがない。笑いながら、しかしエピメディウムは戸惑っているように手振りが混迷している。嘆息してから、エピメディウムは顔の間で組んだ手の中に視線を埋沒させた。

「お父様がいなくなつて、正直僕は自分が見えないんだ。一体何をすべきで、どうしたらオープとお父様のために働くのかつて」

もう、そのことを教えてくれるお父様はいないのだ。

「その気持ちなら、私にもわかる気がします、エピメディウム姉さん」

二ーレンベルギアが素直に気持ちを示す横で、デンンドロビウムは悔しいとも歯がゆいとも見える様子で歯を噛み合わせていた。

「少しせいい。少しせいいから時間をもらいたいんだ」

ラクスは何も変わらない。サイサリスはすでにエピメディウムを睨みつけるようにさえなつっていた。

ダムゼル。乙女として認められた6人の中からゼフィランサス・ズールという離反者がいた。そして今、お父様という羅針盤を失つた5人は迷走を始めようとしていた。

「大丈夫だよ、ゼフィランサスみたいに駆け落ちなんてしないからさ。何と言つても相手がいないからね」

エピメテイウムは微笑んで、しかし立ち上ることは決してなかつた。

アスラン・ザラ。フェイスであり、ザフト軍の英雄である男が差し出した装置から立ち上る光は像を結び、それは1人の少女の姿を照らし出す。

赤い瞳が鮮やか。白くとも艶のある髪は大きくロールが巻かれ足下に届くくらいに長い。ヘッド・ドレスやフリルが施された長いスカート。ほんの2、30cmの大きさの立体映像であることもあって、緑色のドレスを身につけたお人形か妖精のようにも見えた。

人形や妖精。そのたとえをそのまま容姿についても適応したくなるほど、小さな少女は綺麗な顔をしている。かつてシン・アスカがミーハーな同僚の話についていけなくて格納庫に逃れた時に見た少女だ。

「女の子……？」

ルナマリア・ホークがそうつぶやく横で、シンはその顔に既視感に襲われていた。人形の少女の顔が、オープで出会った女性、ヒメノカリスに似ているように思えて仕方がなかつた。

シンがお人形を見ていると、お人形もまたシンを見ている。つい

ぶんぶつせりほつな様子で、何も言おうとしない。

「翠星石、挨拶くらいしないか」

アスランの言葉に、翠星石と呼ばれた人形はその白い指でテーブルの縁をなぞるように指し示した。

「その線」

テーブルの縁のことだと思われる。

「その線からこいつに入つてくんないです、チビ人間！」

姿も綺麗で声も綺麗で、しかし口調はどこか荒々しい。その癖最後だけは丁寧語とよくわからない。ただ、接近禁止命令を唐突に発せられてしまつたと、シンは完全に思考を停止して戸惑うほかなかつた。それはルナマリアも同じである。アスランだけがおかしそうに笑つっていた。

「すまないね。翠星石は人見知りが激しくてちょっと臆病で、それでいて毒舌なものだからすぐに攻撃的な発言が飛び出すところがあるんだ」

何か怒らせることをしただろうか。翠星石は完全にシンを敵視すると決めたようで、そのままざしさは不機嫌かつ鋭い。

「アスランさん、この子は一体……？」

普段明瞭な口調のルナマリアでさえ完全に困惑している。

「」の機体はΖΖ-X3Ζ10AΖガンダムヤーデシユテルン。ゲルテンリツターと呼ばれるゼフィランサス・ズールが手がけた7機のガンダム、その3号機だ。翠星石は擬似人格インターフェイス、つまり、ヤーデシユテルンの心だよ」

何故兵器に心を持たせることにしたのだろう。そもそも、それなら別にこんなお人形のように着飾った少女の姿をしている必要などないのではないだろうか。

そんな疑問に先回りして答えてくれたのはレイ・ザ・バ렐隊長である。

「要するに人工知能ということだ。姿はゼフィランサス・ズールの若い頃がモデルとされている。ゼフィランサスはユニウス・セブン休戦条約以後新たに7機のガンダムを造り上げた。そのすべてに少女の姿と女性の人格が設定されている」

要するに、心はともなく、開発者が在りし日の自分を思い浮かべて姿を与えたということなのだろう。

「でも、ゼフィランサスって人、大西洋連邦に逃げたって聞いてますけど」

「そんなところからが機密にあたるんだ」

ルナマリアの言葉に、アスランはいたずらっぽく笑いながら答えた。

「レイの任務は敵側、つまり地球が保有しているゲルテンリツターの破壊ということになる。たとえば、ネオ・ロアノークの保有して

いるラインルビーンは5号機。オープではカガリ・コラ・アスハが2号機を所持している。それに、初号機はエインセル・ハンターの手元にあるはずだ

「エインセル……、ハンターですか……」

つい先日仇と判明した男の名を、シンはつい拾い上げた。それを田ざとく見つけたのはアスランドである。

「セウ、いえ、シン、君のことまだ聞いていなかつたな。君はオーブの出身なのか？」

「ええ、まあ。アブデイエルって奴ですから……」

「そ、うか。それなら正規兵に突っかかりたい気持ちもわかる。ただ、どうして国を出たんだ？ そのことについて差し支えなければいいが、聞かせてもらえないか？」

多少理解を示されたところで、正規兵なんて外人部隊……そもそも移民の部隊をこの名前で呼ぶこと自体おかしなことだが……のことを使い捨てられる駒としか考えていないという認識はそう簡単に改まらない。

「別に……。俺、母さんと2人だつたんですけど、大西洋連邦が攻めてきた母さんが死んだんです。それで……」

逃げるよつにプラントに移り住みました。

言葉は歯切れが悪く、要点だけを話すに留めた。別に同情が欲しないわけじゃない。それに、シンと母であるマコ・アスカとの関係は

一言で説明できる」とでもない。

「エインセル・ハンターが指揮を執つてたって話、本当ですか？それに、黄金のガンダムに乗つてたつてことも？」

「本當だ。ただ、俺がフインブル落着の時に戦つたフォイエリヒに乗つていたのはまず十中八九エインセルじゃない。彼が驅るフォイエリヒガンダムの力はあの程度じゃなかつた」

そのフォイエリヒにシンは手も足も出なかつた。ではエインセル・ハンターが登場したフォイエリヒガンダムのことなんて想像もできない。大企業の社長で、それでいてパイロットとしても優れている。そんな超人じみた人が存在しているものだろうか。

「エインセル・ハンターって何者なんですか？」

「ブルー・コスモスの元代表で、ラタトスク社の代表。プラントの怨敵。今言えることはここまでだな」

そんなこと、プラントにいるなら子どもでも知つてゐるようなことだ。そしてそれ以上が機密なのだとしたら、結局何も知らないことと同じことだ。

シンはエインセル・ハンターがどんな人かさえ知らない。雲の人とでも言うのだろうか。仇は手の届かない場所にいる。このことが不快ではないはずがない。左の頬が疼いて、しかめつ面になる。

「お母様の仇をとりたいですか、ちび人間？」

翠星石の言葉にはシンはまた驚かされた。復讐という概念を機械

が理解できるものなのだろうか。何より、勝手にあだ名が付けられている。

「ちび人間で、君の方がこんなに小さいじゃないか」

「翠星石の体は18mですう。ちび人間なんて手の上で転がしてやれるです」

胸を張つて。本当の人間みたいに表情が豊か。あのゼフィランサス・ズールはどうして兵器にここまで高度な心を与えたのだろう。単に体が小さいだけの人のように思えるが、まだ機械と人と同じよう接することには慣れていない。

調子が崩されて仕方がない。

あまりシンのことをからかうな。アスランはあくまでも軽い調子でシンと翠星石のことを見守つている。

「それじゃあレイ、薔薇水晶も出してくれないか?」

レイ隊長が翠星石のと同じような立体映像投影装置——こちらの方が無骨なデザインをしている——を取り出すと台の上に置いた。投影されるのはやはり少女の姿である。

同じく赤い瞳と白い髪。こちらは紫の花びらを思わせるドレスを着ている。

「薔薇水晶。ローゼンクリスタルのA・Iだ」

「」「こんにちは

「ひらは翠星石と反対に反応が薄い。つい話しかけたシンに構うことなくどこを見ているでもない。

「翠星石ちゃんとはずいぶん様子が違いますね」

ルナ・マリアもまた同様の戸惑いを感じる中、レイ隊長は冷たく言い放つた。

「兵器に心など必要ないからな」

NN-X3N000K-Yガンダムラインルビーンから放たれた光が赤いドレスを身につけた少女の姿を描き出す。ドレスを染める紅よりも鮮やかな赤の瞳。ツインテールに巻かれた髪は白髪とは異なる艶めいた白をしている。ゼフィランサスを幼くしたようなその顔は静かで落ち着いた表情をたたえている。

「私は誇り高きゲルテンリッターの第5モビル・スーツ、真紅

「これ、ゼフィランサスさん！？」

ミリアリア・ハウが旅行鞄が倒れることも構わず声を上げた。ここに集まるすべての人の注目を集めながらも真紅は動じることはない。

「モーテルはゼフィランサス自身だからね。だいたい10歳と少しくらいの時かな。まあ、人格は自然と構築されたものだけど。元々ガンドムに搭載されていたアリスには個性と学習能力がある。いや、

学習能力があるから個性があると言つべきかな。どちらにしろ、それぞのガンダムで、それぞのゲルテンリッターが育つんだ。真紅は僕がストライクに乗つっていた時からずっとそばにいてくれた

真紅は気高い。感謝したことをきつと喜んでくれていると思つ。それでも、平静を装つて冷たすぎずやかましくもない静かな表情を浮かべている。

アウル・ニーダが粗相をするまでは。

「スカートの中とかどうなつてるんだ？」

そう立体映像を下から少年がのぞき込もうとした瞬間に、ラインルビーンがけたたましい音を立てた。思わずのけぞり尻餅をつくアウルを、真紅は少し怒りを含ませた表情で見下ろしていた。

「人間の雄は想像以上に下劣ね」

「何だよ、いきなり！」

転んだ姿勢のままアウルが叫ぶ。ネオは手を差しだし、アウルをまずは立たせることにした。

「あまり失礼なことはしないようにね。それに、僕にとつて真紅やほかのゲルテンリッターは娘になる。父親としても、娘たちへの非礼は認められないな」

娘。そんな言葉に反応を示したのはミリアリアである。

「ああ。ゲルテンリッターはゼフィランサスが造つたものだし、僕

はゼフィランサスの夫だよ。それに、開発には僕も若干関わってるから

そのため、彼女たちゲルテンリッターはネオのことを父と呼び慕つてくれる。

「ゼフィランサスさんと結婚したんだっだけ。招待状はもらつたけど、行けなくてごめん」

いいよ。そう返事をしていく。結婚式自体はすでに3年前だが、ミリアリアにとつて恋人を失つてから半年も経っていない時期だったるから。

3年前、海の見える教会でキラ・ヤマトとゼフィランサス・ズールは永久の愛を誓つた。

ミリアリアは真紅の顔を眺める。赤いヘッドドレスに縁取られた顔は見れば見るほどゼフィランサスに似ている。もつとも、ネオにとつて5歳から15歳までのゼフィランサスは空白でしかない。実際10歳前後のゼフィランサスと似ているのかどうかはわからない。ミリアリアは、しかしそんなことを確認している訳ではないだろう。

真紅とヒメノカリス。この2人の間をミリアリアの視線は力なく泳ぐ。

「ねえ、キラ。やっぱりおかしいよ。ヒメノカリスさんとアイリスが双子だって言つても、ゼフィランサスさんとも顔が同じなんて変よ」

ミリアリアは何も知らない。4年前、恋人のトール・ケーニヒと

ともに戦艦を降りて、ヴァーレンにうものからも戦争からも遠く離れて生きてきたははずだ。あのヤラファス祭まで。

ヴァーレンのことを話すことにためらうはあった。そんな弱い父を、真紅はそつと後押ししてくれる。

「お父様、ミリアリアさんにもヴァーレンのこと、教えて差し上げるべきだと思いますわ。このままでは、余計な気苦労を背負わせてしまうだけですもの」

「元々戦争を見せるためにミコトアリアをここへと招いた。その第1歩として、ヴァーレンのことを語るのは間違った判断ではないのかもしれない。

「後でもいいかと思つてたけど、そもそもいかないかな。場所はプラント。時はもう20年以上も前のことになる」

とある屋敷のとあるテラス。1組の男女がそれぞれ双眼鏡をのぞき込んでいる。そこには港を離れていく「ラヴクラフト級特殊戦闘艦」ミネルヴァの後姿が映っていた。すでに大西洋連邦の戦艦は数時間前に出航してくる。

「そのまま居座り続けて圧力をかけられてはたまらないと考えていたが、杞憂に終わつたらしい。

「やれやれ、ようやくあいつらこなくなつたな」

せいせいした。そんな気持ちを、カガリ・コラ・アスハは正直に

声に含ませた。

その隣ではもう必要ないと双眼鏡を外したコウナ・ロマ・セイランが親の決めた許嫁の様子を見やつた。

「君の兄弟がいたって聞いてるけど、会わなくともよかつたのかい？」

「会つたところで、何か話があるわけでもないしな。それにキラやアスランはともかくレイが姉弟の再会を喜ぶとは到底思えない」

言葉通り、すでにカガリは兄弟の乗る艦から興味を失っていた。振り返り、テラスから早いところ室内へ入ろうと歩きだしている。ユウナもまたそのまますぐ後に続く。

「さて、余計な奴らはいなくなつたし、後はエピメディウムの帰りを待つばかりだな。正直な話、どう転ぶかはあいつ次第といつところがある」

室内に入るなりカガリは近くにあつたソファーに腰掛けると、碎けた調子で手を振る。

現在オープの政治勢力は2つに分かれているとしていい。世界安全保障機構への参加を主張するグループと、プラントよりの行動を維持しようとするグループだ。その内、エピメディウムは親プラン派に対して強い影響力を持つ。エピメディウムの意志がそのまま反映されるということはないが、その動向がオープの最高意思決定に重要な意味を持つことには変わりはない。

そんなエピメディウムは今オープにはいない。プラント本国へダ

ムゼルの会合があるとして自家用戦艦で行つてしまつた。

「カガリ、僕はヴァーリというものを詳しく聞かせてもらつたことはない。少しは教えてくれてもいいんじゃないか？」

部屋の隅に備えてあつたポットから水をグラス2つに移しながらユウナが尋ねる。

「ヴァーリ。エピメディウムをはじめとする26人姉妹のことを、そう言えればしっかりと話したことはなかつた。

「ヴァーリとは元々、ドミニナントと並んで次世代コーディネーターを生み出すために行われていた研究だ。特定分野に特化した人材を生み出すことと同時に、どのような遺伝子がどのような能力を発現するかを確認するための試みでもあつた。そのため、対照実験として、1個の受精胚をクローニングし26に分けた。それぞれに別々の調整を施して生まれたのがヴァーリの26人姉妹だ」

そのため、ヴァーリに属する姉妹は全員同じ顔をしている。髪の色と瞳の色はわざとずらされ、それが9つあつた平行研究所の目印となつてゐる。ラクス・クラインを初めとする第3研のヒメノカリス・ホテル、アイリス・インディアが青い瞳と桃色の髪を持つようにな。

また、その名前はアルファベットに由来する。フォネティック・コードと呼ばれる聞き違え防止のための言い換えをファミリー・チームに、ファースト・ネームにはそのアルファベットと同じ頭文字を持つ花の名前が与えられた。

「Aのヴァーリがアリューム・アルファと呼ばれているようにな。

アリュームは花で、Aはアルファと言い換えられる

ユウナがくれた水を口に含んでいる間、話が一端途切れた。

「その内、特に高い能力があると認められた6人はダムゼルと呼ばれ、父であるシーゲル・クラインの娘であることが認められる。まあ、本当に娘を名乗ることができるのはラクス・クラインだけなんだがな」

26人全員が成功と認められた訳ではなかつた。20人は黙作としてフリークとひとまとめに扱われる。6人こそダムゼルと呼ばれ成功と認められるが、父であるシーゲル・クラインが認めたのはラクス・クラインだけであった。

「そして、エピメティウムはそんなダムゼルの1人だ。オープにはプラントへの利益誘導のために送り込まれた。こんなところだな」

もう一度水を口に含む。ユウナもまた、水を飲んでから返事をした。何故か座ろうとはしない。

「じゃあ、今、プラントじゃダメゼルの集まりでもあるといふことなのかな？」

「全員はそろつていないのでうがな」

よくわからない。そんな顔をしているユウナへと向けて、カガリはつい笑ってしまう。それほど愉快で滑稽な話だからだ。

「ゼフィランサス・ズール。このヴァーリで、6番目のダムゼルがお父様を裏切つて男と逃げたからだ」

「もつと綺麗な声でお鳴きなさい。天上の天使が聞きほれるほど、
『氣高き頂に住まつ神が格氣に狂つほどに』」

「こゝは部屋とこゝ輪郭を持たない。ラクス・クライン。桃色の髪を持つ至高のヴァーリの周りを明かりが照らしている。しかしその周りに光はなくその部屋を見渡すことはできない。

床は闇に消え、空間は闇に溶け、天井は闇の果てに沈む。ただラクス・クラインの周囲だけが光を浴びていた。

「ああ、お鳴きなさい」

その白い手が差し出される先に吊された鳥か。白く美しい鳥がその中でさえずる。その声は主の望む通りに美しく調べを奏でる。

そう、それでいい。鳥は美しくなければならぬ。主を樂しませる声で鳴かなければならぬ。この鳥は、そのために生み出されたのだから。もしも醜いとしたら、もしも鳴けないとしたら、それはとても不幸なことなのだから。

花は美しく咲かなければならぬように。

「ねえ、どうする？　ヒペメティウム、もしかしたら裏切るつもりかもしけないよ」

闇の中から染み出すのは妹の声。サイサリスがヒールを鳴らしながら光の下に姿を現す。驚いたのか、それとも分をわきまえたのか、

鳥は鳴くことをやめてしまった。

誰が鳴きやんないこと言つたのだろう。

ラクスの指が鳥かごと伸びて、しかしその手は止まる。その手を引き戻すと、ラクスはかつてプリントの民を魅了した声でサイサリスの方へと体を向ける。

「お父様の願いを叶えることがわたくしたちの役目です」

「答えになつてないよ」

あからざまに不機嫌そうに床を蹴るサイサリス。

さて、温厚で妹思いのサイサリスはこんなにも短気であつたろうか。これではまるで、あの日ユニウス・セブンで命を落としたサイサリス・パパと同じ第7研の第3世代ローズマリー・ロメオのよう。サイサリスとローズマリーは同じく青い髪をして、同じくモビル・スーツの開発を得意としていた。もしも存命していたとしたら、きっとローズマリーもまた、サイサリスと同じ活躍をしてくれたことだろう。

残念でならない。

顔を眺めていると、サイサリスはもつと怒ったような顔をした。ラクスと同じ顔をしたサイサリスは、しかし怒った表情はともよくローズマリーに似ている。このままにしていればもつともっとローズマリーに似ていくのではないか。試してみたくなる。

「『』のままにしていいなんて考えてないよね？」

「サイサリス様のお言葉通りです、ラクス様」

サイサリスの言葉に混ざりこむ足音と声。また1人闇の中から姿を実体化する。女性である。黒いゆつたりとした衣類はどこか儀礼的で、しかしラクスと比べるならそれは禍々しさを持つ。女性自身、長い前髪で右目を覆い隠し、左目は瞬きすることない異様な雰囲気を持つ。

「マテイズ」

サイサリスにマテイズと呼ばれた女性はマテイズ・クライン。クライン家の傍流にあたり、ラクスの前に来るや片膝をつきかしづく。

「シーゲル様は志半ばで凶弾に倒れられた。ですが、我らが一族の悲願、クライン家1000年の夢は決して潰えてはなりません。おわかりであるはずです。クライン家の『』当主であらせられるあなた様ならば、『自身のすべきことが』

ひれ伏したままマテイズは動こうとはしない。指示を待っているのではない。ただ時を待っているに過ぎない。朝を迎えるためにはただ待てばいい。朝は必ず訪れる。ラクスがマテイズに対してかける言葉もまた、すでに決まっていることであった。それは、100年の昔から。

「お父様の御心のままに

鳥が再び、叫ぶよつて鳴いた。

暗くとももの悲しさや寂しさはそこにはない。窓のない部屋を間接照明の柔らかい明かりが照らしている。赤い独特な形状をしたサングラスを身につけたスーツの女性がティー・テーブルを前に慣れ手つきで茶器を並べている。部屋には音楽が静かに流されていた。

「ミーアお嬢様。アフタヌーン・ティーは如何ですか？ ダブリン産の茶葉が入っています」

音楽は人の声を邪魔することはない。聽こえない訳でもなければ、耳障りでもない。

女性の名はサラ・タイル。落ち着き払つた微笑みは気品さえ感じさせて、仕える主人の反応を待つている。

主は、ミーア・キャンベルは豪華な装飾の施された小さな椅子、それでもその背もたれにその姿を隠してくつろいでいることだらう。

「それじゃあお願ひします、サラさん。そろそろキングさんやマールさんも戻つてくる頃ですから、2人の分も淹れて上げてください」

明るく朗らかな声だとするのは身内びいきの欲目にすぎないだろうつか。そんなことはない。そう、サラは思いなおした。現にミーアお嬢様はよくお笑いになるよつになつた。

「かしこまりました」

これまで幾度も繰り返してきたこと。お嬢様と穏やかな午後を過ごす。それは決して毎日訪れることではなかつたが、こうしてのん

びつとできる日は必ず腕を振るつて差し上げた。

あらかじめ暖めておいた茶器にまずはミルクを注ぐ。その上から紅茶を注ぎ入れると茶葉の発する上品な香りが途端に広がる。白と紅。一色が混ざりあい淡いクリーム色になつた頃、サラは表情を強ばらせた。

綺麗な茶器に混ざつておかれているのは紙袋。砂糖が入った紙袋がまるで胸でも張つているように小さなテーブルの片隅で存在感を主張していた。サラの目が袋を見ては、逃げるように目をそらす。しかし意を決して、サラは震える手で、しかしそつかりと袋を引き寄せた。手にはすでにスプーンが握られている。茶器に見合つようなかわいらしいマドラー・スプーンなど想像してはいけない。計量スプーンほどの大きさのあるスプーンで、砂糖を大ざっぱに袋の中からすくい上げるとそれを紅茶の中へと流し込む。

紅茶のかさが増すほど量を流し込んで、サラは恐ろしいものでも見たかのような勢いで砂糖の袋を開じた。目の前にはサラを初めとする部下たち3名分の紅茶と、もはや紅茶と呼んでもよいものかわからぬ新種の飲み物が静かな水面をたたえていた。

こんなもの……たとえ望まれていても言え……をお出ししてもよいものか。そう、主人の下へと運ぶことに躊躇する。ここまでは田課である。

ただ、今日に限つてはいくつかの点で異なつていた。まず、ノックもせずに不躾な男たちが突然部屋に入ってきたことである。

「ミーアお嬢さん、大変やで！」

まかり間違つても暗殺者の類ではない。訛のある言葉つかいの男は癖の強い髪をしていて、安っぽいスーツが良くも悪くも似合つている。歩き方もがに股で優雅とはほど遠い。何度言つても態度を改めようとしないこの男はキング・タケダ。隣ではマール・ストークスがしじりもどりと頼りなげな容貌を加速させていた。

2人して何をそんなに慌てているのか。サラには、しかし落ち着きのない態度をしている男どもへの反感が先行する。

「ついで、クライン家が、クライン家が……あ、これいただきますね」

マールは事もあらうてテーブルからティー・カップを掴み上げるとまるで安酒でも飲むかのように一息に口に口に流し込んでしまった。

「クライン家が動き出しました！」

「これは偉いことやで！　ただでさえ今のプラントはクライン派が牛耳つてるようなもんや。このままやと、偉いことになつてまう！」

これが果たして報告と言えるのだろうか。サングラスの奥でサラは男2人を睨んだ。たじろぐキングと、マール。まったくもつて情けない。

サラは男たちをほうつておいて、ティー・カップをミーアお嬢様の下へと運ぶ。椅子に備え付けられた小さなテーブルの上に紅茶 - 便宜上、こう呼ぶほかない - をおいている間も男たちのことを睨みつけることは忘れていない。

「あなたたちもアズラエル家に仕えるものなら、少しばらくち着きな

「わい」

「こんな男たちでも、3代財団の1つに数えられるアズラエル財団に務めて10年になるサラの同期なのだ。腹立たしいことに。

まったく、せっかくの時間を完全に邪魔されてしまった。サラは仕方なく、ティー・テーブルまで戻ると本当はお嬢様と一緒に穏やかな時間を過ごすはずであった自分用の紅茶を持ち上げる。紅茶はどんな時に飲んでも心を安らげてくれる。すなわち、どんな気分で飲んでもよい。たとえば、慌てる大の男を睨みながらです。

「それで、何が起きているといつのですか？」

男2人、顔を見合わせてからでないと話もできないらしい。

「ええ、それが、クライン家が動き始める兆候があります。詳しくは後で資料にまとめますが、政府筋の多くはクライン家の息のかかつた者、あるいは一族の人員が当たっています」

「あの議長の絶対的な人気を背景にやりたい放題や。正直な話、今 のプラントにクライン家を止められるだけの力を持つ者はあらん」

陶器を鳴らす音が聞こえた。それは小さな音で、ティー・カップが置かれた音である。誰が鳴らしても同じく聞こえるはずの音だが、サラはそこにミーアお嬢様の悲しみを感じずにはいられなかつた。

背もたれに隠されてしまい、その姿は見えない。それでも、そのお顔が微笑んでいないことを知ることはたやすい。

「始まつてしまつのですね、クライン家1000年の夢が

「ミーアお嬢様……」

サラと出会った当初、ミーアお嬢様はとても悲しそうな顔をしていた。顔を上げようとせざむを合わせてもくれない。背もたれに隠されたお姿にかつての日を思い起こして、サラは当時そのままの焦りを覚えた。何かをして差し上げたい、それでも何もできることはない。

「お嬢様、何か私にできることはございませんか?」

もあるのであれば万難排してお力になりたい。それがたとえ、どのようなことであろうとも。誰もがお嬢様のお言葉を待つ間、針の落ちる音さえも拾えるほど静寂が、椅子のきしむ音をサラへと届けた。白魚のように白いお嬢様の指が、テーブルの脇に置かれたティーカップをかすかに撫でた。

「とりあえず、角砂糖をもう一つお願ひします」

「もう飽和を迎えていてこれ以上は溶かし切れません!」

ヒピメディウムが個人的に所有する戦艦、テスマント級ケトビームは戦艦である。そのため、あまり居住性が重視されているとは言い難い。それでも個室にお気に入りの椅子を持ち込むくらいのわがままくらい、認められてもいいだろう。

特に何でもない椅子である。足に磁石が取り付けられている訳でもない普通の木製の椅子は無重力で浮かび上がってしまわないためにテーブルにロープで固定されている。もっと便利な椅子もあると

何度も進められてもエピメティウムはなかなかお気に入り野椅子を手放せないでいる。

たとえ、それが苦難を伴つものであつたとしても。

余合でのことを思い浮かべながら、エピメティウムは目の前の男の声に耳を傾けていた。オープ軍のトダカ一佐である。本来軍属であるトダカがあくまでも民間人にはぎないエピメティウムに従う謂われはないが、トダカはエピメティウムがオープの姫君として拾われた頃からの付き合いである。

すでに初老を迎える、顔には深いしわが刻まれている。厳格とも渋いとも言える顔つきは、エピメティウムを見るときは柔らかさを纏う。

「地球降下はまもなくです。太平洋上に降りますので、オープ到着までには3時間54分を予定しています」

「ありがとうございます。僕は政治以外はだめだからトダカがいてくれて助かるよ」

「いえ」

「君ならもう言つてくれると思つてたよ」

エピメティウムが笑うとトダカもまた表情を緩ませる。しかしすぐには表情を戻して、トダカは軍帽を直した。特に大事な話をしようとする時、トダカは知つてか知らずか身なりを正す。エピメティウムもつい椅子にしつかりと座り直した。

「コートニー・ヒューローマス殿を」存知でしょうか?」

「知ってるよ。デンジロビウム姉さんの側近で、眞面目なのに生真面目じやないつていづちょっと変わった人だよ」

恐らく、トダカは会合の間に知り合つたのだろう。部屋に入ることができるのはダムゼルだけで、付き人は外で待たされる。そして会合にトダカを伴つたのは今回が初めてのことだった。

ただ、このコートニーの話題が本題とは思えない。その証拠にトダカはまだ姿勢を崩していない。

「では、サイ・アーガイル殿は?」

何となく、合点が言つた気がした。ダムゼルがどうして精神的に決して安定していないような少年を連れているのかと気にしているのだろう。

それでも、Nのダムゼル、ニーレンベルギア・ノベンバーがサイ・アーガイルを連れている確たる理由は存在する。

「ちょっと変わっていたように感じただろうね。もう20歳くらいになるのに、まるで子どもようだったる。それはね、戦争が原因なんだ」

今から4年前。大西洋連邦の一部勢力がオーブ首長国の保有する「ロニーで新型機の開発を行つていた。それはザフトに露見することとなり、「ロニーを破壊するほど激しい戦闘を招いた。それに巻き込まれたのが多数の民間人であり、サイ・アーガイルはその中に含まれる。

サイは仲間を失い、そして自らも傷ついた。

「発見された時は瀕死の重傷で、手の施しようがなかつたらしい。それを、一ーレンベルギアがブーステッドマンとすることで救つたんだ。ところが、すでに脳が深刻な損傷を受けていた」

すべて二ーレンベルギアから聞いたことでしかない。元々再生医療の一環として開発されていたブーステッドマンという技術を用いてしか、サイ・アーガイルという人間を救うことはできなかつた。

「それからのことは悲劇的だつたらしい。まず記憶の錯誤。サイはね、友人のことを憎んで、それでも信頼もしていた。なのに信頼を忘れて、ただ憎しみだけでつき動かされて友達を攻撃してしまつたりした。そして最後には廢人同様になつてしまつたらしい」

そのことは今も二ーレンベルギアを悩ませている。

「サイは、命こそ救われたけれど、これまでに培つた絆を失つてしまつたんだ。結局ほとんどのことを忘れてしまつて、まるで子供もからやり直しているような状態なんだよ」

途中から、トダカが聞きたがっていること、二ーレンベルギアがサイを側近としていることの説明にはなつていないと気づいた。でも、トダカならきっとわかつてくれるだろう。

「僕はサイを見ていると、その人をその人たらしめているものは、遺伝子なんかじゃ決してない、そう思えるよ」

まさに心そのものなのではないだろうか。

サイ・アーガイルは確かに生きている。それでも、もうサイ・アーガイルはどこにもいない。

人はたつた4つのアルファベットで決めつけられていいものでは決してない。

「トダカ、僕は、力ガリにすべてを話そうと思う。ヴァーリが、ドミナントが何故作られたのか。そして、クライン家1000年の夢のすべてを」

人は仲間の死を悲します。でもそれは、人が情緒豊かであるからではなくて、単に本能に刻まれているからです。本能が仲間の死に触れる度苦痛として悲しみを与え、種の保存のために仲間の大切さを教え込もうとするからです。それは単なる生体プログラムに他なりません。

悲しまされているのは大切な人の死ではなくて同種の喪失にすぎません。

それでも、掛け替えのない人を失ったという事実は何も変わりません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ↗ Blume
nEi n b r e c h e r s

「若い使者からのレクイエム」

Hピメティウム。見守つていてください。あなたが憂いたこの世界の行く末を。

第1-3話「若き死者からのレクイエム」

走れば息切れもする。辛くもなる。それはナチュラルであろうとコーティネーターであろうと同じことだ。どこででも人は疲れるものだ。地球から遙か約40万km離れたプラント、ディセンベル市第7コロニー、ディセンベル・セブンで走り込みを行つても地球と同じように体が悲鳴を上げる。

よくありがちなグラウンドに列を作つて走る若者たち。視界の隅に教習用モビル・スーツの装甲、武装が取り外された質素な姿さえなければこことはどこにでもある学校のグラウンドだと言えた。いくら武装が外されていようとカリキュラムにモビル・スーツの操縦を入れている学校はさすがのプラントにもない。

IJUは軍学校。プラントに合計50を数える軍事教育専門の機関なのだ。

天秤型コロニーの外付けミラーから反射した日の光に照らされた未来のパイロットどもは無言のまま走り込みを続けていた。ただし、例外が無いわけではない。

列の先頭を行く2人の片割れがだらしなく手を振りながら隣の仲間へと声をかけた。いつまで経つても切ろうとしない長髪がだらしないと担当の教官からいつも注意されている。それでも懲りないこの男は走り込みをさせられたくらいでへこたれることはなかつた。

「何でパイロット候補の俺たちが走り込みなんてしなくちゃいけないんだよ?」

「教官に聞こえるぞ」

ジャージの袖で汗を拭っていた仲間はその袖に視線を隠しながらグラウンドの内側の様子を見る。何とも運が悪い。ちょうど1周が終わる頃だったため、楕円形のグラウンドの中で中央に立つ教官と一番距離がない場所に彼らはいた。目が合ってしまった。

白いジャージを軍服か何かのように足の先から頭の先まで一直線に着て、使いもしない竹刀を地面に突き立てるように胸の前で持っている。これでもかと切りそろえられたおかっぱ頭の髪をした教官はまだ若い。まだ10代中盤に差し掛かつたばかりの彼らとまだそんなには違わないと思えるのだが、教官はすでに実戦を経験している。軍学校を志願するような激しい気性の生徒でさえ、まだ教官に、イザーク・ジュール教官に逆らえた者はいない。

「パイロットだらうが何だらうが、いざという時にものを言つのは基礎体力だ。まだ口をきく余裕があるならあと5周は追加してもよさそうだな！」

グラウンドの線にそつて遠ざかっていく生徒たちへとイザークは声を張り上げた。

聞こえてくるのは走り込み中に無駄口を叩いた生徒への非難の声と、教官であるイザークに慈悲を求める声。冗談のつもりだったが、これほど大きな声が出せるのなら本気で5周追加してもいいのではないか。

イザークが生徒たちをもつとじいしてやうつかと考えていると、どうしても目がいく生徒がいた。最後尾に赤いツインテールを揺らしながら必死に仲間についていこうとする少女がいる。

本来なら男女は別々に指導するものだが、イザークは教官の権限として訓練は男女合同で行わせていた。戦場では男ばかりが撃たれるわけでもなければ、女だから甘くみてもらえるといふこともない。訓練の段階から女だからといふ甘えを捨てさせるつもりでいた。

だが、少女は周りと比べ明らかに疲れていた。女性だからではない。ほかの女性とは樂にとは言わないまでもしっかりと隊列についていている。今にも置き去りにされそなのは少女だけだ。

イザークには思い当たる節がある。プラントの『籍にコードイネーターと非コードイネーターは分けて書かることはない。それでも遺伝子調整を受けていない潜在ナチュラルはこの国に確かにいる。そして、コードイネーターから少なからず差別にさらされている。以前そのことを理由にしてプラントを裏切った男がいた。イザークのかつての部下だった。

あれから生徒たちが1周する間少女のことを眺めていたが、やはりナチュラルである可能性が高い。カナード・パルス。かつてイザークを裏切った潜在ナチュラルと少女は同じかもしれない。

「つべこべ言わず走れ！ それなら、追加はなしだ！」

拍手までして喜びを表現する生徒もいる。その中で、少女だけが辛そうな顔をしていた。

この少女一人のために甘い顔をしたとは誰にも聞かせられない。イザークは裏切られたことを不愉快とは感じながら怒りはすでにない。潜在ナチュラルのおかれただけが脳裏をよぎる。もう3年も前のザフト軍宇宙要塞ボアズの戦いで、イザークは、遺伝子調整

を許さない「コーディネーター」と、コーディネーターという特権階級に虐げられたナチュラルの言葉を聞いた。

「いかんな。昔のことばかり思い出す。俺も歳をとつたといひ」とか

イザーク・ジュール。20歳。年齢に似合っていない厳しい教育姿勢と古くさい感覚の持ち主であることから、生徒たちからは若年寄りのニック・ネームをつけられている。それが実は、かつてガンダムに搭乗することが認められるほどのエースであったと知る者は少ない。

日が沈む。単に外付けミラーの角度が変わっただけであっても、プラントでは日没を日没と表現する。1日のカリキュラムを終え、イザークはロビーのソファーーーとは言え、貴族の屋敷にあるような贅沢なものではないーーに座りながら名簿を眺めていた。

声をかけてからその横を通り過ぎる生徒に、しつかり休め、そんな労いの言葉をかけては資料に目を戻す。その繰り返しだ。

軍学校では全寮制がとられている。寮には教官の部屋もあり、もちろん男女は別棟で分かれている。教官の部屋はロビーを持つこの中央棟の2階以上にあるが、イザークが部屋に戻るのは基本的に寝るときだけだ。生徒と触れ合う時間を増やしたいと考えているわけではないのだが、部屋に戻ったところですることがない。

生徒たちの管理ならロビーで行うこともできる。1人1人の顔と状態を思い浮かべながら資料を見ていく。するとビリしても手が止

まるのは例の少女、赤い髪のメイリン・ホークのところである。年齢14。性別女性。生年月日：E.61.10.7。出身地アブリリウス・イレブン。プラントの首都であるアブリリウス・ワンと同じ都市であるとは言え、11番クロニーは低所得者が多く暮らしていることで知られている。どうやら、メイリンが潜在ナチュラル、いや、コーディネーターに辛うじてとは言えついてくることができているならオナラブル・コーディネーターとすべきだろ？

どうやら呼んだにしても、メイリンが喜ぶとは思えないが。

そう長く眺めていた気はしない。それでも短くもなかつたらしい。メイリン・ホークについて調べている時に、メイリン・ホークから話しかけられる、そんな偶然を招くくらいの長さはあつたようだ。

「すいません、イザーク教官」

「メイリン・ホークか。どうした？」

資料を閉じる。別に自分のことを見ていたとメイリンに知られたくないと考えたのではなく、成績に関わる情報を生徒に見せることはできない。

「少しお話、よろしいでしょうか？」

わかった。低く薄っぺらいテーブルをはさんだ向かい側にメイリンを座らせる。勉強方法の相談か、それとも次のテストの範囲か。学生がわざわざ教官に聞くようなことを考えながらイザークはメイリンが膝をそろえて寧に座るまで待つた。

「噂でお聞きしたんですが、イザーク教官が以前、ガンダムに乗つ

ていたというのは本当ですか？」

「ジブラルタル基地の撤退戦からヤキン・ドゥーエ防衛戦までの間乗っていた。もっとも、映画では語られていないことだ。よく知つていたな」

この学校でさえ、イザークの経験を閲覧できる立場にいるような人でなければそのことは知らないはずだ。

「実は、私にはお姉ちゃんがいます。お姉ちゃんも、ガンダムのパイロットをしているみたいなんです。それで、少しガンダムについて聞かせてもらえたらなあと思って」

「俺は単なるパイロットだつた。だが、まったく知らない訳でもない。それでもよければ話すが？」

メイリンは軽く頷いてお願いしますと答えた。

資料をテーブルへと捨てるように置いた。まず何から話すべきか、そんなことを考えながら椅子に深く座り直す。

「ガンダムは、ゼフィランサス・ズールという技術者によって造られた」

これは少しでも軍事に詳しい人間なら常識だろう。メイリンも授業をしつかりと聞いていればだが、現代戦術史で習つたはずだ。

「現在、ヅダを初めとする新型はそのすべてが初期のガンダムの性能を超えている。それでも、ガンダムというシステムそのものの完成度は高かった。だから、地球でもザフトでも開発が続けられた。

それが、両勢力に同名、同システムの機体がある理由だ。ビーム兵器を持つこと。フロイズシフト・アーマーに包まれていること。最後にアリスと呼ばれるサポート・システムは搭載されていることだ

ザフト軍でもゼフィランサスの手を離れて開発されたガンダムはこの3大機構を引き継ぐ形で開発が続けられていると聞いている。

「ところで、お前の姉はガンダムのパイロットと言っていたが？」

「はい。インパルスガンダムのパイロットをしているみたいです。それで、どんな機体なんだろ？って、気になつて」

「そうか。ではすまないが、俺が教えてやれることはあるなさそうだ。元々、俺が乗つていた時と今ではガンダムというのも様変わりしている」

メイリンは残念そうな顔をする。とは言え仕方がない。イザーグの搭乗していた機体はZGMF-X09Aジャスティスガンダム。現在では使用が禁止されている核動力の搭載機であり、設計そのものも3年以上前のものだ。すでに軍をやめて2年以上になる。その間に状況は大きく変わった。当時はガンダムが量産されること自体考えられなかつた。そんな時代なのだ。

今のことはわからない。だが興味がないわけではない。

「俺の方でも少しばかり調べてみることにじよつ。ビームで調べられるかはわからないが、その時にでも機密に触れない程度に話してやるくらいのことはできるだろ？」

「ありがとうございます！」

気分が沈む早さだけ回復するのも早いようだ。

「まだ行動を起こすと決めただけだ。礼は後でいい

考えられるルートは、サイサリス・パパが一番ガンダムに近い立場だが、機体の受領の際顔を合わせた程度の仲で応じてくれるとは考えにくい。となるとアスラン・ザラかデンドロビウム・デルタだが、どちらも各地を飛び回っている。捕まえるだけでも一苦労だろう。今日明日に解決できる話ではないらしい。

「お、教育、いいんですか？ 教え子に手を出して」

声の主はグラウンドで危うく5周追加させそうになつた生徒だ。女子の部屋にでも行つた帰りなのか、女子寮の方から堂々と歩いている。原則男女の行き来は禁止されているのだが、この類は禁止されていふとなるとかえつてそれを破ろうとする。悪ふつてはいるが特に問題を起こす奴でもないと黙認されているのが現状だ。

「何だ、まずは貴様が手を出してもらいたいのか？ 無論、握り拳でな」

ちょっと握りしめた拳を見せるだけで男子生徒は脱兎のごとく男子寮にまで逃げ込んでしまつた。やはりあいつだけでも5周追加してやるべきだつたろうか。

(仕方のない奴だ)

よくも悪くもムードメーカーなのだろう。メイリンも顔が笑つている。

「そろそろ消灯の時間も近い。メイリン、君も部屋に戻れ」
　　「はい。そんな明るい返事とともにメイリンは立ち上がるなり不慣れな敬礼をしてみせた。

（生徒がみんなあいつくらいに聞き分けがよければ、この仕事も楽なんだがな）

メイリンがいなくなるとロビーは静まり返る。この時間に出歩くのはイザークのようなもの好きでなければ教官の大田玉を食らったい生徒くらいなものだ。結局誰もいない。

イザークもそろそろ部屋に戻ることにした。資料を束ね脇に抱える。ロビーの脇にはエレベーターもあるが、あえてそれを避け、脇の階段を選んだ。わずか3階まであがると、部屋はすぐ前にある。カード・キーをかざすとロックが解除された音がする。ドア・ノブに手をかけたところで、イザークは違和感を覚えた。わずかに扉を開けただけで光が漏れだした。

（電気を消し忘れたか？）

そんなはずはないと体が緊張する。扉をゆっくりと開け、体をさらさないよう中を覗く。

何もないような殺風景な部屋だ。必要ないと家具はそろえていない。唯一椅子くらいはお気に入りを探そうと2度買い換えた。それでもこれというものには巡り会えていない。未練もあったことから結局捨てられず、3脚すべてが部屋の中に投げ出されている。

その1脚に男が座っている。

「何だ、お前か？」

もうスペイバーをする必要はない。扉をとつとくべぐり抜ける。

男は座つてもわかるほど長身をしつかりと整え、面接か何かかと思わせる姿勢でイザークを直視していた。立ち上がるところ3年で多少は背が伸びたイザークよりも頭が天井に近い。

「お久しぶりです、イザーク様」

「様はよせ。だが、久しぶりとは認めよつ。キラビヤフランサスの結婚式以来だな」

何故かこいつとは、コートニー・ヒロニムスとは握手を交わす気にはなれない。資料を椅子の一つに置いてから、イザークはほかの椅子に座るとともにコートニーに着席を促した。この部屋で椅子がすべて埋まつたのは初めてのことだ。

「お前からはこれまでだいたい1月に一度連絡があった。そして今回は直接乗り込んできた。どういう風の吹き回しだ？ デンドロビウムの護衛であるはずのお前がこんなところにまで

普段、デンドロビウム・デルタからコートニーが離れることはないと聞いている。そして、こんなところにデンドロビウムが来るとは考えにくい。

無口で表情に乏しい。そのため、顔色というものをうかがいにくくコートニーは内容もその話だしも突然の印象を与える。

「イザーク様。あなたはゲルテンリッターを『えられた者として』
ンドロビウム様を守る責任がござります」

ゼフィランサスが新たに開発した7機のゲルテンリッター、その4号機は、何をどう間違ったのかイザークに与えられた。ジャステイスガンダムに搭載されていたアリスが移植された機体で、擬似人格インターフェイスの名は蒼星石。

「蒼星石にはときどき会」に行つてゐる。だが、俺は庭師になるつもりはない」

「コートニーという男を一言で表せと言わればイザークは冷静だとか落ち着き払つた、そのような言葉を選ぶこととなる。

それが、今は違つた。何か目に映る違いがあるのでない。コートニーの行動に浮かんでは消える違和感を拭うことができない。その最たるもののが、今、この場所 - - ここには「デンンドロビウムはいな - - にいることだ。

「コートニー。お前は一体何を焦つてゐる? デンンドロビウムにはお前がいれば十分なはずだ。この3年、何事もなかつた。ファースト・ダムゼルは危険にさらされる」とはなかつた。そうだな?」

連絡こそ取り合つてはいたが、いつして姿を見せたのは初めてのことだ。

「一体何がお前を焦らさせてゐる? 何故今になつて俺の力を必要とする?」

「コードニーは口数の多い方ではないが、決して無口でもない。では答えようとしたのは何故だ。

「ダムゼルの、いや、プラントの中で何かが起きようとしているのか？」

答えるまで視線を外してやらないつもりが、コードニーが突然立ち上がったことで視線はたやすく外れてしまった。

「イザーク様。あなたほどの力がありながら、何故このような閑職に甘んじておられるのですか？」

「俺はプラントのために戦つことはやぶさかではないが、コーディネーターのために戦うつもりはない。一部の人間のために誰かが犠牲になる。それを仕方がないだと、当然だと感じなくなかった。軍をやめた理由はそれだけだ」

座つたまま、ゆつくりと見上げる。眼球だけでは辛く、首をやや持ち上げたことでようやく見えてきたコードニーの顔は、心なしか落ち着きを取り戻したように見える。たつた一度だけ自然な様子で瞬きをして見せた。そのことだけで、そう判断する。

「それを聞くことができて安心しました。あなた様は必ず戦場に舞い戻られるでしょう。今、現在、そして未来、デンドロビウム様を脅かす敵と戦うために」

「何を言っている？」

失礼します。それが、コードニーの返事であつた。挨拶もなしに部屋を訪れた不躾な客は、一貫性を保つてろくな言葉もなしに出て

いじつとする。「パートナーが扉へと向かう間、イザークは考えざるを得ない。

(「パートナーが恐れる敵とは何だ？ ブルー・コスモスか？ いや、それが今急に脅威になるとは考えにくい。では……）

答えは見つからない。そして、答えは今すぐにでも部屋を出て行こうとしている。

「パートナー…」

「ちよどアノブに手をかけたところで、パートナーは振り返った。聞いたところで、答えてもらえるとは思えない。そんな諦めが、この日の顔を見た途端に広がってくれる。

できる」と言えば、ルートを確保しておくれ」とへりいか。

「俺はすぐにはここを離れることはできない。だが、蒼星石にはいつもでも動けるよ」は言つておく

「感謝、します」

地球の空はプラントの空とは違う。特に夕暮れ時、太陽が水平線に沈んでいく時間帯はそれがはつきりと感じられる。地球ではゆっくりと暗くなつていいくのに対し、プラントでは外付けナビゲーターの動きが早く時間がくるとすぐに夜が訪れる。

昼と夜しかない世界。それがプラントで進む正規市民と非正規の

市民との一極化を象徴していると無理矢理決めつけることができないことくらい、シン・アスカも理解している。

展望室。暇ができるといつもここに座つて外を眺めている気がする。夜の薄暗さが海を隠して、仕方がなく見上げた空には星の光。その内の一つが線香花火のように輝いた時、シンは思わず声を漏らした。

「あれ？」

誰も聞いていないはずだったのに、返事はすぐに聞こえてきた。

「どうしたです、チビ人間？」

若い女性の声。ガラス窓から顔を離すとともに踵を返すと、並ぶ備え付けの椅子の向こう側から近づいてくる人が見えた。アスラン・ザラだ。手には小型プロジェクターを持って、そこに着飾った翠星石の姿が形作られている。ここからだと、まるでアスランがお人形を抱いているように見えなくもない。

そしてシンをチビ人間と呼んだのはもちろん翠星石の方だ。

「やめてくれよ、その言い方」

「アスカ軍曹、君は翠星石に気に入られたみたいだな」

アスランは他人ごとのように笑つてゐる。

「だ、誰があんなチビ人間のこと！」

頬が白い分、翠星石はわかりやすく顔を赤くして手足をばたつかせ始めた。

「照れることないじゃないか。アスカ軍曹は、どこか君たちのお父様に似ているところがある」

「お父様の方が何十倍も何千倍もかっこいいです。あんなたかだか量産機なんかに苦戦してる弱つちい奴なんて、お父様の足下にも及ばねえですう」

鋭くしつかりとした動きで翠星石の指先がシンの方を向いた。

（本当に機械なのか……）

感情的で怒りっぽい。人工知能としては必要ないほど高性能で、兵器に搭載されているとは思えないほど人間くさい。誰かが演じているだけと言われた方がまだ納得いく。たとえば、アスランの腹話術とか。

それはないな。とりあえず否定しておいて、シンはため息をついた。

「どうしてこいつまでほろくそ言われなきゃいけないんだよ?」

シンがまだ新兵の部類で苦戦を強いられていることは認めよう。それでも任務にはしっかりと参加しているし、赤服を受領したこともある。そうでなくとも、翠星石は初対面の時からシンに食つてかかることが多い気がする。

「翠星石の照れ隠しだよ」

「知らねえです！ そんなこと…」

アスランの言葉を聞くとすぐ「翠星石の姿は見えなくなる。プロジェクターを切つたのだろう。まるで子どもみたいだ。ゲルテンリッターを作つたというゼフィランサス・ズールはどうして兵器にここまで感受性を求めたのだろう。翠星石が消える直前に見せた顔を背ける仕草とか、本当にそっぽ向いた子どもを感じさせた。

「翠星石はどうしてだかお父さん子ですね。それに、素直じゃないところがある」

もつプロジェクトを垂直に持つていて必要を感じなかつたからだろうか、アスランは近くの椅子にゅつたりと座つた。プロジェクターを指で弄んでいふといふを見ると、きっと映像が出ていない間はセンサーが機能しないのだろう。そうでなければ翠星石がきっと黙つていはない。

「翠星石のお父さんて、誰なんですか？」

「ゼフィランサスの夫さ。一途で、どこか向こうへ見ずで、そんなところは君に似ているかな」

また、アスランはゼフィランサス・ズールをゼフィランサスと呼んだ。それに、夫のことともまるで友達かのよつた口調で話す。

一体ザフトの英雄にとつて、ゼフィランサス・ズールという技術者はどのような存在なのだろう。

何かを確かめるように見てみると、アスランはそれに気づいて短

く疑問の声を出す。それに何でもないと誤魔化すと、アスランはそれ以上聞いてくることはなかつた。代わりにその視線は星空へと向けられた。

「ところで、わざと何に気づいたんだ？」

「いや、今、何かあそこで光ったような気がして……」

すぐ目の前のガラス窓を指でつづぐ。もちろん窓が光ったわけではなくて、シンが気づいたのは指のその先、街の明かりに邪魔されない星空のどこか。

そこがほんの少し光った気がした。それだけのことだった。アスランが興味を持つなんて思えない事実に、それでもアスランは声を強めて否定した。

「気のせいだ」

先程まで笑っていたことが嘘みたいに、厳しい顔をしていた。

無表情は、一体どんな顔のことなのだろう。嬉しい時の顔でもなくて怒った顔でもなくて泣いた顔でも楽しい時の顔でもない。とすると無表情は一切の感情表現を放棄した表情であるべきはずなのに、それでも、無表情は人を妙に不安にさせてしまう。

「どうしたの、二ーレンベルギア？」

椅子に頬杖をつきながら表情を作ることを忘れていた二ーレンベ

ルギア・ノベンバーはこの言葉に意識を取り戻すことになった。気絶していた訳ではないけれど、考えに熱中しすぎてしまっていたようだ。

「少し、怖い顔してるよ」

サイ・アーガイルが顔を文字通り覗き込んでくる。もうこの歳になればこんなに顔を近づけることなんてあり得ない、もうすこしひで口づけをしてしまうくらいまで、サイは顔をアップにしてくる。

心は子どもでも体は成人男性。ニーレンベルギアはついその胸 - 鍛えられていてとても固い - - を手で押し返す。力付くではとてもかなわなくとも、サイは素直に身を引いてくれた。いくら言動が子どものようでも、子どもと同じように接するわけにはいかない。

「ちょっと考え方してただけよ」

5人のダムゼルが集められた会合におけるエピメティウム・エローの発言は様々な意味で大きな意味を持つていた。ダムゼルはお父様であるシーゲル・クラインの命に逆らうことはない。しかし今はもう、お父様は存在していないのである。目的地こそ示されながら、そのための手段も方法も、それどころか目的地の確からしさにさえ、エピメティウムは疑問を呈した。

間借りした一室は、まだ引っ越しがすんでいないこともあって必要最低限のものしか置かれていらない殺風景なものである。元々二レンベルギアは調度品の類に散財する趣味は持ち合わせていないが、それでも、座っている椅子を除けば床に付くものはサイくらいしかいない部屋には寂しさを覚えた。

その寂しさは、ただサイのことを見てしまったからかもしねり。

「ねえ、サイ？」

サイはちよつと眠そうに瞬きをした。

「人は社会のためにあるべきだと思う？ それとも、社会が人のためにあるべきだと思う？」

「よく、わからない」

やつぱり、まだまだ子どものサイにこんなお話は難しいらしい。思わず笑ってしまうと、サイは少しだけ、不機嫌そうに目を細めた。

「そうね。私も、よくわからないわ」

そんな答えのないなぞなぞが、ニーレンベルギアを悩ませているのだから。

(ヒピメティウム姉さんはこの答えを出せたのかしら?)

だとしたらどんな答えを導いたのだろう。

ノのヴァーリは、ニーレンベルギアは人を作る。ブーステッドマン、エクステンデッド、人体の強化技術の開発をお父様から求められた。

エヴァーリーは、ヒピメティウムは国を作る。オープ首長国に潜入し、その国を親プラント勢力として設えた。

「でも、田の前の現実を犠牲にしてお父様に頼んでいた。

「でもね、社会のために人が犠牲にならなければならぬのだとしたら、それはやっぱり、おかしいと思うの」

「一レンベルギアは田の前で袖を振るつてみることにした。赤い布と黒いフリルが揺れる。エインセル・ハンターから賜つた深紅のドレスは、今なお一レンベルギアを包む。かつて技術協力してい大西洋連邦を離れた今でさえ、ドレスを脱ぐタイミングを掴みかねていた。

普通に量産されているのと比べると色と形が少し違う。それがアウル・ニーダとステラ・ルーシュの機体である。

GAT-X255インテンセティガンダム汎用型は、フィンブルの破碎活動の時に敵に壊されたが、アーノルド・ノイマンとか言う副隊長がパーツを持ってくれたおかげでやっと修復が終わった。今は初めから損傷の少ないGAT-X370ディーヴィエイトガンダム特装型 - - ステラの機体だ - - と並んでスペングラー級MS搭載型強襲揚陸艦の格納庫に並んでいる。

「これで俺たちも戦えるな、ステラ」

今すぐにでも飛び出したい。そんなはやる気持ちを抑えながら、アウルはそれぞれの愛機を見上げているステラへと声をかけた。元の姿を取り戻したインテンセティから田を離すことができない。

フィンブル上空の戦闘で行方不明になつた仲間 - - ケンカ友達だ

つたが、 - - を殺したザフトと戦えると思つだけでアウルは飛び跳ねて喜びたい気持ちになる。

「でも、 戦う」とは、 怖い……」

思わず隣のステラを見ると、 てつきり自分のモビル・スーツを眺めていると思つていたステラはつむじて体を小さくしていた。ステラが恐がりなことは知つてた。それが原因で戦いの時暴れることもだ。

「ステイングの仇とりたくねえのかよーー？」

少し怒鳴りつけるとステラはすぐにびくつく。

「アウル、 ステラ」

ブーツの音が鉄板張られた床を鳴らして、 白いドレスがとても似合つてゐる。ヒメノカリス・ホテルが近寄つてきた分だけ整備の男が横目で見てゐる。仕事しろよ、 仕事。こうアウルが怒鳴つて仕事に戻つたと思えばすぐにヒメノカリスのことを見よつとする。

どつかの歌姫と同じ声をして、 姉の声は綺麗だった。

「もう、 あなたたちは戦わなくてもいい

姉と慕い、 信頼を置いてきたヒメノカリスの言葉を聞いた時、 アウル・ニーダは頭が熱くなることを抑えることができないでいた。

「何でだよ！ 俺は嫌だ！」

「あなたたちは元々戦うための存在じゃないから。ステイングを失つた以上、あなたたちまで失うことはできない」

床を強く踏みつけて騒ぐアウルと違つて、ヒメノアリスは青い瞳を見せているだけだ。これが冷たいのではなく静かなだけだとアウルは知つている。知つてはいても、認められるかは別だ。

目元がつり上がって、のどの奥から乾いた声が這いだしていく。

「それって心配して言ってくれてるのか？ それとも、計画に支障が出ることを怖がってるのかよ？」

計画にはエクステンデッドが必要になる。だが、3人である必要はない。1人でもいればいい。アウルとステラもスペアにすぎないのではないか。そんな暗い予想がアウルの声を黒くする。

「アウル！」

突然の声にヒメノカリスの顔を覗き込もうとしていたアウルは足をとられた。慌てて、つい後に尻餅をつく。誰だ。座つたまま探していると、右側の資材の上、光が柱を作っていた。

赤いドレスよりももっと紅い瞳がアウルのことを見ていた。プロジェクターをこんなところに置いたのはいつたる誰だ。

「一時の激情に身を任せることは頑愚以外の何者でもないわ。ヒメノカリスおば様に謝りなさい」

姿そのものはまだ子どもなのに、アウルよりもしつかりとしているように思ひ。アウルは真紅がどうも苦手だった。人ではない。そ

れでも人と何も変わらないからどう付き合つていいものかわからな
いからだ。

「でもよ……」

「あなたは、ヒメノカリスおば様が本気であなたたちのことを計画
の備品としてしか見ていないとでも考えているのかしら?」

とりあえず立ち上がるこにして、それでも、その間につい言
葉が思いついたじゃない。ヒメノカリス姉ちゃんは怒ることもなく
アウルのことを見ている。ステラは、怖がっているようだった。

(悪いのは俺だけかよ……)

「悪かったよ。でもな、納得した訳じゃないからな!」

今ダメでも後で出撃させてもらえないこともある。そんなつもりで、
アウルはインテンセティの方へと歩きだした。別に何か用事がある
のではなくて、ただここには居づらかつただけだ。

そんなアウルの背中を見送つて、真紅はため息をついた。そんな
動作さえ、プロジェクターは丁寧に再現する。高さ30cmほどの
人形が呆れたようにしか見えない。

「まったく、子どもなのだわ」

「真紅」

「ちらも人形のように表情を変えないで、ヒメノカリスが視線だ
けで真紅を見る。」

「ヒメノカリスおば様？」

「そのおば様って言うの、やめて」

オープは事実上自治権を回復している。大西洋連邦軍が駐留することなく、影響が完全に払拭されているとは言いがたいが、形式的には主権を取り戻している。

そのため、防衛のすべてをオープ軍が担う必要があった。

フィンブル落着以後、ザフト軍はオーストラリア大陸北部のカーペンタリア湾のカーペンタリア基地を中心に活動を活発化させていく。ボズゴロフ級潜水艦を中心に東西に戦力を展開しているのだ。

オープはオーストラリアを領有する東アジア共和国のすぐ北にある。決して他人事ではない。カーペンタリア湾を抑えられたことでインド洋へと出る海域をザフトが睨み、オープ近海にも踏査に乗り出している。地形はもとより、水温、海流、潜水艦が活動するに必要な情報を収集している気配がみられた。

世界安全保障機構につくのか、ザフトにつくのか。それだけでカーペンタリア湾周辺の勢力図が大きく書き換えられる。オープを味方にする者は多く、しかし味方は1人もいないのだ。

オープの国防を一手に担う国防本部は、いつだとも慌ただしい。階段状の部屋にオペレーターがひしめき、変わるモニターの光が目まぐるしい。情報は刻々と変わり、その度に変更点の確認、起こす

べき行動、分析すべき情報、仰ぐべき指示、人々の声が入り乱れる。

「国防本部！」

静寂とはほど遠い。それでもその声は本部全員の耳目を集めるものであった。スライド式の自動ドアの、その速度ではまだ遅いとばかりに無理矢理開かれた扉からカガリ・コラ・アスハは国防の中心へと足を踏み入れた。

先程までの喧噪が嘘のように静まり返り、オープの姫の行進人々が拝謁している。

この部屋の中で最も高い位置にある扉を抜けたカガリのすぐ目の前に最上段、指令官席がある。座る老齢の男性の周りにオープ軍の白い軍服を身につけた男たちが数人。その中の1人にカガリは目をつめた。

「カガリ様！」

「レドニルか、お前がいるなら話が早い！ 何があつたのか報告しろ！」

レドニル・キサカ。古くから護衛としてカガリの行く先々に随行していた男である。褐色の肌に無骨な頬骨。軍服の上からでもわかる鍛えられた体つきの軍人は、らしくもなくカガリから目をそらした。

この男ばかりではない。カガリが眼をつけると誰もが無言のまま目をそらす。指令官とてその有様だ。

「私を見ぐびるな！ それとも、目をそらし続けていれば事態が改善されるとでもいうのか！？」

互いに顔を見合させる軍人たち。その中で誰の顔色を伺うでもなく、最も早く決断したのはレドニルであった。こんなところがあるから、カガリはこの男を側にいることを許した。

「エピメディウム様のケトビームが消息を絶ちました」

「救難信号は？」

「ありません」

「事故なのか、事件なのか！？ 状況はどうなっている…」

「わかりません」

テスタメント級ケトビーム。テスタメント級とは同じ型の分類を意味する名前ではない。ダムゼルにそれぞれ与えられた専用艦の統一名称というだけにすぎない。エピメディウムの場合はケトビーム。先端に6本の爪を備え戦艦に格闘戦を仕掛けることができるという奇々怪々な艦である。かつてカガリも乗艦したことがある。基本的に宇宙戦艦だが、エピメディウムは通常好んでこの艦を利用していた。

今回もプラントまでケトビームで移動していた。

戦艦であり、メンテナンスに手抜かりがあつたとは考えにくい。

(何者かに襲撃された？ ならば信号を出さないはずがない)

無論大気圏突入が最も危険な瞬間であることは今も昔も変わりない。だが、このC・Eの世で前時代的な耐熱パネルの剥離で燃え尽きたコロンビア号とは安全性が格段に違う。偶発的な事故とは、どうしても納得できない。

軍人たちがなかなか言葉にできないでいるのはこのためだらう。誰も報告をあげられる段階にはないのだ。この事態に関係のない者たちまで静まり返る中では、扉の開く音さえよく響く。

カガリが入ってきた扉から、今度はユウナ・ロマ・セイランが姿を現す。普段から強面とは言いがたいユウナの顔は萎れたように控えめな様子でカガリを見ている。

「カガリ……」

「ユウナ……」

ユウナの手には資料 - - たつた一枚の紙切れである - - が握られている。一度強く握んだのか、しわがよっていた。

「ケトビームの残骸が発見された」

ユウナは資料を突き出す。クリップで止められた写真の下には急いで作られたと思われる報告書があった。どうでもいい報告書に注目したのは、それだけ写真から目をそらしたい意識の現れだろう。

それでも、どうしても写真が目に入らない訳ではない。

どこかの水中でライトに照らされる鉄の塊がそこには写っていた。

「見つかった部品はちょうど爪の部分だよ。頑丈で、だから燃え残つたんだろうね。それに、こんな爪を持つ戦艦なんてケトビームくらいしかない」

偶然付近で演習中であつた部隊が海中に落下した爪を見つけた。水深70m程度の比較的浅い場所で報告は迅速に行われた。ユウナの丁寧な説明が、しかしカガリの胸中にはんなりと入つてくることはない。

「嘘だ……」

ユウナを突き飛ばすように押す。単に邪魔だつただけだ。カガリは先程ユウナが入つてきた、自分が入るために用いた扉を入つてきた時と同様こじ開けるようにくぐり抜ける。

長い廊下を歩いている時、すれ違う人々はそろつて何事かと身構え力ガリに道を譲る。後ろからユウナの声でカガリを呼ぶ声と駆け足で追いかけてくる気配がある。

胸ポケットからプロジェクターを取り出す。円形で、ゲルテンリッターを呼び出すためのものだ。カガリがマスターを務める2号機、ZZ-X2Z200CYAガンダムカナーリエンフォーゲルの心を呼び出す。

「金糸雀！」

「はいかしら！」

光の柱は赤い瞳、白い肌・ゼフィランサスの7・8歳くらいの

時をモデルとしている - - をした少女の姿を包む。黄色を基調としたドレスというよりはおめかしという言葉が似合つのは、金糸雀の落ち着きない快活さゆえだらう。プロジェクトにはなぜか日傘も投影されている。

「すぐに飛ぶ。私を拾いに来い！」

合流地点を告げてからプロジェクトは金糸雀の姿を消す。ゲルテンリッターは複雑な戦闘などでなければパイロットなしに単独で動くことができる。

すでに金糸雀の姿はないにも関わらず、すぐ後ろでは息を強く吸い込んだ、まさに息を呑むような音が聞こえていた。首だけで振り向いてみると、コウナが鬼気迫る様子で携帯電話に声をぶつけていた。

「レドール、カガリは飛ぶつもりだ！　すぐに航空管制に伝えてくれ。無理なことはわかつて。でも、君なら管制官とカガリ、どちらなら説得に応じてくれると思つ？」

当然のことだが、領空内に未確認飛行物体が確認されればオープ軍ガスクランブルをかける。それが国防本部の上空ともなれば天地をひっくり返したような大騒ぎになる。コウナとレドールの問答は、ようするにそつまことをやりあつていい。

「恩に着る」

どうやら話はついたらしい。その頃にはカガリはすでにエレベーターに乗り込んでいた。閉まりかけたドアにコウナが携帯電話を握りしめたまま危うく挟まれそうになる。

「カガリ、せめて、護衛をつけてもらえないかい？」

声を張り上げながら早足のカガリに食らいつこうとしていたからだろう。ユウナは息を切らしている。

「足の遅い機体に合わせるつもりはない。それに、成層圏を突破できる機体など、ざらにあるものか」

機動力では地球軍最大を誇るGAT-333ディーウィエイトガンダムとて航空力学的にはともかく、推進力ではゲルテンリッターに劣る。もつとも、オープ軍が主に所有しているのは島国らしくGAT-252インテンセティガンダムであるのだが。

元々期待していなかつたのか、それとも息を整えることに集中しているためか、ユウナはこれ以上追求しようとはしなかつた。少なくとも、エレベーターが止まるまでは。

エレベーターを降りるとまた歩く。そして次のエレベーターに乗り込むまで100mほど歩いたどうか。目的地は屋上。屋上から1本のエレベーターで本部の深部に行くことができるような造りはしていない。乗り継いだエレベーターを降りて長い階段をあがつた扉を開くことで風が吹き付けてくる。

有事の際にはヘリポートとしても使用できるほどに広い。

すでに落日して久しい。暗夜を照らすサーチ・ライトが上空にモビル・スーツを捉えている。光をそのまま照り返す黄金の機体がゆっくりと降下している。

NN-X300AAフォイエリヒガンダムと同じ対ビーム装甲の
黄金色をした機体だが、大きさは18・7mと通常と同じ大きさし
かない。また可変機構がないことから、そのシルエットも奇抜なも
のではない。ライフルにシールド。黄金のガンダムが国防建屋に降
り立つた。夜風が一際強く体を叩く。

ミノフスキー・クラフトの輝きが次第に収まっていく。斥力を発
生させたままでは近づくことができない。

「下がつていい、ユウナ」

1人でカナーリエンフォーゲルへと歩いていく。誰も搭乗してい
ないはずのガンダムはかしづき、コクピット・ハッチを開く。鎧の
ついた乗降用のロープが垂らされる。足をかけ、引き上げられるま
まにしておくと、「コクピット・シートには誰も座っていない。日傘
・今は夜だが・・を差した金糸雀が出迎えた。

「金糸雀、ケトビームの航路はわかるな。消息不明の場所に行く」

「了解かしら」

球形のコクピット内部に浮かぶように設置されているシートへと
座る。すでにシステムは立ち上がっているため、ハッチを閉じると
途端に周囲の光景がコクピット内に投影される。そばにいる人を自
動認識するシステムがユウナのことを捉えた。拡大されるその表情
は何とも情けない顔をしている。

(そんな顔をするな。私はちゃんと帰つてくる)

カナーリエンフォーゲルを起きあがらせる。推力を急激に高めて

しまつと建物やユウナへの影響が無視できない。ゆっくりと脚力、アポジモーターで飛び上がらせ、徐々に高度をあげていく。

夜の帳の中を、カナーリエンフォーゲルの輝きが浸る。街の明かりに邪魔されない高さに到達したところで、カガリはスラスター出力を全開に、アクセルを強く踏み込む。

全身のフェイズシフト・アーマーに搭載されたミノフスキー・クラフトが強度の上昇とともに光輝を増す。スラスターが推進剤を吐き出し、ショック・アブソーバーが搭載されているはずの「クピット」にまで及ぶほどの加速度がカガリを強くシートへと押しつけた。

それでも、カガリは加速をやめようとはしない。歯を食いしばり、瞬きを忘れていた。そのまま暗闇の空をまっすぐに射抜く。

「ちょっと、かっちゃん、これ以上は危険かしら」

通常の機体ならここで速度超過のアラームが鳴ることだろう。ゲルテンリッターでは口傘をさした少女がいかにも慌てた様子でふためいていた。やかましさならざらも変わりない。

「お前はゲルテンリッターなんだろう。ゼフィランサスが造った真正銘のガンダムなんだろう。庭師だ！ 庭園の花を守る騎士だ！ それと、私をかっちゃんと呼ぶな」

ゲルテンリッターが夜空に光の矢を放つ。一筋の光が星空を指す。速く、迅速に、拙速とも言えるほどの高速が空を裂く。

「Hペメディウム、何故お前は死ななければならなかつた！」

それでも、星には届かない。

星影は遠く、世界最強と数えられるゲルテンリッターの力を持つ
てしても星の世界は遙か。手が届くことは決してない。

「プラントの目的は何だ！ ダムゼルの理想とは何だ！ お前たち
は何をしようとしていた！！」

いつの頃からか、視界が歪んでいる。全身を襲う加速度に弾かれ
た涙が拭うまでもなく瞳から離れていく。

「答えろ！ ハピメディウムー！」

暗澹たる部屋の中。ただ一人。鳥のさえずりの残響だけが部屋を
満たす。

籠の中の鳥。

ここには天なる国の王が安座する玉座。

Gのヴァーリ。

「私たちは、ヴァーリ」

至高の娘。寵愛受けるダムゼル。ラクス・クライン。

「私たちは、復讐のために生み出されました」

足が速くても仕方ありません。頭がよくても評価されるとは限りません。頭がいいことがどうしました。基準は多様で評価は変容。それがどこでなら正当に評価されるかわかりません。そんなあなたに朗報です。

ただ強いこと、ただ殺すこと、壊すこと、それこそが絶対基準。

戦場では明確にして明瞭に人の価値が定められます。

次回、GUNDAM SEED Destiny → Blume
nE inbrechers

「勇侠青春謳」

カーペンタリア。100人の死が、1人の英雄を作り上げる。

第14話「勇侠青春譚」

「は。いえ、我々も戦力を出さないとは言つておりません。ただ準備のためのお時間いただきたいと申し上げているのです」

東アジア共和国首相官邸執務室にて、男がその見事にはげ上がった頭にしきりにハンカチをあて、冷や汗を拭つてゐる。首相の椅子に座るこの男こそ、ラリー・ウイリアムズ東アジア共和国首相である。

普段からその弱腰外交を内外から非難--世界安全保障機構の会議では発言さえできないことで知られている--され、現在もその姿勢は残念ながら維持されている。

執務机におかれたモニターに映し出されるのは凡庸な男性。大西洋連邦大統領ジョセフ・コーブランドは、何も見えていないようで、しかし油断なく周囲の状況をうかがつてゐる。そのことは、同じ世界安全保障機構の会議に参会した時点で、ラリー首相はいやというほど思い知つた。

盜聴防止のため、受話器を耳に当てたままのホット・ライン会談は、しかし話の内容を聞かずともその進捗をうかがい知ることはたやすい。

「無論です。カーペンタリア奪還のためには精銳を差し向ける所存であります」

東アジア共和国を語る上でカーペンタリア基地の存在を欠かすことはできない。C.E.67年の開戦以来、実に10年近くに渡つ

て領土の一角を占領され、それをいまだに奪い返すことができていないでいる。国外からはザフト軍がカーペンタリア基地から部隊を発して事実を非難され、国内の勢力・特に軍部からの非難も日に日に増している。

モニターの映像が消され、受話器が置かれる。ラリー・ウイリアムズ首相の憔悴しきつた顔こそが、東アジア共和国の今を如実に物語る。

ザフトを払いのけるほどの軍備はなく、国外からの協力要請を拒むほどの発言力もない。確かにカーペンタリア湾奪還は命題であるとは言え、いざザフトを刺激してオーストラリア大陸全土が戦場と化した時、世界安全保障機構各国がどれほど協力してくれるかは未知数なのである。

「コープランド大統領にも困つたものだ……」

カーペンタリア攻略戦を行うため、兵力を出せ。この単純きわまりない依頼を、決して拒むことができぬよう周到に作り上げた計画のもと押しつけてきたのである。モビル・スーツ後進国である東アジア共和国ではモビル・スーツの保有台数の総数でさえ大西洋連邦の10分の1もない。

そして、そのすべてが指揮下にあるわけでもない。

簡単な操作で、モニターに青いガンダムが映される。GAT-252インテンセティガンダム。ビームを弾く特殊な防御法を持ち、ビーム兵器の使用を制限したことでの水中戦に適用した量産型ガンダムである。東アジア共和国でも約20機がライセンス生産されているが、その大半がファンтом・ペインなる特殊部隊に組み込まれて

いる。

モニターの写真がおくれるにつれ、10機を超えるインテンセティが並ぶ映像があった。そのシールドの表面には青い薔薇の紋章が描かれている。ファントム・ペインの証である。

各国のブルー・コスモスの構成員の働きかけによつて、大西洋連邦と国交を結んでいる国ではそのほとんどがガンダムによつて構成される特殊部隊の設立が求められた。パイロットは実戦を経験したエースばかりがを集められ、遊撃部隊としての活動が認められている。ただし、事実上はブルー・コスモス、正確にはエインセル・ハンターの私兵としての機能しているのである。

「ファントム・ペインか。」ちらも厄介わまりない

大西洋連邦と同じだ。味方でありながら自由にはならず、しかし、東アジア共和国はその絶大な力を必要としている。

カーペンタリア湾。オーストラリア大陸北部に位置し、幅600km、南北に700kmの蹄鉄型をした巨大な湾である。

この湾は数奇な運命をたどつてゐる。C.E.67年に勃発した戦争初期、ザフト軍は赤道を中心に部隊を展開した。もつとも重力偏差の小さい赤道に地球各国は多くのマスドライバーを保有する基地を構えていた。大洋州連合のジブラルタル基地、南アフリカ統一機構のビクトリア基地、大西洋連邦のパナマ基地、赤道同盟の力オシュン国際空港、及び、オープ首長国のオノゴロ島。これらの破壊、及び占領をもくろんだのである。

カオシュン国際空港はエイプリルホール・クライシスによつて大損害を被つたことによりC.E.75年現在でさえ復興してはいな。元々軍事用ではなく民間利用の施設であつたこともありザフト軍の侵攻が及ぶことはなかつた。

ジブラルタル基地、ビクトリア基地はザフトの占領下におかれ、ジブラルタル基地はC.E.71、ビクトリア基地はC.E.73に奪還されるまでザフトが支配を続けていた。

中立を謳つオーブ首長国には、何故かザフト軍は興味を示すことはなかつた。

しかし、最後のパナマ基地攻略には、ザフトは甚大な労力を強いられていた。世界最大の軍事大国である大西洋連邦はザフトが最も得意とする軌道上降下戦術を許さず、上からの攻めを封じられたザフトは横からの戦いを強いられた。しかし地上戦に不慣れなザフトは拠点がないことからも散発的な攻撃に終始せざるを得ず、攻略は遅々として進むことはなかつた。周辺国、コーラシア連邦、南アメリカ合衆国が軍事的に大西洋連邦を強力にバック・アップしていたことと相まつて、橋頭堡を築くことさえできずにいた。

その際白羽の矢が立つたのが、南の海に浮かぶオーストラリア大陸、東アジア共和国であつた。

東アジア共和国は当時姿勢を明らかにしてはおらず、また軍事的に弱小であったことからも大戦参加は見送るものと予測されていた。ザフトは突如カーペンタリア湾に降下を開始。あらかじめ建造していたパーソを降下させることで瞬く間にカーペンタリア基地を作り上げた。この電撃作戦が東アジア共和国ほぼ黙認の元に行われ、そ

の実態は未だに明らかでない。当時の政権と裏取引が行われたという噂・・保身のため、基地設営を許したものだ・・がいまだ消えず、それが世界安全保障機構内で東アジア共和国の立場を弱くしている。

1つの事実として東アジア共和国は領土の一部を侵害されているとは言え、大きな損害を被つた訳ではなかつた。カーペンタリアから北へと視線を移すと中立国であるオーブが存在する。C.E.7
1年当時オーブは原則として軍艦の領海内立ち入りを禁じ、排他的経済水域への立ち入りを厳しく監視していた。北と南から挟む形でインド洋と太平洋の分断を試みるも、それはあくまでも軍艦を目的としたものであり、商用船の通過をザフトは許した。海上閉鎖を行うことはなかつたのである。これによつて東アジア共和国は大きな損害を被ることはなかつたが、カーペンタリア基地を出たプラント船績の戦艦がアフリカ、アメリカ大陸へと向けられているという事実は国際的な非難を浴びた。

また、当時のカーペンタリア基地は規模として大きなものではなく、地球軍によつて見過ごされていたという事実も存在する。

この流れが大きく変わつたのはC.E.75、小惑星フィンブル落着の時のことである。ザフト軍はフィンブル落着の混乱に乗じる形で多数のボズゴロフ級潜水艦、モビル・スーシをカーペンタリア基地へと降下。いくつかの部隊は地球軍の奇襲に見舞われたとは言え、その基地規模は大きく向上した。当初の目的であつたパナマ基地に睨みをきかせることができるとほか、アフリカ方面へと補給物資を送ることが可能となつたのである。

ザフトにとってカーペンタリア基地は地上の最重要拠点であり、地球各国にとつてその攻略は至上命題となつてゐる。これまで幾度

となく行われた攻略作戦の中でも最大規模の戦線が、ゲルテンリッターの参加を含む形で火蓋が切つて落とされようとしていた。

カーペンタリア基地はカーペンタリア基地深奥に位置する。オーストラリア大陸では主要な施設は沿岸部に集中しており、内陸部からでは組織だつた戦闘を行うことはできない。世界安全保障機構各国は自然と北部開口部から湾内への侵入を試みることとなつた。

大西洋連邦軍、赤道同盟軍、東アジア共和国軍合わせてステイガラー級MS搭載型強襲揚陸艦20隻、モビル・スーツ総数約300を数える3個師団を超える大戦力である。

湾内南西に位置するカーペンタリア基地を包み込むように3個師団が東西に横並びとなつて湾を南下していた。

ネオ・ロアノーク率いる部隊が参加するのは中央の師団。主に大西洋連邦軍からなるこの師団は部隊の中央、湾の中心を縦に割りながらステイガラー級を並べている。

すでに他の空母からジェット・ストライカーを装備したものを中心とするGAT-01A1ストライクダガーが出撃を開始している。モビル・スーツの攻撃力が発達している現代戦術において戦艦が前線に展開することは許されない。まだ敵の姿が見えない内からモビル・スーツたちは3機1組の小隊を維持しながら空へと斜めに飛び出していく。

甲板の上にはZZ-X5Z000KYガンダムラインルビーンの真紅の装甲に引き連れられたGAT-333ディーソイエイトガン

ダムが2列4機並んでいる。そのウイングには青い薔薇が描かれ、ファンтом・ペインであることが示される。

ライフルビーンのコクピットの中では、小型プロジェクターの時は違ひ自由に動き回る小さな少女の姿がやはり赤い。ゲルテンリッターにとつて視覚とは各種センサーであるのであって、立体映像の視線と必ずしも一致はしない。それでも、真紅はものを認識するという行為において映像との整合性を維持することを好んだ。球形コクピットの壁360度に映し出された映像をわざわざ眺めるよう人に形の姿が飛び回っている。本来であれば、機体そのものである真紅はコクピットに映像が映し出されている時点でその情報のすべてを掌握している。

ネオ・ロアノークはサングラスを身につけ、ファンтом・ペインよつの黒い軍服のままで真紅に部下と通信を繋ぐように指示を出した。どこの誰かを指定する必要はない。音声認識の発展系として、真紅は自分で考え、然るべき相手との回線を開いた。

4機のディーヴィエイトへ搭乗する4人の部下それぞれへと。

「アーノルド副隊長をリーダーにミュー・ディー中尉、スウェン大尉をリーダーにシャムス中尉はロツテそれぞれを形成。各個敵を撃破する!」

「了解!」

実戦を幾度となく乗り越えてきたパイロットたちは寸時違わぬタイミングで返答した。

本来、モビル・スーツの最小単位は3機1組でケッテを構成する

とされている。ネオの隊ではネオと副隊長であるアーノルド・ノイマンをリーダー——ここでは攻撃役のことだ——として残りの3人が援護に回るか、でなければ今回のよつな2組のロッテをネオがまとめる変則的なシュヴァルムを探ることが多い。ゲルテンリッターの高い攻撃力は通常のケッテでは生かしきれないためだ。

結果として、この部隊では2個小隊にも満たない戦力で1個中隊ほどの攻撃力を有することとなつた。

スウェン・カル・バヤン大尉とシャムス・コーヴ中尉を組ませたのはこの2人の意外な相性の良さに由来する。アーノルド大尉の場合、面倒見の良さから誰とでも安心して組ませることができるのである。

「お父様、出撃要請が発令されました」

空母の管制から出撃許可が出たことが真紅から告げられる。

「真紅、準備はいいかい？」

「こつでもどこでも臨戦態勢。それがレディの嗜みよ、お父様」

そう言つてウインクしてみせる真紅の顔は幼い頃のゼフィランサスの面影を彷彿とさせた。まさに娘の成長を見守る父の心境で、ネオは操縦桿を握りしめた。

「物騒な淑女がいたものだね」

ライフルビーンの背中ではバック・パックが起きあがるとともにウイングが展開する。重戦闘機を水平に担いだように推進力の塊を思わせるその体が全身から光を放ち始める。

「ネオ・ロアノーク、ラインルビーン、出撃する！」

カタパルトもなしに甲板を飛び出すゲルテンリッターは、しかし他のどの機体よりも速く戦いの空へと躍り出た。

カーペンタリア基地到着した途端、艦から降りることもできないくらいのタイミングで敵が攻めてきた。シン・アスカの姿はインパルスのコクピットの中にある。

マニュアル通り簡単なシステムの確認からモニターに戦況の確認を行う。敵の戦力ははつきりとしない - - 保有している戦力を公開する馬鹿なんていない - - がだいたい3個師団と想定されているらしい。カーペンタリアの2個師団、頑張つても2個師団2連隊の戦力の1・5倍は覚悟しろのことだ。

「ミネルヴァは出撃後、カーペンタリア基地の警護に就きます。敵戦力は甚大なれど、それはもとより予定されていたこと。誇り高きプランクトの民として各員の奮戦に期待します」

特に命令ではない単なる艦内放送だ。返事をする必要は感じなかった。コクピットから格納庫を見渡しても敬礼や返事をしているらしい人はいない。出撃前のいつもの慌ただしさがそこにはあるだけだ。

システム・オール・グリーン。ジェネレーター出力、バッテリー残量ともに問題なし。アビオニクス各電圧、正常値。

「アスカ軍曹、ホーク軍曹」

モニターには白いノーマル・スーツを身につけたレイ・ザ・バーレル隊長と赤いノーマル・スーツのルナマリア・ホークの姿が移る。

「この戦いはカーペンタリア基地の防衛が最重要目標となる。不必要に前にさえ出なければ、好きなように戦え」

「え、でもレイ隊長は……？」

レイ隊長の言葉に思わずルナマリアが視線を泳がせた。シンにしたところでのこのような師団クラスの部隊で戦うことなど初めてのことだ。ルナマリアの視線が動いたのは、あちらのモニターに映つているレイ隊長の顔を見るためだろう。シンも同じように隊長を見たが、特に何か言つこともなく映像は消えてしまった。

好きにしろ。とにかくこの命令だけが生きている。

ルナマリアもやれやれと言つた様子で笑つている。

(それなら、これまで通りに戦うだけだ)

シンが搭乗しているNGMF-56Sインパルスガンダムを乗せたリフトが動き出す。モニターの風景が変わっていく中、やがて正面にカタパルトが映し出される。根本はまだ室内だが、その先端は開放されていて日の光が眩しい。いつも宇宙の闇の中へ出撃していた。

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

インパルスが膝を折る。足を固定しているカタパルトが機体を押し進ませ、光が急速に広がっていく。空へと投げ出された時、地球の重力というものを感じながら、機体をうまく上昇させる。インパルスの背中には、ソード・シルエットが装備されていた。

ザフト軍と世界安全保障機構とではその戦力差は1・5倍ほどであると双方が捉えていた。数では不利だが、ザフトは防衛側である。攻める側は守る側の3倍の戦力を必要とするとはよく言われることであり、ザフトは必ずしも不利とは言いたい。同時に、兵力の多寡で勝敗が決するわけでもないことも常識である。

世界安全保障機構は部隊を大きく3つに分けた。それぞれが東西に横一列に並び、湾の南下を開始した。

カーペンタリア基地は湾のほぼ南西に位置している。一点突破を目指すのであれば部隊を薄く引き延ばしたこの布陣は決して理になつたものではない。それどころか前線の足並みを乱せば各個撃破される危険性さえある。

ナチュラルのすることは間が抜けている。ザフトの部隊長はそう笑う部下を叱責しながら相手の出方をうかがっていた。

横に大きく部隊を広げる布陣は、あまりに有名な陣形とその姿が重なるのである。

鶴翼の陣。横へと広げた陣形の中央を敢えて窪ませることでそこへ敵軍を誘い込み、両翼が翼で包み込むように相手を包囲する。世界安全保障機構軍はその陣形を思わせて中央を残して、まずは西側、

東側の部隊が前進を開始した。本来鶴翼の陣は防御側の戦術だが、直接力・ペントリアを目指す西側部隊を放置することもできなければ、不気味に南下する東側部隊を無視してはザフトは瞬く間に包囲されてしまう。

戦場駆ける戦乙女はカラスにまたがると聞く。死を看取るは靈鳥シームルグ。古き文明の地では死の神タナトスは漆黒の翼持つ。数多の瞳持つ翼の告死天使の名はアズラエル。

死の予感は、いつだとて翼によつて運ばれる。

ジオットストライカーを装備したストライクダガーを中心とした西側部隊 - - 世界安全保障機構軍の横並びの部隊の内最も西側の部隊を便宜上こう呼ぶ - - がまっすぐにカーペンタリア基地を目指して南下を開始した。

迎え撃つはザフト軍1個師団。

ザフトもまた部隊を分けることとした。基地の防衛に集中するには戦力は十分と言えず、また高い火力を持つビーム兵器を備えたモビル・スーツを近づけることは許されない。

防衛師団が基地を守り、遊撃師団が敵の包囲を防ぐ。

レイは、ZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルは防衛師団に参列している。

いまだザフトでも正式採用されていない全天周囲モニターには眼

下に青い海が、空には白雲が、そして前には敵モビル・スーツが群
れている。

その中に赤いゲルテンリッターの姿は、ネオ・ロアノークの姿は
ない。

(参戦しているはずだが、どうにしる……?)

戦いの始まりは、突如として開かれた。

ローゼンクリスタルをはじめとするザフト軍モビル・スーツの後
ろに控えるボズゴロフ級潜水艦が一斉に垂直ミサイルを発射する。
同時に、ガナー・ウイザードを装備したZGMF-1000ΖΔが
左肩に大型エネルギー・パックを、それとバランスをとるように長
大なライフルから一斉にビームを撃ち出した。緒戦は爆撃、砲撃の
応酬。そんな戦術の基本は何も変わってはいない。

だが、大きく変わったこともある。命中精度の悲しむべき低下で
ある。ミノフスキーパーティーの電波干渉、ミノフスキーパーティーの機
動力の底上げが相俟つて当てるということにおいては寒い時代であ
った。誘導兵器の使用が不可能であり、また、目標がせせこましく
動き回る。

ミサイルの多くはでたらめに放たれ、何もないところで爆ぜる。
数で弾幕をはるも、空に広く薄く展開された爆煙をストライクダガ
ーが編隊を維持したまま突破する。ガナーヴィダの放つビームは戦場
に幾筋もの光を描くも、その多くがそれだけに終わる。わざわざ真
っ正面から放たれた攻撃に被弾する間抜けはなかなかみつけること
ができない。

ストライクダガーの編隊は煙の壁を抜け、ビームの網をかいくぐり、そして接敵する。

スラッシュ・ウイザードを装備したヅダが長柄の戦斧を構え飛び出すと、NGMF-986ゼーゴックが直えとして援護に加わる。ウイングを有し、可変機構さえ有するゼーゴックはその機動力でリーダーを務めるヅダに追いすがり、リーダーを狙い撃とうとしたストライクダガーへと攻撃する。

3機1組としてモビル・スーツは1個小隊を形成する。格闘戦に優れたスラッシュ・ヅダを2機のゼーゴックが援護する構図はザフトでは基本形と言つてよい。

ビームが交差し、被弾したモビル・スーツが煙をあげながら海へと落ちていく。そんな戦場の空の中、ローゼンクリスタルは何をするでもない。

白い機体である。純白を白く輝かせ、体に巻かれた帯は黄金の光を放つ。背後に方円を背負い、手には何もない。戦場にあって戦場にない。その姿は戦いの野に降りた天使を彷彿とさせる。

その目的は加護、天恵では決してなく。

「ゲルテンリッターのいない戦場など、ものの数ではない」

身の程知らずにもローゼンクリスタルへと狙いを定めた敵小隊がモニターに映し出される。そのどれもがジェット・ストライカーを装備し、手にはライフルとシールド、ひどくありふれた装いをしていた。

ロックオンされたとの警報音が「クピットに響きながら、レイは冷たくモニターを見つめた。

3機のストライクダガーが放つビームを最低限の動きでかわす。ハウinz・オブ・ティンダロス。敵の攻撃をかするまで近い距離で回避する会得の極意は、敵から見たならビームが通り抜けたように見えたことだろう。

ストライクダガーたちは動きを止め、レイは冷厳な眼差しを崩さない。

「薔薇水晶、付近のミノフスキー濃度はどうなっている?」

「クピット内に投影される紫の衣装を身につけた少女。

「いちいち姿を見せるな。あれが使用可能である場所を表示さえすればいい」

薔薇水晶は姿を消し、代わりにモニターには様々な色で示された濃度勾配が表示される。ストライクダガーの位置は、決して悪くない濃度であるようだ。

ローゼンクリスターが円環を頭上へとかざす。敵は距離をあけるような仕草を見せたが、結局こちらの出方をうかがっているでしかない。

「理由もわからず、明かされず、そして死んでいけ」

虚空に閃光が花開く。ビームと同質の輝きと殺意をはらんだ光が先触れなく発生し、ストライクダガーを捉えた。腕をもがれ足を裂

かれまとわりつく光が装甲を食らいいく。

どれほど機動力を持つていようと意味はない。この攻撃は、決してかわされない攻撃なのだから。

空中で爆発し、爆煙を突き抜けた残骸が落ちていく様を、レイはもはや眺めてさえいなかつた。

意外なことかもしれないが、地球軍の練度は決して高くはない。主に戦場に立っていたのは大西洋連邦、ヨーラシア連邦など少數で、他の国々は積極的に関わろうとはしてこなかつたためだ。

今回の敵部隊は大西洋連邦、赤道同盟、東アジア共和国による混成軍であるらしい。西側師団、及び東側師団に参加している大西洋連邦軍は少ないらしく、防衛師団が押し切られる様子はない。遊撃師団にしても相手が包囲網を形成することを頑なに防いでいる。

(単に戦いに不慣れな軍が先走つただけなのか?)

大西洋連邦軍が多く参加していると思われる中央師団の動きが鈍い。作戦の不備に戸惑つてゐるだけと言えなくもないが、そう考えるのは楽天的というより夢想的と言えた。

NN-X3Z10AZNガンダムヤーデシュテルンの進行方向にストライクダガーが立ちふさがる。ライフルを向けられるが構わず速度を落とさない。放たれるビームはハウinz・オブ・ティンダロスでかわし、8枚の青い翼を、ヤーデシュテルンは一際輝かせた。

抜剣したビーム・サーベルで、すれ違にざまストライクダガーの腹部を撫でる。敵機の撃墜を確認することもなく、ヤーデシュテルンは全身を輝かせ加速する。

「翠星石、パラスアテネの場所は？」

「あつちですう」

コクピット内を自由に浮遊する人形は、その縁のドレスに包まれた腕を伸ばし、一つの方向を指さした。進行方向から何時の報告だとか言つてくれることはない。そもそも翠星石は軍事用語を知っているのだろうか。

問題はない。兵器らしくない兵器。それがゲルテンリッターなのだから。

翠星石が示した方向を田指すと、言葉に違わず、ラヴクラフト級の優美なシルエットが洋上に浮かんでいる。ミネルヴァとはことなり、白い艦体を青が縁取った特殊戦闘艦を守るように展開する3機のインパルスガンダムがちょうど敵と交戦している時であった。

アスランが母艦とするラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネと部下である3人である。

(手を貸してやるとするか)

翼を広げる。ミノフスキー・クラフトの輝き放つ翼はそれ自体が推進力を有し、ヤーデシュテルンは通常のスラスター推進ではありえない軌道を描いて軽々とパラスアテネの前へ進み出る。両手にはビーム・ライフル。ガンダム・タイプのライフルとて、1撃でシー

ルドを破壊することは難しい。ライフルで敵を撃墜すること自体非行率的であるこの戦場において、しかしアスランは敢えて射撃を選択した。

2丁のライフルの銃口を平行に構える。まるで「引くよう」に、ヤーデシュテルンはライフルを構え、2筋のビームが垂直に並び合つて敵機を目指す。

1撃で破壊できずとも、理論上ビームを防ぐことができる材質の開発はいまだされていない。

初撃がストライクダガーのシールドを捉えた。膨大な光が放たれ、熱がシールドの表面を融解させていく。まだ熱を発散しきれてない段階に間髪入れず次撃が直撃する。連続する攻撃にシールドは耐えることはできない。ビームが強引に貫通するや、ジェネレーターの内在している胸部を貫き燃やす。

派手な爆発に、不出来な部下たちもようやく上官の帰還に気がついた。

「遅いですぜ、隊長。燃えぬきちまつたかと心配しちまいました」

モニターに映る赤いヘルメットをつけた角張った顎をした男。ヘルベルト・フォン・ラインハルトはいつも悪い冗談を好む。

「でも安心してください。隊長亡き後、ラクス様は俺が守りますんで」

続いたのも男だ。赤服を着ることが許されるほどの腕前だというのに、こちらのマーズ・シメオンもいついかなる時もブラック・ジ

ヨークを好む。眼鏡をかけているためか多少なりとも理知的に見えなくもないが、頭の中は変わらない。男2人が飲み仲間というのも、同じ部隊にいることだけに由来しているわけではないだろう。

「生憎だが、ラクスの騎士の座は誰にも譲るつもりはない」

「ほり、馬鹿言つてんじやない。敵はまだわんさか来てるんだ」

最後に現れたのは女性の顔。眼帯で左目を覆うその姿は歴戦の勇士を思わせる。事実、ヒルダ・ハーケンはこの部隊のまとめ役である。

ヒルダ、ヘルベルト、マーズ。この3人が操るインパルスガンダムがヤーデシュテルンにつき従つ。

モニターには次々に押し寄せる敵機の姿があびたらしい。しかしひるんでいることはできない。敵の東側師団は明らかに迂回する動きを見せていた。東側からザフト軍の包囲をもくろんでいるのだろう。

(そんなことさせられるか!)

「回り込もうとする敵を優先的に撃破する。2個中隊を残しながら順次壁を作れ。このまま東側師団の本体へと進撃する! 翼包囲をさせぬな!」

「了解!」

「そんなこと、当たり前ですか」

部下3人の力強い返事に混じつて翠星石の何とも緊張感のない声が聞こえる。

敵部隊は西側師団がカー・ペントリア基地を攻撃し、東側師団が迂回して回り込もうとしている。中央師団は戦力を温存しているのだろうか、まだ大きな動きは見られない。

包囲されることさえ防ぐことができればカーペントリア基地の防衛は鉄壁である。いくら数に勝る地球軍とてたやすく攻め落とすことはできないだろう。そして、アスラン加わるザフト軍遊撃師団は敵を撃破しながら東に駒を進めようとしている。敵が包囲網を完成させることは難しいはずだ。

(だが何だ、この違和感は……？)

ヤーデシュテルンを先頭にするように遊撃師団は進む。進撃の度、敵を撃破し、一定戦力をそこに残すことで敵に突破されないための壁を築く。カーペンタリア基地から東に伸びる防衛線が完成されようとしていた。この壁の南側にはボズゴロフ級を初めとする戦艦があり、壁の堅牢さを高めている。

しかし、違和感が拭えない。

撃墜されたストライクダガーが原型を残したまま墜落していく。その背中には、水平翼を備えたジェット・ストライカーが装備されている。この機体ばかりではない。この戦域に存在するほぼすべてのストライクダガーがジェット・ストライカーを使用していた。ソード・ストライカー？の姿がない。

「この戦場にはリーダーがないのだ。

アウル・ニーダは、まだ落ち着かない様子で、体を小刻みに動かしている。時折こちらへと向けてくる視線に目を合わせ、それからまた正面を向くことで視線を前へと誘導しようとする。そんなヒメノカリス・ホテルの努力を無にして、アウルはすぐに姉の方を向いた。

「俺たち、本当に出なくとも大丈夫なのか？」

「みんな、押されてるよ」

押されている。スペングラー級のブリッジから眺めるなら、ステラ・ルーシュからはそう見えるのかもしれない。

遠目に見える戦場では撃墜されるストライクダガーの方が数多く、戦線が目に見えて後退していた。アウルの場合、味方の窮状に自分が何もできない苛立ちを、ただステラは近づいてくる戦場に怯えているのだろう。ヒメノカリスはステラの手をそつと掴んだ。アウルなら恥ずかしがって握らせてはくれないが、ステラは素直に握り返してくれる。

「あそこにはゲルテンリッターがいる。アウル、あなたが加わった程度で変えられる戦況なら、キラがとうに覆してる」

「ファンтом・ペインの連中がヤキン・ドゥーエを戦い抜いたことくらい知ってるさ。でもよお、そんなに強いのか？」

「見ておきなさい。ガンダムに乗ることが許されたエースの戦いと、

次元の異なるゲルテンリッターの力を」

新兵器の登場は、戦争を変えてきた。

第2次世界大戦時、ナチスドイツが開発した突撃銃の原型であるMP 43が開発されたことで、後にソ連によつてAK-47が、アメリカによつてM-16が開発され、アサルト・ライフルが戦場の主役となつた。

このことがもたらした変化は、点から面への変換である。

かつてはライフルによつて相手を狙い撃つ戦法がとられたが、アサルト・ライフルの登場によつて大量の弾をばらまき広域を制圧する手法がとられることとなつた。第2次世界大戦当時、1人の兵士を倒すために必要とされる弾丸は平均して1万発とされ、アサルト・ライフル以後は100万発が必要とされた。

それほど大量の弾丸を散布する戦いが行われたのである。

そして、時代がC-Eへと変わつたことで新たな兵器の革新が起きた。ビーム・ライフルの登場である。

ビーム・ライフルは極めて高い攻撃力とともに特徴的な兵器でもあつた。ミノフスキーパーティクルに一定の電圧を加えることで生成されるメガ粒子は、その必要なエネルギー量を確保するために極端な小型化を行うことができない。当初、ビーム・ピストルのような兵器も開発こそされたが、ビーム中に含まれるメガ粒子濃度の低さから現在では採用されていない。

ビーム兵器は、ライフルの形こそ最適であった。そのことが引き起こした先祖返りがあった。ビーム・ライフルにアサルト・ライフルのような使い方はできない。アサルト・ライフル以前の点による攻撃が返り咲くこととなつたのである。

そして、ミノフスキーライフルによつて仕掛けられた、もう一つのいたずらがあつた。

ミノフスキーライフルによるモビル・スーツの高機動化が量産機単位で推進されたのだ。

ビームは高い攻撃力を誇る。事実上この攻撃を完全に防ぐことのできる材質は開発されておらず、そして、ミノフスキーライフルは高い機動力を堅持する。

攻撃を防ぐのではなくかわす。防御力を機動力で代替せざるをえない現実が、C・Eの戦場には出現した。

その事実は当然の帰着としてビーム・ライフルの命中率の極端な低下を招いた。先例にならうなら、1機のモビル・スーツを撃墜するためには1000発から数千発のビームが必要だとする論文が、大西洋連邦ミスカトニック大学のラバン・シュリュズベリイ教授によつて発表されている。

そして、モビル・スーツはビーム・ライフル以外の選択肢を与えてはいない。通常兵器と比べ3倍を超えるとされるエネルギー効率は、仮にビーム・ライフルと同程度の火力を得たいとしたなら3倍規模の火器を、機動力が重視される昨今において携帯しなければならないことを意味する。

ザフトにはモビル・スーツ携帯用の優れたアサルト・ライフルが存在するが、誰もナイフで刀に挑みたいと考えるものはなかつた。

そして、ミノフスキーパーティクルは電波を阻害する。ビームは荷電粒子の塊を放つ、いわば散弾である。狙撃に不向きな材料がそろいすぎていた。

その結果、会敵距離は次第に縮小され、両者が肉眼で確認できる距離で睨み合う戦場が頻発することとなる。

ガンダムによって誕生したミノフスキーパーティクル物理学にまつわる兵器によって、すべての材料が揃えられた。

ビーム兵器に頼る他ないが、しかしビームは命中率が高くはない。ミノフスキーパーティクルの電波干渉と相まってモビル・スーツは前へと出ることが求められた。そして、背部に装備されたミノフスキーラフトは前と横への機動を得意とし、反面後退を苦手とする。そして、敵は見えるすぐ目の前にいる。

当然の帰着。必然。戦術的合理性。そして、この状況が発生する可能性を超えた蓋然性。

これらはモビル・スーツ戦術に革新を導き出すこととなつた。

白兵戦の優位である。

ビーム・ライフルは連射することができない。それはすなわち、一定時間の間に攻撃される回数に制限があることを意味している。たとえば、敵機に接近するわずかな時間。

ビーム・ライフルは命中率が低い。シールドならば、完全ではなくとも数回であれば防ぐことができる。ビーム・ライフルによる撃墜効率の悪さを補う方法は、たとえば、生きた弾丸とも言える現在唯一の誘導兵器たる格闘。

ミノフスキー・クラフトは前進を得意とし、後退を苦手とする。たとえば、接近しようとすると機体の方が逃げようとすると機体に比べるかに有利であるということ。

白兵戦に特化した高性能機による効率的な敵機撃墜隊。この構図が導かれたことはあくまでも必然であった。

ソード・ストライカー?。スラッシュ・ウイザード。ソード・シリエット。ビームという高火力の射撃兵装があつてなおこのような白兵戦用の武装が開発され続けることには理由が存する。

ケツテにリーダーが存在することには訳がある。

格闘を得意とする機体が敵機を追い、その接近行動を射撃を得意とする2機が支援する。この3機1組の小隊がケツテであり、攻撃力を担う白兵戦の1機をリーダーと呼ぶ。

ガンダムが量産されたことは必然である。敵機に高い確率で接近し、極めて効率的に敵を撃墜できる高性能機。それを満たすことができるのがガンダムと呼ばれる完成されたシステムであり、それを可能とする一部のパイロットの存在がその部隊の攻撃力を決定する事実は過言とはされない。

ケツテであれ、ロッテであれ、ガンダムの数が、エースと呼ばれ

る戦士の存在が、剣戟を支配する。

ディーゼヴィエイトガンダムとディーゼヴィエイトガンダムによるロツテ。リーダーはアーノルド・ノイマン大尉が務めている。

パイロットとしての経歴はモビル・アーマーに始まるアーノルドはディーゼヴィエイトをモビル・アーマー形態で運用することを好んだ。ウイングを横に広げ、手足をしっかりと固定する。スラスター方向の統一。戦闘機並みの推力がディーゼヴィエイトを真っ直ぐにゾダへと突き進ませる。

1個小隊のゾダがビームで撃墜しようと試みるも、ミノフスキークラフトによつて不規則な機動を可能とするディーゼヴィエイトを捉えることはできない。

そして、リーダーだけを眺めていればいいわけではない。直掩を務めるミュー・ディー・ホルクロフト中尉のディーゼヴィエイトがモビル・スーシ形態のまま、両手に装備された2連ビーム・ライフルで敵の隊列をかき乱す。

攻撃に組織だつた防衛をとれなくなつたゾダが小隊を離れた。その瞬間、アーノルドは風を体に浴びて、コクピットという室内にありながらそつ錯覚させられるほどの加速を開始した。

射撃を当てるためには近ければ近いほどよい。その単純さわまりない理論のまま、ディーゼヴィエイトは飛翔しながら2連ビーム・ライフル、バルカン砲を掃射する。

装甲が弾け腕がもげる。小規模の爆発に叩きつけられる形で両腕を損壊した。ジダはゆっくりと高度を下げていく。攻撃力を失ったジダをアーノルドは敢えて追うことはなかつた。自身のスコアを稼ぐことよりも素早く次の敵へと移ることを優先したためだ。

そのすぐ側の空域ではスウェン・カル・バヤン大尉のディーゼイエイトが猛禽を思わせた。モビル・アーマー形態のまま文字通りの爪を開いた。1対2本の爪がそれぞれビーム・サーベルを発生させ、ジダの胸部をえぐるように斬り裂く。

ジョンレーターを破壊されたジダが爆発する頃には、すでにディーゼイエイトは飛び去る。僚機の仇をとるうとガナー・ジダが長大なライフルの銃口を持ち上げる。狙いをすます。そのために動きを止めてしまったことがジダの運命を決した。引きちぎれる銃身。それが敵の攻撃によるものだと気づいた時には、すでに次弾がジダを捉えていた。

リーダーの攻撃の隙を軽減する。それが補佐を務めるシャムス・コーナー中尉の役割である。

そして、直掩の存在さえ必要としない。それがゲルテンリッター。ゼフィランサス・ズールが夢想した、まさに悪夢のような機体である。2機のゼーゴックが並んで両手に構えたビーム・ライフルを次々と撃ち出す。連射性に乏しいビーム・ライフルの特性を理解した交戦は確かに弾幕をはりながら、それでもラインルビーンを捉えることはできても当てるとはできない。

まるで、悪い夢でも見ているかのようにビームが素通りしていく。ただ敵は直進・・それも恐ろしい速度で・・しているだけ。狙いもぶれてはいない。それでも当たらない。ビームが敵機の後ろへただ

流れしていく。

ゼーゴックが本来は爆撃用 - - 発射までのラグが大きく、対モビル・スーシの使用は想定されていない - - の胸部ビーム砲を放つ。太いビームの輝きは、まるで世界を異にしているように命中という概念をどこかへ置き去りにしていた。

もはや逃げることもできない。ビーム砲を発射した姿勢のまま、ゼーゴックの体をビーム・サーベルの輝きが素通りする。爆発までの時間を置くことなく2機目のゼーゴックの上半身と下半身が分かれた。空にいながらにして残骸と化したゼーゴックの間には、2刀のサーベルを構えたラインルビーンだけがある。

その姿、爆発が多い隠そと全身を包むミノフスキー・クラフトの輝きが煙を払い、ゼーゴック2機のリーダーを務めていたスラッシュ・ヅダが戦斧を振り降ろす。ラインルビーンはサーベルをかかげ斧を受け止める。奇襲が防がれた。そう、ヅダのバイロットが認識した刹那、ヅダはすでに胴を両断されていた。ラインルビーンがすねにビーム・サーベルを発生させ、回し蹴りの要領で足を振り抜いた後のことであった。

「たった一握りのエースの存在が戦況を左右する。それがこの戦争がガンダムのための戦争を呼ばれる所以」

ヒメノカリスの言葉は、ガンダムによつて誕生したビーム兵器が、ガンダムのための戦場を作つた事実を端的に示していた。

「やつぱりお父様のいねえ地球軍なんて鳥合の衆ですか」

翠星石の言つとおり、遊撃師団は敵の東側師団の行動を完全に抑制している。このままならば敵は基地を守る防衛師団を突破できないまいだすらに戦力をすり減らすだけだろう。

「油断するな、翠星石。何かがおかしい」

GATシリーズを敢えて敵軍に流し、フレア・ニコルを解放させることで核ミサイルの封印をプラントに進んで解かせたほどの強かさを見せた大西洋連邦が、こんな消耗戦を果たして許すのだろうか。

すでに攻撃の勢いも弱っている。翠星石の言葉通りならばすでに勝敗は決したと言つてもいいだろ。

それでもアスランはまとわりつく違和感をぬぐい去れないでいる。「でも、もう基地が見えないくらいの会進撃ですう。何も心配することねえですよ」

確かに、モニターにはすでにカーペンタリア基地が見えないほどに離れている。湾をほぼ横断してしまったらしい。基地は遠く水平線の彼方だ。戦闘を繰り返す味方の部隊。その南側で援護砲撃を行うパラスアテネを初めとするボズ・ゴロフ級の艦隊。

そして、視界の隅に映る戦略図には記載されていない基地。カーペンタリア湾の沿岸 - - その沖合でボズ・ゴロフ級が列をなしている - - に森に飲み込まれるようにその存在感を静かに風景にとけ込ませている。

「翠星石、あの基地は何だ？」

「基地？」

「あそこに見えるだろ。すぐに検索してくれ！」

モニターの中に基地の様子が拡大される。塔は倒れ、壁材は剥がれ落ちていることがはつきりと確認できる。木が敷地内にさえ繁茂していることからも、それが廃棄されて等しい基地であることがわかる。基地としての機能が残存しているはずもない。作戦上の要素として斟酌されない程度の場所にすぎない。

では何故この基地はここにある。ザフト軍の横腹をつく位置に、ただ偶然廃棄された基地があつたにすぎない。

(やう片づけるには危険すぎる)

「もう登録抹消されてやがる基地で……、アスラン、あの基地、潜水艦のドッグとしても使われてたです！」

天から投げ落とされた王の汚らわしさに世界は怯え、大地は身悶えします。反逆者、裏切り者、明けの明星、主の敵、魔王、光を掲げる者、プロト・ドミナント。天から与えられた力を、それでも天に向ける忌まわしき王は、今高らかに告げることでしょう。

死と破壊。決して戾らぬ安寧を約束します。

天が砕け、地が裂ける戦いの果てに訪れる世界を待ち望みます。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
Einbrecher~

「墮天國宣戦」

ワインダム。まずは、魔王が羽ばたく、その一片を。

第15話「墮天國宣戦」

かつてブルー・コスモスには3輪の薔薇が咲いていた。

ムウ・ラ・フラガ。大西洋連邦軍のエースとして知られ、ヘリオポリス崩壊事件に居合わせたこの男は、後に最強の2文字とともに語られるガンダムを3機までザフトへと流した。

ラウ・ル・クルーゼ。ザフトきってのエースとして知られるこの男は略奪したガンダムの使用及び、とり漏らしたガンダムの追跡を行つた。

ガンダムの力が広められ、ビーム兵器の必要性が示された。結果、ザフトは、プラントは必要とされる電力消費を補うためにプレア・ニコルの、核の封印を解かざるをえなくなつた。

すべてはブルー・コスモスの策略のままに。

エインセル・ハンター。世界最大手の軍需産業ラタトスク社代表を務めるこの男は、アラスカにて敵対する穩健派を葬り去り、大西洋連邦における主導権を手中に収めた。核の力を受け取つたのもこの男だ。

薔薇の名はムルタ・アズラエル。3輪の薔薇であり、3者の男たちは、ブルー・コスモスの意志と力であつた。

しかし1輪の薔薇は散り、1輪の薔薇は萎れてしまった。

残るはただ1輪。

そしてそれは人が手にした最も偉大で最も気高い薔薇の華。美しい薔薇は天にも届き、十重二十重と重なる花びらは冷厳なる色を秘め、その棘は、何にも増して鋭く長い。

エインセル・ハンター。

それは、人が手にしてはならなかつた青い薔薇。

大西洋連邦東岸ニユーヨーク・シティ、ブルー・コスモス本部代表執務室。3輪の青薔薇を模したエンブレムが壁一面を占めるこの場所で、男女が握手を交わす。

クリーム色をしたスーツの男性がまずソファーに腰掛け、相対する座席へと女性の着席を促す。女性は、眼鏡の似合う人であつた。眼鏡と知性とが正比例の関係にはないとは言え、女性は知的とも上品とも、感情というものを努めて表には出さない方法を心得ているように小さく笑いを作る。

「お久しぶりです、ジブリール代表。代表の椅子には慣れましたか？」

「ええ。ただ、未だにあなたの伴侶の登場を望む声が大きく苦慮させられています」

男はロード・ジブリール。ブルー・コスモス代表として世界安全保障機構の会議に出席した時とは異なり、その表情は穏やかであった。

現代代表は、たえず先代の、エインセル・ハンターの影に脅かされている。そんな偉大な先達者の妻、メリオル・ピステイスは困ったように口元を緩めて微笑む。

「デュクロ将軍と話したと聞いています」

反対に、ロード代表が頬を強ばらせる。以前会議で顔を合わせた南アメリカ合衆国代表エドモンド・デュクロ将軍は典型的なタ力派である。かつてのブルー・コスマスの復活を願う将軍にとって、ロードの政策は生やさしく、そのためことあるごとに噛みついてくる。そのことへの反感を、ロードは隠そとはしない。

「彼など典型的な、ファンと言つてもいい。エインセルたちの力は紛れもなく本物です。ただ、私の立場で軍にたとえをもとめることは問題かもしませんが、指揮官たるものは後ろに下がり前線の兵のために作戦をたて、補給線を維持し、今後の戦いさえ視野にいて動くべきなのです。いたずらに前線に出て、仮に戦死、実際、我々はムウ・ラ・フラガという男を失っている。私はエインセルが代表から退いたのは早すぎると考えています。ブルー・コスマスのために力になつてもらいたいと考えています。だからこそ、ファン・ム・ペインの設立を働きかけました」

興奮気味であつたロードが冷静さを取り戻すまでのわずかな時間をお、メリオルはいやな顔一つすることなく待つ。

「失礼。愚痴など聞かせてしましたね」

エインセル・ハンター先代表から後継指名を受けて以来、ロードはいつだとて偉大な先輩と比べられる。エインセルに勝てるはず

もない。しかし、ロード自身はそのことをブルー・コスモスの誇りとは思え、恥と感じたことはない。

「エインセルとは違う道を行く。そのことを確認しなおすよ」と、ロードは声を落ち着かせていく。

「ブルー・コスモスは、今だからこそかつての組織としてのあり方、確かに当時から過激な面が問題にこそなってはいましたが、思想として「コーディネーター反対を訴えていくべきであると考えています」

「エインセル様もロード様には期待をかけています」

メリオルは、あのエインセルがそばにいることを求める女性は男の慰め方を心得ている。エインセルは、あつとあらゆるものを持っている。

「ところで、エインセルは今どこに？　今日は来てくれるものと期待していたのですが」

優雅なほどに冷静なメリオルが、あからさまに田を見下した。ちよつと視線をそらすどころの騒ぎではない。首を曲げ、あらぬ方を見てまでロードの田を見ようとほしないのである。

ただならぬ事態は、ただならぬ事態によって引き起されたれることを、ロードは心得ている。

「まさか……」

「エインセル様の悪い癖が出ました……」

最後まで田をそりしたまま、メリオルが答えた。

「概図でいい、戦略図を出せ！」

アスラン・ザラの言葉にモニターに示されたのはカーペンタリア湾の地図である。北側に口を開いた湾の喉元にカーペンタリア基地を示す記号と、防衛師団を示す凸型の記号。そして、そこから東側に湾を横断するように中隊程度の戦力が数珠繫ぎに点在する形で伸びている。

「遊撃部隊が不自然に引き延ばされて戦線にむらが生じている。引き返せ！　これは罠だ！」

東側師団の動きを抑えようと、会進撃の勢いのまま東に突出しきていて。これではザフトはみすみす相手に柔らかい横腹を見せていることと何も変わらない。敵　よりもよつて最も練度が高いと思われる中央師団を相手は温存している　はどこでも好きな場所を突き破ることができる。

(それからどうする？　何が起ころう？)

突き破った戦線を維持することで遊撃師団、防衛師団両方を挾撃するつもりだろ？　北には敵部隊がひしめく。突き立てた錐のように突破した地点を起点として傷口を左右に切り開くことで遊撃、防衛師団は西と東側からも攻め込まれるとともに分断することもできるだろ？

だが、それは反対に考えればザフトが地球軍を挟み撃ちにしてい

る状況にも近い。確かに一時的には突破されるかもしねりないが、十分に押し返すこともできるはずだ。

まだ違う。何かが違う。

「アスラン、ぼさつとしてる暇はねえですよー。」

翠星石の相変わらず乱暴な声に無理矢理意識が振り戻されると、アスランはΖΖ-X3Ζ10ΑΖガンダムヤーデシュテルンを動かす。ミノフスキー・クラフトの輝きが残滓として中に残り、その光の中を疾走する赤い影が通り抜けた。

「ライフルビーン！ キラカ！」

通り抜けた影が、輝きとともにとって返す。両手に握られたライフルを腰に安置している余裕はない。ライフルを放り投げ、ビーム・サーベルを抜く。不可視のエフィールドが形成され、ビームがサーべルの形を成した瞬間に、光が激突する。全身をミノフスキー・クラフトで包まれるゲルテンリッターは、ヤーデシュテルンとラインルビーンはサーベル同士をぶつけ合い、それぞれの光が一つの塊となつてカーペンタリアの空を照らす。

制止していたヤーデシュテルンに比ベーラインルビーンの速度は大きい。辛うじて攻撃を受け止めたものの、押し切られる形でアスランは体が後ろへと押しやられしていく感覚を味わっていた。

「マスターをサポートすべきゲルテンリッターがずいぶんな失態ね、

翠星石

ガンダム 正確にはゲルテンリッター同士 を繋ぐ通信から

聞こえたのは少女の声。会つたことはないが、翠星石の妹、真紅だ
ら。

「しゃあねえですよ！ 人間勝つてる時は調子よくて周りのことな
んて見えやしねえです」

鎧迫り合いの状態であるため、モニター一杯に映し出されている
ラインルビーンへと翠星石が指さしながらわめく。調子に乗つたり、
戦闘中に騒いだり、翠星石は本当に子どもだ。

「このままでは埒があかない。

「キラ、君はどういう育ての方を、したんだ！」

アクセルを踏み込み、ミノフスキー・クラフトの強度を上げる。
一気に突き飛ばすつもりで両刀を振り抜く。この剣撃に弾かれるよ
うに2機のガンダムの間に若干の距離を開いた。これならレールガ
ンを展開できる。両腰にある長い銃身を起きあがらせる。NGMF
-X10Aフリーダムガンダムにも同様の武装があったことを思い
出しながら、それがガンダムを相手に満足な戦果を上げることがで
きなかつたことも勝手に記憶の海から這いだしてくる。

発射された高速の弾丸は、やはりラインルビーンを捉えることは
なかつた。

ラインルビーンは光の軌跡を残して飛び上がり、見上げた頃には
すでに方向を転換。すでにヤーテシユテルンを目標に収めていた。

「育ての親は君だよ。君だつて肝心な時に注意力をなくすだろ。子
は親の悪いところから似てくるものだよ」

こんな短い言葉をネオ・ロアノークが発している間に、ラインルビーンが降下し、それをヤーデシュテルンがサーベルで弾く過程が含まれている。攻撃を失敗したラインルビーンはそのまま通り過ぎていく。

戦いには制高という概念がある。頭上をとつた方が優位という考え方だ。降下の勢いのまま、水面近くにまで高度を下げていたラインルビーンは、果たして不利な状況におかれていると言えるのだろうか。レールガンを放つ。しかし高速で水面すれすれを飛翔するラインルビーンを捉えることはできず、いたずらに水柱を立てるしかない。

ハウinz・オブ・ティンダロスの体得者に射撃はものの役には立たない。

「翠星石、こちらから仕掛ける。目を回すな！」

答えを待つ前にアスランはヤーデシュテルンを降下させた。ショック・アブソーバーがあるにも関わらず、体が浮き上がるような感覚にはいつまでも慣れることができない。

降下する勢いでビーム・サーベルを振り下ろす。サーベルは確実にラインルビーンを捉え、そして剣は素通りする。反撃として放たれた回し蹴りは、しかしヤーデシュテルンを鼻先をかすめた。

この繰り返しだ。

性能は同等。実力は伯仲。互いの攻撃を紙一重でかわし合いながら、端から見たなら互いに何度も撃墜されている。本気を出せば勝

利を収めることも不可能ではないだろつ。しかし、よくとも相撲ち、最悪共倒れになる日算が高い。

(今は俺もおまえもまだ死ぬべき時じゃない!)

ヤーデシュテルンのサーベルをライナルビーンがサーベルで受け止める、反対側の手では逆のことが起きていた。互いが互いの攻撃を受け止め、同時に受け止められている。ビームが還元されるために発する光が目映い。その光の先に、ライナルビーンがまるで睨み合いつぶつにヤーデシュテルンと向かい合っていた。

「何故お前がここにいる? カーペンタリア基地は遙か西の果てだ!」

「こんなところで遊撃師団の相手をしていても仕方がない。防衛師団にはレイ・ザ・バレルもいれば、分厚い防衛線が展開されている。いくら大西洋連邦軍とて正面切つて戦えばどれほどの被害ができるとか。ネオが、キラがそんなこともわからないはずがない。」

田の前に見えるライナルビーンの顔が、光の加減からか笑つたよう見えた。

「基地を破壊しなくても、基地は破壊できるものよ、翠星石のマスター。あなたも、そろそろ気づいている頃ではなくて?」

まるで真紅の号令を待つていたかのように西でいくつもの水柱が上がり始めたことを、翠星石が伝えてくれた。モニターを見ている余裕はないが、だいたい見当がつく。

「狙いは……、ボズゴロフ級か!」

ザフト軍は防衛師団として部隊をカーペンタリア基地に重点的に配備し、遊撃師団は東へと歩を進めた。包囲されないよう、敵の東側師団を追いかける形で、しかし防御を手薄にしないために部隊をちぎりながら置き石として配置しながら。

その結果、部隊は不自然に薄く、長くカーペンタリアを東西に横断する形で展開してしまったのだ。

無論、防衛師団は健在。カーペンタリア基地の堅牢性は損なわれてはいない。だが、敵部隊を北側に押し込めておけるだけの力はすでに失われていた。

すでに名のない基地である。

誰も関心さえ寄せることがなかつたここはカーペンタリア基地から離れた位置にあり、湾の南の岸辺に位置する。その位置から少し沖合を見渡せば、多数のザフト軍ボズゴロフ級潜水艦が背中を、弱いわき腹を見せて群れていた。

そして、北側では少し力を込めれば破けてしまつような手薄な遊撃師団の残り香のような2個中隊。

まずは基地が動いた。放置され、すでに機能していない潜水艦のドッグは、しかし天蓋付きの停留地としては十分な機能を果たす。大西洋連邦軍ビーコン級潜水艦が3隻、基地を抜け出すなり飢えた狼の群のように背中を向けるボズゴロフ級へと襲いかかつた。

放たれる魚雷がボズゴロフ級のわき腹に突き刺さる。カーペンタリア湾は浅い。比較的浅海を航行していたボズゴロフ級に突き刺さつたそれは、巨大な水柱を海面へ優々と届けた。破孔から流れ込む水がザフト兵を押し流す。

北側からは伸びきった遊撃師団の網をたやすく引きちぎり、中央師団が突入を果たす。ドッペンホルン・ストライカーを中心、多数のモビル・スーツAT-01A-1ストライクダガーを中心に、多数のモビル・スーツが水面に顔だけを出して、いるボズゴロフ級へとその鉤爪を振り降ろす。ビームがたやすく上部甲板を吹き飛ばし、背負われたキャノン砲は多少の水など構うことなくボズゴロフ級へと突き刺さる。

慌てたボズゴロフ級の中にはが急速に潜行を開始するものもいる。だが、カーペンタリア湾の水深は浅い。わずか60m程度深さに全長270mもの潜水艦が急速潜行できるほど深いではない。頭から自ら叩きつけられるボズゴロフ級は海底の砂を巻き上げてなおその勢いは止まらない。底に受け止められた衝撃はそのまま艦体に伝わり、中央からひしゃげて折れる。

カーペンタリアの湾に、残骸それ自体を墓石として宇宙鯨の群が死に絶えていく中、白鯨が300年の時を越えて再び姿を現した。

海の深い青にも負けない青のガンダムがボズゴロフ級の上甲板にその両足をつけて立っていた。GAT-252インテンセティガンダム。甲殻類を思わせるバック・パックを背負い、手には海神を思わせる三叉戟。バック・パックとアームで繋がれた1対のシールドには青い薔薇の紋様が描かれる。

海は浅く、海面は近い。荒天の中、それでも波立つ白波がボズゴロフ級とガンダムとを撫でる。泡沫が視界を遮る中、インテンセテ

イは三叉戟を構えた。刃そのものが赤熱していることが沸騰し生じた泡がまとわりつく」とで判別できる。高周波ブレードと呼ばれる刃そのものが超周期に振動する」の兵器は鉄はあるか、フロイズシフト・アーマーでさえバターのように切断する。

突き立てられる戟。分厚い装甲がたやすく裂け、流れ込む水の動きが新たな泡を作り出す。インテンセティは泡から逃れるように駆けだした。水の中を、前へ、前へと。刃はそのままボズゴロフという鯨に深く食い込み、裂傷が突き進む。それは鯨の解体を思わせて、泡はその血液、濁流はその断末魔。

東アジア共和国からファントム・ペインへの入隊を許され、インテンセティガンダムを与えられた戦士はこうも呼ばれていた。白鯨、白鯨ジーン・ヒューストンと。

海底に横たわり、すでに息をしていないボズゴロフ級のその上に白鯨は立つ。その背後からはさらに3機の青薔薇を掲げるインテンセティが水を裂きながら次の獲物を求めて現れる。

後ろから追い回され、気づいた頃にはホエール・ガンが腹深くに食い込んでいる。数世紀に渡つて鯨油田にてに殺戮された海洋哺乳類の気分がわかるというものだ。だが、ボズゴロフ級はいくら殺してもランプを灯すどころか機械油による海洋汚染を助長するだけだ。わざわざ狩られてやることはない。

ロンド・ギナ・サハクは揺れ動くブリッジの中で、そばの柵にしがみつきながらも状況の確認に努めていた。とても艦長をしているとは思えないほど派手な装束に身を包んだ伊達男は、それでも艦長

の座にあることを許される。どれほど艦が揺れ動いつと、ギナは恐怖をその目に浮かべることはない。

それは写し身にしても同じだ。ギナのすぐ後ろ、同じような姿に同じような格好をした妹、ロンド・ミナ・サハクが床に座り込みながらも気丈に不敵なまなざしを崩していない。

「回頭はしないのか?」

「潜水艦はモビル・スーツのよつには動けないものだ」

船医の言葉をギナは聞き流す。

その場で回頭などしようものなら狙い撃ちにされる。大きく迂回して振り向こうとすれば艦隊の足並みを乱し、最悪衝突しかねない。この海域は浅く、元々潜水艦向きではないのだ。

そう、説明している余裕はない。一際大きな、明らかに魚雷の直撃を受けた衝撃がブリッジを揺らす。机上に置かれたペンが跳ね上がるほどの揺れが事態の深刻さを印象づける。

「右舷に被弾。弾薬庫を中心に浸水拡大!」

「隔壁、閉鎖しろ!」

「しかし、まだ乗員が!」

「潜水艦の約束事だ。このまま浸水を放置すればみなが死ぬ!」

クルーとの短いやりとりの中でもギナは歯茎が痛くなるほど強く噛

みしめる。格好つけるわけではないが、部下をみすみす死なせて喜ぶ指揮官などいない。

「右舷からバラスト水をブローしろ。左右で偏っている

破孔からの浸水が止まってくれることを祈るばかりだ。今は少しでも艦体の状態を維持し、敵から逃れる術を探さなければならない。

「ハイネ、戻れそうか？」

「敵に背中を見せることはできない。見栄というよりも現実的な問題としてな。やつら、今になつてガンダムを投入してきやがった！」

ハイネ・ヴェステンフルス。何とも覚えにくい名前の扱いものは今頃ΖＧΜＦ-23Ｓセイバー・ガンダムで大空を駆けていることだろう。白兵戦に特化したＧＡＴ-131イクシード・ガンダムをリーダーとして直掩にドッペンホルン・ストライクダガーで構成されるケツテと交戦中だと通信が届く。何とも優雅な空の旅だ。

「撤退を続けることで速度の速いモビル・スーツと母艦とが引き離される。そして戦線は縦に伸びる。典型的な陽動だな。敵の狙いは初めからボズゴロフ級だったんだろう。輸送船を失えばカーペンタリアは事実上陥落したも同然だ。そして、要塞を落とすことに比べれば潜水艦を沈める方が遙かにたやすい」

（分析感謝する、妹よ。だが……）

「思い通りにはさせんさ。グーンを出せ。艦の防衛に当たらせる！」

温存していたと言えば聞こえはいいが、この4年で急速に発展したモビル・スーツの中でただ水中で使えるというだけでしかない旧式でできることがあるだろうか。地球軍は高い汎用性から水中でも使用できるインテンセティガンダムの開発に成功している。

しかし、ザフトにはそのような機体を作ることはできないのだ。地球にとって、水中戦に優れた機体は攻撃にも本土防衛にも使用できる。だが、宇宙に本国を持つプラントにとって、水中で真価を發揮するだけの機体は攻撃にしか使用できない。

ザフトは地球にとって侵略者に他ならない。

ボズゴロフが沈めばカーペンタリアは輸送基地としての機能を大きく消失させる。それはすなわち事実上の機能停止にも等しい。そう、カーペンタリアは傷一つつけられることなく、陥落させられるのだ。

「何か手はないのか？ 何でもいい！ 誰でもいい！ 我々が反撃に打つててるだけの材料を与えてみせろ！」

部下の前で取り乱す。指揮官としてあるまじき行いを、ギナは抑えることができなかつた。目の前のコンソールを叩きつける音が、しかし警報、騒乱、艦を振り動かす音にかすれて消える。

(これ以上ボズゴロフ級を沈められる訳には……)

防衛師団に参加するラ・ヴ・クラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァのブリッジにさえ、ボズゴロフ級が轟沈させられる様子が、炎と黒煙が海

を這い、仲間たちを呑み込んでいく様子がモニターに映し出されている。

「レイ大尉は？」

「現在基地の防衛に当たっています」

防衛師団から戦力を割けばそれこそ敵の術中にはまることになる。わかつてはいたが、ではどうすればいい。

タリアは軍帽を深くかぶりなおした。少しでも不安が部下に伝わらないようにするための癖のよつたもので、他の指揮官はどうするのか知らないが、これがタリアなりの気分の落ち付け方もある。

「ルナ・マリア・ホーク軍曹、シン・アスカ軍曹はどうつか？」

またに藁にもすがるとほこのことだろ。正規市民でもないパイロットに何が期待できよう。

「ホーク軍曹、駄目です。身動きとれません。アスカ軍曹……！」

何でもないはずの報告である。たとえ戦闘中とは言え、そんなに手間取るような内容だらうか。クルーの不自然な報告の意図はすぐによくわかった。

「敵艦隊のど真ん中にいますー。」

大西洋連邦軍ビーコン級潜水艦。鯨体形の潜水艦は獲物を追いか

け回す獵犬のように浅海を進む。厚い水を通り抜ける陽光が光の柱となつて艦体へと突き立てられる。荒れる海面は泡を巻き上げ、美女の女神が生まれ得る情景にはほど遠い。泡から生まれた女神は、しかし戦神アレスの愛人である。

ここはまさに戦場と海であった。

潜水艦とは思えないほどけたたましい音をたて、パッシブ・ソナ－は打ち放題。船側から放たれた魚雷が泡を纏いながら急速に、高速に、無慈悲にボズゴロフ級へと突き刺さる。

戦神司る空赤き火の星に届けとばかりに爆炎と煙が立ち上り、恐怖と敗走が産み落とされる。戦場と海との間に。

光はただただ降り注ぐ。敵であるうと、味方であろうと構いなく。光は降りてくる。敵をめがけて、敵を目指して。

海を碎き、波を割り、泡を纏いながら光は降臨する。ミノフスキ－・クラフトの輝きを背負い、その手には1対の大剣。2歩の足がビー・コン級上甲板に立ち、鋭い2本の脚が突き立てられる。分厚い金属の装甲がひしゃげ、2本の剣が足跡として突き刺さる。突き刺さる。

潜水艦に立つ4足の獣。コクピットの中でシン・アスカは4足の獣のように猛る。

「沈め！ 沈め～！」

足が1歩前進すると、剣の脚が前へ。突き立てられ、突き刺さり、

深く、深く。また足が、脚が前へと動く。

剣が行進する。引き留める海の水を構いもしないで、傷口から流れ出る泡を嬉々と眺めながら。剣が進む。剣が歩む。

この艦にはあの方が乗つておられる。撃沈などもつての他。喧騒、騒乱、戦笛に至るまで静寂を乱すことさえ許されない。

「上の馬鹿を振り落とせ！」

インパルスが艦の上。中では黒い軍服 ファントム・ペインの証の指揮官が部下から一枚の紙切れを受け取っていた。粗末な紙に書かれた言の葉は、それだけで1人の指揮官を忠実な部下へと変える。

指揮官は、その口元を力強く歪めた。

「前部タンク、ブロー！ 上甲板カタパルト展開準備！ 総員、対ショック姿勢！」

こんな浅海で緊急浮上をしようとしている。そして、攻撃を受けている最中にわざわざカタパルトを開く。

それがどうした。マニュアル違反が何だ。

指揮官は自信に満ち、クルーたちの腕には青い腕章。この腕章こそが、すべてを物語る。

体が下から持ち上げられる感覚。緊急浮上する潜水艦に、シンの体はZGMF-56Sインパルスガンダムと持ち上げられていた。

突然体が軽くなる感覚。水面を突き抜け、水がインパルスの体からはがれ落ちた。

鯨体型潜水艦を地面とした大きな大きな下り坂。坂の下に指令塔がそびえ、その根本が開口していた。甲板が左右に開いて、カタパルトのレールがシンの、インパルスの足下めがけて伸びていた。

(こんな状況でカタパルトを開くなんて……)

誤作動。ついそんなことを思い浮かべる。潜水艦はすでに水平に戻ろうと前が沈み始めていた。このまま水に浮く状態に落ち着けば攻撃を仕掛ける好機になる。ビームは水中では使用できないが、通常なら桁外れの攻撃力を発揮する。

それが計画であり、その通りにできるはずだった。

カタパルトに光が灯る。何かが出撃しようとしている。潜水艦が水平に落ち着くよりも早く、シンが反応できるよりも速く。

何かが飛び出して来て、コクピットを光と衝撃が同時に襲う。フェイズシフト・アーマーに激突されたのだ。衝撃の一部が光として放出され、残りはインパルスとシンが引き受けになる。

吐き気を催す急激な拳動に光景がめまぐるしく変わる。インパルスが潜水艦の上から叩き出された。これくらいがわかる。目の前、

ゴーグル・タイプのデュアル・センサーにV字のブレード・アンテナ、どこかカンドムに近い顔をした機体が目一杯に映されていた。

(こいつに叩き落とされたのか……)

見たことはないが、その特徴は地球軍の新型GAT-X4ウインダムとして聞かされていたものと同じだ。こいつがカタパルトで加速した勢いのままインパルスに抱きついたのだろう。高度計ではすでに100mほどに達している。

潜水艦からはまんまと引き離された。それならもう目的は果たしだろう。いつまで抱きついているつもりだ。

ビーム・サーベルを発生させ、敵の背中を撫でるようにさるつもりで動かしにくい腕を、それでも動かす。新型とは言え量産機。ガンドムでさえ耐えられない攻撃に耐えられるはずがない。

撃墜できる。そんな予定は、破れた。

急に敵の姿が見えなくなる。腰の辺りを蹴られたようだ。衝撃に襲われ、敵はインパルスを足場にして飛び上がった。

舌を噛んでしまわないようじつかりと食いしばり、見上げるとこりにいる敵の姿を見る。

白い機体だ。ストライクダガーよりも装甲の起伏が激しく、どこか鎧を着た騎士のように見える。背中には1対の可動翼を持つ新しいストライカー シンには知る由もないがかつてGAT-X105Eストライクノワールガンダムが使用していたストライカーと同型のものである をつけている。

ワインダムは、まるで泳ぐようにひたすらと宙返りすると、自由落下を利用して加速する。敵は下にいる。見失う気はない。すぐにモニターで敵の姿を追い、そしてすぐに敵を追いかける。

そんな予定だった。それなのに、敵の姿はすでにない。眼下には曳光弾やビームの輝き、爆発の光ばかりで、戦場の光景しか見えない。

(一体どこに……?)

消えるはずもない。融けて消えてしまうはずもない。では、どうして落ちていった先にいない。シンがこれまでに培った戦闘経験が告げていた。自分は、確実に敵があの時間で移動できる範囲を見たのだと。

シンは、敵を、ワインダムを捉えられるはずだった。予測が予定とならない。この感覚を、シンはこの敵との戦いで3度経験した。

敵は、予想と予定をすべて上回つてくれる。

突然の警報が響く。異常接近を知らせのはずのそれは正しいはずがなくて、そして何よりも確かだつた。

モニターに再び敵の顔が一杯に映し出される。いつの間に、どうやって、やられる。いくつもの思いが邪魔をして動くことができない。ワインダムの蹴りがインパルスの腹部へ命中して、シンは自分の悲鳴に耳が痛くなるほどの叫びながら弾きとばされる。

出力はこちらが上。攻撃力も防御力も機動力も。コストと生産性

以外のすべてが勝っているはずだ。攻撃に転じれば勝てる。まだくらうとする頭に無理をして、シンはインパルスを立ち直らせるとともにアクセルを踏み込む。出力に比例して推進力を生み出すミノフスキーナー・クラフトが強い輝きを放ち、背中からインパルスを加速させる。

戦艦にさえ致命的な損害を『えるビーム・サーベルを、何故か動かない敵へと素直に振り下ろす。敵は再び上へと逃げた。今度こそ見逃さない。インパルスを後ろへと下げ、敵の動きをモニターに捉える。

モニターはしつかりと敵の姿を捉えた。それなのに、予定していたものは見えてはくれない。

ワインダムはほぼ垂直に飛び上がった。そして、ほぼ直角方向に突然向きを変えて見せた。AMBAC。能動的質量移動による自動姿勢制御。手足を動かすことで重心の位置を変え、推進剤を消費することなく機体を動かす。そんなモビル・スーシ操縦の基本テクニックがある。

それでも、どんな教官もどんな熟練兵でも機体を直角に機動させる方法なんて見せてはくれなかつた。

敵はまた直角に曲がって見せる。1度目は前へ、2度目は下へ。飛び上がったワインダムは、これでモビル・スーシとしてもあり得ないほどに小さい旋回半径でインパルスの後ろを通り過ぎて行つた。

反応できなかつた。左足がいつの間にか切断されている。

そしてまた敵は直角に機動する。3次元的に、どちらに動くのか

さえ予想できない。これまで、どんな機体もゆっくりと弧を描くように旋回していた。だからその旋回半径を感覚として覚えておけば敵の動く範囲が予測できた。こんな動き方をされれば感覚で敵の位置を掴むことなんてできるはずがない。

見えないはずだ。わからないに決まっている。敵は直線を複雑に何度も折りまげ、弾丸を思わせる速さでシンを意識を飛び越える。

「何なんだ、あんたは～！」

出力はこちらが上のはずだ。直線の最高速なら負けているはずがない。機体を逃がそうとミノフスキ・クラフトを輝かせる。インパルスを加速させると、まず、速度を高めようとすると。十分に速度が乗つていかない状態ではせっかくの性能が生かせない。

(速度さえあれば、負けないはずだ！)

戦場よりも高い空を飛ぶと、敵機が追いかけてくる。まだ速度が上がりきっていないから、引き離すことができない。敵がストライカーから根本で固定された銃身を起きあがらせるなり、レールガンが放たれる。見えている攻撃なら余裕をもってかわすことができる。

高機動を維持したまま、敵の放つレールガンをかわし続けることができる。そろそろ速度が上がってきたらどうか。

ウインダムが中程度のビーム・サーベル 恐らく、ストライカーに設置されていたのだろう を両手に一つずつ構えて接近していく。単純な攻撃力ではこちらが有利だ。ビーム・サーベルにはビーム・サーベルで迎撃すると、敵は弾けるように通り過ぎる。そして、例の直角カーブでまた強襲を仕掛けてくる。それをまた打ち返

す。

インパルスは十分な速度で飛行している。それなのに、敵は確実に追いつき、そして主導権を握ったまま攻撃を仕掛けてくる。

意味がわからない。単純な出力ならインパルスが上。それなら、速度の優位はインパルスになくてはならない。ふと、速度計を見る
と、せいぜい時速 100 km 程度。遅い速度ではないが、感覚と速度があつていなない。本当は、もつと出ていなければおかしい。

魔法でも何か使われたのか。考えをまとめている余裕はない。敵
は速度的優位を維持したまま、また急接近してくる。モビル・スー
ツの必要に擬人化された顔が急速に大きさを増してくる。

「うわああああ！」

思わず機体を大きく動かした。

その時、速度計が大きく戻った。軌道を曲げる時、パイロットに
大きな負荷がかからないよう、速度を落とすシステムがモビル・ス
ーツには搭載されている。インパルスは、攻撃をかわす度、いや、
攻撃される度に速度を落とさせていたのだ。

敵はさらに速度を上げたようにも思える。あんな無茶な機動をし
ているのに、速度はまるで落ちていない。恐らく、リミッターを解
除した上で、Gさえも計算に入れた完璧な操縦を実現しているのだ
らう。

（同じモビル・スーツでどうしてこんなに動きが違うんだ……）

疑問と言つよりも嘆きに近い。敵は、このウインダムのパイロットはシンよりも確実に強い。勝利する映像がいつまでも描けず、ただ敗北する現実だけが近づいてくる。

また敵の強襲をサーベルで防いだ。完全に防いだつもりだった。それなのに、左手に握られているサーベルは中腹で切断され、ビームは消失した。高機動戦闘の最中、折れた剣の先はすごい速度で回転しながら落ちていった。

もう機体の有利なんて問題にはならない。敵は圧倒的に強い。赤服を一応とは言え身につけるシンよりも、ザフトのガンダムよりも。

こんなパイロットがいるなんて信じられなかつた。目の前の現実が憎らしかつた。エインセル・ハンターは強いとアスランが言つていた。では、エインセルはこの敵くらい強いのだろうか、それとも、もっと強いのか。どちらにしても、シンよりも遙かに強いことになる。

絶望させてくれるほどの時間さえない。敵はすぐにシターン実際にはもつと鋭い方向転換をしている　して、すぐに攻撃を仕掛けてくる。

意識で戦つていては負ける。左腕のサーベルを敵へと投げつける。命中を確認していくには間に合わない。右腕に残されたサーベルを両手で構え、ただ迎え撃つために振り上げる。

作戦も何もない。ただ相手の速度に合わせて腕を動かしただけ。それでも、敵は意識と無意識のさらに先を行く。

放たれたサーベルをまるで通り抜けるような最小の動きでかわし

た。そうシンが意識した頃には、敵はすぐ目の前。振り下ろされる大剣を気にすることもなくインパルスの懷に入り込むと、両腕が肘の先から切断され、右足が切り取られていた。しかしこの認識さえすでに遅く、わき腹に入った敵の鋭い蹴りがインパルスを強く蹴り飛ばす。

悲鳴を上げる余裕さえなかつた。自分が吹き飛ばされていると気づいたことでようやく、悲鳴ともうめき声とも思える声が口から漏れる。そして、この意識さえ、やはりすでに遅い。敵は、すでに次の行動に移っていた。斜め下に落ちていくインパルスを追いかけて、現実離れした何かがモビル・スーツの姿をしてるみたいにシンへと迫る。

それから自分が何をしたのか、シンは覚えていない。ただ、自分に何が起きたのかだけは他人の記憶のようにかすかに頭に残る。

「クピットめがけて繰り出される攻撃。ビームの光が、光そのものが襲つてくるような錯覚。

上半身と下半身が分離するインパルス。これまで何度も命を拾つてきた分離機構が作動する感覚。

そして、確実に目の前の目標を失ったはずの剣が、それでもレッグ・フライヤーを切断する。偶然ではない。目の前で分離されたにも関わらず敵は一瞬の内に目標を切り替えて下半身を斬つたのだ。

（それならヒュスト・フライヤーだって、上半身だって狙えたはずだろ……。なのにどうして……？）

不自然な分離と急速な落下の勢いに、シンの意識はここで途絶え

た。

それからどれほどの時間が経ったのか。次に気づいた時には、インパルスの体はカーペンタリア湾の波に洗われていた。海は、とても静かだった。ついさっきまで空で激戦 少なくとも、シンにとつては大激戦であった を繰り広げていたことが嘘のように、空は青くて、波は穏やかだった。

インパルスは着水していた。きっと、墜落防止システムが働いたのだろう。ソード・シリエットのミノフスキー・クラフトが無傷であつたことがせめてもの幸いという奴だ。比重では水よりも軽いモビル・スーツは海水に浮く。傷口からの海水の侵入は少ないらしく、上半身だけになつたインパルスは仰向けになつて浮いていた。どこかやられたのか、今は動かすことができない。シンはそんな屍となつたインパルスの腹に座つて、空を眺めていた。

本当に、どこまでも空は深い。空を突き抜けて行った先に宇宙があるなんて想像もできないくらいに。

「戦いは……、終わつたみたいだな」

もうこうして2、3時間くらい漂つている気がする。遠くに聞こえていた戦いの音も今は聞こえなくなつていた。

ザフトは勝つたのだろうか。戦闘時間から考えてみると、きっとカーペンタリアは落ちていない。地球軍もボズゴロフ級を破壊したことを見土産に撤退したのではないだろうか。

「ボズゴロフか……」

シンがあのウインダムと戦うきっかけになったのも、ボズゴロフを少しでも守るうと無理に敵の潜水艦に攻撃を仕掛けたことだった。

あんなに恐ろしい敵は見たことがなかつた。もしも機体性能が同じだったら、あんな時間をかけずに、シンなんて瞬殺されていたことだろう。リミッターを解除した無茶な機動を、それでも完璧に制御できる技量と計算し尽くされた戦略。最後に見せた異常な回避術。そのどれか一つでもシンには手の届かない力だつた。

体は自然と丸くなり、膝を抱くように座る姿勢を変える。そろそろ口が落ちようとしていた。薄暗くなりつつある中、寒くないわけじゃない。それでも、震えはきっと、寒さのせいじゃない。

死にたくないとは思つても、死ぬことが怖いなんて考えたこともなかつた。味方なんていらないと思つたこともある。それなのに、今は1人でいることが怖い。

ザフト軍はたかが1人のアブディエルを探してくれるだろうか。そんなことは期待しない。それよりも、撤退中の敵軍に見つけられてしまふことの方が確率として大きい。

味方なんていらない。1人でいることにも慣れてる。でも、1人でいることがこんなにも無力だなんて考えたこともなかつた。

母さんはいつも仕事、仕事で家になんていてくれない。友達なんて欲しくもなかつた。ザフトでだつて、アブディエルは仲間外れにされる。それでもいい。それでよかった。それなのに、いまは震えが止まらない。

気づくと、日はすっかり落ちていた。そんな夜の闇を吹き飛ばし

て光が頭上からシンへとかかった。膝を抱く腕を解いて夜空を見上げる。するとそこには、光輪を背負つた白いガンダムが輝いていた。見間違ははずもない、NGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルがゆっくりと降りてきていた。

手を突き立ち上がって、光が降りてくる様を眺める。

「レイ隊長……！」

どうしてここに。まさかシンを探して。

「いつも簡単に見つかるとはな。おまえは運が強いようだな、アスカ軍曹」

レイ・ザ・バレルの言葉は、シンの震えを止めさせていた。

カーペンタリア基地に戻ったシンを出迎えたのは、異様な光景だった。左右に軍服を着た人々が並び、誰もが直立不動のまま道を作っている。すでに日が暮れたにも関わらずライトが惜しげもなく灯されて、シンが進む先、男が一人、シンを待ちかまえているように立っていた。

外套やローブのようにも見える上半身と下半身を同時に包むゆつたりとした服を着ている。長い髪がよく似合つ整つた顔をした男性の顔を知らないプラントの人間なんていないだろ？

ギルバート・デュランダル議長。その人物の名前に気づいた時、シンは思わず足を止め、左右を見回した。プラントの最高権力者が

自分を待っているはずなんてない。

すぐ後ろを歩いていたレイ隊長と田が合ひつと、その田はシンに落ち着きを促しているように思えた。

何が何だかわからない。ただ、気を取り直して歩き出す。何でもいい。ただ上官が目の前にいるならすべきことは決まっている。適度な距離まで進んだところで軍人として敬礼する。

「シン・アスカ軍曹。話は聞いている。この度は君の機転に救われた。ザフトを代表してお礼申し上げたい」

テレビでしか聞いたことのない独特の響きと力強さを持つ声。慣れた様子はない、しかし迷いのない動きでテュランダル議長は敬礼を返した。

「ザフトの英雄に

「敬礼！」

議長の言葉を誰かが繋いで、左右を囲んでいた兵たちが一斉に敬礼をした。单あるアブディエルにすぎないシン、ただ1人へと。

暗い夜空にいくつもの光の柱を立てて、スペングラー級MS搭載型強襲揚陸艦の広大な露天甲板に4機のインテンセティガンダムが並ぶ。そのどれもがシールドに青い薔薇を持つ。東アジア共和国のファントム・ペイン所属機が左右に2機ずつ並び、道を作り出す。

道の前にはネオ・ロアノーク隊長を初めとする主立つたパイロットに加え、ヒメノカリス・ホテルに連れられた子どもが2人。ステラ・ルーシェはヒメノカリスのそばを離れず、アウル・ニーダは自分の機体と同系の機体を興味深げに見上げている。

インテンセティたちはパイロットの降上を容易にするため、膝を折る。それぞれの機体からパイロットがハツチから伸びるロープに足をかけゆつくりと甲板に降り立つ。ヘルメットをかけていてもそれぞれ年齢も性別もバラバラであることがわかる。そのうちの1人を先頭に、残りの3人が後につく。

「ネオ・ロアノーク少佐は？」

先頭の1人　体格からして女性である　はヘルメットを外しながらそう訪ねた。外されたヘルメットから金髪があふれ出て、若い女性がその顔を露わにする。軍人らしい厳しい雰囲気をまといながら、その視線は柔らかい。

ネオが歩み出ると、女性パイロットは手を差し出した。

「白銀の魔弾とお会いできるとは光栄です」

「じゅうじゅう、白鯨ジエーン・ヒューストンの名前は聞いています

互いが自信を持つが故に相手を認めあう度量を持つ。ファンタム・ペインの隊長を任せられる2人は握手を交わした。

「通り名持ちのパイロットって本当にいるんだな」

「ほんの一握りだけだ。ファンタム・ペインにはどうしてもそんな

人が多い」

アウルの何気ない言葉に応えるのは姉であるヒメノカリス。実戦を経験したパイロットの中でも実績を重視して採用されるファンタム・ペインの性質は、ヒメノカリスの言葉に端的に著されていてた。

聞いておきながらアウルは興味をなくしてしまったらしい。めんじくわそうに類をかき、その指を4機のインテンセティガンダムが作る道の先へと向けた。

「じゃあ、あのワインダムのパイロットもそつなのかな？」

甲板を揺らし、白いワインダム 通常、ヒューリディッシュ青が配色されているはずが、この機体は白一色に塗装されている が降り立つ。かじづくように膝を折るガンダムの先に量産機。このおかしな光景に、アウルは、なんだよ、これと軽く吹き出す。

ワインダムもまた膝を折り、「クピットからは男が降りてきた。薄暗い中でも白いスースが照り返す。ガンダムに作られる回廊を赤絨毯の上を歩く王のように進む度、その髪が麗しい金髪で、瞳の青さが人々を捉える。

男の姿を確認した者から、ファンタム・ペインの面々が次々敬礼していく。あのお調子者のシャムス・コーナーでさえ軍の形式に則つた敬礼をしていた。

人物の正体を知らないアウルと、正対面の人には慣れないステラ。そして、ヒメノカリスだけが敬礼を怠つていた。

ステラを置いていくことになつても、アウルに気づかれることが

なくても。

ヒメノカリスは走り出した。ドレスが乱れることを構つことなく、その顔は恋に焦がれる少女のよう。

「お父様！」

愛しい人のその胸に飛び込んでその首に手を回して抱きつく。すると愛する父上はそつとヒメノカリスを抱き止める。王が寵愛する姫君をその腕に抱くように。

「寂しくはありませんでしたか、ヒメノカリス？」

そうして、黄金の玉座を持つ王は愛娘へ優しく囁きかける。

愛情と誠意。あなたはこの言葉に違和感を感じはしませんか。馬から落馬する。頭から頭痛がする。どちらも意味の重複です。だとすると、愛と誠は重複しないのでしょうか。愛情という言葉に誠意は含まれていないということなのでしょうか。

愛情は誠実を前提とはしていないということでしょうか。

愛情とは偽りをえ許容するということでしょうか。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「愛と誠」

ザフト。愛はそれでも、誠と結びつづけます。

第16話「愛と誠」

「ハイネ・ヴェステンフルス。見ての通り優秀なパイロットで、奇襲にさらされたボズゴロフ級からただ1人生還した勇敢な男だ」

ギルバート・デュランダルは、そうシン・アスカのほぼ向かい側に座る少年兵を紹介した。同じ赤服で、橙色の髪が特徴的な少年だ。その胸には十字架の形をした黒い勲章がかけられていた。シンの胸にも同じ勲章がつけられている。

鉄十字勲章。ザフト軍で功績のあつた兵士に送られる勲章を、シンは受領した。窮地に陥っていたボズゴロフ級潜水艦を狙っていた敵潜水艦にシンが強襲を仕掛けたことで敵の足並みは乱れ、結果、壊滅的打撃だけは逃れることができた。向かいのヴェステンフルス中尉が勲章を与えたのは、デュランダル議員の言葉通りその勇気を讃えられてのことだ。

ついヴェステンフルス中尉の勲章に気をとられすぎていた。議長が何か話していた気がするが、話はいつの間にかシンの話題に移っていた。

「シン・アスカ軍曹、いや、今は曹長だったね。優れた機転によつてカーペンタリアの窮地を救つてくれたのは彼だ」

その場の全員の人の視線がシンに集まり、シンは軽く頭を下げた。

この場はシンとヴェステンフルス中尉を祝うための晩餐会でもある。普通は見ないような細長いテーブルを挟んでザフトの兵隊が並んでいる。上座は当然議長だが、テーブルのほぼ真ん中の席はシン

「デュランダル議長が向ひて座つてゐる。

「緊張しないでくれとは言つても難しい」とは思つが、同じザフトの未来を担う者として、今日は親睦を深めてもらいたい

そんなことを言われても大半は見ず知らずの人ばかりだ。議長の前で羽目を外せる度胸のある人もいないらしい。簡単に見回したところ、みんな静かに食事をしていた。

兵士の多くは緑色の軍服で、シンのような赤服の方が少ない。せいぜい、シンとザフトのフルス中尉、それに隣で体を固くしているルナ・マリア・ホークくらいなものだ。

（あれで味なんてわかってんのかな？）

それから、ナイフとフォークの動きがぎこちない。

ともかく、多くが緑の軍服で、何よりアスラン・ザラもレイ・ザ・バル隊長の姿もここにはなかつた。シンが見知つた顔はタリア・グラディス艦長 指揮官として白い制服を着ている くらい。とはいへこの艦長とは普段仕事上の話しかしない。席が離れていることもあって話はできそうにない。

「デュランダル議長。この時期に何故地球へ？」

「君にはギルバートと呼んでもらいたいものだが、いや、すまない」

盗み聞きするつもりはなかつたが、静かな中だ。声は自然と聞こえてくる。元からグラディス艦長とデュランダル議長は隣り合わせとこつわけではないから、特に隠すつもりもなかつただろう。

デュランダル議長はナプキンで口元の汚れを落とすと、その視線を前に向けた。全員に聞かせる内容だと考えたらしい。

食べながら話を聞く訳にもいかない。まだほとんど食べていない魚料理から顔を上げて、まだ食事中の場合はたしかナイフとフォークをハの字に置いたはずだ。

「私が地球を訪ねたいと考えたのはこの世界の現状をこの目で見た」と考えたからだ。今、世界はエインセル・ハンター、ブルー・コスモスという悪意によって大いに汚されてしまっている。血のバレンタインから続く一連の紛争は、もはや戦争とさえ言えない」

シン以外の人たちも手を止めて話を聞いている。

「エインセル・ハンターの狙いとはプラントの根絶であり、そのためには味方を犠牲にすることさえ厭わなかつた」

「アラスカ基地のことですね？」

突然の声に、シンを含めて全員の視線が一人に集まつた。ルナマリアだ。

「あ、すいません。映画で、私も見ましたから……」

議長の言葉を遮つてしまつたと思ったのか、ルナマリアはばつが悪そうにしている。それを、デュランダル議長は笑つてすませた。

「いや、理解してくれて嬉しいよ。あの映画はセミ・ドキュメンタリーとしての役割も期待されているものだからね。戦争の現実を1

人でも多くの人に知つてもらいたかった

要するにプロパガンダだと認めているということだろうか。

「エインセル・ハンターが仮に勝利を収めた場合、コーディネーターはどうのうに扱われてしまうのだろうね。もう200年以上も前の話だが、ナチスドイツがアウシュビッツを初めとする強制収容所で行つたことを思い出すと、私は震えが止まらなくなる」

そのナチスドイツを止めるという大号令で進められたマンハッタン計画で作られた核爆弾が、血のバレンタイン事件で使われたことはどうなんだろう。

議長は立派なことを言つてていると思う。それでも何かがおかしい。そんな気持ちが心を離れてくれない。

「どうして地球の人々はエインセルのような男に力を与えるのか、私は理解に苦しむ。もしも正しき人が人々を導くことができたならそれはどれほど素晴らしいことだろうね。私は戦争が少しでも早く終わることを願つてやまない。それは、君たちも同じことだらう」

カーペンタリア基地を守り抜いた英雄を讃える晩餐会は終わつて、シンはルナマリアと休憩室のテーブルに座つていた。他に人の姿はない。ここは基地の中でも一部の人しか入れないような場所で、気のせいいか椅子の座り心地がいいような気がする。

本当ならアブディエルになんて入れない場所で、シンは勲章を眺めていた。実際鉄が使われていると思われる勲章は手に重く、鈍い

光沢が妙に視線を引いてくる。

「エイブス隊長たちが欲しがつてたの、きっとこれなんだよな……」

新造コロニー、アポロンで命を落とした仲間たちは、勲章さえも
らえれば本国への帰還が許されると、除隊が許可されると信じてい
た。シンの手にかかる重さは、とても命をかける価値があるとは思
えないほどに軽い。

「隊長たち、それが欲しくて無茶してた。シンはそんなことないと
思うけど、もう無茶はやめた方がいいよ」

わかつてゐる。そんな返事をしておぐ。マッド・エイブス。アーサ
ー・トライン。アビー・ワインザー。みんな死んでしまった。アブ
ディエルなんて呼ばれたくなくて、市民権が欲しくて無理をして。
そんな人を何人も見てきた。

勲章を握りしめる手に自然と力がこもる。

「でも、アブブディエルでも頑張ればちゃんと認めてくれるってわ
かって、ちょっと安心かな」

まだ。デュルンダル議長の時も感じた正体のわからない違和感
を、どうしてだかルナマリアからも感じた。

ルナ。そう呼びながら顔を上げる。同じテーブルに座る仲間を見
るつもりで、しかしあの視線はそれよりも先に休憩室の外に吸い
寄せられた。

廊下を横切つた誰か。桃色の残像が網膜にこびりついて離れない。

無意識に体が動く。立ち上がった勢いで勲章が手から落ちた。甲高い音がした。鉄の十字架は床にでも落ちたのだろう。

「ヒメノカリス……！」

ルナマリアが止める声を聞き流す。テーブルにわき腹をぶつけた痛みもかまわないでシンは走り出した。休憩室を抜けて廊下を曲がる。すると桃色の後ろ姿が、オープで出会った少女の後ろ姿が見えた。

地球軍にいるはずのヒメノカリスがどうしてこんなところにいる。そんな疑問は、ついさつき少しだけ見えた横顔に塗りつぶされる。見間違えるはずなんてない。

「ヒメノカリス……」

名前を呼んで、その肩に手をかけようと手を伸ばした。その手を誰かが掴んだ。手をひねられる。走っていた勢いさえ殺されて、気づいた時には壁に押しつけられていた。

シンを壁に押しつけているのも女性である。切れ長の目をしてただでさえ厳しい印象を受ける人なのに、さらに睨まれている。体格に恵まれているとは言えないシンを、それでもしっかりと押さえつけている。

ヒメノカリスはこの女性をマテイスト呼んだ。

「マテイスト。その方に敵意はありません」

マテイストは明らかに疑いの眼差しをシンに向けた後でようやく解

放した。

以前聞いたのと同じ声をしていても、何か雰囲気が違う。鮮やかな桃色の髪をしていて、瞳は青くて。それでも、彼女は微笑んでいた。ヒメノカリスと同じ顔で、それでもヒマノカリスは微笑みを見せてなんてくれなかつた。

見とれているのか、それとも呆然としているのか。何にせよ、シンはまだ壁によりかかつたまま少女を見ているしかなかつた。

ルナアリアが追いついて来たのはちょうどそんな時だつた。

「ちょっと、シンー、勲章……」

勲章を持つてきてくれたのだろう。では、どうして急に困惑つか。シンが少し関心を持つて振り返ろうとしたところでの、ルナマリアは素つ頓狂な声をあげた。

「この人……、いえ、この方、ラクス様よ！」

ルナマリアを見ようとした時とは比べものにならない早さで少女へと首を戻す。

ラクス・クライン。この名前を知らないプラントの人間なんていない。歌姫で、アスラン・ザラの恋人で、映画じゃプラントを導く女神のような人。今では市議会議員として政治活動さえ行つていて、ヒメノカリスとは違う。

「すいません、人違いでした……」

ではこのマティスとか言う女性は護衛かその類だろ。いきなり見ず知らずの男が走つてくれれば取り押さえもする。

もう休憩室に戻ろ。そう足首を曲げた時のことだ。

「ヒメノカリスを、妹を知つているのですか？」

妹。その言葉の意味を頭に入れる前に、ラクス議員はシンに微笑みかけた。

「少し、お話ししませんか？」

「フォイエリヒの修復には相応の設備が必要ですね」

小惑星フィンブル落着の際、傷ついた体を構うことなく大気圏突入を行つたZZ-X300AAフォイエリヒガンダムは全身が傷つき、まったく修復されないままの姿をさらしていた。

本来の主であるエインセル・ハンターに看取られるようにな。

「ごめんなさい。私が、壊しました」

エインセルの傍らに立つヒメノカリス・ホテルは桜の木を折つた子どものように伏し目がちにうなだれる。普段感情を顔に出すことのないヒメノカリスとて、父の前では表情を作る。

そんなしおらしい愛娘の頬を手を添えて、ヒメノカリスが顔を上げる時節にあわせて、エインセルはその澄んだ青の瞳で見つめあつ。

「私は喜ばしいと考えています。フォイエリビがこれほど破壊されながら、ヒメノカリスが無事であったのですから」

頬に触れる父の手を包み込むように手にとつて、ヒメノカリスはただその優しさに身を委ねようとする。しかし、ここは公共の場である。誰が何を見ようと咎められることはない。

「お姉ちゃん……」

ステラ・ルーシュからかけられた声に、ヒメノカリスは名残惜しげに父の手を外してその姿を探す。すぐそば、軍人としてあるまじき位置にまで接近されていたことに、ヒメノカリスは瞬きをほんの数回。父以外には機微を見せようとしないこの少女にとつて精一杯の驚きを見せた。

ステラは体を小さくしてヒメノカリスの方を見ていた。正確には、エインセルのことを見ないようにしている。人見知りの激しい妹のために、ヒメノカリスは父を手で示した。

「ステラ、この人はエインセル・ハンター。私のお父様」

名前を知らないはずがない。世界でこの名前を知らない人を探す方が難しいだろう。

人見知りと知名度は関連がない。ステラとしては大切な、唯一頼ることができるのは姉をとらってしまう不安も手伝つてエインセルの顔

を見る」とやえでできないでいる。

「その、あの……」

エインセルの背は高い。少しががんでもみせたところで、その顔はステラの上にある。視線を伏せたステラと視線が交わることなどないはずだった。ただエインセルが手をかざしただけで、その前提は根底から崩壊する。

白く大きな手。力強さを想起させるにはしなやかで、しかし弱さを体現するには不釣合いな自信に満ちた動きを見せる。そんな大きな手が、ステラの前髪をそつとかき分けた。開けた視界に吸い寄せられるように見上げたステラの瞳を、エインセルは柔らかな微笑みで受け止める。

「元々あなた方エクステンデッドは戦闘要員ではありません。それによく耐え、頑張ってくれましたね、ステラ」

手はそのまま握手を求めるようにステラの前にさらされる。視線は伏せたり上げたりを繰り返す。ステラは恐る恐るといった様子で両手をゆっくりと、添えるようにエインセルの手を掴む。

手を通して伝わる体温と内からあふれる確かな力強さ。ステラの一拳手一投足をすべて受け入れてくれるようエインセルは微笑みを絶やさない。

まるで巨樹の木漏れ日のように。とても大きいのにまるで威圧的でなくて、優しささえ感じられる。姉と慕うヒメノカリスが慕う父と、ステラは視線を合わせることを恐れることはなくなっていた。その優しさを確かめるようにエインセルの手を離さないステラ。それを

どこまでも受け入れる度量を見せるかのようにエインセルは微笑みを絶やすことはない。

そんな2人の交流の様子を、ヒメノカリスはただじっと眺めていた。瞬きすることなく、その瞳に深い色をたたえながら。もはや相手が自分の妹である事実など関係ない。

「ヒメノカリス、エインセル兄さんに近づく女性すべてを敵視する癖、そろそろいい加減、治した方がいいと思うよ……」

ちょうどそばを通りかかったネオ・ロアノーケの言葉である。サングラスに隠された目を除いてさえ、呆れ顔がわかるほどである。もつとも、惰気に憑かれたヒメノカリスは、義弟にして叔父が通り過ぎるまで何ら关心を払うこととはなかった。

ネオと入れ替わるようにしてアウルが、肩をかすめることほどの距離でネオとすれ違う。足音を響かせ、子どもらしく、わかりやすい不機嫌さを示している。

「ヒメノカリス姉ちゃんの父さんとか聞いてるけど、ここは格納庫だぜ！ 民間人が入ってくんない！」

ステラと握手を交わすエインセルへと音が聞こえそうなほど力強く指さす。青き薔薇の王へと向けられたその指は、しかし姫君によつて絡めとられる。ヒメノカリスが真顔でアウルの人差し指を握りしめる。

「アウル。人には優先順位というものがあるの。私の場合、最上がお父様。あなたは二の次。お父様に口答えはしないで」

とても静かな声だつた。抑揚も感傷もない。澄んだ風ほども感情が含まれていない声は、すなわちアウルへの一切の気遣いが放棄されたことを意味する。

「そう言ひことはもつとすまなさそつとか、言つにへそつて言つてくれよ！」

無理矢理掴まれた指をふりほどくと、アウルはエインセルを露骨に睨みつける。結局、アウルもステラと同じである。子どもであり、大切な姉がどこからともなく現れた人間にとられてしまつことに怯えているのだ。

「なあ、おっさん。あんた強いんだろ。なら、俺と勝負しようぜ。模擬戦でやつをさ」

手を離す。すでに握手できないことに名残惜しさを仕草として見せるステラから離れ、アウルを止めようとするヒメノカリスをほんのわずかな手の動きで制する。

エインセルはアウルと向かいあわせた位置にしつかりとした足取りで立つた。

「アウル・ニーダ。決闘の申し出、お受けします」

格納庫に放置された資材を椅子代わりに整備員から非番のブリッジ・クルーまでもが飲み物片手にくつろいでいる。格納庫に用意されたモニターはGAT-04 ウィンドーム、GAT-X255 インテンセティガンダム汎用型にコードで繋がれ、互いのメイン・モニタ

ーの映像が映し出される手はずになっている。狭い格納庫内で実際に機体を動かすことはできない。シミコレーターを使う。アウルとエインセルを選手として、その他大勢の観客が見守っている。

ロアノーク隊の面々もその他に含まれている。

「どうちに賭けます、副隊長殿？」

普段から飄々としているシャムス・コーヴは当然のように胴もとを買ってでた。手には賭けについて書かれたメモらしきものを持ち、副隊長であるアーノルド・ノイマンの元へと来ていた。

座つたまま、アーノルドは困ったように笑う。

「僕は賭事はしない主義なんだけど、オッズくらいは興味があるかな？ 今、何対何だい？」

「エインセル代表が1倍で、坊主が169倍……」

あまりの惨状にその場にいた誰もが言葉を失つた。シャムスがサングラスをかけなおすように指で押す。この博徒自身も現状をわきまえていない訳ではない。

「……賭が成立してないじゃない」

ミコーディー・ホルクロフトが呆れたようにため息をつくその横で、どこの觀艦式に参加しているのかと尋ねたくなるほど堅苦しい姿勢を崩さないのはスウェン・カル・バヤン。シャムスはスウェンの肩を強く掴んだ。

「スウェン、今度はお前が行つてこい！ たぶん100倍を切れる！」

決して賭けが成立するとは言わない同僚を一瞥してから、スウェンは視線をモニターへと戻す。まだ戦いは始まつていない。

「断る。勝てない戦いは挑まない主義だ」

「エインセルさんて強いの？」

作務衣、軍服ばかりの格納庫の中でミリアリア・ハウだけが私服のままスウェンたちと並んで座っている。戦闘そのものにはあまり興味がないらしく、頬杖をついたままモニターの方を見ている。

「これなら象と蟻の方がまだ賭が成立するくじこそ、ミソイ」

シャムスはミリアリアとスウェンの間に入り込むように座ると、ミリアリアの肩を抱こうとする。その手は当然のようにミニアリアによつて叩き落とされた。

格納庫から離れた休憩室。女性3人がお茶を嗜んでいる。ヒメノカリスがとてもリラックスした様子でテーブルにつく。そのテーブルの上では真紅が映像の中にご丁寧に椅子とティー・セットを表示させていた。ただステラだけがどこか落ち着きがない。

「ねえ、お姉ちゃん？」

「何？」

あくまでも冷静なヒメノカリス。

「アウルと、エインセルさんの戦い、見なくていいの？」

真紅はティー・カップを置くと、その小さな唇からは吐息がこぼれる、ような映像が投影された。

「ステラ、あなたは太陽が東から登ることを毎朝確認するかしら？」

少し考えてからステラは首を大きく左右に振る。

「しないと思つ」

「それと同じこと。太陽が東から上るようになると水が低いところへ流れるように、人は自明のことわざを確認しようとは思わないものだわ」

真紅は再びお茶を口に含む。この小さな貴婦人も白薔薇のヴァーリも、2人の男の戦いにまったく興味を示すことはなかつた。

通された部屋は、質素で、それでいてどこか気品があつて。言葉では説明できないが、とにかくラクス議員と同じで静かな気迫がある部屋だった。ただソファーが置かれているだけの部屋なのに。

ソファーは1つしかない。シンとルナマリアは客人としてソファーに座らされていた。ラクス議員は立つたまま、かごに入れられた鳥と戯れている。ルナマリアなんて有名人を前に緊張しているとい

「うの」。

「気を楽にならうでくださいな」

小さな笑い方もヒメノカリスとラクス議員は違う。ヒメノカリスとは一度会つだけで、笑顔なんて見たこともないが。

「私はラクス・クライン。シン・アスカ様のことは耳にしています。あなたのお名前を、お聞かせくださいませんか？」

ラクス議員はシンの胸の勲章を見てから、シンの隣に座るルナマリアへと視線を移した。

「ル、ルナマリア・ホークです！ その、ご尊顔承り、光榮至極。この上ない榮誉と……」

立ち上がり、慣れているはずの敬礼が不自然に見えた。ルナマリアがどれほど緊張しているかよくわかる。全身筋肉痛かと思えるくらい動きが固い。

「気を楽にならうでください。映画の私と現実の私は違います。實際は議員の末席を任せられている小娘にすぎません。あなたのよう命をとしてまで戦うことの方がどれほど尊いことでしょう」

「！」、光榮です！」

あくまでも落ち着いているラクス議員に比べるとルナマリアの慌て方がよくわかる。敬礼をしたまま、座るどころか動こうとさえしない。そんなルナマリアのすぐ脇でシンは座つたままだった。

「あの、ラクス、さん……」

「はい」

「ヒメノカリスのこと何ですけど……、妹って……？」

かごの鳥が鳴き始めた。とても綺麗な声で、それでいてかすての歌姫の声を邪魔することもない。演奏が、歌手の歌を引き立たせることと同じで。

「それを語るには、まず私たちの悲しいお話を聞いていただきなければなりません。ラクス・クラインは一人ではないのです」

ふと思いついたのは翠星石のことだ。あのお人形も髪が白くて瞳が赤いことを除けばヒメノカリスとラクス議員とも同じ顔をしている。何か関係があるんだろうか。

「私たちはプラントの未来を担うべく、命を分け合ひ、それぞれが異なる役割を演じができるよう力を授けられました。ヒメノカリスと私は同じ命に基づく命として、同じ顔と姿を有しています。私は政治を、ヒメノカリスは戦いを得意とするように」

人は生まれながらに使命を持っている。こんなことを言っているのではなくて、そういう風に遺伝子を調整されて生まれてきたというのだから。

ラクス議員は少しだけ嬉しそうに、少しだけ悲しそうに話してくれる。

(何なんだ……、この嫌な感じ……)

何か具体的に不愉快なことがあるわけではない。正規市民というだけで反発するほど子どもでもないはずだ。それでも、どうしても嫌な感覚が消えてくれない。普段は何とも思わないルナマリアの声にもつい軽く苛ついてしまう。

「それじゃあ、ラクス様と、その、ヒメノカリスさんは姉妹だってことですか？」

「はい。ところが、私たちは引き離されてしまいました。ブルー・コスマスの手によって。C・E・61・2・14。あの日、あの場所で」

自分の誕生日を知らない人はいてもこの日付を知らない人はない。「血のバレンタイン事件」。プラント、ユニウス市第7「ローニー、ユニウス・セブンが核攻撃にさらされた事件は、ブルー・コスマス主導で行われたとされている。そして、エインセル・ハンターはその組織の代表を務めていた。

シンの頭の中でパズルが組み上がっていくに連れて、ラクス議員は悲しみの方が増しているように見える。さつきまでは、まだ妹のことを嬉しそうに話す姉の顔があつたのに。

「私も、そしてお父様も必死でヒメノカリスを探しました。努力が失望に変わり、失望は、やがて絶望へと成り果てました。ヒメノカリスがブルー・コスマスに、エインセル・ハンターの娘として生きていることを知った時のお父様の嘆きがどれほどであったか、おわりにいただけますか？」

「ヒメノカリスさん、もしかして利用されてるんですか？」

さすがのルナマリアももう敬礼してはいない。代わりにシンが動けないでいた。ヒメノカリスとはまだ一度会つただけ。しかし見知らぬ間ではない。そのことが混乱の原因になつていいのだろう。

今度見えるのは妹を利用されている姉の怒り。

「エインセル・ハンターはヒメノカリスを戦場に送り出しています」

大西洋連邦軍に所属していると言つていた。シンは体に力を入れることなく考えることに集中しようとした。もつとも、そんな時間はなかつた。

「シン様。あなたがどこでどのようヒメノカリスと知り合つたのか、お聞かせくださいませんか？」

今のラクス議員は、妹を心配する姉だらうか。

「俺は、オープでした。ちょっと前に寄港した時、慰靈碑の前で……」

やつぱりおかしい。あの時のヒメノカリスはとても強そうな人だつた。ステラとか言つ妹 似てないから、きっとラクス議員の妹ではないのだろう を守るうとしていた。

「やはり、戦場にいたのですね……。妹は、どのような様子でしたか？」

目の前に父の命を狙う男がいるのに、その父親こそがシンの仇だと教えてくれた。ただ自分の利用する相手にちょっとした復讐がし

たかったからとは思えない。とてもまっすぐな瞳を持つ人だったから。どうしても、ラクス議員の妹と、シンが出会ったヒメノカリスが一致しない。

「どうつて……、その俺の一方的な身の上話を聞いてくれて、エインセル・ハンターが、俺の母さんの仇だつて教えてくれました」

「ヒメノカリスは、優しい子のままでいてくれたのですね」

まるでその喜びを示すように鳥が大きく高い声で鳴いた。

「私、ブルー・コスマスだつて、エインセル・ハンターだつて倒して妹さんを取り戻してみせます！ ねえ、シン」

「ああ……」

熱っぽくて、それでいてどこか楽しそうだ。ルナマリアがアスラント、映画の中の英雄に出会つた時と同じ顔をしている。ついていくことができない。まさかそれは、シンだけがいまだに座つたままだということと何も関係ないはずなのに。

「シン様にとつても、エインセル・ハンターは仇なのでしたね。エインセル・ハンターはあまりに多くの悲しみを振りまきました。シン様の願いが成就されること、世界が喜びに満ちる日を、私は願っています」

まるで映画の中のようだ。悲しみや戦うことの正当性を主張するお姫様と、それに同調する戦士。たつた1人の戦士だけでも部屋が熱気に覆われたような気もある。

こんな中でシンは、どうしても映画の中には入れないでいた。

ヒメノカリス・ホテルについてシンが知っていること。それは、ラクス・クラインの妹で、エインセル・ハンターの娘で、ステラ・ルーシェという妹がいる。

たつたそれだけだ。

何も知らないに等しい。ヒメノカリスのことも何もかも。

JJJはZGMF-565インパルスガンダムのコクピットだ。これまで使っていた機体はGAT-04ウイングダムとの戦いで破棄せざるを得なかつたため、新しく支給されたものだ。手に馴染ませるように操縦桿を握る。まだ新品であるためか、若干の堅さがあつた。

思えば、単なる外人部隊でしかなかつたシンがアスラン・ザラに出会い、特殊部隊にいることが認められたのは、すべてあの時が始まりだつた。

新造コロニー、アポロン。まだ建造途中のコロニー蓋が閉められておらず、筒の状態だった一の強行調査に行って、そこで仲間たちを失つた。ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムを見たのもその時だ。

(もしかすると、あれ、ヒメノカリスが乗つてたのかもな)

それでもシンはフォイエリヒガンダムを撃墜することができなかつた。仇ははるかに高い場所にいる。4年前、シンが見上げた空に

黄金のガンダムが輝いていたのとまだ何も変わっていない。

仇なんてとれるのか。仇をとつてどうする。母さんが喜んでくれる。母さんを喜ばせたいのか。母さんを喜ばせてどうする。これまでもしてきたことをまた繰り返していくつもりなのか。

母さんに言われるまま。

コクピットは薄暗い。ハッチは閉めていないが、格納庫のどこからでもシンの顔を見ることはできないだろう。だから、歯を強くかみしめているのを知っているのはシンだけだ。

母を憎んでいると知っているのはシンだけだ。

場の雰囲気を完全に無視した声が聞こえてきたのは、本当に突然のことだった。いつたいどうやってコクピットに入り込んだのか、コントールの上にプロジェクターが置かれている。もちろん、翠星石の姿が投影されている。

「どうしたですか、ちび人間？」

赤い瞳を持つヒメノカリス、翠星石が届託のない笑顔でシンを見ていた。つい体から力が抜ける。その顔に悩まされていふと言つてしまいたくなる。

「君には関係ないだろ」

「聞いたですよ、ウインダム相手に負けたってこと」

今度はとても意地悪そうに笑う。ヒメノカリスはこんな顔絶対に

見せない。

「用がないならいいだろ」

どうやつて「クックピット」に入つたか知らないが、いくら本体が1.8mを超えるモビル・スーツであつても、プロジェクター自体は人の手で簡単に動かしてしまえる。シンは翠星石を摘みだそうと手を伸ばした。

「お母様の仇、討ちてえですか？ エインセル・ハンターに勝ちてえですか？」

「この言葉を聞かされるまでは、手が体」と止まる。乗ってきたと考えたんだろ？ 翠星石の行動は早かつた。

「仕方ねえです。翠星石が一肌脱いでやるです」

両手を腰に当てて、わかりやすく胸を張る翠星石。操作なんていらないはずなのにコンソールが点灯し、ハッチが閉まつっていく。翠星石の仕業に決まつてる。

「勝手にシミュレーター起動するなよ」

「ちび人間に見せてやるです。フォイエリビを使つたエインセル・ハンターの力を。ちびるでねえですよ」

モニターには宇宙空間が展開されている。ちょうど正面のモニターには、だいたい100mくらいの場所にフォイエリビガンダムが徐々に形作られていく。

「Hインセル・ハンターのデータがあるのか？」

「当然です。翠星石がフリーダムやつてた頃、ゼフィランサス・ナンバーズとはみんな戦つたです。見たくねえですか？ お母様の仇が、C.E最強と謳われた力が」

シンの返事を待つことなくフォイエリヒは完成していた。機体の状態を示すモニターにはインパルスがソード・シルエットを装備していることを示している。翠星石が元々パイロット・サポート・システムであるということだが、何となく本当のような気がした。

「優しい翠星石に感謝するですよ、ちび人間」

いや、やっぱり嘘か。

つい先程までの喧噪が嘘のように静まり返った格納庫の中で、コードを引きずる音が聞こえる。子どもの胴くらいの太さのコードを、アウルが脇に抱えて運んでいた。長くて、とても引きずらずにはいられない。各種ケーブルが目一杯詰まったコードを力むための声を出しながら運んでいるのだ。

格納庫の床から生えている装置の前まで来たところで、真紅が声をかける。

「そり、それをここに繋ぎなさい」

装置の上　アウルの背よりも少し大きい　から重つてくるから思いつ切り上から田線だ。渋々指示に従つて装置とコードをつない

でも、つこ口を滑りさせ。

「何で俺が『こんなこと……』

「口よりも手を動かしなさい」

(エリの口ひもこおばさんだよ)

今度は口にしなかつた分だけ賢くなつた。装置に音がするまでロードを押し込む。これでいいだろ？

「せひ、 できたらね」

「次は私を『ククピット』まで運んでみようだー」

別に言つてもうこいたいわけじゃないが、『苦勞様の『言へりこべれてもいこんじやないだろ？』が。

(こなこと言つても無駄だらけどな……)

もうこの赤い瞳の少女の性格はわかつたような気がする。いちいち反抗しても勝てないと、アウルは円盤型のプロジェクターを手にとつた。もちろん、持ち方が荒っぽいと怒られた。乗降用のロープにつり上げられている間、そんな不満が顔に出たのだらう。真紅はすました顔で、ますますアウルの機嫌を損ねてくる。

「アウル、エインセル様に10連敗をきして泣きついてきたのは誰だったかしら？」

あれは、いつごと出でたとしてアウルは言葉にするじとをやめた。

シミコローターではアウルがGAT-X255インテンセティガンダム汎用型を、エインセルがGAT-04ウェインドムを使用していた。機体性能のせいにもできなければ、まぐれと言つ切るには10連敗は痛い。

何も言い返すことができない。アウルはコクピット・ハッチをくぐり抜け、シートに座るまでいろいろいわけを考えて、ことじこと失敗していた。結局、プロジェクトをコンソールの脇に置くまで何も言い返すことができなかつた。

「ほりよ。それで、本当に見せてくれんだらうな？」

「私はオーベルテューレとしてフォイエリヒとの戦いを経験したものよ。あなたにはそれを見せて上げるわ、アウル。夢のような悪夢と恐れられた魔王の力を」

「クピット・ハッチが閉まり、あたりが暗くなる。モニターや計器の明かりで自分の姿を確認できる頃には、すでにシミコローターが立ち上がつていた。何もない虚空空間で黄金の輝きを持つガンダムがアウルの前にいる。

「……嘘だ！ こんな動き、人間にできるわけない！」

シミコローターは起動からわずか13秒で停止していた。システムの不具合によるエラーではない。この事実を、シンは信じきれずにいた。

設計そのものは10年前と言われるΖΖ-X300AAフォイエリヒガンダムにわずか10秒で撃墜された。いや、撃墜されたらしい。

自分は何もできなかつた。これだけがわかっていること。

敵は何をした。これがわからないこと。

翠星石は威張るでも余裕でもなく、ただまじめな顔をしてシンを見ている。

「認めるです、シン。これが魔王とまで呼ばれたプロト・ドミナン

トの力です」

これがエインセル・ハンター。これがフォイエリビ。

「あれで手抜いてたつて言うのかよ……」

見て知つていたはずの力だった。

モニター画面は暗い。つこつき、心中で真紅に文句を言つてシミュレーターを動かし始めたばかりだった。

ただアウルはエインセルを知つていた。だから、信じられないとは思わない。これから登ろうとしていた山の高さを呆然と見上げることはあつたとしても。

「EJの無窮の世においてさえ最強と賞揚されるエインセル・ハンター。その力に、一朝一夕でたどり着くことができるとは思わないこ

とよ、アウル」

真紅は椅子に腰掛け紅茶を飲んでいた。機械としてまったく意味のない映像であっても、今のアウルにはつっこみを入れるほどの気力は残されていなかつた。

客人を失つた私屋にて、鳥の奏でる声楽に感興そそられる姫君が無邪気に鳥かごを撫でる。

この部屋には2人の騎士と1人の従者。

アスラン・ザラはこの部屋の中で唯一の調度であるソファーの背もたれに手をついて体を支えている。その様子は、この部屋の空気に打ち解けているようにも見えた。

「ラクス、確かにシンは頑張つてゐる。ただ、シンが君の興味を引く相手とは正直思えない」

「尊母を失い、家郷を捨て、ただ刃と、ただ剣となつた。すべてはクライン家1000年の夢のために」

「シンは子どもだ。それに、ただの移民で単なるコーディネーターだ。計画に何にも関わることはできない。違つかな?」

「私は、この子がどこで生まれ、どのような方に来たのかを知りません。それでも、私はこの子に愛情を注ぎます。この子の清らかな声が私の心を慰めてくれるからです」

鳥の声を聞きながら、アスランはこれ以上姫にお伺いを立てるこ
とはない。代わりにレイ・ザ・バレルが、もう1人の騎士が動いた。

部屋の隅、壁から背を離そうとしないレイ。そもそも、部屋の中央に
近寄ることを忌避しているように。

「聞きたいことがある。エピメティウム・エローを殺させたのは、
プラントなのか？」

Eのヴァーリにしてダムゼル。公式には事故と発表されたこの事
件を額面通りに受け取るものなどここには誰もいない。2人は眞実
を知っている。2人は、眞実に近すぎた。

姫は獣と戯れ、よつて、従者が代わりに応える。マテイス・クラ
インは、姫とも騎士とも一定の距離をあけてたたずんでいた。レイ
に向かつて答えているはずが、その視線は何を見ているでもない。
レイもまた、マテイスを見てはいない。

「13枚のカード。しかしそれがクライン家1000年の夢を妨げ
るのだとしたならば、破いて捨てなければならない。ヴァーリもド
ミナントも、ダムゼルでさえも例外ではない。そうでしょう、エー
スのアスラン、セブンのレイ」

マテイスの手から床に捨てられた1枚のカード。トランプのカー
ドで、4隅にハート、ダイヤ、クラブ、スペードがすべて描かれた
特殊なもの。数字は5。Eのヴァーリであるエピメティウム。そし
て、Eは第5のアルファベットである。エピメティウムを象徴する
カードにナイフが突き立てられた。ナイフを投げ落としたマテイス
は楽しげでさえあった。

ファースト・ディミナント、レイ・アスラン・ザワ。

セブンス・ディミナント、レイ・ザ・バレル。

「さしつけ、キングはエインセルってところかな？」

エースの言葉にマティスは答えない。答える必要がなく、沈黙は肯定へと導かれる。

軽く息を吹く。ただこれだけで、アスランは命を狙われているという事実を帳消しにする。ソファーから手を離し、マティスを見ないまま、ラクスへと視線を送る。

「ラクス。俺は君を裏切らない。シンのことは、君の言つとおりにしよう。レイもそれでいいな」

レイは答えない。アスランも答えを望まない。誰もが心得ていた。沈黙が答えになるのではない。答えなど、はじめから定められている。答える必要はなく、答えを聞く必要がない。

アスランは今ここですることはないと歩き出す。レイもまた、ここに長くとどまる」とを望まない。しかし、レイはすぐに歩きだそうとはしなかった。部屋の扉を開けるアスランの背を見送りながら、誰に聞かせることもなく囁く。

「あいつは、俺と同じだ……」

シン・アスカ。レイ・ザ・バレル。この2人に共通することを誰も知らない。レイのこの言葉を誰もが耳にしなかつたことと同じく。

正義とは相対的なもの。絶対の正義もなければ絶対の悪もありません。母国の栄えの為に隣人を殺し、護国と語り富と資源を独占する。あなたの正義はあなただけのものです。あなたは人の正義を悪と見る。他の人があなたにそうすることと同じように。

あなたは正義です。たとえ、他の正義すべてを敵にしたとしても。あなたは正義です。たとえ、それを認めるのがあなただけとしている。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
nE inbrechers

「ナルシス・ノワール」

戦争。敗者は正義さえも奪われる。

第17話「ナルシスノワール」

NN-X3Z10AZガンダムヤーテシュテルンの放つ2筋のビームがGAT-01A1ストライクダガーのシールドを吹き飛ばし、胸部へと突き刺さる。中空に生じた爆煙を突き破つて残骸が尾を引き海へと落下する。

青い翼が輝きを放ち、その威光に恐れおののいたように敵部隊が撤退を開始する。敵はストライクダガーを中心に構成された1個中隊。すべてがガンダム・タイプで構成されるアスラン・ザラの部隊と対抗するにして戦力不足甚だしい。

「よし、深追いはするな。敵を撃退できればそれでいい」

まだカーペンタリア基地からそう遠い場所ではない。単なる偶発的な遭遇戦で無理をする必要はない。

「クピット内を飛び回る人形が落ち着かない。翠星石はパイロット・サポート・システムであることを忘れたかのようにあらぬ方向を見ている。その理由はすぐに知れた。ルナマリア・ホークの通信が即座に入ったからだ。

「でも、シンがまだ！」

どうやらシン・アスカが交戦中であるらしい。その方角は考えるまでもない。翠星石が見ている方向に決まっている。機体を回すと、まるで遊覧船の窓から窓に移る子どものような動きで翠星石も動いた。

シンの搭乗するΖGMF-56SインパルスガンダムがGAT-131イクシードガンダムと戦っている。イクシードガンダムは白兵戦に特化した機体で、シンの使うソード・シリエット同様1対の大剣を装備する。ファンтом・ペインではないようだが、ガンダムである以上、腕利きが搭乗しているはずだ。

(シンには荷が重いか……)

さて、どのように援護すべきか。そう考えていた時、翠星石が叫ぶ。友達の試合を応援しているかのように声を張り上げて。

「意識を加速させるです、シン！」

「わかつてゐる。わかつてゐや、翠星石ー！」

敵のイクシードが対艦刀を力任せに振り下ろしていく。右手に持つ対艦刀でこれを受け止める。敵の攻撃はこれで受け止められるはずだ。シンはサーベル同士が激突する瞬間を確認しなかつた。意識はすでに次に飛んでいる。防いだと確信するよりも先に左手のサーベルで薙払うための行動を起こしていた。サーベル同士が接触した頃には、すでにシンの攻撃が始まっていた。反応が遅れた敵は慌てたように身を引き、逃がし損ねた右足を切断される。

そして、その頃には、シンの意識は次の動作へと移っていた。

逃げる敵を追い、敵の反応が追いつく前に右手のサーベルを振り下ろす。左の肩から剣が食い込むと、ビームとフェイズシフト・アーマーの輝きがイクシードを縦に焼いていく。

」の一連の動きをシンの意識は鮮明に認識していた。シンは訓練の成果が徐々に、かつ確実に出ていると確信する。肩からわき腹にまで切り裂かれたイクシードが田の前で爆発する光景はそれを保証してくれている。

「よしー。」

強敵であるイクシードガンダムを撃墜できたことでの、つい手を握りしめて喜びを表現した。

しかしここは戦場であり、帰還命令も発令されている。いつまでもこうしてはいられない、シンは母艦ミネルヴァを田指すことにした。普段とは帰還のタイミングが違うためか、珍しい組み合せと並んで飛ぶことになった。

レイ・ザ・バレル隊長のΖGMF-X17Sガンダムローゼンクリスターと、ザラ大佐の部下であるインパルス2機が同じ方向を目指している。

「動きが1テンポ速くなつたな。反応が遅れることがなくなつたばかりか、敵の意識の隙間をつけるようになつてきている。いい傾向だ」

「あ、ありがとうございます……。」

普段無口な隊長から話しかけられるとつい戸惑つてしまつ。誉められたのだから、素直に喜べればいいのだが。通信越しとは言え、レイ隊長の声は素直にシンのことを誉めてくれたように思えた。

次に入ったのは別の通信だ。

「まったく、アブディエルの分際で鉄十字勲章なんぞ生意気なんだよ。俺だってまだ3つしかもらつてないのに」

「嘘つけ。1つももらつたことねえだろ」

どちらも野太い男の声だ。アスラン大佐の部下で、ヘルベルト・フォン・ラインハルトとマーズ・シメオンと名前は聞いている。まだ一度も顔を合わせたことはないが、2人とも相当な皮肉屋で、ザフトの英雄にさえ燃え尽きたと思つたなんてジョークを飛ばしたと聞いた。要するに、アブディエルと呼んだこと自体悪い冗談だと言うことだ。

どう返事していいものか悩んでいる内に、並んで洋上に浮かぶ2隻のラヴクラフト級の艦影が見えてきた。

「意識を加速させなさい」

仮想空間の中をGAT-X255インテンセティガンダム汎用型が飛ぶ。一瞬たりとも気を抜くことはできない。少しでも隙を見せれば8本の刃に切り刻まれる。

（難易度マックスにした上で攻撃力を限界まで上げたラスボスとりあつているみてえ……）

敵が、ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムが4機のバック・パックから、4本の手足からビーム・サーベルを展開して突っ込ん

でくる。まず来るのは右で、次は左、下、上。

意識を加速させて、敵の動きに反応していく。インテンセティがアームで連結されたシールドを2枚展開する。まず右のサーベルを受け止める。次は左を止めたことを確認して下を防ごうとした時、アラームが鳴り響いた。シミュレーターが停止し、アウルは前めりになつていた体を機嫌悪そうにシートに戻す。

負けたのだ。真紅が回避不可能と判断し、インテンセティは撃墜された。これで何度も戦死か、もう数えてない。

「反応は確かによくなっている。でも、まだまだ認識に頼る癖が抜けないよね」

コンソールの外れで真紅は椅子に座っている。結局真紅自身も単なる立体映像でしかないため、立つたままで疲れないはずなのだが。もちろん、訳は聞かない。どうせレディの嗜みだとか言つてくれるに決まつてるからだ。

「人は予測とともに動いているわ。たとえば階段を降りる際、もう一段あるつもりが実際はなかつたとしたらついつんのめつてしまうでしょう。それは予測がはずれたから。裏を返せば、人は自らの動きに予定を立てている」

真紅は小言が多い。早くシミュレーターをやらせてもらいたいが、そのためにも真紅の機嫌を損ねることはできない。手を頭の後ろに置いて、くつろいだ格好で聞いておくことにする。

「あなたは敵の攻撃をシールドで受けるつもりでいた。でもそれから？ エインセル・ハンターの意識はすでに2手先、3手先、1

「手先まで予定されている。そして、いちいち予定の実現を確認してから動いていっては達人にはついていくことさえできないわ」

真紅の言いたいことは、アウルはまだ物事を確認してから動いている。そういうことらしい。攻撃されたら攻撃を受けて、その防御を確認してから次のことをしようとしている。エインセル・ハンターの場合、攻撃したら防がれることを予定して、そして確認しない。予定が実現することを確信してもう次の行動に移っている。行動にわざわざ確認というクツショーンを挟むアウルとエインセルではどんどん行動の速さに差が生じてくる。

そしてその差が致命的になつた瞬間、撃墜されているという訳だ。

「意識を加速させなさい。知覚を捨てなさい。意識と無意識の狭間に、極意は潜るものよ」

確認を挟まず次々行動の予定を立てるのを真紅は意識の加速と呼んでいる。無意識にではない。意識的に動いて、無意識的に確認をすつ飛ばす。そんなことを真紅は要求していく。

言いたいことは言い終つたのか、真紅はまたシミコローラーを起動してくれた。俄然やる気が出て、操縦桿に手が伸びる。仕方ない子ね。そんなこと言われても無視して、早速フォイエリビに挑む。

結果は、23秒。これでも記録は更新した。

「遅い。まだ目で見たことに頼りすぎね

再びシートに深く座る。

ただ予定を立てて確認そつちのけで動くとすぐに裏をかかれる。相手の動きを予想して予定を立てて、確認しないで次々行動に移す。

「まるで未来の敵とシャドー・ボクシングしてるみてえだな……」

「悪くないたとえね。あなたにもようやく見えてきたのかしら?」

何となく、わかってきた気がする。シートに跳ねるように座りなおして臨戦態勢。操縦桿を握んでも戦える。次はいけそうな気がビンビンしてゐる。

「くつ。この調子なら、おっさんが最強の座明け渡すのも時間の問題じゃね」

少なくとも手の届かない相手ではないはずだ。

真紅は綺麗な顔　姉貴によく似てる　で笑うと、アウルはどうしてかいやな感じがした。どうしてここで笑うのかわからない。

「その鼻息なら、Hインセル・ハンターの本気をもう少しだけ見せてよさそうね。ハウinz・オブ・ティンダロスは、敢えて使わせてなかつたのだけれど」

いきなり始まつたシミュレーションは何もかもが違つていた。

開始から4秒後。

「何だよこれ！ 攻撃が当たらない！ 攻撃がかわせない！ 動きが読めない！ 気配がわからない！！」

当たると予定していたはずがすり抜けた。予想していた攻撃が来ないくせに考えもしなかつた方向からコクピットを一突きにされた。何かされたようで何かがわからない。初めてシミュレーター訓練を受けた時と同じかそれ以上の不思議っぷり。

「チャンピオン・ベルトはまだ先のようね、アウル」

紅の淑女は優雅に紅茶をすすつていやがつた。

軍人と民間人はあまり変わらない。少なくとも、食事に関してはそうだと思う。空母の食堂は学食とそんなに変わったようには見えなかつた。トレーを持つ人がカウンター越しに沿つて並んで、ただ制服か軍服かの違いくらい。ミリアリア・ハウがこなしている仕事も喫茶店にいた頃と何も変わっていない。

エプロンをつけて、お皿に食材を盛りつけて手渡していく。ただ、軍人さんはそれぞれの仕事に合わせて必要なカロリーが違うから元から何を食べるべきか決まっているところが少し違う。その人の制服で盛りつける食材を変えていく。

少し戸惑うことがあつたのは、黒い制服の男性が前に来た時のことだつた。地球軍の制服は白を基調としたものが多く、その人物はひどく変わつて見えた。周りがようやく食事にありつけると表情を崩している中で、唇を横に結んだ顔が険しくも思えた。

「ミコアリア・ハウ。一つ、折り入つて聞き入れてもらいたいことがある」

「何でしょひ……？」

「Jの人はキラ・ヤマトの部下で、スウェン・カル・バヤン大尉。ファントム・ペインだとかいう特殊部隊に所属することが許されるエースなのだそうだ。瞬きをしない眼差しがミリアリアを捉えている。

「私の食事にはニーンジンを入れないでもらいたい。頼む」

なんてまっすぐで純粋な目をしてるんだろう。ただただ真摯なスウェン大尉の願いに、ミリアリアは大尉から皿をそらすことができない。ただ手は動かして、お皿に茹でられたニーンジンを盛りつけた。

「そんな田して言われてもダメです。そもそも兵隊さんの食事は栄養管理がされてるんです。食べることも仕事の内です」

大尉が持つトレーの上にニーンジンが盛られたお皿を置くと、特に反応はない。さっきまで冷静な戦士のように思えていた顔が、少し拗ねた子どもの顔に思えてくるのがとても不思議に思える。

（この人、本当にエースなの？）

敵機を撃墜できてもニーンジンを撃墜できないなんて。

はつきりと嫌がった様子はなくとも、どこか機嫌が悪くなつた様子でスウェンはテーブルの方に歩きだした。代わりにミリアリアの前に立つのはニーンジン嫌いの兵隊さんの同僚である。

褐色の肌と同じような色をしたサングラスは度が入っていないそうだ。文字通り色眼鏡で見ていると言つべきか斜に構えていると言

うべきか、シャムス・コーザはとにかく考えていることが周りと違うと思う。この人もエースなのだと聞いているから擊墜王に必要な才能と言つのは変人ということなのかもしない。

「まつたく、スウェンはガキだな。といひでミリアリアちゃん、俺にはピーマンを大盛りで頬む」

「大盛りですね」

前髪をかき分け、きざな顔をしてみせたシャムスのトレーにはピーマンが盛りつけられたお皿をおいて上げた。途端に恨みがましい視線で見てくる。

「別に私、天の邪鬼つてわけじゃありませんから」

なるほど、チーム・ワークは抜群らしい。2人ともそろつて好き嫌いが子どもっぽい。食べる前からピーマンの苦みを噛みしめているかのような顔をして歩き去つていくシャムスを、ミリアリアはつい目で追つてみた。

シャムスは先に席についていたスウェンの隣に座る。配膳台からそんなに離れてはいない場所で、声を何とか聞くことができそうだ。

「シャムス、わかっているな」

「ああ、俺たちはチームだ」

何か声が違う。話し方がいつもとは違うように思えた。何が違うのか説明はできないけれど、一語一句しつかりと発音されていて、これが兵隊の話し方なのかと納得する。2人は紛れもなく軍人だつ

た。もつとも、そんなチームが協力して取り組むことと言えば、お互いの苦手な食べ物が盛りつけられたお皿を取り替えようとしていただけ。」¹ いつのを能力の無駄遣いと言つのではないだろうか。

呆れて見ていると、同じように呆れているのはミリアリアだけではなかつた。2人のエースの向かい側に座る女性パイロット、ミュー・ディー・・ホルクロフトがミリアリアに皿配せしながらため息をついた。

「2人とも、後ろ」

仲良く振り返る子ども2人の皿には、もう言葉もないミリアリアの顔が写つてゐることだらう。渋々とではあつても、お皿を取り替えることをやめたことは讃めて上げてもいい。

子どもみたいなエースの相手を終えるとまた仕事に戻る。一通り食事を配り終えると、よつやく食事にありつくことができた。エプロンを外して食事を載せたトレーを持って食堂に出る。調理スタッフ専用のスペースなんてないから、食事は兵隊さんが使つていたテーブルのどれかを使おうかと少し悩んでみた。

見渡すと軍人と民間人の違いが少しわかつた気がする。とても食事をとるのが早い。ついさっき配膳が終わつたばかりだと思つていたのに、食堂ではすでに人の数が少なくなつてゐる。いつどんなことが起こるかわからない。備える必要があるからなのだろう。

（そんな仕事なんだ……）

どんな時も緊張をなくさないことはすごいと思う。そう考えて少し損した気分になつた。席を探そうとした視線の中に、いまだに二

ンジンヒペーマンに苦戦しているエースの姿を見てしまったから。

結局、シャムスに手招きされる形でミリアリアの席は決まった。
ミュー・ディーの隣。4人でテーブルを囲むことになった。

ミリアリアが食事をとる前の席でスウェンとシャムスが真剣な眼差しを手元に向いている。敵はもちろん緑黄色野菜。作戦会議中と言われても信じてしまうかもしない。

「皆さん、エース、なんですよね？」

なるべく失礼にならないように聞こうとした。とてもエースには見えませんなんて言えるはずもないから。少しでもピーマンのことを見忘れられるからか、シャムスはとても乗り気だ。

「まあな。これでもヤキン・ドゥーエ攻略戦じやストライクダガーで大暴れしたもんだ。まあ、ジェネシスの時は、実際死にかけたんだが」

「あの時は本当に危なかつたよね。シャムスが敵を深追いしてなかつたら私たち今頃スペース・デブリだったし」

この3人がミリアリアよりも年上であることは間違いないとして、それでも4年前はそんなに変わることはないだろう。これまで戦争を意識したことは2回だけ。ヘリオポリス崩壊とヤラファス祭事件の時。それまでは戦争を意識しないで暮らしてきた。関わることもなければ、関わらうとも思わなかつた。

(軍人になる人って、どうして軍人になるんだろう?)

何気ない質問を、ミリアリアは何気なく口にした。

「皆さん、どうして軍人になつたんですか？」

みんな、あのシャムスさえ突然黙り込んでしまつた。何か聞いてはいけないことを聞いてしまつただろうか。そんな思いがよぎつて、食事をする手がとまつてしまつ。

3人の様子を見ようと視線を動かすと、目があつたのは意外にもスウェンであつた。

「私の場合、エイプリルフル・クライシスで両親を失つたことが主な理由になる」

これをきっかけに、シャムス、ミュー・ディーも話し出す。

「俺も似たようなもんだ。ただし、殺されたのはお袋とダチだけどな」

「私は兄さんと父さん。ミリアリアは誰？」

「誰つて……」

ミュー・ディーは当然のように聞いてきた。あなたはエイプリルフル・クライシスで誰を失いましたかと。誰も亡くしていない。それなのに、この3人は誰か親しい人を失つていることを前提にしているように思える。

食事の手は止まつたまま。食べかけのサラダにフォークが刺さつたまま。

(そんな自分たちの感覚で話されても困るんだけど……)

「誰かを亡くしたということは強烈な動機にはなるかもしれない。それでも、みんながみんな同じ境遇といふわけではない。エイプリルフール・クライシスで大切な人を亡くした人が軍人になるというだけで、みんな同じような被害に遭つたわけではないのではないだろうか。

「どう返事していいかわからない。とりあえず、フォークを刺したままの葉物野菜を口に運んだ。普段からゆっくり食べる癖が身に付いている。それなのに、突然の言葉にほとんど躊躇まずに飲み込んでしまった。

スウェンの言葉だ。

「オープはエイプリルフール・クライシスの影響を受けなかつた」

「裏でプラントと繋がつてて、うまく逃れたんだつたつけか。なら、ミリィにはわからないかもしれないけど、地球じゃ、7人に1人が殺されたんだ。試しに家族や友達、知り合いの名前を7人ずつ挙げてみな。その度に1人がプラントに殺されてる」

「今でもプラントはあれは正当な防衛行為だつて言つてるんだつてね。地球の奴らはバカだからブルー・コスマスに扇動されてるんだつて。本当、プラントって私たちのことバカにしてるよね」

みんながみんな同じ境遇といふわけではない。それは、もしかしてオープとそれ以外の国で分かれるということなのだろうか。ミリアは確かに恋人を失つた。それでも、ヘリオポリス崩壊に巻き

込まれるもの曰まで戦争といつものを感じたことなんてなかつた。

エイプリルフール・クライシスを単なるテレビの向こう側の出来事だと思つていた。

「俺たちは確かにエインセル・ハンターの手駒で、ブルー・コスマスの下部組織だつて面も否定しない。だがな、俺たちの殺意や闘志は俺たちのもんだ」

「私は自らの意志と殺意をもつて、プラントに敵対する」

シャムスとスウェンの言葉はミリアリアの心に深く突き刺さり、彼らの隊長の言葉を掘り返す。

（キラが見せるつづきつづいた戦争つて、いつこうことなの……？）

「これは果たしてどうだらうか。王のおわす場所。しかしそこには極彩色の絨毯もなければきらびやかな装飾が施されているでもない。狭い部屋。質素な寝床に2脚の椅子。見紛うことない船室。

王はここにいる。

「シン・アスカ。存じません」

玉座であるうと、单なる安普請の肘掛け椅子であるうとエインセル・ハンターは変わらない。豊かな水を湛える湖の青さを備える瞳は娘へと向けられている。

「オーブ侵攻時、オーブに居住していた少年です。お父様を母の仇と認識しています」

ヒメノカリス・ホテルは変化を見せる。その顔には確かに機微を浮かべている。不安か、あるいは焦燥。父への気遣いがそこには見られた。隠れる、頼るということを見せないヒメノカリスが唯一父の前では弱さを露わにする。

「間違いではありません。私が直接手を下した可能性は低いとは言え、指揮を担つたのは私です。アスカ少年の母の死は私に帰責します」

体を小さくして椅子に座っている。これだけでも、ヒメノカリスにとつて希有なことである。

「お父様……。ステイングを殺害したのは、このシン・アスカである可能性が高いと思います。シン・アスカは言っていました。イクシードを撃墜したインパルスに搭乗していたのは自分だと」

「この人ならすべてを知っている。この人はエインセル・ハンター。それだけが唯一にして絶対の論拠。」

「フィンブル落着の際、突出していた部隊があつた。そのインパルスに搭乗していたのがシン・アスカ。これは面白い。私もインパルスと交戦しました。部隊が混乱する中、ただ1機挑みかかってきたインパルスと戦いました」

「それもシン・アスカ……？」

「可能性としては低いと言えるでしょう。カーペンタリアには全戦

力の1割未満とは言え、20機を超えるインパルスの参戦が確認されています。ただ、違うと捨て去るにはあまりにも惜しい

お父様は子どもみたいに楽しく笑う。その顔にヒメノカリスの心は軽くなる。ヒメノカリスにとって不安も喜びも、憂いも歓喜もすべて父に起因する。

「憑かれたような使命感と生きることへの渴望。仮に私が剣を交えた相手がシン・アスカであるとするのなら、なんとも健気で、いじらしいではありますか。敵であり敵ではないものに、復讐者にして復讐者でない者に、何より愛を知る者に。私を倒すことができるのは、そのような相手に他なりません」

シン・アスカは違う。シンは単なる復讐者にすぎない。だから、シンにお父様は殺せない。殺させない。お父様はヒメノカリスのそばにいてくれる。いつまでも。誰よりも。

立ち上ると、布がされることを意識する。お父様に『えられたドレスが純白でとても綺麗。

「お父様が似合つと仰いました。だから私はこのドレスが好きです」
スカートを摘み、回る。お父様に見てももらうため。波立つ髪が香りを放つて揺れ動く。お父様が綺麗と言わされたから、ヒメノカリスは自分の髪が好きになつた。

「お父様が愛でてくださいます。だから私は私が好きになりました」

だから私を見てください、お父様。ここにはあの邪魔な女もいません。

お父様に近づく。それだけでヒメノカリスの胸は高鳴る。視線を交えるだけでもう他の何も目に入らなくなる。座るお父様にしなだれかかるように抱きついたなら、世界の幸福を独り占めにしたよう。

「愛しています。お父様」

エインセル・ハンターの手がヒメノカリスの髪を優しく撫でる。

（違つ……）

触れて欲しい。でも違つ。こんなことではなくて、抱きしめて欲しい。あの女よりも深く、強く。体を預けたまま見上げたお父様はいつものように微笑んでくれる。父が娘を鐘愛するままの顔で。

「そろそろ消灯の時間です。ステラが待っています。部屋に戻りなさい」「？」

暖かいのに冷たい。父の温もりに寂しさが混じり込む。いつもそう。お父様はお父様でしかいてくれない。望んでも、願つても。お父様はお父様でしかいてくれない。

「お父様は、どうして私のすべてを愛してはくださらぬのですか？」

「私はあなたの父であり、あなたは私の娘であるからです。愛に種類は数あれど、その共通する様態は、誠意と真心に他なりません」

「私にはお父様しかいません。お父様だけが私を暗く沈んだ淵から救い上げてくださいました！ 感謝、しています。すべてを捧げた

いほどに

しがみつく。他に表現のしようがない。その胸を掴んでヒメノカリスは必死にしがみついていた。離れたくない。失いたくない。この手の下に、かつてヒメノカリスがつけた大きな傷跡がある。

あの時と同じように、エインセルは微笑む。ヒメノカリスがその愛を疑い、傷つけた時にもエインセルは娘を許し、微笑んでくれた。それからエインセルとヒメノカリスの関係は変わっていない。

（とても嬉しいです、お父様。でも、それが重荷であることを、どうして理解していただけないのですか？）

「ありがとうございます、ヒメノカリス。あなたのその言葉が私にどれほどの慰謝を得るかはかりしません。私はすでに満ち足りているのです。あなたという娘を得たことで」

そのしなやかな指先はあくまでも父が娘を慈しむでしかない。

「人は死ぬが故に子をなす。老いるが故に子を育てる。私は、いつまでもあなたの側にいてあげられることはありません」

「お父様のいない世界なんて、私には耐えられません……」

夜の海に飛沫をあげて、ガンダムが1機、2機と海に潜る。ファンタム・ペインに所属するGAT-255インテンセティガンダムがスペングラー級MS搭載型強襲揚陸艦から飛び降りた水柱が月明かりに照らされる。

露天甲板にはまだ2機のインテンセティが残っている。140tもの重量が一気になくなることに備え、インテンセティはタイミングを合わせて甲板の左右から飛び降りていた。先ほどの2機と同様、残った2機も船体軸の対角線上に並び、タイミングを見計らつていた。

隊長機がまだ飛び降りる気配を見せない。まだ用を残しているのは隊長だけであるのだが、2機が甲板に残されているのはそのような理由がある。

隊長、ジョーン・ヒューストンは機体を傾けて甲板を見下ろしていた。同じファントム・ペインに所属する指揮官と話をしている。サングラスをかけ、まだ少年と呼んでもちしつかえない少佐だ。

「せっかく同じファントム・ペインに出会えたのに、見送りさえ満足にできなくて申し訳ありません」

18m、70tもの機体が動く音に、人の声など本来ならばかき消されてしまう。モビル・スーツに搭載されている集音センサーと、モニターがネオ・ロアノーク少佐の姿をジョーンに伝えている。

暗いコクピットの中、ジョーンはまだヘルメットをつけていない。相手に自分の姿は見えていないとは知りつつも、自身の金髪に手櫛を入れて身だしなみを整えた。ロアノーク少佐はそれほどの価値がある男だ。

「私たちはエインセル・ハンター代表の下に集つた戦士です。なれどつよりも同じ目的のために手を取り合える。そのような関係でいいのではないでしょうか」

各国に散るファントム・ペインが部隊として一堂に会したことなどなく、そしてこれからもない。単なる力であればいい。エインセル・ハンターという意志に従う力であればいい。必要とされなければ出会いこともなく、不要であるならこれから会いこともない。

ただエインセル・ハンターの求めに応じカーペンタリア基地を襲撃し、その護衛　必要とは到底思えないが　を務める形でロアノーク少佐とは出会つた。ただそれだけのことだ。そして任を解かれた今、東アジア共和国を離れるこの空母から離れる必要があつた。その前に、少しくらいは私的好奇心を働かせてもいいのではないだらうか。

「話は変わりますが、オープでは墜落事故で要人が事故死したと聞きました。このことをどう考えます?」

「ヒピメティウム・ローのことですね。ヴァーリのことは?」

「これでもファンтом・ペインの部隊長です。多少アクセス権は与えられています」

無論、ネオ・ロアノーク少佐の素性についても多少は聞き及んでいる。ロアノーク少佐は特に動搖した様子も見せずに応じた。多少声がうわずつて聞こえているのは、騒音の中、声を意識して大きくしているからにすぎない。

「ラクス・クラインの手によるものだと思います。理由は2つ。至高の娘が優先すべきは姉妹の情ではなくクライン家の意向であるということ。ダムゼルの死はこれで2人目だということ」

では声に突然混じり込んだ低い声の抑揚は、感情の発露でないと言えるのだろうか。

「ラクスがダムゼルを襲つたのは、これが初めてじゃない」

海は暗く、空は黒い。かすかな月明かりが果たして何の足しになると言えるだろうか。

街の明かりに蹴散らされた星々と欠けた月のみが見下ろす海の上を、人工の光が並び飛ぶ。

人が初めて光を手にした時、先見の明ある者は縛り付けられ、神は報復としてあらゆる災いを人にもたらした。これは神話の時代のお話。

人が空を光で照らした時、人は星を見ることを忘れてしまった。昔は空にはたくさんの星が瞬いていた。

人が再び光りを手にした時、人は終末の予言を現実のものとしてしまった。核を持たない時代に戻ることはできない。

人は何かを得る度に何かを失つてきた。そしていつも言い訳を繰り返す。得たものは素晴らしいもので、失つたものはとるに足らないものであったと。

C・E・71年には人が新たに光を手にした。ミノフスキー物理学という大きな大きな光を。それは素晴らしいもの。失つたものはとるに足らないもの。まったくもってとるに足らないもの。

冥海に光が見えた。それは、新しい光。ミノフスキー・クラフトが発する光に他ならない。一際大きな光が2つ。ZZ-X3Z10 AZガンダムヤードシユテルンとZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスターが全身から光を放つ。その後ろに5つの輝きが、インパルスガンダムが5機従いながら飛行している。

ミノフスキー・クラフトがもたらしたのは大きな機動力。失ったのは秘匿性。存在位置を宣伝しているかのように眩しい光に、その行く先、沿岸の基地が途端に慌ただしくなる。幾本ものライトが立ち上り、スクランブルをかけられた戦闘ヘリが浮き上がる。

奇襲が事実上機能しないという代償。その程度ならと人は笑う。本当にそれだけですむのか確認しようともします。

アスランは発見されたことを問題にはしていない。「ここはカーペンタリア湾から続く海峡の一部。敵も警戒を続けていただろうし、ミノフスキー・クラフトの機動力なら気づかれてもすぐに接近できる。

「この基地はエインセル・ハンターが立ち寄った形跡のある場所だ。少しでも情報が欲しい。一気に殲滅する」

「了解！」

「パラスアテネ、アリスの発動を。作戦時間は30分。攻撃目標は敵戦力の完全な沈黙」

近づくにつれて夜の闇が薄く薄く剥がれていく。基地がその姿を肉眼でも確認できそうなほど接近した時、ザフト軍は基地に襲いか

かる。

C・E・71年。人はガンダムという名前の新たな光を得た。

カーペンタリア基地を出発したミネルヴァは東南アジアの島々の間を縫うようにして赤道同盟を目指す。そう、シンは聞かされた。エインセル・ハンターが大西洋連邦の同盟国である赤道同盟のZZ-X300AAフォイエリヒガンダムの修復を行うという情報がもたらされたからだそうだ。

狭い海峡をラヴクラフト級わずか2隻で航行すること　それも東アジア共和国の領土内だ　に不安がなかつた訳じやなかつた。実際、スマトラ島とマレー半島のシンガポール海峡を抜ける際、敵のイクシードガンダムと交戦した。

ただ、戦闘がその一度だけだったところをみると少數精銳でインド洋まで抜けるというザラ大佐の作戦勝ちであつたらしい。

ミネルヴァはすでにマラッカ海峡に入った。シンガポール海峡とつながるこの海峡は北西方向に向けて広くなる。広ければそれだけ敵との遭遇確率も減つてくれる。インド洋は目と鼻の先、そのはずだった。

「防衛戦力はデュエルダガーだけのようだが、油断はするな！」

レイ隊長の声だ。意識を現実に戻す。駆動音響くコクピットの中でモニターには次第に大きくなる名前も知らない基地が映し出されていた。

小規模な基地だ。恐らく建造途中の。マラッカ海峡は平均水深が30mもないほど浅い。カーペンタリア基地から海峡を抜けてくるボズゴロフ級を監視するための基地とは思えないから、カーペンタリア基地への橋頭堡として一応用意されているような基地なのだろう。

(これなら楽に落とせる)

わざわざ7機ものガンダム・タイプを使うこともないくらいに。気になることなんてない。敢えて一つだけ挙げるとすれば、基地に隣接する熱源反応のことだ。基地は岸壁にそつて横に400mほど。そのすぐ後ろに、どうやら町があるらしい。

素早く戦力を削らないと町にまで被害が及んでしまう。その点、シンが好んで使用するソード・シリエットはピンポイントの破壊が得意だ。慌ただしい基地を目指して加速しようとした、その時のことだった。

「アリス、発動」

ザラ大佐が何かの命令を発した。意味はわからない。何か聞き逃したことがあつただろかとヘッド・フォンにすることと同じようにヘルメットを横から押された。その分反応が遅れて、その時にはすべてが始まっていた。

いきなりザラ大佐の部下3人のインパルスが加速を開始した。それも、完璧に同じタイミングで。まったく同じように武器を構えて、まったく同じように動いて、完璧な編隊を組んで基地へと向かっていく。

まるで機械が動かしているようだ。

こんなこと前にもあった。拡散した瞳孔には「クピットのわずかな光が眩しい。あれはファインブルの破碎活動 実際したことは妨害以外の何者でもなかつた」に参加した時のことだ。自分が自分ではなくつて、インパルスガンダムと一体化したような感覚で、自分が自分と、現実が現実と認識できなくなつた。

それと同じだ。同じことがあのインパルスたちにも起きてくる。

「なんだよ、これは……？」

夢じやなかつた。トリガーハッピーやバックファイバーなんかじゃない。

（一体何が起きてるんだよ！？）

あの時のシンとルナマリアに。今のヒルダ、ヘルベルト、マーズに。

「ほら、シン、何ぼさつとしてるのよー」

ルナマリアは何ともないらしい。基地ではすでに火の手が上がっていた。ミノフスキ・クラフトの強度を上げて加速する。シンが基地に等着した時、そこは戦場ではなかつた。

まだ、基地としての名さえ『えられていない』ような基地である。

国籍は赤道同盟。マラッカ海峡の出口に位置し、赤道同盟との国境側に置かれ、防衛戦力がGAT-01「デュエルダガー」を配備されている。特筆すべきことがないほど小規模の基地である。

ガンダム・タイプの襲撃に耐えられるはずもない。

インパルスガンダムの襲来を受けた時点で、勝敗はすでに決していた。

3機のインパルスガンダムは完璧であり、そして残酷である。

完璧な連携。同じ敵を2機が重複して狙ってしまうことなどない。それどころか、インパルスを狙う敵めがけて他のインパルスから攻撃が加えられる。そこには人間味というものは何もなく、的確で正確、精確な攻撃は瞬く間に基地機能を低下させていく。

示し合わせたように無駄がない。行つた攻撃の範囲をすべての機体が理解し、まるで1人が同時に3機を操っているかのように基地全体に均等なダメージが重ねられる。

そして残酷。

そこに容赦や慈悲はなかつた。足を破壊されたデュエルダガーが市街地へと落ちていく。偶然か、それともパイロットの意地か、デュエルダガーは建造物をさけ道路へと落ちた。コンクリートが砕け、押しつぶされた車がけたましいクラクションを奏で続ける。

デュエルダガーは動こうとしていた。片足はすでになく、右腕のライフルも銃身がひしゃげている。落下の際背部を強く打ちつけたことが原因であろう。メイン・スラスターがうまく機能していない

ようにも見える。それでも動こうとしていた。

1機のインパルスが近づいている。ライフルを構え、明らかに墜の意志を示しながら。町から離れようと無理に体を浮かせたデュエルダガーの腹に完璧に、そして残酷にビームが撃ち込まれた。ビームの熱量は爆発を引き起こし、デュエルダガーの胴が引き裂ける。破片は熱と炎を纏いまき散らされ、ビームは直接町を焼き払う。

上半身を含む大きな鉄の塊がビルを直撃する。落ちた破片は道を砕き逃げまどろ人々を飲み込んでいく。

シンがすべきことなんて1つもなかつた。基地についた時にはすでに一方的な殺戮が行われ、シンが立ち入る隙なんてなかつた。それは攻撃に直接参加した3人以外の誰にとっても同じで、ザラ大佐も一度も攻撃することなく基地の跡地に着陸していた。

煙は多いが、とにかく火の手が多くて明るい。着陸場所には困らないほど大きな広場がいくつもできていた。

基地機能は完全に停止している。わかりやすい皆殺しだ。

対空砲火はない。適当に選んだ跡地に残骸を踏みつけてインパルスを着地させると、余計に酷さがわかる。空から直撃の瞬間を見た破壊されたバギーがあつたのはこのあたりのはずだが、重装甲のモビル・スーツさえ破壊する力をともに浴びて残骸は探しそうない。モニターには望遠で町の様子が映っていた。子犬と思われる小さな体が、瓦礫のそばで動かない。

「ザラ大佐！ これはどう見たってやりすぎだ！ 一般市民を巻き込む戦いなんて許されるはずがない」

惨状を見ようとしないでからうじて形が残された基地施設きつと指令室が入っているやつだ にばかり興味を持つてるザラ大尉の、ヤーデシュテルンの背中へと言葉を投げつけてやつた。

「シン、君の言つてることは理想論で、俺たちのしたことは結果だ。この基地にはエインセル・ハンターに関する情報が残されていた可能性が高い。データを抹消する余裕を与えるわけにはいかなかつた」

「そんなの俺たちの都合でしょー！」

音声のみの通信であるため、顔は見えない。見えないでも、どうせ呆れたような顔か、興味のないような顔をしているに決まっている。

「一刻も早くエインセル・ハンターを倒さなければもつと多くの人が死ぬ。確かに最善の結果とは言えないかもしけないが、エインセル・ハンターを野放しにするよりはまずいぶんましだ」

「それじゃあ4年前のジエネシスと同じだ！」

「ここで地球軍を撃退しなければプラントは負ける。そんな考えの下、当時のプラント最高評議会議長パトリック・ザラ ザラ大佐の父親だ は地球の全生命の9割を焼き払おうとした。これはあまりの暴挙として、地球各国では全地球規模の軍事同盟を組もうと言つ世論が活発になつた。

(わかるはずだろ！ そんなこと、しちゃいけないくらい…)

あんたは同じことをしようとしている。目的で手段を正当化して多くの人を殺そうとした。こんなシンの声にならない叫びを、ザラ大佐は背を向けたまま聞き流そうとする。

「そうだな。ジェネシスのおかげでプラントは救われた」

乾いた声で、そのためか聞き取りやすい。それでもすぐに返事ができなかつたのは、聞き間違えではないと自分に確認するための時間が欲しかつたからだ。

「大佐は、自分の言つてることがわかってるのか……！？」

それじゃあ4年前と同じだ。自分のためにためらいなく人を犠牲にして、それを仕方がないて片づける。アブディエルを死地に送り込むことは仕方がない。フィンブルが地球に落ちても仕方がない。

プラントは何も変わつていない。

シンの気迫に危うさを覚えたのだろうか。ルナマリアの操縦するインパルスが2機のガンダムの間に着地した。ヤーデシュテルンもシンの方へようやく体を向けた。

「シン、いい加減にしどきなよ。地球の人たちがどんなにひどい奴らか、シンだつて知つてるでしょ。もしジェネシスがなかつたら、私たちどんな目に遭わせられてたかわからないじゃない！」

「どうして自分の正当性を証明するために誰かを悪人にしなきゃいけないんだ！」

ルナ・マリアが言つてはいることとすべて「自由と正義の名の下に」の受け売りでしかない。マスコミ発表、政府の言つてはいることを鵜呑みにしてはいるだけだ。人から言われたことをそのまま自分の意見かのように錯覚しているだけなんだ。

「こ」で2人とやり合いたいわけではないのに、どうしても操縦桿から手が離れない。

「あんたたちコードィネーターはいつになつたら氣づくんだよー。」

操縦桿から手を離せ。理性が押しとどめて、感情が先走ろうとする。手の筋肉が痛いくらいで、そんな緊張はきっとルナ・マリアにもザラ大佐にも伝わっているはずだ。

だから2人とも警戒を解かない。だから、誰かに間を取り持つてもうう必要があつたのかもしれない。

神々しい。そんな光を全身から放つて、ローゼンクリスタルの白い機体が地上に降り立つた。ザラ大佐に協力するには遠い場所で、それでもシンが大佐に斬りかかることを止められる位置だ。

「シン・アスカ、そこまでにしておけ。話したいことがあるなら俺が聞いてやる」

「レイ、隊長……」

今、周りで燃え盛る火と同じだ。一度くすぐるとそれはなかなか消えてはくれない。それでも、小さくすることはできる。

シンはよつやく、操縦桿から手を離すことができた。

純粹であるということは残酷であるということです。純粹であるためには排他的でなければなりません。自分を汚すすべてを排斥します。でなければ純粹ではいられません。汚れずにはいられません。たとえそれが、どれほどのものを犠牲にしても。

純粹な正義は純粹な悪と同じです。

どちらも自分以外の正義も悪も認めることはできません。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「汚れなき悪意」

ボーパール。ここは純粹な思いの集つ場所。

第1-8話「汚れなき悪意」

殲滅された名前も知らない基地のメイン・コンピュータに翠星石が潜っている。アスラン・ザラはただZZ-X3Z10AZガンダムヤーデシユテルンのコクピットに座つて待つていればよかつた。今コクピットに翠星石の姿はない。まさかデータ抽出にそこまで容量を食うはずがないので、潜つていろいろという表現を端的に示そうとしているのだろう。

しばらぐして、翠星石の縁を基調とした小さな姿が映し出された。その手には何故か紙の束が抱えられている。

「アスラン、データは無事だったです」

要するに、データを持ち出してきたことをわざわざ映像で表現しているのだ。ゲルテンリッターらしい遊び心だと言える。

翠星石はモニター　全天周囲モニターであるため、壁一面のことだに資料を一枚張り付ける。白みつつある外の光景を上書きされて、張り付けられた資料が広がる。単にデータをモニターに投影したタイミングに合わせて映像が重ねられただけだが。

資料にはエインセル・ハンターがこの基地を訪れたこと。そして、目的地が克明に記載されていた。予測されていた航路とも大差ない。どうやら当たりのようだ。

よくもまあスペングラー級空母で狭いマラッカ海峡を抜けたものだ。

「作戦は成功だ、ルナマリア。Hインセル・ハンターの行く先がわかつた。赤道同盟のボーパール工業地帯だ。軍事施設としても機能している場所だ。ここならフォイエリヒの修復ができると考えたらしい」

続いて翠星石が張り付けた資料には東南アジアから中央アジアにかけての地図が映し出される。「丁寧にマレー半島北側に現在位置が、赤道同盟旧インド地区のほぼ中央にボーパールと表示されている。

モニターは一部が資料で埋まってしまっているが、すぐ近くにいるラナマリア・ホークのZGMF-X56Sインパルスガンダムはしつかり見えている。翠星石が位置を工夫してくれたのだろう。

「でも、フォイエリヒってもう古い機体なんですね。そんな機体、アスランさんなら楽勝だと思います」

「実際どうなるかは戦つてみないとわからない。だが、君の言つことにも一理ある。Hインセルはゲルテンリッターの初号機を引えられているはずだ。何故それを使わないので、正直などこな見当もつかない」

翠星石は指示を出すまでもなく資料を消してくれた。夜明けを迎え、すでに外は明るくなりつつある。沖合を見ると2隻のラヴクラフト級特殊戦闘艦が水平線に浮かんでいた。

「そういえば、君たちもフォイエリヒを見たことがあつたんだったな

「はい。アポロンとか言つ未完成のロードナーで見ました」

C.E.74年から突如作られ始めた新造コロニー群は合計30基を超える。国籍もバラバラで関連があるとは考えにくいが、こんな混乱期にあるためか、そのすべてが途中で建造が止まっている。宇宙要塞にするような作りではないようなのが。

「それもわからない。ヒメノカリスはそんな新造コロニーにフォイエリヒを持ち込んで一体何をしようとしていたんだ？」

「相手が何を考えていようと、全部叩き潰してやりましょう。自由と正義の名の下にみたいに！ 私、オナラブル・コーディネーターで、あまりプラント政府にいい印象ありませんけど、地球上に好き勝手させちゃいけないとくらいわかります」

単純と言つてしまえばその通りだが、ルナマリアの明るい調子は嫌いではない。

確かにプラントは、ザフトは何が起きても敗北という選択をすることはできない。結局、勝利を信じて戦う他ないのだ。気持ちを新たにしてこると、目の前に何かが飛んできた。翠星石だ。

「アスラン、翠星石はシンの言つてたこと、間違つてねえ氣がするです」

「じくなく声が小さい。翠星石はどうしてだかシンによく懷いている。

作戦を優先するあまり民間人さえ犠牲にしたことを見事に咎められたことを言つてこりのだ。

「そうだな。だが、シンはまだ若い。正義は絶対のものじゃない。正義が勝つなんて言うのはお話の中だけで、正義では守れないものもある。正義にこもって誰かを死なせてしまつよう、俺は偽善と呼ばれても人を救う道を選びたい」

「偽善と呼ばれても人を救うため。私も、そんな生き方がしたいです」

ルナマリアが肯定してくれても、翠星石は頷いてはくれなかつた。

ミネルヴァの開け放たれた小さなハッチから鋭角に朝日が飛び込んでくる。すでに照明を必要としないくらい、格納庫は明るくなつていた。床にいれば照り返しがきついだろうが、キャット・ウォークに乗つているシン・アスカにはそんなに辛いものではなかつた。

格納庫にインパルスガンダムとΖGMF-X17Sガンダムローゼンクリスターが並んでる。パイロットである2人もやはり並んでいた。

「敵は降伏していなかつた。ハーグ条約に則つても逸脱しているとは言えない。何より、フエイスに噛みつくことは賢明とは言えんな

シンは愛機　まだ新品同然のやつだが　　を眺めているふりをして手すりによりかかっていた。レイ・ザ・バレル隊長は構わず話かけてくる。

「わかつてますよ、それくらい。でも、仕方がない、必要な犠牲だつて言葉、俺、どうしても好きになれない」

母はそうして犠牲にされた1人だった。そして、アブディエルもオナラブル・コーディネーターもプラントから無理を強いられる。

「オープの連中もそうだった。プラントも、ブルー・コスモスも結局同じ穴のむじなじやないですか。理想だと正義だとたいそつなこと掲げて、やつてることは同じ。その癖、犠牲の多いだとか少ないだとかそんな数比べばかりしてる。実際その犠牲の中に含まれる人のことなんて誰も考えてやしない！」

ザラ大佐がそうだった。こうした方がより少ない犠牲で戦争を終わらせられる。そう言って民間人を犠牲にした。やつてることは同じ癖に数がちょっと少ないからって自分が正義の味方かのように勘違いしてる。

手すりが軋む音がした。横目で見ると、レイ隊長がシンと同じよう手すりに体重を預けていた。

「正義とは相対的なものだ。正義の敵は悪ではなく他の正義だとう話を聞いたことはないか？」

普段と何も変わらない。事実に忠実で、あまり声に感情は表れない。

「ある男が恋人を救おうと私財をなげうたとしよう。美談だが、純粹ではないな。男には恋人を救いたいという強い気持ちは間違いないあつたことだろう。だが、同時にこうすれば恋人はもつと自分のことを愛してくれるかもしれない、抱きしめてくれるかもしれない、そんな欲望や打算がなかつたと言えるか？」

「いや、俺、恋人とかいないから……」

「この戸惑いの中に、またかあの隊長が恋をたとえ話に使うとは思つてなかつたことも含まれる。

「どんな英雄的行いとて、必ず醜いと呼ばれる欲は含まれるものだ。完全な正義などありはしない」

「じゃあ、何をしてもいこつてことですか？」

隊長は片手を軽く振る。

「話はまだ続く。正義を語る上でしてはいけないことが3つある。自分を正義と思いこむこと、自分は悪と開き直ること、自分は偽善者だと信じることだ。自分が正しいといつ発想は必ず他の正義との衝突を繰り返し、それは悪に他ならない。無論、悪に逃げ込むことも結果は同じだ」

「偽善は？」

知らずに話に興味を持ち初めていたらしい。体が傾き、首は隊長の方を、少しだが向くよくなつていて。

「正義とは相対的なものだと言つただろ？。結局、これこそが正義とこゝものは存在しない。だからこそ、正義というものの模索を諦めてはならない。他の正義を尊重することを忘れてはならない。自分が偽善だと公言することは、正義が何かを考えることを諦めたと同義だ。自分の正義と他の正義とのすりあわせが面倒になつた馬鹿者が気取つているだけだからだ。お前にはお前の正義があるように、

アスランにはアスランの正義がある

「結局、ザラ大佐の弁護つてことですか？」

「では、お前が正義でアスランは悪か？」

「いや、それは……」

「きなり目を合わせられてつい緊張してしまつ。田をそらしながら答えるしかできなかつた。

「悪行に正当な怒りを抱くことは結構だが、アスランをだしに正義を氣取つてゐるようでは、結局お前の嫌うプラントと同じではないか？」

悪に対してもいい。それでも、その人を悪人だと考へるな。それこそ矛盾ではないだろうか。そんなシンの考へを見透かしたようすにレイ隊長は軽く笑つた。

「自分の正義が絶対ではないと考へることと偽善だと開き直ることは意味が違う。だが同時に正義が相対的だということも忘れるな。お前が他人の行為に怒りを抱くことは当然としても、他人の正義を否定しようとはするな」

レイ隊長は手すりから体を浮き上がらせた。

「罪を憎んで人を憎まず。そういうことだ」

誰かを否定するとこりうことは裏を返せば自分を肯定するといふことに他ならないといふことだろうか。だから悪事に怒つてもその人

を悪だと言つてはならない。それは誰かをこき下ろして自分が正義だと言いたいだけだから。

「アスランには俺からも話しておく。お前も激情に駆られて激昂はしないことだ」

キャット・ウォークの固い床を鳴らしながら隊長が去っていく。

「レイ、隊長……」

声をかけようとして、しかし声は出なかつた。レイ隊長も氣づくことなくつい伸ばした手は何もない場所を掴んだ。

これでいいのかもしない。お礼を言つたはまだ気持ちの整理がついていない。

シンはレイ隊長に初めて会つた時、その援軍の遅れを責めた。その時言つたこと、外人部隊の扱いの悪さは何一つ間違つては思わない。ただ、それでも、そんな外人部隊の報告を信じて援護にかけつけてくれたのはレイ隊長の部隊だけだったから。

巨大な黄金の胸像が2人の男女を見下ろしている。黄金は爛れ、人で言うところの瞳、デュアル・センサーはカバー・レンズが割れ、内部のカメラが露出している。

満身創痍。このたつた一言で今のΖΖ-X300AΑフォイエリヒガンダムの状態を表現することができてしまつ。言葉とはつづく便利なものだ。

セレーネ・マクグリフは格納庫に立てて置かれたフォイエリヒガンダムを見ていた。見上げる必要はない。ちょうど胸部の辺りに置かれた床　本来の床からは20mほどの高さにある　ガガンダムの様子を観察するにはちょうどよい。

目線をまっすぐに向けると、フォイエリヒの黄金の装甲に女性の歪んだ姿が写っていた。厚手のシャツにタイト・スカート。髪がだいぶ長くなっている。そろそろ切った方がいいだろうか。もう化粧をさぼつていい年齢ではないとつい口紅ののり具合を確認しようかと手をこらしてみた。歪んだ鏡で見えるはずもない距離。無駄なことをしたとつい笑ってしまう。

そんなセレーネの横で、まるで勇者が打ち倒した巨大な竜の亡骸でも見ているかのように神妙な面もちをした男がいる。

「これがフォイエリヒガンダム……」

もう30にはなるというのにどこか子どもっぽさがこの男からは抜けない。ソル・リューネ・ランジェ。ロームフェラー財団の人間で世界安全保障機構に赤道同盟代表として参加しているとは思えないほどだ。実際、悪い言葉を使うなら周りからはなめられているらしい。

「全高約25m。重さ150t。大きさだけで通常のモビル・スーツの1・5倍、条约にひつかかるから核動力は取り外されているけど、それでも量産機の倍の出力はあるうかという化け物ね。とても常人に扱える機体ではないわ」

「セレーネさんでも？」

首を回したソルは、よく見るとわくわくしているように見える。フォイエリヒの巨大な姿に、もしかすると圧倒されるとともに憧れも抱いているのかもしれない。男の大人と子どもの違いはおもちゃにかけるお金の額だけだといつ言葉もあながち嘘ではないらしい。

「当然でしょ。それに、安物を着こなす」とも腕の見せ所よ

そして、このフォイエリヒを扱うのはエインセル・ハンターだけでいいのだ。

噂をすれば何とやら。規則正しくて、それでいて個性的。足音だけでも存在を主張してる。そんな素敵なお出ましあり。

まずセレー・ネが振り向いて、それにつられたようにソルが首を回す。

背が高く金髪。青い瞳が憎らしくらい人の目をひく。どこか現実離れした、絵画の中から颯爽と歩み出たような男が歩いてくる。その後ろには少女を2人引き連れている。まずセレー・ネに目配せすると、セレー・ネは微笑み返しておくことにした。すると美青年は、エインセル・ハンターはソルの前へと歩み出した。

「ソル・リュー・ネ・ランジエ代表。お目にかかれ光榮です。エインセル・ハンターと申します」

「初めてまして。この高名はかねがね聞き及んでいます。それに、ロード・ジブリー代表とは会議で何度か……」

まず手を差し出したのはエインセルの方。まったく物怖じしない

態度であるのに対して、ソルの方は戸惑いを覚えていくように手つきが鈍い。握手をかわしただけでもこの2人の男としての格の違うといつものわかつてしまふものらしい。

ソルも会議では積極的に発言しようと取り組んでいるようだが、いざ議論が白熱すると大西洋連邦のジョセフ・コープラング大統領ほど発言力はなく、あるいは南アメリカ合衆国のエドモンド・デュクロ将軍とブルー・コスマスのロード・ジブリー代表との言い争いに割ってはいることができないでいるそうだ。

そんな若い代表 ほんとエインセルと同じ年なのだが が
エインセル・ハンターと出会つて氣負わない方が難しいことかもしれない。助け船を出すではないが、セレーネは進んでエインセルに近づいた。わざわざ握手を求める間柄ではないが、敢えて握手してもらつたのはエインセルに触りたかったから。これに忍かる。

「お久しぶりね、エインセル。それにヒメノカリスも」

見せつけるように握手していると、お父様命のエレクトラはその青い瞳でセレーネを睨みつけた。それこそ、お姫様みたいな姿をして、お人形のような顔をして。

「お父様に近寄らないで」

ヒメノカリスは本当に可愛らしい。いつまでも子どもで、そして純粋だから。本当はもっとエインセルと触れ合つてみたいが、ヒメノカリスに嫌われたくない。握手はそろそろやめとくことにした。

この親子は変わっていない。エインセルは相変わらず凜々しくて、ヒメノカリスは焼き餅焼き。それから、今回は娘が2人いる。

見ると、エインセルのスーツの端を見覚えのない少女が掴んでいる。どこか子犬のような印象の少女で、不安そうにエインセルを見上げている。ヒメノカリスのように攻撃的でなくとも、エインセルが他の誰かにとられてしまいそうで怖がっているのだらう。

「その子は新しい娘さん?」

手元に置いているのはヒメノカリスだけだとしても、エインセルは常時100人を超える子どもたちを支援している。別に子どもが1人、2人増えたりしても不思議はない。

「軍事機密に属します」

「あなたらしくないジョークね」

つい顔をしかめてしまった。エインセル・ハンターは真実を語らないことはあつても嘘は言わない。若干違和感があった。

ソルは別の違和感を感じていたらしい。

「セレーネさん、ハンター代表とお知り合いなんですか?」

「これでもファンタム・ペインだもの。エインセルとはハワイ基地で会つたわ。それから7年もアタックし続けてるのに、まだいい返事がもらえてないの」

出会つた頃にはすでにエインセルは結婚していた。メリオル・ピティスと別れてと何度も言つても聞いてはくれない。離婚を要求する度、メリオルが親の仇でも見るようになんできたことが微笑まし

く思い出される。

「ねえ、ヒメノカリス、新しいお母さん、欲しくない？」

口の端が変形するほどどの形相で睨まれた。この母子は似ていよいよぐれど似ている。メリオルもきっとこんな顔して怒つてくるに違いない。

「あいかわらずもてもてね。メリオルも気が気がしないでしちゃうね。それで、地球の王様がわざわざここんだにまで来た理由は？」

エインセルは内ポケットから恭しく紙切れを取り出した。手渡された紙は四つ折りで、開くと簡単な説明が書かれ、記憶媒体がしまわれていた。

「フォイエリヒの修理をお願いしたいのです。そして、そのデータを一切残してもらいたくはありません」

「なるほど、軍事機密ね」

説明を流し読みして、ふと少女、ステラ・ルーシュ　名前は紙に書いてあった　を見る。ちょっといたずらがすぎたのか、すっかり敵と認識されてしまつたらしく。セーネを見る目つきが鋭い。

(再会を祝つてエインセルに抱きついたらどうなつてたでしょうね)

さすがにそれはやめておいた。ヒメノカリスに殺されかねないから。

「わかったわ。もちろん一西田中とはいかないけど、できる限りお

望み通りにするわ

「セレーネ、勝手に……」

「感謝します」

こここの代表であるはずのソルの言葉を事実上無視する形で、セレーネとエインセルの間に契約が成立する。

「私ももう一度見てみたいもの。フォイエリヒの黄金に輝く姿が。だから任せてちょうだい。あなたのことは、必ず守り抜いてみせるから」

ここには赤道同盟ボーカー。魔王に仕える魔女が棲む森は如何なる敵も逃さず絡めとるのだから。

軍産複合施設は、経済大国で知られる赤道同盟に決して珍しいものではない。ボーパールが際だつていることと言えばその規模、そして立地条件である。

東アジア共和国にフォイエリヒを修復する技術はなく、コーラシア連邦だと半球またがなければならない。大西洋連邦本国に持ち帰らざるを得れば太平洋を横断しなければならない。消去法で赤道同盟。そして、進行方向、予想ルート、得られた情報、経過時間、そして、エインセル・ハンターがフォイエリヒガンダムを必要としている事実、そのすべてが示していたエインセル・ハンターはここに、ボーカーにいると。

「これらの情報がブリーフィング・ルームのモニターに映し出される。暗いため、集められたパイロットたちの顔を見ることはできない。アスランはそれでも部下たちの士気高揚を確信していた。

「今回の作戦目標はボーカール基地でもなければ敵の部隊でもない。エインセル・ハンターただ一人だ。みんなよく思い出して欲しい。ユニウス・セブンの悲劇からすでに15年が立つ。あの日、その時君たちは何をしていたか、俺は知らない。ただ、人生が大きく変わってしまったであろうことは想像に難くない」

アスランは血のバレンタインに巻き込まれ、自ら命を辛うじて捨つ危機に見舞われるとともに母となるはずの女性を失った。

「一度道を踏み外してしまった俺たちはいまだにもとの道に戻れないでいる。今日、ここで道を戻そう。新しい道をやり直そう。そのためにも君たちの力が必要だ」

静かな気迫がブリーフィング・ルームに響いている。

「俺はここ初めてこの言葉を使う。俺たちの勝利が明日を切り開くことを信じて。勝利を我らに！」

ミネルヴァは今、ボーカール西部のアッパー湖を横断している。東西に長いこの湖は幅が最大でも4km程度しかないこの湖に2隻のラヴクラフト級特殊戦闘艦が並んだだけでも手狭に感じるほどだ。

シンはすでにミネルヴァの上に出ていた。ラヴクラフト級はその複雑な形状からわかりやすい甲板がない。そのため、モビル・ス

ツの足を活かして艦体前方に陣取っていた。

分厚い黒雲が空を覆い、降り注ぐ雨が地上にある何もかもを叩く。土砂降りの光景は、どこか世界の終わりを思わせた。そう言つてしまつと大げさだらうか。

ただ、ZGMF-56Sインパルスガンダムのコクピットから眺める光景は、過去の人々が想像していた荒廃した未来像によく似ている。

壁で囲まれた街を中心としてその外側には破壊されたGAT-01デュエルダガーのすぐそばにZGMF-1017ジンの頭部が転がり、その隙間を埋めるように鉄くずが積み上げられている。アッパー湖も見えるところに何かの残骸が浮かんでいる。

ボーパールの街からは黒煙が吐き出され、雨がそのすべてを打ちつけていた。

「……ボーパール……。何だか、嫌なところですね」

まるで雨そのものが毒を持つかのように思えてしまう。雨はシンと同じようにミネルヴァの上に立つレイ隊長のZGMF-X17SGандамローゼンクリスタルにも降り懸かっている。ところが、全身をミノフスキー・クラフトで包むローゼンクリスタルは全身を輝かせて、雨をことごとく弾いている。装甲そのものが推進器として機能する。そのことがよくわかる。

「今から250年前、ボーパールで科学工場の大規模事故が発生した。猛毒のイソシアヌ酸メチルが氣化するとともに街にばらまかれたそうだ」

まさかその影響が今でも残されている訳はないだろう。しかし、産業廃棄物がうず高く積まれた光景は200年の毒を今に伝えるようにも思えた。

「そんなことして平気だつたんですか？」

シンの言葉に通信から思わず声が聞こえてきた。こう、息をもらしたような。モニターに姿は表示されていないが、まさかレイ隊長が笑つたのだろうか。少なくとも声にそんな調子はないが。

「平気な訳がないだろ？ 事故発生が深夜だったこと、工場側が対処を怠つたことから直接の死者は数千から、報告によつては1500人とするものもある。そして汚染はその後も50年に渡つて土壤を蝕み続けた」

「無茶苦茶ですね」

「操業していたユニオン・カーバイド社は本社を、大西洋連邦、いや、旧アメリカ合衆国においていた。当時の触れ込みは本国と同水準の安全性ということだったらしいが、その実、安全管理は杜撰だつたらしい」

そのため補償も満足にされず、ボーパールが廃棄物処理を兼ねた工業都市として発展することになる50年もの間、汚染され続けたという報告もあるそうだ。コクピット・ハッチ、ヘルメットを通して入つてくる空氣に、どうしてもある種の気持ちの悪さがつきまとった。あたりに産廃が放棄されていることもその感覚を助長した。

「そんな工場がどうして街中に……」

「250年前、人はほんのわずかに愚かだった。持たざる者がわりをくうのはいつの時代も変わらない」

「どうして、何でしょうね……？」

記憶は自然と4年前のことを、オーブが侵攻を受けた時のことを見い出す。あの時は、黄金の太陽が輝く、よく晴れた日だった。今日は土砂降りの大雨。

それでも、シンは同じ目標を見据えている。

「色々な考え方があるとは思うが、1つは引き立て役だらう。貧しいことを憎むのは貧者だけだ。富裕層にとって、貧者は己の富の豊かさを自覚するためのよい肥やしとなる。人は自分よりも弱い者を見ていなければ自分の価値を自覚できない」

レイ隊長に返事をしている余裕はなくなっていた。湖面をゆっくりと進むミネルヴァは、徐々に大きくなるボーパールの街の城壁を見せてくれる距離にまで達していた。

操縦桿を握りしめ、フット・ペダルの感触を確かめる。

「そろそろ作戦開始時刻だ。油断するな。この毒と鋼の墓場には魔女が棲むと聞く」

エインセル・ハンター。この男ただ一人を殺すためだけの戦いが始まるとしていた。

雨天が視界を遮り、ミノフスキーパーティ濃度は極めて高い。奇襲にはつづつつけの状況である。

廃棄場所の拡大に伴い放棄された市街地の建造物に隠れながら、ザフトの一団が進んでいた。全機がZGMF-1000Ζダであり、バック・パックにはスラッシュ・ウイザードを装備している。ミノフスキーパーティは機動力を大いに向上させたが、同時に光り輝く。奇襲、隠密、秘匿には向いていない。よつて、1個小隊のΖダは飛行することなく徒步で進んでいた。

先頭のΖダが瓦礫を強く踏みつける。崩れそうにない。そう判断したところで瓦礫を踏み越えていく。続くΖダも同様に瓦礫に足を乗せ、何かを確認するような間を置いてから瓦礫を越える。その動きには慣れというものが感じられなかつた。

先を行くΖダが歩みを止めないまま通信を飛ばした。

「新入り、実戦は初めてか？」

野太い男の声で、返事は少年とも少女ともとれる高い声である。

「はい、これが初陣です」

「運のいい奴だ。プラントの歴史に刻まれる瞬間に立ち会えるんだからな。いいか、俺たちは悪のドラゴンを倒しにきた勇者だ。そして、歴史は絶えず正しき者の味方だ」

長柄のビーム・アックスを携え、甲冑に身を包んだようなΖダの勇姿はたしかに戦士然としていた。驟雨をものともせずにザフトの

戦士たちは行進する。

その先には鉄の壁に取り囲まれた魔城があり、その深奥には人の姿をした悪竜が鎮座する。

彼らは知っていた。竜を倒さなければ未来はないと。

彼らは知らない。竜は青い薔薇をさした魔女によつて守られないと。

「勝利を我らに、だ」

「勝利を我らに」

そして、彼らは知ることはない。魔女が魔女よ呼ばれる所以を、その力の正体を。

轟音を響かせ雷が鳴る。大気を斬り裂く音のほんの1秒ほど前、稲光が確認された。よつて、落雷は少なくとも300m離れたどこかに落ちたことになる。それが彼らに何ら影響を与えるはずがない。

モビル・スーツよりもわずかに高いビルとビルの間を通り抜けようとしていた先頭のジダが突然動きを止めた。

「隊長……？」

何か事態を想定した訳ではなかつた。ただ何気なく、新兵は隊長機の側に歩みを進めた。その振動が、隊長機を振り動かした。70tもの鉄の塊が呆氣なく前のめりに転倒した。それも、あり得ない倒れ方で。通常、モビル・スーツは転倒した場合、自動で姿勢を制

御し、手をつくなり膝を曲げるなりして衝撃を緩和しようとする。人でいう反射がコンピュータ制御で備えられているのだ。

ところが、隊長機は崩れ落ちた。戦斧を携えた姿勢のまま前のめりに転倒する。受け身などない。人の形をした鋼鉄の像が折れたようく痛んだコンクリートを破碎する。生じた揺れは家屋にわずかに残されたガラスにひびを刻む。

「そんな、敵なんてどこにも……！」

明らかに攻撃を受けた隊長の機体。雷鳴に重ねて攻撃されたことはいくら新米とは言え理解ができた。しかし、それが敵の姿はどこにもない。ゾダのモノアイがせわしなく左右に動き、首が振り子のように左右に振られる。

どこを見ても、どこを探つても敵の姿はない。まるで壁のように並び立つビル群のどこにも敵の姿はない。そう、左右には建造物が横一列に並び、隊長機が通り抜けようとした場所だけが開いていた。

攻撃は正面から。

再び落雷が大気を震わせる。雨音が支配権を取り戻した頃には、天を仰ぎ見て眠りについたゾダの姿がさらされていた。腹部のコクピット・ハッチが獣に喰いちぎられたかのような無惨な姿をさらし、その風穴へと雨が流れ込んでいた。

魔女は静かな死をもってその魔術を披露する。

「アスラン、別働隊が攻撃されたです！」

「想定よりも攻撃が早いな」

翠星石の声を聞きながら、アスランは戦術図を思い描いた。ミノフスキーパーティーによる電波干渉を鑑みたなら射程は短い。少なくとも予測された射程には南西から展開するどの部隊も入っていないはずだ（街から標準も定められないまま放ったのか？　いや、それが命中するとは考えにくい。となると、攻撃はモビル・スーシからとみていい）

「遊撃隊が出てきたようだな。俺たちを街に近づけたくないということは、エインセル・ハンターがいることにますます信憑性が出てきたな」

「どうするです、アスラン！？」

プロジェクト内に翠星石はとにかく落ち着きなく飛び回る。アスランの頭の周りを一周したところで、指示を飛ばす。

「ピートリー級に連絡してくれ。進軍を停止し、距離を保て。射程は前提が崩れると

コーラシア大陸方面に展開していた部隊と共同戦線を張っている。ピートリー級陸上戦艦は南の旧市街地からゾダを先行させて徐々にボーパールの街と距離を詰めてもらひ予定だったが、モビル・スーシが出ている以上、これ以上近づくことは無謀と言えた。後退させる必要ではないだろう。

(問題は、クルーが翠星石の口調に、惑わないかだが、まあ、問題ないだろ？)

翠星石は特に会話をしている様子は見せないが、すでに連絡をとっているはずだ。ゲルテンリッターが少女の姿をしているとは言え、本体はあくまでもモビル・スーツだ。姿は単なるおまけのようなものにすぎない。翠星石にパートナー級との連絡を任せ、同時にレイとの通信を繋いでもらう。2つの通信を同時に繋べることへりこ、翠星石はたやすくしてのけた。

「レイ、聞こえるか？ 敵は遊撃隊を中心防衛線を張っているらしい。このまま堀の外で立ち回られると面倒だ。俺たちで指揮官を落とすぞ」

「了解した。だが用心しろ、アスラン。片角の魔女は人を化かすと聞く

セレーネ・マクグリフ。またの名を片角の魔女。その戦術は珍妙にして、奇怪。想定外の戦い方を得意とすると聞く。

何より、魔王の城を守るのが魔女とは、少々できすぎではないだろうか。

「いのち・命の世に、狐狸の類もないだろ？」

たとえどのような相手であれどとも、引くことも退くこともできはしないのだ。

鉄と鋼が積まれ、滂沱として雨が油と汚れをその身に混ぜ合せながら流れを作る。

実を結ばぬ汚れた鉄が樹木を騙り、川には毒で着飾る。

まさに魔女の森にふさわしい。魔王を迎えるにふさわしい。

魔女は青い薔薇を持つ。

GATT-01A1ストライクダガーの左肩にファンтом・ペインの象徴たる青薔薇が描かれる。右手にはライフル。左手には通常と比べ厚手のシールド。すべては背に象徴される。ドッペンホルン・ストライカー。2本角の名前が示すように通常1対のロング・レンジ・ライフルが装備される砲撃に特化したストライカーである。それが片方しか装備されていなかつた。長大な銃身が右側にしか装備されていないのである。

左右対称を欠くドッペンホルン・ストライカー。この姿故、セレーネ・マクグリフは片角と呼ばれる。片角の魔女と。

ストライクダガーのコクピットの中でセレーネは笑う。ノーマル・スーツの中で笑う。楽しくて楽しくてしようがない。あの男のために戦える。エインセル・ハンターのために戦えるのだ。

片角のストライクダガーが片足で残骸を踏みつけた。体をやや前かがみに、背負われた銃身が水平に倒れていく。

レーダーには映し出されていない。専用のスクープで覗き見た光景には雨に隠された、しかし敵の姿が見えている。距離は約2・5

k m先。ドッペンホルン・ストライカーの弾速は秒速約1500m。着弾まで約1・6秒。モビル・スー^ツならば5mは進むことができるほどの時間だ。そして、その間に弾丸は10m以上も沈む。気温22度。気温は高ければ高いほど空気の密度を減らし弾を通りやすくなる。湿度84%。湿度が高ければそれだけ空気中の水分との磨耗して弾の運動エネルギーは減らされていく。コンディション劣悪。雨降りしきる中、レーダーは感度が悪く敵機との正確な距離はわからない。アクティブ・ソナーを使ってこちらの居場所をさらすつもりもない。

だから魔女は手品の種を仕込んだ。遠く離れたビルとビルが狭い道を作る場所がある。飛行したくなればこの間を通りなければビルを崩して大きな音をたてるか、貴重な時間を失つてまで迂回しなければならない。だからジダはこの間を通り抜ける。

これで、距離は2474m。両側を塞がれ横に逃げることはできない。そして敵はこちらに気づいてさえいない。

指を引く。雷が響く。機体を震わせ、弾丸が飛び出す。雨を弾き、大気を引き裂いて、突き進む。身を引く重力を振り切らん速度で、横風をものともしない鋼鉄の弾丸がジダの腹部に突き刺さる。弾頭が砕け、貫通することはない。ただ体内に留まり、臓腑を中から喰らうとする。

命中。ドッペンホルンから空薬莢が排出され、次弾が装填される。

次の標的はまだ何が起きたのか気づいていないらしい。音源解析にかけられ、落雷と銃声を分解して狙撃が行われたことに気づくことができたでしょうに。

もう一度、狙いをつける。雨を抜け、風を浴び、重力がまとわりつく感覚に身を委ねる。意識が2km先に飛び、至近距離で銃口を突きつける感覚で引き金を引く。落雷が銃声を消した。

間延びするほど長く思える1・6秒をすぎて、腹を喰い破られたジダが仰向けに倒れる姿を、セレーネは息を吹きながら確認した。

氣を抜くには早すぎた。まだ戦いは始まつてもいい。

機体の姿勢を元の直立に戻すと、もう1機のセレーネ・マクグリフが雨の中現れる。青い薔薇を肩につけ、片角のドッペンホルン・ストライカーを装備するストライクダガー。

「セレーネ・マクグリフ、全機配置完了しました」

男の声に、セレーネ・マクグリフは答えた。

「了解よ、セレーネ・マクグリフ」

報告したセレーネ・マクグリフ機の後ろにはセレーネ・マクグリフ機が雨に打たれています。

「では始めましょうか。さあ、ザフトの戦士たち、この30人のセーネ・マクグリフを打ち破れるかしら?」

戦いは始まりを告げる。片角の魔女の魔術とともに。

暗い部屋だ。住み慣れた場所でないことも手伝ってずいぶん不気

味に思える。生糀のコーディネーターであるギルバート・デュランダルは宇宙で生まれ、議長として活動を開始するまで地球に降りたことは一度たりともなかつた。カーペンタリアを訪れたことなどなかつた。

地球の重力を感じ、大気の臭いに軽い不快感をもよおしながら、ギルバートは部屋の明かりをつけた。

執務室として机など最低限の家具しか置かれていない部屋の中央から、一つの視線がギルバートを射抜いた。

白状しよう。この時、ギルバートは薄ら寒さを覚えた。その感覺を議員として培つた平静を装う技術で押さえ込み、努めて朗らかに対応する。

「やあ、ラクス」

暗い部屋、明かりもつけずに待つていたのはラクス・クラインその人である。桃色の髪に縁取られた青い瞳が、視線そのものに圧力を与えるようにギルバートを見ていた。

「晚餐には呼んでもあげられなくてすまない。やはり戦いの後は兵たちを労つてあげたくてね」

言いながら、ラクスの脇を抜け机の前まで歩く。特段用があるわけではないが、さも置かれた資料を整理しているように手を動かすのはラクスから視線をそらすきつかけが欲しかつたからにすぎない。

あの晚餐にはラクスどころか、ラクスの息のかかつたアスラン・ザラもレイ・ザ・バレルも呼んでいない。ハイネ・ヴェステンフル

スとアブディエルであるシン・アスカを讃めるためのものだつた。

それが気に食わないといふことなのだらうか。

ラクスはギルバートのすぐ横に立つた。身長差から見上げられる形で、その眼差しは厳しい。口元をしっかりと結び瞬きのない瞳が片時も離れてはくれない。

「シン・アスカ。何故、彼に勲章を受けたのですか？」

思わず手を止めていた。取り繕つよつて手振りを大きく応えてしまうが、それも仕方がない。

「1人の兵士に勲章を下さる度に君に相談しているわけにはいかないだらう。それに、彼はよくやつてくれた。まさにアブディエルの星だよ。能力ある者を評価する。それが……」

「なりません！」

物静かで、声を荒らげる様を想像しにく一ラクス議員にここまで強行に否定されるとは考えていなかつた。

「アブディエルもオナラブル・コーディネーターも重用することはなりません。王は王であり、従者は従者でなければならないのです！」

「だがね、アブディエルのガス抜きも必要だ。それは君もわかつていることだらう。ヒルスマントークン議員の言葉を真に受けるわけではないが、2級市民の間の不満は……」

「なりません！」

とつづく島もないことはじだらう。話はいつまでも平行線で、ラクス議員が意見を変える、いや、変えられないことは想像に難くない。結局、ギルバートが折れる他なかつた。

「わかつたよ。今後、査定に関しては今まで通り正規市民を優先することにする。それでいいかな？」

ラクス議員とは、どこかで互いの意見を尊重しあう必要があるようだ。

地上の汚れを洗い流したのは雨でした。神と崇められたのは雨でした。死であり、恵みであつて、破壊とともに豊穰。魔王と讃えられ、唾棄されるかの者のように。最強と認められ畏怖されるかの者のように。自らを刈り取ると定めたかの男のように。

どちらにも共通することは、人知の及ばない圧倒的な力の所在。

人は雨に挑み、それでも雨を必要としています。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「雨のソナタ」

片角の魔女。それは雨を慕い、そして最もその恐ろしさを知る者。

第19話「雨のソナタ」

数km先　　この「」時世、正確な距離を計ることは難しい　から放たれた弾丸は放物線を描いてアッパー湖に着弾する。豪雨を弾き飛ばすほどの勢いで水柱が立ち、それが幾本も立て続けに形成される。

着弾してから届く銃声をZZ-X3Z10AZガンダムヤーデシユテルンが拾う。砲撃は秒速1000mを超すのだろうが、音速はせいぜい350m。当然、発砲音は遙かに遅く聞こえてくる。

「翠星石、音と砲撃の時間落差から概測でいい、発射地点までの距離を出せー！」

どちらにしろ、これ上近づけることは危険だ。アスラン・ザラは通信機体はすでに艦外に出ている　で母艦であるラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネにこれ以上前に出るなど伝えた。計画ではアッパー湖を東に進み、ボーパールの街に設置された砲台の有効射程外で揚陸するつもりだったが、計画は変更せざるを得ない。

こうしている内にも際どい場所に着弾した弾丸のしぶきがパラスアテネにふりかかっている。

翠星石がモニター上にボーパール周辺の地図と、それぞれの砲撃の予測発射地点を×印で表示していく。どれもばらばらで、移動している形跡さえあつた。やはりモビル・スーツによる攻撃であるようだ。

アッパー湖のほぼ真東に壁に囲まれたボーパールの街がある。そ

の南には放棄された旧市街地があり、そこから別働隊が向かっているはずだ。もつとも、そちらも攻撃を受けていることはすでに報告されている。

「アスラン！ ピートリー級が攻撃を受けてるです！ 無限軌道を撃ち抜かれたです！」

ピートリー級とはザフトでは珍しい陸上戦艦で、砂漠の虎が扱つたことで特に有名なレセップス級とは異なり無限軌道を使用している。そのため、堅い地盤においては多大な積載量を誇るのだが、車輪を直接狙われては仕方がない。

（ピートリー級も十分な距離をあけていたはずだ）

要するに、敵は想定射程外から高速で動いている無限軌道を装甲の隙間を狙い打つよじにして命中させたということになる。

「今更狙撃に苦しめられることになるとはな」

こちらに向かってくる砲撃の多くは方向だけで狙いをつけたような粗末なものだ。恐らく、あんな狙撃を成功させられる奴は一人、セーネ・マクグリフしかいない。

「各機、指揮官を探せ！ 散開して突入する」

ヒルダ・ハーケン、ヘルベルト・フォン・ヘルベルト、マーズ・シメオン。3人の部下たちの了解の声がした。

立ち上る水柱の中をヤーデシュユテルンが突き進む。雨を弾き、鉄に汚れた大地を目指しながら青い翼を開く。

「何なのよ、これ……」

バック・パックには長大なライフルを背負つ、ブラスト・シリエットを背負つ、GMF-56Sインパルスガンダムに搭乗したルナマリア・ホークは眼下の光景に啞然としていた。

指揮官を倒す。この命令を、指揮官てやっぱり強いのかな、そんな簡単な気分で捉えていた。けれど指揮官の強さはわからない。見つけることさえできない。

見えていないのではなくて見えすぎて、指揮官機の姿もはっきりとわかる。

左肩に青い薔薇 プラントにとつて見たくもない紋章だ をつけて、ドッペンホルン・ストライカーは右肩のしかない。そんなアンバランスな機体に間違いない。問題は、そんな機体しかないとのこと。

「同じ機体ばつかじやない！」

ルナマリアが見えている範囲だけでも3機のGAT-01A1ストライクダガーがまったく同じ姿をしている。どれを攻撃していいか分からず腰だめに構えたライフルを一番狙いやすい敵へと左右から一斉に放つ。雨の中、雨粒を蒸発させながら「ミミの山を吹き飛ばす。

命中していない。攻撃をかわした敵は他の2機とともにドッペン

ホルン・ストライカーの弾丸を上空に放つてくる。ビームとは違う
弾速の速さ。思わずひやりとしながら 直撃を受けてもフェイズ
シフト・アーマーが守ってくれる、多分 機体を左右に動かす。
ミノフスキー・クラフト様々である。

(でも、どうしたらしいのよ、これ……?)

指揮官を一刻も早く倒さなければならない。なのに、指揮官機を
みつけることができたにしても、それに気づくことができない。ル
ナマリアには、文字通りすべての敵が同じに見えていた。

何人も魔女が笑っている。

現在の戦術において狙撃はまず加味されない。ある種の荷電粒子
を飛ばすビームは収束率、減衰率の関係から長距離狙撃には向いて
いない。レーダー精度の著しい低下も接近戦への移行を助長した。
ビーム・ライフルは精度よりも扱い易さが優先され、モビル・スー
ツはことごとくビーム・ライフルを装備するに至った。

狙撃は必要とされなくなった。当たられず、当たられたところで
モビル・スーツが携帯する火器である以上、ビーム・ライフル以上
では決してない。

戦術から狙撃という言葉さえ廃れようとしていた。

ドッペンホルン・ストライカーという火器がある。現代では珍し
い実弾銃器であり、それは妥協の産物であった。ミノフスキー・ク
ラフトを搭載したバック・パックの爆発的普及はモビル・スーツの

急速な世代交代を招いた。ミノフスキー・クラフトを搭載しないモビル・スーツは旧型に追いやられ、ストライクダガーもその中に含まれる。ストライカーは急速バッテリー内蔵型のものが新造され、ストライクダガーは辛うじてミノフスキー・クラフトを身につけた。バッテリーの容量の関係上、大型ビーム砲を使用することはできず、火薬式の実弾を用いるほかなかつた。

ドッペンホルン・ストライカーは妥協の産物である。

バッテリーの不足からビームを使用できず、新型モビル・スーツの量産も遅れていた。

すでに旧式に追いやられた機体と、技術革新に追いやられた火縄銃の頃からの枯れた技術。狙撃という概念は、ことモビル・スーツ戦術ではすでに迷信のように語られる。

時代に取り残された力と技をいまだに手放そうとしない。だから魔女と呼ばれた。技術の革新によつて忘れ去られようとしている力は魔術のようで、それを使う女は魔女に他ならない。2本角を意味するドッペンホルンを片方の銃身しか用いようとしない。だから片角。

片角の魔女。セレーネ・マクグリフ。

すでに枯れ果てた技術でもつて、狙撃という迷信を具現する。

実弾はビームほどの威力はない。しかし、ただ飛ばすだけならば有効射程はビームの比ではない。当てる。このあまりに簡単な概念を実行することは難しい。仮にできたとしたならば、それは魔術と呼ばれる。

枝が鋼鉄。土壤は毒。廃棄の森を踏みつけ、セレーネ・マクグリフが角を水平に倒す。他のセレーネ・マクグリフと何ら変わることはない。同じ姿をし、同じことをする。同じように放たれた弾丸は音を飛び越え、常識を打ち破り、他のどれとも違ひ命中する。

ザフト軍ピートリー級陸上戦艦は無限軌道を持つ。装甲のわずかな隙間に、高速で駆動する車輪の間に、弾丸が撃ち込まれる。ベルトを正確に破断させる。ちぎれたベルトは車輪に巻き込まれ艦体は大きく揺れ動いた。無事である反対側の無限軌道だけが推進力を維持し、軌道が歪む。まっすぐどころか思いの方向さえ描けなくなつたピートリー級は旧市街地の廃屋に激突し瓦礫の中に埋もれる。

動くことのできない戦艦は的以外の何者でもない。数機のセレーネ・マクグリフ機がとりつき、ビーム・ライフルとドッペンホルンが雨の下に火花を咲かせる。ボーパールの街から放たれた砲弾が次第にゼロ・インを済ませていく。その間、ピートリー級は動くことさえままならない。

次はどのピートリー級を狙おうか。そう、セレーネ・マクグリフは考えを弄ぶ。

これはゲーム。敵がセレーネ・マクグリフを倒せば、敵の勝ち。ただし、それまでに一定数のピートリー級が撃沈していればセレーネ・マクグリフの勝ちである。

ザフトもそれだけ、一刻も早く魔女を討ち、倒さんとする。

降り注ぐ雨よりも速くZGMF-1000Ζダガ機体を降下させていた。スラッシュ・ウイザードの戦斧を振り落とし、セレーネ・

マクグリフとは別のセーネ・マクグリフ機へと果敢に攻撃を仕掛けた。

本来ならばモビル・スーツを破壊できるほどの攻撃力を有する戦斧だが、雨に冷やされ、湯気を立てながら振るわれるそれはただでさえ通常よりも厚手のシールドに防がれる。泥を強く踏みつけ、それでも押し切ろうとしているジダへと、セーネ・マクグリフは横から弾丸を叩き込む。

ビームほど派手ではない一撃は装甲を突き破った途端に破裂し、細かな破片はそれぞれが膨大な運動エネルギーを抱えたまま内部機構をもちろんパイロットごとずたずたに引き裂く。

ジダは魔女の影を追い、そして魔女の魔法に刈り取られた。

「クピットは凄惨たる有様であつた。破壊されたハッチから雨水の混じつた泥が大量に入り込み、何十年も放置されていたかのようにことごとくを汚している。モニターは汚れ、碎けた液晶の隙間から入り込んだ泥が画像を大きく歪ませていた。

その歪つな像の中に、泥に汚されていない場所に血痕が点在している。パイロットのものだ。

緑のノーマル・スーツは茶に汚れ、フェイス・ガードは内側から赤く塗られ顔を伺い知ることはできない。ひび割れたフェイス・ガードの隙間から飛び出した血が、モニターを汚したのだ。

パイロットはまだ辛うじて息をとどめていた。震えながら持ち上

げられる手はスージが裂け、欠損した指から血が止めどなく流れている。

「何故この血が……、エインセル・ハンターのものでは、ない、のだ……」

「この呪詛と引き替えに、魔女はまた一つの魂を受け取った。

事切れたパイロット。それを乗せたままのジダが、わき腹に風穴を開けたまま、屍の山に疲れきった戦士のように背中を預けて動かない。

雨は降り続いている。

「こは、何から今までおかしい。全部が同じ機体、同じ装備。ケツテが戦術として確立した現在の戦争においても同じ性能の機体を揃えることは珍しくはないが、敵は隊列というものを組もうとはしなかった。悪く言えばバラバラに、よく言うなら柔軟に戦っている。変に小隊を組もうとしないからリーダーがあらず、そのため、シンは攻め手に迷っていた。

攻撃力を担うリーダーを2機の直掩が援護する。3機1組のケツテなら、リーダーを落とせばよかつた。今回もそのこと自体は変わっていない。攻撃力を担うセレーネ・マクグリフを撃墜すればそれでいい。

では、片角の魔女はどうしている。

対艦刀のビームに触れた雨粒が蒸発し、気化熱がビームの温度を引き下げる。ミノフスキーパーティ子に還元されたビームを攻撃に適する温度に上げるため余計なエネルギーが消費されていく。全体としては大したことのないロスであるはずが、雨にエネルギーを削られていくことは意味が悪い。

まるで、魔女の森に蝕まれていくよつで。

それが、すぐ目の前に魔女と同じ姿、もしかすると魔女本人であるかもしれない奴がいるならなおさらだ。

アクセルを踏み込む。インパルスガンダムが抜かるんだ地面を蹴つて前進する。いつもと勝手が違う。泥に足を取られてうまく勢いが乗らない。思えば、シンは地球で戦ったのは数えるほどでしかない。それも、こんな悪天候での戦いなんて初めてだ。

勢いの乗らない体から振るわれる大剣の勢いが乗るはずなんてない。さらに雨でビームの出力が少しどは言え削られていることもあって、袈裟がけに振り下ろした対艦刀はストライクダガーのシールドに防がれる。片方しかないドッペンホルンとバランスをとるために、普通のものより重厚で、ビーム・サー贝尔の一撃を辛うじて防ぐほどだ。

(でも、ビームに破壊できないものなんてあるものか!)

強引にアクセルを踏み込み泥を踏みつける。対艦刀を押しつけられたシールドは赤熱し、雨がその傷の周囲で沸騰する。もはやこれ以上もたないと判断したのだろう。ストライクダガーはシールドを捨てるなり飛び退いた。

意識を加速させる。翠星石の言葉を思い出しながら前へ出る。

相手はビーム・ライフルをこちらに向けた。これはかわす。接近する。敵がサーベルを抜くよりも早く攻撃する。撃墜する。

加速した意識が予定を立てる感覚。

敵のビームを身を翻してかわした。この時にはすでに体は前へと動いている。敵はかわされた、では次はサーベルでも使おうと考えているのだろう。しかしその頃には、インパルスのサーベルが横薙に振るわれていた。シールドを手放した左腕が肩越しにサーベルを掴む。抜いた。その瞬間に、インパルス右腕の大剣が相手の左腕を縦に斬り裂く。そして左腕にはもう1本の対艦刀がある。意識が敵の左腕を破壊したと認識した頃には、2本目のサーベルが敵の胸に深々と食い込んでいた。

泥と雨を吹き飛ばす爆発。まずは1機撃墜。

だが、気は上向かない。これが魔女だったのだろうか。それとも違うのか。無駄なことをしてしまったような感覚に襲われて、それが事実であったと知った時に嫌な気分にさせられる。

通信が、またピートリー級が1隻、無限軌道を狙撃されたと報告していた。魔女は生きている。ここにつじやなかつた。

(じゃあ、どこにいるんだよー?)

カーペンタリアの時もここでも、地球軍は戦艦を狙つてくる。地上に拠点を少ない数しか持たないザフトは足を叩けばすぐに音を上げると考えているんだろう。まさにその通りで、だからこそ、少し

でも早く魔女を倒さなければならぬ。

「他と違つ動きをしてる奴を見つければきっと…」

上空に行こう。高性能な高射砲を相手に飛行することは危険一実際、ザフト機の多くは地上に降りて戦っているようだーだが、全体を見通さなければ手当たり次第に魔女と戦わなければならなくなつてしまつ。

分厚い黒雲を田描して、ソード・シルエットのミノフスキーラフトを輝かせる。

100mほど上空に出た時、戦況は混沌としているのが見えた。ケッテを組まない魔女たちとの戦闘にザフト軍は混乱しているようだつた。小隊として戦闘するよう訓練された兵士たちは、3機もの機体を用いてわずか1機を狙い撃ちしていた。確かに効率的に撃墜はできるが、それは目標がわかつていた場合の話だ。目標がどこにいるかもわからない状況の中では数をあたらなければならない。小隊で活動しているということは、手数を3分の1にしているにも等しいように思えた。

「これじゃあ運だめしだ……」

魔女に当たつてくれることを祈るしかない。そうしているうちにも動けなくなつたペートリー級が攻撃にさらされている。

ストライクダガーの動きはどれも同じに見えた。魔女なんていないうつも思えて、反対に全員が魔女のようにも思える。

幸いシンに関心を示している機体はなによつだが、危険を冒して

まで上昇した意味はあまりなかつた。暗い空の中、1人で漂つていると、インパルスが突如警報を発した。未確認機の接近。下に、ばかり氣を取られていたが、横から白い機影が近づいてくる。

「あの時のウインダム！」

カーペンタリア湾で見た全身を白く染めた機体だ。手も足も出ないうちにやられた相手だ。あの時よりは強くなつたつもりでいた。それでも、超えられた氣はしない。また負けるかもしけない。そんな余計な考えが、反応を遅らせた。

以前ほど鋭くはない動きで、それでもシンの反応が間に合わない速度でウインダムが突進してくる。放たれたのは蹴りだった。インパルスの胸部にウインダムの両足が叩き込まれ、衝撃とともに途端にインパルスの動きは鈍くなる。ウインダムは踏みつける形で全体重を預けていくようだった。

いくらミノフスキー・クラフトでもモビル・スーツ2機分の重量を支えるのは辛い。無理をすればスラスターごと焼け付くことになる。スラスターとミノフスキー・クラフトの出力を落とすと、敵は予測していたように離れた。インパルスだけが落ちていく。

「くそー！」

急いで出力を上げても、落下は止まらない。徐々に落ちていく高度と落下速度。幸い、落下速度の方が先になつてくれた。ミノフスキー・クラフトの輝きが泥を吹き飛ばす。それほど地面が近い。落下は免れたが、それは落下のエネルギーを相殺できただけで、すぐには動けない。

反応の遅れを見逃してくれる相手ではなかつた。モニター一杯にウインダムの手が広がつた。掌に刻印された番号を読みとれてしまふほど近く、ウインダムの手がインパルスの頭を鷲掴みにする。

後ろへと押し出される感覚に悲鳴が漏れた。だが、背中から叩きつけられる衝撃には歯を食いしばつて耐えてみせた。

どうやら馬乗りにされているらしい。メイン・センサーは手で塞がれてしまつているが、サブ・カメラにはウインダムの姿が見えていた。武器を手にしている様子はない。

(何がしたいんだ、こいつ……？)

訳がわからず相手の出方をうかがう他なかつた。声が聞こえてきたのはその時だ。

「他と明らかに違つ動き。あなた、シン・アスカ？」

聞き覚えのある声で、それでいてどこか確信がもてない。たつた一度出会つただけの相手の声によく似ていた。

「ヒメノカリスなのか……？」

機体を接触させ、装甲の振動を介しての接触通信は触れていなければ話すことができない。そのため、ヒメノカリスはある周波数を告げてきた。聞き慣れない周波数で、シンはインパルスの設定を変更する。これで、話 able ことになった。

「確認させて。ステイングを殺したのは、あなた？」

名前はもうはっきりと覚えていない。ただ、ヒメノカリスが言つていた、フィンブル落着を阻止しようとして戦死したパイロットのことだらう。以前と同じように口の中が乾く感覚を味わいながら、声を絞りだした。

「縁のイクシードに乗つてたなら、きっと間違いない」

殺したのは俺だ。そう告げた途端、何かが変わつた。声を聞いた訳じやない。モニターに姿は映つてなんてない。

「あの時の私にはあなたを殺す動機しかなかつた。今の私にはあなたを殺す資格がある！」

考へてる余裕はなかつた。

ミノフスキー・クラフトの強度を一気の上昇させる。機体に無理をかけてまでインパルスは弾けるように体を起こした。跨つていたワインダムを突き飛ばすと、ワインダムはすでにビーム・サーベルを抜いていた。相手の方が突然の事態に見舞われたはずであるにも関わらず、攻撃はヒメノカリスの方が早い。

抜かるんだ泥を踏みつけてワインダムが前へ出るとともにサーベルを振るう。対艦刀で受け止めるど、泥 何故かこの周りには産廃がほとんどなく、開けた平地になつていた でふんばりがきかず鍔迫り合いの形で動けない。インパルスと敵にそつ極端な出力の違いがないことも原因だらう。

戦いにくい敵だ。少し動きを見ただけでもわかる。ヒメノカリスは強い。動きを読んでみようにも、攻撃を仕掛けてみようにも、うまくいかないという嫌な予感がまとわりついた。言葉で説明するこ

とは難しいが、相手が強いと動きの中にそれを感じる」ことができる。それが感覚として危機感をもたらしてくれる。

「どう動いても勝利に繋がるイメージが持てず、動くに動けない。ただ剣と剣とで互いの動きを潰し合いつ。

「君のお姉さんに会つた！ ラクス・クライン議員だ！ エインセル・ハンターは君の本当のお父さんじゃないんだろ！」

「本当？ 遺伝子の繋がりがないだけで大切な人を偽物呼ばわりしないといけないの？」

「それは違うけど！ なら！ どうして君のお父さんは君を戦わせるんだ。利用しているだけじゃないのか？」

出力では「こちらが上とは言え、少しでも気を抜くと押し切られる恐れがある。声が自然と大きくなつた。

「私が望んだことだから。私はお父様のためだけに在りたい。お父様が望むなら剣になつて、お父様が望むなら盾となれればそれでいい」

「そんなおかしいだろ！ どうして子どもが親の所有物のよつて扱われなきやいけないんだ」

踏み込みすぎている。そのことは自覚できても、どうしても言葉を抑えることができない。ヒメノカリスのしていることも置かれている状況も見過ごすことができないでいた。

ラクス議員に言われたからじゃない。ヒメノカリスを救つてやり

たいだとか、そんな大それたことを考へてるからじゃない。

ヒメノカリスのことが、自分と重なつて見えた。このことがわかつてゐるのは何もシン自身だけではなかつた。

「それはあなたのことでしょう」

氣を張るシンに比べるとヒメノカリスの声はあまりに澄んでいて、心の奥底にまで入り込む。

体が浮かび上がる感覚は、何も動搖ばかりが原因ではない。当て身をくらわされ、浮き上がったインパルスがその背中から泥の中に倒れたからだ。ビーム・サーベルを発生させたままの対艦刀が地表に触れ、ビームの熱量が泥を爆発的な速度で泥を巻き上げる。インパルスが立ち上がった頃には、その全身が泥で汚れていた。

「調べたのか、俺のこと……？」

「家族は母親のマコ・アスカ一人。父親はなし。マコ・アスカはあなたを一人で産んだ。結婚歴も離婚歴もない。あなたには父親がない」

仕事人間だった母のことが、たつた一人の家族だった母のことが思い出される。4年前、大西洋連邦のオープ侵攻によつて殺された、エインセル・ハンターによつて殺された母のことが。

「あなたの母親は望んであなたのことと産んだのは間違いない。でも、あなたを望んでいたとは限らない。血の繋がりだけが、あなたと母とを繋いでる。それが、あなたの言つ本当の親？ でも、あなたはコードィネーター」

豪雨は、それでもインパルスにまとわりつく泥を削ぎ落としてはくれない。

「やめろ……」

作り替えられたものとしても、原型となつた受精卵は確かに母由来の卵が使用されている。ヒメノカリスが言つてることは一つ正しいことなんてない。事実であつたとしても、認められることなんて何一つとしてなかつた。

「やめろー。」

これ以上何も言つたな。言わせない。

モビル・スーツが携帯するには過剰とも思える1対の大剣を力任せに振るう。実体剣としても重さだけでモビル・スーツを両断できてしまえるのではないかと思える攻撃を、ウインダムは受け流すよういかわすと、勢いを残した一撃は地面に食い込む。ビームが泥を爆発させる。

「お前に何がわかる！　俺と母さんの何が！」

攻撃する度にかわされ、その度に泥が爆発する。雨がふつて、泥が跳ね回る。戦う2人の姿は見る間に汚れていく。互いに互いを汚しあつているように。

「それでもあなたにはわかるの？　私とお父様のことが！」

「セレー・ネさん……」

「戦闘中はかけてこないで」

必死の思いでかけた電話は、言い訳を聞いてもらつこともできな
いまま切られてしまった。もう一度かけなおすこともできず、ソル
は携帯電話を懐に戻す。

見上げる空は、格納庫の天井の縁を通して降り落ちる雨が見えて
いた。格納庫の内と外を境にして、濡れた滑走路と乾いた床、戦場
と安全地帯とが分け立てられているように思える。

ソルがいるのは、もちろん濡れていらない側、安全な方だ。

外からは雨の音に混ざつて爆発や砲撃の音、金属同士が激突する
音が繰り返されている。そして、内側には飛行機の駆動音が響いて
いた。

今1機の飛行機が飛び立とうと準備を進めていた。安全な場所か
ら安全な場所へと移動するために。

軍用の大仰な飛行機の横で、エンジンの音もかまわず話をしている
エインセル・ハンター代表の姿があった。安全な場所に籠もって
いる。そのことに負い目を感じるソルとは違い、まったく物怖じし
た様子はみられない。

ソルは意を決して話しかけることにした。

「エインセル・ハンター元代表……」

話をしていた機関士とはちよつと会話が途切れたらしかつた。ハンター代表はあっさりとソルへと関心を向けてくれた。ソルの方は、代表について離れないステラ・ルーシェという少女がつい気になってしまったが。

(軍人としては若すぎるな)

代表の娘という少女も出撃している。

今格納庫でエンジン音を響かせる飛行機は、しかし脱出のためのものだ。

「今もあなたを守ろうとたくさん的人が戦つてます。それでもあなたは一人で尻尾を巻いて逃げるおつもりですか？」

敢えて不躾な言葉を使ったのは挑発の意味もある。

「はい。フォイエリヒはお任せします。あなた方の技術なら、フォイエリヒは必ず輝きを取り戻すことでしょ」

冷静な言動が気に障らないはずがない。自分のために戦う人々を見捨てて自分だけ逃げようとしている。それは重大な裏切り以外の何者でもない。彼らのことを信じているなら待てるはずだ。待たなければならぬはずだ。

「あなたは自分のしていることが……」

わかつていいのか。問いつめたいといふ思いはソルの足を進ませる。つい力がこもったその足取りは、周囲に不安を抱かせるほどで

あつたかもしれない。

ソルは突然腹部に鈍い痛みを覚えた。予期しない衝撃に、体が後ろへと傾く。尻餅をついた形で上体を肘で支える。床に座り込んだソルの上に跨るようにして、少女ステラが拳を振り上げていた。

「わあああああ～！」

瞳に涙を浮かべて、必死の形相を作りながらソルを殴りつけようとするステラ。意識が追いつかず、防御することもできない。ただ殴られると呆然と考えていた。

殴りつける手が突然止められた。寸でのところで、ソルは殴打を免れたのである。ハンター代表が、ステラの手を後ろから止めていた。

「ステラ」

怒りがこゝそりと抜け落ちて、残されたのは涙する少女の顔だけだ。ステラはさめざめと泣きながらハンター代表にすがりつく。その過程で、ソルから離れた。ハンター代表が優しげな手つきで少女を抱き上げると、ステラはこの温もりを手放さないとばかりにその胸にしがみついた。

ブルー・コスマスをかつて束ねた男は、少女を抱きしめたまま、ソルを見下ろしていた。侮蔑でも皮肉でもなく、ただ平然と。

「申し訳ありません。この子はかつて暴動によつて両親を失つています。そのため、興奮するとその時の恐怖がフラッシュ・バックするのでしょうか。このように攻撃的な行動をとつてしまします」

何とも間抜けだ。少女には、ソルの行動は大切な人への敵愾行為にしか見えなかつたのだろう。いつまでも尻餅をついたままでいられず、ソルはゆっくりと起きあがつた。

エンジン音がうるさい中、少女のすすり泣く声だけは妙に耳に届く。

「私には、あなたがわからない。あなたは魔王と呼ばれている。特にプラントにとって、あなたは不俱戴天の仇敵にも等しい。それに、あなたは多くの人に愛される。それは何故なのでしょう？」

このステラはさることながら、セレー・ネもヒメノカリス嬢もこの男のために命を惜しまない。

これは悔しさなのだろうか。多く愛されたいと望んでいるわけではないが、信頼を置く女性が敬意を惜しまない相手が自分でないということは、ソルの心をひどくかき乱した。エインセルが優しくステラを抱くことと対照的に。

「私は、世界を救いたい。しかし私にはそれほどの力はありません。助けを必要としています。私のしていることは世界を分けることにも等しいのです。敵と味方に、非協力者と協力者に、犠牲にする者とされる者に。私は仲間には最大限の敬意を、敵には絶対的な破壊を惜しみません」

「それは、正しいことなのでしょうか？ 自分に媚びてくる人間だけを守り、従わない人間を滅することが？ あなたは、それを正しいことだとお考えですか？」

それでは自分と価値観の排他的に排斥しているだけにすぎない。そんなものは正義と決して呼べなければ、仲間思いと美辞麗句で片づけるにしても貧相だ。

「思いません。だから私は滅ぼされなければなりません。ただ私を否定する敵ではなく、ただ私を肯定する味方にでもなく。復讐者にして復讐者ではない者に、敵であり敵ではない者に、何より愛を知る者に、私は滅ぼされなければなりません」

「私には……、あなたがわかりません」

これまでに見たこともない目をしていた。ただ美形というだけではすまない。自信に満ち溢れているというのではなく、しかしその瞳は臆するところを知らない。悠然と水を湛える湖が、人にどう思われようとその美しさを変えないように。生きた人間にこんな目ができるのだろうか。ソルへと向けられているはずの眼差しは、しかしソルを見てはいない。いつも他の何かを見ている。

(セレーさんは、ハンター代表が見ているものがわかっているのか……?)

そして、それこそが代表を敬愛する理由なのだろうか。何か言葉にできる思いはもうない。できることはただ自分がすべきことをするだけ。

「フォイエリヒガンダムは、確かにお届けします」

「感謝します」

涙にくれる少女を抱いたまま、ソルの疑念も疑惑もすべてを受け

止めていた。

「エインセル・ハンターを確認しました！しかし、敵の攻撃が激しく……」

すぐそばに着弾した。直撃でもしなければフェイズシフト・アーマーに守られたインパルスを破壊できるものではないが、衝撃にヒルダは思わず歯を食いしばる。

恐れはない。それどころか高揚まで覚えるほどだった。モニターには約300m離れた地点 格納庫だ。どうやら一人で逃げるつもりらしい のエインセル・ハンターが映し出されている。

敵が小隊行動をとらず、結果としてザフトも戦い方を大いに変更せざるをえなかつた。それが幸いしたのだ。戦いは混戦模様を呈し、戦線は混雑した。ヒルダの搭乗するインパルスはボーカールの街の近くにまで接近していた。廃棄物が積まれた山の上から格納庫をうかがえる位置にいる。開かれたゲートから、格納庫の奥を眺めることができるのだ。

問題は、ここから動くことができないことだ。

「無理をするな。俺の到着まで待て！」

「しかし……」

隊長であるアスラン大佐は頼りがいのある人物であると言えた。実力もさることながら、高い志を持つ。従うに値する人物である。

だが、事態は逼迫している。

瓦礫の山から顔を出し、滑走路の方をうかがう。即座に攻撃され急いで身を隠さざるをえなかつたが、一瞬ながら様子をうかがうことはできた。航空機はすでにエンジンを温めている。今すぐにでも飛び立つていくことだらう。いくらアスラン隊長のガンダムでも、敵の攻撃をかいくぐつて、加速する航空機に追いつくことは難しい。

眼帯の奥が疼いた。

「それでは間に合いません！ 強行します！」

「ヒルダ！」

（アスラン隊長、パラスアテネでの戦いは、悪いものではあります（アスラン隊長、パラスアテネでの戦いは、悪いものではあります）

フォース・シルエットの機動力を頼りに飛び出す。黒雲立ちこめる空に出た途端、攻撃は苛烈さを増した。ボーパールの街の高射砲に加え、ストライクダガーの攻撃が複数方向から迫ってくる。

ほんの一瞬でいい。ほんの一度でいい。あの悪魔を射程内に收める機会を与えてくれ。たとえ、この命を賭けたとしても。

しかし、現実は非情であつた。思いだけでは及ばない。

高射砲がインパルスの片足を捉えた。フェイズシフト・アーマーの輝きが空を照らし、それを目印にしたようにビームが殺到する。ウイングがへし折れ、腕がライフルごともぎ取られる。破壊のエネ

ルギーの一部が光として放出され、光の塊となつてヒルダは落ちていった。大地に叩きつけられ、止まらない勢いがインパルスの体で轍を刻む。

どこか産廃の上にでも落ちたのか、滑走路は見えない。モニターの半分が死んでいることも手伝つて、何より、片方しか見えない癖にその目に血が入つた。

「エインセル……、ハンター……！」

赤く染まつた視界の中でヒルダは手を伸ばす。そちらにエインセル・ハンターがいる確証なんでもはない。ただ奴に向かつて手を伸ばすという意志こそが重要であつた。

執念に憑かれ、血の氣を失つた亡者のような手が血に染まる視線の中を泳ぐ。

「貴様さえ、貴様さえいなければ……！」

舞い降りたストライクダガーのビーム・サーベルが、インパルスを刺し貫く。

もう、セレーネ・マクグリフも半分に減つてしまつた。

セレーネ・マクグリフはヘルメットを脱いだ。裂けた額から流れる血がヘルメットの中で異様な臭いを放つて嫌だつた。

どんな魔法も解ける時はあつけない。どれほど狙撃がうまかろう

と、それはビーム・ライフル未満の攻撃を誰よりもうまく当てることができるというだけだ。ストライクダガーと、ムーバブル・フレームも搭載されていない旧型に他ならない。

セレーネ・マクグリフの搭乗するストライクダガーはすでに4隻のピートリー級に甚大な被害を与えていたが、自身もまた左腕と頭部を失つほどの損害を被つっていた。

幸いなのは空に飛行機雲を引いて飛び去る飛行機の姿が見えたこと。

「エインセルは、うまく逃げたようね……」

雨はまだまだ降りしきる。

悪いことは現在戦つ相手。

命を失つた機械たちの墓場の中で、セレーネは青い翼を持つガンダムと対峙していた。ΖΖ-X3Ζ10ΑΖガンダムヤーデシユテルン。庭師を意味するゲルテンリッターの3号機であり、花園の花を守る騎士である。ゼフィランサス・ズールが造つた、正真正銘のガンダム。

(さて、どうしたものかしら……)

性能差は歴然としている。戦つてどうにかなる相手ではない。矢報いてもいいかもしないけれど、それではつまらない。魔法が解けてしまうから。

魔女は笑う。魔王様のことを思い浮かべれば、魔女はいつだって

笑うことができた。

「清き清浄なる世界のために。ねえ、私の愛する魔王様……」

ヤーテシュテルンが70tを超える重さがあるとは思えないほど軽々と飛ぶ。全身をミノフスキ・クラフトの輝きで包み、泥の中で戦っていたとは思えないほど綺麗な姿をしていた。その美しさをじっくり堪能して、反応できなかつたふりをして、セレーネはビーム・サーベルの輝きがコクピットに飛び込んでくるまで魔王のことを思い描いていた。

「セレーネ・マクグリフはビードー!?

4機目の中のセレーネ・マクグリフ機を撃墜した。頭部と左腕を失ったこの機体は、たやすく胴を斬り裂くことができた。他の機体と何が違うわけでもなく、これが魔女の機体だと判断するほどアスランは楽観的にはなれない。

全体すでに20機に手が届くほど のストライクダガーを撃墜したが、まだ10機以上が残されている。魔女はすでに死んでいるかもしれないし、まだ生きているかもしれない。最初に撃墜された1機がそうであることも考えられれば、最後の最後まで倒すことができないことも考えられる。

生きてこようと死んでいようと、魔女の魔術は残り続ける。

「アスラン。エインセル・ハンターはもうここにはいない。ボーパールは、ピートリー級をこれ以上失つてまで陥落させるべき拠点で

はない」

ピートリー級の防衛に当たっていたレイ・ザ・バレルからの通信だ。翠星石はモニターに無限機動を破壊され、集中攻撃を受けたピートリー級の姿を映していた。

（もし魔女が生きていればまた次のピートリー級が狙われる）

そして、死の確信を得ることができるのは、最後のストライクダガーを撃墜した時だらう。

苦いものでも嘔なんだけりアスランは顔をしかめた。勝利とは目的を果たすこと。ここ、目的とするHインセル・ハンターの姿はすでにはない。

「翠星石、撤退するよう勧告を出せ。これ以上の戦闘は、無意味だ」

サーベルとサーベルが、ビームの粒子をまき散らしながら激突する。それぞれモビル・スーツが振るうことができる限界の速度で武器をぶつけ合い、限界が訪れたのはサーベルの方だった。

ウインダムのビーム・サーベルが根本で破断する。インパルスの対艦刀はその前に中腹で切断されていた。2機とも一刀流であるため、まだそれぞれ右手に武器を残している。

意識の加速。それはヒメノカリスにもできるらしい。先回りはできず、しかしシンは必死に食らいついた。

残された大剣を両手で構え、力任せに振り落とす。ウインダムが構えていたビーム・サーベルを強引に巻き込みながら、対艦刀は地面に切つ先を激突させた。刀身が歪み、エフィールド内に保持できなくなつたビームが水を蒸発させ大気を膨らませ一際大きな爆発を起こす。

刀を振り下ろした無理な姿勢のままで耐えられる衝撃ではない。今日だけで3度目になる、背中から地面に叩きつけられる衝撃をシンは味わつた。

軽い脳震盪でも起こしたのか気分が悪い。

インパルスはどうやら尻餅をつく形で座つてゐるらしい。地面の起伏に背中のソード・シルエットが持ち上げられる形で上体が起きているのだ。そのため、モニターには前の光景が、ウインダムの様子も映し出されている。インパルスと同じように上体を起こして座り、何故かコクピットが開いていた。

パイロットであるヒメノカリスの姿は、インパルスが見下ろす地面の上にあつた。

「ヒメノカリス……」

行動にあまり意味は考へなかつた。ハッチを開き、雨と土の強烈な臭いの中へと飛びだした。コクピット・ハッチの上から見えるのは、2体の巨人に踏み荒らされた泥の大地と、そこに立つ桃色の髪の少女。ケーブルを頼りに地面に降りようとして、そうする理由がないことに気づいて足は止まつた。

シンの左頬の痣に降り懸かる雨は、ラクス議員と同じ綺麗な桃色の髪を濡らして、純白のドレスに水の染みを作る。早く雨の中から連れ出してあげたい。そんな衝動は、しかし決意には結びつかない。

「ここがどこか知ってる？ ここはユニオン・カーバイド社の工場があつた場所。ここから噴き出した毒がボーパールの街を襲つた。でも、あなたは毒にはなれない。毒にはさせない」

アッパー湖から北北東3kmに位置するここだけが産業廃棄物に覆われていらない理由がわかつた。ボーパールの街はここから南東方向、アッパー湖の東側に建造されている。汚染された場所にわざわざ新造したのは何かの皮肉だろ？

「もう一つ、あなたを殺す理由ができたから。あなたは、お父様を愚弄した」

表情のない人だと思つていた。感情を露わにしない人だと。今ここで、睨み上げられるまでは。

何も言い返すことができないシンをほつたらかしたまま、ヒメノカリスは振り向いた。倒れるワインダムの方へと歩いていくことをただ見送ることしかできない。

プラントの民は言ひ。エインセル・ハンターは悪魔だと。すべての戦争は奴が始めたのだと。持たざる者の妬みと惡意がエインセル・ハンターの手によつて戦争という現実に作り替えられているのだと。

娘は語る。戦いに繰り出す父を、あくまでも眞実の父親だと。

唯一わかっていることは、誰もが皆、エインセル・ハンターに強

烈な感情を抱いていとこいつこと。

インパルスの通信機からは、混線しているのか、ひつきりなしに通信が届く。敵の声も味方の言葉も、一向に衰えない雨音のなか聞こえてくる。雄叫びに断末魔、悲痛な言葉もそのすべてがエインセル・ハンターの名を呼んでいる。

「どいつもこいつも！ エインセル・ハンターの名前を叫んで死んでいく！」

この時代、誰もがエインセル・ハンターに憑かれていた。

雨は、一向にやむ気配を見せない。

もしも状態と位置を正確に知覚できる知性があつたなら、それはあまねく未来のことを占います。次にどの方向にどれくらいの速度で動くのかわかるからです。今を知ることが明日を知ることになるのです。それは不可能です。少なくとも、人のその身では。

人は知りません。今の現実さえ、だから明日の理想も見えない。

真実とは何でしょう。たやすく空んてしまつものでしょうか。今の現実のよう。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「Halation」

ラプラスの魔。人は今日を知らず、だから明日に怯えてすこす。

リリは一体どうだつただれり。少々風景が変わりすぎてすぐに気がつくことができなかつた。それとも、血が抜けすぎていて意識がはつきりしないせいだらうか。

以前の光景が思い出せないくらい無茶苦茶で、椅子も壁もそのことじとくが破片となつて壁に突き刺さり、床に転がつてゐる。ユカに落ちてゐるネジへと向けて、血溜まりがゆっくりと這つて行く。届くかな、届かないかなと眺めていると、結局、血は届いてしまつた。

全部、僕の血なのに。

変なことばかり考えるのは、きっと出血がひどいから。自嘲してみようか。そうエピメテイウム・ユニーは考えた。もつとも、体が痛くて声をあげて笑うなんてできなかつた。

立つてこることもできない。体を起こすこともできなくてトダカに支えてもらつていた。どれほど光景が変わつてしまつても、のぞきこんでくるこの顔は忘れない。もう初老なんて呼んでもいい年なのに、この顔かえつて滲さが増したように思える。

(そんな今にも泣きそうな顔なんて似合わないよ、トダカ)

「氣を確かに。深い傷ではあつません」

自分も破片で顔を切つて血を流しているといつのに、トダカは人のことばかり気にしてゐる。本当に眞面目一邊倒な男で、だから嘘を

ついに慣れていない。

「嘘が下手だね、トダカ。出血量は十分すぎる……。それに、嫌なところに破片が入つたらしー。せつと……、僕を狙つたものだよ……」

床に寝ころび、上体をトダカに支えてもらつている。この状態から指一本動かすことも辛くてできない。体中が痛んでどこが痛いのかわからない癖に致命傷を受けたことだけはわかる。

「ラクス姉さんかな、それとも、サイサリス姉さんかな。どちらにしても、手抜かりはないだろ? な……」

少し話しそぎたみたいだ。咳こんで、息に冷まれる吐血が服を汚した。鮮やかな血で、呼吸器から出血しているらしい。どうりで息苦しいと思つた。

乙女たちを少し脅かしそぎてしまつたらしー。それとも、初めから口をつけられていたのだろうか。Hピメティウムはオープという国に肩入れしすぎていたから。

クライン家が1000年をかけた夢のためなら、し過ぎるといつことはない。でも、その夢を実現させではない。1000年がかりの復讐は成就されてはならない。

「トダカ……。カガリに伝えてほしい。すべてを、話している時間はないけど……、だからたつた2つだけ……」

痛みをこらえてトダカの腕を掴む。白い軍服が血で汚れてしまつて、悪いとは思つけど、氣を使つているほどどの時間は残されてない。

「ジョージ・グレン……、DS、SD。……それから、オープをお願いするつて……」

ヴァーリに生まれて、ダムゼルに選ばれた。そんな姉を逃がすために、妹は自ら命を絶った。ダムゼルに選ばれなかつたから。価値がないと教え込まれていたから。だから、価値のある姉を助けようと自ら命を絶つた。

死ぬ必要なんてなかつたのに。価値がないなつてことなかつたのに。

天国は、クローンでも受け入れてもらえるんだろうか。もし入ることができるなら妹になんて言って謝ろう。せっかく助けてもらつた命を無駄にしてしまつたことを。

「フリー……ジア……」

口の端から血が零となつて零れ落ちた。

「これが、エピメティウム様の最期です」

カガリ・ユラ・アスハに与えられた執務室には、重苦しい雰囲気が流れていた。カガリが流しているのだ。カガリが座る机の前、腕を吊り、顔中を包帯と絆創膏まみれにした男、トダカ一佐が姿勢を最初から最後まで崩さないまま、話を終えた。

エピメティウムの側近だったこの男は、意識を取り戻すなり病院

を抜け出したそうだ。今頃医者が探している頃だらうと[冗談みたいなことを本気で言つていた。

軍人らしく、簡潔かつ明瞭。非の打ち所のない報告である。「苦労だつた。そんな言葉をかけて、カガリはトダ力の背中を見送つた。気を利かせて、何か慰めの言葉の一つでもかけてやるべきだつたのかもしれないが、今のカガリにはこれが限界であつた。

部屋を出るトダ力に入れ替わつて入室したのはユウナ・ロマ・セイラン。神妙な面持ちで、カガリのことを気にかけている様子が伝わつてくる。それが何か気に障つたことはなかつた。それでも、カガリは自分というものを抑えられない感覚が突如として噴き出した。

「私が甘ちやんだつたということなんだな！ エピメディウムのことを持つていればいいと思ってた！ のんびり構えていればいいと油断していた！ プラントになんて行かせるべきじゃなかつた！！」

近くに手頃なものがなくて机を叩きつけた。ドミナントとして優れた筋力はくだらないくらいの音をたてた。机の上に置かれたプロジェクトターが浮き上がりつて左右に震えるように動く。通常、ゲルテンリッターが姿を見せていない時はセンサーの類は働いていないはずだ。だが、今回ばかりは緊急事態と判断したのか、慌てた様子で金糸雀が光の柱の中に姿を現す。

何とも息苦しい。興奮のあまり呼気が整えられず、少しでも気分を落ち着かせようと肩で息をする。今日ほど椅子の背もたれをありがたいと考えたことはなかつた。椅子に深くこしかけながら氣を落ち着かせようとしているカガリのことを、金糸雀もユウナも不安げに見つめていた。

「カガリ……」

気を遣つてくれる許嫁に感謝できるほどの落ち着きはまだ取り戻せていない。

「ユウナ……。DSSDとは何だ？ ファースト・コーディネーターとどんな繋がりがある？」

ひどくぶっきらぼうな口調であつたことを自覚する。単に気分の問題だけではなくて、ファースト・コーディネーターのことを思い出したせいなのかもしれない。ジョージ・グレンは、選民思想が鼻につく男だと子どもながらに辟易したものだ。

そのことを知らないユウナは努めてカガリを落ち着かせようとしているようであった。

「DSSDはDeep Space Survey and Development organizationの略称で、その名の通り、深宇宙の資源開発を目的とした公社のことだよ。多数の国と地域から支援を受けている国際団体としても機能してる」

「創業はC.E.17年。元々はジョージ・グレンが木星圏探索のために設立した会社で、その後NGOとして活動を続けていたから

ユウナと金糸雀。2人の言葉を聞く内に、そいつえばそんな団体のことを聞いたことがあることを思い出す。もう何年も前の話だが、往復4年をかけて木星に希少元素を採集に向かう輸送船について聞いたことがあった。使われた艦はツォルコフスキ。あのジョージ・グレンが人類初の木星探査に用いた宇宙船であったことが今更ながら

ら思い出される。

ファースト・コーディネーターとDSSDはあまりに容易に結びついた。

「プラントとの関係は？」

「DSSDには各国が資金援助をしている。額は様々だけど、一番多いのは大西洋連邦。ただ、これは国家規模を考えれば不思議はない。問題は、金糸雀、お願いしていいかな？」

プロジェクトから金糸雀の姿が消え、代わりに棒グラフが表示される。3次元的な人の動きをたやすく投影して見せるプロジェクトはグラフ程度簡単に描き出すことができる。

グラフには、各国から毎年相当な額がDSSDに支出されていることがわかる。

「これが各国の支出資金。今度は国費との割合を示して」

棒が長さを変え、縦軸の単位が額からパーセンテージに変わると、各國は軒並み棒の長さを短くした。だが、中にはかえって長さを増した国が散見される。3カ国。どれも何かと馴染みのある国だ。

「そう、オープ首長国とスカンジナビア王国、そしてプラントが抜きんでてるんだ」

プラントはともかく、他の2カ国は、ヴァーリが進入していた国だ。スカンジナビア王国は誰が行っているのか知らないが、オープではEのヴァーリが、エピメディウム・エローがプラントのための

活動を続けていた。

Hピメディウムはここのことをお伝えようとしていたのだろう。

(だから殺されたのか？ DSSDの秘密を守るために

「DSSDとは、一体何なんだ？」

ユウナは答えない。金糸雀がいつの間にか姿を取り戻している。2人とも、さすがにそこまでは知らないらしい。反対に、何故詳しいのかも疑問だ。

「妙に詳しいが、どうして知ってる？」

現オーブ国家元首の息子は笑つて答えた。

「無視するには大きい額だからね。調べたくなるさ。Hピメティウムが関わってるならなおさらね」

「どうして話さなかつた？」

気分はなんとか落ち着きを取り戻しつつあったが、機嫌はかえつて悪くなつた気がする。肘掛けを指で叩くと、いい音がする。どんな木材が使われているのかわからないが、穴をあけようかともくろむくらい力を込めてやる。

「本当に必要になつたらエピメティウムが話すだろ」と考えてたから

「お前は許嫁よりもその姉妹を優先するのか？」

ら

鋭い眼光を飛ばしてやる。今回はナイフは使わないでやろう。そんな甘さがいけなかつたのかもしない。ユウナは何とも曖昧な笑みにその顔を作り変えた。

「普段外じゃ親の決めた許嫁なだけだつて吹聴してゐつて聞くけど、少しは認めてくれたのかい？」

やぶ蛇とはこのことだろ。とりあえず椅子を回した。背もたれに体を隠すことにして。顔はともかく、声だけならいくらいでも「まかしがきく」はずだ。

「ユウナ、DSSSDについて詳しく調べる。いいな」

安心したよと、残念そととれる様子でユウナが息を吹く音が聞こえた。ともかくDSSSDについて調べてはもらえるようだ。足音が聞こえて、ゆっくりとユウナの気配が遠ざかっていく。ドアノブに手が掛かった音がして、ようやく氣を抜くことができる。

そう考えていただけにこれは完全に不意打ちだった。

「カガリ」

突然名前を呼ばれたのだ。

(慌てるな。何も慌てる必要はない)

胸に手を当てると妙に鼓動が早い。それを抑え込むように手に力を込めた。

「父さんはきっと世界安全保障機構への加入を進めようとする。もし君が望むなら引き留めてもいい。もちろん、流れを覆することはできないとは思うけど、世論に訴えかけるなり、気持ちの整理をするなり時間を稼いであげることくらいはできるかもしれない」

「ね、根回しは嫌いだ」

ようやくユウナが部屋を出していく。扉が閉められた音を確認して一息つくことができた。ただ、どんな顔色をしているのかまでは確信が持てないため、振り向けずにいる。机には、金糸雀がいるはずだ。とぼけたようでいて、その実 Z - X 2 0 0 D A ガンダムトロイメントに由来するゲルテンリッターを見くびるつもりにはなれない。

力ガリの案じた通り、金糸雀は思いもやらない着眼点を持つていた。

「ねえ、かつちゃん。D S S D の O r g a n i z a t i o n 、O はどこにいったのかしら?」

「知るか! それに、私をかつちゃんと呼ぶな!」

思わず振り向いて、赤くなつた頬を見せてしまった。

「邪魔するぞ」

まずは男が一人、部屋に入るなりソファーに無遠慮に腰を落とした。その声ははつきりと通り、男の職業を連想させる。聞き違えが

許されない職業、あるいはその経験者。

「本当に邪魔だ。とつとと帰れ！」

続いて女が一人、立ち上がるなり出口を強く指さした。口調こそあららしいが、その澄んだ声から淒みは感じられない。

2人はまるで別々の世界にいるかのようである。女だけがただ喚き散らし、男は平然とジャケットの内ポケットからプロジェクトを取り出した。男は、イザーク・ジュールは気心しれた歓待を受けたようにくつろいだ様子でソファーにもたれかかっていた。女、デンドロビウム・デルタは怒ることに疲れたように椅子に座りなおした。肘を机につき、その手の上に置かれている顔は穏やかでない。エピメディウムとは正反対のオッド・アイがイザークを睨んでいた。

「」くありふれた応接間にそぐわない張りつめた空氣の中で、プロジェクトターが起動する。光の柱の中、少年を思わせる青い衣装を身につけた赤眼の少女が浮き上がる。白い髪のその上に乗せた帽子を摘むと、帽子をくるりと翻し恭しくイザークへとお辞儀をする。

「おはようございます、マスター」

その表情はかわいらしさにより凜々しく、固く結ばれた口元、しつかりと閉じられた瞳は主の許しあるまで礼を尽くす決意が現れている。その姿にはイザークさえソファーに座りなおさせた。

「蒼星石」

「はい、マスター」

「『デンドロビウム』にも話をしておけ。俺たちはあいつを守らなければならぬらしい」

蒼星石はイザークにしたのと同じように頭を下げる。この慇懃な態度は『デンドロビウム』もまた、座席に着かせた。不機嫌そうなることは変わらずとも、ただ声は控えめとなつた。

「早く用を書いて早く帰れ」

「俺が今軍学校の教官をしていることは知っているな。教え子から頼まれた。インパルスガンダムについて教えてくれ」

「そんなことなら国防……」

サイサリスの手が投げやりに振られている。国防委員会の方へ行け。』の言葉は、蒼星石がぴしゃりと遮る。

「門前払いされました」

イザークが国防委員会の本部から蹴り出される様子でも想像していたのか、しばらく手を止めていた。

「お前の母さん元評議会議員だろ」

「引退しています。それに、議会はクライン派が牛耳っています」

動き出したのもつかの間、『デンドロビウム』は再び動きを止めた。再起動の立ち上がりは鈍い。

「サイサリスは……」

「血宅に押し掛けたら変質者として通報されました。警察をまぐのはさすがのマスターでも骨でした」

インパルスガンダムの開発者をあたるのは、真っ先に思いつかなければならぬほど当たり前のことだった。デンドロビウムは、変質者として追い回されるイザークを笑うべきか、それとも思いつきをこと、「とく実行に移す行動力を誓めるべきか悩んでいるようにも見えた。

「……で、私の方に来たつて訳?」

蒼星石だけが頷く。

「残念だが、私はインパルスを運んだことはあっても詳しい訳じゃない。溺れる奴は藁をも掴むつていうが、結局藁は藁だ」

無駄足だったな。そう言いたげに口元を緩ませ、デンドロビウムはイザークへと手を振る。早く帰れ。こう言いたいのだとわからぬイザークではないが、それを敢えて無視するとともに耳つきを細める。

「では、次の質問だ。ヒメティウムが死んだな」

デンドロビウムもまた瞳孔を拡散させ、わかりやすく雰囲気を変えた。ただ蒼星石だけが落ち着いた表情を続ける中、部屋の空気は重みを増した。

イザークの淡々とした口調が響く。

「俺の記憶ではお前とヒメティウムは双子とも言える間柄で、関係も悪くなかった。ヒメティウムの死はできすぎている。プラントがやつたな」

椅子に座ったまま、『デンドロビウムは何も語りたいとはしない。強く結ばれた口元で不機嫌さを強調しながら、椅子に深く腰掛ける。そんな口のヴァーリを、イザークの視線は片時も離すことはない。

「お前は何故動かない？」

「勝手な憶測でものを語るな！　あれは、……事故だ！」

「姉妹の死を事故だから仕方がないと納得できる女か、お前が！」

『デンドロビウムの声をイザークの霸氣がかきけして、部屋には再び沈黙が染み渡る。激情に駆られながら、しかし誰も立ち上がりうとはしなかった。ただ棘持つ眼差しだけが混じり合つ。

「出でいけ……」

小さな少女の始まりは、やがて怒鳴として終わる。
「とつと出でいけ！」

その手は肘掛けを強く掴み、不釣り合いな瞳は開かれることなく閉ざされた。

それからわずか数分後、イザークはその手にプロジェクトを抱えたままプラントの人工の空を見上げた。特に意味はない。特殊ガラスが張られた狭い空が見えただけだ。

視線を地上に戻せば大型のフォーク・リフトが前を横切り、積み上げられたコンテナが並んでいる。人よりも機械が存在感を示す倉庫街の光景が見えるばかりだ。

要するに、イザークは追い出されたのだ。すぐ後ろにはデンドロビウムが事務所を構える建物の扉がある。倉庫らしく、鉄製の小さなものだ。鍛の浮いたこんなものが、イザークから一つの可能性を奪っていた。

「さて、どうしたものかな、蒼星石？」

言葉ほど悩んだ様子はない。いざとなれば国防本部に侵入してデータを盗み出せばいい。そんな冗談とも本気ともつかない考えを巡らせながら腕の中の蒼星石へと視線を落とす。

「僕はマスターが望まれることをするだけです」

ゼフィランサス・ズールと同じ顔をした男装の少女は努めて冷静である。双子の姉にあたる翠星石は口やかましいと聞いている。ずいぶん違うものだ。

そんな蒼星石の目がイザークとは別の方向、路地の向こう側を向いていた。ゲルテンリッターは映像ではなくプロジェクターに仕込まれたセンサーで視認しているため、視線と視界は必ずしも一致しないが、それでも視線と映像を合わせることを好んだ。

何かがあるということだ。イザークが確かめるため首を回すと、男が一人歩いていた。こちらに向かってくる。デンドロビウムに用があるのかと考えたが、軽く手を振ってきたところを見るとどうやら

「ライザーグームがあるらしい。」

「人形を連れたお兄さんは君のことだね」

見るからに怪しい男だ。目つきが鋭く、それでいて瞬きが極端に少ない。見ようと思えばつなぎにも見えるジャケットは倉庫街の雰囲気とけ込んでおきながらそれでいて街中で見かける普段着としても通用しそうだ。合法非法問わず、他人の秘密を盗み見る職業であるとうかがいしれる。

「そう警戒しなくてもいいよ。怪しい風体は自覚しているが、怪しい者じゃない。私はケナフ・ルキー。綺麗なお姉さんから言づいて頼まれていてね」

ケナフと名乗った男は何故か、蒼星石のことを眺めていた。

戦闘中でさえなければ戦艦も一般の船舶と変わりない。静かで、廊下を通る人は疎らだ。

シン・アスカは壁に背中を預けて立っていた。時折体を動かしては左胸につけられた勲章が服に引っかかるで気に障る。鉄十字勲章。ザフトで功績をあげたものに授与されるこの勲章には、どうしても愛着を持てないでいる。

勲章が嫌で体を動かさないと、やはり気になるのは壁の脇にある扉だ。特に珍しいものでもないスライド式の扉はレイ・ザ・バレル隊長の個室だ。今はいらないらしく、待つていなればならなかつた。

いくら疎らでも人がいないわけではない。シンの前を通り過ぎていつたちょうど5人目がレイ隊長だった。シンに気づいていないはずはないが、気になった様子もなく扉脇のリーダーにキー・カードを通して。開く扉をぐぐり抜けようとする隊長へ、シンはこの機会を逃すまいと体を壁から離した。

「あの、レイ隊長！ 聞いてもらいたい」とがあるんですけど……」

「餌をやった犬に懐かれた気分だな」

レイ隊長がわずかに口を開き、笑ったような顔を作る。初対面の時のこと�이思い出される。あの時も言つてることは正しかつたが言い方はどこか意地が悪かつた。

「そ、そりや、相談に乗ってくれるかもって期待していますけど、そんな言い方……」

「話してみる。場合によつてはまた餌を放つてやれるかもしれない」

不満を表現するシンに対しても、レイ隊長は今度は含み笑いのような表情を向けてきた。そのまま部屋に入つていいくのだが、扉の縁に手をかけてしばらく閉まらないようにしてくれているところを見ると、部屋に入れてくれるということらしい。

フロイズの部屋は、別に特別なことはなかつた。シンの部屋よりも広いが、レイアウトは同じ。ベッドに机。最低限のものしかないのなら、体を伸ばすことができる広さがあればそれで十分なものかもしれない。

机から、この部屋唯一の椅子が引き出されて、レイ隊長はその椅子をシンに譲った。自分は机に直接腰掛け、シンは入り口の近くで椅子に座る。

視線で促されて、シンは話を始めた。

「実は、知り合いが何か悪いことしてるみたいで、説得、みたいなことしてみたんです。そしたら、あなたに何がわかるのかって怒鳴られました。そんな親しい間柄じゃないんですけど、なんだか放つておけなくて」

「それはお前の態度に問題がある」

「いきなり、全否定された。

「いや、でも……！」

「お前は言つたな、親しい間柄ではないと。では、それが悪いことだと何故わかる？ 結局、自分の勝手な思いこみで悪いと決めつけただけではないか？」

返す言葉がなかつた。真っ直ぐな隊長の視線から目をそらしては駄目だとわかりながらつい視線が泳ぐ。わずかだが視線から逃げた。そこに追い打ちをかけるようにレイ隊長の言葉は続く。

「そのことは自分で調べたのか？ それとも誰かに聞いたのか？」

ラクス・クライン議員に聞いた。決してすべてを信じた訳ではなかったが、いざヒメノカリスと対面した時、シンは自分の体験と重ねすぎていたのかもしれない。足りない情報を、勝手な憶測で補つ

たのだ。

(「これじゃルナマリアと同じだ……）

与えられた情報や考え方を自分のものであつたかのように思つてゐた。

盗み見るように見たレイ隊長の顔は、普段通り落ち着いていて、少なくともシンを評価しているようには見えない。

「要するに、言われたことを鵜呑みにして俺が正しいと押しつけた結果怒られた、そういうことではないのか？」

声の一部に妙な抑揚がついたのは、ため息をつかれたからだろうか。

「調べることも大切とは思いますが、それじゃあ、遅すぎる」と
だつて……」

「物事には段階と順序というものがある。階段が10m先だからと
壁をよじ登りたいなら別だが」

ヒメノカリスに少しでも早く気づいてもらつたかった。そのこと
もレイ隊長に言わせれば焦りすぎということらしい。決して叱られ
ているという訳でもないのに妙に喉が乾く。隊長の言葉を聞かされ
る度に自分の浅い考へに気づかれるからだろうか。

狭い部屋の中をシンの視線だけが泳いでいる。

「自分の目で見て自分の頭で考へることだ。誰かの考え方を自分の

考えと違いに、得意氣になることは愚かなことではないか

そんなことわかつっていたつもりなのにできなかつた。主觀が邪魔をして、自分にとつてわかりやすい現実と都合のいい事情をいつの間にか作り上げていた。それこそ、プラントが地球やアブティエルに対して行つてきたこと、シンが最も嫌つていたことだつた。

地球の奴らがプラントを攻めるのは持たざる者の嫉妬であつて、それをブルー・コスモスに簡単に誘導されている。そんな馬鹿な奴らに媚びてきたのがアブティエルなどと。

実際、地球になんて行つたこともない奴が声高にそう叫ぶ。

そしてシンもまた、プラントの民なんてそんな奴ばかりだと考えていた。

机に座る隊長は不思議だつた。初めて会つた時、まるで感情を見せない機械のような人に思えた。シンに必要に注目することなんてなかつたからだ。それが侮蔑ではなくて感情的になるシンとの衝突をさける為の行動であつたのではないかと思い始めたのは、つい最近のことだ。

隊長は本当に変わつてゐる。シンは口元が緩むことを感じた。こんな考え方を巡らせている間も、隊長は何も言わずに待つてくれた。

「隊長つて、何だか変わつてますね。プラントの正規兵なんてみんな横柄な奴らばかりなのに……」

「横柄な奴ら?」

「あ、いや、横柄な態度をとる人が多くて。それで、隊長は、何か違つなつて」

手振りまで使って慌てて取り繕う必要があった。

（まるで学校の先生みたいだ……）

ザフトの正規兵が横柄であつた事実は事実として認めてよいが、それを頭ごなしに否定してはならない。人を否定するといつては、自分を肯定することに他ならないからだ。

レイ隊長がかすかに笑つたように思えたのは氣のせいだろうか。

「俺も元々プラントに住んでいた訳ではない。生まれはプラントだが、ほんの2年前まではコーラシア連邦のツングースカに住んでいた。俺も実際のところはアブディエルだ」

アブディエルがどうしてフェイスをしているのだろう。聞いても話してはもらえない気がして、聞かないことにした。

「詳しい事情は話せないが、俺とお前はあらゆるところによく似ている。同類のよしみとして、一つ教えておこう。グラディス艦長には手の内をさらすな」

「どうしてですか？」

これはつい聞いてしまつた。レイ隊長は、やはり少し笑つているように見えた。

「詳しい事情は話せないと呟つただろ？」「

やはり、隊長はどこか底意地が悪い。

「ヒメノカリスのことはもう一度考え直してみる。人は情報を必ず外から『えられる。しかし鶴呑みにはせず、咀嚼、そして吟味することだ』

「そうか、じゃあ、はじめからシンがソード・シルエットの使用を許可されていた訳じゃないんだな？」

アスラン・ザラは展望室から海を眺めていた。窓際に立つたまま、すぐ隣にはルナマリア・ホークが並んでくれている。しかし、ここはミネルヴァではない。同型艦であるラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの艦内だ。

ルナマリアには作戦を共同する部隊としてパラスアテネに着艦してもらっていた。翠星石は連れていない。その理由は、ルナマリアが隣にいることと重なっている。

そのルナマリアは、口元に手をやつて少し考えたように見せてから答えた。

「はい。入ったばかりの頃は連携ができないからって、フォース・シリエットを使わされました。でも、どうして？」

「いや、ソード・シリエットを使うパイロットは珍しいから。要するにミネルヴァに正式に加わることが決まった頃にソードの使用が

許された、そういうことかな?」

「はい」

今度考えるのはアスランの番だった。

窓の外、アデン湾の海とアフリカ共同体領ソマリア地区の岸辺が見えていた。パラスアテネは紅海を北上し、エジプト運河に入ろうとしている。地上最大の激戦区とも言われる地中海を目指す中、アスランはラクスに言われたシン・アスカの監視を続けていた。

(赤服が優先的に選ばれるインパルスのパイロットの中でもソード・シルエットを選択する者は多くない。それもまだ経験の浅いシンが)

ケッテ・リーダーはそんなに多くは必要ない上、扱いが大変難しいからだ。鉄十字勲章を与えられるほど優れた功績をあげたのもまぐれではないだろう。

本国から正式にミネルヴァに加わることが許可された時からシンは比較的自由な行動が許されるようになったと言える。そして、そのおかげでシンは功績を上げ、その戦果はプラント本国で報道されたほどなのだと語つ。

「デュランダル議長の差し金か……」

アブディエルと潜在ナチュラルの不満は鬱積していると聞く。その不満を抑えるための広告塔として利用していると考えるのは単純すぎるだろうか。

(何にせよ、ラクスの興味は正しかったということかな)

「……さん」

「……ああ、何だい、ルナマリア？」

少々考えごとがすぎた。話しかけられていることにも気づけなかつた。慌てて首を回すと、飛び込んでくるのは不安げに見えるルナマリアの顔だ。

「ヒルダさんのこと、残念でしたね」

ボーザールで戦死した部下のことが思い出される。アスランの制止も聞かずエインセル・ハンターを討とうとして、ヒルダは死んだ。あまりに呆気なく。

「彼女も覚悟はしていただろう。最後まで訳は話してもらえなかつたが、エインセル・ハンターを倒そうと人一倍熱意を傾けていた」

プラントでは珍しいことではないが、だからこそ、わざわざ語る必要をヒルダは覚えなかつたのかもしれない。

「私、まだヒルダさんのこと、よく知り知りませんでした」

それは仕方がないと、アスランはルナマリアの肩に手を置いた。

ヒルダ、ヘルベルト、マーズ・シメオンの3人とはカーペンタリア基地で合流したばかり。共同作戦を遂行中とは言え母艦は異なっている。満足に顔を合わせることもできなかつたことだらう。

「それが戦争だ、ルナマリア。喧嘩をして後悔して、次は仲直りを

しょひ。次は一緒にどこかに行こう。それでも、その約束が果たされまるまで2人が生きている保証なんてどこにもない」

準備が整つてから死ぬ。そんな日常でさえ難しいことが戦場で果たされるとしたら奇跡と言つてもいいだひ。

「少しでも早く戦争を終わらせよひ、ルナマリア」

「」にはアデン湾。地球の海は素直に美しいと思える。西岸は海賊たちが船を襲うために出帆し、東岸を北上すれば100年にわたつた宗教紛争の地、パレスチナに入る。地中海は、その霸権を争いいくつもの国々が剣戟打ち鳴らした。

座れれば何でもいい。そう考えてアウル・ニーダが選んだのは何が入っているのかもわからない小さな箱だった。人が抱えるくらいの大きさは座るにはちょうどいい。汗を拭う。呼吸を整えながら見上げると、愛機GAT-X255インテンセティガンダムがたたずんでいる。

箱は他にいくつも並んでいて、その上に光の柱が立ち登る。赤いドレスの真紅が突然声をかけてきた。

「ずいぶんお疲れね、アウル」

見上げたままでまつたく気づかなかつた。本当は少しひっくりしたが、叫びそうになつたのを無理矢理呑み込んだ。真紅は本当に神出鬼没で、ついさっきまでプロジェクトーなんてなかつたはずだ。

(何なんだよ、この呪い人形は……？)

真紅は相変わらず無意味に紅茶を飲んでいる。

「あのさ、ハウinz・オブ・ティンダロスって……。あんなことできる奴いるのか？」

「少しばかり理解できたかしら？ エインセル・ハンターがどれほど鍾愛と怨嗟を受けているのか。魔王と呼ばれているのがが」

「正直、だせえあだ名つて思つてたけどな」

ガキ向けのファンタジーじゃないんだ。いい歳して魔王なんて呼ばれているエインセルを見くびつていなかつた訳ではないような気がする。ヒメノカリス・ホテルが自分よりもエインセルに近いことの嫉妬もあつたんだろ。

こんなこと、真紅に話したら子どもだと笑われるに決まつてる。だから正直むすつとしたまま黙つておくことにした。

真紅がカップを左手に持つた皿に置く音がした。そんなことまでプロジェクターは再現しようとしている。

(ゲルテンリッターって、ほんと何なんだろうな?)

人より人らしいことがあつて、本当にこんな小人がいるような、人形が動いているように思える時だつてある。つい気になつて真紅の方を見ようとすると、真紅よりも先に黒い軍服を着た男と女が近くにいることに気づいた。格納庫は何かと雑音が多い。そのせいでもう一度くるまで気づけなかつたし、男は声を大きくして話しかけてき

た。

「おひさん誰だよ？」

「おひさん誰だよ？」

見たことがあるような気がする。でも、特徴らしい特徴がなくて、切りそろえられた前髪がどうも似てない。女性も見覚えがある。たしかミコーディー・ホルクロフトとか言つたろうか。

答えてきたのはミコーティーの方だ。

「アーノルド・ノイマン大尉よ。この隊の副隊長なんだから覚えときなさい」

そう言つてミコーディーもまた箱の上に座つた。アウルとは真紅を挟んだ場所だ。まあ、アーノルドのおひさんは立つたままだけど。

「で？」

「アウル」

真紅が声に怒りを混ぜ込んでいた。態度が悪いと叱られている。眞紅のことをそのまま聞くのはしゃくだから、言葉遣いを変えても態度は変えないでやつた。

「用は、何でしゅう？」

真紅だけがため息をつく。副隊長殿は特に気にした様子はない。

「次の作戦について決めておきたい。君も知つての通り、この艦はジブラルタル基地を目指している」

「わざわざアフリカ大陸大回りしてだろ。何で運河使わねえんだ?」

喜望峰なんて大回りの航路使つてゐる。こうして馬鹿してゐ間に、ヒメノカリス姉ちゃんとステラはあのエインセルに連れられて赤道同盟のボーパールに遊びに行つた。アウルだけが留守番だ。

「スエズ運河のこと?」

ミコーディーが箱に寄りかかつた状態の座り方をしてた。

「ならもつと世界情勢を勉強しなさい。スエズ運河は現在ザフトが実効支配してる。一応汎ムスリム同盟の所有で、表向きは船舶の行き来は規制されてないけど。ま、商船はともかく、軍艦でそこを通過うなんて奴はいなきゃね」

「加えて、アフリカ大陸北部のアフリカ共同体は親プラント派の多い国よ。今地中海を横断しようとすることは、わざわざ戦場のただ中に飛び込むようなものね」

「アフリカ大陸は歴史が複雑だからね。それに、汎ムスリム同盟も今プラントとことを構えたくないとするのが本音だろう。スエズ運河の交通料は重要な収入源だ。戦闘で破壊されるわけにはいかないだろうから」

ミコーディー、真紅、アーノルドの順番に話が続いていく。

「大洋州連合は汎ムスリム同盟を非難もしているわ。カーペンタリ

ア基地を出立したボズゴロフ級がスエズ運河を通ることでアフリカ共同体に物資を効率よく送ることもできれば、ジブラルタル基地に派兵することも容易になるものだわ」

「ユーフラテス川とライン川の争いはオスマン帝国の時代から続けれられたきたことだから。一朝一夕に解決することではないのかもしれないね」

「でも、ここで少しばザフトに痛い目みてもらわないと大洋州連合の機構脱退もありうる話でしょ、副隊長。内部にも外部にも不満が向けられてるって言ひつじ」

「そうだね。大洋州では東アジア共和国への不満も根強い。いつまでカーペンタリアを野放しにしてるんだってね」

「結局、それぞれの国の利害が対立して、世界安全保障機構も一枚岩になり切れていないのが現状なのだわ」

「ザフトにとつてもマスドライバー奪取の至上命題だ。アフリカ共同体、汎ムスリム同盟の協力が得られる内に地中海で足場を固めたいというのが本音だと思うよ」

「さつきから意味わかんねえよー、何話してんのか、わかるよに話せよな！」

アウルは思わず叫んだ。3人が3人とも訳の分からぬ話を耳の前で続けられて、アウルの我慢は限界を迎えた。

真紅とミュー・ディーはなんだか呆れたような顔してアウルを見ている。アーノルドも仕方ないな、そんな表情でアウルを見下ろして

いた。

「じゃあ、作戦内容とセットで話そうか。真紅、君は地図も投影できるそうだけど、お願いでできるかい？」

おもしろくないと足を組んで座るアウルの前で真紅の姿が世界地図、アフリカ大陸から地中海にかけてのものに変わった。

「IJの地方のだいたいの勢力図はわかるかな？」

「ああ……」

アフリカ大陸は2色に色分けされていて、南側は南アフリカ統一機構。北側がアフリカ共同体だ。南アフリカ統一機構が青く塗られていて、北は赤。きっと赤は敵だ。その色がアフリカ大陸から右に行つて、ヨーラシア大陸の西のはじっこまで染めている。確かにここには汎ムスリム同盟がある。どちらもプラントよりの行動が多いって聞かされてる。

アーノルドはまず浅くうなずいてから話を始めた。

「現在、大西洋連邦軍、南アメリカ合衆国軍が大洋州連合軍と協力する形でアフリカ共同体のエル・アラメイン攻略に動いている。こ¹こは軍事拠点として重要であるばかりでなく、スエズ運河にも近い」

地図の上に矢印が描かれて、大洋州連合から地中海をわたって南のアフリカ共同体に延びていく。たしか、エジプト地区だとか言う場所だ。その北側にエル・アラメインと表記があるが、どんな街なのかも知らない。

「仮に攻略に成功したなら、楔を打ち込む形でザフト軍をアフリカ大陸の東西に分断できる上、橋頭堡としても機能することになる」

「さうに言つたら汎ムスリム同盟、アフリカ共同体への強烈な恫喝としても機能するわ。目と鼻の先に剣をぶら下げられていい思はしないでしょ？」

「要するにザフトに味方する奴らの目の前でザフトをこじてんぱんにしてやればいいってことだ、多分。」

でも、ミコーディーの奴はきっと信じてない。目を細めて、なんだか面倒くせそうにも見える顔してアウルのことを見てる。

「アウル、わかつてる？」

「あ、当たり前だろ。で、それと俺がどう関係するんだ？」

今度はアフリカの西の海に点が表示されて、そこから地中海の入り口にまで線が伸びていく。

「僕たちはジブラルタル基地に入った後、攻略作戦に合流する。それに君は加わるかどうかを聞いておきたい。ネオ隊長とも話したけれど、君は確かに軍人だが、その前にエクステンデッドで、そして子どもだ。拒否権は特例として……」

「行くに決まつてんだろ！　こつちは戦いたくてうずうずしてんだ」

それなのにヒメノカリス姉ちゃんは戦わせてくれなかつた。見上げれば、すぐそこに修理されて新品同然のインテンセティガンダム

汎用型がある。せつねえ、パークを持ってきてくれてのが、このアーノルドとか言つおつさんだったような気がする。それを教えてくれたのが、たしかミュー・ディーだ。

副隊長を立たせて自分は座つてゐる。そんないい身分の女はどうかいい加減な顔をしてゐる。

「アウルだつけ？ あんた何でそんなに戦いたいの？」

ステイング・オークレーのことを思い出してゐる間、少しだけ返事が遅れた。

「ダチがへましたんだよ。その尻拭いくらいしてやらないとな

「要するに復讐つて」と

つまらない。そんなことでも言つたそつてミュー・ディーはアウルのことを見なくなつた。真紅は元の姿を取り戻し、アーノルドは特に何も言つことなくこれを離れようとしていた。

「あんたは何なんだよ？」

「馬鹿げたこと聞くのね。今の戦場には2種類の人間しかいないわ。私もその1人。でも、きっとあんたは違う。戦場になんてでなくてもいいんじゃない？ 危ないだけでしょ」

言いたいことを言つだけ言つてミュー・ディーは立ち上がる。別にとめようなんて思わなかつた。何と言われようと、アウルの決意は変わらない。地図から少女に姿を戻した真紅は、そんなアウルをみつめたまま、何も言おうとはしなかつた。

「解析の結果、小惑星フィンブルは火星と木星の間のアステロイド・ベルト由来だとわかりました。よつて、プラントに取材に行きましたよう」

事務所所長の机に座り、優雅なアフタヌーン・ティー インスタントで、まとめ売りされているような安物だ、残念ながら を飲んでいるジェス・リブルめがけて突き出されたのは1枚の書類と、突飛な提案であった。

企画主はアイリス・インディア。書類の横には桃色の髪を束ねた青い瞳の少女の顔がある。アイルスの顔を見る度、誰かに似ているような気がするのだが、今はそのことよりもすべきことがあった。

所長として毅然とした態度をとることである。

「確かにプラントは外宇宙の探索に熱心で、情報は得られると思つけど……。いや、駄目だ。事務所所長としてそんなこと認められないと」

職員は4人。その内3人が女性という男にとって肩身の狭い現場である。いつも主導権を握られっぱなしで、所長としての威儀を取り戻さなければと常々考えていたところだ。

少々乱暴にティー・カップを置く。強く茶器の鳴る音が、しかしより一層かしましい事務所内でむなしく響いて消えた。

「ナタルさん、じついう時、留守電でいいのかな?」

大きなキャリーバッグを担いで事務所を横断するフレイ・アルスター。書類の束を抱えたナタル・バジルールとすれ違う。

「主だつた連絡先に長期取材旅行に出るとすでに連絡してある」

「ならしいか。でもプラントって久しぶり」

明らかに、もう荷造り始めてますと主張していた。フレイは自分の机の上から小物を手に取り物色している。どのお気に入りを鞄に仕込ませようか悩んでいるのだろう。

「まさかまた戻ることになるとは思っていなかつた。アイリス、君の荷造りが遅れている。そろそろ手をつけるべきだ」

そうしている内にナタルが隣の部屋に消えていく。しつかりした経理はガスの元栓でも確認に行ってくれたのだろう。

「はい」

済んだ声で返事を済ませたアイリスが去っていく。戦う資格さえ与えられなかつたジェスを残して。

「俺、所長なんだよな……」

やり場なく漂う視線は机に落ちた。そこにはナタルが総括し、フレイの運転で、アイリストに写真を撮つてもらつたものをジェスがまとめた記事がモーニング・サン誌の片隅を飾つていた。そのさらに片隅に書かれた、執筆者ジェス・リブルの名前が空しい。

ある偉大な王は剣こそが至上と語り、ある偉大な魔法使いは鞘こそが有用であると諭しました。すべてを断つ剣とすべての災いを遠ざける鞘。どちらかを選ぶとしたらあなたはどちらを選びますか。すべてを切り裂く黄金の剣ですか。すべてを守る青い薔薇の鞘ですか。

剣を選ぶなら、あなたは王国を失うほどの災いに晒されるかもしれません。

鞘を望むならあなたの最期は裏切られ、非業のものかもしません。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「刀と鞘」

フォイエリヒ。それとも両方欲しいですか。

第21話「刀と鞘」

ゼフィランサス・ナンバーズ。鬼才ゼフィランサス・ズールがブルー・コスモス代表の願いを受けて開発した地球製モビル・スーツの始まりにして究極、始祖にして、未だにこれを超えるものは存在していない機体。

超える機体は存在できない。

人が乗り込むことができない機体に意味はない。人が扱うことができない兵器に意味はない。

すべての兵器は人と言つ足枷に縛られている。

仮に、人が扱うことを前提としない機体があったとしたなら、人を超えることが予定される機体があつたとしたなら。それはすでに兵器ではなく芸術。実用性など一切加味されることのない夢幻の存在に他ならない。

ある人は言った。あれは夢。ゼフィランサス・ズールが眺め続けた黒い夢なのだと。

魔王は降り立つ。軍馬に跨り、同族殺しと銘打たれた忌み刃をその手に。馬の名は悪夢であり、その姿は太陽に刃向かう炎。真名をその殺戮の決意で覆い隠した魔王の名は、エインセル・ハンター。

黄金は輝きを取り戻した。

展開されたコクピット・ハッチに手をかけながら、ソル・リューネ・ランジェは外を眺めた。鏡ほども磨き上げられたZ-Z-X300A-Aフォイエリヒガンダムの装甲は日映い光を放っている。その眩しいほど光から目を守るように、ソルはコクピットの中へ視線を移す。

「突貫でしたが、質は一切落としていません」

全天周囲モニターの球形コクピットの中に座るお人形、ヒメノカリス・ホテルはコンソールを叩く手を止めて、かすかに口元の力を緩めた。

「いい。これならお父様に上げられる」

合格のようだ。ソルは自分よりも10は年下の娘の様子に安堵の気持ちを覚えた。純白のドレスに桃色の波立つ髪、表情にえしい顔はたとえようのないほど人形のようで、何より子どもである。

(こんな子どもまで、エインセル代表のために命を投げ出した)

この娘が戦場に出ている間に、父であるエインセル代表はこのボーパールを脱出した。娘・この娘の父にしては代表は若すぎるため、養女なのだろう・・を一人残して。

それなのに、ヒメノカリスはそんな状況を嬉々として受け入れている。

話しうきつかけを得られないまま、口だけ開けてしまい、喉の乾きを覚える前にようやく言葉が口を出してくれた。

「エインセル代表は、一体どんな人なのでしょう? セーラーネさんは、人の命を逃がすために死にました。僕には、それが理解できません」

返事はない。機嫌を損ね、無視を決め込まれてしまったのだろうか。そう考えた矢先、突然青い双眸がソルを捉るために動く。

「あなたは身勝手」

声に冷たい印象を覚えるのはこの少女の癖だろうか。何にせよ、好意的ではないようだ。

「お父様とあなたは違う。あなたは周りの中心にいようとしている。でもお父様は中心にいることを周りから望まれている」

何を言われているのかわからない。考へ、何か言わなければと口を開いたタイミングで、ヒメノカリスは言葉を続けた。

「ボーグ侵攻で、ザフト軍はモビル・スーツ13機、ピートリ一級を4隻失った。この街に戦略上の価値はほとんどないのに」

「確かに全体で見ればそろともしません。しかし……」

「お父様は一人でも多く救おうとしている訳じゃない。誰もが不幸にならない世界のために戦つてる」

その言葉は矛盾してはいないのだろうか。誰もが不幸にはならない世界が人に死の犠牲を求める。そして何より、誰もが幸せになれる世界ではないということが、妙に気に障る。

訪ねても答えてはもらえないだらけ。そんなことばかりは理解できぬようになつてゐる。

「じゃあ、これはすべてこでまちうつてこくから

ソルを見た時と同じように視線だけが動いて、コンソールを見つめ直す。ヒメノカリスはソルと話をしている間、コクピットから立ち上がりうとさえしなかつた。

ため息をつく氣にもなれない。

「まだ調整がすんできません。後3日ください。このままでは敏感すぎる」

「そんな時間ない。すぐにもうつていく

拒否されることも、何となく察しがついていた。エインセル・ハンターという男に容易に近づけるはずがないと、どこか諦観としてわかつっていたのかもしれない。

胸ポケットから取り出した記憶媒体をそつと差し出した。

「お約束通り、データは一切漏らしていません。これが最後のデータです」

ヒメノカリスが受け取ってくれたことに、白状するなら安堵を覚えた。何も受け取りを拒否されると考えていたわけではない。ただ、個人で抱えるにしては、この機密は重すぎる。

フォイエリヒは、世界と繋がっているにも等しいのだから。

「フォイエリヒは、何から何まで想像を超えたものでした。決戦兵器というものがもしも実在するならば、それはこの黄金の巨像のことと言ひのでしきうね」

「アウル！ お姉ちゃんが！ お姉ちゃんが……！」

スペングラー級MS搭載型強襲揚陸艦の格納庫にて出撃を今か今かと待ちわびていたアウル・ニーダは、突然ステラ・ルーシェに抱きつかれた。明らかな涙声で、抱きつかれた照れくささよりも異常なことが起きていることの驚きの方が大きい。

アウルはステラを引き離してその力覚を見ようとするが、ステラは泣くばかりでなかなか離れてくれる気配がない。

「どうしたんだよ？ 泣いてちゃわかんねえだろ！」

「ただ」とないことくらい、アウルでも察している。ステラもうだが、格納庫がいきなり慌ただしさを増した。まだ出撃までは時間があるはずだ。

いつも余裕こいてるネオ・ロアノークも黒いノーマル・スーツに着替え格納庫に駆け込んできた。その癖サングラスは外していない。真紅のプロジェクターがその手にはあった。

「アウル、ボーパールからの輸送機が戦場に迷い込んだそうよ。ヒメノカリス伯母様とフォイエリヒが乗っているわ」

「何でそんなとこでいんだよー!？」

作戦会議をこんな場所で終わらせてしまつつもりなのか、ファン・トム・ペインの面々がアウルの周りに集まっていた。

「汎ムスリム同盟が領空侵犯の一撃制限を行つた。そのため黒海上空を抜けたようだ。制限そのものは珍しいことではないけれど、今回は運が悪かつた。ザフトの部隊に発見されたらしい」

ネオが今回の騒動について話すと、アウルはつい声を大きくした。

「罷でもほりれてたのかよ！？」

「いや、ザフトとしても偶然の遭遇のようで部隊規模は小さい。問題は、飛行ルートだ。君も知つての通り、黒海では両勢力の基地が入り乱れているから」

アーノルド・ノイマン副隊長殿の言葉に、アウルはつい、知らねえよ、んなこと、と心の中で考えた。黒海が地中海の東側の海で、今回戦闘が予測されていたダーダネルス海峡の北側にあると聞かされたくらいだ。現地の事情なんて知るわけがない。

そんなアウルをほつたらかしにして、ネオが話を進めていく。

「そのため、ヒメノカリスが採用するルートは恐らくダーダネルス海峡を渡るルートだわ。地中海に出られれば、敵をまける可能性も高くなる」

(一人くらい、よくわかつてねえ奴混ざつてんだろ……)

「どうつもこいつも事情は完璧に把握してますなんて顔してる。

「アーノルド、ミュー・ディーはアウルと先行して欲しい。僕たちはザフトの動きを警戒しながら後に続く」

了解。敬礼をした2人が自分たちの機体、GAT-333ディー・ヴィエイトガンダムへと走っていく。すぐに続きたいところだが、アウルはゆっくりと自分の胸を見た。ステラはまだ泣いていた。

誰かが肩に手を置いてきたかと思いきや、よりもよってシャムス・コーヴの奴 - - 他にこんなことしそうな奴なんていない - - だつた。

「これは人生の先輩からのアドバイスだ。女を泣かす男はろくな死に方しねえぞ」

言つてることはふざけてるのに顔は大真面目だからたちが悪い。追いかけてやるうにもステラが離れてくれない。どうしたらいいかなんてわからないが、とりあえず、両肩に手を置いて、なだめてみる。

「姉ちゃんは、絶対に連れて帰つてくる。だから早く泣きやめ、ステラ」

絶対に、ステイニングの時のように勝手にいなくなったりなんてしないから。

「輸送機か。時期と機会は一致しているが、フォイエリビが搭載されている根拠はないな」

NN-X3N10ANガンダムヤーテシユテルンのモニターに映し出される地図には輸送機の飛行予想ルートが描かれている。このままいけば両軍が睨み合つただ中を通り抜けることになる。

これが重要な機密を積載している保証はない。だが、フォイエリビが運び込まれた時期と経路は一致している。確信は持てずとも、可能性として捨て去るにしては惜しい。

悩むアスラン・ザラの目の前を縁の妖精が通り過ぎる。赤い瞳の妖精はモニター上に敵軍の位置を書き込んだ。

「アスラン、地球軍は明らかに動きを見せてるです」

総攻撃に打つてでたにしては部隊全体の動きは鈍い。だが、単に輸送機の回収に出向くにしては動きが早い。

「確かに敵が動いている以上、こちらも打つてでないわけにはいかないな。翠星石、司令部に連絡しておいてくれ。今動ける部隊を斥候として出撃させる。仮にフォイエリビならばエインセル・ハンターもいるはずだ」

C.E.75年を迎えた現在、モビル・スーツ戦術において大きく変わったのはその大半が飛行能力を獲得したことにある。ミノフスキー・クラフトの恩恵により、スペックを落とすことなく、量産機でさえ軽々と空を飛ぶ。

これにより、戦術は大きな変更を余儀なくされた。戦車や戦闘機など通常兵器と呼ばれる旧来の兵器群ではモビル・スーツに対抗できず、反対にモビル・スーツで通常兵器を相手取ることはオーバースペックにもほどがある。結果、通常兵器は通常兵器の相手に専念し、モビル・スーツの相手はモビル・スーツが務めている。

輸送機の援護に出向いたはずのロアノーク隊が遭遇したのは、当然のようにモビル・スーツ部隊であつた。

「隊長！ スウェン！ 敵さんのお出ましだ」

シャムスの言葉を待つこともなく、NN-X5N000KYガンダムラインルビーンのモーターにはヅダとNGMF-953ゼーゴックの混成部隊が映し出されていた。

ゼーゴックは足をエビぞりに折り曲げ、簡易変形形態のまま。ヅダにしても機動力を優先したブレイズ・ウイザードを装備している。斥候か、それとも輸送機を狙っているのか、どちらにせよ、すべきことは決まつていてる。

「各機、ゼーゴックを優先的に狙つてくれ。足の速い敵は厄介だ」

「了解！」

スウェン・カル・バヤン。シャムス・コーヴの了承の声を聞きながら、ネオは機体を加速させた。

敵の密度は薄い。速度に優れるゼーゴックが先行し、ヅダが目に見えて遅れている。ほんの少し脅しつける。そんな気持ちでネオは

獵犬を呼び起こす。

放たれるビームに意味はない。ハウinz・オブ・ティンダロスの体得者にとって、サーベルはライフルほどの間合いを持つ。敵の攻撃を命中と回避の限りない境界でかわしながら、ラインルビーンはゼーゴックとすれ違う。縦に裂かれたゼーゴックの燃える破片が飛び散り、爆発する。

スウェン、シャムス、2機分の2連ビーム・ライフルが不用意に前進しようとしていたゼーゴックに次々と炎の針を打ち立てる。

わずか3機の機体を前にゼーゴックの2個中隊が目に見えて動搖を見せた。変形を解き、モビル・スーツ形態になるとともに速度を落とす。ゾダと合流しようとしている。その利点である速度を、これで敵は自ら捨てた。

装甲を輝かせながら、ラインルビーンは敵の周囲を大回りに飛行する。空を選んではゼーゴックから放たれる光の軌跡が青天井へと吸い込まれ、海上に躍り出でては降り注ぐビームが水柱を突き立てる。

ゼーゴックは完全に翻弄されていた。

ラインルビーンに気を取られすぎては2機のディーウィエイトが執拗な攻撃を加える。慌てて隊列を乱した1機が瞬きの間にラインルビーンに接近され、強引に胴を裂かれる。

戦場は大きな変革を迎えていた。ミノフスキー・クラフトの搭載によって機動力が拡充され、結果、射撃の命中率は低減の一途を辿った。攻撃力とはすなわち効率的な敵機撃墜効率を意味するに至り、ビーム全盛の現在においてさえ各国は格闘機の開発の手を緩める気

配を見せない。2個中隊よりもエースをリーダーに据える1個小隊の方が高い攻撃力を有する。

そんな荒唐無稽な現実が、ガンダムの名の下に具現化されている。ゾダの部隊が追いつくまでの間、ゼーゴックたちはわずか3機のガンダムによつて完全に足止めされていた。そしてザフトが待望の合流を果たす頃には、すでに水平線の内側にジェット・ストライカーを輝かせるGAT-01A1ストライクダガーの姿があった。

勝負は振り出し。しかし地球軍優位にスタート・ラインは引かれていた。

片肺の輸送機が黒煙をたなびかせながら空を飛ぶ。その軌道は安定せず、徐々に高度を下げている様子が見て取れる。辛うじて飛行しているにすぎない鈍重な輸送機に追いすがることはたやすい。

ブレイズ・ウイザードを装備したZGMF-1000ゾダが軽快に飛行する。

輸送機はよく使われる型のもので、大きな箱に翼と機首を取り付けたような巨体へとゾダが肉薄する。一体何を運んでいるのか。確かめたいという欲が働いたのだろう。ライフルを使用しようとはせず、肩に取り付けられたシールドの内側から小型のビーム・アッカスを取り出し、一気呵成に切りつける。輸送機後部のハッチ・モビル・スーツの積載可能な輸送機らしく、ゾダよりも大きなものだけがビームによつていとも簡単に斬り裂かれ、内部が露出する。

さあ、一体何をため込んでいる。体当たりを食らわせるようにハツチをこじ開け、格納庫へと足をのろす。ザフト系モビル・スーツの特徴であるモノアイが決して広くはないはずの格納庫を見渡そうとして、真正面から顔面めがけて迫りくる何かに気づくことが遅れてしまった。

何かが突き立てられる。何かがヅダの頭部を貫き、そしてそのまま振りおろされる。頭部から胴体にかけてビームの輝きが走り、70tを超える機体が輸送機から蹴り落とされた。顔を潰され、首から腹にかけて風穴を開けられた機体は中空で爆発する。

一体何が起きたのか。仲間のヅダがモノアイを輸送機に向ける。そこにはビーム・サーベルの輝きとモビル・スーツのシルエット。敵モビル・スーツが破壊されたハツチから身を乗り出すようにして肩越しにレールガンを構えていることに気づき、その瞬間にわき腹を貫かれた。輸送機に引き離されまいと限界に近い時速500kmで飛行していくはかわしようがない。同等の速度で吹き付ける風圧がヅダの胴を引き裂き破片と残骸をまき散らしながら落ちていく。

格納庫に立つGAT-04ワインダムの背にはヴァイス・ストライカーガが装備されている。かつてGAT-X105Eストライクノワールガンダムによつて実用姓が試験されたヴァイス・ストライカーを扱うのはかつてと同じくヒメノカリスによつて振るわれる。

「『J』の機体はお父様のもの。あなたたちが触つていいものじゃない！」

ワインダムの後ろには、モビル・スーツの搭載を可能にするほどに巨大なコンテナが、さも棺のように黒い姿をたたえていた。金の文字で描かれた、ZZ-X300AA。魔王のための棺である。

機体が突然揺れる。これまでにも続いていた慢性的な振動に突如として混ざり込む激震。この輸送機はもう長くはもたない。そう確信させるに十分な衝撃が格納庫を揺らした。

ドレスの姿のままワインダムのコクピットに座るヒメノカリスはパイロットの声を聞いていた。

「Jの機はもう持たない。積み荷はここで降下をせん。後のことば任せたい」

「ワインダムの集音マイクがエンジンのものと思われる爆発音を広い、感覚としてわかるほどに高度が落ちていく。

彼らは死を覚悟している。だからヒメノカリスに託そうとしている。青き薔薇が崇める力のために。

「……青き清浄なる世界のために」

「青き清浄なる世界のために」

祝詞を言い交わし、すでに大破しているハッチが形式的に開かれる。コンテナがゅつくりとスライドし、眼下に見える海へと一気に投げ出された。四隅に備えられたパラシユートで展開し、ゅつくりと降下していく様子を確認してから、ヒメノカリスはワインダムを空へと踊らせた。

その後ろでは小規模の爆発を繰り返しながら墜落していく輸送機の姿があった。パイロットたちが脱出できたとは思わない。彼らが託した力は無事着水を终え、地中海の穏やかな波にさらされている。

ミノフスキーパーティー粒子濃度の高い中ではお世辞にも精度が高いとは言えないレーダーには、北西、南から2つの部隊がここを目標している。分解能の関係上正確な数や機種はわからない。北西側が地球軍。数は、ザフトよりも多いように思える。

勝利条件はコントローラーの防衛。敗北条件はその反対。条件としては決して楽観視はできない。恐らくザフトはこの戦いに足の遅いグレン・スティードに旧式の水中専用機を動員してはいないだろう。すなわち、戦いは空に限定される。何ともC.E.75年のモビル・スーツ戦術を反映している。

そして地球軍は思いも寄らない機体を投入していた。本来青一色の装甲を緑に染めたインテンセティガンダムがミノフスキーパーフトを高強度に輝かせて部隊の先頭をきつっていた。

「助けに来たぜ、姉ちゃん！」

「アウル……」

戦闘を禁じたはずのアウル・ニアダだ何故ここにいるのか。そんな漠然とした疑問は翼持つ危機と偽りの力に覆い隠される。

「ヤーデシュテルン……、ローゼンクリスタル……」

ZZ-X3Z10AZガンダムヤーデシュテルン。ZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタル。ゲルテンリッター3号機とサイサリス・パパによつて作られた紛い物。そのどちらも、リーダーを務めるに十分な力を持っている。

翠星石の小さな手がモニターに映し出されているゴンテナに触れると、その部分だけが拡大される。人形の動作とモニターの操作を連動させる。ゲルテンリッターは何故かこんなお遊びを好む。ゴンテナは黒く、モビル・スーツを乗せるには大きい。フォイエリヒならばちようじいい大きさだらうが。

「ゴンテナにNN-X300AAと刻印されてることを見つけ、アスランは息を吹いた。困惑と、決意を意味する。ブラフでないと限らないが、どちらにせよ、食いついてみないわけにはいかない。アスランの目は鋭さを増し、感覚が研ぎすまされていく。

「どうやら、フォイエリヒで間違いないようだ。レイ、ゴンテナの中身は恐らくフォイエリヒだ。起動される前に破壊する」

「直接戦つて勝つ自信がないのか？」

「フォイエリヒに乗ったエインセルに勝てるなんて言つてる奴は身の程知らずか自信過剰かのどちらかでしかない。神を侮ることは構わないが、エインセルを見ぐびることだけはするな」

「了解した」

雛が巣立ちを迎えるにしては、空には嵐が吹き荒れていた。

インテンセティガンダムの特徴である甲殻類を思わせるバック・パックが頭を覆う。そうすることでバック・パックに取り付けられ

た1対のアームの可動域が増し、ビームを弾くシールドによる鉄壁の防御を発揮する。少なくとも、アウルはこの盾に幾度となく救わっていた。

ヤーデシュテルン。8枚の翼持つ青いガンダムが2丁のライフルから次々とビームを放つ。シールドで防ぎながら、甲殻類の口に当たる部位からビームを撃ち返す。しつかりとロックオンしてから撃つたはずなのに、ビームが届いた時にはヤーデシュテルンはまったく別の方角にいた。

「火力も機動力も！ 何から何まであいつの方が上じやねえかよ！」

叫んでいる余裕なんてない。それでも無理矢理怒鳴った隙をつくようにヤーデシュテルンが目に見えて大きさを増してくる。接近されてる。認識しても意識が追いつかない。何もできず、構えたままのシールドに蹴りを入れられた。

機体全体を揺らす激震。喉が潰れたみたいな悲鳴しかでない。

（意識の加速が役に立たねえ……！）

ミノフスキ・クラフトで強引に体勢を戻しながら心の中で文句を言った。意識を加速させるにしても、相手の動きがまるで読めないなら意味がない。予定が立てられないからだ。

体勢を崩したのに敵が攻撃してこなかつたのはミュー・ディーが援護に入ってくれたからだ。地球軍のガンダム・タイプの中では最高の機動力を持つはずのディー・ヴィエイトガンダムでさえ動きについていくことができていない。2連ビーム・ライフルの攻撃は完全に反応が遅れていた。

「隊長が戻つてくるまで何としても持ちこたえなさい！」

バック・パックのレールガンを起動する。空気中でさえ音速を軽々超える弾丸がヤーデシュルンを狙う。ビームに比べ反動の大きいレールガンは大概バック・パックみたいな場所に固定して使用される。ライフルのように腕を動かせばいいという訳にはいかない。取り回しの悪さから満足な狙いもつけられないまま、アウルはしごれを切らせた。

大体の狙いで発射した。

そんな攻撃が当たるはずがない。曳光弾の軌跡はでたらめな場所を通り抜け、ヤーデシュルンは余裕でミュー・ディー機の足を撃ち抜いてた。ライフルは両手にあるとばかりに、ほとんど同時に放たれたビームがストライクダガーの腹部を貫通していた。

（ガンダム・タイプ2機相手でまだ余裕があるなんて化け物もいいところだな……）

シールドを前に構えたまま攻撃に出ることがどうしてもできない。動きが読めなくて、その分攻撃される恐怖が邪魔をする。

片足を失つてもミュー・ディーはまだ戦つていた。ローゼンクリスタルとは姉ちゃんとアーノルド副隊長が戦っている。ディー・ヴィエイトガンダムはともかく、ワインダムは明らかに動きが遅れてる。フル・ミノフスキ・クラフトのゲルテンリッターに量産機が追いつけるはずがない。

ワインダムがレールガンを放つ。すると何故か腕を破壊されてい

たのはウインダムの方だった。ハウinz・オブ・ティンダロスを使われると馬鹿みたいな光景が繰り広げられる。

「コンテナは何としても死守して！」

片腕を失つても、姉は戦いつもりでいる。通信で届いた声に、アウルはつい弱音をもらした。

「死守つたつてよ……」

自分の身を守るだけで精一杯だ。敵をかっこよく撃退してやる姿なんて思い浮かべることさえできないでいる。

どんな手がある。真正ガンダム2機を相手に、群がるヅダやゼゴックを打ち払つてコンテナを守る。そんな裏技、真紅だつて教えてくれなかつた。

そんなこと、神様にだつてできやしない。魔王になら、できるのだろうか。

魔王になら。

「青き清浄なる世界のために」

声が届いた。聞き覚えのある、どつか気取つた男の声。アウルが驚きながら通信に耳を傾けると、戦場ではそれどころじやなかつた。地球軍の機体が揃つて動きを変えて、それに釣られてザフト軍も動きがおかしくなる。

たつた1人の男のたつた一言が戦場をかき回していた。

「私に時間をいただきたい」

どいつもこいつも慌てふためいたみたいに飛び回る中、妙にまつすぐな動きをする奴がいる。それを見た時、アウルは天と地がひっくり返ったほどに目を見開かされた。

「む、滅茶苦茶だ！」

モビル・スーツ程度の大きさしかない小型輸送機 - - 武器なんて積んでるはずがない - - が戦場のど真ん中を飛行していて、拡大されたモニターには操縦桿を握るエインセル・ハンターがいた。ザフトの連中が血眼になつて探してゐる男が散歩でもしてゐるような気分で出歩いていいはずがない。そんなことくらい、アウルにもわかる。

心配した通り、ザフトは輸送機へと集中攻撃を仕掛けようとする。

機動性に乏しい輸送機でかわしきれるはずがない。ゼーゴックの放つたビームが輸送機に命中しようとして、突然割り込んだストライクダガーがそれを防いだ。生じた爆発にシールドが破壊されて、バランスを崩したストライクダガーが投げ出された。

「何なんだよ……、これはあ！？」

アウルの目の前で異様な光景が展開されていた。

たつた1機の輸送機のためにザフトが群がり地球が守る。

ザフトの攻撃を文字通り体をはつて防ぐストライクダガー。体中をビームで貫かれながら、それでも輸送機の無事を見届けるように

首が鎧び付いたように鈍い動きで回転する。胸部から炎が噴き出したかと思うと、ストライクダガーの姿は一瞬で火の塊に消えた。

小型のビーム・アックスを振り上げたゾダが輸送機に接近しようとすると、やはり別のストライクダガーが当然のように立ちふさがる。斧を体で受けると、ビーム・アックスは胸部ジェネレーターに深々と食い込み、反対にストライクダガーのサーベルがゾダのコクピットを貫いていた。

たつた1機、たつた1人のためにどいつもこいつもあっさりと死んでいく。

アウルは動けないでいた。ただ目の前の光景を眺めていることしかできない。隙だらけにも関わらず、誰もアウルのことを狙おうとはしない。

たつた1人のためだけの戦争。それが、目の前の現実だった。

「最期に教えといて上げる。戦場にいる2種類の人間ていうのはね、エインセル・ハンターを殺したがっている奴と、エインセル・ハンターのために死ねる人間よ」

傷つきながら、それでもまだミューディーは戦おうとしていた。足はヤードシユテルンに撃ち抜かれた。腕は輸送機をかばって破壊されていた。でも、まだ装甲は残つてゐる。

ミューディーの覚悟を、アウルはただ聞いていたことできないでいた。

左腕は肩から失い、両足は喰いちぎられたように欠損している。もはや飛行しているだけで手一杯。右手に持つビーム・アックスだけがその存在を主張するようにゾダは輸送機へと肉薄した。

恐怖はなかつた。失った手足は地球軍の攻撃にさらされたためだ。ただエインセル・ハンターさえ殺せれば、世界は平和になる。たとえすぐに争いが収まらなくともやがては。

ゾダはビーム・アックスを振り上げる。輸送機の正面から一撃で引き裂いてしまうつもりで、しかし、輸送機が加速する。空飛ぶ鋼鉄の塊がゾダに激突し、鉄のひしゃげる音がした。

撃墜された機体の末路を、もはや見守る者は誰もいない。

20mにも及ぶ巨人が銃を放ち、断末魔は巨大な爆発を噴き出すに等価。

それは、あまりに儚い矢のように、まっすぐに、鋭く、空を裂く。

エインセル・ハンターは飛んでいた。正確には落ちているにすぎない。重力に従うま、海へと落ちていく。しかれどそれは落下ではない。天から大地に向かおうとする王を、単に重力が導いているというだけで支配したとは言えない。

王は貌下を且指し飛んでいるのだ。

光の槍が織りなすフランクス。静寂にはほど遠いウォークライ。そのすべての中心に描かれる青薔薇の王。

何も大地を下に描く必要はない。王が向かうのだ。大地を上に描け。登りゆく王の姿を基準とせよ。天も地も、巨人も兵器も、敵も味方もすべてあべこべにしてしまえ。

王は登る。下へと向けてパラシュートを開き、しかし登ることをやめはしない。ベース・ジャンプ用の小型パラシュートを限界のタイミングで開いた王は身を翻し、空へとその眼差しを、大地へと御足を向ける。

これで、大地は下に、空は上に描かれる資格を得る。

減速もままならないまま、王は自らの棺へと降り立つた。墜落、激突。それは人が決めること。君臨、踏破。それは王がなすべきこと。漆黒のコンテナの上を転げ回り、しかし落ちることはない。手をつき、足を伸ばし、立ち上がる。NN-X300AA。コンテナに刻まれた、刻印された黄金の炎の前に、王は立つ。

「ゼフィランサス。あなたのくれた力は素晴らしいものでした」

剣は振るわれなければならない。槍は貫き通されなければならぬ。炎は焼き尽くさなければならない。

王威は王に供されなければならない。

「ムウ。あなたの遺してくれた世界のため、私は再び剣をとります

王を傷つけることまかりならぬ。誰も、そのような力持たぬ故に。

王を誅すること許されぬ。誰も資格なき故に。

「コンテナの近くに墜落したジダが爆発し、発生した高波がコンテナを洗う。波が引いた時、すでにエインセルの姿はない。

しかし、誰も海に転落したとは考へていなかつた。そんな間抜けな結末は、地球軍もザフト軍も、ナチュラルも「コーディネーターも、アスラン・ザラでさえ望んではいない。

「エインセル！ ハンター！」

奴はコンテナの中に潜り、ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムを動かそうとしている。そう、誰もが決めつけていた。

ヤーデシュテルンが全身を輝かせ、腰部から展開したレールガンがストライクダガーの右半身を吹き飛ばす。右は腕も足もない。コクピットにも熱が飛び込んでいることだらう。それでもストライクダガーは向かってくる。亡者のようになりながらもコンテナとの射線を遮ろうとする。そんな機体が長く持つはずがない。攻撃するまでもなくジロネーターから炎が爆発となつて吹き出す。

パイロットは最期の時をエインセル・ハンターのために使つたのだ。このストライクダガーばかりではない。ありとあらゆる機体が群がつてくる。

どれも迷いがまるでない。眞っ直ぐ飛んでエインセル・ハンターを守りうとする。

コンテナにライフルを向けると、片足のティーザイエイトが急速

に接近してくることを翠星石が伝えてくれた。バルカン砲の射線から機体を逃がすためやむなくロックオンを解除する。モビル・アーマー形態のディーザイエイトが水色のウイングを輝かせ通り過ぎた。

先程からこの繰り返しだ。ロックオンしては邪魔が入り、いつまでも攻撃できない。

モビル・スーシュ形態に変形したディーザイエイトがしつこく飛び回る。どうやら、何が何でもエインセル・ハンターを討たせるつもりはないらしい。

(時間がないんだ!)

こちらに向かってくるディーザイエイトを狙い撃つ。ハウinz・オブ・ティンダロスでも使えなければ回避はできない。ビームは正確にディーザイエイトを捉え、しかし敵は止まらない。

「なっ！？」

ビームは確かに右肩を貫いた。爆発した右肩は姿勢を崩すに十分な破壊力があったにもかかわらず敵は止まらない。右腕を破壊されることは覚悟の上で突貫を敢行したのだ。我が身を捨てた、擬似的なハウinz・オブ・ティンダロスに、アスランは虚をつかれた。

「アスラン！」

翠星石の心配そうな声を聞きながら、ディーザイエイトに残された左手に握られたビーム・サーベルが強引に叩きつけられる。右腕のビーム・ライフルが斬り裂かれ、しかし追撃を許すつもりはない。蹴りを放つ。フレームのみならず装甲そのものが推進力を持つゲル

テンリッターの蹴りは従来とは比べものにならない速度でディーヴィエイトの腕を打つ。フェイズシフト・アーマー同士が接触した光の中、主を失ったサーベルが落ちていく。

サーベルを叩き落とせたことをわざわざ確認はしなかつた。その頃にはすでに次の行動に移っている。左手に残されたライフルを突きつけると、ディーヴィエイトは逃れるどころか銃身を掴むなり進んで自らに押し当てるよう見えた。その時には、すでに引き金を引いていた。

至近距離で放たれたビームは大きな爆発を引き起こす。ヤーデシュテルンそのものは無傷。しかし、ライフルは2丁とも無惨な姿で握られている。

「翠星石、レールガンの残弾は？」

「もうねえです……」

パイロットとして残りの弾を把握していなかつた訳ではない。念のため聞いてみたところで、やはり答えは決まっていた。

ライフルを失い、弾は尽きた。サーベルを使おうにも、そう簡単に防衛線を割らせてはくれないだろう。あのディーヴィエイトのパイロットは文字通り命がけでヤーデシュテルンの力を奪つたのだ。

王はそれほど偉大なのか。臣民の命など犠牲にされて当然なのか。

「アスランさん、やつぱり、地球人ておかしいですよね……」

通信で聞こえてきたルナマリアの言葉が、この戦争の狂氣を端的に

に顕してくるように思えた。

「レイ、お父様に手出しあしないで！」

左腕を失い、遙かに性能の劣るウインダムであるといつて、ヒメノカリスはよく戦う。がむしゃらに、しかし鋭い剣撃を繰り出すウインダムのサーベルを軽くいなしながら、レイは軽く笑みを作った。

あれほど強烈にシーゲル・クラインを崇拜していたヒメノカリス・ホテルの変わりようが興味深くも面白い。たとえ、シーゲル・クラインとエインセル・ハンターを入れ替わっただけにしても。

「断る。俺はサイサリスのために戦う騎士らしいのでな」

ローゼンクリスタルの数少ない武装であるビーム・サーベルだけでウインダムの攻撃は防ぐことができた。

ドミナントとヴァーリ。従者は王には勝てない。たとえ、ヴァーリの中で戦闘に特化した遺伝子操作が行われたタイプ・Hであっても。

「魔法を見せてやろ!」

剣を交えたまま、ローゼンクリスタルはバック・パックの円輪を機動している。サイサリスがローゼンクリスタルに与えた、ガンダムを壊すための力を。

光が、突如コンテナの真上に現れた。

何か、明確な何かがあつたわけではなかつた。ビームなど放たれていない。ミサイルの類が使用された訳でもない。突然ビームの塊が虚空から出現したかのよつ。

漆黒の色をしたコンテナは、ビームに焼かれ閃光、爆発の果てに無惨な姿に変わり果てた。残骸が海に漂う。立ち上る黒煙は棺の中を覆い隠し、火が海を撫でる。

爆発がすべてを吹き飛ばしてしまつたかのよつ。

静かだつた。先程までの激戦が嘘のように静まり返り、誰もが手を止め足をとめ燃え盛る棺を眺めている。

思いは一つに、エインセル・ハンターの存在を追い求めている。

ヒメノカリスは震える唇から父への思いを示す。

「お父……、やま……」

父への絶対の信頼が、それでも失うものの大きさに、失うことの恐ろしさに体の震えを止められないでいる。

翠星石は映像ながらに瞬きを落ちつきなく繰り返す。

「やつた、ですか……？」

敵への絶対の恐怖が、それゆえザフトに勝利の確信を、魔王の死を保障してくれるものは何もない。

アスランは唇を固く結んだまま、微動だにできない。エインセル・ハンターは死んだ。油断はするな。矛盾する心がせめぎ合い、それは時間の経過とともに魔王の死を確信する方向へと優位に進んでいくはずなのだ。

では何故、次第に魔王の存在感ばかりが募つてくる。

戦士としての勘か、部隊長として冷静に努める心構えゆえか、あるいはエインセル・ハンターと刃を交えた者としての自負。

アスランは何ら確信のないまま、しかし確信をもつて叫んだ。

「まだだ！」

その瞬間、幾筋もの光が立ち上った。

誰の反応も許さないまま、何機ものザフト機が光に貫かれ、墜落することさえ許されず爆散する。

どこから、誰が、何が、どうした、どこにいる。

すべての疑問の答えが海を突き破り生まれ出た。太陽は空にあるべきものだ。しかし海から飛び上がった太陽は銳槍の姿で飛び回る。全身から放たれる黄金の輝き。風よりも速く鳥よりも自由に巨人たちが漂う空を舞う。

やがてそれは変化を見せる。

指が開かれるように、あるいは花が咲くように、それとも、悪魔が歪んだ口を開くように。

槍の穂先が4つに割れ、それぞれが形を変えていく。

それは人かそれとも人形か。でなければ、異形の怪物が必死に人の姿を取り繕う。

細く長い足が作られ、腕は黄金の輝きを放つ。太陽は太陽のまま、王は王であることに変わりなく。

NN-X300A Aフォイエリヒガンダム。

かつてオーブで、かつて宇宙で、魔王と恐れられ、神像と讃えられ、最強と認められたガンダムの姿が再び戦乱の空に花開く。

あれから4年がすぎていた。母を失い、空を見上げて眺めた光景が、今は同じ高さ。手を伸ばせば決して届かない距離ではない場所にある。

黄金のガンダムが、その輝きがシン・アスカの左頬の痣を焦がす。

「これが、フォイエリヒガンダム……」

初めて遭遇した訳ではない。戦闘だつて完敗であつたとは言え行

つた。それでも、シンにとつてこれが初めての接触であった。

以前とはまるで違う。何が違うのかなんて説明できない。それでもわかる。

ただ空に漂っているでしかないフォイエリヒガンダムを前に、シンは思わずZGMF-X56Sインパルスガンダムを後退させた。これで臆病と笑われるつもりはない。誰でも同じなのだ。ジダが、ゼゴックが次々にフォイエリヒから距離を開ける。

火を恐れる獣が、自分が安心できる距離を求めて後ずさることと同じだ。

このフォイエリヒは違う。

目映い輝きに瞬きすることを忘れて、ただ見入ることしかできない。きっと、誰もが同じことをしているはずだ。

間合いが目に見えるものだとは思いもよらなかつた。弱い者ほど距離を開け、実力に反比例して距離は開く。すると、自然と線が描かれる。ジダ、ゼゴックのような量産機が最外で円を縁取り、その内側にインパルスガンダムが並び、ローゼンクリスタル、ヤーデシュテルンが最も内側にいる。

フォイエリヒから放たれる不可視の間合いを、ザフトがそれぞれ縁取つて巨大な球体を浮かび上がらせていた。

まさに結界だ。シンも、レイ隊長の横に並びたいとは思わない。一步踏み出すことを本能が恐れている。これ以上、奴には近づくな。心臓を掴まれているような息苦しさの中、それでも必死に声を絞り

出す。

そうしなければ、魔王の霸気に呑み込まれてしまいそうで。

「これが、エインセル・ハンター……」

たつた1機、たつた1人の男の存在が戦場すべてを支配する。

母を奪われた少年が、シン・アスカが魔王と出会った。

あの日喰いだ燃え盛る炎の臭い、焼き尽くされた人の臭い、周囲を埋め尽くす膨大な死の臭い、まだなお放たれる砲火の臭い。あの日と何も変わらない。戦場を包むすべての臭いの変わらぬただ中で、少年は魔王と出会った。

元気な子どもでいて欲しい。では元気でない子はいりませんか。明るい子でいてほしい。では明るくない子どもは不要ですか。優れた子どもが欲しいなら、力のある子どもが欲しいなら、それでは生まれてきた子どもが優れていなかつたらどうしますか？

捨ててしまいますか？ 殺してしまいますか？

それとも、そんな子ども、初めから不要ですか？

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「戦慄の子供たち」

マユ・アスカ。あなたの気持ちはどうですか？

第22話「戦慄の子供たち」

オープが国を焼かれてから4年。主戦場となつたオノゴロ島では戦死者837名を数え、民間人への被害も600名を超えた。あれから復興は進み、破壊されたモルゲンレーテ本社跡地にはすでに新たなビルが建造されている。

それでも、人々の記憶から、戦争の悲惨な光景は消え去つていない。そして、侵攻してきた大西洋連邦への恨みも。しかし、世論は世界安全保障機構への参加に否定的なものばかりではない。大西洋連邦主導の組織に加わることを頑なに拒絶する者がいる一方、理解を示している意見も少なくないのだ。

意見が一分するきつかけとなつた大きな事件は2つ。

ヤキン・ドゥーエ攻略戦において、プラントが地球全土を標的としてジエネシスの発射を敢行しようとしたこと。中立と敵味方。プラントはそんな枠組みを一方的に破棄してしまつた。対岸の火事ではすまない。それは子どもとて理解している。

エピメディウム・エローの起つるべくして起きた事故。オープ国民に対してさほど大きな影響はなかつた。表向きは。エピメディウム・エローが親プラント派をとりまとめていた事實を鑑みれば、世界安全保障機構への参加に反対する勢力の動搖は計り知れない。

プラントはオープを見限り、オープもまた、プラントに汲みすることをやめた。世界安全保障機構第9の加盟国としてその名を連ねたのである。

その加盟を祝うための特使が訪れたのが、何の皮肉かかつての戦いの地、オノゴロ島であった。

オノゴロ島ヒルコ国際空港のロビーに人だかりができる。記者に政府関係者。特に記者は数が多く、貴賓が通る通路の両側を埋め尽くしてはカメラを構え待ちかまえている。

そんな中につけて客人を迎えることができる立場にあるのはただ1人。自動ドアの前に余裕を持って立つのは恰幅のよい禿頭の男。オープの政府関係者が身につける焦げ茶色の制服を身につけている。

ウナト・エマ・セイラン。現オープの国家元首にして、カガリ・ユラ・アスハの許嫁ユウナ・ロマ・セイランの父親である。

そんな見事にはげ上がった頭を、カガリはロビーを見下ろす観览室のガラス越しに眺めていた。さすがに光輝いているなどということはないが、見事な禿げようである。カガリは窓のそばに立ちながら、すぐ横に立つユウナ・ロマ・セイランの背が高いため、見上げる必要がある。ユウナの生え際を横目で観察した。まだ大丈夫なようだが、将来はどうなのだろう。

別にユウナの将来を心配する立場にあるわけではないと、カガリは気づかれる前に視線を戻す。ウナト代表が来賓の到着を今や遅しと待ちかまえている。

「問題は世界安全保障機構が誰を送り込んでくるかだな。国家元首が来ないことは当たり前として、となると……、誰だ？」

ジョセフ・コーブランド大西洋連邦大統領が来るることはないとして、しかしカガリに次の人物の名前をあげることはできない。

「恐らく、大西洋連邦の要人の誰か。その誰かが重要だよ。それに
よつて、大西洋連邦や世界安全保障機構がオープをどうしたいか見
えてくる」

そんなことは百も承知だ。そう、カガリは考えながらも、いざコ
ウナに言われると自然と身が引き締まる。

やがて、ロビーが一挙に騒がしさを増した。記者たちが一斉に色
めき立ち、客への到着が近いことを教えてくれる。自動ドアが開か
れ、しかし客の姿はない。カガリには確認できなかつたが、記者
たちに気づいているようで一斉にフラッシュが瞬いた。

正直者にしか見えない人物が入ってきたのではもちろんない。単
に見えなかつただけだ。その人物は車椅子を使っていた。ウナト代
表の前に来るとともに立ち上がり、握手を交わした。この時に初め
て、カガリは相手の姿を初めて眼にした。

若い男だ。くすみのない金髪に、サングラスをかけている。頬が
こけて、また少し痩せただろうか。

カガリはこの男を知っている。

「非公式に会いたい。すぐに会談の準備をしろ!」

会談は、あつさりと実現した。執務室、いつものように机につき、
背もたれに身を預けるカガリの間で、男は車椅子に座つている。そ
の肘掛けにはドリンク・ホルダーよろしくプロジェクターがはめ込

まれ、金糸雀がその姿を現していた。

「久しぶりだな、金糸雀。カガリはお前を使いこなしているか？」

「もちろんかしづ。かつちゃんはすいこかしづ」

NN-X2000DAガンダムトロイメントのアリスをしていた割には金糸雀の敬礼はずいぶんと不格好だった。今はそんなことはどうでもいい。カガリはすでにお約束となりつつある抗議の声から、挨拶は始まった。

「私をかつちゃんと呼ぶな！ それより、ブルーノ兄さん、その、久しふり」

兄と、ブルーノ・アズラエルと出会つのはずいぶん久しぶりのことになる。アズラエル財団代表の一人として忙しい毎日を送つてゐる兄・・あくまでも技術上であつて、血の繋がりはない・・に気軽に会えるはずもない。何より、かつては殺しあいを演じたこともあって、あらゆる意味で気輕さとは無縁だ。

それでも、ブルーノはサングラスをかけた顔で軽く笑みをつくる。カガリばかりが氣負つてゐるところは、出会つた頃から変わつていない。

「そう畏まるな。それより、彼かね？ 君の婚約者といふのは？」

ブルーノが見る先はカガリの横、カガリ以上に畏まつた男が直立不動でいる。

「ユウナ・ロマ・セイランと申します」

義兄に気に入られまいと腐心しているのだろう。妙に動きが固い。

（まつたく、何をしているんだ……？）

呆れた心地でため息をつきながら、カガリは不出来な許嫁を嘆いて見せた。

「親が決めただけの間柄だ」

「君がそこまで聞き分けのいい子だつたとは知らなかつた」

吐きかけた息を飲み込んで、のぞに大気が詰まつた。何も言い出せず、息苦しさから顔が赤くなる。

カガリ1人が氣負つて、ブルーノ・アズラエルは、ラウ・ル・クルーゼはいつもどつしりと構えている。4年も前から、敵と味方に分かれて戦つっていた時からそれだけは何も変わつていない。

そのことを思い出すと、カガリは一句を紡げなくなる。そんな隙に、将来の兄の歓心を少しでも買いたい若人は少々上擦つた声を上げていた。

「カガリからあなたのこととは聞いています。かつて、ラウ・ル・クルーゼを名乗りブルー・コスモスを率いたことも」

「引退した身だ。代表はロードに、戦いはエインセルに任せきりだ」

「いえ、そんな。あなたの勇猛果敢さはカガリからよく……」

ブルーノはただ静かに笑うばかりで、お世辞が通用しているように見えない。普通、おべつかが通じるのは無能な相手だけだ。有能な人間は何もしないでも評価されるため、誉められ慣れている。名誉というものに固執するのは無能ばかりで、阿諛追従は相手を見て行わなければならない。

「コウナもそのことに気づいたのだろう。歯切れの悪い言葉で、取り繕うように話題を変えようとする。

「カガリは、あなたのことはよく話してくれました。ですが、エインセル・ハンター代表についてはあまり。その、ブルー・コスマスの3巨頭として知られたあなたのことを探はよく知りません」

「かつちゃん、一時期エインセルさんのこと命を狙つてたかしら。それで今でも……」

余計なことを言い始めた金糸雀を一睨みして黙らせる。もつとも、金糸雀はいたずらっぽく舌を見せただけで、恫喝に屈した様子はない。ただ、話題を変えつつ、さりげなくブルー・コスマスの偉大な代表であつたことを讃えるといつコウナの変化球は多少なりとも効果があつたらしい。

ブルーノ・アズラエルは普段に比べると饒舌に話し始めた。車椅子をまるで高価な座席のように肘掛けによりかかり、まるで手にワインでもくむらせているかのような優雅さである。

「エインセルという男は、そう、私が知る限り誰よりも弱い男だ」

最強のパイロットであり、影響力は大西洋連邦大統領ジョセフ・ourkeランドをもじのぐ。アズラエル財団、ピスティス財団の財力

を手中に、世界最大手の軍需産業の総帥を務める。

人類史上最強の男を、開口一番弱いと呼ぶ男が、他にいるだろうか。

「誰よりも弱いからこそ、ブルー・コスモスという最強の盾が必要としている。フォイエリヒといつ最強の剣を必要としている。そして、戦う理由としての家族を必要としている」

結局、最強であるという結論に変わりない。カガリはかつてそんな相手の命を狙つたことに今更ながら薄ら寒い思いを感じていた。

「そうして得たものを守るために、世界最強の座になければならなかつた。ただ、それだけの男だ」

力でエインセル・ハンターを倒せる者など、どこにもいない。

戦場に、声にも音にもならない鬨の声が響きわたる。

誰もがエインセル・ハンターに憑かれていた。

部隊も配列も隊列も間合いも武装も敵も味方も何もない。狭いコクピットの中、誰もが同様に均一に叫び、猛り、声の限り叫ぶ。

その中には黄金のガンダムが、エインセル・ハンターだけが、黄金の輝きだけに支配されている。

殺す者と守る者。攻めるものと防ぐ者。狂信者と狂信者。

ザフトがΖΖ-X300AAフォイエリヒガンダムへと殺到する。ΖGMF-1000ゼダはビーム・アックスをその手に狂戦士のように、ΖGMF-953ゼーゴックは適正距離を忘れた狂戦士のように、ただフォイエリヒへと引き寄せられていく。

狂気には狂気が、力には力が。兵器は兵器とともにまみえる。

「」には戦術も戦略もなかつた。ただエインセル・ハンターを殺せ、エインセル・ハンターを守れの一句だけが、誰の耳にも届かぬはずの声が、しかし確実に戦場を震わせている。

フォイエリヒに狙いをつけ、放たれるゼーゴックのビーム。それはGAT-01A1ストライクダガーの左肩に受け止められ、片腕をもぎ取るも、ストライクダガーはかまわず右手のサーベルでゼーゴックの心の臓を貫く。撃墜されたゼーゴックの爆発を待たずに、ゼダが飛び込んで来ては斧を敵の体へと深々食い込ませた。モビル・スーツ2機分の爆発に呑み込まれたゼダが爆煙の中から這い出た途端に、背中からコクピットを撃ち抜かれる。

混戦では生ぬるい。狂乱とも言える戦いが繰り広げられていた。

「」には戦術がない。ケツテを組む必要などない。エインセル・ハンターさえ殺せば、すべての目標が達成される。

「」には戦略がない。エインセル・ハンターさえ殺せば、今後のすべての作戦展開を考える必要がない。

戦える者は前に出る。戦えぬ者も前に出よ。すべての命がすべての兵器が焦燥につき動かされる。すべてはエインセル・ハンターを

中心として。

フォイエリヒは8刀の剣を持つ。両手両足からビーム・サーベルが輝く刀身を伸ばした。多節アームで連結されたユニットが計4機、バック・パックに搭載されている。このすべてがビーム・サーベルを放ち、剣となる。

かつて、フォイエリヒは白兵戦最強と謳われた。そして、現在、白兵戦最強の名を受け継いだ機体は存在していない。

王者は、まだその王位を明け渡してなどいない。

2機のヅダが同時に襲いかかる。この光景は、人々に共通した印象を与える。ザフト軍も地球軍も等しく、飛来する確実な死とくすまぬ黄金の輝きを夢想する。

荒唐無稽な光景であった。斬りつけようとしているはずのヅダに走る3筋の輝きは、ビーム・サーベルの軌跡。頑強であるはずのモビル・スーツの装甲がたやすく斬り裂かれ、獸に喰い破られたにも似た傷跡を持つヅダの残骸が降り落ちる。

ゼーゴックが四方八方から一斉にビームを放つ。これも、人々に膨大な死の確信を与え、しかしエインセル・ハンターの不滅は約束されている。

フォイエリヒの黄金の輝きはビームを寄せ付けない。ビームはフォイエリヒの表面を滑り落ちるように通り抜けた。そして、モビル・スーツ最大火力を誇ったかつてのフォイエリヒは、すでにその座を

取り戻している。4機のアームに装備される4連ビーム・ライフル。アームの自在な動きが、攻撃を無効にされ、戸惑うゼーゴックたちへと向けられる。光の槍が並んで4本、ゼーゴックの腹に突き立てられる。ライフルに撃ち抜かれたとは思えない傷を見せて、ゼーゴックの胸が裂けた。

すべてが予定調和。すべてが淡々と処理されていく。

エインセル・ハンターは殺せない、倒せない。

刃向かう者は殺される。

すべては定まっていたことのように。これは戦いとは呼べなかつた。一方的な殺戮でもない。人が歩いて蟻を踏む。ほんのわずか足を踏みかえることのない怠惰を、戦いとも殺戮とも呼ばないようだ。

エインセル・ハンターは、ただ歩きたい方向へと歩いている。それは、殺戮とさえ呼ぶことはできない。

シン・ascaは体が芯から凍り付いたような震えを覚えた。

フォイエリヒは何から何まで異常だった。皆が狂ったように殺そ
うと、守ろうとして、そしてそのどちらも意に介してはいない。殺
せるはずがない。守られる必要がない。

そして次第に、ザフトには諦めが支配するようになっていた。誰もが攻めかかるとはせず、フォイエリヒが少し動いただけで、まるで攻撃でもされたかのように飛び退く。

突然の任務で戦力が十分であったとは言わない。それでも、たった1機のモビル・スー^ツが戦場の空気を支配している光景を、シンはこれまでに見たことがない。

「これが……、これが……」

「そう、これがエインセル・ハンター」

そんな父の輝かしい姿に、ヒメノカリスはとてもすてきな贈り物に目を輝かせる子どものように見ほれていた。戦場にいるのに、コクピットの中という似つかわしくない現場でさえ、ヒメノカリスは恋に焦がれる乙女のように父への敬愛の眼差しを惜しまない。

ヒメノカリスでは駄目だった。フォイエリヒのような煩雜な操縦機構を制御しきれず、両手足のサーベルを扱うことがせいぜいであった。だが、エインセルは、父は違う。8の剣を完全に扱い、フォイエリヒはその力を完全に取り戻した。

誰もが父を力で殺そうとする。それは馬鹿げたこと。力でエインセル・ハンターは倒せない。

何故なら、最強を倒す力があるということは矛盾に他ならないから。最強を超える力がない以上、エインセル・ハンターは力では倒せない。

「だから、誰もお父様を倒せない」

力でエインセル・ハンターを倒すことはできない。どれほど刃を研ぎすませようと、どれほど銃に火薬を込めようと、エインセル・ハンターはより鋭い刃を携え、より優れた銃器を構えている。

ゲルテンリッターでは勝てない。それは単なる力でしかなく、力で力は滅ぼせない。

青い翼と黄金の暴威とが激突する。

NN-X3Z10AZガンダムヤーデシュテルンが両手にビーム・サーベルを構え肉薄する。ゼフィランサス・ズールが直接手がけた機体はしなやかにその腕を振るい、達人の妙技の「ごとく次々にビームの輝きがまき散らされる。

輝きが瀑布となつて、そして瀑布がまた、それを押し返す。

フォイエリヒの構える8刀のサーベルはアスラン・ザラの輝きをたやすくさばき、防ぎ、押し返す。

白いNZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルの参戦も事態を変えることはできない。2機のガンダムを合わせたところで4刀。フォイエリヒの半分でしかない。

黄金のフォイエリヒは2機のガンダムを平然と相手にしながら、悠然と殺陣を舞う。

すべてがガンダムであつて、すべてがハウinz・オブ・ティエンダロスを、異形の獵犬を飼い慣らす。

剣戟が、鍔迫り合いが繰り広げられ、しかしそれに剣と剣が互いを無視し始める。振り抜かれたヤードシユテルンのビーム・サーベルがフォイエリヒの表面を滑る。フォイエリヒの一撃がローゼンクリスターをすり抜けた。

それは、次第に不出来な活動写真のような光景に変わつていった。3機ものモビル・スーツが死闘を繰り広げている。それにも関わらず、剣は、敵を確実に捉えたはずの剣が素通りし、命中したはずの攻撃が何の効果ももたらさない。

ハウinz・オブ・ティンダロス。攻撃を極限最小限の動きで回避する絶技の体得者の動きは異常の一言に尽きた。今見えているはずの光景が、しかしまるで別世界のものか空想の産物のようにしか見えない。激しい攻撃の最中、しかし誰も傷つくことなく、命中と確信できる無為が繰り返される。

「エインセル・ハンター！ ここですべてを終わらせる！」

アスラン・ザラの、ヤーデシユテルンの攻撃は繰り返され、しかしすべてが徒労に終わる。

「アスラン・ザラ、あなたには私を殺す資格がありません」

エインセル・ハンターの、フォイエリヒの攻撃は繰り出され、それは、均衡をたやすく斬り裂いた。

命中すると確信した攻撃が命中する。そんな当たり前のことに違和感を感じ得ない。それほどその光景はあっけなく、当然のことが常軌を逸したほど不自然なものに思われた。

ローゼンクリスタルの右足が切断され、ヤーデシュテルンの左腕が破断する。弾けるように戦闘は終わりを告げた。装甲の一部を破壊されたことで2機のガンダムはバランスを崩し、ミノフスキ・クラフトの推進力の偏りが3機のガンダムを遠ざけた。

ダメージを処理し、ヤーデシュテルンとローゼンクリスタルが体勢を取り戻そと、フォイエリヒは何も変わらない。

手足から光の剣を延ばし、背には4本の腕が輝き、剣を構えている。その異形の姿は、神々しく、禍々しく、世界の王の姿を象徴する。

アスラン隊長でも及ばない。その事実は、しかしザフトの戦意をこそぎ落とすには、エインセル・ハンターとい標的は、得られる成果は大きすぎた。

確實に駄目だ、しかし、勝つことができれば配当は大きい。

ザフトはエインセル・ハンターを殺すことだけを目的としている。

2機のNGMF-56Sインパルスガンダムが退けられたガンダムに代わるように前へと出る。25mほどにも達するフォイエリヒの前に、それはひどくちっぽけで、とろに足らない存在のようであった。

マーズ・シメオン。ヘルベルト・フォン・ラインハルト。

ヒルダ・ハーケンを失い、ザラ隊のインパルスは2機に減つてしまつた。だが、ヒルダがエインセル・ハンター殺害に執心し、その命を落としたように、残された彼らもまた、エインセル・ハンターに寄りつかれていることは等しい。

「やるぞ、ヘルベルト！」

「了解だ！」

2人の同意が、母艦へと伝えられる。

「パラスアテネ。アリスを発動させろ！ 時間無制限。目標はフォイエリヒガンダムの撃墜！」

「しかし、ザラ大佐の許可がなければ……」

「やれ！ 今日ここで、俺たちの呪われた戦いを終わらせるんだ！」

マーズの言葉に、オペレーターの否定が重ねられ、しかし結果としてヘルベルトの意志に上書きされる。

アリスの発動。それに伴う意志と現実の剥離の中で、マーズとヘルベルトの意志は次第に混濁し、エインセル・ハンターを倒すという夢の中へと沈んでいく。

アリスに支配された2機のインパルスはフォイエリヒへと向かい、そして、唐突にその動きを止めた。

田の前にフォイエリヒがいる。しかしインパルスたちはそろって中空に静止し、脱力したように手を下げ、ただ浮かんでいる。

フォイエリヒがサーベルを一振りする。2機のインパルスガンダムはあまりにあつたりと引きしきれ、燃える残骸となつて海へと降り注ぐ。

何が起きたのか。ただ2機のインパルスが無謀に挑みかかり、撃墜されただけのこと。では、なぜ動きを止めた。誰もそのことを理解できない。

フォイエリヒは黄金に輝き続ける。

「機械では駄目なのです。人を倒すのは人でなければなりません」

戦闘はあつけなく終わつた。終わつたというよりも、終わらせたといつべきだらうか。エインセル・ハンターが、まるで氣まぐれな太陽のようにあつたりと終わらせてしまつた。

フォイエリヒの撤退。その後地球軍は田立つた動きを見せることなく、シンは友軍とともにエル・アラメインにまで撤退した。

エインセル・ハンターとフォイエリヒ。一度は田にして、一度は戦つたはずなのに、いざ戦士として対峙すると何もできなかつた。

整備は整備員任せ、作戦会議は上層部が行つ。そうすると、末端の兵士は訓練をしているくらいしかすることがない。その方がかえつてよかつた。ひたすらシミコレーターに打ち込み、エインセル・

ハンターの影から少しでも田を離すことができるか。

インパルスの「クピットの中、モニターに映ったフォイエリヒの映像ともう数えることをやめてしまつくらい刃を交えた。

それは今も。

光速を思わず飛び込んでくるフォイエリヒの攻撃を、レイ隊長たちのような無茶な動きでかわすことなんてできやしない。とにかく大きく動いて、攻撃から逃げるよつに動き回る。

仮想現実ではGまでは再現されない。現実にはどれほどの加重が体にかかるのか、ふとそんなことを考えた瞬間に、画面が突然落ちた。シミュレーターが止まったのだ。

「ダメです、ダメダメです、うー」

赤い瞳をした小さな少女がお手上げといった様子で手のひらを上に向けて鼻息をもらす。

「攻撃はかわしたはずだ」

「それでも、許容Gを超過してやがるです。ショック・アブソーバーに頼つた戦いしてたら、体がいくつあつてももたねえです」

翠星石は立てた人差し指を素早く左右に振る。何を甘いことを言つてゐる。そんなジェスチャーを見せられても、シンはビンもしつくりこない。

「心配してくれるのは嬉しいけど、Hインセル・ハンターに勝つ

ためには……」

「だ、誰もちび人間のことなんて心配してねえです……！」

白い頬を赤くープロジェクターはそんなことまで表現しているとして、翠星石は光の柱ごとプロジェクターの中に引っ込んでしまった。

「お、おいー！」

慌てて手を伸ばすも、プロジェクターに反応はない。このままプロジェクトを鷲掴みにしても何の意味もないだろう。シンは手を戻して、そのままシートに深く腰掛けた。

「機械が人間以上に子どもっぽいって何だよ……？」

額を押さえるために髪をかきあげて、その手を下ろすよりも先に左頬に触れた。ここには痣がある。4年前、大西洋連邦がオーブへと侵攻した際につけられたものは、いまだに消えてはいない。

エインセル・ハンターは強い。何度も戦つたシミュレーターよりももつと強いように気もした。

（本当に勝てるのか……？　フォイエリヒガンダムに乗つたエインセル・ハンターに……）

残念なことに弱氣ではなくて冷静な判断だと思えた。インパルスガンダムではどれほど鍛えたところでフォイエリヒには勝てない。圧倒的な性能差をパイロットの腕で補つ。そんなことができればドラマの主人公みたいで格好いいけれど、実際は、戦闘に関するデータ

タの何から何までエインセル・ハンターの方が上だ。

勝つている要素なんてなければ、勝てる可能性も見えてこない。

「俺にもゲルテンリッターみたいな機体があつたら……」

それでも勝てるかどうか怪しいことうだらづ。そして、単なる一兵卒でしかないシン・アスカがそんなゼフィランサス・ズールのガンドムに乗ることができるはずがなかつた。

エインセル・ハンターという主役と戦場という同じ舞台に立つたところで、格の違いといつもの確実に存在している。

考えても考えても絶望的な状況しか見えてこない。翠星石の機嫌も損ねてしまった。休憩を入れるにはいい頃かもしれない。

シンはコクピット・ハッチ展開の操作をする。目の前でハッチが開き、まぶしいくらいの光と、いつもよりも慌ただしい音が聞こえてきた。

今、格納庫はちょっとした来客を迎えていたらしかつた。

ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの格納庫にローゼンクリスタルとヤーデシュテルンの2機が並んで寝かせられている。ローゼンクリスタルは右足を、ヤーデシュテルンは左腕を破壊されていた。

これほど高性能のガンダムともなれば、修復には細心の注意が求められる。偶然地球に降りていたとはいえ、ザフト製ガンダムの開

発者がわざわざ足を運ぶほどだ。

傷ついた愛機を見上げるレイ・ザ・バレルの横に、開発者が白衣を身につけ立っていた。知識層には多い青い髪をしたヴァーリは、工学系の人間であるはずだが、何故わざわざ白衣を身につけているのかはまだ聞いたことがない。

開発者、サイサリス・パパは白衣に両手を入れたままローゼンクリスタルを見上げている。かと思えば、横目でレイを眺めた。

「で、いつになつたらキヤ・ヤマトを倒せるのや?」

「ゲルテンリッターは俺が破壊する」

わざわざ皿をあわせてやる必要もないだろう。互いに体はローゼンクリスタルの方向を向いたまま、サイサリスもすぐに視線を正面に戻した。

「レイって口先ばっかりだよね。キラには啖呵きつたらしいけどさ。いい? ローゼンクリスタルの力はフォイエリヒだって破壊できる力なんだよ」

「だそうだ。お前はゲルテンリッターを超えられるのか?」

懐から取り出したプロジェクターには紫色のドレスを身につけた少女の姿が浮かび上がる。ゲルテンリッターと同様に赤い瞳こそしているが、さて、モデルはゼフィランサスなのか、それともサイサリスなのだろうか。

薔薇水晶は答えない。普段とかわらず表情を変えないまま、レイ

のことを見上げている。母であるサイサリスが睨むために体の向きをこじらに合わせたことに比べるとひどく違う。

「口先ばかりはお前ではないのか？　お前は、本気でゼフィランサス・ズールを超えられる氣でいるのか？」

顔を向ける。その途端に、頬に鈍い痛みが走る。サイサリス - ヒメノカリスと異なり、身体能力に特化したヴァーリではない - の平手が頬を打つたのだ。

「忘れないでよ、レイ！　地球の片田舎でくすぶつてたあんたを捨てい上げてあげたの、あたしだってこと-」

すぐに激昂し、行動に移す。以前のサイサリスはもつと物静かな女性だった。これではまるで妹のローズマリー・ロメオのようではないか。

顔を赤くして怒るサイサリスを見ていると、レイはかえつて頭が冷え、冷静になれる気がした。

「では俺からもお願ひしよう。インパルスが2機同時に敵前で停止した。アリストの誤作動が疑われる。確認を怠るな」

アスランの部隊は一度に2機のインパルスを失い、事実上全滅している。フォイエリヒを前に停止した2機は明らかに動きがノーマルではなかつた。

心当たりがあるのか、それとも思いつかないことが悔しいのか、サイサリスは顔を赤くしたまま歩きだした。

サイサリスとの出会ご、いや、再会は2年前。わざわざ雪降りしきる凍土の上を、寒さに文句を言いながら歩いてきた。サイサリスはドミナントを必要としていた。アスランやキラのように他のヴァーリに従う者ではなく、カガリのよう自分勝手でもない、サイサリス自身のためのヴァーリを。

(だが、お前にとつて俺は消去法なのだね?)

レイでなくともよいのだ。ただ、全10体 エインセル・ハンターを含む ドミナントの中で、現存する5体の内レイ・ザ・バレル、セブンが一番現実的であつたというだけにすぎない。

レイである必要はないのだ。ただ、自分の自由になれるドミナン

トさえあれば。

それが苦々しく思わないでもない。だが、表情は努めて平静を装う。すでに10年以上も身につけた仮面は堂に入りつつある。この技術は、特にこんな場合に役に立つ。広い格納庫の中、ろくすっぽ隠れようとせずにレイのことを見ている部下に内心を悟らせてたくない場合には。

振り向くと、田を合わせた途端にシン・アスカがひどく困惑した様子を見せた。逃げ出すこともできず、田を合わせる」とは気まずいが、しかし露骨に田をそらすつもりしない。何とも煮えきれない。

「すいません、盗み聞きするつもりはなかつたんですけど……」

「気にするな、盗み聞いていたということだ。

「気にするな」

「何か冷やすもの、もらってきましょつか？」

何のことかと思いきや、はられた頬を気遣つてくれているらしく。確かに多少の痛みは覚えるが、大したことではない。

「所詮女の細腕だ」

そう、むべなく言つてしまつと、シンは余計に落ち着きがなくなつてしまつた。何か話しうきつかけを無理に探していくように見えなくもない。

「えつと、今の人……」

サイサリスのことだ。すでに姿は見えなくなつているが、シンはサイサリスが立ち去つた方を妙に気にした様子で、近づいてこようとしてしない。

考えてみれば、どうということはなかつた。以前子犬のようだと言われたことを気にして積極的に話を持ちかけられずにいるのだろう。そんなところが子犬のようだと思わなくもない。

「そこでは話しつくい。横に來い」

いつも言つてやることで初めてシンは距離を詰めた。一度シンはレイの手元を見やつた。珍しく姿を見せている薔薇水晶を見たのだろう。何と言つても、薔薇水晶もサイサリスやゼフィランサスと同じくヴァーリの顔をしている。

「あの女はサイサリス・パパ。インパルスの設計者だ」

わざわざ説明してやつたといつのこと、シンはなかなか薔薇水晶から田を離さうとしない。

「ああ、ラクスたちとよく似ているだろ。薔薇水晶も、サイサリスもな」

「クライン議員で、三つ子なんですか？」

思わず笑わされてしまつ。少々口元を歪めた程度の笑い方くらい許されるだろ。

「いや、26人姉妹だ。クライン家がある計画のために用意したクローン体だ。もっとも、各人調整のされ方は異なるがな」

瞬きを繰り返し、シンはわかりやすくわからないといった顔をする。

どこかの誰かに誤った情報でも植え付けられたのだろ。誰かは、だいたい見当がつく。

「ラクスに何か吹き込まれたな。あの女は嘘はつかないが、巧妙に人をだます。彼女たちはヴァーリと言つてな。あんな顔した女がまだ20人以上いる」

さりにゼフィランサス・ズールがそのヴァーリも末妹であるということは、今はまだ話さないでおくことにしよう。今でさえ、よく話を計りかねているようなのだから。

話題を変えるには頃合いだろ。

「エインセル・ハンターはどうだった?」

「あ、その……、正直、勝てる気がしませんでした……」

どちらにしろこの若輩者はあわてざるを得ないらしい。エインセル・ハンターに勝てないことを恥じるべき人間など、この世界にはどこにもいない。

「それだけお前が強くなつたということだ。山に登つたことのないものに登山の苦しみを伝えることはできない。しかし、お前も難儀なものだ。母の仇がよりにもよつて世界最強の男とはな」

「知つてたんですね……」

少しばかり着いたようだ。それとも、氣分が沈んだとするべきだらうか。

「特殊部隊に入れるのだ。思想性、関係者、金回りから当然経歴まで精査される。無論、母親のこともな」

その審査に合格したと喜ぶよりも先に、レイが自分のことを想像以上に知つているこの方が気になつたのだろう。確かに、シンの経歴は、地球では変わっている。

興味がない訳ではないが、話すかどうかはシンに任せることにする。

シンはレイと田を合わせられないと考えたか、何か、見るものを探して視線が泳いだ。よつやく落ち着いたのは、シンが横たわる口

一ゼンクリスタルに田をやつた時のことだ。

それでもしばらぐの間をおこだから、シンはレイを軽く一瞥して話を始める。

「俺の母さん、マコ・ascaって言うんですけど、男嫌いだつたんです。それでもどうしてだか子どもが欲しかったらしくて、精子バンクに頼んで人工授精したそうです。相手は容姿端麗、成績優秀などこかの誰か。有名な学校に通う御曹司だと聞いてます」

「御曹司がはした金欲しさに精子バンクに協力しているのか?」

「そうですね。母さん、拘まされたのかな?」

曖昧で、どうとでもとれる笑い方をしている。ザフト軍正規兵に囁みつくような男だが、祖国オーブでは、いや、家庭ではこのようないい方をしていたのだろう。

シン・アスカに父親はない。生物学的には、遺伝子提供者はいるのだろうが。それも優れた。

「子ども心にわかつてました。母さんはただの子どもじゃなくて、優れた子どもが欲しかったんだろうって。優秀な遺伝子を手に入れ、『一デイネーターにしてまで。だから勉強もスポーツも頑張りました。そして結果を出していく内は、母さんは母さんでいくれただから」

何故シンが田をそらすための何かを必要としていたのか、その理由がわかり始めていた。シンの瞳には涙が溜まり始めていた。

シン・アスカといつ息子の中で、マコ・アスカといつ母親の存在を消化しきれていないのだ。

「でも、怖くて一度も聞けなかつた。もしも頑張ることをやめてしまつたとしたら、優れた息子じゃなくなつたとしたら、母さんはそれでも俺のこと、まだ息子だと思つてくれるのかつて……」

徐々に涙声になつていくなが、それでもシンは最後まで言い切ることができた。その後涙を拭い、シンは曖昧な笑みを取り戻す。恐らくは、母に向け続けてきた顔なのだろう。

「母さんが死んで、どうなるかなんて、もう確かめようがないんですけどね」

シンはレイとよく似ている。自分ではなく、ただ一定以上の能力を持つ存在が必要とされているという点において。仮に条件を満たす能力がなかつたとしたら、他の誰かが持つていたとしたら、レイもシンも必要とされないのではないか。

シンは怯え、レイは嘲つ。

そして、薔薇水晶は珍しく自らの意志で口を開いた。心ない人形の、抑揚のない声音で。

「どうして……、人は目から水をこぼすのですか？」

「悲しいから、かな……？」

「悲しいと人は泣くのですか？」

シンは瞬きを繰り返す。涙を払うためではない。単純に薔薇水晶の行動に困惑させられているのだろう。感情を理解できない機械。こちらの方がよほど自然に思えるが、シンもゲルテンリッターに、翠星石に慣らされてしまつたらしい。

「薔薇水晶つて、翠星石とはまるで違いますね」

プロジェクトーの光の柱の中で、静止画のように薔薇水晶は動きに乏しい。

「薔薇水晶には心がないからな。考えたことはないか？ ゼフィラ・サス・ズールは何故兵器に心を与えたのか。そう考えた者がもう一人いた。それがサイサイス・パパ。先程の女だ」

何故、こんな無意味なことをしたのだろう。わからない。わからないから無意味だ。そして、無意味なら必要ない。

「薔薇水晶はゲルテンリッターではない。サイサリスがゲルテンリッターに似せて作った紛い物だ。そして、サイサリスはそのローゼンクリスタルがゲルテンリッターを倒した時、自らの力が証明されると考えている」

そのために、ローゼンクリスタルには不可視の一撃を生み出す力が与えられた。その力は、まさにガンダムを破壊するための力なのだ。

だが同時に、高性能機を作るためには、サイサリスはガンダムを真似ることでしか、足がかりにすることでしかたどり着くことができない。

「哀れな女だ。ゼフイランサスの影を追い続け、すがることでしかアイデンティティを確立できない。薔薇水晶はそんなサイサリスが作った偽物だ。兵器に心はない。サイサリスが作った、少女の姿をした兵器だ」

ならば何故、薔薇水晶に少女の姿を与えたのだ、サイサリス。

プラントで食いつぱぐれる職業を存じだらうか。気象予報士だ。すべての国土がコロニーで構成されるプラントでは天候から日の出、日の入りまで完璧に制御され、気象予報ではなく気象予定にしかならないからだ。

昨日、寝る前に見た予定では明日は一日快晴。予定通り、窓の外から朝日が燦々と降り注いでいる。

廊下を歩いて、それはひどく遅い歩みで、等間隔に杖が床を叩く音が聞こえる。そして、足を引きずるような音も。

足音の主は扉を開く。誰でもたやすくできてしまう「さえ一苦労ちつた様子で、扉はゆっくりと開かれた。その人物には左腕がなく、右手は杖を握んでいる。

扉の先には小さな部屋。どこか企業の受付を思わせる大きめの机に、受付嬢よろしく座る女性。

人物は女性に話しかけた。若者特有の軽い調子に、どこか気取つたような話しが目立つ。

「おはよう、リーカさん」

「おはよ「ハ」ヤセコマツ」

立ち上がり挨拶しようとすると受付嬢に、人物は軽く首を振り、それを制する。

人物は若い男性。受付嬢もまた若い女性である。そして、両者のもう一つの共通項は、どちらも障害者であるということである。人物は歩く度、右手の杖が床を鳴らし、左足がほとんど動いていない。受付嬢は顔の半分を覆うほどのバイザーを身につけていた。視力のないものに視力を与えるための視力供与バイザーがずいぶんと重そうに見える。

女性は、リーカ・シェダーは視力を持たない。女性が身につけるにしては不格好で重いバイザーを振るようにして近づいてくる人物の様子を見ている。

「親父は昨日も帰らなかつたみたいだな」

「はい。現在クライン派と唯一対抗しているのはタッドさんだけですから、陳情の人人が詰めかけて仕方がないと聞いています」

人物はため息をついた。4年前の戦争で左腕を失い、左目は視力を失っている。左足はほとんど動かすとも、こんな簡単な動作くらい苦にはならない。受付のカウンターほどの大きさを持つ机に寄りかかるように立ち止まる。

「手紙、なんか来てる?」

「お花とカードが来てます」

健常者なら目配せですませるところを、リーカはわざわざ手で指し示した。机の脇に花束が置かれとカードが添えられている。

「花？ 爆弾とかじゃないんだろうな？」

「冗談じみた人物の言葉にリーカは思わず笑みをこぼした。それに気分をよくしたのか、杖を机に預けた人物はカードを抜き取る。

花はとても独特の形をしていた。花びらが立ち上がるものと垂れ下がるものに分かれ、まるでドレスを着た貴婦人のようにも見えた。

「リーカさん、この花の名前、わかるか？」

「多分、アイリスの花だと思います」

アイリス。その言葉に人物はどこか楽しそうに笑う。カードを胸ポケットに仕舞うと、杖をとる手は軽快である。

「ちょっとでかけてくる」

「お一人で、ですか？」

「いくら障害者に冷たいプラントでも、とつて喰われはしないさ。

そう心配しないでくれ」

人物が歩き始めるとともに、杖の音と足を引きずる音が聞こえる。ゆっくりと離れていくその音を見送りながら、リーカはバイザーに覆われた顔の奥で不安げな顔を作る。

「お気をつけて、ティアックさん」

昔々、人は楽園に住むことが許されていました。ところが、蛇に唆された女が禁断の実を食し、それを男に与えました。神はそれを許さず人を楽園から追放して、女に男を誘惑した罰として陣痛の苦しみを与えました。人が生まれながらに負う罪は、女のせいだそうですよ。

男が悪いのではなくて、誘惑する女が悪い。

それなら、男の人はいつになれば懲りるのでしょうか。

次回、GUNDAM SEED Destiny Blumen
Einbrecher

「未来のイヴ」

原罪。罪は飽くなく産み出されて、では罰は？

第23話「未来のイヴ」

太陽光を大型ミラーが反射し、コロニー内に降り注いでいる。人工的な昼は、何十億という昔から地球を照らし続けた巨大な核融合炉に頼りながら、プラントの昼は演出される。

平日の昼間であるためか、公園に人影は疎らである。子どもを連れた母親のグループが芝の上に敷かれたシートの上で談笑しながらはしゃぎ回る子どもの様子を見守つていてるくらいだ。

子どもと親というものはどこも大差ないのでないだろうか。ただ、ここはプラントだ。ひどくプラントというものを意識させた。

杖をついて公園を歩く。動かない左足を引きずりながらの歩行は独特の音を立てるため、母親たちはすぐにディアッカ・エルスマンのことに気づいた。露骨に嫌な顔を隠そつとしない。母親の中の何人かは、子どもを呼び戻しながら、ディアッカから目を離そうとしない。

(まるで犯罪者だな)

実際、プラントで障害を持つことは罪だ。劣等遺伝子のキャラニアはそれだけで犯罪であり、その形質を次代に伝えることが禁じられる。手つとり早く断種か、強制収容所送りにされる。

ディアッカの場合、戦争時の負傷が原因であり、遺伝子上の欠陥障害者であることを欠陥だとすればだが、を持つ訳ではない。人々の侮蔑さえ気にしなければ、白昼堂々街を歩くことができる。

木陰に長椅子を見つけ、とりあえずそこに座ることにした。一度座ると、自分が疲れていたことを実感できる。木製の椅子が軋む音を聞きながら深く座る。

離れたところでは、不安そうな子どもに母親が優しく声をかけている光景が見える。何である人、手がないの。悪いことしたからよ、だからいい子でいなくてはいけませんよ。恐らく、こんなことでも言い聞かせているのだろう。劣等遺伝子を持つことが悪いということと、悪い者が劣等遺伝子を持たれるという理屈は簡単に醸成される。

教育熱心な母親たちはシートをまとめ、場所を変えた。特に何でもない別の芝の上で、さすがにティアッカのことを睨むことはなかつたが、避けられていることは明白だ。

「ジョージ・グレンは、障害を持つ子どもは幸せだとは言つてくれなかつたな……」

美しい子ども、足の速い子ども、賢い子どもは幸せになれるとは言つていたのだが。

歴史のじがらみから解放された理想郷プラントは、人が培つてきたものまで捨て去つて行った。

吹く風に匂いは感じられない。プラントのロロニーでは地球のような雑多な生物の堀堀ではなく、人と機械の手によつて管理された自然が広がつている。すべてを制御できる範囲に押し込めなければ納得できず、管理から漏れた存在を異端だと排斥する。こんなところにまでプラントの悪しき風潮が見られるとするのは考えすぎだらうか。そんな考えは突然中断させられることになる。誰かがティア

ツカの肩に手を置いた。まずは左肩だ。

「まだお父さん、プラント最高評議会の議員さんなんだって？」

「じ」となく底意地の悪そうな少女の声が聞こえる。

続いて、右肩に手が置かれた。

「私たち、お友達ですよ、ディアッカさん」

さわやかな声で、それこそ腹に黒いものをため込んだような声がした。

そして、ベンチの前にはスーツを軍服よろしく着込んだ女性がいつの間にかいた。見忘れるはずもない。かつてアーク・エンジエルの艦長を務めた中尉殿だ。退役したと聞いているが、髪を短くまとめ、実利と装飾を兼ね備えたような最低限の化粧の仕方は当時と何も変わっていない。

「今度は何たかりにきたんだ、ナタルさん？」

左肩はフレイ・アルスター、右肩はアイリス・インディア。この2人のことは見るまでもない。

戦争とは何か、いろいろな捉え方があるとしても、ミリアリア・ハウにとつては一つのことだった。ついさっきまで話していく人が結構な確率で突然、もう会うことができなくなる。

突然の別れを突きつけられることが、戦争なのだと考えた。

空母の大きさの割に狭くて暗い通路。ミリアリアの目の前には鋼鉄の扉があつて、中からは機械音が聞こえている。格納庫の前で、ミリアリアは踏み出す1歩を躊躇つていた。

前の戦闘で、隊員の1人、ミユーディー・ホルクロフトが戦死した。きっと、みんな気分が沈んでいるのだろう。自分になら慰められると考えるほど自信過剰ではないにしても、恋人を失った経験者として、何か力になつてあげることができるかも知れない。

そんな決意を固めるため大きく深呼吸して、よしと小さくかけ声を発する。ドアノブを回すと、それだけで格納庫の音量が増したような気がした。ライトが眩しいくらいに照らされた広い空間のほんの片隅の扉を開けて、ミリアリアはモビル・スーツを支えられるくらい固い床に足を着けた。

格納庫は騒がしくて、ミリアリアはなるべく壁の側を選ぶようにして歩いた。ガンダムの装甲を外すくらい、本格的に整備をしてくるらしかつた。そんな整備の人たちが忙しそうに動き回る中、堂々と真ん中を歩く度胸なんてなかつた。

そうして隅から隅に移動している内に、目当ての人物を見つけることができた。それでも、目的の人を見つけられたとは違う気がする。わかりにくいとは思つけれど、ミリアリアはつい戸惑うしかなかつた。

戦死したパイロットと同じ部隊の隊員のシャムス・コーヴザが積まれた資材の上で手を頭の下に敷いて横になっていた。サングラスまでかけて、まるでビーチで日光浴でもしてるみたいな格好をしてい

る。

「シャムス、さん……？」

「お、ミリィ、俺の戦う姿でも見に来たのかい？」

体を起こして、資材の上に座つて、黒いノーマル・スーツを着た体は確かに鍛えられていてスタイルがいい。それで、顔は軟派な感じで笑つてた。どこにも、戦友の死を悲しんでいるようには見えない。

資材の影から偶然通りかかったのはスウェン・カル・バヤン。こちらはもう軍服に着替えていて、いつも通り静かな顔をしている。この人からも死別の悲しみは感じられなかつた。

「ミリアリア・ハウ。ここは兵器の保管場所だ。素人が踏み入ることを推奨しない」

「ミユーディーさん、亡くなつたんですね……？」

確信がもてなくなつて、つい聞いてしまう。

「ああ。エインセル代表庇つてな。俺もどうせならそんな死に方希望だ」

躊躇つた様子もなくて、シャムスはそんなことを軽い調子で言ってのけた。

いつまでも片づけられる気配のない部屋の中には、向かい合わせに並べられたソファー周りだけが辛うじて足の踏み場を維持している。ただ歩く場所だけ開いていればいい。それが横着なのか合理的なのか、ネオ・ロアノークは後者だと嘯いておくことにした。

少なくともソファーに座っている分には不便を感じることはなく、ここは単なる休息の場であって、必要以上の機能性が求められないわけでもない。

ソファーに座りながら、向かいの席で電話している副隊長の声を聞いているくらいなら、雑多な部屋でも何の問題もない。

「プラントって！ 僕に相談もなしに……」

10歳も年下の恋人を持つアーノルド・ノイマンはある種の遠慮があるのか、それとも恋人のキャラクターか、いつも押し切られている。アーノルドの話を聞いているだけでも、終始ペースを握られていることは簡単にわかる。

慌てたような態度で話を進めていたアーノルドが、しばらくして息を吹いた。これもいつものことだ。若い恋人のわがままに折れて、ため息をついた。

「何か困ったことがあつたら僕かハンター代表に連絡するんだよ。それじゃあ、また……」

電話を切るアーノルドに、わかりきったことをつい聞いてしまう。

「フレイ？」

「ええ。今プラントのヒルスマントンにいるやうです」

アーノルドが慌てた理由もわかる。フレイたちは4年前、ザフトを離反する形で地球軍へと合流している。クライン派がアイリス・インディア、エヴァーリーの存在を公にしまいと判断したためか、指名手配などはされていないようだが、それでも思い切りのよさは否定されない。

どこか疲れたような副隊長の顔に、少しの罪悪感を覚えながらもネオはつい笑みを漏らした。

「相変わらずだね、フレイもアイリスも」

ネオは2人の出会いから知っている。フレイは民間人。アーノルドは保護した軍人で、家族を失ったフレイに戦艦の操舵手としての居場所を与えたのがアーノルドだった。

もう4年も前のことになる。

「それにしても、僕とアーノルドも結構長いね」

「ええ、ヘリオポリスで隊長が現地徴用されて以来です」

「そうか、僕の軍籍はちょうどアーノルドと重なるんだね」

「あなたは当初からゼフィランサスさんのことばかりでした。周りからすれば困惑させられる」とばかりでしたよ

「それを言わると痛いよ」

ネオもアーノルドも静かに笑う。そういえば、この生真面目な副隊長が口を開けて大笑いしていることは見たことがない。いつでも物静かで堅実。恋人との結婚も真摯に取り組みすぎているから遅れているという面もある。

戸籍を多少こまかしてまで結婚を急いだネオには、何にせよ内耳をくすぐってくれる。それとも、廊下を誰かが走る音が聞こえたことが原因だろうか。

音の大きさからして女性。アーノルドも気づいたらしく、つい扉の方をそろつて眺めていた。ノックなんてなかつた。扉が勢いよく開かれ、姿を見せたのはエプロン姿が様になりつつあるミコアリアだつた。

「ねえ、キラ！」

この艦でネオのことをキラと呼ぶ数少ない人は、息を整えるための時間が、そのまま会話の中止になる。肩で息をするほどではないにしても、胸に手を当てて、時間にして30秒ほど呼気の調整に費やした。

「ミコアーディーさん、亡くなつたのよね？」

少し声が震えているのは、多分呼吸の乱れが原因ではないだろう。

ミコアーディー・ホルクロフトの死にざまをネオは目撃していない。ザフトの分隊を抑えるため別行動しており、その間に、ミコアーディーは遙かに性能の劣る機体でゲルテンリッターとの戦闘を行つた。

「ヤードシユテルンと戦つてね。ゲルテンリッターと戦えるのはゲ

ルテンリッターだけだよ」

結果としてネオはミコーディーを死地に追い込んだことになる。だが、この判断を間違いだつたとは考えていない。エインセル・ハンターとNN-X300AAフォイエリビガンダムを守る」とができたからだ。

座る場所をずらして、ミリアリアに座るように促した。決して嫌われているわけではないと思うのだが、ミリアリアは部屋の出入り口に立つたまま、声を張り上げた。

「悲しくとかないの！？あのシャムスさんだって、スウェンさんだつて、まるで当然みたいに受け入れてる！」

いきなり大きな声を出すものだから、体が驚いてしまつたのだろう。ミリアリアはせき込んで、また言葉が中断する。そんな少女の様子を、ネオもアーノルドも静かに見ていた。きっと、スウェンとシャムスも同じような様子でミリアリアと言葉を交わしたのだろう。

それでもネオは、戦士としてこのように対応せざるを得ない。

「慣れたとは言いたくないし、悲しくない訳じゃない。ただ、距離間というものを学ぶんだよ、戦場が長いとね。互い互いにあくまでも戦友でいよう、それ以上の間にはならにようじにようつてね。シヤムスだって、明るく振る舞つてるけど、でもどこか壁を作つて、僕を含めて仲間の誰にも一定以上は踏み込ませないよう、踏み込まないようにしてようとしている」

少なくとも、人の死にいちいち心揺り動かされていのうな正常な感受性の持ち主に兵士は務まらない。

「僕たちだって悲しみがないわけじゃない。もしゼフィランサスを傷つけられたりなんかしたら、僕は相手を許さない。でも、仲間とはそうはならないように気をつけてる。戦場じゃ、人の生死なんて日常茶飯事だからね」

心は本当に穏やかで、身体がリラックスしたことを隠そとはしなかった。ソファーにゆったりと腰掛け、ミリアリアが心に押しつぶされてしまいそうに身体を固くしている様子と対照的に思えた。

（これじゃあ、どちらが部下を失ったのかわからないな）

ただ、ネオは自分が冷血な人間とは考えていない。実際、ゼフィランサスが傷つけられた時には相手を許すことは発想さえ浮かばなかつた。ネオは、ゼフィランサスを傷つけようとする相手を決して許さなかつた。

「キラは、そんなこと私に教えてくてこんなところにまで連れてきたの？」

ミリアリアは今にも泣き出しそうな、悲しい顔をする。

「違うけど、大きく外れてもいいかな」

君には、悲しみを乗り越えてもらいたいのであって、無神経になつてもらいたいわけではないから。そして、この経験はそのために決して無駄にはならないとも、ネオは確信している。

「ミリアリア、この戦争は、君が考へている以上に根が深いものなんだ。一体どうして戦争が起きたのか、何故コーディネーターが生

まれたのか、そんなものを、君にはいずれ見せてあげることになる」

「大丈夫だつて、心配しないで」

席から離れていたフレイが携帯電話をしまいながら席に戻る。元々ついていた席とは違うが、この部屋には椅子がいくらでもあった。少し席をずらしたところで誰も気にもしないことだろう。

「これはエルスマン邸のシアター・ルームである。『ディアッカ』の父であるタッド・エルスマンが趣味で作った部屋で、大型モニターに向かって椅子が多数、放射状に並べられている。テレビを見ながら大勢で話をするにはもってこいの部屋だと言えた。

椅子は角度をつけて並べられているため、『ディアッカ』が座る椅子から見ることができる椅子は数多い。電話にていてフレイがついた椅子も見える範囲内だ。電話の相手はアーノルド・ノイマンだろう。4年前からフレイの方が積極的だった恋愛関係はまだ続いているらしい。

「結婚はしないのか？」

何気ない一言のつもりだったのに、何故か鋭い眼差しで睨まれた。

すぐ隣の席に座っていたアイリスがそつと耳打ちしてくれる。

「フレイさん、アーノルドさんがなかなか切り出してくれないって気にしてるんです……」

そういえば、4年前も口づけを唇ではなくて額にされたとフレイが怒っていたことを思い出す。アーノルド・ノイマン殿の堅物ぶりは相変わらずらしい。

なんて声をかけていいかわからない内に、フレイは不機嫌そうに顔をそらしてしまった。フレイにしても変わった様子なく、4年ぶりとは思わせない。

何か話を逸らそうとしてテレビでもつけようかと思い立つ。親父の趣味で作られた部屋だ。椅子 ソファーのようにゆったりとしたものだ。肘掛けのプラスチック・カバーを外すと、そこには大型モニターのコントローラーが内蔵されている。

ただ、操作をする前に、部屋の扉を叩く音がした。簡単に返事をすると、扉を開けて視力供与バイザーを身につけたリーカ・シェダーがトレイを片手に現れた。

リーカはナタル・バジルールにはレモン・ティーを、ジョス・リブルと名乗ったジャーナリストはストレート・ティーを配った。丁寧な物腰で、その姿には戦時中命を落とした少女の姿を思い出さずにはいられない。

ジャスミン・ジュリエッタ。先天的に視力がなく、いつもバイザーをつけていて素顔を目にしたことは、結局一度もなかつた。障害者であることに負い目を感じて、いつも周りの機嫌をうかがつているようなところは、残念ながらリーカにも共通する。

この国で障害者は、障害者は障害者であるというだけでのけ者にされる。ジャスミンとリーカ。この2人が似た印象を与えるのは、悲しいほどに必然だ。2人とも、周りの顔色をうかがうことでしか

生きてこられなかつたのだから。

リーカは、今度はディアッカの下に飲み物を運んでくれる。ディアッカはストレート・ティー。片手の使えないことを気遣つてくれたのか、手渡すのではなくて椅子のボトル・ホルダーに直接置いてくれた。

「どうぞ、ディアッカさん」

「ああ、悪いな、リーカさん。おやじの私設秘書なのにお手伝いさんみたいなことさせて」

隣の席のアイリスはオレンジ・ジュース。本人は何も気にして様子なく飲み物を受け取つているよう装つてゐるのだろうが、昔から隠し事の苦手な少女は、必要以上にリーカのバイザーに気を取られているよつにも見える。

リーカは特に気にしてた様子もなく小さくお辞儀して部屋を後にした。ジェス記者を除いてジャスマシンのことを知つてゐる連中はみんな言葉少なにリーカのことを見送つた。

沈黙の中、事情を知らないジェス記者だけが雰囲気を察して落ち着かない様子で首を回していた。女性陣3人はジェス 上司だと聞いているが に構いもせず、それぞれ考えを巡らせてゐるらしい。この光景だけでも、このジェスというフリー・ジャーナリストが事務所でどんな扱いを受けているかわかる。

「あの人……」

最初に声を出したのはアイリス。

「リーカ・シェダー。見て通り、田は見えない」

「ジャスミンと同じだけど、その、まだ忘れられないの？」

フレイは、4年で少しは遠慮ということを覚えただらうか。

「俺とジャスミンは元々そんな間柄じゃない。確かに俺のしていることはジャスミンがきつかけだが、引きずつてるつもりはない」

そもそもリーカを雇用しているのは親父で、人選にはディアツカは関わっていない。もつとも、ディアツカがプラント国内の障害者保護の活動を進めようとしている。そんなディアツカを、父は支援しようとしてくれている。

（甘やかされっぱなしだな、俺も……）

そんな親父殿はアプリリウス市。プラント最高評議会議員として忙しい毎日を送っている。本来、息子の活動に関わっている余裕などないはずだ。すまないとは思つが、正直にありがたい。

プラントは、変わらなければならぬのだから。ジャスミンが死ななければならぬ理由を知る者としてディアツカは歯を噛みしめ、表情を歪ませた。この顔に気づいた訳ではないのだろうが、アイリスたちもジャスミンのことを知つている。

「やっぱ、プラントって変わつてないんですね」

「変わつてないどころか、返つてひどくなつたくらいだ。プラントはコーディネーターの国だ。そして、コーディネーターは優れてな

くちゃいけない。障害者が無能とは言わないが、不利であることに代わりはない。そんな人たちのことまで気を遣うような国なら、そもそもコーディネーターを作る意味はない

子どもには優れていて欲しいと望む親たちが、障害者を子どもに持ちたがるはずがない、それどころか、障害を持つ子どもなんていらないと考えるだろう。そして、プラントとはそんな人間たちが集まつて建てられた国だ。

「優れていることを求めるということは、劣っているということを認められないことだからな」

少なくとも、自分や子どもたちが劣った存在であることを認められる人はここにはいない。

「特にプラントじや優れた遺伝子は財産だ。優性遺伝の劣等遺伝子を持つてるなんて認定された日には、強制収容所で隔離か、断種手術を強制される」

極右進化論者に言わせれば、劣等遺伝子は本来自然環境の中で淘汰されるべき存在であり、今日の社会はそんな障害者まで生きながらえさせていることはあまりに不自然であるばかりか、劣悪な遺伝子を種の中に存続させてしまふことになるとのことだ。

「この国では、劣っていることは罪になる。

アイリスやフレイ、ナタルといつたこの国の内情を多少なりとも理解している人は特に驚いた様子もなく淡々とディアッカの言葉を聞いている。プラントへの渡航は初めてだというジエス記者だけは、どこか不安げな様子で手つきに落ち着きが感じられない。

「プラントは優れた遺伝子操作技術を持つてる。それでも駄目なのか？」

「そんな完璧なものじゃない。それに、優れた調整にはそれだけ金がかかる。ところが、プラントは徹底した実力主義だ。障害者が金を稼ぐことはそもそも難しい。障害者を優先して雇用する特別規定なんてないからな」

障害者と健常者　あまり好きな表現ではないが　の収入には3倍から5倍の格差があるとするデータもあるほどだ。

「プラントじや、ナチュラルも増え続けてる。富裕層は遺伝子調整を子どもに施すことができるが、そうじやない人はナチュラルとして生まざるを得ない。そして、実力主義の名の下、コーディネーターが優れた力を發揮して要職に就き、ナチュラルは高給取りにはなれない。するとナチュラルの子どももナチュラルとして生まれ、コーディネーターの子どもはコーディネーターとしてまた金を稼ぐ。その繰り返しだ。プラントは建国からだいたい50年だが、その間に貧富の格差は固定され、それもどんどん広がってる」

この国では金がなければ能力は手に入らない。能力がなければ金を集められない。ナチュラルはいつまでもナチュラルのままで、コーディネーターは次第に富を独占する。

現在の地球では考えられないことだらうが、プラントには事実上の貴族制、一部のコーディネーターが結果として富も権力も能力も独占する状況が建国当初から続けられている。

今思えば、そんな制度がナチュラル蔑視、コーディネーター至上

主義の風潮を助長し、この国を支え続けている。ナチュラル対ゴーディネーターの図式をこの戦争に持ち込んだのはプラントの方。しかしそれは、政治家の暴走や激昂ではなくて、一部の人間の偏見や誤解が原因ではないのだ。

「この国の病巣そのものが戦争さえ腐らせた。

リーカが淹れてくれたお茶をすすつて、喉を休ませる。その間、重苦しい空氣ばかりで誰も話そつとしない。

「少々極端だが、人口の5%が富の95%を独占しているようなお国柄だ。まあ、我がエルスマン家もその5%の側なんだが」

少々冗談混じりで言つてみたが、案の定、雰囲気の改善にはこつぽちも役立たない。

「その割を障害者やナチュラルが負わされているのか？」

記者らしく、質問はいつもジエス記者から来る気がする。

「いや、最近は移民もそうだな。そもそも移民なんて大半が経済難民だ。納税が楽なはずがない。結局軍隊にかり出されて使い潰されるのが現実だ」

「でも、中には要領がいい奴もいるのね」

いつの間にかフレイが新聞を手にしていた。椅子の脇にでも置かれていたやつを見つけたのだろう。1週間前 その頃、家にいた親父が置き忘れたものだろう のもので、一面には左頬に痣のある少年兵がギルバート・デュランダル議長から鉄十字勲章を渡され

る場面が掲載されている。フレイがティアツカたちに見せるように、その少年を指し示していた。

「シン・アスカか。今のプラントじゃちょっとした有名人だ。だが、そいつも利用される感じだな。アブディエルでも努力すれば功績は認められる。差別されているように感じるのは、単にお前たちの努力が足りないだけだつてな」

プラントじゃ当たり前のように使われている言葉を、フレイは理解しなかつた。

「アブディエルって？」

「ああ、アブディエルってのは移民のことだ。何でも、天使の名前で、仲間を裏切つて上に媚びへつらつた奴なんだ。コーディネーターの造物主を気取るナチュラルへの皮肉も兼ねてるんだとさ。仲間であるはずのコーディネーターを裏切つて、ナチュラル様にお仕えしていたつてな。地球上でたつてだけで、裏切り者扱いだ。コーディネーターが人類の未来をかけて戦っていた間、何もしなかつた厚顔無恥な馬鹿どもなんだとさ」

敢えて大げさに手を振つて、嘆きを演出してやる。プラントはいつも自分たちよりも下の人間を、見下すことができる人間を探してばかりいるようでならない。

もつとも、これは今に始まつたことではない。だから安心だと考えるべきか、それとも何ら改善が見られないと嘆くべきか。

戦艦の艦長として、悲観的な思考に慣れたナタルは躊躇なく後者を選択した。

「状況は、4年前よりなおひどくなっているようだな」

「今はちゅうじ、ユニウス・セブン世代が声を上げ始めた時期だからな」

また専門用語を使つてしまつただろうか。軽く仲間たちを見回して、やはり誰もユニウス・セブン世代について言葉を理解したようには見えない。

「ユニウス・セブン世代つていうのは、血のバレンタイン事件前後に子ども時代を過ごした世代のことだ。俺の前後がそれにあたるな。ガキの頃からナチュラルはひどい奴らだ、ナチュラルは悪い。いいナチュラルは死んだナチュラルだけだ。そんな教育を受けてきた奴らが成長し、この国を動かす若き力になつてゐるわけだ」

血のバレンタインからすでに14年経つ。その時にもまだ子どもであつたり、生まれていなかつた若者が血のバレンタインでナチュラルどもはひどいことをしたと大人たちから延々と聞かされ続けながら成長する。するとどうなるか。地球上にて行つたこともない若者たちがさも自分で見てきたかのようにナチュラルの非道を語り、プラントの正義を声高に主張するようになる。

その最たる例といえば、4年前のジョンネシス発射の正当化だろう。戦争に關係のない人々も、地上の友軍さえ一緒に殺戮する大量破壊兵器の使用を、プラントの若者の多くは仕方がないことだと認識している。

ナチュラルは悪魔のような奴らで、そんな相手に負けたら根絶やしにされてしまう。生きるために、手段を選んでいるだけの余

裕はなかつたといつ理屈だ。

だが、そのナチュラル像は、地球に住むナチュラルを見たこともない若者が、政府お墨付きの報道から得られた情報を元に作り上げられたものだ。

事実、ディアツカも捕虜になるまではナチュラルという存在に触れたことなどなかつた。そのことは、やはりフレイに指摘されました。

「そついえば、ディアツカも初対面の時は鼻につく奴だつたしね」
初対面の時のこと、まだ根に持つてゐるらしい。気のせいいか、フレイの眼差しは、若干きつい。

(お前だつて反コーディネーター主義者だつたらうが!)

聞かれるときやこじいので、心中に留めておく。

「まあ、俺の場合ひねくれてるからな。お前たちで出来なかつたとしてもここつらのようにはならなかつただろつナゾな」

肘掛けのコントローラーを操作する。モニターが映し出され、デュランダル議長殿が演説し、それに喝采を浴びせる群衆の様子がモニターに表示される。何もたまたまではない。国営放送の一局が、いつもこの手の映像を流し続けているのだ。

演説台に立つギルバート・デュランダル議長は熱弁をふるつ。声の響きがよく、その姿は映画俳優かと思わせるほど興奮して凛々しくもある。

「ギルバート・デュランダル。我らが指導者様だ。若くて逞しい。演説も上手ければ容姿端麗。考へてもみる。こんな偉大な指導者様がことあるじとに君たちは正しい、君たちは素晴らしいと宣つてくださる。ゴニウス・セブン世代なんてイチコロだろ」

群衆の多くは若者だ。この中に限つては、ナチュラルもコーディネーターも、アブディエルも関係ない。誰もが偉大な指導者に熱狂し、右手を高く掲げ、高らかに勝利礼讃を謳い続ける。

そこは完全な正義と大きな力と絶対の確信に裏打ちされた熱狂に支配されている。

これでいてブルー・コスマスを狂信者の群と捉えているのだから質が悪い。

アイリスもフレイも気分悪そうに画面を見ている。さすがと言つたところか、ナタルに限つては不快そつながらも怒りを含ませた顔をしていた。

「まさにファシズムだな。4年前からその兆候は見られたが……」

「報道規制までされてるんだな……」

ジエスの言葉が語つてるのは、演説画面に挿入された数枚の写真についてだ。

緑色の一般兵を制服を着たザフト軍が何やら一般市民と笑いながら談笑している。地球で撮られたもので、説明では、当初フィンブル落着でぎくしゃくした地球の人々とも、ザフトの手厚い支援で次

第に打ち解けたということだ。ザフト軍は地球で受け入れられており、無辜の民を苦しめてはいない。解放軍として受け入れられ始めている。

そういう宣伝文句に、ギルバートの流れるような演説が重ねられ、プラントの民は自らの正義の戦いを確信し、そんな避難民に手をさしのべようとしない地球軍への怒りを高めていく。

だが、実際地球の記者の様子を見るなら、事実は違うらしい。

「ザフトは、大西洋連邦に武力で支配されている可哀想な人々を解放して回っている解放軍なんだそうだ。だが、プラントの国力を考えればそんな余裕があるはずがない」

そんなことさえ、今のプラントの民は気づいていない。田をそらしているのか、それとも都合のいい情報のみを与えられて満足しているのか。単純に地球の為政者はそろって無能で、ブルー・コスモスを悪と決めつけ、正義というぬるま湯に浸かりきっている。

開戦からすでに8年が経過し、莫大な軍事費が市民生活さえ逼迫している中、施しを与えるほどザフトに余力があるはずがない。

続いてプラントに理解を示す国の都市に大西洋連邦軍が侵攻し、市民を虐殺している現場にザフト軍がかけつけたことで最小限の被害に押さえられたエピソードが紹介されている。プラントは徹底して敵を悪としたいらしい。

こんなことの繰り返しだ。ディアックはため息さえついてモニターの電源を落とした。

プラントは、長引く戦争で尊いものなくしてしまった。

ふと、横からアイリスがお菓子の箱を差し出してくれた。リーカがもつてきたものではないので、アイリスの私物だろう。箱から、ステイック状のお菓子を一本つまみ上げる。もちろん、母国の窮状を嘆くディアツカを気遣つてくれた訳ではない。ただ、多少気を遣つてくれたと期待しておく。

「ディアツカさん、これ、ここにくる途中に買つたんですけど、すぐ高いですよね」

値段を聞くと、もう一箱同じものが買えるくらいの数値だった。試しにお菓子をかじつてみると、まずくはないが、値段相応の味とも思えない。いや、今のプラントなら、これが相応の値段ということだろうか。

「消費税が年々上がつてゐるからな。そろそろ一〇割の大台突破も見えてきた。物の値段の半分以上が税金てわけだ。ほかにも住民税に酒税、タバコみたいな嗜好品もすぐ税金があがるな。日用品だって同じだけの消費税がかかる。まあ、相続税は据え置きだけだな」

要するに、このお菓子のだいたい半分は品質ではなく戦地の武器、弾薬のための値段ということになる。

「こんな税金で生活がなりたつのか?」

いつものように尋ねてくるジロス いつの間にか、手には取材用と思われるメモが握られている の質問に答える。

「富裕層はな。だが、潜在ナチュラルや障害者、アブティエルはそ

うはいかない。だが、心優しき我が総統は救護の策を用意された。
徴兵に応じれば、その人数に応じてその世帯は税を免除される

「それって、金がなければ命を出せってこと?」

フレイらしい率直な言葉だ。だが、外れではない。プラントには徴兵制が存在しない。それは一見無理に戦争に駆り出されないまともな状況のように思えるが、裏を返せば金さえ国に納めれば大手を振つて戦争にいかずにするということだ。そして、貧乏人と非正規市民たちばかりが権利を餌に戦場に送られ、命を落とす。

「そうして、プラントは莫大な戦費と兵力を同時に賄つてんのさ。兄が家のために戦争へ。それでも足りなくて次は弟が。こんなことは、よく聞く話だ」

「障害者はどうするんだ? 戦争にもいけないし、税金だつてなかなか払えそうにないが」

別に聞かれたくないことではなかつたが、ディアッカはあからさまに嫌な顔をしなければならなかつた。ジェスは驚いたような顔をしたが、アイリスたちは変わらない。良くも悪くも、ディアッカという人間を心得ているらしい。

気分を落ち着けるため、大きく息を吹く。

「プラントじゃ、障害者の誕生は年々減少している……」

遺伝子調整技術が向上した訳ではない。そもそも、自然状態では、人は大なり小なり何らかの障害を持つて生まれてくる。障害者がいなくなつたのではない。

「胎児条項って知ってるか？ 境胎はこれまで世界的に認められてきた。別に俺はピューリタンじゃないから反対はしないが、それでも、墮胎が優生思想の温床に使われてきた事実を考えるとそもそも言つてられない。通常、墮胎は胎児が独立して生存不可能な時期、明確に規定されてる訳じゃないが、妊娠、だいたい22だか、24週前後まで認められる。それ以上になると、墮胎は認められないとの方が多い」

「どうして？」

あんなニュース・セブン世代の熱狂を見た後だと、フレイの何気ない疑問が柔らかく聞こえる。

「考へてもみる。それ以上になると、胎児は母体から離されても未熟児とは言え生きていけるんだ。そして、墮胎は通常の分娩の手順に従つて行われる」

「要するに、墮胎の行程として胎児を殺すといつことが含まれるといつことか？」

ナタルの言葉にティアツカが頷くと、若い女性 ナタルのことをおばさんだと言つているわけではない たちは口を手に当てて驚きと不愉快さを表現した。

「そんなことがある時期、一部の国と地域で行われてきた。胎児条項つて言つ、ある条件をつけてな」

その条件が何であるのか、恐らくここにいる人にはわからないだろ。

「障害児だ。正確には障害を抱える人に限つて、墮胎の時期的制限が免除された。それを支えたのが優生思想だ。優れた子は国力の拡大につながる。反対に、劣った子どもは余計なカビも同然だ。障害者の子どもは障害者である可能性が高い。産まれてきてはならない。そんな大音頭の下で障害児の墮胎は進められた」

息詰まるなか、無理に息を吐く。

「さて、これはもう200年以上も昔のお話だ。人は技術も思想も進歩する。技術は進歩して、健常者の子どもでも障害児は生まれるし、それをあらかじめ予測できるようになつた。プラントじゃ、生後6ヶ月までの胎児の殺害が合法的に認められている。理由は、もう説明するまでもないな」

どうせ胎児を殺すことが認められるなら、出産後でもある程度準墮胎行為としての間引きが認められるべきではないか。建国当初、そんな議論が行われ、そして認められる形で決着した。

「障害児の墮胎までなら、昔こんなことをした国がいくつもあった。その代表格が、ナチス・ドイツって知ってるか？ 今の大西洋連合のある場所にあつた国なんだが、ここではユダヤ人やロマ人、ある意味じや当然だが政治犯の虐殺を行つた。それに障害者の殺害もな。障害者の殺害は合法的に行われた」

障害者を殺害してもよい。そんな法律が、事実上存在した。

「ナチス・ドイツ總統の元に手紙が届いたそつだ。それはある夫婦からの手紙で、妻が若年性痴呆症にかかつたことを嘆くものだつた」

夫は妻を愛し、妻には愛する妻でいてもらいたかった。妻は夫を愛し、夫を愛する自分のままでいたかった。ところが、病の進行はとまらない。妻は自分が自分でいる内にその命を終わらせることを希望し、夫はそれを理解した。

慈悲深き總統は、いたく感銘し、痴呆患者の安樂死を認める法律を作り上げた。

「プラントでも障害者や重篤な患者の安樂死、いや、ijiijiや尊厳死というべきか、ともかく、それが認められている。障害者は哀れだから死なせてあげなければならない。それがやがて、障害者は生きていることが不自然だということになる。リーカさんも実際言われたことがあるそうだ。面と向かって、どうしてあなたの両親は、あなたを墮胎しなかつたんでしょうねってな」

ただ淡々と語る。それ以外の抑揚は不謹慎以外の何者でもないような気がして、ディアツカは極力、声を絞り、何も見ていないような調子で話しを続けた。

「プラントはそれを推奨さえしてきた。優れた人々による世界は、そういうじゃない人を排斥することを助長しなければ存在できない。劣つていてることが許されるなら、そもそも優れた存在を追い求める理由がない」

劣っている者にも十分な権利が与えられるのだとすれば、高い金を払つてまで子どもをコーディネーターにする価値が減少してしまふから。

「自分たちが優れた存在であるために他の誰かを下位と見下す。優勢思想とはそれで、コーディネーターとはそれだ。プラントとは、

自分たちが優れていると認識したいがために、ほかの誰かを絶えず下位と見下している、そんな人たちの国だ」

ここには誰もいない。ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァ艦長、タリア・グラディス以外は誰も。

部隊を率いる者の証である白い軍服に乱れがないか確認する。手鏡に写された顔は、お化粧がしっかりと乗せられている。

ここは艦長の個室である。誰かが尋ねてくるわけではなく、普段通り執務用の机があるだけで、誰かと顔を合わせる訳ではない。

それでも、タリアは身だしなみを確認し、気を引き締めた。これから通信を交わす相手は、そんな余計な気遣いさえ支払う価値がある。

無線全盛 ミノフスキーパーナー粒子のおかげで揺らいでいるとはいえの現代において、古めかしいほど大きな受話器を引き出しから取り出す。暗号化されていることを確認してから、タリアは気を静めるとともに声を受話器へと吹き込んだ。

「はい。暗号化はすませています

「よろしい。では話を始めよう。どうかな？ シン・アスカ曹長は？」

暗い部屋だ。

「アブデイエルとは思えないほど優秀です。フェイスには及びませんが、安定して使える駒です」

主であるはずの自分がいるのに照明は沈み、これでは自分の顔さえ確認できないではないか。それとも、この部屋にさえ、自分はこの国の王と認められていないのでどうか。

「なるほど。君は知っているだらうか？ 今プラントではシン・アスカはちょっとした顔だ。テレビではアブデイエルの星として連日語られている」

「あまり2級市民に肩入れなさつては正規市民の反発を招きはしませんか？」

タリア、君もラクス・クラインと同じことを言つのか。

「アブデイエルも人間だ。戦うからには、ご褒美が欲しいし、ご褒美をあげればもっと頑張ってくれる。ラクス議員は、そこをわかつていない」

それを教えてあげなければならぬ。もちろん、授業料はいただくことにしよう。

「そつは思はないかな、タリア」

森の中で生まれた人は森で迷いません。森こそが生活の場であり、迷い込むということそのものがないからです。その森がどれほど深くても、どれほど過酷でも、その人は決して迷いません、迷ついていることにさえ気づきません。そこが生きるためのすべての場所だからです。

その森こそが世界のすべてと思いこんで。

その森に生きるべき場所と信じ込んで。

次回、GUNDAM SEED Destiny ↪ Blume
nEi n b r e c h e r s

「deep forest」

理想。それは、人が限られた視野の中で、それでも必死に見つけた限界の世界。

東アジア共和国トリントン基地。シドニー湾にほど近い場所に位置するこの基地は、現在慌ただしさを増している。軍事的に大国とは言い難いこの国で、この規模の基地は珍しい。立ち並ぶ格納庫に、大型機の離着陸が可能な滑走路まで完備されている。

滑走路の両脇では輸送機がエンジンを暖め始めていた。立ち並ぶ格納庫の中からはGAT-01デュエルダガーが規則正しく足を動かしながら歩み出る。鋼鉄の足が分厚いコンクリートを叩く音が乾いた風に染み込んで消える。

晴れ渡った空の下、戦の準備が着々と進められていた。

東アジア共和国の悲願、カーペンタリア湾を奪還するため、基地の喧噪は幾重にも重ねられた駆動音に支えられながら戦いの気配をわずかずつ高めていく。

そのただ中に、青い装甲に身を包むGAT-252インテンセティガンダムたちの姿があつた。軍事費に制約の多い東アジア共和国においてガンダム・タイプすなわちファンтом・ペインの所属であることを示している。バック・バックにアームで繋がれたシールドの表面に青い薔薇の紋章が描かれ、そのことは証明されている。格納庫の片隅に並ぶインテンセティたちもまた、出撃を待っていた。

ジョーン・ヒューストン率いるインテンセティは、はやる気持ちを抑え、戦いの時を待つ。気持ちばかりが急いで、しかしすることがない。コクピットでスタンバイを終えたジョーンは自然と暇を潰すようにモニターを眺めていた。

モニターの中にある人物の姿を認めた途端、その顔を不快そうに歪めた。

「ラリー・ウイリアムズ首相がどうしてここにいる？」

モニターの片隅には見事に禿げ上がった頭をしたスーシ姿の男が、大勢の制服組を引き連れて歩く姿が映し出される。格納庫の開かれたままの出入り口を横切る間の短い時間だけで、ウイリアムズ首相の姿はすぐに消えてしまつ。しかし、ジョーンの表情は戻らない。

東アジア共和国が誇る臆病首相が一体何の用だ。ファントム・ペインの部隊長はウイリアムズ首相が嫌いだった。いや、軍部に所属する者にとって、天敵とも言える男である。

（戦うぞ）立ち向かう気概もない臆病者が！）

部隊の仲間も同じことを考えたらしい。通信では、どこか投げやりな同僚の声が聞こえてくる。モニターには、ヘルメット越しにもわかるひねくれた口元を見せつけるように動かす若造の顔がある。若造は、マーレ・ストロードは、何か雑誌の類 出撃直前のコクピットにいるにも関わらず でも見ているようにジョーンと目を合わせないまま口だけが動く。

「大方軍事費削減の伏線でも張りに着たんじゃないか？ まさか第2次カーペンタリア攻略戦に加わるとは思えないしな。世界安全保障機構じゃとともに発言もできないと聞くが、典型的な内弁慶だな。シリアン・コントロール万歳」

「いいぶんと氣のない声だ。ウイリアムズ首相に再三予算削減を迫

れられる軍にとって、あの男のすることにこちこち田へじらたる者は次第に減つている。

ジョーンは、それでも歯がゆい思いから抜けきれずにはいる。

「ガンダムを並べるとは言わないが、せめてワインダムの配備くらい急いでもらわないと」

見える範囲の機体の大半はデュエルダガーである。ビームを扱えるというだけの旧式ばかりが並んでいるのは、首相の熱心な軍縮政策の一環だ。

「お国は不安なのさ。東アジア共和国一国でザフトに対抗できない。そして世界安全保障機構がどこまで協力していくかはわからない。板挟みだな」

「面倒なものね。戦争も、政治も」

「エインセル・ハンターはジブラルタル基地をすぐに発つたらしい。船団がジブラルタル基地を出たことが確認されている。目的地は、アイスランドのヘブンズベース基地か、でなければアメリカ大陸のどこかだ」

暗いブリーフィング・ルームの中、大西洋を中心とした世界地図だけが明るく照らし出されている。テーブル上の地図にその顔を照らされながら、アスラン・ザラは大西洋西岸を軽く指でなぞつてみせた。

エインセル・ハンターはこのどこかを指している。

「追うのか？」

レイ・ザ・バ렐はテーブルにつこうとはせず、暗闇のどこかにいる。注意しなければ見えない場所で、背中を壁につけたまま腕組みしていた。いつものように何を考えているのかがわかりにくいところがある。

感情を特には含めない声で、レイは続けた。

「ザフトはエインセル・ハンターにこだわりすぎている。エインセル・ハンター追撃にあてる戦力確保のためにいくつかの軍事作戦を中止せざるをえなかつた。ボーパールのように工場施設としてはともかく、軍事拠点として攻略価値の低い場所に貴重な戦艦を多数投じてしまった」

「失敗だった。そう言わせたいのか？」

レイは一度アスランを見て、すぐに目を伏せる。

「追つている者は逃げている者の奴隸だということだ。逃げている者が行くと決めた通りについていくことしかできない。エインセルは何故ボーパールに逃げ込んだ？ 単にフォイエリヒの修復のためだつたのか？」

「待ち伏せされていたと？」

ボーパールでは片角の魔女にしてやられたことは、確かに大きな損害だった。そして、魔女の噂こそ伝え聞いておきながら、それで

もボーパール侵攻を決断せざるを得なかつたことは事実だ。

レイは答えない。代わりに壁を離れ、テープルの側へと歩み出る。

「わかつてゐるとは思うが、今の地球軍はフィンブル落着からまだ立ち直り切れていない。例を挙げよう。まず、赤道同盟は太平洋岸の施設、都市は被害を受け、復興は完全ではない」

まず、レイはテーブルを撫でることで地図の縮尺を世界中を見渡せるほどにまで引き延ばす。その指が太平洋西岸、東アジア地区に触ると色が赤く変わり、それは広く北はユーラシア連邦から南は東アジア共和国の一帯まで赤く染まる。

「ユーラシア連邦も政治的には安定せず、オープは世界安全保証機構に参加を決定したとは言え、その影響が出始めるまでには今しばらく時間を必要とする。東アジア共和国については言及す必要はもはやないだろう。東アジアの一帯は混乱し、まとまりを欠いている」
ユーラシア連邦とオープどちらも赤く染められると、東アジアの一帯はほとんどが赤く染まってしまった。何らかの理由でザフトに対する積極的な軍事行動ができない国々だ。

東アジアでは、ザフトは比較的自由に動ける。

「そうだな。そのおかげでカーペンタリアからハワイ基地を狙うことができている」

オーストラリア大陸の北側に開けた湾から、指で太平洋の真ん中へと線を引く。この常夏の楽園は、200年以前の世界大戦当時から大西洋連邦の基地が置かれている。現在攻略中だが、ここを陥

落できれば、パナマ基地への橋頭堡になつてくれることだろつ。

何より、休暇の際にはバカンスを楽しめそうだ。

そんな馬鹿げたことを考へてゐる内に、レイは新たに朱を落とした。

「汎ムスリム同盟は比較的親プラント派だ。この国とアフリカ共同体はフィンブル落着の影響をほとんど受けなかつたからな」

地中海の東側が赤く塗られ、ついでアフリカ大陸の北側が赤く染まる。地中海を南側から囲い込むように赤が弧を描く。

「スカンジナビア王国は軍事的には協力していない。汎ムスリム同盟とヨーラシア大陸を縦断する形で分断している。アフリカ共同体のおかげで大洋州連合と南アフリカ統一機構は協力体制を構築できないでいる。そうだろ」

ヨーロッパ地区の北側が赤く塗られると、それは東側のヨーラシア連邦、南側の汎ムスリム同盟とともに赤い壁を作り、ヨーラシア大陸を東西に分断する。さらに西ヨーラシア大陸の大洋州連合と南アフリカ統一機構とが地中海を挟んで分け隔てられている。

ヨーラシア大陸は西から東まで見事に赤くなつたものだ。ローマに発し、日本どちらの国も現在は存在していないで終わつたシルク・ロードも蒼白の規模である。

すでに8年の戦争を経て、エイプリルフル・クライシスから数えて11年にも及ぶ地球圏の混乱は決して小さなものではないのだ。

「ど」でもうまくやつているつもりのようだが、プラントは所詮小国だ。いつまでも火事場泥棒の真似事は許されない。そして、俺たちは西へ向かおうとしている

地中海から西へ。そこに待ちかまえるアメリカ大陸は、文字通り白地図のままだった。世界最強の大西洋連邦。そして、軍事的には底力を持つとされる南アメリカ合衆国。

レイの予想した待ち伏せという言葉が、俄然真実味を増す。

「エインセル・ハンターは何としても抹殺しなければならない」

「エインセル・ハンターを殺して本当に戦争が終わると考えているのか？」

ようやく勢力図を完成させたレイは田だけを動かしてアスランを見ようとする。まるで睨まれているようだが、普段からレイは笑うことが多い。大した問題ではないと、アスランは片づけることにした。

「レイ、君が懐疑的であることは理解しているつもりだ。だが、俺は考えを改めるつもりはない。プラントはエインセル・ハンターの死を希求している。そして、プラントはまだ戦える力を残している。5つの資源衛星の軍事拠点化に成功したし、何よりも、プラントの背後には文字通りの強力な後ろ盾があるからな。プラントはまだ10年は戦える」

レイに何を言つても仕方がないかもしない。ちょっとやそつとで考え方を変える男ではないし、少々意固地になつていてるところがあるからだ。それに、ザフト軍の作戦行動を決定しているのはアスラ

ンではなく、軍の上層部だ。ここで押し問答していくも仕方がない。

「そんなことよりも、エインセル・ハンターの行き先だが……」

まるでタイミングを見計らつたように扉が開いた。外から差し込む光の眩しさの中から、青い髪が顔を出す。第6研のヴァーリの中で唯一残ったのはこのサイサリス・パパだけになってしまった。最も、全滅してしまったところだつてある。ユニウス・セブンの悲劇から約15年。あまりに多くの命が失われてしまった。

白衣を揺らしながらテーブルに歩いてくるサイサリスは手にした資料を頭の横にかざしている。

「エインセル・ハンターの居場所がわかつたよ。南米ジャブローだつてさ」

テーブルに投げ落とされる資料は、ちょうど大西洋連邦のあたりを覆い隠す。これでアメリカ大陸は南アメリカ合衆国が見えるだけだ。そして、見なくてはならない国も、この合衆国だけだ。

「ジャブローは、このあたりにあるとされている」

レイが指を伸ばし、かるくブラジル地区を叩く。すると、ポイントが表示された。ジャングルの中の基地。それがジャブロー基地である。深い森の中、おまけに基地の大部分は地下に置かれている。そのため正確な位置は特定されていない。

「厄介な場所に逃げ込まれたものだな。ところでレイ、ボーパールには魔女がいた。今度は狼男でもいるのか?」

「ヨリはジョンネラルの城だ。エドモンド・デュクロ将軍。南アメリカ合衆国准將でありながら自らモビル・スーシで戦場に出ることを好み、何より、エインセル・ハンターのファンであるらしい」

「……それって、本当に将軍なの？」

サイサリスが呆れたような顔で呆れたような声を出す。レイが珍しく笑つたように目を細めた。

「エインセル・ハンターのファンか。気は合ひそうにないな」

エドモンド・デュクロの名前はアスランとて聞いたことがある。世界安全保障機構に代表として出席している。ブルー・コスモス代表であるロード・ジブリーとは不仲が囁かれているそ�だが、この情報は戦闘に役立ちそうにない。

「それと、ヤーデシユテルンとローゼンクリスタルの修理も終わつたよ。今、翠星石と薔薇水晶にチェックさせてる」

「そうか。後は、作戦に必要な戦力の確保だな」

「当ではあるのか？」

「今回は宇宙軍との連携も視野に入れている。それに、アフリカ方面軍の指揮官とは面識がある。甘い考えとは思つが、いくらか戦力を出してもらえないか打診してみよ」

元々エル・アラメインから直接大西洋に出ることはできない。地中海の玄関口にはジブラルタル基地があり、そこは地球軍の最重要拠点の一つだ。ゲルテンリッターが2機あるとは言え、突破などで

きない。経路は、自然とアフリカ大陸を南下しての迂回路を採用せざるを得ない。

アフリカ。この地は、アスランにとって、仲間にしろ敵にしろ、掛け替えのない人々を失った場所だった。

いつものように部屋の中、いつものように小鳥のさえずる声を聞いている。ラクス・クラインは吊された鳥かごに手をかけて、少し揺さぶっては鳥の鳴く声に微笑みをこぼす。

そしていつものようにマティス・クラインの報告に耳を傾けている。

マティスはようやく通りに凝った意匠のスーツを着て、資料を読み上げる声は淀みない。

「シン・アスカ。精子バンクによる体外受精。地球にしては珍しい出生ですが、それくらいなものです。特にラクス様が気にかけるほど存在ではないでしょう」

資料から上げられた顔は、嘘偽りなく興味ない、そんな今にもため息をつきそうな表情をしている。すでに数を減らしたカード、それに対応する人物以外のことに関して、マティスは関心を支払うことない。

「ギルバート様はどう考えておられるのでしょうか？」

「単なる密寄せの猿でしょう。デュランダル議長支持派は軍部に多

く、そして軍内でアブディエルやオナラブル・コーディネーターの不満は高まっています。せいぜい、そのガス抜きに利用している程度かと」「

アブディエルでも成果さえ挙げられたならば認められる。シン・アスカはすべての外人部隊の目標であるとともに、田の前に吊された餌なのだろう。

(それでは駄目なのです、ギルバート様)

王が王ではなくなった時、従者が従者ではなくなってしまった時、プラントはプラントではなくなってしまう。コーディネーターの楽園ではなくなってしまうのだから。

「シン・アスカはカードの1枚にさえなり得ません」

ラクスはつい笑う。ドミナント。ヴァーリ。現在最高の技術で作られた、最高のコーディネーターたちの中でただのコーディネーターにすぎないシン・アスカを比べること自体おかしいこと。

つい鳥かごを揺らしてしまい、鳥が慌てたような声で鳴く。この声も耳によい。脅かせば慌てる。それは当たり前のことで、ラクスの予想している通りに動く内は、何にせよ可憐らしい。

「アスランからの報告でも、同様のことが聞かれています。それにしても、ギルバート様はどうすればわかつていただけるのでしょうか？」

「あの男もまた、カードの一枚にすぎません。ご命令とあればいつも。クライン家は1000年の夢を見続けてきました。誰もがそ

の使命と役割に気づき、その力を遺憾なく発揮できる世界のために、私は手を汚すこと厭いません」

うやうやしくひれ伏すマティス。鳥は思いのままに鳴き続ける。

「それがお父様の、シーゲル・クラインの夢。クライン家1000年の夢」

大西洋を一路西へと向かうスペングラー級MS搭載強襲揚陸艦と護送船団の群れ。多数の戦艦、巡洋艦に守られた航空母艦は、王のために海原を裂く。

王はエインセル・ハンター。露天甲板に持ち込んだ椅子に腰掛け、オーデストラに破裂く音を弾かせ、照明には傾き始めた太陽を当てる。手にした本はすでに朽ちた装丁には古の言葉が刻まれる。アラブの狂える詩人アブドゥル・アルハザードがその命と引き替えに遺した偉大な書を、王の指は1枚、また1枚と解き明かす。

禍々しく、語句の一語一句に至るまで呪詛が書き連ねられ、忌み言葉が人を脅かす存在への憎悪を謳つてゐる。

人の誕生は、決して人の望むものではなかつた。人が考えるよりも遙かな以前から存在する惡意。そして、世界は今なお惡意に脅かされている。

1人の狂気に纏られた妄想だと多くの人は片付ける。そんな絵空事を、エインセル・ハンターもこの書のお伽話を信じる訳ではない。

だが、無視できない。田をそらすことができない。

この書には描かれるのは膨大な敵視と悪意。裏側から世界を脅かす存在に対する強烈なまでの厭惡と憎悪。狂おしいほどの中しみが綴られている。同時に、その存在に関する詳細にして膨大な知識。

何とも矛盾ではないだろうか。憎いなら避けるのではないか。嫌うのであれば田を背けるのではないか。

存在の証明と否定とが並び立ち、憎悪故の詳述。詳細故かきたたられる怨嗟。

汚物の川を泳いで渡る。針の山を素足で渡る。腐肉を食り食いつても似ている。

狂うはずだ。狂わぬ故を持たない。おびただしい憎しみに魂が上げる悲鳴と慟哭に苛まれながらなお書き綴られていく文字の羅列。それは緩慢たる精神の死。流れ出た腐汁をインクに並べられ、絶叫のようにつ確かに、蝕むように読む者の精神の内側へと入り込んでくる。

何故ここまで憎むことができる。何故憎い相手のことをここまで知ることができた。何故書き並べることができたのだ。

幾多の何故が理解の範疇を超え、狂氣という逃げ道が優しく囁きかけてくる。そう、詩人の狂氣を断することなしに、この書を理解することはできない。いや、理解したと嘯いて自らの安寧を誤魔化すことができないのだ。

この本は何から今まで狂っている。荒唐無稽な悪意を、常軌を逸

した狂氣が暴露し、理性そのものが精神を齎かす。

人の始まりは呪われ、有史以前のおぞましい歴史とその住民の姿が語られている。人の始まりは人が望むようなものではなく、悪意は人が考える遙か以前から存在していた。この宇宙の片隅、人の歴史を覗きみるようにな。

音が消え、光が失われ、ただ自分とその書だけが消滅に取り残されてしまつたような空虚と虚空の狭間で、しかし見下ろしてくる何かの気配は消えることがない。

指がページをめくつていいのか、ページが指にめくらせていいのか曖昧な感覚は、突如として消え失せる。

「お父様」

波の音が戻る。太陽は沈みかけ、すでに夕刻と呼ぶには遅い時間にさしかかっているらしい。首を持ち上げるように回すと、純白のドレス姿のヒメノカリス・ホテルの姿を確認する。

「ヒメノカリス……」

その顔は、開ききらない瞳が、訝しそうにも不安げなもののように思われた。

「お顔色が優れません。それに、汗が……」

エインセルの前髪をかき分けるように額に触れるヒメノカリスの指には、確かに濡れた跡が見られた。赤道の光にあてられたのだろうか。それとも、手にした本に原因を求めるべきか。開かれたまま

の本を、ゆっくりと閉じる。ヒメノカリスの前で開けておくものではない。勢いよく閉じたとしたら、何が溢れだしてしまつかわらない。

「何でもありません。少々読書に集中しそぎたようです」

表紙はボロボロに擦り切れ、年代ものを思わせる書物は、それだけヒメノカリスの興味を引くには十分なものであったようだ。しかし、時に猫のような興味を示すヒメノカリスが、それでも本に手を触れようとはしない。

「この本は私が以前好事家の遺品に含まれていたものを譲つてもらったものです。世界に潜む悪意とその邪な望みについて語られています」

残念ながら原著ではなく、数世紀後に作成されたラテン語版の写本にすぎない。それに加え、内容は完全には揃つてはおらず、詩人の狂氣のすべてを伝えるには不完全なものとなつていて。このような不完全なものでさえ、本来ならば大学図書館に寄贈すべきものである。

今エインセルの手の中にあるのは、ひどく偶然の産物であると言えた。

「そんなもの、お父様がご興味もたれるものとは思えません」

「確かに、すべてが突拍子なく、狂つてているとしか思えない記述の連続です。しかし、私はこの書読むに既視感さえ覚えました。我々もまた、おぞましい誕生と、歴史の奥に潜んでいた悪意と戦つてゐるのではないか?」

娘の反応は芳しくはない。残念ながら机までは用意していなかつたため、本の置き場所というものはない。ただ、いつまでもこの本を手にしていてはならないという妙な強迫観念が、エインセルに本を肘掛けの狭いスペースに置くという妥協を促す。

汗は引き始めていた。

「つまらない話をしました」

立つたまま、父であるエインセルだけが座っている状況でも文句の一つもないヒメノカリスは本を一瞥しただけですぐに目をそらす。

「お父様、ボーパールでシン・アスカに会いました。お父様のお命を狙っています」

かつて耳にした名前を胸中で反芻しながら、エインセルは椅子に座り直す。パイプ椅子同然の座席は座り心地を保証してくれるものではないが、何にせよ、気持ちの切り替えにはなるというものだ。

「シン・アスカ。彼が戦うのは何故でしょう？ 母の仇を討つために。では、それは何故でしょう？」

4年前、誰がシン・アスカの母親、マユ・アスカを殺害したのか、正確な答えがわかることは終生ないのだろうが、それを問題とする者はいない。犯罪に使われた刃物を特定することに注力する者はいても、それがどこで作られたものか調べる者はいない。

誰の意思によって殺害が行われたのか、それさえわかれれば十分なのである。エインセル・ハンターがオープ侵攻を決め、その結果、

シン・アスカの母が命を落とした。それでいい。

「私なら、仮にお父様を奪われたとしたら、相手を絶対に許しません。私の大切な人を奪つた報いを受けさせます」

風が次第に夜を含み、肌寒さを増している。

「ヒメノカリス。^{復讐}とは何か、考えたことはありますか？」

「大切な人を奪つた相手への報復です」

躊躇なく断言するヒメノカリス、愛娘をどこかたしなめるようにエインセルは笑う。

「そうではありません。本能です。仇とは大切な人を奪つた存在ではなく、大切な人を奪つたことがある実績を持つ人物なのです。人は群れる生き物です。仲間を慈しみ、守り、栄えなければなりません。そんな折り、仲間を奪うことを実績として示す何かがあればどうなると思いますか？」

「わかりません」

「それは、他の何よりも仲間に危害を加える可能性が高いということが証明されたと同義です。だから本能は命じるのです。保存本能のまま、あれはかつて仲間を奪つた。今後も奪う可能性が高い。排除せよ。それが、種を守ることに繋がるのだから。復讐は死者のために行うのではなく、種の保存のために行われる本能の一環にすぎません」

死者のために行われた復讐など存在したためではない。

すべて死者に名を借りた脅威の排除と専断的な攻撃に他ならない。

殺さなければまた相手は自分の大切な誰かを奪うかもしれない。だからこそ排除せよと本能が命じる。それを人は大切な人のためと嘘つき、自分を思いこませることで復讐を美しく仕立て上げ、美化してしまう。

所詮、本能に流されているにすぎないにも関わらず。

復讐を賞賛せよ。それは暴飲暴食を繰り返し、醜く肥え太った姿ほども美しいのだから。それは自慰に明け暮れる浅ましさほども美麗である。

「シン・アスカにとつて私は、母を奪つた人物なのではなく、母を奪つたが故に今後も彼の大切な誰かを奪う可能性が極めて高い危険人物にすぎません」

果たしてシン・アスカはどのような人物としてエインセルの前に立つのだろうか。

「仮に彼が単なる復讐者であり、ザフトという単なる敵であるとすれば、私を倒すことはできません。魔王を倒すのは勇者でなければならぬのです」

魔王を倒すのは勇者でなければならず、勇者はいつも人間である。人間だけが魔王を打ち倒すことができるのだ。

それは、人間だけが意志を持ち、思想を持つからである。魔王を倒したとしても、それは単なる殺害にすぎず、魔王の遺志は搖

るがない。魔王のイデオロギーを否定することじでこそ、魔王はその存在を初めて否定される。

そして、その否定を行い得るのは人間だけなのである。

本能に憑かれた人は、獸と相違ない。

復讐者に、魔王を倒すことはできない。

「シン・アスカ。彼という存在は大変心惹かれます」

のんびりとした太陽は、ようやく水平線にその姿を隠した。まだ残された光の残り香に娘の顔は照らされている。夕日の中で、ヒメノカリスはそつとエインセルに触れるため手を伸ばしてくる。

娘が不安である時、まるでエインセルの存在を求めるように行づ癖である。シン・アスカという復讐者の脅威にさらされている父のことを案じているのだ。

沈みゆく太陽を見るためと言い訳し、エインセルは娘から首をそらす。

「ヒメノカリス、私はあなたの父であり、あなたは私の娘です。そのことだけは、何があつても忘れてはいけません。わかりますね」

「はい、お父様」

しかしその手はエインセルから離れることがなく、ただ父の存在を求め続けていた。

その手を振り払うことはなくとも、しかしつまでもこの温もりを与えて上げることはできない。ヒメノカリスにも、そして世界にも。

太陽が沈みかけた『デッキの上で、何より目立つのは椅子に腰掛け エインセル・ハンターと、すぐそばに立つドレス姿のヒメノカリス・ホテル。何にもない甲板の上をたつた2人が独占している。

そんな馬鹿みたいな光景をミリアリア・ハウが目にしたのは、ほんの少しの気まぐれと、ちょっとした偶然のため。少し風に当たりたい。そんな気分で甲板に上がったところ、たまたま2人の姿が見えた。

海には他にも何隻も船が進んでいて、そのすべてがエインセル・ハンターを守っているという。魔王なんて呼ばれていることが、この光景だけでもわかつたような気がする。

もしかすると、この人も、そんな護衛の1人なのかもしれない。

エインセル・ハンターとは離れた場所、話を聞くには遠すぎて、その分、会話の邪魔をしたり、変に意識させたりしないくらいの場所に黒い軍服を着たスウェン・カル・バヤン大尉が直立不動の姿勢を崩さないで立っていた。

「スウェンさん」

話しかけると、表情に乏しい顔のまま、スウェンは振り返った。二ンジンが食べられないくせに、こうして見ると凜々しい軍人さん

のように思えるから不思議だ。

「ミコアリア・ハウ」

「フルネームじゃなくて、ミコアリアで結構です。それより、どうしてこんな場所に？」

「護衛の真似事のようなものだ」

そう言うと、スウェンは顔を正面に戻す。またエインセル・ハンターとその娘さんを見守っている。ミリアリアは危険人物ではないと思つてもらえたのだろうか。あまり興味や関心があるようには思えない。

声をかけようか、どうしようかと迷つて、他に何かすることもないと思つて結局声をかけることにした。

「エインセルさんで、やっぱり要人とか、そんな人なの？」

すぐ横に立つたのに、スウェンはエインセル・ハンターのことしか見ていない。

（これがファントム・ペインってことなのかな？）

無口な軍人はそれでもまつたくの無愛想といふことでもない。視線こそ前を向いたままでも、応えてはくれる。

「無論だ。この世界において最も影響力を持つ者を挙げてみせると問われば、半数を超える人物がエインセル・ハンターの名を挙げる。政財界問わず、今日において彼の意向を無視できる者はいない」

「スウェンさんが守るのも、そんな人だから?」

「この話題はちょっと踏み込んだ内容だったのだろうか。スウェンは横目でニアリアのことを見て、心なし目つきが鋭いような気がする。」

「私は両親を失った。そんな私を支援してくれたのがエインセル・ハンターだった。……まず、これが理由の一つにあたる」

「また目が前に戻つて、今度は少し、ほんの少しだけ視線が柔らかくなつたような気がする。」

「スウェンが子どもの頃となるとまだエインセルも20歳前後だったと思う。そんな頃からエインセルは戦災孤児の支援活動をしていましたということだろうか。」

「エインセル・ハンターという人のことは本当にわからない。」

「プラントは危険だ。自分たちを優れた存在であると盲信するあまり、自身の存在を外から見ることができないでいる。そのため、行動に躊躇が伴わず、苛烈に走る傾向にある。エインセル・ハンターはその危険性にいち早く気づき、そして止めようとした」

「淡々としているようで、それでも少し、スウェンは興奮気味に話しているみたいに思えた。ニンジンのこと以外だととても静かなスウェンが浮かれたみたいに話す様子は、でも同時に危ういよつとも思えて仕方がなかつた。」

「でも、戦争なんてしなくても……」

「戦争を始めたのはエインセル・ハンターではない。血のバレンタイン事件はプラントの自作自演だ。地球のコーディネーター排斥主義者が行動を起こした。凶暴としてはわかりやすいが、それならば10億の人間を殺し、世界を焼き払おうとしたことが許されるのか？」

どうしてこんなにまくし立てようとするのだらう。普段自分からは何も言つてこない癖にこんな時だけ一方的になるなんてずるい。

「そんなことわからないけどー！」

距離があるから、エインセル・ハンターたちに気づいた様子はなかつた。

「でも、エインセル・ハンターや！ 戦争してる人たちのしていることが正しいなら……！ トールの死は、仕方がないことだつてこと……？ キラも、そう言いたかつたつてこと？」

そんなことを言つたために、わざわざミリアリアをこんな地球の裏側にまで連れてきたのだとしたら許せない。そんな気持ちが顔をして、どうしても抑えが効かなくなってしまう。こんなこと、この4年の間に何度もあった。発作みたいなもので、今回は小さい方。

騒ぐミリアリアに比べて、スウェンは表情だけはいつもみたいに静かで筋肉を感じさせない。こんなことがはつきりとわかるのは、スウェンが体」と顔をミリアリアに向けてきたから。

ミリアリアだけが騒いで馬鹿みたいに思える。

「私はネオ隊長ではないが、一つ話をする。釈迦の説法に、このようないい話がある」

「釈迦って、仏教の？」

「私の家は大西洋連邦では珍しく仏教系に属していた。特に信心深い訳ではないが、話くらいはわかる」

「でも、頭、禿げ、じゃなくて丸めてないし……」

ミリアリアよりも少し背の高いスウェンの額のあたり、髪の生え際のあたりに手をかざして振つてしまつ。風で前髪がそいで、別にかつらということはないみたいだ。

「キリスト教徒でも神父でもなければ婚姻は認められる」

地毛、といつゝとらし。顔のすぐ前で手を振られたのにスウェンは特に気を悪くした様子はなかつた。ミリアリアが手を下ろしたことで満足したと考えたのだろうか。スウェンは話を始めた。

「いくつかバリエーションがあるようだが、あるところに、子を失い、嘆き悲しむ母親がいた。母親は釈迦にすがり、子を生き返らせて欲しいと懇願した。釈迦はそのためには一度も死者を送り出したことのない家の、諸説分かれることころだが、かまどの灰が必要だと母親に言った」

「そんなもので、生き返らせることなんてできるの？」

「話の腰を折つてしまつ」とにはならないかと、少し体を引いて、上目遣いになりながら話しかける。

「それはわからない」

スウェンは特に気にした様子　いつものことだけ　もない。

生き返らせるために必要なものなのに、それをそろえても生き返らせることができるかわからない。どうしてお釈迦様はそんなものを集めさせようとしたのかわからなくなつた。

「わからないって……」

軽く息を吹くスウェン。もしかすると、スウェンなりのため息なのかもしれない。ミリアリアに呆れるために時間を開けてから、話はまだ続いていく。

「考へてもみるといい。これまでに一度も死者を出したことのない家庭など、存在すると思つか？」

即答はできなかつた。ただ、少し考へてみると、死者を出したことのない家というのはおかしいような気もする。ただ、考へている間にも、スウェンのお話は続いていた。

「母親はあまねく探し歩いた。だが、どの家も必ず誰かを亡くしていた。死者を送り出したことのない家などなく、灰は手に入れる術などそもそもなかつた。その時、母親は悟つたのだそうだ。誰もが誰かを亡くし、その悲しみに耐えて生きているのだと」

それはわかる気がする。人はいつか死ぬ以上、誰も死んだことのない家なんて存在しないに決まつている。ミリアリアがトールを亡くしたみたいに、スウェンたちファンтом・ペインの人たちもエイ

プリルフール・クライシスで誰かを亡くしていた。

お話の中の母親とミリアリアは、よく似ている気がする。

「これはあくまでも私見が入るのだが、この話には2つの解釈ができる。1つは、話にあつたように、誰もが悲しみを抱いて、それでも生きているということ。もう1つは、母親に子どもの死を受けいられるための準備であつていう考え方だ」

「準備？」

「母親は、それこそ必死だつただろう。我が子の為に灰を探し回り、たとえ願いが叶えられなかつたとして、亡き子のために力を尽くすことができた。その体験と実感、そして死を受け入れるための時間的余裕ができたことで、母親はこの死を受け入れ、悲しみに耐えられるようになつた」

さすがにどうしてスウェンがこんな話をしたのかくらいわかる。2つの内、ミリアリアはこの戦争で自分以外にも大切な人を亡くした人がいる、そんな当然のことを知つた。そして、今トールが死ななければならなかつた理由を探そうとあがいている。

まるで、灰を探す母親みたいに。

「キラがあなたちに合わせたり、こうして戦争の手伝いをさせてることが、私にトールの死を受け入れるための準備をさせてるって、ことなの……？」

「わからない。だが、血のバレンタイン事件から15年目にさしかかる現在、世界はあまりに多くの死と悲しみに触れてしまった。加

え、残された人々が悲しみから立ち直ることができないのであれば、それはあまりに悲しい」

ミコアリアの視線をまっすぐに見つめ返したまま、スウェンは微動だにしない。それは別に狂信的にエインセル・ハンターを盲信している人ではなくて、ただ悲しみに耐えるための方法の一つとして戦っているだけ。スウェンもまた自分なりの方法で灰を探しているのかもしれない。

「ミュー・ディーさんのこと、もう一度聞いてもいいですか？」

「優れたパイロットで、優秀な戦友であり、何より、志を共有する仲間だった」

悲しみ方も、その乗り越え方もひとそれぞれだということ。そんな当たり前のことを、ミコアリアは思い出したような気がした。

「イザーク・ジユールには渡しておいたよ。そろそろ、動き出す頃じゃないかな？　ところで、そろそろ、この豪華をもらいたいところなんだけどね」

「駄目です。ケナフさんにはまだまだ働いてもらいます」

ケナフ・ルキー。怪しい風体の男を自認する男は壁に背中をつけたまま、ティー・カップから紅茶をすすっている。ここを訪れた時はいつも紅茶が出される。最も、飲み物は甘ったるいジュースと決めているケナフにとって紅茶のような纖細な香りを楽しむ飲み物は口に合わない。そのためか、ついカップの縁をつかみ、ただの口

ツプかのような持ち方でお茶をのどに流し込む。

眉を潜めたのは、何も紅茶の渋みだけが原因ではない。

ガードの固いミーア・キャンベル嬢は大きな背もたれに体を隠して声しか聞こえてこない。代わりに応対してくれるのはサラ・タイル。どにも風雅というものを好むのか、ケナフの紅茶の嗜み方がお気に召さないらしい。

「今度はこの資料をエルスマン議員宅に届けていただきます」

資料の手渡し方には、どこか棘が含まれている。こちらも独特的の形状をしたサングラスで目を隠し、なかなか素顔を見せてくれない。

「私もこいつ見えて反体制派のジャーナリストとしてプラントにはマーケティングしてね。あまり派手に動きたくないのが本音なんだけどね」

イザーク・ジユールと言う人形を連れた少年に資料を届けた時も、思えば似たようなやり取りが交わされた記憶がある。ミーアはなかなか姿を見せてくれず、サラはあくまでも棘を含ませていた。

（さすがにいきなり写真を撮らせてくれはまずかつたかな）

そのせいでお嬢様思いの女中はすっかりケナフを敵と認識してしまった。お嬢様の方は気分を害した様子こそなかつたが、それでもどこか遊ばれているようだ。

聞こえてくるアズラエル財団の息女の声はどこか楽しそうに聞こえる。

「その代わり、反体制派の記者として有益な情報もあげてるつもりですよ。それに、美少女の生写真撮りたいなんて申し出、条件付きで受けてあげるんですから、それくらい我慢してください」

「たしかに。だが、君、さりげなく自分を美少女と呼びやしなかつたかい？ そろそろ少女なんて歳でもないだろ？」「……」

「せっかくヴァーリの居場所、教えてあげよつと思いましたの」「

茶化す言葉を、これには止めざるを得ない。ミーア嬢の協力なしにはコレクションが完成しない。目的のために、ケナフはあっさりと折れた。右手にティー・カップを、左手にサラから手渡された資料を持つという滑稽な格好のまま、ケナフは深々と頭を下げる。

「すまなかつた。昔から天の邪鬼でね。君ほどの女性を前にするとつい心とは裏腹のことを言つてしまつ。許して欲しい」「

「純粋なほどに不純。ケナフさんのそんなところ、嫌いじゃありませんよ」

元々冗談半分だったのだろう。ミーア嬢は特に気分を害した様子はなく笑い声が聞こえてくる。これでいい。道化を演じよつと、写真さえ撮らせてもらえればそれでいいのだ。できればツー・ショットを希望する。

頭を下げてているというのに、ミーア嬢はすでに別のことに関心が移っているらしい。はじめからこちらを見ていないとは言え、1人で頭を下げてているに等しいこの状況には、少々こめかみに力がこもる。

「シン・アスカって、雰囲気が少しだけ、エインセルお兄さまに似てるよね、サラさん」

新聞をめくるような音が背もたれに向こう側から聞こえている。サラは茶器を仄づける音を響かせている。

「そうでしょうか？ メリオル様やヒメノカリスお嬢様の前では言えませんが、エインセル様の方が男前です」

さて、そろそろ頭を上げてもいいだろか。特に気にされている様子もないが、そのタイミングを失してしまった感が否めない。

迷宮に迷わない秘策を教えて上げます。迷宮に入らないことです。入らなければ、迷うことなんてあり得ません。でも、人はどうしてか迷宮に囚われてしまいます。どうしようもない袋小路に自らを追い込んでしまいがちです。

甘い見通しや、責務に追い込まれて迷宮に足を踏み入れがちです。

戦争なんて始めなければ、終わらせる苦労を味わう必要なんてありません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
Einbrecher~

「LABYRINTH」

ザフト。自ら進んで迷宮に入ることを決めた人たちの、一つの呼び方です。

第25話「LABYRINTH」

南アメリカ共和国。西暦2094年に成立したこの国家は立地的政治的に大西洋連邦に近く、世界安全保障機構においても大西洋連邦寄りの発言が目立つ。コーラシア連邦が政治的混乱に見舞われている現在、大西洋連邦にとって南アメリカ合衆国の重要性は増しており、徐々にパートナーとしての地位を築きつつある。

「Jはそんな国の要塞の一つ。ジャブロードである。

アマゾンの熱帯雨林が大地一面に敷き詰められ、その間を泥の混ざった川が蛇行して流れる。人工物の臭いを一切感じさせないこの森は、しかしその地下に世界最大規模の要塞を構えている。

正確な位置は知れない。絶えず深い森の中に身を隠し、太陽にさえその姿をさらしたことはない。

南アメリカ合衆国最大の要塞である。だからこそ、魔王を、エンセル・ハンターを受け入れた。

森のただ中に、魔王の城は静かに世界を恫喝する。

「Jの酒はあんたと飲みたいと思つてね」

野太い男の声とともに、戸棚から酒の瓶が取り出される。細長い円筒形のボトルを掴む指は太く、男の無骨な顔つきが中の酒に映し出された。しかしその顔はどこなく喜ぶ子どものような無邪気さ

があり、男の、エドモンド・デュクロ将軍の喜びのほどが伺い知れる。

来客が手伝いのために立ち上がりしたのを手で軽く制し、エドモンドは器用な手つきで開けたボトルからワインをグラスに注いでいく。2つのグラスに注ぎ終えたところで、そのグラスを両手に持つて客の元へと歩き出す。右手は相手の、左手は自分のためのものである。

棚からやや離れた位置にある対面に置かれた椅子の片方に腰掛けた男にグラスを手渡すと、エドモンドは改めて反対側の椅子に腰掛けた。

男は、何ともワイン・グラスを持つ様子が絵になる。まさに絵画の中から現れたような男なのだから。その手つきの一ひとつに優雅さを含ませながら、男はワイン・グラスを軽くかざす。

「光栄です、デュクロ将軍」

「う言えば誤解を招くかもしれないが、まるで初めて恋を知った子どものような心地で、エドモンドはこの男と会う日を一日千秋の思いで待ちこがれていた。

魔王と呼ばれ、実力者として知られ、この世界の誰もがこの名前を耳にしたことがあることだろう。

エインセル・ハンター。

この男はエドモンドが想像した通り、風雅で、だが、魔王という言葉が示すとおり見てくれだけの男ではない。そんな男が目の前に

こゝとこゝの事実は、エドモンドを年甲斐もなく奮ふらせた。

「堅苦しいな。エドモンドと呼んでくれ。代わりに、エインセルと呼ばせてもらつてもいいかな、閣下？」

「ええ。ではエドモンド将軍、お相伴にあずかります」

エドモンドとエインセル。将軍と魔王と呼ばれる二人がともに杯を傾け、優雅な手つきでエインセルがワイン・グラスを回す。

「気に入つてもらえたようだな。この酒はラサの酒でな。まだ知名度こそ高くはないが、質は良好だ」

「私は酒類は嗜みますが、友からはよく選択が悪いと勧められる。代わりに、ロードは面白い酒を知つています」

ロード・ジブリー。この名前を聞かされた時、エドモンドはついついしかめつ面を作つてしまつた。エインセルはそんなことまで予期していたとでも言つようじにどこかいたずらっぽく笑つている。

色々とお見通しあるらしい。これには笑うほかない。

「エインセル閣下の耳に入つていいようだな。だが、俺は別にロード・ジブリー新代表を嫌つていいわけじゃない。ただ、閣下と比べたなら、すべてが小粒に見える。全員が全員だ。ジブリー代表が悪い訳じやない。ただ、あの男がたまたまエインセル閣下の後継者だというだけだ」

思ひ出るのは世界安全保障機構でのロード代表とのやりとりだ。エドモンドは代表のやり口を手ぬること睡棄したが、代表はブルー・

「コスモスの新しい立場を主張して譲らなかつた。そう、ロード・ジブリールが悪いのではない。ただエインセル・ハンターと比べられてしまふ不幸があるだけだ。

エインセルはワインで口を濡らせて、それこそ酒のよう人に酔わせる声音で語る。

「私も常々懸念しています。私に与えられた才覚、才知、才能は素晴らしい。それは私に謙遜を許さぬほどです」

これほどの言葉が、まるで傲慢とは感じられない。事實をそのまま語つているが故に、その声に驕りなど入り込む余地などないのだ。

まつたくもつてこの男はすばらしい。

「事実だな。今の地球はあんたなしでは動かない。ブルー・コスマスの代表を退いたところで、ファントム・ペインの面々ではブルー・コスマスではなくエインセル・ハンターに忠誠を誓つてゐる。そしてザフト共はやれエインセル・ハンターを殺せの大合唱だ」

「私は魔王と呼ばれ、慕われ、恐れられる。しかし、それでは駄目なのです。私が築いたものは意味がない。何故なら、誰も私の跡を継ぐことができず、それは持続されるものでは決してないからです」

偉大な王の帝国が、それでもいくつ滅亡したことか数えることはできないように。

「Jの男との会話は、ひどく愉快で、さらに不可思議でもある。どこか人と会話しているように感じさせないのだ。自身を偉大と語りながら、それが事実以外の何者でもない。不安を口にしながら、し

かしそこには弱気が微塵も含まれてはいない。世界は本当につまりない。そつとでも言いたげに、すべてを理解しつくしているかのようだ。

「この男からは、後顧の憂いなど感じようがない。

「魔王に率いられた軍団では駄目なのです。魔王に創られた世界では駄目なのです」

「だが、誰もが魔王の存在を必要としている。ユーニウス・セブン以後、何人の人が死んだことか。2、30億か。そして、まだ戦争は終わる兆しを見せない」

『気づけば、エドモンドのグラスの中のワインはほとんび減つてしまなかつた。それほど、この男の話に集中していらっしゃい。いつもなら4、5杯は飲み尽くしている頃だ。

それほど楽しみで仕方がない。この男がどのような世界を見せてくれるのかが。この戦争という戯曲にどのよつた指揮をしてみせるのかが。

戦争は終わらない。

「今この瞬間にも世界中で剣戟は鳴りやむことがない。是非見せてもらいたいものだ。エインセル・ハンターなら、この世界をじつするのか」

敵と味方。そんな2色に分けられた世界の中で、エインセル・ハンターは魔王と呼ばれ、慕われ恐れられる。

世界では、戦いが続けられていた。

大西洋連邦領、ハワイ基地。第2次世界大戦においてアメリカ参戦のきっかけを作り出すこととなつたこの基地は200年を超えた現在においても大西洋連邦西側の防波堤として機能している。

大西洋連邦軍にとつて、ここはカーペンタリア基地を発したボズゴロフ級を水際で食い止める拠点であり、ザフト軍にとつてはパナマ基地を中心として大西洋連邦、南アメリカ合衆国を眺望するにうつてつけの場所である。

東アジア地区はフインブルの落着によつて混乱している。オープ首長国は世界安全保障機構への参加こそしたが、まだ軍事的な動きを活発化させてはいない。

同盟の粗い網の目を潜り抜けるようにボズゴロフ級潜水艦がハイを目指す。

その元凶であるカーペンタリアでは、東アジア共和国の奪還への動きは芳しくない。

東アジア共和国は怖いのだ。単独でザフトに対抗できる力はなく、また、カーペンタリア基地から西周りでアフリカ大陸を目指す航路は狭い水路が多く、ザフトの艦船を閉じこめやすい反面、ザフトをそれだけ本気にさせてしまう。水路を絶たれたザフトは全力で東アジア共和国の排除に動くことが想像に難くない。

東アジア共和国の政策は、一定のザフトを野放しにすることで軍

事の矛先が自分に向かうことを避けている。

だが、この政策はそのザフトが向かう先、ハワイ基地を抱える大西洋連邦、ジブラルタル基地の大洋州連合、ビクトリア基地を持つ南アフリカ統一機構から不満を買っている。これらの不満が限界を迎えた際に、単発的な軍事行動を起こす。この程度の戦闘に東アジア共和国は終始していた。

地中海は主戦場である。東側の汎ムスリム同盟はスエズ運河をザフトに押さえられているという事実に加え、歴史のいたずらからくる大洋州連合との不仲は親プラントとも言える政策に偏らせている。ザフトにスエズ運河の使用を事実上黙認し、カーペンタリア基地から出発したボズゴロフ級がスエズ運河を経由しジブラルタル基地攻撃のための手駒を運ぶのである。

大洋州連合の再三の使用許可取り下げの要求を、汎ムスリム同盟ははねのけ続いている。その結果、両国の関係は急速に悪化しつつある。

地中海南側のアフリカ共同体もまた親プラントに近い政策で知られている。アフリカ大陸を一分する南アフリカ統一機構とはかつてアフリカ大陸の霸権を争った間柄であり、ザフトのゲリラを黙認する形で南アフリカ統一機構に損害を与えていた。

赤道をまたぎ、戦場が横に横に広がっているこの戦争の性質に着目し、ザフトの正式名称である黄道同盟という名前への皮肉として、この戦争を黄道戦争と呼ぶべきという考え方も存在している。

重力偏差の影響が比較的小さな赤道周辺にマスドライバーをはじ

めとする宇宙への玄関口が置かれるることは当然であり、マスドライバー確保を至上命題に掲げるザフトにとって戦場が赤道周りに限定されるのは必然であった。

戦いは、各地で続けられている。

かつて、中華民国と呼ばれる大国が太平洋西岸の霸権を狙い、周辺各国との間に強い反発を招いたことがあった。今より100年以上前のことである。

当時の中華民国は世界最大の経済大国であり、周辺国はどれ一つとして対抗できるだけの国力を有していなかった。この中華民国といつ国はかねてより隣接する多くの国と地域で領土上の問題を引き起こしていた。軍事力による統合さえ行い、各国のどこも平和的な解決を期待しはしなかった。

東南アジア各国は同盟を締結。勢力図は中華民国、及びそれに対抗する2大同盟の3色に塗り変えられることとなつた。この同盟が、後のオーブ首長国、東アジア共和国の前身である。

この3代勢力の3すくみの睨み合いは20年にわたつて続けられたが、思いも寄らないところからバランスが崩れることとなる。

すでに30年も前に朝鮮民主主義人民共和国が崩壊したことによつて発生した大量の難民が周辺国、中華民国、日本、ロシア、大韓民国に流入し、大きな混乱を引き起こしていた。この難民の流入により最も大きな混乱に巻き込まれたのが中華民国であった。

中華民国では、世界最大の経済大国へと躍り出るために様々な歪みを生み出していた。急拡大する貧富の差。加熱しそぎた投資は、実態経済との落差を30倍にまで高めてしまった。

投資とは衆愚の思いこみである。100の価値の物を投資家が110で買い取り、120で売り扱う。別の投資家が120のコストで買い取り、130のコストで転売する。この転売が繰り返され度、投資家の懐には10ずつ資金が流れ込んでいく。そうして、100のコストのものがいつの間にか180で取引され、消費者は80もの余計な負担を支払ってまで、投資家を肥え太らせるしかない。消費者の消費はやせ衰え、投資家が集めた金をさらに投資していく。

100のものが200になり、300になり、最終的には300で取引される。ただ、忘れてはならない。どれほど投資家たちが値をつり上げ取引しようと、その価値はあくまでも100でしかないということを。2900は、単なる幻想でしかない。

その幻想は必ず覚める。日本では金利の急速な引き締めにより金が急速に市場に回らず、1000のものを誰も1000で買う者はいなくなった。900は不良債権として、かつて世界第2位にまで上り詰めた東方の経済大国を永遠に沈めてしまった。アメリカ合衆国ではサブプライム・ローンという幻想から覚めた時、リーマン・ブラザーズの破綻に始まった世界恐慌は世界を急速に不安定にし、それが世界各地に再編を促すほどの不安定の種を根付かせた。

中華民国でも同じだったのである。誰も住むことのない高級住宅地が転売を繰り返される。本来の価値をは外れ、誰もが幻想に狂い、踊る。そして、その狂乱する経済の恩恵は一部の富裕層に集められ、貧困層との格差の拡大は、国内の急速な不安定化を招いた。

そこに追い打ちをかけることとなつたのが朝鮮民主主義人民共和国から流入した難民問題である。爆発的、そう表現されるほど人民の不満が高まり、それは政府への反発へと深化していく。内戦。そう各國がかき立てるほどこの時期の中華民国国内の争乱は激化。次第に分裂の様相を呈する。

世界最大の経済大国の崩壊は、世界を震撼させることとなる。

本来は中華民国の増長に対抗するために設立された2大同盟はそのまま中華民国崩壊の処理に奔走。2大同盟、ロシア連邦を中心として政治的な再編成を余儀なくされる。

ロシア連邦を中心としてユーラシア連邦の枠組みが作り上げられ、分裂した中華民国の残された勢力は赤道同盟へと後に発展していく。2大同盟がそれぞれ、オープ首長国、東アジア共和国へと形を変えていくことは先述の通りである。

対立と政治的不安から導き出された混乱。それが東アジアの歴史を語る上で欠かすことはできない。

C・E・フ5年を数えた現在、赤道同盟と東アジア共和国が協力し、カーペンタリア湾奪還に乗り出している。赤道同盟は中華民国の流れをくむ国家であり、東アジア共和国は中華民国への対抗処置として設立された同盟を起源にする。

両国の対立の歴史が、カーペンタリア奪還の足かせになつていないと誰が言えよう。

歴史が戦争を生み、戦争は歴史を語る。

太陽が空にある時。浅く傾く空母の軀の上。赤い巨人と青い巨人が睨み合う。

赤い巨人は左腕にシールドを構え、その背には1対の大型ライフルとウイングがミノフスキー・クラフトの光を放つ。右手には握られたビーム・サーベルの輝き。

青い巨人は甲殻の兜を仰々しく被り、その手には鋭い槍を持つ。

ZGMF-233Sセイバー・ガンダムとGAT-252インテンセティ・ガンダム。火煙を上げながら沈みゆくスペングラ一級MS搭載強襲揚陸艦の上でガンダムが睨み合う。

そのまま直上ではZGMF-953ゼーゴックが飛び回り、ジェット・ストライカーを装備したGAT-01A1ストライクダガーと撃ち合いを続けていた。2機が立つ甲板とて、撃沈され、徐々に水没していく空母の上である。

戦場のただ中、死が満ちてくるこの中で、セイバーのパイロット、ハイネ。ヴェステンフルスは誰にとつても思いがけぬ行動を見せた。オープン・チャンネルでもなければ、無論、東アジア共和国軍に規定に合わせたものでもない。出鱈目に周波数を設定しながら、インテンセティに通じるものを探りでさがしているのだ。

「……聞こえる、か……。……ダム」

その声は偶然にも、かすれながらもインテンセティに、対峙する

ガンダムへと届いた。

何かの罠か。対するインテンセティのパイロット、ジョーン・ヒューストンはまずそう疑い、だが、あつさりと周波数を重ね合わせた。

「敵と話とは、ずいぶん余裕ね、ザフト」

ハイネは声から相手を女と、ジョーンもまた、少年とも言える年頃の男が相手だと互いに判断し合った。

「貴様、ファントム・ペインだな。聞くが、これまでに何隻のボズゴロフ級を沈めた! ?」

「数えていない」

ハイネはつい声を荒らげ、ジョーンはしかし努めて冷静であった。

地球降下直後のボズゴロフ級を攻撃し、仲間たちを殺したインテンセティはシールドに青い薔薇の紋章をつけていた。今、目の前でジョーンが搭乗する機体と同じく。

田の前の相手がその仇かもしれない。ハイネはその疑惑を素直に口にする。

「では……、降下直後のボズゴロフ級を撃沈したか? 格納庫でセイバーとやりあわなかつたか?」

「では、お前がハイネ・ヴェステンフルス」

ザフトではハイネ、シンの両名をカー・ペントリアの英雄として大体的に宣伝している。それが敵軍に知られていてもおかしなことはない。だが、ハイネが水没していく格納庫の中でインテンセティやり合つたことは、その詳細まではさすがに広まつていなければ。

疑惑を確信に変えるには、ジョーンの言葉は十分すぎた。

「どうやらお前らしいな、仲間にそういう水風呂をじちそうしてくれたのは！　名を聞いておこつか！？」

「東アジア共和国海軍第2師団所属、ジョーン・ヒューストン」

セイバーが腰を屈め、インテンセティが槍を構え直す。

この戦いにおいて、仇が誰であるとか、かつて討ち漏らした相手を再び前にしようとは何ら意味をもたない。敵であることに違ひはない。討たねばならないことに変わりない。

赤と青とが飛び出し、慌ただしい戦場にまた一つ激突音を付け加える。

第2次カー・ペントリア攻防戦。東アジア共和国、赤道同盟、大西洋連邦を中心とする地球軍とザフト軍の戦力は拮抗し、壮絶な痛み分けの末、ザフト軍はカー・ペントリア基地を守り抜いた。

アフリカ大陸。人類発祥の地であるこの大陸は、長らく苦難と嘆きの時代を繰り返した。

欧洲各国による植民地化に伴う搾取にさらされ、独立以後も根深い民族対立に欧洲への経済的依存、エイズによる人口抑制が行われるほどの流行に続き、経済的な成長は森林を切り崩し人類史上最悪の出血熱を解き放つ結果となつた。

欧洲による文字通りの線引きは民族問題を勘案したものではなく、アフリカでは対立と内戦が各地で発生した。その戦乱は、やがて純粋な資源競争へと姿を変えていった。

かつて欧洲に搾取され、独立後も外資系企業に持ち出されるでしかなかつた資源を、やがてアフリカ各國が管理を始めた時、すぐに問題が露呈することとなつた。各國政府が資源を私腹を肥やすことに費やし、人々の暮らしはいつまでも改善の兆しを見せなかつたのである。先進各國は、しかし資源の確保に奔走し、その政治体制を是正しよつとはしなかつた。

やがて、明確な変化が訪れる。民主化運動の高まりである。チュニジアに始まつた民主化革命の流れは当時普及していたインターネットを介して瞬く間に広がり、そして運動そのものを推進させた。活動家の横の繋がりが容易となり、また思想を広く人民に広げるここととなつたためである。

それはアラブの春と呼ばれ、この年を前後していくつもの独裁政権が崩壊した。アフリカに民主化の動きが生まれたこと。人々は明るい未来を期待し、だが、それは裏切られることとなる。

民主的に決定するということだが、必ずしもよい結果を生むわけではない。民主化されることで、これまで独裁者によつて抑えられた思想、宗教が台頭、やがて北アフリカの各地でイスラム国家建国が相次ぐことになる。特にエジプトで明確になつたイスラム化は、

イスラム教と強く対立するユダヤ教の国家、イスラエルとの強い反発を招いた。

当初懸念されていた全面戦争勃発こそ起らなかつたものの、民主化を終えた国家は、次第に革命の勢いも薄れ、次第にイスラム教原理主義の萌芽にさらされることとなつた。

西暦2076年、第6次中東戦争を契機として北アフリカに後のアフリカ共同体の前進である国際同盟が成立する。6度目を最後に数えた戦争を乗り越えたものの、疲弊は激しく、北アフリカでは長らく深刻な食糧難に見舞われることとなる。

その間、欧米各国の支援を受けた南アフリカでは南アフリカ共和国を中心に高度経済成長を成し遂げ、EUに習つた経済的な連携が南アフリカ統一機構の下地となつた。

戦争と貧困に明け暮れた北と、豊かな南。アフリカ大陸内部の南北問題は、やがて深刻な事態を招く。経済的に成長を続けた南アフリカは深刻な水不足に直面し、水資源豊かなケニア地区ビクトリア湖から水を引く計画を実行しようと、北アフリカと激しい対立関係が勃発するに至つた。この争いは、やがて戦争にまで発展することとなる。

資金豊かな南アフリカ軍は北軍を圧倒。ビクトリア湖を手に入れ、やがてその水を使い尽くしたことで、後の重要拠点ビクトリア基地が建造されたのは周知の事実である。

南軍優位のまま戦争は終結するものと思われた。たつた一つの、森の逆襲さえなければ。

増加した人口を養うために、南アフリカでは森を切り開き、農業用地の拡大に熱心であつた。それが、森に眠る悪魔を目覚めさせることになる。

かつてザイールと呼ばれ、現在コンゴ地区と呼ばれる地域、スルダン地区の2箇所で発生したこのウイルス性の災害は、600名の感染者の内、400名を超える死者を生じさせた。最初の感染者の故郷の川、エボラ川の名前を与えられたこの出血熱は、発見から100年以上もの間病原微生物危険度レベル4を維持し続けたこのフィロウイルスは戦争に明け暮れる両軍に襲いかかった。致死率が少なくとも5割、最悪の場合9割を超える最強のウイルスは500万を超える人命を殺傷。これは史上最悪のウイルス禍として今日まで記録されている。

もはや戦争を続ける力も気力も、両軍には残されてはいなかつた。ウイルスという共通の敵を前に、人は争うことやめたのである。

西暦、2136年、年号がC.E.に改められるわずか4年前の出来事である。

北部がアフリカ共同体と、南部が南アフリカ統一機構となつた後も、両国のわだかまりは拭い切れてはいない。

C.E.67年、プラントが地球に対し宣戦布告後、たやすく大洋州連合の最重要拠点であるジブラルタル基地を奪取、その後4年近くにわたつて占領を続けられた理由の一つであるアフリカ共同体領土内のザフト軍事行動の事実上の黙認は、決して偶然ではない。

アフリカ共同体は恨みを忘れてはいなかつた。

C.E.75年を迎えた今、アフリカ共同体は親プラントよりの政策で知られ、ザフト軍のゲリラ活動を黙認している。ザフトは、勇んでビクトリア基地へと攻め込んでいる。

かつて奪われた地に犬が噛みついてもよい。未練はなく、ただ怒りだけが残滓を胸に残す。

100年以上前の禍根でさえ、戦争は浮き彫りにする。戦争は、人の悲しき歴史を幾度となく示し続ける。

夜風を遮るものは何もない。地平線の彼方に逃げ込んだ太陽はその熱を残すことさえ嫌がった。砂の一粒一粒がわずかな熱さえ奪い去ってしまう。そんな砂漠の夜でさえ、砲火も、戦火も奪い去ることはできない。

砂が弾け砲弾が爆裂する。ビームに炙られた砂が悲鳴を上げて暴れ狂う。

砂で覆われたアフリカの大地は、しかし戦争を呑み込むことはない。

「派手にやつてるな」

砂漠上空を飛行する大型輸送機の群。すでに後部ハッチが展開され、それぞれモビル・スーツが縁に立つ。その中の一つ、赤いGA T-131イクシードガンダムの中から聞こえた声だ。

どこか楽しげにさえ聞こえるその声の主はカイト・マディガン。

「クピットの中で黒いノーマル・スーツを身につけた男は、出撃間近であるにも関わらずヘルメットをつけないまま、延ばされた顎髭の手入れに余念がない。すでに大人としての雰囲気を身につけた男性ながら、軽薄そうな印象を隠そうともしていない。モニターに映る、爆発を繰り返す砂漠を愉快そうに眺めている。

「早めに片を付けてしまおう。軍人は給料性だからな」

「」のマディガン機の後ろにはまた別のイクシードガンダムが出番を待つように佇む。声の主はそのパイロット、レオンズ・グレイブズである。眼鏡をかけ、カイト・マディガンとは異なった堅物の印象を与えるが、同時にその声は打算を感じさせて冷たいと思えるほどである。

「用心しろよ、レオンズ。遺族年金を本人は使えないからな」

そして最後。輸送機の格納庫最後の機体も、やはりイクシードである。パイロットはエドワード・ハレルソン。褐色の肌が健康的であり、吹く鼻歌は陽気なリズムを刻んでいる。しかし、3人の中でも唯一ヘルメットを被り、操縦桿を握りしめる手は力強い。

「」のエドワード「」そがこの部隊の隊長であり、イクシードはどれもが左肩に青い薔薇を、そして1対の大剣を背負う。

ファンタム・ペイン、南アフリカ統一機構所属軍。それが彼らの肩書きであり、エインセル・ハンターのために、ザフトを屠る獵犬である。

「了解です、隊長殿」

「じゃあ、いくとするか、レオンズ、エドワード隊長」

迷いなく、しぐりなく3機のイクシードが夜空を飛び降りる。並行する輸送機からGAT-01デュエルダガーが降下を開始する。上半身を中心として追加装甲が施されたこれらの機体は、南アメリカ統一機構の主力機である。すでに旧式として遅れた設計のデュエルダガーに追加装甲を施すことで性能の底上げが計られている。

主戦場を砂漠に設定する南アフリカ統一機構にとって設計が単純であるがその分メンテナンス性が良好であるデュエルダガーは状況によつてはガンダム以上に重宝される。

武装はライフル、シールド、そして、2本のビーム・サーベル。必要最低限、しかし必要な性能すべてを満たすデュエルダガーが夜の砂漠を踏みつけて着地する。

敵を探してデュエルダガーの首が左右に動く。すると、それが突如傾いた。首だけではない。胴体が、腰から上がまるごと傾いて落ちる。焼き切られた胴体だけが、何者かに切り取られたことを証明している。やがて残された屍が爆発することで砂漠を震し続ける戦火に加えられる。

立ち上るいくつもの火柱の間を影が走る。

状況を認識できず立ち尽くすデュエルダガーの左足が吹き飛ぶ。思わず膝をつく姿勢で体勢を崩す。大きく視線を低くしたデュエルダガーは、ここで初めて目撃する。闇が獣の形を成して飛びかかる光景を。

味方の損害が想定以上に激しい。このことはガンダム・パイロッ

トたちに一つの予感を抱かせた。

「ザフトの動きがいい。これはいるな……」

すでに両手に大型ビーム・サーベルを装備したイクシードのコクピットでカイトはヘルメットを脇から取り出した。すぐそばで同じく大剣を手にしたレオンズもまた、ヘルメットを装着している最中であった。

「割に合わんな。歩合制にするより、上に掛け合つてみるとするか普段軽口を戦う2人を真剣にさせるほどの大存在がここにはいる。

黒煙の間、火明かりに照らされた獣がカイトのイクシードへと跳びかかる。漆黒の体に四足獣の肉体。三首に光の牙を生やした番犬がイクシードへと踊りかかったのである。

イクシードの大剣と獣の牙とがぶつかり合い、ビームの輝きを散らす。力任せに押し返された獣は、その四肢で強く砂を踏み、着地する。

漆黒の装甲に、ザフト軍初のビーム兵器搭載機であるバクウを思わせる四足獣の姿。その背からは2本の首が伸び、合計3本の犬を思わせる首からはそれぞれビーム・サーベルが伸びている。

ZGMF-888ヒルドルブ。ザフト軍の汎用型陸戦機である。汎用と呼ばれている以上、単なる局地戦専用機ではない。

また1機のヒルドルブは挑みかかる。狙いはレオンズの機体であり、四足獣として飛び出したはずのそれは、しかし人へと姿を変え

ていた。2本の首をそのまま背負い、ザフト製モビル・スーツの特徴であるモノアイが光。両手に構えたビーム・サーベルを軽々振るつては次々とレオンズ機に叩きつける。

四足獣への変形を可能とした可変機。それがヒルドルブ。不整地においてはバクウを思わせる四肢で走破し、3本の首がビーム・サーベルを牙と光らせる。モビル・スーツ形態ではZGMF-X1000Ζダ同様ウイザード・システムによる換装を可能とする。

アフリカ戦線のザフト軍を支える陸戦の主力機である。

人型であろうと2本の首は肩越しにビーム・サーベルを、まるで剣の柄を噛んで保持する形で発生させている。レオンズのイクシードが対艦刀を叩きつけると、それは受け止めるとともに刃を傾かせ、攻撃をそらした。

「練度が高い！ やはり奴の部隊だ！」

南アフリカ統一機構軍を恐れさせるザフト軍アフリカ方面軍指揮官は、勇猛果敢で知られている。そしてその部隊もまた、すべてがヒルドルブで構成される特殊部隊としてその名を轟かせていた。

砂漠の虎。

ザフト軍最強の陸戦として知られる部隊が夜の砂漠を荒らす。しかし、青い薔薇もまた、世界の至る所で咲き乱れ、枯れることなどない。

それは、まさに燃え盛る炎が渦巻いたかのようであった。深紅の旋風が、レオニズと対峙するヒルドルブの脇を吹き抜けた。切断と

呼ぶにはあまりに強引かつ強力に任せた一撃がヒルドルブを胴裂きにする。体が弾けるように別れ、ヒルドルブの半身は別々の箇所に叩きつけられるとともに爆発する。

爆風にさらされ、イクシードの深紅の装甲がフェイズシフト・アーマーの輝きを放つ。

その輝きめがけて四足獣形態のヒルドルブが飛びかかる。本体の首からは左右に2本の、背中の第2、第3の首からはそれぞれ左右の片側にビーム・サーベルが伸びる。計4本のサーベルを、しかしイクシードはものともしない。対艦刀を握りしめたままの左手を強引に叩きつけると、決して軽くはないはずのヒルドルブがひっくり返り、腹を上に向けたまま砂地へと叩き落とされる。悲鳴など上げぬはずのモビル・スーツが、しかし苦痛にうめくよう四肢を不自然にひきつらせたかと思うと、その胸部へと対艦刀が突き立てられた。

膨大な熱量を持つビームの熱が胸部ジエネレーターを焼き飛ばし、爆発がイクシードを包み込むほどに大きく、大きく吹き飛ばす。

爆煙の中から立ち上がるイクシードは、やはりその深紅の装甲を赤く輝かせる。その姿は、まるで敵の返り血を浴びているかのよう。ゆえに彼は、エドワード・ハレンソンは呼ばれる。かつて最も知られたシリアルキラーは被害者を幾度となく切り刻んだ。その姿は血にまみれただろうと誰もが空想し、その姿を重ね合わせた。伝説の殺人鬼と敵機の血にまみれた如きイクシードの姿を。よって、斬り裂きエドと。

虎は密林に生息する生物である。斬り裂きジャックは300年以上も昔、工場の排煙に煙る街の中に消えていった。

アフリカの砂漠には、あり得ない存在が、しかし名に確かに力とともに対峙する。

砂漠の虎。それは戦火に照らされる闇の中から歩み出る。元来、漆黒の装甲をしま模様に染めた三首の獣は威風堂々。その背後に2機のヒルドルブを従え、吹き抜ける風は虎が鳴らした喉の音。

斬り裂きエド。獸から吹き出した血にも等しい黒煙と残り火の中立ち上がる。左肩には青い薔薇。この世で最も鋭い剣を構え、カイト、レオンズの2人がその背後に並ぶ。時折爆ぜる火花は、獲物の断末魔。

アフリカの砂漠は、月明かりと戦火によつて照らされる。

客人を迎える時はシアター・ルームにあげることがエルスマン家の決まり事と化していた。

アイリス・インディア、フレイ・アルスター、ナタル・バジル・ルの3人が1つの椅子、ディアツカ・エルスマンの座る椅子を囲むように立つ。足の悪いディアツカだけが座り、残りは皆客人を迎えるために立つているのだ。

まもなく、扉が開くとともにまずはジェス・リブルが部屋に入ってくる。ジェスはアイリスたちの方を見ることなく、後ろを気にした様子で体を傾けていた。

「わざわざすまないな。俺はプラントでの取材経験がなくて、勝手

がわからないんだ」

ジエスに連れられて入ってくるのは女性である。短く整えられた髪や、お洒落なジャケットを着こなした様子が、人の視線を意識する仕事をしているのだと思わせる。この印象そのままに、アイリスたちが揃って様子を眺めていようと、気にした素振りを見せない。どこか余裕のある印象のまま、ジエスの後について歩く。

「ジエスさん、この人は？」

部屋の真ん中、ちょうど大型モニターの前のあたりでジエスは立ち止まる。

「ベルナデット・ルルー。師匠のところで一緒にいたんだ。プラントに戻つたつて聞いてたから、今回の取材に協力してもらわねばと思つてや」

「プラント政府について探つてるんですつて？」

ベルナデットは体こそジエスに向いているが、その顔はアイリスたちの方を向いていた。どこか落ち着きに欠けるジエスの声とは違ひ、とても聞きやすく、落ち着いている。

「ああ、いつの間にか、そういうことになつていた」

「やっぱ。でも、悪い」とじゃないわ。今、政治はとても若い娘好みよ」

ベルナデットは胸ポケットから一枚の写真を取り出す。いつも持ち歩いているのだろう。多少くたびれたその写真には、それぞれ男性

が1人ずつ映されている。目線はカメラを向いていないところを見ると、許可を得て撮つたものではないのだろう。

それも無理はない。世界で最も有名な2人が易々撮影に応じてくれるとは思えない。現プラント最高評議会議長、ギルバート・デュランダル。ブルー・コスモス代表を務めたエインセル・ハンター。

「ギルバート・デュランダル、エインセル・ハンター。どちらも田が覚めるような美形でしょう」

そちらの方が受けがいいと考えたのか、ベルナデットはアイリスやフレイに見せるようにしてから写真を仕舞う。効果的なところを選ぶところからも、このベルナデットが紹介された通りの職業であることを匂わせている。

その反面、ジェスがどこかトボケた様子に見えてしまう。

「そりや、そうかもしだいけど、それがどうしたんだ？」

「わからない？ 政治家なんてケバいおばさんが、恰幅のいいおじさんの仕事よ。でも、2人ともとてもいい男よ。スタイルは抜群で、甘いマスク、エインセル代表はあまり前には出でこないけれど、ブルー・コスモス内部じゃ、演説上手で通っているらしいわ」

不出来な同門をワトソン役のように利用し、ベルナデットはまるで周囲を試しているようにもつたいぶつて、しかし十分な情報を与えていた。

観客はつい「ううではないか。そんな意見を言つてしまいたくなる。ディックが、まず応じた。

「要するに、プレビシットってことか？」

「プレステージ？」

「プレビシットだ。選挙が政治家の政策を吟味する場ではなくて、その人物の人柄やスター性を審査する場所に変わっているという話だ。当然だが、あまりいい意味で使われる言葉じゃない」

フレイに間違った方向に拾われながらも、ティアッカの用意した答えはベルナデットを満足させたらしい。敏腕記者はジエスをほつたらかしにして、ティアッカたちに完全に向き直る。

要するに、より効果的な聴衆としてティアッカたちを選んだということなのだろう。

「今プラントじゅ、ギルバート・デュランダル人気はそんじゅそこのタレントを凌ぐほどよ。それに、就任後地球圏においてザフト軍がまだ重要な拠点を一つも失っていないこともあって、デュランダル議長が言うことはすべて正しいと人々が思いこみ始めている」

「危険な状況だな。クライン派の政策はほぼ素通りといふことか」

厳しい表情のナタルの言葉は、決して否定されない。現在、プラント最高評議会の12議席中、11席をクライン派が牛耳っている現状は誰もが知っている。

「その危険性もあるわ。コーディネーターは賢すぎるのよ。少なくとも、コーディネーターは自分たちがそうだと考えているわ。この中に政治家、法律を学んだことがある人は？」

右手を軽く挙げて拳手を促すベルナデット。しかし、この中で手を挙げる者はいなかつた。しばらくして、ベルナデットもまた手を下ろす。

「私もよ。だから簡単にね。法律は、大まかに分けて2つの流れがあるそよ。自然法と実定法。自然法は、法律の上に倫理だとか道德、不可侵領域とも言えるものがあつて、どんな法律でもそこをねじ曲げることはできないとされているわ」

「要するに、どういふこと?」

正直なフレイの言葉に、ベルナデットは小さく微笑みを作りながら応じた。

「たとえば、人権を法律で好き勝手に制限してしまえるとしたら問題でしょう。だから自然法思想では人権みたいな大切なものを法の上位の存在と位置づけ、操作されてしまうことを嫌うの」

「でも、人権とか、そんな曖昧なもの、勝手にあるなんて言われても……」

「そう、そこが自然法の問題ね。もう一つの実定法は、そんな理由からそんな人権も法律で制定すべきとしているわ。その方がわかりやすいし、自然法と違つて宗教色もない。プラントは当初理想郷として建国されよとしたわ。人種も民族も、そして宗教も関係ない、旧人類のしがらみがいつさいない国としてね。そんな国が実定法の流れをくむ法律に基づいて憲法を制定したのは「く自然な流れね」

「それって、問題なんですか?」

続いて質問を引き継いだのはアイリス。律儀にも挙手して質問している。ディアックとナタルは口を固く結んだまま、難しい顔をして考えを巡らせていく。

「法と道徳は違う。でも、決して切り離して考えることもできないわ。悪法問題といつよくよく言われる問題があるわ。ある国で殺人を合法とする法律が制定されたとして、人を殺したとする。法という概念からではこれを裁くことはできないの」

「どうしてですか？」

「反対に考えて。合法とそれでいる行為で罪に問われたら、それこそ問題でしょう」

「そつか……」

まるで飲み込みの早い教え子に諭しているように、楽しげにさえ話していたベルナデットが、急に声をひそめ始める。

「最悪の場合、法律が為政者に恣意的に利用されてしまうことを意味するの。まさに悪法も法、なのよ」

不必要に深刻になつていて。そのことに気がついてか、ベルナデットは一度、敢えて微笑んでみせたようだった。

「でも、殺人がいいこととは思わないでしょ。そんな時は自然の方があつた。自然法は法の上の概念を規定している。そのため、法にはかなつているとしても悪い」とは悪いのよ」

「それが、今のプラントがむりをされている危機だと、そう考へてゐるんだな？」

ディアツカの言葉に、ベルナーテットは満足げに首肯する。

「そう。プラントは歴史的必然から憲法を実定法思想から作り上げてしまつた。法がすべてで、権力者の意思と、それを国民が認めてしまう場合、どんな法律でも通すことができてしまうの。そして、今ギルバート・デュランダル議長の下、プラントは熱狂的なプレビシットに走つてゐる。さてさて、どんな法律ができるかが心配だらうね？」

「何か先例もあるのか？」

「西暦1900年代に登場した大洋州連合のナチスドイツでは合法的に独裁政権が誕生したし、それと今は赤道同盟や東アジア共和国、オープ首長国、この3カ国に分かれているけれど日本という国も人権が制限されたわ」

「ドイツと日本は、確かに同盟国だつたな」

「ええ。別に驚くに値しないわ。日本の明治憲法はドイツのプロイセン憲法を参考に作られたもので、2カ国とも揃つて実定法の国よ。歴史的な解釈は避けるけれど、法律という観点から見たなら、この両国の結びつきは至極当然なのよ」

議員の子息とジャーナリストの会話がしばらく続いた後、アイリスが再び手を挙げた。

「要するに、プラントでも独裁国家誕生の危険があるということです」

すよね？」

「ええ。少なくとも、私はそう考えているわ。コードィネーターはね、賢すぎるのよ。ナチュラルにはできないことができる。ナチュラルの一一番煎じに甘える必要はない。それは同時に、人類が多大な犠牲を支払つてまで得てきた知恵も技術も進んで捨ててしまつたことと同義なのよ」

そんな例の一つを、ベルナデットは意外なところに求めた。ビーム兵器を先に開発したのは大西洋連邦である。ところが、ザフト軍初の本格的なビーム兵器搭載機であるZGMF-515ガイツにはビーム・ライフルこそ装備されたが、ビーム・サーベルは見送られ、取り扱いに癖の強いビーム・クローが採用された。

ナチュラルの後には続かない。そんな驕りにも近い自負が感じられるエピソードであるとした。

「コードィネーターは、毒に溺れる毒蛇で、日光に当たられる鳥と同じ。自分の強すぎる力を抑えることができず破滅と隣り合わせにある存在だから。そして、民衆はエインセル・ハンターを、ブルー・コスモスを恐れている。そんな法案は通せない、なんて誰かが言ったとしても、すぐこう言い返されるわ。ブルー・コスモスが攻めてくるだ。そして、誰も反論しなくなる。内憂外患とでも言いつのかしら？ プラントは内と外から暴走させられているのよ」

もう一度、ベルナデットは写真を取り出す。今回は一枚だけで、手慣れた様子でそれは予定された人物の写真であった。

S Pに囲まれて階段を降りているエインセル・ハンターの横顔が写っている。

「そういう意味において、Hインセル・ハンターはとても危険よ。プラントにとつて彼は、寒気がするくらい美しく見えている。格好いい指導者と美しい魔王の一騎打ち。まさに劇場型ね。端からなら、きっと楽しめたでしょうね」

「これから起きる」ことに想像を巡らせてくるのだろう。ベルナデットは眉をひそめて難しいひゅじょうを作り上げる。アイリスとフレイもまた、難しい顔をして口元に手をやっていた。ただし、その理由はベルナデットとは異なっている。

「でも、Hインセルさんは、別にそんなことしようなんて考へてる訳じゃないと思うんですけど……」

「Hインセルさん？」

呼び方にしては妙に親しげであることに、ベルナデットは疑問を隠そうとはしない。

「Hインセルさん、私の足長おじさんですから

とアイリス。フレイも続けた。

「私にとつても命の恩人だし」

表情を止めて、しばらく考え込んだようなベルナデットは、やがて結論を出した。息を吹いて、あくまでも信じようとはしない。

「冗談だつて言つながら、今の内よ」

髪をかきあげる仕草を挟むベルナデットに、アイリス、フレイが同時に携帯電話を突きつける。

「ツー・ショット写真」

ワインクしながらピース・サインを出すフレイと静かに微笑むエインセル・ハンター。

緊張した面もちのアイリスと、やはり静かに微笑むエインセル・ハンター。

「あなたたち、名前は？」

アイリス・インディア。フレイ・アルスター。ナタル・バジル・ディアッカ・エルスマン。名前が並べられた時、ベルナデットは大きく笑った。口と腹を押さえなければならないほど大きく。

ひとしきり笑った後、ベルナデットは話にまるでついてこないジェスの方へと勢いよく振り返る。

「ジェス、どうしてこんな大きな話、今まで隠してたの！？」

やはり、ジェスは何も気づいた様子はない。瞬きを繰り返すばかりで、要領を得ない。

「この子たち、皆アーク・エンジェルのクルーよ」

アーク・エンジェル。近代戦史を語る上で欠かすことができない戦艦の名前が登場した時、ジェスは目を見開いて驚きを素直に表現する。

「そんなこと聞いてないぞー!？」

「履歴書には軍歴ありつて書きましたよね」

「さすがに傭兵してザフト軍にまで入つてましたなんてことまでは言わなかつたけど」

アイリスとフレイはむべもない。

「あの時はだいぶ無茶したんだぞ」

「はいはい、感謝してるって」

フレイは椅子に座つたままのティアックの肩を揉み始めた。秘密とも呼べないが　がバレたことを構う様子はあるでない。

「ジエス、呼んでくれてありがと。おもしろことになりそうね」

ベルナデットさえ、すでに口元が緩んでいる。当事者と、状況を楽しむことができる者。そして、事態の急変につれていくことができないジエスだけが取り残されている。

そんなジエスの様子を、ディアックはつくづく他人事とは思えない眺めていた。

「DUSDOについて何かわかつたか?」

人気のない廊下。カガリ・コラ・アスハは立ち止まり、手に新聞を握りしめたユウナ・ロマ・セイランを待つ。

「いや、異常にガードが固くてね。まるで、軍事施設並さ。ただ、おもしろい記事を見つけた」

そう、ユウナは新聞を開いて見せる。わざわざ指で指さなければならぬほど小さな記事を示している。ファインブルの破片を分析した結果だとが、落着地点の写真とともに掲載されている。

「ファインブルがアステロイド・ベルト由来と判明か。ずいぶん小さい記事だが、ジェス・リブル？ 知らないな」

火星と木星の間に存在する小惑星群なら、確かにDSSDが何か関連している可能性はある。大手新聞社がこそって被害状況や戦況に紙面を割く中、記事の姿勢は一風変わっていると言えた。

「きっとフリーのジャーナリストだらうね。話くらい聞いてみたいと事務所に連絡してみたけど、長期取材で留守だつてさ。噂じゃ、プラントに行つているそつだよ」

「（）時世にか？ ジェス・リブルか。なかなか行動力のある新進気鋭の記者のようだな。覚えておいて損はない名前のようだ」

「あなたたち、少しお話聞かせてもらえない？ ああジェス。何か飲み物入数分もらってきてちょうだい」

すぐに行動を起こせないジェスに対して、ベルナデットは手を叩

いて急かした。

「せ、早く」

戦争の目的は？ 敵を殺すこと？ 味方を守ること？ 勝者の名の下、正義を語ること？ 無理難題を敗者に押しつけること？ 敵を懲らしめること？ 戦の意味はこのどれか？ それともこのすべて？ わいとやんなこと。

それなら何を迷うことがありますか？ ただ敵を虐げ、味方だけに温情を。

戦の意味なんてわからきつたことではありませんか？ すべては勝つことに帰着するでしょう。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blue Number~

「ダイレクタントの密かな楽しみ」

正義。そんなものの、厭世家の手慰みでないと、あなたは言えますか？

第26話「ディレッタントの密かな楽しみ」

「5機撃墜おめでとう。君もいつぱしのエースだな」

いつの間にか、格納庫にいるよりも医務室にいる時間が長くなっている。自分は学生ではなく軍人だ。そう、ハイネ・ヴェステンフルスは自嘲した。ハイネを出迎えた女医は、パイロットのそんな顔色を気にもしないで祝福の言葉を投げかけた。いつものように医者とは思えない派手な服装に、すらりと伸びた足を組んで座っている。若造には田の毒だ。

「全部デュエルダガーだ。それに、ケッテ・リーダーにしては少ない方だ」

少々ぶつきらぼうな返事をしてしまったのは、ある種の照れ隠しだろうと自覚する。それが褒められたことに対してか、美脚を見せられたことに対するのかまではわからない。

いつもの場所。医療器材の棚の近くに置かれた椅子に腰掛ける。この部屋ではいつもこの椅子で女医殿と、ロンド・ミナ・サハクと話をすることは、ほとんど習慣と化していた。

「あまり謙遜していると乗り遅れてしまわないか?」

「一ヒー・カップ ミナが飲むのはブラックと決まっているを傾けながら言つてきた言葉の意味を、すぐには理解できなかつた。消去法として考えを巡らせると、だいたい見当はついた。

ハイネと時を同じくして鉄十字勲章を授えられた男が後一人いる。

「シン・アスカか。議長の晩餐の時に見かけたが、どうという」と
ない男だったな。当然ユニウス・セブン世代でもないが、かと反体制派というほど先鋭化されているようにも見えなかつた」

「どつちつかずか。確かに、今のプラントはあらゆる意味で一極化
していると言える。ただ、それは君も同じだろ?」

特にハイネがすぐに言葉の意味を理解できるとは考えていいなかつ
たのだろう。カップを側の机に置く。そんな短い動作でミナはすぐ
につづきに入つた。

「UJの基地に降りてくる者は若者は多くの場合、やむなく戦場に送
られてくる者が、でなければコーディネーター至上主義者だ。君は
戦争に積極的とも言えるが、しかしギルバート議長をどこか冷めた
目で眺めているようにも見える」

図星だ。そんなにたやすく見抜かれるほど、自分は単純な人間か。
つい顔をしかめてしまう。

「医者はカウンセラーもするのか?」

「多少はな。だが、この程度の人間觀察で心理学を諂いつもりはな
い」

要するに、見ていればわかるといふことらしい。確かに、勝利を
我らに、なんぞ一度も叫んだことはなかつたし、戦争反対とプラカ
ードを掲げたこともない。

「俺と親父はコーディネーターだが、お袋はナチュラルだ。コーデ

イネーター至上主義には、ついていけないと」ころがある

おやじ曰く、女は天然ものに限るとのことだが、そつひつてお袋には殴られていた。こんなことまで教える必要はないだろ？

「それより、軍医殿はどうして何だ？ 今のプラントで医者が食いつぱぐれる」となんてなさそうだが？

わざわざ戦地にまで出向く必要があるようには見えないところだと。そして、コーディネーターと人類の輝かしい未来のためにと言うよりも見えない。

「ちょうど、兄が軍人だった

「それは手段であつて動機じゃない。それに、ゴニウス・セブン世代と言えば、あんたも入るんじゃないかな？」

「辛うじてな」

「ひらも理由の一端を話した。相手にも話せりふもりで視線をそらさずになると、ミナは笑いながら息を吹く。

「私は4年前も戦争に参加していた。地上軍で、カーペンタリア基地所属なのは変わらない」

「ということは、ヤキン・ドゥーエ攻防戦の時には……」

C.E.71年当時からカーペンタリア基地は小規模とは言え稼働していた。そして、71年の末、地球上にいたかいなかと言つことは、重要な意味を持つ。

嫌なものでも噛んだように口を閉じていられず、口を開いて空気の入れ替えを行つた。

「地球にいた。仮にブルー・コスモスが命がけでジョネシス発射を阻止してくれなかつたとしたら、私は死んでいただろう。そして、宇宙の仲間たちはやむを得ない犠牲、尊い犠牲だとだと称えてぐださることだろう」

地球上の全生命の9割を死滅させると試算されたジョネシスの照射を前に、それは邪推でも何でもない。当時のザフト軍上層部に地球に残存していた部隊を犠牲にするつもりでいたのだ。

プラントの勝利のためだ。そんなことを言つていいはずもない。ハイネが何も言い出せずにいると、ミナは笑う。自嘲か嘲笑か、普段通りの笑い方に、しかし影を感じずにはいられない。

「我々ザフト地上部隊は、加害者であるとともに被害者なのだよ」

新たに配属されるザフト兵の多くはコニウス・セブン世代で、きっとミナたちにも誇らしげに語るのだろう。プラントの正当性とするべき未来の姿を。それがどれほど滑稽で無神経に見られているかも知らずに。

プラントはどうもかしこも垂みを抱えている。

杖の音を響かせて、そして扉が開かれた。一般邸宅にはすぎた両開きの扉の片側が開き、隻眼隻腕のディアツカ・エルスマンがイザ

ーク・ジユールの前に姿をさす。

もはや戦えないほどの傷を負った身であるにも関わらず、ディアツカの様子は4年前と何ら変わっていない。不遜で、どこか斜に構えた笑い方が相変わらず似合つ男だ。

「イザーク・ジユールだつたか。キラビゼフ・ランサスの結婚式以
来だな。まあ、あがれよ」

開いた扉から招き入れられる。杖をつく音に左足を引きずる光景。
4年前の戦争が残した爪痕というものだ。

「コートニーにも同じようなことを言われたな」

もう3年も前の話だ。各勢力の要人が集まり奇想天外な結婚式を最後に、イザークは当時の仲間たちと会つてはいなかつた。特に頻繁に顔を合わせるほど仲のよかつたわけではなく、また、イザークの方から避けていた面もある。

戦争といつものからつかず離れず、そんな距離を維持してきた。

小声であつたためか、コートニーの下りは聞こえていらないらしい。ディアツカは玄関口からまつすぐに続く通路をゆっくりとしたペースで先を行く。

「今、教え子に頼まれてインパルスガンダムについて調べていてな。
少しでも足がかりを探している最中だ。不謹とは思うが、協力して
もらえればありがたい」

「教え子って、女か?」

振り向いた訳ではない。ただ首を横に向け、後ろに关心を払った
という様子で尋ねてくる。イザークも足をとめないまま、答えてお
いた。

「よくわかったな。メイリン・ホークという名だ」

どんな根拠があつたのか尋ねてみようかとも思つたが、頭をかき
ながら足を早めたところを見ると単にからかわれただけのようだ。

(まつたく子どもだな)

そうしてここの内に、ようやく田的の場所についたらしい。玄関同
様大きな両開きの扉で、装飾の施されたドア・ノブが取り付けられ
ている。ディアックはノブに手をかけてから、一度立ち止まる。

「それで、ザフトの機体のことでビーヴィして俺のところに来た？」

訝しがっている様子はない。単なる疑問だろう。こんなことに答
えるには、イザーク自身よりもこちらの方が適任だろう。

「のロードなら、使えるはずだ。

プロジェクトを取り出すと、光の柱から蒼星石が姿を現す。

「あるお方からいただいた資料に、インパルスガンダムに搭載され
ているシステムに問題があるとありました。そのシステムこそが、
アリスです」

「おー、それって！？」

片足が悪いというのに、ディアッカは見ていて不安になるほど驚いた。アリスという単語に反応したのではないくらい、イザークにも容易に見当がつく。

「ゲルテンリッターの4女、蒼星石のプレジエクターだ。俺も、マスターの1人だからな」

「ゼフィランサスから聞かされたことがある。見るのは初めてだが、ほんと、ゼフィランサスによく似ているな」

イザークの手の上に立つ蒼星石を覗き込んでいたディアッカが、ふいに視線を外した。

「と、あまりじろじろ見るもんじゃないな。で、アリスだったな」

ノブに手をかけたままであつたため、ディアッカは話しながらも扉を開くなり部屋へと入つていく。イザークもまた、返事をしながら後に続いた。

「そうだ。俺たちが乗っていたガンダムにも搭載されていたのと同名のシステムだ。アーク・エンジェル組みがいるのも驚きだが、…まさかお前がいるとはな」

部屋の中には、何故か山積みにされた資料の塊がいくつかできていた。その間に並べられた椅子にアイリス・インディア、フレイ・アルスター、ナタル・バジルールの姿もあつた。何やら資料を読みふけつっているらしい。問題は次だ。何故か女性陣から不自然に離れた場所で椅子に怪しげな雰囲気の男、ケナフ・ルキーがコーヒー片手に座っていた。インパルスに関する資料を渡してきた時と何ら

雰囲気が変わつていな。

「何?」Jの変態おじさんと知り合ひ?」

「資料を渡されたというだけだ。一緒にはあるな」

挨拶もなしにフレイという女はケナフを指さす。そういえば、この女はそんな女だった。

「おいおい、本人の前だ。ちょっとは気を使ってくれたまえ。そして、私は変質的ではあるかもしれないが、変態ではないよ」

そう言つてゐる割に、アイリスたち女性陣の距離の開け方は尋常ではない。特にナタルなどアイリスとケナフの間に割つてはいるよう間に座つては、資料を見る目が時折鋭い眼光となつてケナフを貫いてゐる。

何があつたのかは知らないが、フレイの様子を見れば見当がつくといふものだ。

「女性にこきなじ『真撮らせてくれなんて言つてくるのは変態か変態のカメラマンよ』

「ひどい言われようだな」

「ケナフ・ルキーーと言えばプラントでは反体制派のジャーナリストとして知られてゐるが、まさか、体制どころか、社会とも相入れないといつ意味だったとはな」

ディアツカはすでに椅子に座つてゐる。思いの外アイリスたちに

近い場所だが、特に警戒されていないところを見ると、どうやらこちらは嫌われているということはないらしい。蒼星石もどこかに座ればいいと言つてくれるが、構わず扉近くに立つていいとする。

座るための立ち位置 ややこしいが、周りの人間との間合いの取り方と言つことだ をしばらくは探させてもらつつもりでいた。何より、変態に巻き込まれては面倒だ。

「違う。私はただ、ヴァーリの大ファンでね」

ケナフは立ち上がり、椅子の脇に置いていたアタッシュ・ケースを持ち出す。それだけで女性陣が警戒心を増したところを見ると、このケナフという男、相当のことをしでかしたらしい。

「これまで20人のヴァーリに会つたり、資料を探つたりしてきたよ。クライン家が用意した26人姉妹のクローン体。それぞれの経緯を眺めていると、それ自体、裏歴史を追うことに繋がる。これほど興味引かれる存在はないよ」

ちょうどテーブル程度の高さに積まれていた資料の山にアタッシュ・ケースを開くと、中には、様々な資料や写真が雑多に放り込まれているようだった。ケナフはわざわざ中身を見せようとせず、元の席へと戻る。まずはフレイが動いた。ケナフの様子をうかがいながらにじり寄るよつよつくりと近づいていく。

(女といつのは、時折小動物のように見えるな)

さて、こんなこと言つて世界の半数を敵にしてはしまわないだろうか。腕の中の蒼星石の横顔に尋ねてみる気にはなれない。

やがて、フレイはコーヒーを飲むほどくつろいだケナフの方を見たまま、恐る恐るアタッシュ・ケースに手を伸ばす。写真の1枚をひたくつて仲間たちのところに戻る様子など、小動物に餌付けしている場面をほどよく彷彿とさせる。

そうしてようやく、フレイたちは1枚の写真を覗き込み、文字通り三者三様のやりかたで驚いてみせた。

「これって、カルミアさん！？」

ケナフに確認をとるように写真を翻してくれたおかげで、イザークにも見ることができる。どこかの砂漠で、ケナフと褐色の肌のヴァーリが並んで写っている。穏やかな微笑みがよく似合っている。

「カルミア・キロとは、Kのヴァーリとは4年前、アフリカの砂漠で出会った。なかなか気さくな人で写真撮影にもあっさり応じてくれたよ。残念ながら、戦死したそうだが。ああ、こんなこと、君たちにとつて今更だな」

イザークは地上では大洋州連合の密林での戦闘に従事していた。自分の知らない場所での物語であるらしい。フレイは写真を凝視したまま、目を離せないでいる。ずいぶんとしおらしい様子だが、何があつたのか聞くほど野暮でもない。ケナフがアタッシュ・ケースへと近づいているのを気にもとめないほどだ。

「ここにあるヴァーリの少女たちの半数以上がすでに死亡している。長女でさえまだ20程度の年頃だというのにも関わらずだ。まさに花だよ。咲き急いで散り急ぐ」

アタッシュ・ケースから次々取り出される写真には、髪や瞳の色、

年齢までバラバラ 恐らく、すでに死去しているヴァーリのものなのだろう で、同じ顔だけが共通している。

「アイリス・インティア。エヴァーリにも是非写真を撮らせてもらいたい。ああ、別に今すぐでなくてもいいよ。君がその気になるまで待たせてもらうつもりだ」

「言い方がキモい！」

フレイは音がしそうなくらい力強くケナフを握り出す。何かと無しにもほどがある。

興味がないわけではないと、アタッシュ・ケースを見に行く。なるほど、中には、恐らく20人に手が届くほどの写真と資料が入れられている。

「そんなヴァーリ・フリーケが何故インパルスのデータを持つている？」

「とあるヴァーリに交換条件で頼まれてね。資料を渡してこい。そしたら写真を撮らせてあげるとね。だが、インパルスは、反体制派ジャーナリストとしても面白い。初期のガンダムに搭載されているアリスとは別物だからね」

「プロジェクト・ラスト・バタリオンのことですね。公式にはインパルスガンダムの量産計画とされていますが、いくつか疑問があります。まず、今のプラントにはインパルスを量産することのできる国力もなければ、パイロットも十分ではありません」

「それに、今まま生産数を増やしてもユニウス・セブン休戦条約

に抵触するだろうね。そう、非現実的もいいところのいい加減な計画だ。ところが、プラント政府はこの計画を推進している

蒼星石の方がこの類の分析ことは得意としている。連れてきて間違いではなかつたようだ。

「そこにアリスが関わつてゐる。そつ言つことですね？」

「さすがはゼフィランサスの娘さんだ。いつか、君の母さんの写真も是非ともお願ひしたいものだ」

ケナフと蒼星石の話しさは順当に進んでいたが、突然蒼星石の口が止まる。普段から冷静で、静かな横顔の似合つ少女だが、今回は説明はしにくいのだが、唇がかすかに震えているように見える。

「マスター、この人とは距離を開けてください……」

「これは蒼星石の願い通り、2、3歩後退してやつた。

「お前の口からそんな言葉を聞くことになるとはな

「僕にも好悪はあります」

このケナフという男、女性の嫌悪感をかきたてずにはいられない性分なのだろうか。しかもそのことを気にした様子もないから質が悪い。

「新しい情報じや、インパルスが敵前で機能停止したそうだ。アリスの誤作動が疑われている。総責任者のサイサリス・パパは、それ

でも信じているようだよ。このアリスを搭載するインパルスこそが、兵器の究極形、最後の大隊なのだとね」

その男の顔は、ついさっき少女を引かせた男とは思えぬほど、野心的で敏腕記者を思わせる。

イザークは「」でよみがへる部屋に散らばる資料の山の意味することを考え始めた。記者が最高評議会で唯一反クライン派を貫くエルスマン宅に集まっている。その意味するとこには、突然部屋の扉を開けた。

「戻つたぞ。今回はウン・ノウ教授に取材してきた。プラントの政治体制に批判的な論文が多くて当局にすっかりマークされてたが、何とか接触成功だ」

何やら若い男 上等なカメラを首からぶら下げていてことから、この男も記者なのだろう が興奮した様子でシアター・ルームへと入つてくる。見慣れない顔だが、慣れた様子からして「ティアツカたちの知り合いだろう。

男のすぐ後から続いたのは若い女で、身だしなみには気を使うようだが、手にしたメモを真剣に眺める様は、これまでの流れから職業を連想させる。

「次はここなんてどうかしら？ 比較的ナチュラルの住民が多いと噂される地区よ」

「」もすっかり反体制派ジャーナリストの観点になつたな

ティアツカのため息まじりの嘆きが、この資料の山が何者かを語

つていた。

NGMF - 888 ヒルドルブ。砂漠のような不整地での戦闘を想定して開発されたこの機体は、モビル・スーツ形態をしている時は細身で、NGMF - 1000 ザダに比べると華奢な印象を与える。それでも漆黒に体に残る砂汚れは、この機体が過酷な戦場を戦い抜いていることがよくわかる。

歩きながらといふのに、シン・アスカはつい氣をとられて壁際に並ぶヒルドルブたちを見上げていた。岩盤をくり貫いた不格好な壁に並ぶ機体はどれもが歴戦の強者を思わせた。ここがアフリカ方面軍総司令部の隠れ家だと聞かされたことがイメージに拍車をかけているのかもしれない。

ヒルドルブは続いて、視界にちょうどトラのような縞模様が描かれた機体が入った時、シンは誰かにわき腹をつつかれた。隣を歩いていたルナマリア・ホークがシンに注意を促したのだ。見ると、シンの先を行っていたはずのアスラン・ザラ大佐が足を止めて、誰かと話していた。

機体に氣をとられすぎていたことは認めるが、もう少し優しい注意はなかつたのだろうか。ルナマリアにつつかれた痛みを意識しながらザラ大佐と相手の話を聞いていることにした。

相手は若い男だ。指揮官を意味する白いノーマル・スーツに、日に焼けた肌の色がよくめだつていて。顔はどこか若さが残っていて頼りなさそうな頬骨をしていても、その視線は真剣さを感じさせる。

「久しぶりだな、アスラン・ザラ大佐」

男性が敬礼すると、ザラ大佐も敬礼する。上官　直属ではない
が　に合わせる形で、シンとルナマリアも敬礼した。

「お久しぶりです、マーチン・ダコスタ大佐。この度は寄港を許可
いただき、感謝します」

マーチン・ダコ스타。シンでも知っている名前だ。現代戦史で名
前を聞いたことがあった。ただ、如何にザフトが活躍し、地球軍が
卑劣であつたかを教え込むだけの授業で、ほとんどまともに聞いて
なんていなかつた。こんな時は、何かとミーアーな戦友の存在があ
りがたい。

「そ、それじゃあ、あなたが砂漠の虎！？」

敬礼したまま声を震わせる光景は　ルナマリアには悪いが
なんだかおかしい。

（砂漠の虎か……）

虎の模様にペイントされたヒルドルブを見た時に気づくべきだつ
たかもしれない。この人が4年もの間砂漠の地で戦い抜いたザフト
の英雄だった。

「確かに、そう呼ばれてはいる」

ルナマリアのようには感激できないで見ていると、ダコスタ大佐
は特に表情を変えることもなく答えた。どこかザラ大佐との出会い
を思い出す。どことなく、ファンのあしらい方に慣れているところ

とか特に。

また悪い癖がでているらしい。ザフトの正規兵とみるとまず食つてかかる癖は、なかなか抜けてくれない。

ただ、無理に反感を押さえ込む必要なんてなかつた。

「私ごときにその名前はふさわしくはない。砂漠の虎の名は、元々私の上官が持つ名前だつた。アンドリュー・バルトフェルド。この名前を着飾るにふさわしいのはあの方だけだ」

ダコスタ大佐が首を曲げた。つられて見ると、そこは壁 ゲリラのアジトらしく岩盤がむき出しだ で大きめの額に入つた写真があつた。何かの集合写真というには砕けていて、写真の中央で少し若いダコスタ大佐が大柄な男性に頭を強く撫でられている。一応形としては集合写真であるため、2人ともこちらを向いて顔がよく見える。大柄な男性は眩しいくらいに笑つていて、ダコスタ大佐は迷惑そうでも嫌そうには見えない。指令の眼差しは、その大柄な男性に向かっていた。

アロハ・シャツを着て、笑うこの男性が、アンドリュー・バルトフェルド、砂漠の虎と呼ばれた男なのだろうか。

ダコスタ大佐の声は何か楽しいことでも思い出しているかのように少し明るくて、同時にその横顔は寂しげにも見えた。

「映画でも、その勇猛果敢ぶりは伝え聞いてます。アスランさんに戦う意味を授けた人だって」

「自由と正義の名の下には見ていない。何せ、私が出でていないので

ね

何故か、ルナマリアのこの言葉に、ダコスタ指令は急に態度を落ち着かせたような気がする。ルナマリアもそのことに気づいたのか、ザラ大佐のように熱狂的にはならない。

変な感じに沈んでしまった雰囲気の解消法なんて知らない。何か目を止めておくものが欲しかったこと。何よりも気になることがあって、写真に目を戻した。

ダコスタ大佐の反対側。砂漠の虎と呼ばれた男の腕にしがみついている褐色の肌をした少女がいた。見ただけで、優しさとか暖かさ、そんなものを感じさせてくれるくらい明るい笑い方をしている。

そして、ヒメノカリスと同じ顔をしていた。

「すいません、ダコスタ指令。あのバルトフェルド指令の左にいる女性は？」

「彼女はカルミア・キロ。バクウの開発者で、バルトフェルド指令のよきパートナーだつた。ヒルドルブを開発するための基礎設計は、ほとんど彼女が残したものだ。もっとも、当時は十分な強度のフレームが存在せず、可変機構を有する陸戦機は構想の段階で止まってしまったが」

やはりダコスタ大佐は昔話をすると楽しそうで寂しそうにも見える。きっと、この人ももういないのだろう。

敬礼の手はすでに下ろしている。指さすのは失礼ではないだろか。そんな躊躇も混ざりあって、シンの指は不格好な形になつて写真の

方を向いた。

「Jの人も、ラクス議員の妹さん、何でしちゃうか？」

ダコスタ大佐の反応は鈍い代わりに、ザラ大佐は行きおいよく振り向いてまで反応を見せた。砂漠の虎と呼ばれる指令は、シンのことをフェイス直属のエリート・パイロットとも勘違いしたのだろう。

「レイが、話したのか？」

「いえ、それもありますけど、俺、ヒメノカリスにも会つたことがありますから」

何で雑兵がヴァーリのことを知っているのか。きっとザラ大佐の頭の中ではそんなことが巡っているのだろう。目を見開いたまま数秒してから、ザラ大佐は息を吹くことをきっかけとするように落ち着きを取り戻そうと試みた。

「そりゃ……。レイからどこまで聞かされたかは知らないが、ヴァーリのことはどうできる限り公表しないでもらいたい。約束できるか？」

「わかりました……」

別に新聞記者の知り合いなんていない。誰かに話すつもりなんてなかつた。了解の意志を示そうとすると体が勝手に浅い敬礼をしてしまったのは、シンにとって軍隊生活が短くないことを意味するのだろうか。

シン・アスカ。アスランにとって、この少年は不思議な少年と言えた。ただのコーディネーターであり、何ら特別な存在ではない。そうであるにも関わらず、あまりに世界の核心に近い。

(シンがあの計画の何らかの障害にならなければいいが……)

「君たちはエインセル・ハンターを追っているそうだが」

ダコスタ指令に声をかけられたことで思考を中断する。作戦会議を行うために移った指令室 ここもむき出しの岩盤を壁にしている にて、アスランはダコスタ指令と立つたまま向き合っている。

「はい。次の目標は南米ジャブローです」

「要害だな。出来得ることなら、侵攻を遅らせたいところだ」

臆病な訳ではない。それどころか、臆病と謗られる怖さをはねのける勇猛さを、この指令は兼ね備えている。その顔は単純な攻略上の難点に考えを巡らせていくようである。

アスランがダコスタ指令と出会ったのは4年も前、大西洋連邦軍のアーク・エンジェルを追尾している時のことだった。その時から、ダコスタ指令は代理とはいえ、怜俐な指揮官であった。

(アフリカ共同体の事実上の協力を得られるからと言つて、この4年間、部下を束ねることは並大抵のことではないはず)

「エインセル・ハンターの抹殺はプラント国民全員の悲願です。ジヤブローでは大規模戦闘が予測されます。そのため、ダコスタ指

令には「ご助力願いたいのです」

「どれほど出せるかはわからないが、前向きに検討しよう」

「感謝します」

敬礼しておく。少々安易な使い方だが、軍隊では敬意や了承を示すために敬礼は便利だと言えた。

依頼しておいて矛盾しているとも言えるが、8年近くもの間、前線にさらされ続けた南アフリカ統一機構の練度は決して低くはない。そんな敵を相手しながら援軍の要請に応じるのは、やせ我慢ではなく自信の現れだろう。

「ところで、インパルスの補給は不要か？ 聞けば、部隊は全滅の憂き日を見たと聞いている」

「ええ、ボーカーで1人、ダーダネルス海峡では2人の部下を失いました。ただ、ご心配には及びません。こつ言えば聞こえは悪いのですが、補給で代わりを配備してもらう予定ですので」

今頃、カーペンタリア基地を発したボズゴロフ級潜水艦が喜望峰を経由してモビル・スーツをはじめとする補給物資を運んでいる最中である。その中にはZGMF-X56Sインパルスガンダムとそのパイロットも含まれている。

ことインパルスガンダムにおいては、連携に不安を感じる必要は一切ない。戦力に不安を覚えてはいない。

ダコスタ指令は、何故か瞬きを繰り返す。何かに驚いているよう

ではある。

「君は変わったな。以前のような迷いがない。だが、迷っていた瞳の方が、輝いて見えたものだ」

「のことには、つい笑わざるを得なかつた。

4年前、アスランはこのアフリカの地でかけがえのない友を失い、敵からは多くのことを学んだ。

二「ル・アマルフィ。仲間を守るために命を落とした友は、戦争は人々からかけがえのないものを奪つていくことを教えてくれた。

モーガン・シユバリエ。敵でありながらアスランに戦うことの意味とその覚悟を伝えてくれた人だつた。

そのどちらも、戦争の中で失われてしまつた。

笑顔にはどうしも乾いたものが含まれてしまつ。

「私もいつまでも子どもではござれません、ダコスタ指令」

シンとルナ・マリアは格納庫に残された。集合写真を2人並んで眺めていた。カルミア・キロと呼ばれた女性は、見れば見るほどヒメノカリスとよく似ている。

レイ・ザ・バレル隊長に教えられたヴァーリという存在が、より実感として意識される。

「ねえ、シン、ヴァーリって何なの？」

まだラクス・クライン議員からヒメノカリスしか妹はいないと言われたことを信じているルナマリアの言つてることは正直、今更だ。

「俺も詳しく述べ知らないけど、ラクス議員で、26人姉妹なんだつてさ。それぞれ別々の遺伝子操作をして、それぞれ専門の分野を変えた存在らしい」

「ふうん」

思つていたよりもあつさりとルナマリアは写真に視線を戻した。ついシンの方がルナマリアのことを見てしまつ。

「気にならないのか？」

「そりや、26人姉妹だなんて言つてもらえなかつたけれど、いきなり言われても納得できなかつたと思つから、別にラクス様のことは……」

何もおかしなところのない普通の受け答えだからこそ、違和感が感じられた。

「やつじやなくて……その、親の都合で遺伝子を組み替えるなんてことがた……」

これは感覚の問題で、どう説明していいかわからない。つい言葉に勢いを乗せてみたものの、そんなんで続くはずなんてなくて尻す

ぼみもいいところになつた。

ルナマリアは、珍しく考え込んだような仕草をした。

「ああ、私は確かにコーディネーターには産んでもらえなかつたし、差別も経験したけど、それだからってコーディネーターのことを恨んだりなんて……」

「違うだろ……！」

つい体を動かして手振りまで大きくなる。

シンが感じてもらいたいのは、親の意志や都合で子どもの体を勝手に作り替えることへの違和感そのものだつた。そんな、地球では当たり前のことが伝わらない。プラントでは遺伝子操作への抵抗感が薄いと聞いてはいたのに。

「どうしちゃったのよ、シン？」

(聞きたいのは俺の方だ……)

長年肩を並べて戦つてきた友人の意外な一面を見たような気がした。ただ、これが初めてじゃない。ザラ大佐を援護した時のルナマリアだつてシンにとつて思いがけない友人の顔を見た瞬間だつた。

ルナマリアのことを、シンは知らないでいる。

「……俺たちつて、軍学校以来の付き合いだけじゃなくてよくよく考えてみると、戦争のことしか話したことなかつたな」

「そう言えればそうね。でも、まさかシンがファッショングの話なんてしたいわけじゃないんでしょ」

「冗談混じりの明るい調子。こんなルナマリアは、出会った時もまだ。

「そうだな。結局、戦争のことだけだな、俺たちって。……ルナはこの戦争をどう思つ?」

集合写真。恐らくはその大半が戦争で命を落としている人々の前で、シンは訪ねた。格納庫の喧噪が妙に大きくやかましく聞こえる。

「確かに、ナチュラルの人にとって、コーディネーターは怖いと思うよ。もしも宇宙に閉め出さなかつたとしたら、今頃地球じゃ優秀な人はコーディネーターばかりだつたと思うし。やっぱり、能力ある人への怖さって、わかるよ」

「コーディネーターはこの戦争を語る時、いつも持つ者と持たざる者の問題にしようとする。ナチュラルであるルナマリアも、そんなことはシンが横柄だと貶したコーディネーターと何も変わらない。

(俺は、ルナマリアに勝手な期待を押しつけてただけなのかもな)

同じ外人部隊に送り込まれた、同じ境遇を共有できる戦友として自分のこと理解してくれている存在だと。レイ隊長の言葉は、色々なところでシンのものの見方とえてくれた気がする。

「でも、地球上にだつてコーディネーターはいるんだ」

「シンみたいに結局地球にはいられないって、逃げてきてもいいよ」

「じゃあ、ジエネシスの照射は、やつぱり正しいことだと思つか？」

ルナ・マリアは大きくため息をついた。でも、それは見せつけていふとか皮肉とかではなくて、ルナ・マリアのちょっとオーバーなリアクションだといふことくらいならわかる。

「前も言つたけど、ああでもしなかつたら、私たち何されてたかわからぬいじゃない」

だからジエネシスの使用は正しい。それで地球上の全生命を死滅させることになったとしても。そう、プラントの人はずぐに口にする。ただほんの少し、地球の側から考えてもらいたい。

「なあ、ルナ。ルナには、地球上に住むナチュラルの知り合いつているか？」

「軍人になるまでプラントから出たこともなかつたわ」

「じゃあ、地球人が怖いつて、悪い奴らだつて、どうしてわかるんだ？」

田を大きくしてわからない、そんな顔をするルナ・マリア。でも、本当に答えがわからないからじやなくて、どうしてそんなこと聞かれるのかがわからないだけだ。返事はすぐにあった。

「みんな言つてるじゃない。それに、映画もあるし……」

「それって、自分で見たり感じたりしたことじやなくて、誰かが言

つていたことを、自分にとつて都合のこじりだけ都合よく信じ込んてるだけじゃないのか？」

つい被せるみづに言葉を返すと、ルナマリアは不機嫌そうに目を細めた。感情表現を隠さないとこじりも、シンの見てきたルナマリアだ。

「……何が言いたいのよ？」

「地球のナチュラルがみんな悪い奴で、プラントを滅ぼしたがってるなんて情報、結局ザフトやプラントの政府筋、地球と戦ったがってる人が流したものだろ。ルナはそんな情報をまるで自分の経験のように鵜呑みにして流されてるだけじゃないかな」

「何よ、地球軍が核まで使ってプラントを攻めようとしたのは本當でしょ！ 正当防衛よ！」

こんな風に怒りっぽいところもルナマリアだ。それに、怒りを深刻にしないですぐに吐き出してしまえるところもあって、ルナマリアは人間関係をこじらせたりなんてしない。そんなところも、シンは見てきた。

「でも、ザフトはジェネシスを使った。俺だって核がいいとは思わないけど、核以外ならどんな兵器を使ってもいいって訳じゃないだろ。それに、血のバレンタインを引き起こしたのは一部の人間だけど、じゃあなんで、プラントは地球全土を標的にしてニコートロン・ジャマーを投下したと思う？」

「でも、あれって大した被害は出なかつたって……」

たとえ怒っていても相手の話を聞くことができる。こんなところは、シンはないいところだと思つ。

ルナマリアは感情的でも情緒豊かで、どんな人とでも話ができる。軍学校で孤立していたシンに声をかけてきたのはルナマリアだけだつたし、よく正規兵とトラブルを起こすシンと正規兵の間に割つて入つてくれたのもルナマリアだつた。

ただほんの少しだけ、相手の立場に立つて物事を考えるという視点に欠けている。レイ隊長に何度も説教されたシンのようだ。

「停電、エネルギー不足、食料難に犯罪率の増加、難民の発生や航空機事故。全部合わせれば少なくとも10億の人人が死んだって言われてる」

「10億つて……！？」

ルナマリアは、素直に驚いてくれた。

「プラントじゃ、驚くくらいそのことが報道されてない。でも、考えてみればわかるだろ。そんな効果も意味もないものを投下するはずなんてないってことくらい」

シンはオープ　この国は驚くほど影響が少なかつた　にいて
その惨状を知らない。それでも、一度だけ、ニコートロン・ジャマーが投下された日の地球の衛星写真を見たことがあった。普通なら街の明かりが散りばめられているはずの大地が、何も見えないくらい真つ暗だった。

黒い地球は、とても恐ろしいものに見えた。

「プラントの『一テイナー』にとつて、地球はユニウス・セブンに核を撃ち込んだ悪い奴かもしれない。でも地球の人にとってプラントは普通の生活を一瞬の内に奪い去つた悪魔なんだ。ジョン尼斯発射は仕方がない。それなら、地球の人も同じじやないかな？ 今度は何を落とされるんだろう。今度は何億の人人が殺されるんだろう。たとえ核を使ってでもプラントを滅ぼさなきゃいけない。そう考えたんじやないかな」

「でも、シンの言つてることだつて……！」

「そう、結局俺の意見を補強してくれる都合のいい事実を並べてるだけだ。だからルナ、人は自分の目で見て、自分の頭で考えなきゃいけないんだ」

ルナマリアは反論したいことや面白くないこともあるはずなのにシンの言葉を聞いてくれる。こんなこと、シンにはできそうにないことなのに。

「ルナ……、人には誰だつてそれぞれの立場があるんだ。ルナがプラントやそこに残してきた家族のために戦うように、ルナが悪魔のように言つてる地球のナチュラルだつて家族を殺されれば悲しいし、憎しみもわくんだ。それなのに、ただ自分たちを攻撃してくるからつて、それを悪と決めつけて自分たちだけが正義だつて思いこむことは、やめてもらいたいんだ」

「そんな、誰かを悪役にしなきゃ名乗れない正義なんてあまりに悲しいから。

「正義の反対は悪じやなくて、他の正義なんだからさ」

シンもルナ・マリアと何も変わらない。以前、フィンブルが地球に落ちようとしている時に「冗談半分で破碎作業に参加しよう」としていだ仲間にシンは怒る自分を止められなかつたことがある。今ではそれは、気分を沈めるくらい苦い味をもつ思い出に変わつてゐる。

「ヴィーノ・デュフレ、ヨウラン・ケント。あの2人がフィンブル落着を茶化してた時、俺は怒つた。地球の大事を笑い事にするなつてさ。でも、それはあくまでも俺が正義でいたかつたからにすぎないんぢやないかつて、この頃思うんだ。あの2人だつて落とせばいいつて本氣で考えてた訳じやないとと思う。ただ、俺とは立場が違つて、だから少し考え方や取り組み方がずれてただけなんだ」

人にはそれぞれ立場があつて、自分の立場だけを尊重してしまうことは控えないといけない。そんなことは、全部レイ隊長からの受け売りだ。

「まあ、やつぱり軽率な奴だつたとは思つてるんだけどな」

苦いものを振り払うように少し笑つて見せた。すると、なんだか、ルナ・マリアは不思議そうな顔をしてゐる。

「シン、何か変わつたね。何だか、考え方が大人っぽくなつた?」

「そうかな?」

「そうよ。……何があつたのか知らないけど、わかつた。私も少しは地球のこと、学んでみようと思つ」

そうしてくれるとありがたい。少しでも相手の立場を理解してみ

ようという気持ちさえあつたなら、相手を一方的に否定しようなんてことにはならないだろうから。

(ルナは、やっぱりルナだよな)

基本的に明るくて、人のことを考えてあげられる人だ。シンはそれを知りながら、ただ自分とは意見が違うからと勝手に溝を開けようとしていた。何年も地球との戦争にさらされた国民のことを考えようともしないで。

結局、シンはレイ隊長にもまだまだなれそうにない。

何の気なしに写真を見ると、そこには色々な人が笑顔で写っている。思い出すと、ほんの4年前、シンはただの地球の少年で、ザフト軍のことをまるで異星人の軍隊みたいに考えていた。こんな風に、自分たちと同じように笑う人たちだなんてこと考えもしないで。

ふいに、自分たちに近づいてくる足音があることに気づいた。ザラ大佐だろうか。そんな氣で振り向くと、そこにはレイ隊長の姿があつた。いつもみたいに冷静な顔で、それでも少しつになく真剣な顔をしているようにも見える。

「シン、ルナマリア、そろそろジャブロー侵攻について話しておく。ザフトも今回は本気だ。エインセル・ハンターがジャブローを出てしまえば大西洋連邦という巣穴に逃げ込まれる。そうすれば殺害は事実上不可能だ。これが当面最後のチャンスということだ。相手もそれだけ必死に守ろうとすることが考えられる。ボーパールのような工場と一緒にするな」

ルナマリアと揃つて敬礼する。大事の前の敬礼は、すると身が引

き締まる思いがした。南米ジャブロー。この世界の人なら一度は耳にしたことのある名前を心の中で繰り返すと、これから戦いの激しさを予感させてくれる。

「ここに、母の仇が、世界が魔王と呼んで称え、憎む男がいる。

（Hインセル・ハンター。あなたは一体どんな思いで戦いを続けるんだ……？）

戦場という地名はありません。迷わせるのは森でも、森に入ると決めるのはあなた方です。わざわざありもしない場所を作り出して、危険に進んで足を踏み入れる。とても賢明とは言えません、そんなこと。でも、人はそんなことをずっと続けてきました。

戦争は必ず人が起こすものです。

森は人に何の悪意も抱いてなんかいません。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
nEi n b r e c h e r s~

「名無しの森」

ジャブロー。人はいつも人に脅かされ、人に惑わされてきました。

第27話「名無しの森」

「私が議長の座についてすでに2年がすぎようとしている。しかし、君たちに約束した平穏な未来をいまだもつて実現できていないことは慚愧に耐えない思いだ」「

フロアに集められたザフトの兵士たちは整列したまま、体を微動ださることはない。1人ひとりがかすかな物音をたてただけでも十分な騒音として聞こえるほどの人数が集まりながら、音はすべてギルバート・デュランダル議長に支配されている。視線はすべて演説台の議長へと注がれている。

作戦を前に議長自ら乗り込んだ戦艦にて、その演説は続けられる。

「そんな私を見捨てるところなく寄り添い、そして力を尽くしてくれる諸君等には感謝しつくすことができない。ありがと」「

軍人ではない議長が見真似で敬礼を形作る。すると居並ぶザフトの兵士たちは一斉に敬礼を返した。

「これを最後にしよう。決然とした憎しみ持つて人の名を語らなければならぬ」とも、悲しみの涙が滂沱に流れなければならぬこと

その言葉は次第に力を増していく。その熱意が兵たちに伝わるかのように部屋は熱気を帯び、戦いが近いことを予感させていく。議長のお言葉は、絶えず人の気を高ぶらせにはいられない。

その様を、デュランダル議長は敬礼の姿勢を維持したまま眺める。

「プラント最高評議会議長としてではなく、未来を憂う1人の人として、戦うことさえできぬいちっぽけな男として、私は全身全靈の敬意をもって君たちを送り出したい！」

議長が力強く敬礼の手を払いのけると、その腕は高らかに掲げられた。

「勝利を我らに！」

勝利への誓い、勝利への祈りは、議長から兵へ、兵から兵へ、人から人へと伝播していく。兵士たちはすでに同調することをやめいた。上官も部下もなく、我先にと手を掲げ、勝利への誓いと祈りを捧げ続ける。

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！――」

膨大な水量の泥水の中、デュアル・センサーの光が不鮮明な視界の奥をうかがう。水底の軟泥を踏みつけると、モビル・スーツの足が深く埋まる、代わりに吹き出した泥がさらに視界を悪くする。ただでさえ夜間で薄暗い。有視界戦闘を目的に開発されたモビル・スーツ 暗視だつてできる の視界がとともに機能していない状況を、シン・アスカは濁つた水しか見えないモニターを眺めて理解していた。

戦闘時は瞬きさえできずに見てているはずのモニターのあまりの様子に、シンは気さえ抜けた様子で通信機から伝わるレイ・ザ・バレル隊長の声を聞いていた。

「アマゾン川は、今でこそ多少水量は減ったが、かつては長さ約6516km、川幅は河口で100kmもの大河だ。その大部分が密林に覆われ、水量、流域面積ともに世界最大を誇る。そして雨期になれば川幅は何倍にも広がることになる」

普段から物知りな印象のレイ隊長だが、今回はちょっと説明くさい。もしかすると本でも片手に話しているかも知れない。今、前線にはいない。さすがの隊長もコクピット以外の場所では気も緩むかもしれないから。何でも、隊長のZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルは全身がミノフスキーラフトに覆われ、目立つため今回の任務には向いていないのだそうだ。同じ理由でアスラン・ザラ大佐もまだ出撃はしていない。

「ジャブローを攻略するためにはまず位置を特定しなければならぬ」

「でも、そんな6000kmだなんて……」

6000kmどころ、泥水の中では数m先の視界さえ疑わしい。ZGMF-X17Sインパルスガンダムが歩く度、どんどん視界が悪くなっているような気さえする。すぐ後ろを歩いているはずのルナマリア機の様子さえ見えていないほどだ。

シンたちの任務は偵察だ。水量を増した川に身を隠しながら敵基地の位置を探つてはいる。何でも、アマゾン川は水位の変化が激しい

ことや、水流の逆流現象で知られるなど機雷を仕掛けにくい場所であるらしい。実際、シンはただ泥まみれの光景を眺め続けることができた。

「行きあたりばつたりの戦いを仕掛けるつもりはない。諜報部の調査で、範囲は100kmほどの範囲に絞られている。だが、降下部隊が効率よく攻撃に加わるためには、位置の特定が不可欠だ。同時に位置を特定するのは直前が望ましい」

レイ隊長の言葉にも、どうしてだか真剣とか、本気になれない。この泥川の奥にエインセル・ハンターがいる。母の仇がいる。そんな実感がなかなか浮かんでくれないせいかもしねり。

（母さんの仇か……）

「どうしてですか？」

ちょっとタイミングを逃しただろうか。考えことをしている間だけ返事が遅ってしまった。レイ隊長の返事はない。ただ、それは機嫌を損ねたからではなくて、ルナマリアが先に答えたからだ。

「サイクロプスよ。4年前、アラスカじゃ、この兵器のせいでザフトはエインセル・ハンターに敵ごと一緒に吹き飛ばされたんだから

アラスカでの戦いはシンでもよく知っている。例の映画では印象的な場面で、名シーンだとルナマリアによく聞かされていたからだ。エインセル・ハンター、当時のブルー・コスモスの代表は軍上層部と結託し、自分の政策に従わない勢力を圧にしてザフト地上軍の主力を味方ごと焼き払つたらしい。エインセル・ハンター　映画の中ではムルタ・アズラエルとして表現されている　の手段を選ば

ない卑劣さがことさら強調されていたが、このことが原因でブルー・コスモス代表の座から降りることになったとも、ルナマリアとは別の人から聞いたことがあった。

今回もザフトは降下部隊まで含め、大部隊での戦闘を予定している。いつもは映画フリークのルナマリアの言葉も、今回だけはシンに緊張感を与えた。

「そうだ。できる限り無関心を装いたい。サイクロプスかどうかはわからないが、この規模の基地だ。何が飛び出しても不思議ではない。もつとも、調査では敵が基地施設を他に移しているなどの情報はない。エインセル・ハンターが移動したという情報もだ。サイクロプスの使用はないというのが上層部の結論だ」

隊長のこの言葉は、不思議な安心感を与えてくれた。どうしてだか、エインセル・ハンターは自棄なんて起こさない。彼がここにいるならサイクロプスに巻き込まれる心配なんてない、そう考えた。

（ヒメノカリスのことから、勝手なエインセル・ハンターを作り上げてんのかな、俺……？）

シンは、まだエインセル・ハンターに会つたことえない。

「シン、ルナマリア、聞いているとは思うが、この先駆隊に小隊として参加してもらづ。お前たちの他にも9小隊が調査には参加することになる。連携は密にな」

「了解です」

モニターには映し出されていないのに、つい敬礼しようと手が操

縦桿から離れてしまった。インパルスに不自然な動きが発生して、余計な泥がさらに水質を濁らせる。

「ちょっと、シン。何してるのよ？」

ルナ・マリアから怒られた。何も見えないのにさらに見えなくされたことにご立腹らしい。ただ、その気持ちはわかる。いることはわかつているのにいつまでも姿が見えてこない。今のシンとエインセル・ハンターの位置関係は、4年も前から何にも変わっていないようと思えた。

偵察開始を前にアスラン・ザラは新たに部隊に加わった部下を迎えた。ラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの格納庫には新たに配属されたインパルスガンダムが2機。その足下で2人の若者が敬礼している。

どちらもまだ若く、赤服を身につけている。

インパルスガンダムのパイロットは、比較的平均年齢の低い兵士が選ばれることが多い。その事情を知るアスランは特に彼らの若さを気にすることはなかった。

ゆっくりとした手つきで敬礼し、新たな部下を迎えた。

「君たちには期待している。よろしく頼む」

名前はエミリオ・プレデリック、ダナ・スニップ。この2人は、好対照であった。エミリオは背が低く、まだあどけなさの残る褐色

の顔からは決意と熱意が感じ取れる。対してダナは背が高く、その表情にしまりがない。

(ずいぶん違う2人が揃つたな)

そんな感想を抱きながら敬礼の手を下ろす。

「今回の任務は聞いているとは思うが、ジャブローの位置特定のための強行偵察だ。注意してもらいたいのは……」

「そんなの聞く必要ありませんよ。ナチュラルどもは皆殺し。鼻かんでぐずかごにポイだ。でしょ、ザラ隊長」

ダナがその印象通り軽薄な様子でアスランの声を遮ると、ヒミコオまでアスランに作戦内容を語ることを許さなかつた。

「彼の言つとおりです。我ら優良種たるコーティネーターはナチュラルなど問題にしてはなりません。露を払つよう片づけ、それを証明しなければならないのです」

別にこの2人が不真面目な軍人ということではない。特にエミリオは足を開き、手を後ろに、休めの姿勢をしたまま喉の奥からはつきりと声を出した。

何のことはない。この2人は10代後半。血のバレンタイン事件のせいで反ナチュラル教育一辺倒に変わつた時代に成長した第1世代とも言える世代である。ギルバート・デュランダルの支持を支えているのもこんな若者世代であり、彼らくらいの年頃なら、極右に傾倒していても不思議はない。

特に、デュランダル議長の就任後、そのような傾向は一気に顕在化したのだから。

気にする必要などない。部下がどんな思想を持つてようと、インパルスガンダムを動かすことができるのならばそれで。

「そうか、だが、油断だけはするな。どんなネズミにも牙もあれば爪もある」

2人の若者ははつきりとした声で応え、力強く敬礼した。

「隊長も言つてたけど、アマゾンです」ところね。地球の森はすごいって聞いてたけど、こんなところばかりなの？」

ルナマリアの声は、どこか聞こえにくい。隊長とは通信が傍受されるのことを恐れてすでに繋いでいない。ルナマリアとは短距離通信を繋いでいて、敵に聞かれる危険性は小さい。それでもそろそろ予定されている範囲に近いと理解はしているのだろう。ルナマリアが声を潜めているのは、きっと大きな声を出して聞かれてしまうことを警戒してのことだ。

別に声の大きさが通信が傍受される危険性と比例関係にあるはずはないのだが。

「まさか。ここは地球でも最大規模の密林だ。発生する酸素の何割かはここで作られてるなんて聞いたことがある」

時折、水面からメイン・カメラ 額のカメラ を出して周囲

の様子をうかがう。周囲は木が密集して生えていて、何か人工物があるようには見えない。あまり長く頭を出していては目立つ。元々地上での運用をメインに設計されているわけではないインパルスには潜水艦の潜望鏡のような便利な機能はついていない。周囲の様子を確認して、インパルスを再び水中に完全に沈める。

モニターにはルナマリアがこちらを見ていた。声にはしなくとも、どう、と聞いているような瞳で。首を振つて何もないと答えると、ルナマリアは残念そうにため息をついた。

また、少し歩いて次の地点を探らなければならない。そう考えた矢先だった。

音がした。明らかなモビル・スーツの駆動音が水中に響く。敵か味方か。ルナマリアもシンも瞬きを忘れて音の方向を観察する。いつでも背中の対艦刀を抜けるように準備している。水中では水蒸気爆発の危険性があるためビームは使用できないが、この大剣はビーム発振部分の反対側は実体剣としても使用できる。水中戦は、やろうと思つてできなくはない。

敵。そうだとすると、こんな薄暗く、泥だらけの水中をわざわざ移動するだろうか。ただ、味方だと判断するには、偵察任務で駆動音を出すことに無神経すぎる気がする。

相手はこちらに気づいているのだろうか。泥水の向こうにはモビル・スーツ2機分の金属反応。後少し接近すれば、短距離通信の範囲内に入る。そうすれば、識別信号を確認できるはずだ。

外の声を直接聞いているわけではないけれど、集音マイクが拾つた音を処理してコクピット内に伝えているため、モビル・スーツが

近づいてくる音の大きさの違いはわかる。

そして、識別信号は、味方であることを示していた。

思っていたよりも緊張していたらしい。息を吹くと肩から力が抜けた。瞬きを我慢していた目が少し乾燥している。

「大丈夫、味方だ」

緊張はルナ・マリアも同じだったようだ。普段からリアクションの大きい同僚は大げさに体を伸ばした。

「こちらバル隊、シン・アスカ曹長」

レイ隊長が言っていた残り9つの部隊の一つだろう。通信を繋ぐと、モニターには赤いノーマル・スーツを身につけた少年の顔が写る。ずいぶんむつすりとした顔で、何となく、まじめだけど融通のきかない頑固さがあるように思えた。

「ザラ隊に新しく配属されたエミリオ・フレデリック曹長だ」

敬礼して、言葉の一つ一つをはつきりと言つエミリオ曹長は、シンの感じた印象通りの人なのようだ。

続いて「るのはもう1機のインパルスのパイロットだらう。

「俺はダナ・スニップ。よろしくな」

何だか、軽いとか軽薄とか、そんな人のように思える。階級を名乗らなかつたところとか特に。

「この2人がザラ大佐の新しい部下ということになる。

「私はルナマリア・ホーク。階級は軍曹です」

（大佐の部下が曹長つていうのも何だかなあ……）

ザフトにもベテラン・パイロットはいるはずなのに、妙な組み合
わせのように思えた。ルナマリアが挨拶をしている間、ついそんな
ことを考えた。

その内、泥水の向こうにわずかながらインパルス2機の姿が見え
るようになっていた。ロックオン・カーソルが2つモニター上に枠
を作つて、その位置を知らせてくれている。インパルスは2機とも
フォース・シルエットを装備した機動力を重視した汎用装備だ。

まだジャブロー基地を発見したという報告はない。この2人もま
だ見つけてはいないのだろう。まさかピクニック気分で歩きながら
話す訳にもいかない。

シンは特に気にすることもなく、インパルスを歩かせ、泥を舞い
上がらせる。ルナマリアがついてくる様子を確認していると、何故
かザラ隊の2機も同じルートを歩こうとしている。

（支流が枝分かれしてるから、分かれた方が見つけやすいのに……）

すると、またモニターにエミリオの顔が写し出された。

「聞けば、アブディエルにオナラブル・コーディネーターだそうだ
が」

つい、プラント本国での扱いを思い出した。ユニウス・セブン世代はすぐにアブディエルのことを、自分たちが人類の未来をかけて戦っている間ナチュラルたちに協力していた卑怯者だと言い出す。

昔はとにかく怒りばかりがわいて、今は同情したいような気分にさせられる。自分や自分に味方してくれる人の間でしか通用しない感覚でしか物事を判断できないなんて。そんな自分の境遇に気づくことさえできないことが一層エミリオたち哀れなーであるように思わせた。

そんなシンの沈んだ顔を、エミリオは同情ではなくて不安と勘違いしたらしい。

「心配しなくてもいい。優れた存在であるコーディネーターは寛大だ。自らの過ちに気づき、道を正そうとする者を無碍にはしない」

結局、自分たちの基準だけが正しくて、自分たちに味方する人だけが正しい、そう言つてはいるでしかない。自分に都合のいい世界だけ信じて、他にも世界があることから目をそらす。こんな人たちを、プラントでは大勢見てきた。

「もう固くなるなよ。一緒にエインセル・ハンターをぶち殺そうぜってことなんだからよ」

モニターに顔を映したダナ 階級はわからない に、そうですね、そんな曖昧な返事をしておく。もう怒りはわかんない。それでも、彼らの狭い世界を開く術なんて、今のシンはない。別にプラントが間違っていると認めろとはいわない。ただ、ほんの少し自分たちとは違う環境に生きている人もいると感じてもたえるだけでいい

いの」「。

そんなことを伝える手段はきっと誰にもないのだろう。やがて、プラントはゆっくつと狭い世界の中で沈んでいく。泥川の中をインパルスが自分の姿だけを見つめながら進んでいくようだ。その先に待ち受けるのは大きな戦いであるということは、妙に暗示しているようにも思える。

ルナマリアが報告してきたのは、ちょうどそんな時のことがだった。

「シン、ちょっとこっち来て。おかしな反応があるわ

泥の中手招きするインパルスの姿を追いつかずに足を動かす。盛り上がった水底を踏みつけると、メイン・カメラが水上へと突き出た。かすかな月明かりを増幅した映像がモニターに写し出された。

増水した川らしく、川辺には根本が水没した木々が並んで、その奥によじやく陸地が見える。そこに、斜め上に向けて銃身を伸ばす砲塔が森の中にぽつんと置かれていた。むき身の金属色で周りの木とは明らかに浮いている。

「のこと」「、シンが額について力をこめた。

「偽装されていない?」

ほんの少し迷彩模様を表面に描くだけでも視認性は大きく減少する。隠されているはずの基地設備がまるで隠されていない。

(ジャブローは、「……じゃないのか……?」)

しかし、それにしては少しインパルスが首を回しただけでいくつかの砲塔を見つけることができた。ダミーにしては数が多いし、手が込んでいる。だが、ここが基地の周囲であるとするなら、何故偽装されていないのだろ？

シンが出せない結論を、エミリオは即決した。

「何故我々コーディネーターが作られたのか、これで自明だな。旧人類がこれほどの失敗作ならば我々にはそれを越える責務がある。位置情報を送れ。ジャブローは、少々時間が合わないが、白日の下にさらされたと」

シンが止めていた暇なんてなかつた。エミリオ機　すぐ後にはダナ機も続いている　が川から飛び出すと、いきなりビームを発砲した。夜空にビームの輝きが瞬いて、砲台が派手な爆発を起こした。

「ねえ、シン。どうする？」

ルナマリアの声を聞きながら、とても口には出せないがバカは賢者100人分の働きをするという言葉を思い出す。賢者は一つの事態を10回分析し、10の対処法を考えてからどう行動すべきかを決めるが、バカははじめから1つしか見えておらず、対処を検討することもないからとにかく行動が早い。決断力と行動力において、賢者は愚者に勝てない。

この言葉は賢者への皮肉か、愚者への戒めかなんてわからない。ただ、対処を考えている時間なんてなかつた。

「俺たちも行くぞ！　隊長たちが来るまで時間を稼ぐんだ」

深い森の城はジェネラルが守る。エドモンド・デュクロ将軍。エインセル・ハンターのファンを自認するこの男の大きな特徴は、自らモビル・スーツに搭乗し、最前線へと出向くことである。これは愚かな行いと言わざるを得ない。指揮官の死は指揮系統の混乱を招き、それはすなわち部隊全体を危険にさらす行いであるからだ。

そう、彼は将軍である。よつて将軍と呼ばれている。誰もいないのだ。前線に自ら進んで立つ将軍など。何千の将校がしようと、戦場の將軍は彼しかいない。

エドモンド・デュクロだけが戦場において唯一将軍と呼ばれるのである。

絶対多数の中の唯一の例外。それを愚かと笑つことはたやすい。エドモンド・デュクロはヒロイズムに憑かれた愚者と笑えばよい。指揮系統を絶つことはたやすい。エドモンド・デュクロの首をあげれば達成される。

こんな馬鹿げたことをする将校は他にはいない。よつて、エドモンド・デュクロはジェネラルと呼ばれ、そしてそれが単に将校を指す言葉でありながら、エドモンド・デュクロを指す。

戦場に降り立つ、絶対唯一の例外として。

誰も知らないのだ。誰もしたことがないのだから。将軍が自ら進んで前線に現れることの意味と戦いを誰も経験したことがない。存分に笑うとい。これは愚行に他ならないと。存分に笑え。もはや

笑うこともできなくなるその前に。

エドモンド・デュクロはノーマル・スーツをえ身につけることが、その鍛えぬかれた体をコクピット・シートに固定していた。不適な笑みはどこか子どもじみてさえ、愉快気である。

頭上には月。夜は程良く更けた。そして、深い森には無数のザフトの影がある。

「レナ。観客はそろつたようだな」

モニターには、こぢらは黒いノーマル・スーツを身につけた女性が写る。まだ出撃前だというのに意氣軒昂。普段から鋭い眼差しに霸気が宿り、抜き放たれたナイフのような輝きを放つ。

レナ・イメリア。エドモンド・デュクロ腹心の部下にして、ファンтом・ペインに所属する中尉は、ジェネラルと同類である。騒ぎはないが、ショーン・タイムが待ち遠しくて仕方がない。

その瞬間を今や遅しと待ちかまえる。

「はー。『命令とあらば』いつでも幕を開けられます」

「では始めよつか」

侵略者である宇宙人から地球を守る5人の戦士たちの物語を。

夜の森に火煙が立ち昇る。破壊された砲台が燃え上がり、インパ

ルスガンダム、NGMF-1000ヅダで構成されるザフトの機影を照らし出す。抵抗らしい抵抗なく、ザフト偵察部隊は地上に露出していた砲台の始末を終えた。

砲塔の位置を地図上に分布すると、それは一つの円模様を形作る。その中に一体何があるのか。ザフトの兵士たちは吸い寄せられるように視線を集めた。

小高い丘。煙がスモークのように月明かりをにじませ、それの姿を縁取る。それは、月光に照らされステージのように高いところからザフトに披露されていた。

NGMF-1000ヅダ。本来濃い緑色で染められているはずの機体が5機、それぞれ異なった色に染められている。左から順に白、黄色、赤、桃色、青で全身を染めた色とりどりのヅダが並んでいる。その右手にはビーム・アックス、左手には手にそう形で装備されたシールド・ガトリングガン。その背には大型の水平翼と1対のキヤノン砲を備えたバック・パックが担がれている。I・W・S・P.と呼ばれる試験段階で開発が中断されたストライカーを、ザフトの機体であるはずのヅダが装備していた。

その装備の不自然さよりも何よりも、その機体の色がザフトを大いに戸惑わせた。原色を多用し、まるで隠れるつもりがない。何故、わざわざ田立つ高台に立つのか。

見上げたまま、ザフト軍各機は相手の出方をうかがっていた。

まもなく、5機のヅダの横隊は突然動き始める。赤いヅダを中心 に左右対称の動きで両端の白と青のヅダが綺麗に左右対称の動きを見せ、同時に同じ姿勢で止まった。すると、今度は内側の2機、黄

色と桃色のヅダが武器を振り上げた。そして、中央の赤いヅダがその手にあるビーム・アシックスを首の後ろで担ぐようポーズを決める。すると、5機の後ろから突然起きた爆発は、色とりどりの煙で背景を構成した。

赤いヅダが1歩前に出ると、残りの4機が同時にポーズを変える。その様は、まるで何かのショーでも見せられているかのような出来映えであった。

「さあかかるってこい、侵略者ども！ 地球の平和は我らが守る！」

野太く、闊達な印象を与える声。通信ではない。赤いヅダから直接マイクで響いている。

ザフトは直ちに理解した。自分たちは敵の行為を理解できないと。そして、赤いヅダ、奴こそがエドモンド・デュクロ。この基地の指揮官であるということを。

赤いヅダを初めとする5機のカラー・ヅダが、それは見事なタイミングと姿勢で丘から夜空へと躍り出た。

「鹵獲したヅダを改造したようだな。しかし、奴らは戦術というものを知らんのか？」

ヒリオは敵の様子を白けた眼差しで眺め、ダナは腹を抱えて笑つた。

「奴ら最高だな。じゃつ、お礼に皆殺しこじてやるか

すでに他の部隊のヅダ こちらはザフト は動き出している。

ルナマリアは動き出せない。相手の出方が予想外 おまけにあんな派手な登場の仕方で、これなら奇襲でもかけられた方がまだわかりやすいと嘆くほどだ。

「でも、私たちの任務はあくまでも威力偵察で……」

「嬢ちゃん、対空放火を漬しておかなきや、迷惑するのは降下部隊だぜ」

通信程度でダナは止められない。ダナ機は揚々とビームを乱射しながら白いヅダを追っていく。ビームが着弾する度爆発が巻き起こり、木々が燃えていく。

赤いヅダ、ジェネラルに狙いをつけたエミリオは森の木々に仕掛けられた装置に気がついた。モニターにはモビル・スーツと同じ高さの木 木々は様々な高さのものが密生している にあからさまに爆弾と主張している箱が括りつけられていた。

恐らく衝撃に感心して爆発するものだろう。確かにモビル・スーツを破壊できるほどの爆発力を有しているように見える。だが、そのため装置は大きく、たやすく検知することができた。

「こんな罠になどかかると思つていいのか、劣等人種め！」

赤いヅダへとライフルを放つ。ヅダは攻撃をかわすと、着地を妙に大きなアクションを見せて行つた。降り立つたという印象を与えるが、何とも無駄の多い動きだ。

5機のヅダを囮として罠にまでおびき寄せる作戦だったのだろう。だが、このような幼稚な作戦を、エミリオはたやすく看破した。

まだ始まつてさえいないということを知りもしないで。

わずか5機。炎くすぶる森の中をわずか5機の南アメリカ合衆国軍のヅダが動き回る。20機を超えるヅダとインパルスの部隊がそれを追う。

赤いヅダの中で、エドモンド・デュクロは笑う。豪快に笑う。

「さあ、ショーの始まりだ！」

それは、まず敵のヅダが放ったガトリングガンの弾丸が引き起こした。ビーム全盛の現在、実弾を使用するメリットは少ない。しかし、まったく存在しないわけではないと、シンは思い知らされた。

ビームとは異なり、連射の可能なガトリングガンは、攻撃力はともかく攻撃範囲はきわめて広い。闇と火とを振り払って降り落ちた鉛の弾丸は、木々をでたらめに引き裂く。そして、木々には、爆弾が設置されている。

モビル・スーツの装甲を貫けるかどうかという程度の弾丸の着弾点が次々に爆発した。

爆風はモビル・スーツの数倍の高さにまで達し、大気を通り抜けた衝撃が機体を揺らすほどだ。もしも間近で爆発に巻き込まれようものなら大破は免れない。単なるガトリングガンの攻撃が、この戦

場においては過剰なほどの攻撃力に化ける。

「張り巡らせた爆弾は、トラップではなく、攻撃力強化のためだと！」

通信をつないだままでいたため、エミリオ曹長の声が聞こえた。モニターに顔は映し出されていないが、その慌てふりは理解できる。

シンはインパルスの足を止めたいたい誘惑に駆られる。爆弾は発見は容易とは言え、確実に見つけられる保証はない。それなのに、敵はその位置を正確に把握していることだろう。近くにあればガトリングガンで狙われる。ここにはなくとも移動すれば爆弾に触れてしまうかもしれない。

見ると、友軍の多くがその足を鈍らせていた。

「ミノフスキーパーティー濃度が濃くて狙いがつけられないよ、シン！」

「こっちも同じだ爆風でセンサー やモニターがまともに機能しない！」

燃える木々に照らされたブラスト・シルエットを装備したインパルス ルナマリアの機体だけは、足をとめてあたりの様子をうかがうことで手いっぱいの様子だ。シンもそれは同じだ。戦闘開始直後、急にミノフスキーパーティーが上昇し、そしてこの熱と爆発の中では、情報が満足に把握できない。

「怯むなよ。敵はわずか5機だ！」

そう言つて前に飛び出したダナのインパルスが、突然爆発した爆風に倒される形で木々を巻き込みながら倒れた。通信からは痛みを訴える軽いうめきが聞こえているから、大丈夫ではあるようだ。

敵のカラフルなヅダはとにかく派手に動き回り、弾丸をばらまいている。確かに設置爆弾は厄介だが、それでもいつかは使いきる。そうすれば数では圧倒的に勝るザフトにいづれは押し切られる。敵は、そんな戦法をわざわざ選ぶのだろうか。

そう考へてゐる内に、味方のヅダが爆発した。爆弾が近くで爆発し、それに巻き込まれたらしい。ただ、そんな爆風にやられてしまふほど近い場所にいたどうか、あのヅダは。

しかし、事実として味方がやられたことを、ヒミツオ曹長が叫ぶ。

「1機やられた！ だが、ナチュラルは底なしの愚か者だな。一帯を焼け野原にしてしまえば、ジャブロー基地ここにありと宣伝しているようなものだ」

燃え上がる木々が不気味なほど明るくて、それでも夜は暗い。燃える木だけが見えるような不気味な光景は放射熱なんて関係なしに背筋を寒くしてくれる。別に、夜闇が怖いからじゃない。熱が放出されているところことが問題だった。

つい動きを鈍くしていったシンのインパルスのすぐ側だ。炎の熱に火薬が発火し、爆弾が攻撃もなしに突然爆発した。完全に隙をつかるように、シンは機体ごと飛ばされる。70tの機体が落ちたのは川の中だった。

叫ばないよう噛みしめていた歯が痛い。フェイスズシフト・アー

マーに守られたインパルスに損傷はないが、機体は浅い川底に寝かせられたようにならへて倒れているらしい。上体を起こそうとついた手が泥に滑りながらも、インパルスの顔は簡単に水面に突き出した。

揺らめく炎の隙間を闇が埋めて、弾薬と爆薬が空気を振るわせている。

たつた5機のヅダを相手に味方には徐々に損害が生じ始めている。たつたの5機だ。主力部隊ではない偵察部隊の半分にも満たない数が、どうしてそれほどまで戦えるのだろう。

シンが眺めている間、ヒミリオはまったく戦意を喪えさせていない。

「総員、赤いヅダを狙え！ 奴が指揮官だ！」

ヒミリオ機がビーム・サーベルを手に赤いヅダに切りかかる。ヅダ・レッドはビーム・アックスでそれを防ぐと、ビームが強烈な光を放ちながらミノフスキーパーツへと還元されていく。

ここは敵の根城。敵は用意周到待っていた。それでも、5機のヅダが20機ものモビル・スーツを相手にできる理由が、シンにはわからないでいた。

「この戦闘は何かがおかしい。

爆弾がどこにあるかわからない。そう警戒したヅダのパイロットは、自らの機体を丘の後ろに隠した。せいぜいモビル・スーツより

もわずか背が高い程度の丘だが、燃える炎から隠れるにはうつつつけである。その丘の影は火の光から切り取られたように夜が置かれていた。その闇の中に身を隠し、ヅダは敵の様子をつかがう。

爆弾の位置は。敵の動きは。援軍の到着までの時間はどれくらいか。

パイロットの脳裏を駆けめぐる様々な考えに呼応するように、ヅダのモノアイがせわしなく左右に揺れ動く。丘を背に、ビーム・ライフルをしつかりと握りしめて。

敵はどこにいる。前か、上か、右か左か。そのどこか。

そのまま後ろ、闇を分厚く塗りたくった丘の切り立つた壁に、ゴーグル・タイプのデュアル・センサーの輝きがあることを、ヅダは知らない。

後ろは壁だ。敵は前か横にいる。

そんな安全な壁から伸びた手が、ヅダの顔を掴み、腕を掴み、そして、鋭利なナイフを持つ別の手が首へと深々と刃を貫かせる。事切れかのように身動きを止めたヅダはなすがまま、闇の中へと引きずり込まれた。

夜の帳と闇だけを残して、後にはヅダの悲鳴さえ残らない。

ルナマリアは攻撃を余裕でかわしたはずだった。ヅダ・ブルーがバツク・バツクから放つたキヤノン砲の一撃を大きくかわし、背中

の大型ビーム・ライフルを脇の下で腰だめに構えよつとした。

その時、機体の損傷を告げる警報がコクピットに鳴り響いた。左腕のフレームが損傷している。肘関節を動かせないと告げていた。

確かにフェイズシフト・アーマーはフレームにまでは採用されていない。それでも、敵の攻撃は回避したはずだし、爆発の破片が食い込んだのだとしたら運が悪いにもほどがある。

「何なのよ、一体！」

ルナマリアの言葉は疑問というよりも苛立ちに近い。わずか5機のモビル・スーツがその数倍の相手を翻弄する不条理を、ザフトの誰もが受け入れられないでいた。

「シンは強くなつたです。まあ、そのことは、認めてやつてもいいです」

いつものシミコレーター訓練の途中で、翠星石は突然胸を張つてそんな話を始めた。小さな人形の少女の胸は薄い。胸を張られるとそんなことが強調される。そんなことを考えていると、いつの間にか翠星石が指を前に、シンのことを指さしていた。

「翠星石がほめてやつてるのに、その薄い反応はなんですか…？ シンの癖に生意気ですか…！」

「前、感謝したら怒りだしだろ…！」

あの時も、同じくインパルスの「クピット」の中で、同じよつに翠星石が怒りだして訓練が中断してしまった。ただ、今回は翠星石もそのことを気にしているらしい。指す指から力が抜けて、気まずそうに手をそらす。

ただ、感情の変化の激しい翠星石のことだ。すぐに持ち直すだろうと考えているそばから、いきなり態度が変わった。

「と、ともかく、シンは強くなつたです。さすがは翠星石が鍛えてやつただけのことはあるです!」

また胸をはる。本当にこの人形は忙しい。

「でも、エインセル・ハンターにはまだまだ勝てねえです。エインセル・ハンターは翠星石が惚れ惚れするくらいのいい男で、世界でも有数の金持ちです。おまけに物腰穏やかで紳士的。すぐにつかなるお子さまとは違うです。も一つ言つならあつちの方が断然女性にもてるです。人としても男としてもまだまだ遠く及んでねえです。それに……」

「そろそろいいんじゃないか?」

話はまだまだ続きそうだったので、声を割り込ませた。操縦席の背もたれに体を預け不機嫌そう 実際、いい気分ではない にしてやる。もちろん、翠星石はそんなこと気にしてない。

「でも、シンが勝つために一番足りてないのは、相手のことを見抜く力です」

いつもの柔らかい笑顔のままで。

「シンは、いつも自分を中心と考えてばかりです。それじゃ意識の加速もいつかは役に立たなくなるです。意識の加速は単なる攻撃予測ですから、相手の立場に立って考えられねえと意味なんてねえです」

「……相手の心を読むことか？」

翠星石は甘い、甘いと言ったそつに立てた指をメトロホームのようにはうに振る。

「自分の鏡に相手を写すように、相手の殺氣を読むです、考え方を知るです。そうすれば、シンはもっと強くなれるです。翠星石が保証するです」

その境地を、翠星石は明鏡止水と呼んだ。曇りのない鏡のように清らかに、澄んだ水のように静かに、戦場という狭隘な世界を写している。

ここは戦場。木々が燃え、視界は明と暗の両極端に分断される。すぐ側に川があることから抜かるんだ土壤で覆われていることが多い。敵は5機。派手な色と派手なパフォーマンスで戦闘を繰り広げている。

そして、シンのインパルスは下半身を水に浸したまま、戦場を眺めている。

「考える。敵の目的？　俺たちの撃墜。それなら5機だけじゃなく

て、もつと多くのモビル・スーツを投入すればいい。それができない。いや、レイ隊長は施設を移してないって言つてた。できないじやなくてしない……」

ジャブローの基地規模なら常時50機程度の機体を所有していても不思議はない。エインセル・ハンターがいるなら防衛力が増員されている方が自然だ。

ではなぜ5機だけ。どうしてもつとモビル・スーツを出さない。温存しているから。ザフトを見くびっているから。戦力が元からないから。そのどれもがしつくりとこない。

いきなりインパルスの近くの水面が爆発した。ビームの流れ弾が着弾したのだ。生じた波がシン機を揺らすと、シンの左頬を癌を冷や汗がなぞつていく。

いつまでも考へてはいられない。いつ攻撃されるかわからない。そんな焦りが思考を幾度となく中断する。

敵の姿が見えない。敵の考えがわからない。

ふとレイ隊長の姿が浮かんだ。これは心の弱さの現れだ。翠星石の言葉が浮かんだのは、それでもまだ戦おうとする決意があるからだ。

「シン。シンは確かに成長してるです。その方向性も間違つてねえです。だからもつと自信もちやがれ、です。シンよりも強い敵は、みんなシンの前にいるです。シンが必死こいて進んでる先にいるです。よそ見なんてしてる暇あるなら、もつと自分を信じるです。もつと素直に前を見るです。敵の立場に立つて情報を分析して、そ

これから自分の経験を頼りに戦法を組み立てるです。そうすれば、シンとシンよりも強い敵の違いは、立てた戦法の再現率の違いでしかねえです。これができた時、シンはまた一つ強くなれるです。翠星石が保証してやるです」「

敵は前にいる。突拍子もない戦術なんて選択しない。合理的で、確実で、より優れた戦い方を、シンには再現できないかもしけないけれど、それでも考えられる戦い方を選んでいる。

わずか5機の敵。

戦力の温存。それは違う。それでは、わずか5機の敵に翻弄されていることへの違和感を消すことができない。

ザフトを侮っている。それも違う。あのエインセル・ハンターがその身を隠すと決めた場所が、そんなに浅はかなはずがない。

戦力が足りていらない。これも違う。ほかの2つの理由と同様、違和感も消えなければ、エインセル・ハンターの陰もそのままだ。もつと素直に捉える。敵はわずか5機。だが、5機とは思えない戦力を持って、エインセル・ハンターを守っている。答えは、あまりに簡単なことだった。

「できないんじゃない！　しないんじゃない！　してたんだ！」

シンが結論に達した時、インパルスの後ろから大きな水柱が立ち上がる。それはシンの死角の中で鋭利なナイフをインパルスめがけて振り下ろそうとかざす。

その時、インパルスが動いた。双眸の輝きが尾を引くほど早く、濁った水面が踊り狂うほどの勢いでシンは振り向く。ビームを發していない対艦刀は振り抜かれた勢いで水を巻き込み水柱をあげながら振り上げられる。その剣は、水柱の中に潜むモビル・スーツの左腕を、肩から強引に切断した。

左腕を失い体勢を崩す敵のモビル・スーツ。それは、全身を黒く染めたGAT-01デュエルダガーの姿をして、そしてそれはすぐに川の中へと沈んで消えた。

シンを後ろから奇襲しようとしていたのだ。それが、シンにはわかつていた。これは決闘ではない、戦争だ。正面から挑む義理はない。それなら、敵は後ろから来る。そう、シンは読んだ。

そして、これではつきりとした。この戦場に、敵は5機だけではない。

「みんな聞いてくれ！　この森には黒く塗装したデュエルダガーが潜んでる。派手な爆発やミノフスキーパーティクルでこちらを攪乱して、ヅダが派手なパフォーマンスでそれを隠す作戦なんだ！」

5機のヅダが派手な登場を行い、その姿を敵に印象づける。そして、爆弾を多様した戦法は、それだけ敵に纖細な索敵を怠らせる。派手な色で、派手な戦い方をして、さも自分たちの愚かさを印象づけて、この森に潜んでいる黒いデュエルダガーの存在を隠す。

単に視覚効果ばかりではない。人の意識を利用した迷彩だ。

「ナチュラルジもめ、卑劣な真似を！」

毒づくHミリオの機体の左目を弾丸が貫いた。途端にモーターの一部映像が不鮮明になり、センサーの破壊が確認される。

これまでならば、それは敵ジダの攻撃か、でなければ爆弾の破片だと片づけてしまつことだらう。だが、今は敵の存在を認識している。

攻撃のあつた方向へとビーム・ライフルを放つと、森の木々がなぎ倒され燃え上がる。その炎に照らされたスナイパー・ライフルを持つ黒いデュエルダガーが闇の中へとけ込むように消えた。

「レナ、気づかれたようだぞ」

明らかに敵の動きが変わつた。エドモンドは黒子に关心を払つ無粋な観客を鼻で笑う。それはレナも変わらない。

「問題ありません。我々ダークダガー特装隊は、この森にある限り無敵です」

態度で示すことはなくとも、ザフトに対し必要以上の恐怖を抱くことなど、この女性パイロットには無縁のことであった。

黒く染められたデュエルダガーを、ジャブローではダークダガーと呼称していた。ビーム全盛の今においてこの機体は敢えてビームを装備していない。武器は実弾、実体剣に限定され、排熱まで考慮されたこの機体は、ファンタム・ペインの証である青薔薇の紋章さ

え掲げてはいない。代わりにレナ中尉のノーマル・ステッジの手の甲には、青い薔薇がプリントされている。

GAT-01デュエルダガー。単なるマイナー・チエンジであるこの機体は正式な型式番号が当てられていない。

闇に隠し、名を隠し、その姿は現在地上を目指すエレベーターの中にある。

目の前にゾダ・ピンクがいる。そのインパルスガンダムはライフルを放ちながら桃色のゾダを牽制し続ける。そのすぐ後ろ、地面が突如盛り上がりエレベーター・ブロックが出現したことに気づいてさえいない。

ハッチなどない。むき身の箱でしかないエレベーターの中に乗り込んだ2機のダークダガーは闇の中から誘う幽鬼のように手を伸ばし、ナイフがインパルスの首に、左足の膝関節に突き刺さる。抵抗しようにも武器を構える腕は押さえられ、首から入った刃は胸部ジエネレーターを損傷させている。成す術なくインパルスが引きずりこまれ、エレベーターが下降すると、そこはただの地面以外の何もない。

隠れていたスナイパーを炙り出すために、シンは大剣を払う。ビームの刃が放つ熱が木々を切断とともに燃え上がらせ、隠れていたデュエルダガーが露わになる。

デュエルダガーの性能はインパルスにもゾダにも遠く及ばない。ビームでないライフルではフェイズシフト・アーマーを傷つけることさえ難しいだろう。しかし、デュエルダガーはあっさりと撤退する。丘の土壁に偽装されたハッチに消えると、シンに追撃を断念させた。中で何が待ち受けているかわからない。迂闊なことはできなかつた。

「地下に張り巡らせた道を利用してるんだ。これじゃあ、敵の正確な数さえわからない！」

これで、ここがジャブローの真上であることはほぼ間違いないだろ。いや、ジャブローの真上だからこそ採れる戦法だ。砲台が偽装されていなかつたのも、まんまとおびき出されてしまったということらしい。

「どうするのよ、シン！？」

「任務を果たす。俺たちの任務は威力偵察で、要塞の陥落じゃない！」

そう、援軍として本隊が到着すれば、力任せに押し切つてしまえ。ハッチが多数設置されているのだとすれば、侵入も簡単だらうから。

（でも、こんな一時しのぎの戦い方なのか、本当に…。）

明鏡止水の境地でいようとすればするほど敵の恐ろしさが強調される。よくないことが起きようとしている。確証なんてないのに、確信はある。

何か、よくないことが起りつつとしている。しかしで、今すぐにでも。

夜空を照らして、ザフト軍の輸送機が到着したのはすぐのことだつた。

宇宙からいくつもの流星がジャブローを目指す。底の丸まつた円筒形のカプセルが地球の大気に炙られ赤熱しながら成層圏への降下を果たした。十分な減速。カプセルを焼く熱が減少した時、カプセルはその壁を炸薬で吹き飛ばす。露わとなつたカプセルの内部には、それぞれ3機のヅダが背中合わせに格納されていた。

そのカプセルが合計20を超える。

「重力偏差を間違えるな。もちろん、味方に当てるようなことは論外だ」

通信で放たれるザフト兵の声。カプセルにモビル・スーツを固定していたアンカーが外され、ヅダたちが身を軽く乗り出す。暗い夜空の中、風を斬り裂いてカプセルは降下を続ける。

その眼下には、望遠とは言え燃える森の一角がはつきりと見えている。地上部隊は見事敵基地を発見し、篝火まで焚いて待つていてくれる。

多くのザフト兵はほくそ笑みながら新たな指示を聞く。

「先発隊から入電。視界良好。速度、500を維持。角度修正4。

各機、発進！

カプセルから一斉に放たれるズダの群。背負ったバック・パック、
ウイザードが輝き、ミノフスキー・クラフトの輝きが星々のように
瞬く。

「高度700で減速後、一斉射撃を行つ。総員、構え筒！」

ブレイズ・ウイザードを装備したズダはライフルを、ガナー・ウ
ィザードを使用する長大なビーム砲を構える。それぞれが狙いすま
すためモニターを注視し、そのため、誰もが気づいた。

森の一角。燃える炎に縁取られ巨大な闇が口を開いていた。円形
の穴。その規模は、戦艦が入つてなおあまりあるほどの大きさがあ
る。地上部隊の報告には挙げられていない。正体不明の何か。

「何だ？ あれは？」

「ブレア・ニコル、順調稼働。エネルギー充填率90を維持」

「偽装傘展開よし！」

「ザフト軍降下部隊を確認。予測航路、84%一致」

オペレーターの声があがる度、暗い指令室の大型モニターにはグ
リーン・ライトが表示されていく。赤から緑へ。その色は次第に指
令室の様子を映し出す。

明らかになる指令室の奥、そこに、光で照らされた金髪碧眼の男が鎮座している。とても戦闘指揮をとっているとは思えないほど優雅に、ティー・タイムにでも興じているほどにゆつたりと。

「データ観測の準備はできていますか？」

「計測班、準備完了！」

オペレーターの声に、男は、エインセル・ハンターは手を叩く。ただ一度だけ。拍手ほど耳障りではなく、しかし彼らの功績を称えるために。

「それは重複。では始めましょ。伝説に語られるトネリコの木は、9つの世界に根をはるほどに巨大であり、その巨樹は天につくほど雄大であつたとされています。そして世界が終わりを迎えるその日に、燃やされた巨樹は世界へと火を燃え広がらせ、世界そのものを焼き尽くしてしまいました。その樹の名を、ゴグドラシルと申します」

遠く神話の時代に語られた物語は、この日、現実となる。

人間には2種類の人しかいません。男性と女性です。何故なら、人は恋という強い思いで結ばれるからです。恋とは單なる異性愛に限りません。人が人へと向ける強い思いを恋と呼ぶのだとしたら、人と人を結びつけるのは恋であつて、そして、恋によつて結びつけられるのは多くの場合、男性と女性です。

でも「用心。世界には恋の氣まぐれを警告する神話、逸話は山ほどありますから。

強い思いで結ばれる人と出会つ時、そこにはひつそり魔が潜む。

次回、GUNDAM SEED Destiny ∙ Blume
nEinbrechers

「逢魔ヶ恋」

ゴグドラシル。思い人との出会いは、魔王との謁見。

第28話「逢魔ヶ恋」

南米アマゾンの深い森の中、それはぽつかりと口を開いた。森と地面とが左右へとスライドし、人どころかモビル・スーツさえ呑み込んであまりある大穴が口を開く。月光に照らされた夜の闇よりもなお暗いその穴はその奥底を見せぬまま空へと向けられていた。

何も見えない。そんな腹立たしさに誰かがマッチの投げ込んだ。穴の中心にほのかに光が落ちて、一気に燃え広がる。穴の深奥、中心部に生じた光は一気に穴全体を照らし、その姿を明らかにする。

土くれではない、機械で舗装された壁面は不可視の力を働かせ、光がゆがみ、視界がぼやけて見える。その膨大な光は外へと漏れだした。戦闘を続けていた南アメリカ合衆国軍、ザフト軍の両軍が戦いの手を止め、夜中の夜明けを眺めている。降下を続いているザフト軍軌道部隊もまた、同じ光景と、そしてほんの少し異なった光景を眺めていた。

地面に立っているだけでは見えない。穴の直上でしか見えないものがある。穴の奥底で、なおも激しさを増す輝きとその正体。戦場に立つことがあるものならば誰もが目にするその光の色は、ビームと同じものであった。

地獄の門が開けられた。囚われていた光が我先に逃げだし、故郷である空を目指す。

大気を裂いて光の柱が立ち上る。その膨大な熱量は大気組成そのものを歪ませ、ただ熱いというだけで轟音が響きわたった。木々を揺らす衝撃。燃え盛る炎でさえ恐ろしさに身悶えする。鮮烈な光は

すべての星々の輝きを飲み干して大地から空へ。

燃やすものは焼き、碎くべきものは碎く。

降下部隊はその業火にさらされた。直撃を受けたモビル・スーツは瞬く間に蒸発し、そうでない部隊も叩きつける大気の衝撃に崩壊を強制せられる。

それは凄惨でさえない美しい。光が天へと昇り、天がそれを受け入れる。どれほどの時間であつたのか、誰も説明できない。ある者は数秒の出来事だと答え、またあるものは数分間も照射が続けられていたと答える。

そして彼らは口を揃える。光が終わつた時、すべてが終わつっていたのだと。

穴から放たれたビームがやせ細り、やがて消えていくと、世界には再び夜が幅をきかせるようになる。揺らめく炎に照らされ、それでも夜空の星々が輝き始めた。だが、その中に、ザフト降下部隊の放つていたミノフスキー・クラフトの輝きは、どこにもありはしなかつた。

降下部隊の全滅。この事實を、アスラン・ザラは夜空の中で眺めていた。偵察部隊が基地の場所を特定し、降下部隊、地上部隊の本隊とが同時にジャブローにて合流を果たす。1個師団を超える戦力で敵基地を強襲する作戦は、アスランの目の前で瓦解した。

「推定出力300万kWのビームですか！」

「クピットの中で翠星石が慌てた様子で動き回っている。何故か腕にペンを持ち、照射されたビームが降下部隊にどのような被害を与えたかの予測図が簡単ながらモニターに描かれる。

「真上にしか放てない兵器。まさか降下部隊迎撃に特化した兵器とはな……！」

あまりに非効率極まりない。敵が降下してこなければ仕方なく、降下地点がずれても意味がない。そんな博打のような兵器が本気で効果を上げると信じていたのだろうか。だが、敵は実際に降下部隊、1個連隊戦力を一瞬で消滅させることに成功した。そんな敵に都合よく動く戦況に、アスランは歯茎が痛くなるほど強く噛みしめる。

戦力の半分を消滅させられたとしても、地上部隊はすでに戦場に入っている。戦闘は続行せざるを得ない。輸送機から降下した部隊はすでに眼下でジャブローの森に入った。輸送機が撤退した今、飛行を続いているのはアスランのΖΖ-X3Ζ10AΖガンダムヤーデシュテルンと、そしてレイ・ザ・バ렐のΖGMF-17Sガンダムローゼンクリスタルくらいなものだ。

「C.E.67年の開戦当初、地球軍は軌道上降下によつて甚大な被害を出した。そして、我々がここに軍勢を率いてくることは彼らにはわかつていただろうからな」

レイは、いつでもレイだった。冷静に状況を分析し、そして言葉にはどこか棘を含む。

エインセル・ハンターは追われていることを知っていた。ザフトは彼を追うしかなかつた。結果、アスランは地球を半周させられる

ほど戦場を引き回され、行く先々で戦力を失う」となった。それは事実に他ならない。

「だが、この戦争は何としても終わらせなければならないんだ！」

エインセル・ハンターさえ倒せばすべてが終わる。まだ地上部隊が残っている。ここで戦争を終わらせることも可能なのだ。たとえ、敵がその戦力の大半を温存しているとしても。

翠星石は次々と現れるモビル・スーツの反応を警告して騒いでいる。ジャブローの穴蔵から敵部隊が這いだして。簡易レーダーで正確な数を計ることは難しいが、それらはザフトを包囲するようにレーダー上で点滅を繰り返す。その内の一つが、急速に近づいてくる。

それは赤い光だった。光の塊となつたモビル・スーツがヤードシユテルンを目指す。ミノフスキーパーティ子に由来するその輝きを纏い、赤い流星がアスランへと剣を突き出した。迎撃のため、青いヤードシユテルンは剣を抜いた。

ビーム・サーベルとビーム・サーベルとが触れ合い、輝きが放たれる。流星の、ΖΖ-X5Ζ000ΚΥガンダムラインルビーンの攻撃を受け止めるとガンダム同士をつなぐ通信からは聞き慣れた声が聞こえてきた。

「戦争をやめさせたいなら、プラントが無条件降伏すればすむ話じやないかな？」

元々同じ出生を持つゲルテンリッターは余計な通信まで繋いでしまう。

「そんなこと、できるはずがないだろ？、キラ。プラントの理想は、捨て去ることができるるものじゃない！」

サー・ベルを無理に振り抜くようにして距離を開ける。無駄だ。そう自覚しながらも腰からレールガンを展開、確実に命中させられる呼吸で発射する。肉眼では確認できない弾丸がラインルビーンを通り抜け、森を鋭角に吹き飛ばす。

ラインルビーンは、かすり傷一つない。

「理想を捨てられないんじゃなくて、プラントが理想に囚われているの間違いじゃないかい？」

ハウinz・オブ・ティンダロスの前に射撃は役に立たない。レルガンは使用できない。左手でも抜刀しひーム・サー・ベルを両手に構えた。

「お前はどうしてわからない。人は変わらなければならぬ！」

「それでも、変えてはならないものもある。たとえば、僕がゼフィランサスのこと好きしたこととかね」

「戯れるな！」

ゲルテンリッターが輝きを増し、輝きが推進力に変えられる。急速に接近する2機はサー・ベルを振るい、苛烈に仕掛け、しかし互いが相手に攻撃を加えることもなく、受けることもなく通り過ぎる。

南アメリカ合衆国が使用した兵器の名はユグドラシル。スカンジナビア王国の神話に語られるすべての世界に根を下ろすほどに巨大なトネリゴの木の名である。

基地の上空めがけて固定されたこの兵器は降下部隊を瞬く間に消滅させた。

ザフトは戦力の半数を一瞬の内に失い、そして、地球軍は反撃に出た。もはや隠しておく必要はない。水中のハッチが展開し、GAT-01A1ストライクダガーが這い出る。地面を盛り上げて現れたエレベーターからは、黒く塗装されたGAT-01デュエルダガード姿を見せる。

そして、NZ-X300AAフォイエリヒガンダムの黄金の輝きが、夜空の中で太陽を騙る。

地球軍には輝かしい威光を、ザフト軍には痛烈なる恐怖を。エインセル・ハンターは、魔王はその存在でもって、戦いそのものを支配する。

ZGMF-23Sセイバー・ガンダムがモビル・アーマー形態のまま高速機動でフォイエリヒに接近する。双頭の機首を構成するビーム砲を黄金のガンダムへと向けた。発射されるだろう、しかし回避されるだろう。魔王を知る者すべてがそう予想し、それは裏切られた。

明星が瞬く。それは何とも不思議な光景であった。フォイエリヒが右腕からビーム・サーベルを発生させ、前へと出るとともに機体を翻す。攻撃と呼ぶには穏やかで、回避とするには悠長。セイバー

が鋭く速く、猛々しいとは対照的にフォイエリヒは動き、2機はすれ違い、そして、セイバーだけが両断されていた。

魔王だ。空には魔王がいる。

エインセル・ハンターが魔王と呼ばれているからではない。魔王の力持つ者がそこにはいるのだから。

まつたくもつて途方もない。ハウンド・オブ・ティンダロスを完全に体得していなければできない動きだ。高速ですれ違う敵に的確に攻撃を当てるに加え、敵が攻撃に入る瞬間を読んでいなければできない。

最強の男という程度の評価は役不足ではないか。

レイ・ザ・バレルは素直に恐怖を感じていた。フォイエリヒと夜空の中で対峙するローゼンクリスタルの中で。

ネオの相手に付きつきつのアスランには悪いが、どうやらまず戦うべきはレイの方であるらしい。

「エインセル・ハンター。あなたを討つことに何の感慨もないが、そのお命、いただいていく」

さて、どうなることか。ダーダネルス海峡では完敗だった。

ビーム・サーベルを抜き、しかしこれで攻撃するつもりはない。ブラフだ。

(「ミノフスキー粒子の濃度ならば、どこでも爆破可能だ）

ローゼンクリスタルが背負つ円環から幾本もの不可視の矢が放たれる。それはフォイエリヒの存在する地点に次々と突き立てられ、やがてビームと化したミノフスキー粒子が爆発する。

さて、ビームに耐性を持つフォイエリヒの装甲はこの攻撃に耐えられるのだろうか。結論は、わからない。何故なら、爆心点にフォイエリヒの姿はなく、ローゼンクリスタルの後ろに回っているからだ。

攻撃は回避された。異常な速度で。

エインセル・ハンターは仕掛けてこない。すでに眼下の森では戦闘が激しさを増しているが、ここだけは不気味なほど静かで、遅い時が流れている。

（何故仕掛けてこない……？）

ローゼンクリスタルを振り向かせながらレイは攻撃をしてこない相手に故、焦りを募らせる。余裕を見せつけられているようが気味が悪いのだ。

だが、この機会を利用しない手はない。もう一度、円環のシステムを起動する。空間を狙うのではなく、直接フォイエリヒ、正確にはその装甲に狙いを定める。サイサリス・パパが言っていた、ガンダムを破壊するための力を使うために。

エインセルは、とうとう手品の種明かしを始めた。

「なるほど。その円環はパルス・レーザー射出装置。一定濃度のミノフスキーパーティクルに計測されないほど微弱なレーザーを多角的に照射することで、レーザーが幾重にも重なり、交わる地点でのみ膨大なエネルギーが発生する。結果、そこにミノフスキーパーティクルが励起し、ビーム化を引き起こすことで計測上は虚空に突如ビームが発生したかのように映る」

さすがに手を見せすぎたか。そう、ローゼンクリスタルの力は、空間のミノフスキーパーティクルを直接ビーム化することにある。原理そのものは単純である。一昔前の放射線治療と同じことだ。放射線を照射すると、放射線が通り抜けた細胞すべてがダメージを受けるが、それは微々たるものにすぎない。しかし、角度を変えて幾度も照射すると、焦点になり一点だけが幾度も放射線にさらされることになる。すると、焦点の細胞、ガン細胞のみが深刻なダメージを負うこととなる。円環から放たれたパルス・レーザーが誰からも気づかれることなく、虚空の一点に膨大なエネルギー ミノフスキーパーティクルがビーム化するほど を発生できたようだ。

「とてもユニークな発想です」

（そうだ、そのまままでいろ……）

ローゼンクリスタルの力は、單なる奇襲ばかりではない。

後ほんの少しの間気づかないでいてくれればいい。照準が定まりパルス・レーザーの照射が開始されるまでのわずかな間でいい。

寒気がするのに額に汗の感触がある。冷や汗というものだろう。戦場でなくては味わえない、ドミニナントとしてはなかなか巡り会え

ない敵を前に、レイは1秒を10倍にも長く感じながら、フォイエリヒの最期を待ちかまえていた。

「そして」

パルスレーザーが照射される。円環の複数の照射装置・・そうとわからないよう偽装されている・・からレーザーが放たれ、それぞれが大気をわずかずつ暖めながら焦点へと殺到する。1は1でしかないが、1を100倍すれば100だ。1の炎に100焼かれ、そして燃え尽きる。

しかし、爆発は発生しなかつた。フォイエリヒはわずかに機体の位置をずらした。それだけだ。しかし、それだけでローゼンクリスタルの攻撃は失敗した。

フォイエリヒの黄金が際だつてまぶしく見えるのは、瞳孔が開いたためだ。粗いを見破られたこと、行動を完全に看破されたことはそれほど衝撃的なことであつた。

「ミノフスキーパーティクルの被膜に包まれるガンダムにとって、ローゼンクリスタルの力を使えば装甲そのものを爆薬に変えてしまうことができる。まさにガンダムを破壊するためのガンダムとでも呼ぶのでしょうか？」

空間にあるうと、装甲にあるうと、同じミノフスキーパーティクルだ。同様に爆破一ただし、装甲のものは分子量に乏しく、パルスレーザーの照射により時間を要する一できる。それが、サイサリスがガンダムを破壊する力と呼んだゆえん。ガンダムは、全身をフェイズシフト・アーマーに包まれ、ミノフスキーパーティクルの塊のようなものだからだ。

魔法は解けた。

ノーマル・スーツの中では汗を拭うこともできない。

「私はレイ・ザ・バレル。第7のドミナントだ。兄がいると聞いて、一度会つてみたいとは考えていた。最強であるべき我々を上回る存在と聞いてなあ！」

ローゼンクリスタルが装甲の輝きを増す。紛い物とは言え、ゲルテンリッターと同程度の性能を有する機体である。ミノフスキー・クラフトの光は易々と純白の機体を黄金へと突き進ませた。

フォイエリヒは右腕から左腕からビーム・サーベルを伸ばす。ローゼンクリスタルが両手に構えるサーベルに比べるなら太く長い剣は、壁とも剣そのもののようにも思える。

サーベルを叩きつけてはたたき落とされ、突き出したものは払われる。まさに壁だ。そして剣。剣そのものが自らの意志で動いているかのように淀みない動きはローゼンクリスタルの攻撃をただの一度でさえ通すことはない。

子どもと大人の喧嘩ではないだろうか。通常のモビル・スーツの1・5倍の大きさのフォイエリヒを相手にしていると、ついそのようになる。

剣技では埒があかない。剣を叩きつける衝撃を利用するように距離を開け、即座にパルス・レーザーを照射する。ミノフスキー粒子が励起され、ビームの爆発を引き起こす。その場所にはすでにフォイエリヒの姿はなく、相手が逃れた先に続いてレーザーを向ける。

攬乱のために敵が散布したミノフスキーパーティクルの濃度は十分にある。ビームそのものを発生させることには事欠かないが、所詮は奇襲用の兵器だ。正体を看破された以上、フォイエリヒは動きを止めず、夜空に次々と無意味な光の花が咲いた。

「何故あれほど大型の機体がこつも軽々と動く！？」

ミノフスキーワークラフトは表面積の大きな機体ほど強力に働く。しかし大型モビル・スーシュであるフォイエリヒは同時に通常と比べて倍もの質量を有する。機動力は一概にどちらが有利とは言えない。

フォイエリヒは150tもの機体を軽々と動かし、ミノフスキーワークラフトなしではありえない機動を見せる。縦に横に、スラスターの位置など無視した機動は、レイの予測さえ許さない。ビームは無為に爆ぜ、魔王は反撃に出た。バック・パックとアームで連結されているユニットを動かすと、そこには横一列に並んだ銃口が開いている。

銃口が輝き、放たれたビームはローゼンクリスタルに命中するなり通り抜け、そのまま木々を払い、土をめぐりあがらせ、森の一角を消し飛ばす。

ハウinz・オブ・ティンダロスでかわしたのだ。

そうだ。元よりガンダムを射撃で破壊することなどできない。ドミナントとしては戦闘経験に乏しいレイでさえ、フィオエリヒの射撃に関しては回避することができる。

活路は、絶えず前にしかない。接近戦において最強と謳われた魔王に挑むことがどれほど無謀であつたとしても。

無謀は勇氣とは呼ばないらしい。そして、勇氣など奮い立たせるまでもなかつた。敵の方からやつてきてくれる。両手のビーム・サーベル。つま先からもサーベルが発生し、バツク・バツクの4機のコニットすべてからビーム・サーベルが発生している。

8本の剣を持つ金色の魔王の姿は、強がりを消し、臆病を臆病と定義することをやめさせる。魔王を威圧できる者などなく、かの者の前ではすべてが弱者に貶められる。

魔王の剣は壁であり、剣であり、そして瀑布か。幾重にも重なり合つ斬撃がローゼンクリスタルのサーベルをすり抜け、ハウンドズ・オブ・ティンダロスの喉笛を斬り裂いた。

ビームの輝きの中に、フェイズシフト・アーマーの鮮烈な輝きが混ざり込む。フォイエリヒの剣はローゼンクリスタルを捉えた。バツク・バツクが切断され、円環が剥離する。メイン・スラスターを有するバツク・バツクを破壊されたのだ。ローゼンクリスタルは急速な推進力の低下に伴い、急速に高度を下げていく。切り取られた円環は地面に激突し、フェイズシフト・アーマーの輝きを放つた後、その輝きは瞬く間に衰えた。墜落同然に落下したローゼンクリスタルは川に叩きつけられ、壮大に水しぶきを上げる。装甲そのものが推進力を持つにしては水を押し返す力弱く川にうつ伏せに体を浸らせる姿は、出力の低下を如実に示していた。

体のどこかが痛むがうめいでいる餘裕などない。

「薔薇水晶、機体の状況はどうなっている？」

紫色のドレスを身につけた少女が姿を現す。この手のひらに乗つ

てしまいそうな少女が姿を見せる 것을 레이가 싫어 했었다. 그러나, 그의 말은 그의 말이었다.

「円環、及びバック・パック消失。出力、4割に低下。早急な修繕の必要を認めます」

ゲルテンリッターとは違い、心を持たない薔薇水晶のことを、レイは単純に嫌っているのだ。嫌いであるということと、しかし信用しないことは意味が違う。戦闘継続が不可能なほどの損傷であることに違ひはない。

もつとも、これ以上戦ったところで意味があるのかどうかはまた別の話だ。

全天周囲モニターには頭上にフォイエリヒが鎮座している様子を映している。見下ろされている訳ではない。ただ、空にあるのだ。さも紛い物の太陽のように。どれほど疎ましくとも憎らしくとも、地球創生以来太陽を取り除くことができた者などいないのだ。

フォイエリヒは、闇夜に輝く太陽であった。

降下部隊の全滅。それは戦力の半減以上に重要な意味をもたらすこととなつた。地上部隊が2次元的に展開し、上空を降下部隊が担当するという作戦がつまずけば、地上部隊は容易に包囲され、そしてその囮みを破る術を失つてしまう。

機動力に優れるセイバー・ガンダムが動員されていようと、制空権を取り戻すには絶対数が足りていない。では何機揃えればいいのか、

答えられる者はいない。

空には魔王がいる。魔王は結界を纏つ。揚々と魔王に触れたいと願う者は誰もなく、謁見を望む者は望むべくもない。誰もが魔王を恐れ、地べたに押し留められる。

たつた1機のモビル・スーシが築く制空権が、ザフト軍すべての機体から空を奪う。

魔王を頂点に迎える世界、それはまさに地獄に他ならない。

首を失い、手のないZGMF-1000Ζダの屍が焼かれた木々の灰の上に倒れ込む。これほどの傷を負いながらまだ死に切れぬかのように、時折痙攣をおこしたように足が跳ねた。

足を斬られた。ΖGMF-953ゼーゴックがバランスを崩し仰向けに倒れると、全身を黒く染めたGAT-01デュエルダガーが群がる。両手の肉厚のナイフを次々と突き刺しては無理に引き裂かれる金属音が悲鳴にも似た音を奏で、喰い散らかされたゼーゴックの死肉が辺りにばらまかれていく。

ダナ・スニップ。この名前を知る者は少ない。新しくザラ隊に配属されたばかりのこの若者は軍学校を優秀な成績で卒業後、偵察など軽微な任務をこなしたばかりでアスラン・ザラ大佐の下へと送られた。軽率な印象だが、自信に満ちた態度はその軽ささえ含めて評価されていた。訓練の成績は優秀。実戦でも勇敢なパイロットになると期待されると。

その自信が何ら根拠のないものと、誰もが気づかぬふりをしていた。

戦いを甘く見ていたのだ。だから軽率な態度をとつた。訓練を気楽な気持ちで行い、それが周囲からは勇敢にも見えた。どんなミッションにも物怖じしないのだと。

実戦は違う。失敗したからとやり直すこともできなければ、相手は自分と同程度の能力 ダナはナチュラルを見下していたがを持つ人間である。そうそうとうまくことが進むはずがない。敵はこちらの手を読み、命がけの戦場で気を抜く者などいない。確実に実感させられる死への恐怖を乗り越えるにしては、ダナはあまりに経験と覚悟が不足していた。

「何だよ、ナチュラルの癖によお……」

ヘルメットはつけていない。止まらない涙を拭うために外してしまった。手の甲を目にこすりつけては鼻水をすする。

逃げることは許されない。敵の包囲を飛び越えようとしたゼーコックが上空からの横一列のビームでそのずんぐりとした胴体を貫かれた。フォイエリヒからの攻撃だ。ただフォイエリヒは空について、飛び上がるものを許さない。

次第に狭まる包囲網。あたりを警戒するあまりダナの搭乗するGMF-56Sインパルスガンダムは怯えたように首を回しあとずさる。

背中に何かがぶつかつた。悲鳴にならない悲鳴とともに振り向きざまにライフルを発射すると、黒焦げた木を跡形なく吹き飛ばしただけだった。

異常なほど高められた警戒心は、しかし何ら役立つことはなかつた。いまだ炎くすぶる木が踏み倒される。今度こそ敵か。ダナはもはや見境なくライフルを発射する。

何一つとして間違つてはいなかつた。それは確かに敵であり、攻撃は確かに命中した。そして、ビームの攻撃力はモビル・スーツを破壊するに十分な威力を持つ。

間違いなどないからこそ、そこがダナの限界であった。

ビームは確かに敵に命中した。甲殻類を思わせる大型バック・パックを被り、バック・パックとアームで連結されたシールドへと確かに。しかし、シールドはビームを弾く。ビームがシールドの表面を滑り、何もない場所を吹き飛ばすでしかない光景に混乱の極みに達したダナはビーム・ライフルを乱射する。

「来るな！　来るなあ！」

攻撃のすべてが弾かれ、やがて、ライフルからはビームが放たれることはなくなつた。エネルギー切れではない。乱射したことで銃身の冷却が追いつかず、安全装置が作動したのだ。何にせよ、ライフルは使えない。

敵はゆっくりと近づいてくる。緑を基調としたその体は、闇と炎に照らされる暗い森にあつて不気味とも沈んだ色を見せていく。その手には鎌を持ち、状況が状況であるのならダナは笑うだろう。この死神だと。

そう死神のように、GAT-X255インテンセティガンダム汎用型は近づいてくる。

あどけたるインパルス。すでにライフルの引き金を引くことを諦めている。もはやそこに冷静な判断などない。コクピットの外にさえ届くほどの叫び声をダナはあげた。ライフルを投げ捨て、バッタ・パックのサーベルへと肩越しに手を伸ばす。

サーベルを使用する判断は的確。しかし、遅すぎた。

インテンセティガンダムの鎌が風切り声とともに振るわれる。横一文字に振るわれた鎌はフェイズシフト・アーマーに守られているはずのインパルスの胴体をたやすく斬り裂いた。

胴裂きになりながらもインパルスの下半身は立ち尽くす。衝撃を吸収したフェイズシフト・アーマーが切断面を中心に光を放ち、それは、吹き出す血にも似て見えた。

「ストライクもどき殺つてきや、ステイングの仇にあたんだろ」

半身を泣き別れにされたインパルスガンダムの前で、アウル・ニアダは無邪気に笑う。

囲いを破ることはできない。包囲を飛び越えようとすればエインセル・ハンターに撃墜される。是が非にもエインセルの脅威を取り除かなければならぬが、それはレイにはできない相談だ。

ローゼンクリスタルは本体そのものは無事だが、元々武装に乏し

い機体である。円環を失えば戦闘力を大幅に減じてしまう。墜落した川から機体を起きあがらせたところで、空のフォイエリヒを見上げる「ことしかできない。

シン・アスカが通信を繋いで来る。

「隊長、動けますか？」

ローゼンクリスタルのすぐ隣にソード・シルエットを装備したイントパルスが着地する。

シンに気をかけられるほどとは、今のローゼンクリスタルはよほど見すぼらしく見えているらしい。そう、苦笑しながら答えておく。

「バック・パックをやられただけだ」

「援護します。隊長は撤退する方法を探してください」

「これはよほどのことだ。ますますもつてレイ・ザ・バレルというドミナントは追いつめられていくらしい。愉快なものだと口元が勝手に緩む。

「あやか……」

「お前に助けられることになるとはな、なんて言つてゐ暇はないません！」

シンの必死の言葉は、一重の意味でレイの言葉を遮ることとなつた。

「……言つよくなつたな。だが、エインセル・ハンターは強い。油断、などしようもないが……、すまない。俺からお前に言つてやれる」とはなれやうだ」「

ここで撤退を開始するためには、エインセル・ハンターの注意を少しでも引かなければならない。シンは、それをしようとしている。そんな部下に贈つてやれる言葉など、レイは持ち合わせていかつた。

戦闘中はモニターに顔を表示しない。ガンダムのカメラ越しに見えるインパルスの姿だけが部下の姿と覚悟を伝えていく。

「あなたからは、十分な言葉をいただきました」

ミノフスキー・クラフトの輝きを残滓として残し、シンを乗せたインパルスガンダムは浮上する。魔王とその配下たる死が支配する空へ。

「シン、死ぬな……」

空へと出るなり、ビームが雨か矢のように降り注いできた。とにかく機体を出鱈目に動かして、無理矢理かわしてやる。ミノフスキー・クラフトに任せた無理な機動は、シンの体を痛めつける。

それでも、これくらいしなければエインセル・ハンターには届かない。

黄金の機体は田の前に。ただ全力で駆け上がればいい。

「ああああああああ！」

決して機動力に優れる訳ではないインパルスの全力は、徐々にフォイエリヒの黄金の姿を大きくしていく。何故か、攻撃が激しかつたのは飛び上がった瞬間だけで、接近している間、フォイエリヒは何もしてこない。理由はすぐにわかつた。

異常接近を告げる警報がコクピット内に流れ、何かが接近していくことがわかる。モビル・スーツだ。直感的にそう判断し、両手に構えた対艦刀で近づく何かを弾く。

ビームの粉が散る。勢いを殺されて、インパルスは仕方なくフォイエリヒとは距離のある場所に浮かばせておくしかなかつた。それは相手も同じだ。インパルスに飛びかかってきたモビル・スーツ、GAT-04 ウィンダムも同じように空に浮かんでいる。まるでフォイエリヒを守るように立ちふさがる形で。

白いウィンダム。

「ヒメノカリス！」

以前繋いだ周波数は生きているはずだ。返事はすぐにあった。綺麗な声なのに、まるで感情の伴つてない声はヒメノカリスのものだ。

「シン・アスカ。あなた、人とは違うことしないと気が済まないの？」

「田立ちたがり屋みたいに言つなよ。」

確かにカーペンタリアでもボーパールでも部隊行動が苦手で突拍子もない行動をしていたかもしれないけど、ヒメノカリスに言われるほど勝手なことはしていないはずだ。

「何でもいい。前、伝えたはず。お父様の前に立ちはだかるなら、私はステイングの仇をとると」

言葉に感情なんて込められていないはずなのに、それでも徐々に凄みを増していくのがわかる。

(来る……！)

そう、考えた。それでも、ヒメノカリスは動かなかつた。

今度はヒメノカリスが守られるよう、フォイエリヒの黄金の輝きがインパルスとウインダムの間に割り込んだ。

「お父様……？」

ヒメノカリスの声は聞こえても、フォイエリヒとは通信は繋がっていない。何か話をしているのかもしれない。ただ、それをシンが聞くことはできない。

「わかりました……」

まるで場所を譲るみたいに、いや、場所を譲つてウインダムが離れていく。シンとエインセルが残されて、シンは、初めて魔王の前に立つ。

始まりは4年前。母を殺され、ただ仇の黄金に輝く姿を見上げて

いるしかできなかつた。

次はダーダネルス海峡。威圧されて、近づく」とやえできないで立ち尽くしていた。

深い森と、それを燃やす炎。炎は夜空を照らして星の輝きを曇らせる。フォイエリヒの名前の由来は、”火のような”を意味する言葉なのだと聞いたことがある。だから同じ炎に輝きが曇らされてしまうことなんてない。それどころか炎を照り返してかえって輝きを増しているようにさえ思えた。森を、死体を燃やす火が、こそつて魔王を賞賛しているみたいに。

本能は告げている。逃げろと。理性は冷静だ。勝てるはずがないとわかつてはいる。

歯を噛みしめるしかない。そうしないと、すぐに顎が震え出るから。操縦桿を握る手は痛いくらいで、意識して力を抜こうとしてもまるで抜けではくれない。目は瞬きさえ忘れてフォイエリヒからそらすことができない。

「エインセル・ハンター……」

本能が拒絶し、理性は不可能と断定する。それでも、シンは4年前から我が身のうちに根付いた何かに急かされるようにアクセルを踏み込んだ。

「あなたは、母さんの仇だ！」

ゲルテンリッターには遠く及ばない加速であつても、シンが一言述べる間にインパルスはフォイエリヒを射程に収めた。敵は動かな

い。その理由を考えている余裕なんてない。両腕の対艦刀を力任せに振り下ろす。

体が前のめりにつんのめつた。攻撃が命中して、そこから生じる衝撃を体が無意識に警戒していた。ところが、衝撃はいつまでも現れない。踏ん張った分だけ、体が動いた。

何が起きたのか、考えるよりも先に動く。意識が加速し、ただ体だけが反応していくような感覚は、シンを確かに救った。インパルスが飛びのくと、装甲をジームの輝きがかすめた。フォイエリヒはいつの間にかインパルスの後ろにいたのだ。

(これが、ハウinz・オブ・ティンダロスの力、……)

何度もシミュレーターで経験したはずなのに、どこかで感覚から置き去りにしていた。非現実的だと疑っていたのかもしれない。

これが現実だ。

「俺だつ……！」

短い言葉でさえ言ひきることができない。本当に瞬きほどの一瞬で加速したフォイエリヒが一気に迫ってきた。

意識の加速。明鏡止水。それらがない交ぜになつて、シンはほとんど意識の外でインパルスに攻撃を命じた。剣の速さに加え、フォイエリヒの加速を加算したはずの一撃は、黄金の機体をすり抜ける。

左足を斬られた。すぐに次の動作を意識しろ。心に敵の姿を映せ。

インパルスとすれ違うように後ろへと飛んでいったはずのフォイエリヒはすでにインパルスに迫りつつある。確認したのでも、意識したのでもない。カーペンタリアで白いワインダムが見せた機動を、フォイエリヒもしてくる。

あるいは確信とそれを元に組み立てられる意識の連続。

フォイエリヒが迫る。右手のビーム・サーベルを構え、初撃を受け止める。すれ違いざまに仕掛けてくる攻撃は、身を翻しながらかわしきれないものだけを左のサーベルで受け止める。

損害や状況をいちいち確認している余裕はない。ただ敵の動きを読み、意識を組み立て、それを元に動くだけだ。

フォイエリヒが離れていく。次の攻撃までのわずかな時間に状況の確認をすませなければ。切斷されたのは左足。フォイエリヒはカーペンタリアでワインダムが見せたような直角の機動ですぐに方向転換をしてこようとする。

(やつぱりあのワインダムには………)

もう思考を並べている余裕はない。加速させた意識のまま、行動を初めていなければならなかつた。

8本の剣が迫る。かわす。かわせないものは防ぐ。明鏡止水が剣を教え、意識の加速が人の感覚が追いつけないほどの行動を実行する。無理矢理でも、強引であっても、フォイエリヒの攻撃を防いでやつた。

離れていくフォイエリヒ。シミュレーターでも、30秒程度持た

せたことがある。状況の確認。行動予測。意識の加速。次は、こちらから打つて出る。

インパルスを加速させ、エインセル・ハンターが見せた直角の機動を実行するのだ。手足を動かし重心を入れ替える。スラスターとミノフスキー・クラフトの推力のすべてを利用して機体を直角に加速させる。それをもう一度。もう一度。インパルスは短い時間で速度を落とさないまま360度方向を変える。フォイエリヒへと飛びができる。

機体そのものが重く、大型であるフォイエリヒは旋回しきれない。だから攻撃できる。意識が加速したそのままにインパルスの剣撃はフォイエリヒを捉えた。自らが弾丸にでもなったように剣を突き出し加速する。

まるで黄金が霧散したような。ハウinz・オブ・ティンダロスの魔法のような光景。攻撃は当てられなかつた。でも、インパルスも損傷してはいい。状況の確認。意識の加速。次に備える。

この時のことを見たなら、シンは高揚していた。自分の意志がわからないほど意識が研ぎすまされ、翠星石とともに学び、高めた技術のすべて、エインセル・ハンターを倒すためだけの力を發揮する。

だがそれでさえ、シンの力と思いは、エインセル・ハンターに及ぶことは決してなかつた。シミュレーターにおいて、生き延びる時間が増えようと、ただの一度も勝利できなかつたことと同じように。意識を加速させ、会敵し、離れまた意識を加速させる。その繰り返しが、途端に綻びを見せた。

予想が外れた訳でもない。意識の加速に不備があつたのでもない。しかし、インパルスは右腕を切断される。

フォイエリヒが離れる。また意識を加速させなければならぬ。ところが、フォイエリヒは加速の完成よりも速く、そして鋭い。旋回半径をさらに狭め、意識の加速が間に合わない。予測が間に合わなかつたところから先の攻撃が、今度はインパルスの頭部を破壊する。

シンが連續して意識を加速させてることには限界がある。そのため、その間に一呼吸置くことでその弱点を補っていた。だが、だましだましの戦法はタイム・ラグが蓄積し、それが限界を超えた瞬間がシンのタイム・レコードを決定してきた。

すでに魔法は解けていた。エインセル・ハンターとの戦いに特化することで得た30秒という時間は、すでに使い果たされていた。

状況の確認さえさらに間延びする。体がきしんでいた。直角に曲がるという機動がもたらしたGが今更シンの体を締め付ける。

(翠星石に注意された、通りだな……)

こんな思考を許さないほど、エインセルは速い。意識の加速を許さないほどの瞬間に振るわれる光の剣は肩が辛うじて残されていた右腕を完全にもぎ取り、バック・パックの一部を破壊する。

ミノフスキー・クラフトが搭載されたバック・パックが破壊されたことでインパルスは目に見えて高度を下げ始めた。それさえ予測していたようにフォイエリヒはシンを追う。

意識の加速を行つてゐる時間を、相手の攻撃の合間をエインセルは必要としない。同じことができることと、同じようできることとは意味が違つ。

もはや意識が間に合わないほどの時の狭間の中で、シンは最後の瞬間まで戦いをやめようとしなかった。

生きることを渴望する本能。母の復讐のため。戦士として培われた戦意。そのどちらのようど、そのどちらとも違う。心の内に宿る何かにおいてられるようにシンはフォイエリヒと、エインセル・ハンターへと立ち向かう。

インパルスは左腕にただ一つの剣を持つ。フォイエリヒは全身に8の剣を持つ。数を比べるまでもなく、結果は明白であった。

最後の腕を切り落とされ、ドッキング機構に重要な損傷が生じたことから上半身と下半身が離れ離れに落ちていいく。空には、くすまぬ黄金のフォイエリヒを残したまま。

多少の時間をかけた。この事実は性能で遙かに劣るインパルスがもたらした小さくとも奇跡と呼ぶに値する。

だが、結果は何ら変わることはない。インパルスは破壊され、フォイエリヒの黄金の体は傷一つない。たった一つだけ、異質な輝きがあることを除いて。

この輝きこそが、インパルスが、シン・アスカが演じたもう一つ

の奇跡であった。

ビームを弾くフォイエリヒの装甲。それはビームとライデンフロスト現象を引き起こすよつ調整されたミノフスキーパーナー粒子を纏つとう点においてフェイズシフト・アーマーと共通する。ビームの熱量そのものの吸収量がわずかであるため発光現象は目立たないが、ビームほどの熱量にさらされれば、ミノフスキーパーナー粒子は吸収したエネルギーを光として放出せざるをえない。

フォイエリヒの腕に見られる異なる輝きを放つ一筋の線。それは、インパルスの放った一撃がフォイエリヒをかすめたことを意味する。この奇跡を知る者はわずか一人。エインセル・ハンターだけであった。

腕に残る一筋の輝きを、エインセルは微笑みさえ浮かべて眺めていた。

ただのコーディネーターがエインセル・ハンターを超えるはずがない。そんな当たり前の光景を、アスランはガンダムラインルビーンと対峙しながら眺めた。両者とも傷はない。結局腹のぞぐり合い。まだどちらも全力を出してなどいない。

もつとも、ラインルビーンとの戦闘に終始せざるを得ない」と交代わりはない。アスランがフォイエリヒを抑えることができないでいる。

(これ以上ザフトの損害を増やす訳にはいかないな)

アスランは、暗い覚悟を固めた。

「パラスアテネへ。撤退する。目標をできるかぎり軽微な損害に設定し、アリスに撤退を実行させろ。他の艦と連絡して、残存するインパルスすべてにだ」

「アリス、発動！」

前線からの指示を受け、ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの艦長タリア・グラディスはアリスの発動をオペレーターに高らかに命じた。広いブリッジ内に艦長の声が響く。

「グラディス艦長、シン・アスカ機、反応ありません」

すでに撃墜されている。オペレーターの報告に、タリアは口元に手をやり、悩んだ仕草を見せた。それもわずかな間のこと。手が離れ、露わになつた口からは冷たく聞こえる声が聞こえた。

「放つておきなさい。どう転んでも、議長はお喜びになるでしょうから」

生き延びればそれでよい。だが、死せる英雄にも、あの方ならば利用価値を見いだすことだらうから。

気がついた時、体の半分が水に浸かっていた。目の前では破壊さ

れたハッチから泥水がコクピット内に流れ込んでいた。どうやら川の中に落ちたらしい。それが衝撃を和らげ、うまく浅いところに落ちたからおぼれることもなくすんだ。

シンは自分の悪運の強さに苦笑した。ところが、すぐに苦痛にうめくはめになつた。無傷ではない。打撲くらいは負つてているのだろう。シート・ベルトを外し、座つたままで体を軽く動かしてみると全身が鈍く痛んだ。

だが、いつまでもこうしている訳にはいかない。外ではまだ戦闘が続けられている。フェイス・ガードが泥にまみれ使えなくなつたヘルメットを外して水の中へ投げ落とす。ヘルメットを外したためか、音がはつきりと聞こえていた。激しい戦闘音は近い。

シートから降りて、水をかき分けながら破壊されたハッチの隙間から這い出すように外に出る。取れたハッチの一部がコクピットすぐ外の位置で足場になってくれる。ここから眺めると、やはり周囲は川であるらしい。森を燃やしていた炎はほとんど鎮火しているため薄暗い。木がなくて、暗い水平が続いているとから川だとわかる。

どれほど氣を失っていたのかわからない。それほど長くもなくて短くもない。まだ戦闘は終わってはいなかつた。そして、戦況は大きく変わっていた。

上空では、複数のインパルスガンダムが一糸乱れぬ隊列でライフルを放つていた。あまりに的確で、タイミングが揃っている。この不気味にも見える光景は、シンにある記憶を思い起こさせた。

フィンブル落着で、シンが囚われた原因不明の当事者意識の欠落。あの時はまるで自分がインパルスのよう自分るべきこと、

できることが理解できて、それでも何をしているのかが意識できなかつた。

これと同じことが見上げる空で行われている。

「インパルスが……？」

やはりあれば戦闘の緊張がもたらすものではなくて、何か人為的に引き起こされた者であるらしい。痛みのせいで体を動かすことをついためらつてしまつ。そこに驚きと困惑が加わつて、シンは動けないまま見上げ続けるしかなかつた。

インパルスたちはまるで全機を1人が操縦しているように見える見事な連携でデュエルダガーを攻撃する。1機が放つた攻撃をかわした後すぐにデュエルダガーが逃げた方向に別のインパルスのビームが飛ぶ。完全な連携を維持しながら徐々に戦線を後退させていく。

（撤退しようとしているのか……）

恐らくそうに違いない。インパルスたちが殿を務めてその間にほかのザフト機を逃がす手はくなつていいのだろう。そんな中、いつまでも撤退しようとしているインパルスがあつた。

現在使用する者が少ないブラスト・シルエットを装備した機体だ。左腕のフレームが破壊されているのか、右腕だけで腰だめに大型ビーム・ライフルを構え、射撃を行つていて。何故かこの機体だけが撤退の足が鈍く、凹として残ろうとしているように見える。

この戦場で、ブラスト・シルエットを装備したインパルス 大

半はフォース・シリエットを使っていた　は、シンの知る限り1人しかいない。

「まさか……、ルナマリア！」

敵が反撃に打つて出るまでの戦闘でルナマリアは左腕のフレームを破壊されていた。そして、ブラスト・シリエットを装備したインパルスだ。

嫌な予想ばかりが積み重なって確信が近づいてくる。

ただ1人残される形になつたインパルスは敵の集中攻撃にさらされる。ビームが動かない左腕をもぎ取つた。よく見ると、ところどころに被弾の跡が見られた。もう機体そのものが限界を迎えているのだ。

いてもたつてもいられない。シンは川の中へと飛び込んだ。浅いところとは言え、足がつくほどではない。泳ぎながら、水を必死にかき分けながら声を張り上げる。

「もうやめる、ルナマリア！　それ以上は機体が持たない。君がそこまでザフトに義理立てする必要なんてないだろ！　妹さんがいるんだろ！　帰りを待つている人がいるんだろ！？」

泳ぎ方なんていい加減だ。とにかく足をばたつかせ、腕を振つた。泥水が口に入り込んでのどを痛めても声の続く限り叫び続けた。

どうして逃げてくれない。君は自己犠牲なんて柄じゃないだろ。どうしてザフトのために死ななくちゃいけないんだ。泥水を思い切りかぶつたことでこれは声にならなかつた。

ルナマリアのインパルスがさうに被弾する。

よつやく浅いところについたシンは腰まで水に浸かりながら必死にもがく。少しでもルナマリアのそばへ、声の聞こえるところへ急ぐために。

「やめてくれ！ もうやめてくれ！」

全身が傷だらけで、すでに右腕も失っている。それでも胸部のバルカン砲を使ってまでルナマリアは戦いをやめようとしない。仲間を逃がす時間を稼ぐために。そんな戦い方で生き延びることができるはずなんないとわかっているはずなのに。

シンの声は届かない。少しでも、わずかでも近くに。水の抵抗を体で分け進む。

シンは、突然足を止めた。見上げた視線の先には、胸を深々と斬り裂かれたルナマリアのインパルスガンダムの姿があつた。

「ルナ……」

まだ胸部が破壊されただけだ。腹部のコクピットは無事で、ルナマリアも生きているかもしれない。生きててくれるかもしれない。必死に誤魔化そうとして、涙はかつてにあふれてくる。

「ルナ……」

ルナのインパルスを破壊したのは、白いウインダムだった。ヒメノカリスの機体だ。そのウインダムのサーベルから滑り落ちるよう

に傷だらけのインパルスが落ちていく。

破壊されたフェイズシフト・アーマーの輝きが視線の向こう側、川の先へと落ちていく。ジェネレーターが破壊されている。すぐにでも爆発を起こす。ルナは確実に死ぬ。

涙だつて流している癖に、心はなかなか悲しみといつもの露にはしてくれない。インパルスが落ちていく光景を、呆然と眺めていた。

その時浮かんだルナの顔。シンはがむしゃらに手を伸ばした。足は川底の泥を蹴る。

「ルナ～！」

そう呼ぶ声をかき消すほど爆発が川の水をはね飛ばし、シンを呑み込み、押し流す。その爆心に、シンの初めての友である少女を残してしまった。

神様の言いつけを破つた人間は楽園から追放されました。その罪は人に深く刻まれて、だから人は楽園に入ることはできません。知恵という人を人たらしめるすべてを得るために、人は楽園を永遠に失つてしまつたのです。すべてをことへの罰として。

だからすべてを失つたあなたを導きましょ。

原罪持たぬ清らかな乙女の眠る場所に。

次回、GUNDAM SEED Destiny ∞ Blume
Einbrecher

「聖少女領域」

シン・アスカ。あなたの戦いはこれから始まります。

第29話「聖少女領域」

ラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの格納庫はずいぶんと閑散としている。激戦を繰り広げた後はよくある光景とは言え、もの悲しさや寂しさというものがこびりついた空気にはなかなか慣れることができない。

アスラン・ザラがキヤツト・ウォークから見回した範囲の中では、3機のガンダムが静かに壁際に立てられている。損傷の激しいZGMF-X17Sガンダムローゼンクリスタルの周りを除いて整備員の数もまばらなものだ。

手すりの上に小型プロジェクターを置く。光の柱が立ち上がり、縁のドレスを身につけた翠星石が現れるのを待つ。

「撤退状況は？」

「正確な算出はまだですけど、きっと、アスランが思つてるより小さいです。……数としては」

翠星石はわかりやすく表情を曇らせた。本当に、ゼフィランサス・ズールは何故兵器に心など与えたのだろう。インパルスガンダムを囮にする形で部隊全体を逃がす決断を、翠星石は認められずにはいるのだ。そのことは、次の質問を発したことで確信できた。

「インパルスは？」

「HIIリオは帰還してるです」

要するに、他の主立つた機体は未帰還だったということだ。ダナ・スニップだつただろうか。まだ名前と顔が完全に一致する前 たしか背の高い方がダナで、背が低くまじめのがエミリオ・プレデリックだ に部下を失うこともこれまでになかったことではない。そう、自分に言い聞かせることもだ。

「そりゃ……」

仲間の死を惜しんでいるよりも、次の策を考えるべきだろう。ジヤブローを攻めきれなかつた以上、エインセルは大西洋連邦の本土に引きこもる。そうすれば攻撃の手間はジャブローの比ではない。

(次の機会をうかがうしかないな)

それまで、どれほど命が失われることになるだろう。シン・アスカモルナマリア・ホークも戻つてはこなかつた。

格納庫眺めていた視線を通路の上へと戻す。足音が聞こえたからだ。歩いているというよりも、床を踏みつけるほど強い足音が聞こえていた。

「レイ……？」

レイ・ザ・バレル。その姿を確認した途端、レイの拳がアサランの左頬を捉えた。加減してくれているとは思えない鋭い痛みが走り、思わず体勢を崩した。口の中には血の味が広がる。

「エインセル・ハンターは自らを廻していた。この作戦だけでザフトは貴重なモビル・スーツを一体何機失った！？……お前の理想のために、後何人死ねばいい！？」

口元を拭うと、血がかすかに付着している。感情のない人間ではないとは言え、激昂することの少ないレイにしては珍しく歯茎に力を込めている。レイはシンのことは意外なほど気を遣っていた。結果としてインパルスを使い捨てたことを怒っているのだろう。別に殴られたことへの怒りはわからない。

「理想は、俺たちのものだ。プラントの理想のために、何より彼らの死が犬死いでなかつたことの証のため、俺は立ち止まることはできない。君の部隊が全滅してしまつたことは残念に思うが、俺の判断は間違つてない」

レイはこれ以上何も言わない。諦めたようとも呆れたようとも見える視線でアスランを一瞥した後、振り向いてどこかへと歩きだしてしまつた。

（敵を作ることばかりつまくなつたな……）

見ると、翠星石が心配そうに見ていた。別に殴られたくらいで死にはしない。そして、レイも戦場にまで私情を持ち込むことはないだろう。どう考えていようと、どんな思想を抱いていようと関係ない。ただ、自分の役割を演じてくれている内は。

「こんなにちば、つと、初めましての方がいいかな？」

「こんなよくわからないノリで話しかけてきたのは女だった。赤い髪で、ナチュラルが多い軍学校じや目立つ方だ。シンも何度か見たことがあった。まあ、別に何の関心ももたなかつたが。

第一印象は変な女。教室の片隅で1人、机に足を乗せて座つているような男に声かけてくる奴なんて普通いるか。面倒だ。不愛想に言つてやれば飽きてすぐに離れていくだろう。

「別にどっちでも」

「あのさ、君つて、地球からの移民なんじょ？」

女は何が楽しいのか、机のすぐ脇に立つて一方的にまくし立ててくる。

「私、プラントに住んでるんだけど、この学校じゃ、移民の人ばかりで、それに、移民の人つて、出身地が同じ人の方が気が合ひついでなかなか話とかしてくれないの」

「要するに、俺が1人に見えたってことだな」

「でしょ？」

俺は不機嫌だ。そうわからせいでやるつもりで言つたのにあっさりと返されて、つい表情が固まってしまった。何がおもしろいのか、女は笑つた。

「まあ、無理に、とは言わないけど、せつかく同じ学校にいるんだし、話くらいしない？ 私、ルナマリア・ホーク。あなたは？」

追い返せそうにない。ただ、名前を素直に名乗つてやるのはそれはそれで癪で、無言で胸の名札を指さした。

「そり、シン・アスカね。じゃあ、シン、よろしくね

これが、ルナマリアとの出会いだった。母を失つて国を捨てて、
プラントの帰還事業 プラントこそがコーディネーターの故郷だ
と言つことらしい を利用して移住した。オーブからの移民は数
が少なくて、シンが当時人を避けていたことも手伝つていつも1人
だった。

そんな時に声をかけてきたのは、ルナマリアだった。

それからは腐れ縁。軍学校を1位と2位の成績で追い出されて、
ΖＧΜＦ・56Sインパルスガンダムを与えられて戦場をたらい回
しにされた。何人もの仲間を失つて、それでもルナマリアだけはシ
ンのそばにいつもいた。

あの日までは。

あの日。ジャブロー攻略戦も夜。ルナマリアは戦死した。白いG
AT-04ウインダムに撃墜されて。

そこまで思い出した時、シンは目を開けた。

(……は、どうだ……?)

撃墜される度、見える天井は違つてる。今回は、妙に高い天井に、
色々な装飾が施されていて、口ココ調だとか、バロック式だとかわ
からなけれど、とにかく、まるで貴族の邸宅みたいな天井だった。

上体を起き上げてみると、ノーマル・スーツは着ていない。普通
にシャツとズボン、それでも、ボタンの周りや袖口にレースが使わ

れた妙に格式を感じさせる服だ。寝かせられていたベッドも人が5、6人で使えるほど広い。

ますます混乱させられる。とても軍艦には見えない。捕虜を拘留しておくための牢屋でもないだろう。それにしては部屋が広すぎる。ベッドを除いて何も置かれてはいないが、床には一面絨毯が敷かれている。

いくら部屋の様子を眺めても意味がわからない。大きな窓からは日の光が取り込まれていて、まさかここが天国なのだろうか、そんなことを本気で可能性に加え始めた時、扉が開く音がした。観音開きの扉 装飾がやたらと多い が開いて、波立つ桃色の髪が揺れる。白いドレスが、この部屋にはとても合っていた。まるで、お姫様みたいに。

「起きた？」

「ヒメノカリス……」

きつと、間抜けな顔をしていることだらう。ヒメノカリス・ホテルから目を離すことができなくて、状況を理解することもできない。呆然とするシンを構いもしないで、ヒメノカリスは扉に手をかけたまま振り向こうとした。

「来て。お父様があおいになりたいって、あなたと」

「お父様って、エインセル・ハンターが……？」

ヒメノカリスは無言のまま頷いた。それだけで納得できると思っているのだろうか。そう文句を言ってやれるほどの時間もない。ヒ

メノカリスはすぐに歩き始めた。扉がしめる。シンは当然、慌ててベッドから飛び降りる必要があった。ヒメノカリスを追つて駆け出すと、扉は簡単に開いた。正面には大きな窓。部屋の外は左右に広がる廊下で、ヒメノカリスの後ろ姿は左手に見えた。まだそんなに離れていないとは言え、まるで振り向こうともせず歩いている。

少しは気を遣つてくれてもいいような気がする。シンは仕方なく早足で歩くヒメノカリスに追いつく必要があった。

「ヒメノカリス、いくつか聞きたいことがある」

返事はない。別に拒否されているわけではないと、歩きながら聞いてみることにした。

「ijiはどこなんだ？」

「大西洋連邦のアズラエル家の邸宅。ジャブローの戦闘で氣を失つたあなたはここに運ばれた」

ウェーヴのかかつた桃色の髪を翻して、ヒメノカリスは青い瞳を見せた。ラクス議員と同じで、とても綺麗な色をしていた。

「ザフトは、どうなつた？」

「多くが撤退した。アスラン・ザラもレイ・ザ・バレルも撃墜されていない」

ヒメノカリスはまた顔を前に戻してしまった。ヒメノカリスと顔を合わせるのはこれでわずか3回目になる。レイ隊長に言われた通り、シンはヒメノカリスのことを何も知らない。

赤い絨毯が敷かれていた。廊下にはいくつもの扉があつて、すぐ横の窓から外は中庭になつっていた、よく手入れされた花壇に色とりどりの花が咲いている。ここはおとぎ話のお城で、ヒメノカリスはお姫様。この妙な懐古趣味はエインセル・ハンターの趣味なのだろうか。だとすると、エインセルは何でも自分の思い通りにしなければ気が済まないのかもしね。家も娘も。

そんな男が、一体シンにどのよだな用があるというのだろう。いまいち本気になれないまま、シンはヒメノカリスの後についていく。長い廊下なのに誰ともすれ違わない。結局誰にも会わないまま、廊下は突き当たつた。突き当たりには別に他の部屋と何も変わらない扉がある。ヒメノカリスは装飾の施されたドアノブを掴んだ。

「ヒメノカリス！」

とつさに叫んだのは、確認をしておきたかったからだ。ヒメノカリスはドアノブを掴んだまま、首だけで振り向いた。

「何？」

「エインセル・ハンターは、どうして俺と会ひたがつてゐるんだ。俺は単なるパイロットで、そりや、仇で、うつとおしい奴だなんて考えられてるかもしれないけど、それなら、警備もない場所をさ、君と2人きりで歩かせたりする理由が、わからない」

結局、ちょっとした時間稼ぎがしたかつただけなのかもしね。未だにエインセル・ハンターと会うなんてことが実感を伴つてない。何にしても頭が働かなくて、無駄な仕草も多くなつてるようだ。

ヒメノカリスには、こんな感情、無縁のことなのだろうか。表情は変えないで、ためらいもなかつた。

「お父様に直接聞いて」

ドアが開けられた。ただ、今回はヒメノカリスが部屋の中から扉を押さえて、シンを招き入れてくれる。

夢でも見ているみたいだ。訳が分からなくて、現実のようで、同時に夢みたまにばかりしいような気もする。

(ヒメノカリスを見ると、その瞳はまっすぐにシンを見たまま、入室を待つていていた。覚悟が決まつた訳じやない。でも他にできることもない。)

シンはヒメノカリスに導かれるまま、部屋へと入った。

紙の匂い。部屋の中は本棚が整頓されて並べられていて、その匂いで満ちていた。どれも背が高い。部屋が2階くらいの高さがあつて本がぎっしり詰め込まれている。本は分厚いハードカバーのものばかり。中にはシンが見たこともない言語で書かれているものもあつた。

あまり本を読まないシンにとって、この本の量はそれだけでも圧倒されてしまう。緊張感を自覚して、心臓が嫌な鼓動を刻んで暴れ始めた。

「シン、お父様は」ひびり

本棚の間、本に取り囲まれた通路にヒメノカリスが入る。シンは意識して足に力を込めて、歩き出すために決意を固める必要があった。

本の匂いはどんどん強くなる。直射日光が本を痛めないよう室内に照らされた照明はどこか薄暗い。魔導書の1冊や2冊紛れ込んでいてもおかしくないような、そんな雰囲気だ。廊下に比べてどこか肌寒いのも、紙を痛めないための空調なのだろうか。

つい周りを眺めていると、ヒメノカリスは歩く速さを変えないままどんどん進んでしまう。こんなところではぐれたくない。駆け足で追いかけようとすると、突然ヒメノカリスが止まつたためぶつかりそうになつた。

別に特別な場所じゃない。何でもない本棚と本棚の間。ただ少し回りよりは明るい気がした。

「お父様」

ヒメノカリスは首を少し上に傾けていた。明るさの正体もそこにある。スポット・ライトみたいに周りよりも強い照明が脚立と、その上に座る人を照らしていた。

シンが今着せられているのと同じように無駄な飾りの多いシャツを身につけた男性は、澄んだ金髪を輝かせて、読みかけの本を閉じた。そして、その青い瞳でシンを見た。

若い男性だ。まだ30くらいの。でも、この人のことを、ヒメノ

カリスは父と呼んだ。では、この人が、この男が。

男性は微笑む。薄暗い室内で、そこだけに降つてくる光の柱の中、シンよりも高いところから。

「お初お目にかかります。エインセル・ハンターと申します」

母を失ったのは4年前。仇と知ったのはつい最近のことだった。それから、シンは何かを目指して、それでも目標なんて見えていかつたことに気づかされる。魔王なんて呼ばれるからって、不気味なマントの頭に角の生えた男を想像していた訳じゃない。それでまさかこんな人を想像していた訳じゃない。

「あなたが、エインセル・ハンター……？」

モデルか、映画俳優でもしてそうなくらい格好のいい人で、それがどうしても魔王の姿と重ならない。ΖΖ-X300ΑΑフォイエリビガンダムから覚えたプレッシャーと重なってくれない。

見上げる姿は照明と関係なくまぶしいくらいで、つい、この男が母の仇であることを忘れそうになつた。

「はい。あなたの母を殺した者です」

何かしようと決めてた訳じゃない。拳を握り固めて、足は勝手に前に出た。いや、出ようとした。

「シンー！」

シンのすぐ前に立っていたヒメノカリスが伸ばした手を後ろ手に

シンの胸にあてて止めようとした。驚いて、つい足が止まる。別にヒメノカリスに邪魔されたことに驚いた訳じゃなくて、あまり感情を見せてこなかつたヒメノカリスが大きな声を出したことについて戸惑つたからだ。

「お父様を害するなら、私はあなたの敵になる」

前に立つたままシンを横目に見る瞳には、怒りの色があつた。

この人は間違いない、ヒメノカリスのお父様であつて、シンの母親、マユ・アスカを殺したのはこの人だ。

不思議なくらい、怒りは長続きしなかつた。この人を見ていると、とても不思議な感じがする。別に格好いい人がいい人で、顔の悪い奴が悪人だと、そんなくだらない価値観なんてもつてない。ただ、魔王の瞳はとても青くて、そこには侮辱だと軽蔑だと、自分のことを殺そうとしているシンへの負の感情がまるで感じ取れなかつた。

どうしていいのかわからない。呆然と立ち尽くしていると、シンを止めていたはずのヒメノカリスの手がシンから離れて、父親思いの娘は近くの本棚に背をつけてシンとエインセルの間から立ち退いた。

薄暗い書庫の中からシンは、光指す書庫の中にいるエインセルを見上げていた。どうしていいのかもわからないのに、目を離すことができない。

魔王は静かに笑っていた。

「あなたは……、どうして俺をここに連れて来たんですか？」

自分を仇と狙う男を見てみたいだとか、自分の手で処刑したいだとか、そんな悪趣味なことを目的にしているようには見えない。

「あなたは私を仇と狙っている。それは何故ですか？」

先程まで読んでいた本を手に持つて、足を組んだ姿勢で脚立の上に、光を浴びながら座っている。そんなエインセル・ハンターから話しかけられた時、話しかけるじゃなくて、語りかけるといつも言葉の方が似合つ気がした。

「あなたが……、母さんを殺したから」

「それは資格にすぎず、理由ではありません。愛する者を奪われた故？ それとも、自分のものを奪われたことへの怒りでしょうか？」

口調も声の質もレイ隊長とはまるで違う。それなのに、どこか語り方がレイ隊長に似ている気がする。

「体外受精によって生まれたあなたは、母から優れた子であることを求められました。不安ではありませんでしたか、努力をやめてしまえば、結果を出し続けなければこの人は自分のことを息子とは認めてもらえないくなるのではないかと。軍学校では短縮カリキュラムとは言え、主席で卒業し、インパルスガンダムを受領した。まだ、努力し続け、結果を出し続けることがやめらることができない」

エインセル・ハンターがこんな一兵卒のことを知っていることが、どうしてだか不思議なことには思えなかつた。この人なら何でも知つてゐるんじゃないだろうか。そんな錯覚を覚えるくらい、声が透

を通つて耳から入つてくる。

それは、シンが田をそらし続けた出来事を掘り起こしてくる。

「母の愛を失いたくないと怯え、たとえ死別を迎えるようとそのための努力をやめることができない。私への復讐も、その一環なのではありますか。魔王を倒すほどの力を証明し、また母への忠誠を示すために。自分は母を愛し、そして愛される資格があるのだと自覚したいのではありませんか？」

母さんのことを思い出すと、いつも仕事熱心でスース姿をしていたことばかり思い出す。テストでいい点をとると讃めてくれて、嬉しかった。でもそんな時いつも、じゃあ、テストで悪い点数をとつたりびつなるんだろ？と考えていた。

嬉しかったはずなのに、でも、いつも母に怯えていた。

思わずエインセルから田をそらす。

わかつていたはずなのに。シンが、母の愛を疑つて、捨てられることに怯えて子ども時代を過ごしていったことなんて。調べようと思えばシンの経験くらい調べられる。心境だつて想像することだってできるはずだ。

なのに、エインセル・ハンターの言葉は、真実を言い当てるのではなくて、魔王が語った言葉が真実になつていくような、そんな恐ろしさを秘めていた。

確信と自信。自分の語っていることが真実であり、事実に他ならないと信じているからこそその言葉の余裕と鋭さ。

(この人は何で……！？)

自分のすべてを見透かされてしまったようだ、これは恐怖に近い。得体の知れない何かが恐ろしくても、それでもその正体を人は確かめざるにはいられない。

シンは震える瞳のまま、再びエインセル・ハンターを見上げた。

高いところで、天から降り注ぐ光を浴びながらエインセル・ハンターは何にも変わることなくシンが自分を見るのを待っていた。

「母に認められない自分が恐ろしく、想像さえできないのではありますか？」

「俺は……」

何か言いたいことがあつた訳じやなくて、何も言えないことはわかつてた。だから、ただ叫んだだけで終わってしまった。でも、何もしないでいることには耐えられなかつた。

「母を愛している。では何故試さなかつたのです？尋ねなかつたのです？母に、力のない私でも、あなたの息子でいさせてくれますか、愛してくださいますかと？」

「そんなこと……」

できる訳なんてない。もしもそうだと言われてしまつたら、ずっと感じ続けた恐怖が現実になつてしまつから。そんなこと、できるはずがなかつた。

成果さえ上げ続ければ母さんは息子として認めてくれる。だから努力して、成果を出して、それは母さんが死んでからもやめることができなかつた。

魔王の言葉は何も外れてなんていない。

「あなたには復讐する資格があります。ですが、復讐する動機がありません。あなたの復讐は、母に捨てられることに怯え、いつまでも足掻き続けることの延長線上でしかないからです。私は、あなたの復讐を成就させる必要性を覚えません。成果を出す、そんないくらでも代替のきく行為の一につすぎないからです」

何か言い返せるはずなんてなかつた。何かできるはずなんてなかつた。ただ、エインセル・ハンターを見上げてことしかできな
い。

「あなたの復讐は、復讐でさえありません。あなたは、復讐者でさ
えない。そして、復讐者ではない者に、私は倒せません」

エインセルは本を開いて読書に戻ろうとする。

「ザフトから捕虜の引き渡し要求は出でていませんが、お望みでした
らこの屋敷にいてもらひことも送還することも可能です。どうぞご
ゆるついで」

「あの人気が、エインセル・ハンター、ヒメノカリスのお父さんなん
だな……」

体は中庭に移つても心は書庫に置き忘れてしまった。そんな心地で、シンは同じテーブルに座るヒメノカリスに話しかけた。縁の芝生の上に置かれた白いテーブルに、すぐそばに立つ木が濾過した木漏れ日が柔らかく注いでいる。風がとても心地いい。

「そう。絶望の淵にいた私をお救いくださつた、最愛の人」

そう言いながら、ヒメノカリスは紅茶を飲む。シンの田の前にも同じ種類の紅茶があるのだが、ヒメノカリスの趣味か、やたら渋みの強いお茶でなかなか一息に飲むことができない。まだ半分以上をカップに残している。

「不思議な人だった。どうして俺のこと、あんなにわかつたんだろう？」

まるで、見てきたみたいに。それとも、あんな人が自然と人の上に立つのだろうか。

カップを置いて、ヒメノカリスはシンを見る。エインセル・ハンターとは違う輝きをした青い瞳が、シンを眺めた。

「お父様も、あなたと一緒にだから」

一呼吸置いてから、ヒメノカリスは話始める。

「お父様も、そのお父様から優れた存在であることを求められて作られた。でも、その人は優れた存在しか自分の息子とは認めなかつた。お父様は尋ねたそうよ。能力がなければ認めてもらえないのでしうつかって。もう、20年以上も前に」

ヒメノカリスはまた紅茶を飲み始めた。早く続きを聞きたいと、つい急かすように聞いてしまつ。

「それで……？」

シンにはできなかつたことをエインセルがしたのなら、その結果は、もしかしたらシンがたどつたかもしれない未来の一つだから。

「お父様はその男を殺した」

答えは、あまり聞きたくないものだつた。エインセル・ハンターの父親は、結局認められなかつたのだ。能力を持つ子どもしか、成績を上げる息子のことしか。自分のことでは決してないのに、胸にはひつかき傷ができた。今なら紅茶の苦とも何ともないような気がして、試しに口に含んでみる。

「あなたが同じかはわからないけれど、あなたとお父様はとてもよく似てる。でも自惚れないで。お父様と同じくらい格好いいなんて言つてゐる訳じゃないから」

つい紅茶を一気に飲み込んでしまつた。喉が熱い。ついでに蒸せた。じぼしてしまわないようにカップをつましく持つたまま横を向いて咳きをする。

よつやく喉が落ち着いたところで、少しふりふり文句を言つてやりたくもある。

「なんだよ、いきなりー」

だつてお父様の方が格好いいでしょ。さつとヒメノカリスはこんなこと考えてる。とても冷静な目をしたまま、紅茶を飲み干したらしかつた。置かれたカツプは空になつていた。その白い指先が用済みになつたカツプを離れ、シンの額へと伸びた。

「でも目は、少し似てる気がする」

視線を合わせて見つめられて、その眼差しが急に鋭さをました時、シンは思わず身を引いてその指から逃れた。椅子の背もたれにぶつかって、危なく倒れそうになつた。

「一つ、言っておく。もしも今後もお父様のお命を狙うなら、その前に私があなたを殺す」

そしてすぐにヒメノカリスは視線を元に戻す。元の、あまり感情を感じさせないものに。結局、シンは復讐するにしろされるにしろ、復讐からは逃げられないらしい。

「ヒメノカリス、君が最後に撃墜したインパルスには、俺の友人が乗つてたんだ」

氣を失う前に見た光景は、ルナマリア・ホークの乗るインパルスが白いウインダムに撃墜される姿だった。

別に恨み言を言いたいはずじゃないのに、つい呼吸が荒れて、ゆっくりと息を吸おうとして鼻息が大きくなる。

「そう。憎い？ 私のことが？」

「わからない。戦闘中のことだし、もしもヒメノカリスが撃墜しな

かつたら、ルナマリアは、まだ戦闘を続けていたと思うから。でも、勘違いしないでくれ。ルナマリアはあの時はおかしかったけど、普段は別に戦闘なんてしたくてしてた奴じゃなかつた

「母親を殺されたことは許せなくとも、友達を殺されたことには怒らないの？」

いいわけがないだろう。ただ理屈の上で逆恨みだつて自分を納得させてるだけだ。それなのに、ヒメノカリスは無神経だ。

「ヒメノカリスだつて俺が君の大切な人を殺したこと、恨んでるだろ。殺すチャンスなら、いくらだつてあつたんじやないか？」

「ステイングは戦士として死んだ。だから、あなたには戦士として死んでもらう」

「ルナマリアもそうだつて。でも、母さんは違う。殺されなきゃならない理由なんてなかつた！」

「だからお父様は言った。あなたには復讐をする資格があるって。でも、あなたは動機をなくしてる。お父様は以前言つてた。復讐はどれほど綺麗に飾つたところで、本能の命じた、仲間を守るためにの防衛本能にすぎないって。大切な人を殺した相手はまだ誰か大切な人を傷つけるかもしれない。だから、そうなる前に殺せ、そう、本能が命じているだけだつて」

奇妙な関係だ。シンはヒメノカリスに友達を殺されて、シンはヒメノカリスの弟を殺した。エインセル・ハンターの言葉を借りるなら、どちらも復讐の資格を持つてることになる。

(何なんだよ、復讐つて！？)

ヒメノカリスが言つてくれていることはうまく理解できない。何となく、復讐がよく言われているくらい綺麗なものじゃないってことくらいわかった。

「お父様があなたのお母さんを殺したのは結果。本当はオープを予防処置として始末しておきたかっただけ。これは資格のない復讐。あなたは動機のない復讐者で、お父様は資格のない復讐者」

復讐が、危険な存在を排除することではないなら、それは何となく言いたいことはわかる。シンは資格があつても、エインセルに復讐する理由がなくて、エインセルは理由があつても資格がない。ただ、復讐を予防処置という考え方で捉えるなら、シンもエインセルも何も変わらない。きっと、ヒメノカリスが言いたいことはそんなこと。

「あなたはお母様のために戦うことに戸惑う。そして、あなたには守るべきものが何もない。お父様は嫌なの。そんなお母様に誓めてもらうためだけのことで復讐を気取られることが。それなら学校にでも戻って、先生に華丸でもつけてもらいまさい」

言い返すことなんてできなかつた。ここで言い返せるなら、きっとエインセルにも何か言い返すことができただろうから。エインセルにしてもヒメノカリスにしてもシンは自分というものを見せられないでいる。自分の考え方がないのだ。何を話しても誰と話してもきっと同じだ。

シンは何も話せない。

「お父様はこの屋敷で好きにしていいって仰った。好きなだけいてくれていいから」

2人は何を話してるんだ。ここからじやさすがに聞こえない。でも、これ以上近づくと姉ちゃんに怒られる。だからアウル・ニーダはこうして2階のベランダからヒメノカリスとシン・アスカとか言う男の様子を眺めていた。

何でもないような男だ。別にエインセル・ハンターみたいな男前じゃないし、ネオ・ロアノークやアーノルド・ノイマンみたいな歴戦のエースって訳でもない。

(あんな奴に殺されて、ステイキングの奴何やつてんだよ?)

もつと鬼みたいな奴か、見ただけでエースてわかるようなのを想像してた。完全に期待はずれ、退屈だ。思い切りあぐびをしてやろうと、口を開いた。ちょうどその時だ。隣からいきなり声をかけられたのは。

「何をしているの、アウル?」

思わず息を飲み込む。変なところに入つた空気に思わずむせかえつて、アウルは喉をさすりながら隣を確認する羽目になつた。

手すりの上に置かれたプロジェクターから真紅を投影する光の柱が立つっていた。いい加減、神出鬼没すぎるお人形だ。

「真紅か……、びっくりさせんなんよ」

「こちらの質問に答えなさい」

本当に上から目線。いつものことで、今更反抗してみたいとも思わない。アウルは手すりに寄りかかった頬杖をついた。これで、真紅と目線の高さが合づ。

「ステイングを殺した奴がいるって聞いてな。顔くらい見てやろうつて」

視線の先ではシン・アスカだとか聞かされてる男とヒメノカリスが向かい合つて座っている。真紅もシンのことを見ているようで、アウルと視線を並ばせている。

さて、真紅はあの男にどんな感想を言つんだらう。気になつて横を見ると、真紅と目があつた。

「アウル、復讐心は捨てなさい」

いきなり何を言われたのかよくわからないで、瞬きの回数が増えた。何言ってんだよ、そう聞こうとする前に真紅は体をまっすぐにアウルに向けた。シンのことを問題にしないよつこ。

「もつと強くなりたいなら、復讐心は捨てなさい。あなたの心に復讐ある限り、あなたはこれ以上強くはなれない」

「んな精神論聞かされてもな……」

「精神論ではないのよ、アウル。意識の加速もハウinz・オブ・ティンダロスも、根底にあるのは完璧な敵の行動予測。そのためには、

静かな水面の如き心の平穏が必要よ。仮に、あなたが目の前に仇がいるとして、それでも、ここで相手を看過した方がよいと判断した場合、何のためらいもなく見過しきすことができるかしら?」

少し考えてみて、やつぱりそんなことができそうにない。チャンスがあるなら確実にしとめてやるくらいに考へてた。

「いや……」

「あなたはそうして、自分の予測を裏切つてしまつ。どれほど強くなろうと、どれほど予測が完璧であろうと、あなたはそれを活かせない。復讐心ある限り、そこまでがあなたの力の上限になつてしまふ」

口では真紅に勝てない。何か言い返してやりたくて、唇にばかり力が入る。結局、唇を固く結んだまま開けないだけだった。

「強くなりたいなら、強くなる意味を考えなさい、アウル。復讐といつ料理は冷まして食べるものだわ」

「そんなことできるかよ!」

「まだまだ子どもね

歩き去るアウルの背中を見送つて真紅はため息をついた。ネオ・ロアノークが立つたのは、弟子に手を焼く娘の隣だった。アウルがしていたのと同じように手すりに肘をついた。こうしていると、中庭をほどよく見渡せる。

「実際、アウルは強くなつたよ。さすがにゲルテンリッターの相手は無理だろうけれど、大概の敵にひけをとらない動きを見せるようになつたからね」

「鉄は熱いうちに打つものよ、お父様」

真紅のこの生真面目さは一体誰に似たのだろう。ゲルテンリッターは本当に子どもと同じだ。親のコピーではない。

「でも、あのシン・アスカというザフト兵、私も興味があるわ。ジヤブローで見せたあの動きは、明らかにハウinz・オブ・ティンダロスの訓練を受けた者の動きだつたもの」

「翠星石が特訓でもしてたんじゃないかな？」

同じ部隊として行動していたなら、翠星石とシン・アスカという少年が接触していてもおかしくはない。少なくとも、エインセル・ハンター相手にあれほどの動きを見せることができるほどのパイロットのことを見たことがないというのも不自然な話だ。

「お父様、私にはエインセル様の御心がわからない。どうして自分を仇と狙う男を屋敷に引き入れたりするのかしら？ この疑問は、私が機械だから？」

少し笑つてもいいだろ？

「人間は君たちと比べても上等な存在じゃないよ。僕だって兄さんのしていることは理解できない」

「不思議ね、人って。アスラン・ザラとは理解しあえないから争つて、でも、エインセル様とは理解しあえないのに手を取り合つてゐるなんて」

「反対に理解してゐるからこそ起つて争いもある。大切なことは互いに理解することではなくて、相手は自分とは違うと受け入れることだよ」

言われてみるととても不思議なことに思える。このシン・アスカという少年に、あのエインセル・ハンターが気をかける理由は思いつくものではない。それに、仇をわざわざ屋敷に招き入れることもわからない。

結局真紅も人も、考へてることは大差ない。

娘はすぐ横にいる。ただの立体映像で、頭を撫でてあげることはできない。それでも、ネオは真紅を抱きしめるようプロジェクトマーのすぐそばに立つ。

「真紅。僕もゼフィランサスも、君たちに心を与えたことを悩んでる。君たちを確実に苦しめることになるとわかりきつてゐるからね」
「苦しいからと言つて、産んでくれた親を恨むのは筋違いよ、お父様」

「僕はいい娘を持ったよ。だから、少しでもいい親でいたい。あの時、そう誓つたから」

あれは、もう2年も前のことだつた。当時はまだファントム・ペインが設立されてはおらず、白い軍服だつた頃の話だ。

通されたのは診察室。病院独特の白い壁に白い床。薬品の独特の臭いが夜の暗さを無理に引き裂く照明の明かりの中を漂う。どこかユニークス・セブンの実験所を思い出す。ネオは病院という場所が好きにはなれなかつた。

白衣を着た男性が椅子から立ち上がってネオを迎えた。愛想笑いを浮かべるでもなく、その医者は手を差し出した。診察に訪れた訳ではない。ネオは初対面の挨拶として握手に応じた。

「初めてまして。細君の担当医で、ミハイル・コーストと申します」

優秀で冷静。同時に、どこか冷たい印象を、コノドクター・ミハイルからは受けた。

「ネオ・ロアノークです。それで、お話とは？」

ネオが急かすが、ミハイルはまず着席を促した。診察に訪れた患者と医者の位置でネオとミハイル医師は腰掛けた。すると、今度は促すまでもなくミハイル医師は話し出す。

「君のよつなことを告げるのは心苦しいのですが、検査の結果、あなた方のお子さんは高い確率で障害を持つていてることがわかりました」

言葉ほどためらつた様子はなく、慣れた様子に思える。ネオがあからさまに表情を曇らせてみたところ、気にしたようには見えない。

「出生前診断なんて依頼してません」

「ええ、ですから私の私費でやらせていただきました。個人的には、どちらか、あるいは両方が障害を抱えておられる」夫妻の場合、診断を行うべきと考えています。そうすることでも早い段階から胎児にどのような障害があるのかが明らかになり、治療の準備を進めることができます。また、言葉を選ばせていただくなら、母体に負担にならない内に次の機会を得ることもできるでしょう

別に睨みつけたわけじゃない。ただ、不機嫌を隠せた自信なんてなかつた。それをまったく意に介したようには見えない医師の態度にはやりにくさを感じる。

「墮胎しろ、そういうことですか？」

「歯に衣着せぬならば」

ネオの答えは決まっている。単にどう言つてやうか考えていただけだ。それを、ドクターは中絶の決断がつかないとられた違えたらしかつた。

やや前ががみに、どこか親身に話に応じようとしているように見えなくはない。表情はほとんど変えていないが。

「お考えください。人は誰だと障害者になど生まれたくはありません。仮に生まれてしまつ不幸があつたとしても、それは我々の手で如何様にも回避できる」となのです。不幸な子どもを作らないためにも、決断が必要です」

「検査技術とて完全ではないでしょう」

「現在は飛躍的に発達しました。以前は5%の確率でダウン症になる確率が30%あることしかわからないなど、いい加減な診断の下、墮胎の選択を迫られたようですが、今は違います。お子さんは、確率論とは言え、ほぼ間違いなく障害児です」

苦いものを歯んだような味に耐える間だけ口を噤んでいた。それでも相手に話しだされたほどの時間を与えないで済むんだのは、これ以上余計なことをされたくないという意識故だ。

「妻には？」

「ほぼ同じ内容をすでに聞きいていただきました」

それとももう手遅れだろうか。

「ドクター、あなたが何をお望みにしろ、私は、障害者が不幸だとは考えていません」

「それは理想論です。障害を持つことは明らかに不利であり、また人は軽はずみに障害者を差別し、傲慢な同情を押しつける。障害を持つことが不幸でないとしても、結局は社会が不幸にする。結論は何ら変わりません」

「この手のタイプを説得するのは骨だ。自分の理屈が正しいと思いつこんで、他から情報を得ると言つことができない。人間は、自分が異常だと気づけない時が、一番恐ろしい」

「決断はできうる限り早い」とをお勧めします。時が経てば、それだけ母体への負担が増えることになりますので。お2人ともまだ若い。また次の機会もあると」

もう、この医師と話すことは何もない。それよりも早く妻に会つて様子を確かめたい気持ちに駆られて立ち上がった。

「妻と話します」

ドクターは何も言わなかつた。

それからすでに2年。その時まだ生まれていなかつた娘、真紅を腕の中に抱いて、ネオは自らに言い聞かせるように、誓いを新たにするように口ずさむ。

「真紅。君は機械で、僕は人だ。でも、人の親子関係が血縁を必要としないように、君たちゲルテンリッターは間違いなく僕とゼフィランサスの娘だよ」

「お父様も、私たちのお父様です」

ひれ伏しなさい、誓いなさい。これから世界は二つに分かれます。従わせる者と従うものではありません。自らの意志で立つ者と、他人に意志を与えられる者に。弱き者は後者でありなさい。それが分というもの。力がなくとも立ちなさい。無力を言い訳にすることは許しません。

世界よ良かれと願うなら。

認められない悪意があるのなら。

次回、GUNDAM SEED Destiny ∞ Blume
Einbrecher

「跪いて私の靴をおなめ」

メルクールランペ。この新しい力とともに。

第30話「跪いて私の靴をおなめ」

久しぶりに屋敷に帰つてみると、自慢のシアター・ルームが反体制ジャーナリストの巣窟になっていた。タッド・エルスマン議員はプラント最高評議会では唯一の非主流派として認識されている。非主流派と反体制派。気味の悪いほどお似合いの組み合わせに、タッド・エルスマンは苦笑せざるを得なかつた。

部屋には資料の束が積み上げられ、何脚もあつたはずの椅子はその多くが隠れて見えない。国民の圧倒的人気を誇るギルバート・デュランダル議長を相手に繰り広げた舌戦の疲れを癒すことはできそうにない。

「我が家が反体制派の拠点になつているとは噂には聞いていたが、これはすごいものだね」

愚息が記者を連れ込んだ結果らしい。それも女に頼まれる形で。我が息子ながら女で身を滅ぼす典型的のような男だ。4年前の戦争でも、ティアッカ・エルスマンはとかく女性に振り回された。今ここに息子の、ティアッカの姿はない。代わりにタッドのすぐ後ろで大きなバイザーをつけた女性が深々と頭を下げた。

「申し訳ありません」

「君が謝ることではないよ」

「この女性は、リーカ・ショダーはよくやつてくれている。私設秘書の肩書きながらタッドが留守の間は女給のよつた手間仕事さえしてくれていると聞いている。」

さて、そうなると、秘書に家事までさせているどう息子の居場所が問題となる。

「それより、馬鹿息子はどこかな？」

「今、ジョージ・グレン記念館に行っています。人と会う約束があると仰っていました」

ジョージ・グレン記念館。ファースト・コーディネーターとして知られるジョージ・グレンの功績を讃え作られたものであると受付のすぐ横には書かれていた。

博物館らしく強すぎない照明の廊下は薄暗い。展示物はジョージ・グレンが成し得た功績が並べられている。C.E.15年に受賞した生理学賞受賞のメダルと表彰式の様子。C.E.20年にはオリンピックのクレー射撃で5位入賞。その翌年に当時の大西洋連邦大統領の応援演説で熱弁を振るつた事実とその写真が添えられている。

さらに先に進むと、そこは一際大きなスペースが取られていた。吹き抜けの天井に大きな宇宙船の模型が吊されている。葡萄の房を横に倒したような、そんな形の船だ。支柱となる細く長い船体の上下左右に大きな球形のドームがいくつも取り付けられている。この船の姿も名前も、この時代に生きる人なら誰でも知っている。

ツイオルコフスキー。

ジョージ・グレンが人類市場初の有人木星探索に使用した船の名

前なのだから。

控えめであつたライトが急に明るさを増して、それはコーディネーターの輝かしい歴史の始まりを示す演出かもしれない。

C.E.23年。ジョージ・グレンは木星へと旅立つ寸前に大きな大きな告白をした。自らの出生について語り、当時はまだデザイナー・チャイルドと呼ばれていたコーディネーター技術を世界に暴露した。

世界が二つに割れた瞬間だった。

この後、ジョージ・グレンは14年にもわたる長い旅を行つたことは、この吹き抜けの広間が細長い通路を構成していることで表されているのだそうだ。そしてこの先にはやがてプラントを建国し、ユニウス・セブン、血のバランタイン事件で死去するまでの輝かしい栄光が記されている。

そのことに、アイリス・インディアは興味を持てないでいた。Iのヴァーリとしてジョージ・グレンと面識があるからだ。この博物館ではまるで人類の救世主のように描かれるジョージ・グレンが、実はコーディネーター至上主義者でナチュラルを見下していたことを、アイリスは知っている。

IIIには約束の場所でしかない。

あまりジョージ・グレンのことには触れたくないといつ足早になってしまったアイリスがまずツイオルコフスキーの模型の下に入つた。頭上の宇宙船を見上げると、後ろから杖をつく音が聞こえてくる。振り向くと、ナタル・バジルールを先頭に、杖をついたディア

ツカ・エルスマンにつきそういう形でフレイ・アルスターが続いている。何故か、ケナフ・ルキー一までもが最後尾についている。別に呼ばれてないのに。

(ケナフさんて、少し苦手だな……)

別に悪い人とは思わないがヴァーリへの情熱が何か偏屈というか、言つてしまふなら変質的でヴァーリの一人としてはどうしても苦手意識が芽生えてしまった。目が合つてしまわないように、前に視線を戻す。すると、約束の人は時代を遡る 順路とは逆の流れでようやく、ジョージ・グレン栄光の1年航路へと足を踏み入れた。

赤いドレス ゼフィランサス・ズールやヒメノカリス・ホテルのものとよく似たデザインをしている を着て、黒髪はお人形のようなロールで、顔はヴァーリ。Nのヴァーリでダムゼル。ニーレンベルギア・ノベンバーがサイ・アーガイルを連れてアイリスに手を振った。

「こんなには、アイリス。ゼフィランサスの結婚式以来だけど、覚えてるかしら?」

「ニーレンベルギア姉さん。それに、サイさんも」

かつての学友は、子どものように無邪気な笑顔で頷いた。記憶がことごとく破壊されてしまった友人の姿に、アイリスは素直に再会の喜びを示せないでいる。それはフレイも同じらしく、どこか話しがぎこちない。

「個人的には複雑なところだけね。サイのこと考えると」

「一ーレンベルギアは悪くないよ」

サイのこの素直な言葉に、今度表情を曇らせるのは一ーレンベルギアの番だった。戦争は誰のせいでもないとしてしまうにはあまりに悲惨で、それでも誰かのせいだとしてしまつのもやはり悲惨。一ーレンベルギアのことを責めるつもりはなくとも、労つてあげることもできやうにない。

人体改造の罪を背負う少女はふと顔を上げると、急に表情をひきつらせた。その視線の先には、ヴァーリの天敵が笑っている。

「ケナフさんまでいたんですね……」

「あんた、本当にいろんなヴァーリにちよつかいだしてんのね？」

「一ーレンベルギア、君は相変わらず艶やかでいい」

フレイの嫌みにもケナフはまったく動搖した様子はない。記者にはこんな神経の太さも必要になるのだろうか。ただ、そんな動じない強さならナタルも持つていることをアイリスは知っている。

「それで、用件とは？」

ナタルがこつこつ一ーレンベルギアに問いかけて、ようやく話が動き出した。

「実はね……」

一ーレンベルギアは立てた人差し指を自分の唇に当てて、いたずらっぽく話を始めた。思いも寄らない恐ろしい計画の話を。

月は古来より信仰から習俗、体内時計から潮の満ち引き、地球の自転までありとあらゆる影響を地球に与えてきた。太陽をのぞけば、もっとも重要な天体と言つても過言ではない。時代がC.E.に移つたところでそれは変わらない。それどころか、なおいっそう重要性を増している。

地球から見た月の裏側のラグランジュ・ポイントにはプラントが國土を構えている。ニュース・セブン休戦条約では月面上はプラントと地球各国が表側と裏側を折半している。

地球上としてはプラント侵攻のための重要な足がかりである。プラントにとってはヤキン・ドゥーエ、ボアズを失った現在、最重要防衛線として機能している。まさに宇宙戦線の最前線である。

ただし、大西洋連邦軍を始めとする宇宙軍はC.E.71年末のヤキン・ドゥーエ攻略戦において甚大な損害を被つたことで、まだ戦力を回復しきれてはいない。もとより宇宙軍を持たない世界安全保証機構軍も少なくはない。ザフト軍とて地球と宇宙の両面でことを構えることを避ける傾向にあった。

大気を持たない地球の盟友は、不気味なほどの静けさをたたえていた。

月は、静かなほどに地球を見下ろしている。

月はそんな月の上。空には地球がその大きく丸い青をさらしている。そこは地球の表側。地球各国が使用している場所、そ

の上空である。

ダーレス級MS搭載艦の艦隊が整然と漂っている。いまでは伝説のように語られるアーク・エンジエル級の設計思想を受け継いだ戦艦2列縦隊に並び、その列と列の間に特に何の変哲もないダーレス級が守られるように鎮座する。

その眼下。多数のクレーターが穿たれた月の大地には谷間の中を這うようにいくつもの構造物が放射状に伸ばされている。その中心には、クレーターにも似た円形の構造物が月の表面に張り付いている。何とも巨大な構造物である。上空のダーレス級が1隻まるごと入ってしまうほどの大ささである。

この構造物を上から覗き込んでいるのはヒメノカリス・ホテル。ダーレス級ガーティ・ルーの下部展望室の窓越しに蓋を乗せられたクレーターのような構造物を無言のまま眺め続けている。

ヒメノカリスは知っている。この構造物は、ジャブローにあつたものと同じもの。コグドラシルと呼ばれる、お父様、エインセル・ハンターが作らせたもの。そして、エインセル・ハンターが求めたのはユグドラシルばかりではない。

窓から目を離し振り向く。すると、展望屋にはまだ2人がいる。アウル・ニーダは椅子に反対向きに座り背もたれに顎を乗せた、悪いくつろぎ方をしていた。ステラ・ルーシェは椅子に座つて何やら難しい顔をしてハード・カバーの本を眺めている。エインセルからもらったもので、ステラは苦労しながらも読もうと努力を続ける。

この妹と弟も、エインセル・ハンターが必要としているもの。だ

から、自分も必要とされ続けなければならない。

ふと、アウルとステラがほぼ同時に展望室の扉を見た。特に変わった様子はない。それでも、スライド式の扉がそれからすぐに開き、軍帽を口深にかぶつた、如何にも軍人を思わせる男性が姿を見せた。2人には、このことがわかつていたのだろうか。

「しばらくぶりです。ヒメノカリス大尉」

男は帽子を胸の前に持つと軽く会釈をした。階級章は少佐。見覚えのある顔に、ヒメノカリスもまた、スカートの裾をつまみ上げて礼をする。もつとも、アウルはよくわかつていないうらしい。椅子にもたれたままにべもない。

「おっさん誰だよ？」

「イアン・リーだ。君とは以前にも顔を合わせたはずだが」

小さく息を吐いて、イアン・リー少佐は帽子を頭に戻す。フィンブル落着とともに地球に降りるまでお世話になっていた戦艦の艦長に、アウルは関心を払おうとはしない。もつとも、当時からアウルはこんな様子だったが。

「ああ、ヒメノカリス姉ちゃんに色目つかつてた奴か。忘れてた」

イアン少佐としてもすでに慣れてしまつているらしい。アウルをほうつておくと、またヒメノカリスへと向き直つた。

「調整はすでに完了しています。そしてこれが、アポロン。懐かしい『ロニー』ではないかと」

展望室備え付けのモニターをイアン少佐がリモコン操作すると、そこには未完成の「コロニー」が映し出された。円筒状で、まだ両端が閉じられていない。完全な筒である。これでいい。この未完成こそが、完成形なのだから。あの時の損傷も、すでに修復されているようだ。

「あそこでシンの部隊に襲撃されて、また戻って来た」

「シン？」

イアン少佐にとっては耳慣れない言葉だった。あの時コロニーを襲撃したインパルスの小隊のパイロットの名前だと聞かせても、それからのことを話して聞かせると長くなる。

ヒメノカリスは小さく首を左右に振る。

「何でもない。お父様は、世界樹の起動を許可された」

「南アメリカ合衆国よりデータは届いています。お望みとあれば、今すぐにでも」

穏やかな唇下がり。シンはひどく落ち着かない様子でティー・タームに入っていた。ここはエインセル・ハンターの屋敷で、初対面の人と同じテーブルを挟んでいれば当然だ。

相手は男性で、車椅子に座っている。サングラスをかけていて顔はよくわからないが、どこかエインセル・ハンターと似た雰囲気を

持っている。余裕を持つてティー・カップを口元に運んでいる様子がそう思わせているのだろうか。

男性 ブルーノ・アズラエルと名乗った は笑っている。

「確かに君は敵だが、もつとくつろいでくれてい。古今東西、客人をもてなさない国はないものだ。もつとも、なかなかそういうものだらうがな」

皮肉が好きな人らしい。どうやら紅茶を飲み干してしまったらしい、ティー・カップをテーブルに置いた。するとそばにいた女性スース姿で、別にお手伝いさんやメイドさんではないらしいが紅茶を継ぎ足した。ブルーノ・アズラエルがお礼を言いながらマリューと呼んだところをみると、ビーフやハムマコニーといつ頃からしい。

シンは理解できぬでいた。何故この人は自分を茶会になんて誘つたのだろうかと。

紅茶も飲まずブルーノのことを眺めていたせいだろうか、相手は気づいたようだつた。ティー・カップへと伸びていた指がぴたりと止まつて、何かおかしそうに笑つた。

「君は、自分のことを難しく捉えすぎているのではないかな」

意味がわからぬまま始まつた会話は、始まつても意味がわからぬ。

「エインセルは何かと理屈っぽいものだが、真理といつものはいつ、どじでも変わらない。たとえナチュラルであるうと口一ティネータ

ーであるうと、遠く離れた異星人であるうと、ピタゴラスの定理はピタゴラスの定理のままだ。根本的な部分は変わらないということだ

やはり、ブルーノとエインセルはどうか似ている。尋ねてているようで、実ははじめから正しい答えを持っていてだから口調がよどみないところとか特に。

「そして、君には焦りがある。いつまでもここにいていいとは考えていないが、何ができる訳でもない。だが、世界は動きを止めていってはくれない」

「でも、俺がいてもいなくても、世界は回り続ける」

結局、シン・アスカはシン・アスカでしかなかつた。オープ出身のザフト兵で、勲章こそもらつたけどエースと呼ばれる人と肩を並べるほどでもない。母の仇を前に何もできなかつた一兵卒でしかない。

シンがいてもいなくとも世界は何も変わらない。結局、シンの一撃はエインセルには届かなかつたように。

サングラスをかけていて、どうせ目なんて合わなくとも、シンは視線を下げてブルーノを見ないようにしていった。

「もう諦めることができるのならそれでも結構なのがね、だが、エインセルは足を止めるつもりはない」

そんな不気味な一言に、シンは思わず顔を上げた。まだ首の上げ方が足りていない。本当に見るべきは遙かな頭上、宇宙の暗闇を抜

けた先なのだと知らないままに。

ガイ・ムラクモは地球、大洋州連合ベルファストで生まれたコーディネーターである。父親がコーディネーターであり、ナチュラルである母とは息子に遺伝子調整を行うかどうかで紛糾したと聞かされている。少なくともわかっていることは、両者がともに歩み寄ることができなかつたという事実。

両親はガイが5歳を迎えた時に離婚を選んだ。ガイは父に引き取られプラントへと移り住むこととなつた。

父はナチュラルであつた母の悪態をよくついた。酒に酔つてはコーディネーターの偉大さを語り、ナチュラルを扱き下ろした。ガイは相手にはしなかつたが、父はただ怒鳴り散らしてさえいればそれで満足だつたらしくそれを責めることはなかつた。

15を迎えた時、ガイは家を出た。全寮制の軍学校に入学するため、国のために死んでこいと父は大喜びでガイを送り出した。ただ、偏狭な父から離れることができればそれでよかつた。

だが、他人の話を無視し続けることになってしまったいたらしい。軍学校ではいつも無愛想で付き合いづらい奴だと思われていたようだ。サングラスを愛用し始めたのは、ちょうどこの頃のことだ。

軍学校卒業後、時はC.E.67年。地球との戦争が本格化した時とちよつど重なつた。赤服は受領できなかつた一上官を殴りとばしたのがまずかつた一が、ZGMF-1017ジンで戦争をかけた。大戦末期にはヤキン・ドゥー工攻防戦に参加しムルタ・アズラエル

のガンダムと刃を交えたことがあるのはちよつとした自慢だ。

そして現在、C.E.75年には24を迎えた。ヘルメットの中でさえサングラスを手放せない。感情がないわけではないが、少なからず必要に表情を変えることはない。父に母の悪口を聞かせられ続けた時から、少しも成長はしていないようだ。

今もまだ、ザフトの兵としてお国のために、コーディネーターのために戦っている。ジンに始まり、何度も乗り換えた機体はすでに9機目になる。NZGMF-1000ゼタにはブレイズ・ウィザードを装着することを好んだ。機動力に優れるこれが一番融通がきく。

特に、今回のような威力偵察には適任だ。

月面ダイダロス基地に所属するガイに下った命令は不自然な動きをする地球軍艦隊の偵察である。ガイが小隊長を務める小隊を含む1個中隊が任務にあたった。

月面からさほど遠くはない宙域に、それはすぐに見つけることができた。巨大な筒だ。未完成のコロニーが側壁に取り付けられたロケット・エンジンの推力で微速前進している。他にダーレス級MS搭載母艦が2隻。

上層部は「ロニー」を用いた質量兵器を警戒しているそうだが、蓋の閉じられていないコロニーはそれだけ脆い。

(円に落とすつもりはないようだが……?)

「こいつは一体?」

言葉を発したのはガイではない。部下のイライジャ・キールが通信越しに発した声だ。モニターにはくすみのない金髪の美少年が映し出されている。

ガイは冷めた眼差しを部下に向けた。戦闘が想定されているというのに、イライジャはまだヘルメットをつけていない。だからその金髪がよく見えたのだ。軍学校を出たての部下に一言注意し、ガイはモニターをオフにする。すると、モニターには簡抜けのロロニーが隠すところなくその姿をさらす。

「単に建造途中の『ロニー』を運ぶにしては物々しいが、こんなもので何ができるとも思えん。こんな何もない宇宙に何の用がある?」

ガイが言い終えるか早いが、モニターにいくつもの光源が現れる。ガイはヅダを反射的に動かした。

「ガイ、撃つて来つたぞ!」

言われなくてもわかっている。隊長と呼べ。さて、どちらを言つべきか悩んでいる内にも敵の攻撃は続いている。幾筋ものビームの輝きが友軍の間を通り抜けていく。

「迎え撃つ。サポートは任せる」

「おうー。」

敵の大半はGAT-01A1ストライクダガーだが、数こそ少ないとは言えGAT-333^{ディー・ヴィエイト}ガンダム、ガンダム・タイプの姿さえあった。

(たかが未完成の「ローーにそれほどの価値があるのか?」

どう眺めたところでただの「ローーにすぎない。ところが、ガイ
が見つめる先で、ローーは思いもよらない動きを見せた。突如動
きをとめ、逆噴射をかけたのだ。

「馬鹿な、こんなところで制動をかけるだと?」

「この意味を、ガイを含め世界中の人々が知ることになるまで、も
はや時間を待つ必要はなかった。

「シン・アスカが戦死したらしい。ここは是非とも国葬でも実施し
て、士気を盛り上げたいと考えている。どうかな? アブティエル
でも英雄として死ぬことができる。シン・アスカもそこそこの知
れた存在だと示すことができる。スピーチの内容は、もう考えたん
だけどね」

アプリリウス・ワン。議長室にて、お決まりのよつにソファーに
座り、お決まりの相手が向かいに座り、お決まりの返事を待ちなが
ら、ギルバート・デュランダル議長はスピーチの草稿を顔の高さに
まで掲げて見せた。

アプリリウス市選出の議員であるとは言え、議長に比べれば遙か
に下の権限しか持たないラクス・クライン議員へと。

ラクス議員は綺麗な顔のまま、耳通りのよい声で、ギルバートの
考え方を否定する。

「以前もお話をしたはずです。このプラントはコーディネーターによつて創られた国であり、その恩恵はコーディネーターの為にあらねばならないのです」

「しかし、彼もコーディネーターであることに代わりはないじゃないか？」

「人にはそれぞれ分というものがあります。それを踏み外すことは一切認められてはなりません」

やはり、とりつく島もない。本当ならため息でもつきたいところだが、ここはラクス議員の前だ。曖昧な笑い方にとどめておくことにしよう。

「ラクス議員、君のそんなところは損な性格ではないかな。わざわざ進んで敵を作る必要はないよ」

「私たちに敵は必要です。そして、それは大きければ大きいほどによいのです」

ブルー・コスモスは恐ろしい。エインセル・ハンターは恐ろしい。そんな危機感を煽る形でクライン派は確かに指示を広げている。だが、その分だけアブディエルや潜在ナチュラルを中心として不平、不満が広がっている。

エインセル・ハンター抹殺後の政権運営を考えるなり、このようば両極端な政策は決して得策ではないと考えるのだが。

「私には、到底理解できないな」

果たして聞こえるかそれとも聞こえないのか。つい悪戯心でそんな声を出してしまった。さて、ラクス議員の耳には届いたのだろうか。そのことを確認する前に、扉が勢いよく開け放たれた。

ラクス議員腹心の女性、マティス・クラインは当然のように、この部屋の主の名ではなくラクス議員のことを呼ぶ。

「ラクス様！ 資源衛星が攻撃を受けました！」

月面、既知の海にクレーターを模したような円形構造物の蓋が左右にスライドしていく。地球の10分の1もない月の直径を貫通してしまうのではないかと錯覚するほど、姿を見せた穴は深く暗い。しかし、それも数瞬のこと。やがて、穴の中に光が生まれた。

かすかな火の粉が穴の底に生じ、何事かと覗き込むまもなく光は急速にその輝きを増す。底から瞬きさえ許されない速さで膨れ上がり、瞬く間に穴から溢れ出す。光が溢れた。

光が柱となつて立ち上り、月面に巨大な光の剣を突き立てた。その穂先は闇を引き裂きながら突き進む。その先には何もない。地球を狙うでもなく、ただ虚空へと消失していくはずの光が、突如向きを変えた。

先触れがなかつた訳ではない。何でもない、未完成のコロニーの筒の中を光は通り抜けた。ただそれだけをきっかけとして光が曲がり、次のコロニーへと向かっていく。そして光は筒を通り抜ける度当然のように軌道を変え、それは月面からでは狙い撃ちようがない角度へと突き進む。

資源衛星。戦争の長期化を懸念したザフト軍によつてC.E.7
2年初頭に建築が進められた要塞としての機能を兼ねる拠点である。
かつてプラント最後の砦であつたヤキン・ドゥーエの規模には遠く
及ばないが、全5つの要塞が資源の確保、兵器の製造、防衛拠点の
重責を担つてゐる。

その内の一つである。アステロイド・ベルトから資源確保を目的
に連れてこられた岩石のはぐれ子を要塞として改造し、そのためそ
れは宇宙に浮かぶ巨大な岩石のようであつた。その周囲に戦艦が漂
い、附近を警戒して飛び回るモビル・スーツの姿がなければ見過ご
してしまひしどうだ。

まず最初の異変に気がついたのは、そんな警邏に従事するパイロ
ットたちであつた。

異常光源の接近。ZGMF-1000Gダを中心とするモビル・
スーツが一斉に首を回し、モノアイを單一方向へと向けた。太陽が
そのまま体当たりを仕掛けてくるほどの光と熱であつた。カメラ保
護のためにフィルターが降りる。そんなものは、何の意味もなかつ
た。

光が近づき、まず浮遊する小型のデブリがくすぶり始めた。表面
が泡立ち、反射度に乏しい岩石がそれでも白い光を照り返す。

モビル・スーツに耐えられる熱量ではない。熱に弱いレンズが碎
けた。続いて武器、弾薬が炸裂する。装甲さえその頃には爛れ、蝶
細工の人形のように人の姿が伸びてたわんで消えていく。

塵は塵に。灰は灰に。高熱を前にすべてのものがあるべき姿へと

還元されていく。人が手を加える前の、宇宙開闢の原初の姿へと。

光は要塞へと巨大な楔を打ち立てた。光が暴れ、爆発が音のない宇宙に轟く。要塞の端へと直撃した光の熱は溶かしながら熱を外へ外へと伝えていく。熱に比例する膨張と、追いつかない変形の限界。要塞の表面を構成する岩石は巨大な亀裂を走らせ、乾いた土のように大きく砕けた。

光が止んで、残されたのは再び宇宙を包む闇と、砕け溶けた破片のみ。

プラントはこの日、5つの盾の1つを、あっさりと失ってしまった。

話の場所は、エルスマン宅に移されていた。反体制派の拠点。その家主であるタッド・エルスマンが評したシアター・ルームにアイリス、ニーレンベルギアの2人のヴァーリを中心に主立った面々が集まっていた。ある者は座り、ある者はその傍らに立ちながら、そして誰もがモニターを眺めている。

そこには、ニュース・キャスターが慌てた様子で崩壊した要塞の様子を伝えていた。

「これは……？」

誰かが声を発して、答えたのはニーレンベルギアである。椅子に座り、そのまま背後にサイが立つ様子は、姫君と従順な使用人のよう見えなくもない。

「地球軍が月面に建造して、秘匿し続けた巨大兵器。名前はユグドラシル。サイ、雛苺をお願いできるかしら?」

二ーレンベルギアに言われたサイは特に頷くこともなく懐から小型プロジェクトを取り出した。光の柱が立ち上がり、中に桃色のドレスとリボンが特徴的な幼い少女の姿が現れる。

視線がモニターからその少女へと変わったところで、ナタルが何気なく口を開いた。

「ゲルテンリッターか?」

「そう、6人目の子よ」

「雛苺、ご挨拶して」

サイに促され、しかし雛苺は自分に注目が集まっていることいや緊張義気の様子である。

「ようしごお願ひ、なの……」

そう頭を下げる様子はほかのゲルテンリッターに比べるとずいぶん年齢が低いように思える。ほかのゲルテンリッターが10代の前半から中頃のように思えるが、雛苺の印象はそれよりも幼い。

「ずいぶん幼いんですね」

アイリスが素直な感想を口にして、二ーレンベルギアは少し笑つてみせた。

「じゃあ、雛苺、お願いできるかしら？」

雛苺の姿が図面と写真に入れ替わる。サイがプロジェクターを手にしているため、二ーレンベルギアの後ろに図面は表示されている。見えてなどいないはずが、二ーレンベルギアはさも見えているかのように話しかけた。

図面には、月面に設けられた円形の構造物の写真とその断面図が模式図として表示されていた。月面を垂直に採掘し、底に強力なビームの発振装置を埋め込む。まさに巨大なビーム砲である。

「月面のアルザツヘル基地に設置された高出力ビームを照射、それをフォイエリヒやインテンセティガンダムと同様のビーム屈折機構を取り付けたコロニーで反射する。そうすることで、射線に関わらずどんな場所でも攻撃できる」

二ーレンベルギアの説明にあわせて雛苺が姿を変えた図面は別の動画を映した。2次元的なそれは、月面から放たれたビームが屈折コロニーを経由する度に角度を変え、地球側の月面からでは本来見えないはずのプラントの方角にビームを運ぶ様子が端的に示されている。

要塞はこのビームによってあり得ない角度からの攻撃を受けて破壊されたのだ。ただでさえ高いエネルギー効率を誇るビームをこんな大規模兵器として使用されたのでは要塞なんてひとたまりもなかつたことだらう。それどころか、プラントのコロニーなんて数基まとめて撫で斬りにされかねない。それも、遙かに離れた月面から。

「こんなの、ユーワス・セブン条約違反じゃない！」

叫んだのはフレイだ。ユニウス・セブン休戦条約においてプレア・ニコルの兵器への搭載が禁じられたのは、核ミサイル、ジェネシスなどの大量兵器にプレア・ニコルが使用され甚大な被害が発生したことへの猛省にあつたはずなのだ。

図面は今一度姿を変えた。月面のゴグドラシルを中心にしていつも発電設備が離れた地点に点在していることを示している。

「いいえ。発電設備にプレア・ニコルを搭載することは禁じられていない。そして、ゴグドラシルも兵器本体はプレア・ニコルを搭載してないもの」

原子力発電によつて作り出されたエネルギーを兵器に使用しているだけである。ザフトのモビル・スーツのバッテリーの充電に使われるエネルギーも何割かは原子力発電によつて作られたものだ。違うのは、兵器の規模だけ。

「そんなの誤魔化しでしょ！」

「それが戦争つてもんだ。どこつもこいつも、抜け道を探すことにご執心だ」

足の悪いティアックは椅子に座り、肘掛けに手をついて姿勢で頬杖をついていた。気だるさといつよりも、不機嫌さを体言している。

「でも……！」

突然、フレイの勢いが弱まつた。何のことはない。これほどの大規模兵器に、エインセル・ハンターが関わつていなければないと

気づいたからだ。あの人は、本当の意味で目的のためには手段なんて選ばない。

言葉を止めたフレイに代わったのは、タツド議員であった。皆とはやや離れた位置で、全員のことを見るができる位置に立っている。議会にしろどこにしろ、そんな立ち位置がすっかり馴染んでしまつたと、苦笑しながら話に加わった。

「ビームは遠距離の攻撃に向かないとそれでいるが、本当にこんなことが可能なのかね？」

「そもそも出力が桁違いです。ロロニー内部にエフィールドが漏斗状に展開されるとお考えください。一定距離内であれば、ビームは屈折ロロニーを通過する度に収束を繰り返し、目標まで十分な攻撃力を届けることが可能です」

多少の拡散など無視して攻撃できるということだ。かつて最強の名をほしいままにしたゼフィランサス・ナンバーズ、その2号機であるΖΖ-X2000DAガンダムトロイメントが同じ技術と発想の兵器を搭載していたことを思い出す者は少なくなかつた。

タツド議員とニーレンベルギアの話は続く。

「おまけにロロニーの使い方によつてはどんな地点も狙い撃ちできる。恐ろしいものだね。それで、何故君がこれを知つているのかな？」

「IJの兵器の問題の一つに、命中精度の向上がありました。コンピュータで行うことも考えられましたが、エインセルさんは、敢えて人を使うことを好みました。エクステンデッドと言ってわかる人は

「聞いたことがある。宇宙での生活が長こと、希に異常なほど空間認識能力をとぎすました」

「聞いたことがある。宇宙での生活が長こと、希に異常なほど空間認識がつまい人がでてくる」とあると」

ナタルの言葉に、ニーレンベルギアは少し頷いてすぐに話を続ける。

「そんな力で3次元的な処理を行つてもううの。そうする」といって、月面からの狙撃を可能としているといつわけ」

「おまけに動かない標的なならノフスキーパーティクルの電波障害はさしたる問題にはならないだらうね」

位置さえ正確に把握できるなら、そもそもレーダーに頼る必要なんてない。要塞を動かすにしても膨大なエネルギーと、何より時間を必要とする。よつて、ジースの質問は、至極まつとうなものであった。

「チャージにはどれくらい時間がかかるんだ？」

ニーレンベルギアの答えもまた、当然のものである。

「そんな最重要機密まで知つてないわ」

次撃がいつ放たれるかわからない。そして、どこが狙われるかもわからない。標的は自由自在。この瞬間にプラントが攻撃を受けることもあり得ない話ではない。

その事実に、誰もが口を閉ざす。つけっぱなしのモニター画面でキヤスターが被害の甚大さを語る声だけが響いている。そんな沈黙を破つたのも、同じく報道関係者であるジェスだった。

「プラント本国を狙う予定は！？」

「さあ？ 次かもしないし、5つの資源衛星をすべて破壊してからかもしないわ。だから教えてあげにきたのよ。逃げるなら、早くなさいって。ちょっと遅すぎたかもしないけれど」

続いてモニターは混乱するプラント国内の様子を映し出す。特に誰もが狙われると考える首都アブリリウス市は混乱の極みにあった。我先にトランク一つ抱えた市民が宇宙港に殺到している。券売機には長蛇の列がでいて、旅券を確保できなかつたらしい人が係員につかみかかっている様子が見られた。

「プラントは、一体どうなるんでしょうか……？」

アイリスの言葉に、答えられる者は誰もいなかつた。

「ジャブローにあつたのと同じ！」

マリューと呼ばれていた女性が持つてきてくれた小型モニターには、月面から立ち上る光と、その光がもたらした結果、崩壊したザフトの要塞が立て続けに映し出された。

この光景はシンを椅子から飛び上がらせるには十分な衝撃だった。シン一人だけが立ち上がって、ブルー・ノ・アズラエルは静かに紅茶

をすすつていた。

「コグドラシル。これをエインセルはこれから5度に分けて射出するつもりだ。続く4撃ですべての資源衛星を破壊する。これでプラントは丸裸になることだろう。そして、最後にアシリウス市を撃ち抜く」

「そんな……！　あそこには戦争と関係ない人だつて大勢住んでるんだ！」

「だが、政治の中核もある。そこさえ落とせばプラントは手足もがれ、頭を潰されたも同然だ。戦争は、我々の勝利だ」

戦略的にも戦術的にも非の打ち所なんてない。でも、それが認められるかどうかとは話が違う。とにかく気持ちはかりが焦つて、左右を見回した。エインセル・ハンターの姿を探して、見つけられなって気づいておきながら。

ブルーノがカップを置いた。それはとてもマイペースな行動に思えた。そんな後でもできる行為をしてからしか肝心のことを話してくれなかつたからだ。

「エインセルは地下にいる」

暗い地下の部屋。足下の冷たい質感を照らす光以外の光は排斥されている。そんな限られた光量はそれでもいじらしく王の姿を映し出す。その白い肌を、その黄金の髪を、その青い瞳を。

王は闇の向こうを見上げながら、見通しながら、ただ一人でたたずんでいた。

「復讐者にして復讐者でない者に、敵であつて敵でない者に、何より愛を知る者に、私は倒されなければならないのです。ですが……」

決して鮮明には見えないその顔に、絶望と失望とが暗い影を一滴こぼした。それを誰も知る者はいない。王がそれを望まない。よつて、誰もが目にすることは認められない。たとえ誰が望もうとも。

「エインセル・ハンター！」

そこは暗い場所だった。床を照らすくらいしか照明が灯されてない。せいぜい自分の足下くらいしか目にできなくて、暗い部分は完全な闇に包まれていた。見えないんじやなくてないのかもしない。実は今見えている光の道だけに床があつて、他は全部穴、奈落に突き出た通路の上を走らされているのだと言われたとしても、今のシンなら信じたかもしれない。信じて、それでも気になんてしなかつたことだろう。

シンはただ光の回廊を走った。その先、光の途切れた場所に、エインセル・ハンターの姿があつたから。

膨大な闇に上に差し出されたか細い光の通路。その先に、エインセル・ハンターはたたずんでいた。

何故エインセル・ハンターが魔王と呼ばれるのか、その理由が、ほんの少しそうした。あれほどの大量破壊兵器を持ち出しておきな

がら、エインセル・ハンターは微笑みさえうかべて涼しい顔をしていた。もしもこの人が味方なら、どれほど頼もしく見えたことだろう。「この人の敵でいることがとにかく恐ろしい。

震えている訳じゃない。怯える訳じゃない。それでも、シンは意識して声を張り上げなければならなかつた。

「どうして！　あなたはこんなことをするんだ！？」

「プラントは破壊されなければなりません」

まるで神託や予言みたいに、エインセルの語る言葉は真理そのものにさえ聞こえた。

（自分を見失うな、シン・アスカ！）

「プラントのコーディネーターがまた敵になるかもしないから先に殺しておくなんてあまりに身勝手だ！　そんなの復讐なんかじゃない！」

「そう、私は動機の復讐者でありながら、資格の復讐者ではありません」

思わず言葉に詰まつたのは、エインセルがシンとヒメノカリスの交わした話の内容を知っていたからだ。別に何の不思議もないはずなのに。

ヒメノカリスとは、復讐を予防処置として話あつた。一度でも大切な人を奪つた相手がいたとしたら、それはまた次も大切な人を奪うかもしれない。そうなる前に殺す。それが復讐なのだとしたら、

シンは母を殺されたことを資格を持つ復讐者で、エインセルは動機を持たない復讐者だということになる。どちらも、予防処置という点では変わりないから。

「ヒメノカリスから……？」

「はい。ヒメノカリスはすでに用に上がっています。私もまもなく用へ参ります。アプリリウス市は、私の手によつて」

細くて長い指が何かを握りつぶす仕草を見せて、それで本当にプラントが潰されてしまったみたいな寒気を感じた。この男は、必要ならプラントを焼くことを躊躇しない。

「あなたも俺も復讐者ではあっても復讐者じゃないとするなら、あなたが俺の復讐を否定するなら、あなただってこんなことしちゃいけないはずだ！」

シンには資格があつても動機がない。今エインセル・ハンターを殺してもシンに守れるものなんて何もないから。

エインセルは動機を持ちながら資格がない。プラントを焼き払うことが戦略的に理に叶っているとしても、プラントがそれほどのものをエインセルから奪つたわけじゃないだろうから。

そんなシンの必死の言葉は、それでもエインセルを搖るがすことはない。大火をそよ風で消せるはずなんて同じだ。

「何を怒つているのです。プラントには、あなたが守りたいものも、守らなければならぬものもないはず」

アブディエルと差別した奴らがいう。仲間たちを見殺しにした正規兵たちがいる。でも、大切な人なんて1人もいない。エインセルの言葉は、何から今まで真実をつく。

でも、それじゃあ駄目だ。レイ・ザ・バレル隊長は言つていた。たとえ相手の行動を恨むことはあっても、相手そのものを否定してはならないと。

エインセルは待つっていた。シンが話始めるまで、闇の中の一筋の光の上に立ちながら。眩しい訳じゃない。それでもつい目を伏せて、エインセルの眼から目をそらしてしまう。

「俺、あなたに復讐しようとしていたこと、これでも迷つてました。母さんを殺されたことが許せなかつたはずなのに、ザフトに入つて自分もあんたと同じことをしてゐつて、戦えない人々の命を奪つてるつて思つてたからです。でも！」

目を合わせる。逃げちゃ駄目だ。自分を奮い立たせて、声の勢いを利用するように顔を上げた。

「それでもそんなこと、認められていはずがないんだ！」

エインセルの瞳は、文句のつけようがないくらい綺麗だった。石じみ一つで、湖を揺らすことなんてできやしない。

レイ隊長は言つていた。人を憎むなど。人を憎むと言つことは誰かを悪だと決めつけることになる。それはすなわち自分を正義だと決めつてしまつことに他ならないから。だから、誰かの行動を怒りを感じることはあっても、憎んではないと。自分の正義が、今度は他の誰かを傷つけてしまわないと。

それでも、エインセル・ハンターはシンの言葉を待っている。否定されているのに、責められているのに、エインセルは、シンを憎むこともなければ否定することもない。

シンの正義と、ありのまま受け入れようとさえしている。

「あなたは、一体何なんですか……？」

勢いが失せて、つい口を出たのはこんな言葉だった。

「とんでもないくらい権力があって、使いきれないくらいお金がつて、世界を変えたいならもつとほかにいくらでも方法があるはずだ。それなのにどうして、こんなことをしなきゃいけないんです？」

エインセルは答えない闇の中で、静かにシンの言葉に耳を傾けているだけだ。

「あなたに会えたら、絶対に聞いてみよって考えてたことがありました。どうして、ヒメノカリスを戦わせるんです？　俺はあなたとヒメノカリスがどんなふうに知り合ったのかなんて知りません。でも、ヒメノカリスがあなたのことを慕つてることは知っています。あなたのために戦っていることもです」

ボーパールで、綺麗なドレスを雨で濡らしてまでシンに禮しみをぶつけてきたから。

「他にも方法はあるんじゃないですか？　ヒメノカリスにしても、世界にしても。もつと優しくて、誰も死なないでもいいような、もつと他の方法だって！」

「Jの感覚は、もしかしたら祈りにも似ているのかもしれない。自分よりも遙かに力がある存在に、ただ自分の気持ちをぶつけて聞き届けてくれるよう願う。

神様なら天使でも遣わすのだろうか。魔王は、ほんの少し、首を傾げた。どう表現していいから知らない表情をして。

「あなたは私を買いかぶりすぎているようです。私はそれほど強い人間ではありません。そして、ヒメノカリスを戦わせている理由は……」

それが諦めなのか、後悔なのか、それとも躊躇いだろうか。その表情の意味を考えている内に、エインセルは顔を再び微笑ませた。ただどこか、楽しそうに。

「やはり、あなたは私とよく似ている。まるで、私の若い頃を見ているかのようです」

靴を鳴らす音。エインセルが振り向き、歩きだした。光の道を降りて、しかし床があつたらしい。エインセルは闇を踏みしめながら歩く。それとも、宙に浮かんでいるのだろうか。

この人は人としてひどく曖昧だ。すべてのことができそうにも思えて、人としてそんなはずがない。それでも、何でもできてしまうそうな錯覚はどうしても拭えない。もしかしたら、空だつて飛べるかもしぬれない。そう、考えさせられてしまつ。

でも確かに靴が床を鳴らす音が聞こえて、それが止まつたところで、エインセルはシンの方へと向き直った。光の道のさらに先から、

エインセルは語りかけてくる。

「シン・アスカ。私はこれから月にあがります。アブリリウスを、プラントを焼き払うためです。そのための航空機にあなたの座席はありません。連れていくのではありません。追ってきなさい。私の客人としてではなく敵として」

掲げられた右の手。指が鳴らされ、創世記に倣うように突然闇が未仮に満ちた。強い光だ。手を顔の前にやつて光を遮らないとならないほどに。エインセルの姿は光に隠れて見えない。声だけが確かに、はつきりと聞こえた。

「思いはあなたが。力は私から」

徐々に光に慣れていく中で、エインセルのその背後に、シンは確かに目にした。光に食いつぶされた輪郭が、それでも巨大な人の姿とガンダムの顔を有していた。

「これは……！」

「ZZ-X1Z300EH、いえ、ZZ-X1Z300SAガンダムメルクールランペ。ゲルテンリッター初号機にして、あなたの機体です」

「この世界に青い薔薇なんて存在しませんでした。人が手を加えなければ決して生まれなかつた存在です。でもきっと、薔薇は青くなりたいと望んだことはありません。それでも、薔薇は青くされてし

まつた。その身に降りかかるた定めを嘆き、悲しみますか？ それとも、たとえ青くとも咲き誇つて見せますか？

咲き誇れと薦めることは傲慢です。あなたは薔薇ではありません。咲き誇ると選ぶことは勇氣です。咲くことのできる保証なんていりません。

次回、GUNDAM SEED Destiny's Blume
number rechers

「薔薇獄乙女」

ガルナハン。それでも薔薇は、必死に咲こうとするのです。

第31話「薔薇獄乙女」

月面。既知の海に浮かぶアルザツヘル基地の中央にユグドラシリはその砲口を暗い空へと向けている。基地機能の大半は地下に埋設されており、空からでは月面を穿つ巨大な穴が開いているようにしか見えないことだらう。

まさに地獄の入り口を思わせるその穴から再び光があふれだした。光の柱が天へと伸びて伸びて見えなくなるほど高く。

月面からでは見えない遙か離れた場所で、プラントを守る第2の資源衛星は焼き払われた。

アルザツヘル基地内部、ここは部屋である。ひどく天井が高い。人が想像するよりもさらに高く、巨人の神殿を思わせるほどの広さがある。あるいは王の間か。壁も床も天井も白く染められ、ただ王の色だけが許される。そのような部屋を、王の間と呼んでも差し支えない。

王。ZZ-X300AAフォイエリビガンダムがただ佇み、その黄金の輝きだけが唯一色を持つ。何もない白亜の城に、黄金のガンダムが浮かんでいる。

だが、ここで一つの訂正を必要とする。フォイエリビは王ではない。单なる玉座にすぎない。そして、玉座に座るのは王ではなかつた。白いドレスを身につけた金髪の少女。ステラ・ルーシュが眠つたようにコクピットに座つている。全天周囲モニターの開けた空間は、そのまま白い壁を映し出し幼い姫君を包み込むように横たえていた。

小さな物音。開かれたままのハッチに誰かが足を置いた音だ。

「大丈夫？　ステラ」

ステラはゆっくり瞳を開く。すると、ステラと同じように白いドレスを身につけた姉と、着崩した軍服の少年がコクピット内に入る間際であった。低重力であるため、その動きは緩慢なほどゆっくりとしている。

姉、ヒメノカリス・ホタルが浮き上がるようになにステラが座るシート脇にまで移動すると、その手がそっとステラの額を撫でた。

ユグドラシルの照射を、ステラはすでに2度行っていた。3次元的な計算を感覚と意識で導きだし、月面を離れたビームが目標を捉えるまで屈折コロニーを微調整し続ける。そんな複雑な計算は、ステラの体力を少しずつ奪っていた。

それでも、回を重ねることに精度は高まりそれはステラの自信となっていた。

「大丈夫、ちょっと疲れただけだから」

ステラが強がりを語り側で、アウル・ニーダの関心はすでに周囲、このコクピットを有するフォイエリヒのことへと移っていた。このフォイエリヒガンダムが、ユグドラシルの中核として機能している。ステラもアウルもこのシステムを使うためにエクステンデッドとして調整を受けた。

「俺にも使えるんだろ、こいつ」

ハッチのすぐ脇のモニターを叩く。アウルはわかりやすく不機嫌であった。コグドラシルを使うことが許されたのが自分ではなくステラであることに不満を感じているのだと、ステラにもわかる。アウルは口をとがらせて、目を細めていたからだ。

どうしてよいものかわからず助けを求めるように姉を見る。すると、ヒメノカリスはすでに行動に移っていた。領きながら、それでもアウルを認めようとしてない。

「駄目。お父様はステラに使わせるよう言つていたから。でも、もしもステラに何かあつたら、その時はあなたがプラントを撃ちなさい」

月面からの高出力ビームによる超遠距離射撃は、いつぞこを狙われるかわからないという事実に後押しされプラント国内を大いに混乱させていた。

議会の廊下を早足で歩くギルバート・デュランダル議長の取り巻きの議員たちも皆浮き足立つていて、ギルバートの横に回り込んでは餌を待つ離のように口々に陳情を繰り返している。より状況を把握しているはずの議員でさえこうなのだ。市井の混乱は考えるまでもない。

「市民はみな不安がっています。事態の收拾はまだ図れないのですか？」

「宇宙港は脱出を急ぐ市民で満杯です。このままでは経済活動さえ

ままなりません」

ギルバートが足を早めている理由は無論一時を惜しんでのことだが、同時にうるさくわめく議員連中を振り切つてしまいたいという願望も手伝っていた。

「月面への部隊編成を行つてゐる最中だ。今ことを急げば相手の思つぽだ。我々が慌ててては民は余計に不安になる。行動は慎みたまえ」

足を止めないままいつ言い放つと議員たちはおとなしくなつた。しばらくは静かにしていることだらう。ラクス・クライン議員によつて扱い易さを基準に選出された議員など、所詮傀儡にすぎない。

（好都合ではあるのだがね）

権力を一度牛耳つてしまえば、その座を脅かす者はいないということに他ならない。

タッド・ヒルスマントのシアター・ルームでは、駆動音が鳴りやむことがない。大量に積み上げられていた資料が目減りし、その分だけ音が響いていた。資料が次々シュレッダーにかけられているのだ。

「この混雑ぶりじゃ、出でいくだけでも一苦労ね」

数枚まとめてシュレッダーに放り込みながら、フレイ・アルスターがモニターを眺めながら呟いた。シアター・ルームらしく大型の

モニターには日々に不安と憎しみを口にする人々の様子が映し出されている。状況を把握するよりも真っ先に逃げ出そうと宇宙港に集まっている連中にインタビューすれば、大体返事は決まっていた。

死への恐怖に怯えるか、それとも、エインセル・ハンターへの憎悪を吐き散らすか。

「フレイ、できるかぎりシユレッダーには少ない枚数かけるようにしてくれ。でなければ切り損じることに繋がる」

ナタル・バジルール - - こちらも別の位置で紙を機械に放り込んでいる - - の言葉にフレイは短く返事をした。そしてほんの一枚だけ、資料を束を薄くする。この光景に、ナタルは軽く息を吹きこそしたがたしなめることはなかった。

プラントからの脱出を決めた以上、資料はかさばるばかりか持ち運ぶには危険である。

事務所の一応の代表であるジェス・リブルの取材が一通り終わり、プラント国内の混乱も、ジェスたちに脱出を促していた。

ジェスはシアター・ルームにふさわしい座り心地の椅子に腰掛けながらノート・パソコンを指で叩く。その顔は普段見せることないほど必死なもので指が次々画面に情報を叩き込んでいく。そんなジェスのすぐ後からベルナデット・ルルーがパソコン画面を覗いていた。コーヒーをすすりながらの優雅なもので、リブル事務所の面々とはずいぶんと様子が異なっている。

「どう? いい記事は書けそう?」

やや指の速度が遅くなつたものの、ジエスは画面から手を離すことはない。

「いい記事になるかはわからないけど、刺激的な国だつたよ、この国は。でも、ベルナデットはいいのか？ きっと俺はこの国に有利な記事はかけないと思つぞ」

「結構有名な言葉だけど、こんな言葉、知つてゐる？ ナチス・ドイツが共産主義を迫害し始めたとき、私は共産主義者ではなかつたので声を上げなかつた。次に社会主義を迫害し始めたとき、私は社会主義者ではなかつたため声を上げなかつた。次に障害者やコダヤ人を迫害し始めたが、それでも私は声を上げなかつた。最後に私たちを迫害し始めたとき、その時すべてが遅かつた」

「一ヒーを口に含み喉を濡らせる。そんな間をおいて、ベルナデットは続ける。

「プラントが障害者を迫害した時、プラントがナチュラルを迫害し始めた時、そんな時から声を上げたいと考えるプラント市民もいるところじよ。あなただって私ならと想つて声をかけてくれたんでしょう？」

「まあ、否定しないよ」

「とにかく、ベルナデットはどうするんだ？ もしかしたらプラントは……」

指をとめ、ジエスは振り向いてまでみせた。よくも悪くもジャーナリストであるジエスが、生意氣にもベルナデットを気遣つたために作業の手をとめて見せた。

「そうね。正直、怖くないわけではないけど、プリントの市郎として、もちろんジャーナリストとしても見届けたいといつ気持ちはあるのよ。この国の行く末を」

それほどまで、今のプラントは危機的状況に置かれているといつことなのだろうか。

もしも明日世界が滅びるとしたなら、さて最後の一皿をどうのうに過ごすつか。

ディアック・エルスマンは首を回す。見えたのは、喫茶店のテーブルで新聞を読みながら紅茶を啜つている男がいること。別の場所にはテーブル一杯に料理を注文してすごい勢いで食べ続けている女もいた。ふと窓の外を見ると、旅行鞄を右手に、左手に子どもを引いている家族連れが通りすぎているところだった。子どもは暢気なもので旅行気分でいるのに、親は子どもを強く引っ張つて、引きずるふつに喫茶店の窓を横切った。

いつもと同じ日常を過ごすのもいい。最後の一時、やり残したことをするのもいいだろ。最後の最後まで生き延びようとする」とも共感できる。

ディアックが選んだのはそのどれでもない。ちょっと気になる娘とお茶をする、そんな些細なことだった。

「いいんでしょうか、皆さん働いてる時に?」

ディアツカとはテーブルを挟んで向かい側、アイリスはその後ろめたさを反映してか手を小さくしてティー・カップを手にしていた。備え付けのソフトウェアにもたれ掛かるディアツカとはえらく違つ。

「どうせ宇宙港はあの有様だ。すぐに出発できるわけじゃないだろ？」

出国ビューカー、手続きするだけで一日がかりだろ。そう、もうしばらくはアイリスもここにいる。

桃色の髪を首の後ろで束ねて瞳は青い。当たり前と言えば当たり前だが、ラクス・クラインとよく似ている。ディアツカがアイリスと出会った時もその姿には驚かされた。思えば、ラクス・クラインと似ている、そう話しかけたことがアイリスと話すようになつたきっかけであつた気がする。

あれからすでに4年。残された右目だけで見たアイリスは、変わつたようにも変わってないようにも見えた。

「なあ、俺とアイリスって、一体何なんだろうな？」

「何となく口に出たのはそんな言葉だった。聞き方がまずかったかもしれないと思つたのは口に出した後のことだ。

「何つて……？」

「いや、何か、俺たちって結構複雑な間柄じゃないかってな。初めて会つたのは……、戦艦の中で、捕虜と世話をだつたら

取り繕つように言葉を急いだためか妙にしどろもどろになつてしまつた。その後、慌てたように右手で自分の口を塞がなければなら

なかつたのは、アイリスが笑顔のままこめかみをひきつりせていることに気づいたからだ。

ディアッカは初対面のアイリスに対してラクス・クラインと似ているかどうか確認するためにもつと賢そうな顔してみると言つたことがあつた。アイリスはその時の恨みを今も忘れていないのだ。

笑顔のまま睨みつけられている。睨まれている間、身動きできなかつた。そんな金縛りが解けたのは、アイリスが紅茶を飲むためにカップに視線を移した時だ。自分の手を口からだけで、思わず安堵のため息をついた。

「こ」の話題をする度に怒りを新たにするのはやめりよな

幸い、アイリスはすぐに顔を強ばらせるなどをやめてくれた。

「それから何でか戦友になつて指揮官と部下になつて、今は、お友達ですよね、ディアッカさん」

「数奇な運命つて奴だな。元々敵だったからな、俺たち

敵として出会つて、氣恥ずかしい言い方をするなら人としてわかれあって、4年前もこうしてプラント最後の夜を一緒にすごした。もしも別の出会い方をしていたならもう一度こんな関係になれる自信がない。それくらい、おかしな関係だ。

「前もそうだつたな。決戦前夜つて感じの時、ジャスミンを守つてやれなかつたつて落ち込んでた俺を慰めてくれたのがアイリスだつた。あの時のことは感謝してる」

「ディアッカさん……」

つい顔をそらしてしまった。どうも面とは言ひづらい。ただ、目を合わせてでなければ、言えない話ではない。少なくとも自分にそう言い聞かせながら話を続ける。

「ジャスミンのことが……、忘れられなかつたとかじやないんだ。振られて、諦めなんて4年前の時点でついてた。でもな、誰かのために社会的弱者を犠牲にすることは我慢できなくて、やつぱりどこかジャスミンのこと助けてやれなかつたことの負い目もあつたんだろうな。障害者の地位向上のための活動を続けてた」

言葉を続けていると自分がどんどん冷静になつていいくことがわかる。この話は、誰にしても何も恥じることなんてない。そう、体が理解しているみたいに。前を見ることはでいるようになつた。それでもアイリスと視線は合わない。手元のまだコーヒーが半分ほど残つたカップを見ていたからだ。

この話は、同時に気分を上向かせてくれるものでもない。

「俺も障害者になつてみてよくわかつた。このプラントは歪んでる。まあ、考えてみれば当たり前だ。コーディネーターは優れてなくちやならない。だが、反対に優れてるって、どんなことだと思う？ 100mを9秒台で走れることか？ リーマン予想を証明してみせることが？ 遠く離れた場所を見通すことか？ ……どれも違うんだ

「それ、わかる気がします、私にも。誰かと比べないといけないってことですね……」「

アイリスはいたずらっぽく笑う。元々表裏のないこの少女は、その笑みに陰を含ませていることを隠せてやしない。

「誰もが9秒で走り抜けられるならそれは優れてるとは言わないからな。結局優れているということはアイリスの言うとおり相対的なことでしかないんだよな。コーディネーターが優れた存在であるためには、必ずコーディネーターよりも劣つた存在を必要とする。自分たちが優れていることを確からしめてくれる弱者がこの国には必要なんだ」

全員が9秒で走ることができる世界なら、優れているためには8秒で走れなければならない。そして、コーディネーターとは優れた存在だ。コーディネーターが何秒で走れるにしろ、コーディネーターよりも遅い存在を必ず必要とする。

「それが障害者であつたり、潜在ナチュラルであつたり、場合によつては移民のコーディネーターたちなんだよな」

「コーディネーターが優れた存在であるための担保として、プラントは絶えず弱者の存在を、言い換えるなら生け贋を必要としている。

「この国は貧富の差が著しいし、事実上の階級制もある。ただそれは、能力のある人間が認められる社会だからじゃなくて、コーディネーターを有能だと保証するための被差別部落の存在を必要としているからだ。コーディネーターは臆病なんだ。絶えず自分よりも劣つていてる奴を眺めていないと自分の強ささえ確認できない。絶えず自分より劣つた奴がいてくれないとコーディネーターになつた意味がない」

「コーディネーターは人類の未来を謳いながら、しかし人類全員が

「コーディネーターになることなんて望んでいない。優れた存在になるべくコーディネーターを作り出す。そのためには弱者の存在を必ず必要とするからだ。

力を拠り所にした選民思想。それがプラントの根幹であり、コーディネーターたちの意思を決定づけている。

やはり嫌な話だ。うつむくついでに眺め続けたコーヒーを飲むと余計に苦く感じた。アイリスはすでに飲み終わり、カップを落ち着かない様子で弄んでいる。

「それが、この国で急速にファシズムが台頭した理由、なんでしょうか？」

「多分な。ナチス・ドイツもアーリア人というある種の理想の民族と自分たちを同化して排他的になつていった。それがホロコースト、ユダヤ人の抹殺に繋がつたんだが、プラントとナチス・ドイツの大きな違いもそんなところにある。ナチス・ドイツはドイツ国民であればそれだけで優れているということだったが、プラントは能力を示さなければならぬ。そして、そのためには想定的に劣っている人というものを必要とする。潜在ナチュラルの問題を手つかずのまま放置しているのも踏みつけるための弱者の存在を必要としているからだ。その点じゃ、ナチス・ドイツよりも質が悪いかもな。コーディネーターは自分たちがすぐれた存在であるためには何でもするつてことだからな」

「何だか、怖い国ですよね……」

「多くのコーディネーターはそのことに気づいてやしない。この戦争は劣つたナチュラルが嫉妬に狂つて起こしてると勘違いしてゐるく

らいだ。卵が先か鶏が先かの話だが、戦争が激しくなればなるだけ、コーディネーターは嬉々として戦いに身を投じるようになる。自分たちが羨望を浴びていると錯覚できるし、事実戦場じやコーディネーターの方が優秀だからな」

4年前のティアックはそうだった。あまりに気楽に戦争に臨み、ナチュラルのことを見下してさえいた。

「コーディネーターもプラントも、弱者を踏みつけることでしか、いびつな形でしか存在できない歪んだ存在なのかもな」

ディアックがフレイを無遠慮に傷つけたように。戦場では機体の性能に劣る相手を潰していくことは楽しくさえあった。

コニーウス・セブン世代。C.E.61年の血のバレンタイン以降の極右に傾倒した教育を受けたプラントの若年層のことだが、ディアックもこれに該当する。今頃、デュランダル議長の演説会場に出てかけて声を張り上げていても不思議ではなかった。反対に、今こうしてプラントという国を冷静に考えられることの方がよほど不思議なことだ。

自分を変えるきっかけを考えると、どうしてもアイリスのことを見てしまう。目が合つと、つい恥ずかしさにそらしてしまった。自分を取り戻した氣でいたが、どうしてもこうなってしまう。

「そんなことに気づくきっかけを『教えてくれたのが、きっとアイリスなんだ』と、思つんだ……」

せつかく気分をいい塩梅に沈めていたのに、このことを意識し出すとどうしても体温の高揚を感じずにはいられない。アイリスは特

に気づいた様子もないところが特にいたたまれない。

「いや、俺も、はじめ結構嫌な奴だった。戦争だって、周りが行つてゐるからとか、何か狩りでもするくらいの気分で、そんな軽い気持ちだった。それに赤服なんてもらつたもんだから有頂天になつてたところもあつてな。……フレイには、悪いことした

「私も、立派な人なんかじやありませんよ。ヘリオポリスにいた頃は戦争なんてニュースの出来事で、自分が巻き込まれることになるなんて思つてもみませんでした」

「戦争に行つてた癖に戦争が何かわかつた俺に比べればま
しな話だ」

「ああ、駄目だ。つい歓心を買おうと口が滑る。次第にアイリスを強く意識しすぎて、ついには顔もまともに見れなくなつっていく。ディアツカの肌はほかの人と比べると色が濃い。それが熱を隠してくれることを切に願う。

だが、これでは埒があかないのも事実だ。すぐに本題に入れないと自らの弱さを嘆きながら外堀を埋めることから着手する。

「なあ、アイリス、吊り橋効果って知ってるか？ 結構有名な話だが、恐怖を感じて鼓動が高鳴つている時異性を意識すると、その鼓動を相手に対する好意からだと錯覚して恋心を抱いてるんだって勘違いするんだそうだ。他にも、死を意識すると次世代を残そうとして慌てたように身近な異性を急に意識し始めるなんて話もあつたりする」

本能的な欲求と恋愛とは多々重なる点もあるが、根本的には違う

ものだ。それを取り違えると、大概悲劇的な結末を迎える。

「俺たちってさ、出会ったのは戦艦の中で、それからずっと戦場をたらい回しだったる。今だつていつ敵の攻撃がここを襲うかわからぬ状況だ」

たとえその中で芽生えた何かがあつたとしても、それは同じ危機を乗り越えたことから生じる友情であつたり、生存本能の発露にすぎない可能性が高い。

ディアツカはそれを恐れていた。現在もプラントはいつ攻撃されても不思議ではない状況にある。そんな焦りがディアツカに行動を促していることは否定しない。それでも、ディアツカは思いを伝えたいと思つた。このことに、違ひはないから。

「そりや、焦つてることは否定しない。いや、そうじやなくて……。俺はこんな体だし、お前のこと、守つてられるだけの力もない……」

ジャスミンに最後の最後まで思いを伝えられなかつた臆病者は、3年経つても改善はしていないうらしい。失つた左腕、光をなくした左目。左足も満足に動かせない。残された右腕は、力なくテーブルに落ちた。

アイリスはそんな男の手に、自分の手をそつと重ねてくれた。

「ディアツカさん、障害つて、とても難しい問題だと思います。他の人はやっぱぱりどこか違つていて、同じように接するとかえつてそれが差別になつてしまつこともあります。違いを理解して、それを意識しないで接することはとても難しいことだと思います。でも、自分を卑しい人だと考へた人だと考へないでください。そんな

「ただけは、絶対にないんですから」

「この手の温もりにて、しばらく身をゆだねていたかった。

「ところでティアッカさん。この流れだと、私に告白してくれるんですね？ 実はナタルさんのことが好きでその仲介を頼んでるだけだって言つたら怒りますよ」

「ああ、そんなこと言おつもんなら本気で殴られそうだ。どうやら、逃げ道を塞がれたらしい。それなら、前に進む他ない。そして田の前にはアイリスがいる。」

「お前は、本当に不思議な奴だよ。結構がさつで怒りっぽい癖に、頼りたい時や甘えたい時は本当に甘えさせてくれる。俺も、お前のそんなことに救われたし、そんなところが好きだ」

「ティアッカさんは、人の痛みをわかつてあげられる人だと思います。間違いを間違いだって認められる強い人だと思います。私もティアッカさんのそんなところが好きです」

後悔は、後で悔やむと書く。その言葉の通り、人は何かをしだかしてからその行為を悔やむことになる。

言つておいてなんだが、今になつて急に恥ずかしさがこみ上げてきた。言つている時は見つめあつていられたのに、今では互いに顔を赤くしたまま、田を合わせることができない。このままでいいないと同時に考えて、同時に視線を戻す。すると田があつて、つい田をそらす。こんなことを2、3回繰り返しただろうか。情けないこと、一歩を踏み出してくれたのは、アイリスの方であった。

「その、隣に行つても、いいですか……？」

「あ、ああ……」

ディアツカが座っている椅子はソファー・タイプのもので座ると
ころないうらもある。それを示すとして右手を広げ、背もた
れを掴んだ。それだけ広いことを示そうとしたつもりが、まるでこ
の腕の中に座つて欲しい、そう言つていいようだと気づいたのは手
を広げてからのことだ。

本当に、後悔は後でなければできない。

アイリスもその腕の意図を完全に誤解したらしい。顔を赤くして
なかなか椅座つたまま動こうとしない。今更手を下ろすこともでき
ない。もしかしたらアイリスがここに座つてくれるかもしれない、
そんな期待や打算も手伝つて、つい手をそのままにしておいた。

何とも気まずい。横に座つてもううなんていきなりすぎただろう
か。いつもいつも決断はアイリスの方が早い。勢よく立ち上がる。
何事かと理解できないディアツカを後目に、アイリスは慌てている
と思えるほどの動きでディアツカの横に座つた。本当に勢いに助け
られる形で座つてくれたのだろう。見るからに体が固く、ディアツ
カの隣とは言え足と足が触れ合つとのない微妙な位置に座つてい
る。

ディアツカ自身人のことは言えないが、恋愛に不慣れな様子がよ
くわかる。肩くらい抱いてみても許されるだろうか。そう、アイリ
スの背中側に回していた手を少し動かしてみる。すると、右手が視
界に入ったのだろう。アイリスはさらに体を固くしてしまった。

さすがに肩を抱くのは早いよつだ。

(まあいいや。これからゆつくり、だな)

この触れるとも触れないまどろっこしい距離が今はちょうどいい。少なくとも、これから何が起きようとも恋人のことを守つてやりたい。そう、一人の男に決意させるには十分な距離なのだから。

アフリカ共同体旧ソマリア地区ガルナハン。ここには南アフリカ統一機構軍の要塞が置かれている。現体制構築以前の大戦の名残としていまだい南アフリカ統一機構軍が駐留している。

ステップ気候特有の背の低い草が大地を覆い、ところどころ剥き出しの土が顔を見せる。驚くほど広く平坦な土地の中、隆起するへそ曲がりな大地があつた。巨大な岩山と、それを取り囲むように点在する建築物。

ガルナハン基地と呼ばれる難攻不落の要塞である。

単なる平城。堀もなければ周囲には接近を遮るものは何もない。そんな要塞が堅牢さえを堅持する訳は要害に求める事はできない。

乾いた空気を震わせる轟音が響きわたつた。引き裂かれる大気の断末魔が聞こえたかと思うと、炸裂音に次ぐ炸裂音。何があつたのか。慌てて視線を送るなら焼け焦げ穴だらけになつた平原に残骸となつてその身を横たえるZGMF-X888ヒルドルブの姿を見ることがある。

別の方角からヒルドルブの小隊がモビル・アーマー形態 - - 犬のような姿 - - で高速を維持したままガルナハンへと這い寄る。起伏にござしいこの大地はヒルドルブの疾走を妨げるものは何もない。

ただ一つ、岩山の頂上に据え置かれた長大な高射砲を除いたなら。

回転式の砲塔に据えられ、全長が30mにも達する巨砲がゆっくりと角度を合わせ、仰角を調整していく。その動きは力強く、ただ力強い。狙撃のような纖細な標準を必要とはしない。狙うのではなく向ける。88cmもの砲口がヒルドルブの小隊へと頭を垂れた。

轟音か、それとも大気を震わす衝撃か、あるいは、排出される空薬夾とノック・バックする砲身。その順序はわからない。ただ弾丸が発射されたという事実だけを伝えていく。

秒速2000kmを超える初速で撃ち出されたは目標に瞬く間に迫り、その寸前で破裂する。散弾弾頭。圧倒的な運動エネルギーを保持したままの破片が広範囲に降り注ぎそこに存在していたものすべてを引き裂く。機動力に優れるモビル・スーツでも回避できるものではない。身を隠す場所などこの平原のどこにもない。

1個小隊のヒルドルブは思う存分体を引き裂かれ、原型を留めないほど破壊されし尽くす。

ザフトは一戦も交えないまま、すでに1個中隊に匹敵する戦力を失っていた。

銃身の冷却など諸条件こそあるが、火薬式の火縄銃以来の古風な砲台である。そんなものに、ザフトは攻めあぐねていた。

犠牲を考えなければ攻め落とすこともできるだろう。しかし、作戦の指揮を探るアスラン・ザラはその決定を下せないでいた。そのような戦法は被害が大きくなりすぎる。ZZ-X3Z10AZガンダムヤーデシュテルンで砲台を狙う手段も不可能ではないだろう。だが、ここでヤードシュテルンを破壊させる愚を冒すことはできない。

「砲台など時代遅れだと想えていたが、88cm高射砲か」

「あんなのフェイズシフト・アーマーでも耐え切れねえです」

所詮、フェイズシフト・アーマーは魔法の鎧ではない。過負荷がかかれれば破壊されてしまう。コクピット内を飛び回る翠星石はよほど腹立たしいのか、モニター上に移る88cm砲を睨みつけている。

ビーム・ライフルは大気中では急激に減衰する。射程範囲では明らかに相手に分があった。

「後は、エミリオの部隊が頼りか」

別働隊としてエミリオ・プレデリックの部隊は地元民しか知らない洞窟を通ってガルナハン基地の裏側に周りこもうとしている。砲台さえ落とせば、この基地は単なる中規模基地にすぎない。アスランが危険を冒す理由はない。

ジャブローでの汚名を削ぎたい・・ナチュラル相手に撤退せざるを得なかつたことを、この新兵は恥じている・・と別働隊を買つてたエミリオを感じる他ない。

通信が入ったのは、ちょうどその時のことだ。

「隊長！ 待ち伏せです。明らかに敵はこちらの動きを掴んでいます」

戦闘中はモニター画面を塞いでしまわないよう音声のみの通信になる。そのため、エミリオ小尉の顔は見えないが、その狼狽ぶりは顔を見るまでもない。

「何故です！ 占領軍を打ち払い、この地域の解放を約束した我々を彼らは何故裏切るのです！」

「そんなことは後だ。今は一刻も早く砲台を落とせ」

「了解です！」

返事こそ威勢はいいが、敵が待ち伏せをしていた以上、防御は万全と見るほかない。うまくいけば少ない犠牲でガルナハン基地を陥落できると踏んでいたが、地元民を信用しすぎたか。自然と、作戦前のブリーフィングが思い出される。

「はい、ここに地元の民しか知らない水中洞窟があります。ここを通れば砲台のすぐ裏手にでることができます」

パラスアテネのブリーフィング・ルームには土に汚れたゆつたりとした布を巻き付けた地元の民の姿があった。全員が疲れた様子で、中には子どもの姿もあった。

地図が表示されるテーブルについて説明をしたのは、その代表をつとめた若い男だった。伸ばされたままの髪が邪魔をしている。地図を見るためにうつむいた姿勢では顔はよく見えない。30km離

れた海岸線の一角から、その男の指はガルナハンへと伸びていく。地図にもそこは何らかの洞窟があることは明らかで、男の話の信憑性を保証している。

一通り説明を終えた後、男は顔を上げた。それでも視線は伏せがちで、必ずしもザフト軍に全幅の信頼をおいていいことはずかがいした。子どもも、母親の服を掴んだまま離れようとしない。

「リオもそのことには気づいたようだ。

「案ずることはない。諸君等の願いは叶えられることだろう。占領軍を追い払い、この地を諸君等の手に戻すと約束する」

その警戒が敵愾心であると、不安が恐怖であつたのだと何故気づくことができなかつた。彼らははじめからザフトを罠にはめる気でいたのだ。思えばおかしな話だ。秘密の通路を明かすような重要な情報を伝える現場に、何故子どもを連れてくる。こちらの警戒心を緩めるための小道具であったのではないか。

（俺たちの戦いは、誰からも理解されていない……）

「アフリカの地はアスランの心をいつもかき乱す。正しいと理解していたことが理解されていなこと気に気づかれる。だが、理解されていないだけだ。正しいことには変わりない。

こんな時、いつも脳裏に浮かぶのはモーガン・シュバリエ。グラシア連邦軍中佐の顔だ。体の半身が焼かれるほどの大創傷を負いながら最期までアスランを罵遣いながら死んでいった戦士の顔だ。

「モーガンさん、俺は、俺は自分が間違っているなんて考えてませ

ん……」

アスラン・ザラが「」で諦めてしまえば、すべての犠牲が無駄になるのだから。

「」している内にもエインセル・ハンターの大量破壊兵器は着実に次の弾を込めている。

「翠星石、もしもガルナハンを落とせなかつたなら、パラスアテネは作戦に間に合つたうか？」

「今からカーペンタリアに戻つてゐる余裕はねえですし、ラヴクラフト級を打ち上げる装置なんてそつそつねえです」

そうなると、ガルナハン基地が保有している補助ロケットが是が非にも必要となる。大気圏を離脱するだけならヤーデシュテルン単体でも可能だが、月面まで無補給で航行することはできない。

「俺たちは生きながらにして事実上撃墜されるといつ訳か……」

少なくとも、月面での作戦に間に合わなければすべてが無意味だ。怒りか失望か、どちらともつかないまま、アスランは歯を強く噛み合わせた。

ガルナハンからやや離れた場所から黒煙が立ち上つてゐる。恐らくエミリオの部隊が交戦しているのだろう。侵攻は完全に止まつてしまつてゐる。

（こんなところでゲルテンリッターの全力を見せなければならないのか……？）

ゲルテンリッターならば、ヤーデシュテルンならばガルナハンを陥落させることもできる。だが、リスクを考えると、アスランは決断できずにいる。ここでゲルテンリッターという戦力を失つては本末転倒である。

何か手段はないのだろうか。砲台に攻撃されることはなく近づき、確実に破壊できるだけの何か手は。

「アスランー！」

慌てた翠星石の声。ただ、いつもとは何かが違う。焦りよりも喜びや戸惑いの方が大きいらしく、その顔はどこか溌剌としていた。

レーダーに反応がある。何かが急速に接近していることを示している。

「ひづら!! ネルヴァ所属、シン・アスカ曹長！ これより援護します！」

思わず見上げた先で、小型輸送機がガルナハンを目指して飛行していた。何の変哲もない、単なる輸送機だ。それが88cm砲を目指す光景は、滑稽どころか正気の沙汰ではない。

「シン！？ 馬鹿な、そんな飛び方、いい的だ！」

ガルナハンは88cm砲を使う必要さえ感じなかつたらしい。基地の周りに設置された迎撃ミサイルが火を噴きながら浮上する。小型ミサイルが矢のように輸送機に殺到し、薄い装甲を貫通しては反対側から火を噴き出した。輸送機は見る間に炎に包まれ、煙に碎か

れるかのように分解しながら落ちていく。

黒煙が、しかし突然膨れ上がった。光が噴き出す。煙の中に何かがある。それはたやすく煙を突き破るとそれを簡単に引き剥がす。何か黒いものが輝いている。それはまっすぐに88cm砲を目指して加速した。

その姿を確認できないほど速い。迎撃ミサイルは追いつくことができずあらぬ方向へと放たれた。サイレンが鳴り響き、それがこれまで唯一ガルナハンの防衛線を破つたことを伝えてくる。

全身を輝かせる黒いモビル・スーツ。

「ゲルテンリッター……なのか……？」

ミノフスキー・クラフトの輝きはさらに強度を増し、加速は止まらない。

88cm砲の重たい重心がゆっくりと起きあがっていく。うなり声さえ聞こえてきそうな重厚な動きがやがて止まつた時、岩山をつき崩さんばかりの轟音とともに散弾弾頭が放たれた。点ではなく面で破壊する88cm砲の攻撃をかわすことは困難であり、被弾すればゲルテンリッターと言えども破壊される。

加速をやめないゲルテンリッター。迎え撃つ弾丸。

光が揺らいだ。それは、ゲルテンリッターの間近を弾丸が通りすぎたことを意味した。だが、炸裂はしていない。弾丸はゲルテンリッターの後方でようやく破裂し、細かな弾丸をまき散らした。

「安全装置か……！」

88cm砲が味方を傷つけないため、ある一定以上離れていなければ炸裂しないようプログラムされているのだとすれば、懐に入り込まれた敵には88cm砲は無力になる。

もしもシンがわずかでも加速を緩めたとしたなら、一步でためらつたなら、恐怖に呑まれていたならできなかつた戦法だ。

虎の子の一撃を回避したゲルテンリッターはそのまま88cm砲とすれ違う。なんとも不思議な光景だった。88cm砲は銃身に沿つて綺麗に斬り取られ、はじめから上半分のない不格好な姿であつたのではないか、そう錯覚させるほど見事な切れ口である。砲台がそんな不恰好な姿をわずか数秒見せた後、ゲルテンリッターも摩訶不思議な光景も爆発の中へと消えた。

立ち上る黒煙の腹を内側から引き裂くように、輝きが吹き飛ばす。ガルナハン基地を見下ろす空に、ゲルテンリッターの姿があつた。

西洋刀を思わせる両刃の実体剣をその手に握り、腰回りの装甲はその名前の通りスカートと呼べるほど大型のものだ。背には翼を思わせるバック・パック。そして全身が漆黒で覆われている。漆黒の輝きを放つその姿は天使を彷彿とさせる。

まさに黒い天使の姿がそこにはあつた。

「ZZ-X1Z300EHガンダムメルクールランペ。水銀燈……」

翠星石は見上げた姿勢のまま、ゲルテンリッターの長姉の名前を呼ぶ。

ゼフィランサス・ズールによつてZZ-X300AAフォイエリヒガンダムのアリスト移植され、マスターであるエインセル・ハンターの手で封印されたゲルテンリッターが、黒い翼を広げていた。

「エインセル・ハンターに与えられたはずの初号機をシンが何故：

…」

「アスラン隊長！ 何故なのです！？ 何故ナチュラルドもは我々を裏切るのです！ 我々は彼らのために戦うと誓つてやつた。解放すると約束してやつたのです！」

エミリオ・プレデリックは半狂乱にさえなつていた。ガルナハン基地から接收した補助口ケットをラザクラフト級に取り付ける作業に大わらわの格納庫内ではほとんどの人が気になんてしていない。ただザラ大佐が困った様子で聞き役に回つているのが印象的だつた。

シンはここ、パラスアテネの格納庫に初めて足を踏み入れていた。ZZ-X1Z300SAガンダムメルクールランペもここに置かれている。この機体を手に入れたいきさつを聞きたいとザラ大佐に呼び出されたところ、エリミオ小尉が叫んでいる現場に出くわすことになつた。

「ナチュラルは事理さえ弁識できぬ愚か者なのですか！？ どうすればそこまで愚かになれるのです！」

ザラ大佐は何も答えようとしないでただプレデリック小尉が叫ぶに任せていた。ジャブローで会つた時はコーディネーター至上主義

者ではあっても冷静な人に思えた。単に自分の価値観だけで行動して、周りのことに注意を払わない。だから動搖することもない。こんな見せかけの冷静さだと気づいていないわけではなかつたような気もする。

「プレデリック小尉」

シンが声をかけると、プレデリック小尉は血走っている、そう思える目をシンへと向けた。プラントにいた頃、こんな視線には幾度となくかられてきた。

「エイプリルホール・クライシスは地球に甚大な被害を与えた。ジエネシスが地球全土を焼こうとしたのはほんの3年前。それに、フィンブルの落着だつて、プラントは妨害さえした。3度も喉元にナイフ突きつけておいて信用しろなんてそもそもおかしい」

「我々は義によつて立つてゐる。多少の犠牲は受容するだけの覚悟がなければならない！」

「それは正義なんて呼ばない。独善でしかない」

その犠牲を、プラントはいつも外におしつけ続けてきた。極端なことを言つなら、自分たちは正しいことをしてゐるから、だから何をしても仕方がない、許される。そう、思いこみ続けてきたから。

「ではお前は何のために戦つてゐる。自身の正義を正しいと信じ、証明するために戦うことこそが正義のあり方ではないのか！」

「それは違う。正義は人の数だけあって、そのどれが正しいなんて

こともない。ただあるとすれば、他人の正義を齎かす独善は、その人すべてにとつて悪になるだけだ」

排他的な意志を、正義と勘違いする者は少なくないが、それは結局独善にすぎず正義とは違う。こんな簡単なことを理解することさえ、フレデリック小尉は拒絕する。今にも殴りかかるうに体を大きく動かし、手を振り回している。

「軟弱すぎる！　自身を強く持たねば正義などなせん！」

「自分の正義を絶えず疑つて、他人の正義を認める強さ」こそが正義なんだ。正義のあり方なんだ。独善に走つて他人の正義を齎かしたり、正義が何かを考えることを放棄して正義という言葉から逃げ出したりしたら駄目なんだ」

「それこそ貴様の正義の押しつけだらう！」

「誰彼構わず殴つている人を止めることは正しいことだと思う。フレデリック小尉、あなたは正義のために戦つてんじゃない。戦うことの正当性に正義を利用しているだけだ。そんなもの、正義とは呼べない」

「正義とは勝ち取るものだ！」

それが、正義と独善や偽善を安易に混同して、自分の正当性を証明するために独善と正義と言い換えて利用しているだけだ。どういえば、このことを伝えてあげられるのだろうか。シンが迷いを見せている間に、他の声が割り込んだ。

「そろそろ出発だ。そこまでにしておけ」

別に何年も聞いていないわけじゃないのに、懐かしさを感じさせる声だ。ザラ大佐やフレデリック小尉もそろって同じ方を見た。赤い軍服に、襟には翼を模したエンブレム。初めて出会った時と同じ姿をしたレイ・ザ・バ렐大佐の姿があつた。

レイ隊長の登場がよい仕切りになつたのだろう。そろそろラヴクラフト級2隻を宇宙へと帰す時間が近い。ザラ大佐はシンに一声かけてから歩き出した。

「シン、話は後で聞かせてもらうことになると思つ。無論、メルクールランペについてだ」

フレデリック小尉もザラ大佐の後に続く形で格納庫を後にした。残されたのはシン・アスカとレイ・ザ・バ렐。部隊長に帰還を報告すべく、シンは敬礼の姿勢を披露する。

「隊長、ただいま戻りました」

「シン・アスカという人間がここまでしぶといとは知らなかつたな

皮肉屋であるレイ隊長らしい言葉とともに、隊長もまた敬礼を返してくれる。

「生き延びることだけが取り柄ですから」

人々の願いと想いと、憎しみと恐怖が交錯します。月はいつも人

の願いの象徴でした。月はいつも見る人によって異なった印象をもたらします。私は蟹に見えました。あなたはウサギですか、美女の横顔ですか。人が様々な思いを手向け、様々にその姿を捉えてきた月。それを王は最後の戦場と位置づけました。

人と人との憎しみと恐怖から戦わなければならない最後の戦場と。

これから来る、人という種の宿命を問う決戦を迎えるために。

次回、GUNDAM SEED Destiny ↗ Blume
nE inbrechers

「星月夜」

アルザツヘル。今ここに、王の心と力、願いのすべてが揃うのです。

第32話「星夜月」

プラントは第4の盾を失つた。

宇宙空間に浮遊する岩石。その中央に光の柱が撃ち込まれる。膨大な光は岩盤をバターと同視して溶かし進む。走る亀裂の内部からさえ光は溢れだし、熱が要塞の内にはで伝わる様子が見て取れる。

光の貫通と岩石の崩壊とは同時であった。

目映いばかりの光の後訪れる漆黒の闇。

プラントは第4の盾を失つた。

「サイサリス！　どうこうことだ！？」

机を叩く音がした。木造の上物ではなく、プラスチックをはめ合わせただけの作業机はずいぶんと軽い音とともに小さく跳ねる。この机を挟んでイザーク・ジユールとサイサリス・パパは睨みあつていた。

もう一度、イザークが机を叩く。

「やつらはようやく基礎訓練が終わつたばかりのひよつじまだ。操縦も基礎しか学んでいない！」

こいつのよつて白衣を身につけサイサリスは座つてゐる。立つて

いるイザークからは見下ろされる形でありながら物怖じした様子なく机上に置かれたモニターの操作に忙しい。イザークには時折横目で視線を送るでしかない。

「状況理解してる? 今プラントは存亡の危機にさらされてる。主力は月に行っちゃったし、国防要員が不足してるんだよ」

月面ではザフト軍によるアルザッヘル基地攻略が進行している。別に軍事機密でも何でもない。テレビをつければどの局でも同じことを放映している。普段碎けた雰囲気が売りのキャスターでさえ喪服かと思えるような地味な服に神妙な表情、平静を呼びかける言葉とともにザフト軍を信じようの一言張り。

デュランダル政権はプラントが存亡の危機にあることを大体的に放映することを推奨している。

プラントに住む者なら誰もが知っている。今、プラントは悪魔に狙われているのだと。

誰もが知っていることが前提である。イザークはわざわざ返事をする必要性を覚えなかつた。ただでさえ鋭い目つきをさらに研ぎますし、サイサリスから視線を外さない。

「一つ聞かせてもらおう。何故あんな嘴の黄色いパイロットたちにインパルスガンダムをあてがう。ザフトにはエースもいるはずだろう」

「それをあんたが知る必要なんてない」

今度はモニター画面しか見ていない。しかし、そんなサイサリス

も続くイザークの言葉には手を止めざるをえなかつた。

「アリス・システムがあるためか？」

「どうしてあんたがそれを！？」

ようやく顔を向けてきたサイサリスにイザークが見せたのは彼らしからぬ嘲笑であつた。サイサリスの企みへの軽蔑と、そのような手段を選択しながら一顧だにしないプラント有数の技術者へと蔑視を含んだ顔であつた。

「國星のようだな。どうせ俺の言葉に耳など貸すつもりはないだろうが、だが、これだけは言つておく。俺の生徒をむざむざ使い捨てさせん気はない」

話はこれだけだ。軍学校への養成は国防委員会から來ている。教官の1人がどれだけ騒(じ)うと命令が撤回されることはないとくらいイザークはとて理解している。サイサリスにしても厄介払いできる程度の認識なのだろう。イザークが部屋を出ようと歩き出した時には拗ねたように首を回してモニターに視線を戻していた。

「ぐありふれた大きさの部屋は、イザークを扉の前にまで運ぶのにさして時間を必要とはしなかつた。扉もまた、あっせりとイザークを通す。イザークがわざわざサイサリスに挨拶をするはずもない。後ろ手に扉を閉めると、部屋の外にいた意外な人物を目にすることになる。

技術ラボの簡素な通路の上に、教え子の1人が顔を伏せがちな様子でたたずんでいた。

「メイリン……！？」

「……」にいるはずなどなかつた、徵兵の決まつた少女がイザークのこと待つていた。

通路で話している訳にもいかず、2人は外へと移動することとなつた。メイリンは終始無言のままであり、ラボの屋上、2人並んで外を眺めている時も何も変わらない。

塗装も施されていないZGMF-56Sインパルスガンダムが雑多な「一ドに繋がれたままゆっくりとした歩調で歩いては時折立ち止まり、片膝をついて座り込む。そのまましばらく待つてたが動き出す気配はない。一体何の実験をしているのか、見てるだけではわからない。

それはメイリンにしても同じことだ。イザークと同じように屋上の手すりに手を預ける形で体は外を向いている。しかし、顔は伏せられ何を見ているでもない。

イザークにインパルスガンダムを調査するきっかけを与えた少女は、実験中のインパルス同様、見ても何も話が進みそうもない。「どうした？　俺は占い師でもなければ、気持ちを推し量つてやれるほど人間できてもいい」

「姉が……、戦死したって連絡受けました……」

思えば、姉の名前さえ聞いたことがなかつた。ただインパルスのパイロットとして前線に出ている。それくらいの話でしかない。

「そつか、残念だ」

不格好に飾り付けた慰めの言葉がよいとは思わない。少なくとも、イザークにとつてメイリンの姉は結局のところ赤の他人でしかないのだから。

「撤退する仲間を逃がすために殿を務めてそれで……。らしくないですよね、そんな格好いい死に方なんて……」

メイリンが時折言葉を詰まらせるのは涙を堪えているからだ。横顔をじろじろと眺めているわけではないが、涙声とそうでない声の区別くらい、イザークにも判別できる。

イザークの胸中に飛来したのは喉を詰まらせるような不快だった。勇者が1人命を落としたことに対する対してではない。メイリンは姉がインパルスガンダムのパイロットであると言っていた。それなら、撃墜された時もインパルスに乗っていたと考える方が自然だ。

(アリスが使われたのか……?)

それならば、メイリンの姉は戦死したというより戦死させられたとする方が正確だろう。プラントは、4年前と何も変わってなどいない。必要だからと絶えず誰かを犠牲にし続けている。

「先生。私、戦います……！」

瞳に涙をためている分際で威勢ばかりがいい。空元氣とは違うのだろうが、ある種の自棄を起こしている。イザークが教官でなければ胸ぐらにつかみかかりそうな勢いを感じる。

「復讐のためか？ それなら……」

「違います！ でもこっちが何もしなくても敵は攻めてくるんですよ。何もしなかつたら殺されるだけじゃないですか！ 私は、大切な人が殺されるのなんて我慢できません！」

「それを復讐と言つんだ！」

少し怒鳴りつけると、メイリンはいつもの気弱なメイリンのままであった。まるで子どもか動物のように体を小さく震わせて、しきその眼差しは涙とともに怒りを湛えたまま。

「先生は、私たちに国のために、仲間のために戦つて欲しいと思って鍛えてくれたんじゃないんですか……！？」

「馬鹿な死に方をするひよっこを一人でも少なくするためだ」

「それが戦争で敵を殺すことじやないんですか！？」

「それは単なる結果だ。戦争が、命をかけるほど高尚なものか……」

わかつてはいたことだが、今のメイリンに何を言つても無駄だろう。そもそも口が立つならイザークは軍人になどなつていない。

姉の復讐に憑かれたメイリンの見開かれた瞳からは涙がこぼれていた。

「メイリン、お前たちは俺が率いる。馬鹿な死に方することだけは許さんぞ。いいな」

若者たちは声をそろえてこの国を守りたいと叫ぶ。だが、イザークは知っている。この国に裏切られ、この国を裏切るしか術を知らなかつた若者たちがかつていていたことを。

世界の命運がほんの数時間で決してしまつ。そんな瞬間というものはそぞうと訪れるものではないようであつながら人類はわずか4年前にも経験している。

その時、ギルバート・デュランダルは議長ではなく、それどころか議員でさえなかつた。国立大学に研究生として所属していた。志願制を貫くザフトに参加する義務などない。仲間たちと政治討論を繰り広げていたことが懐かしい。

考えもしなかつたものだ。そのわずか4年後、議長として国難に相対することにならうとは。いつものように演説会場に足を運ぶ。その度に胸は高鳴り興奮を覚えた。自分の一拳手一投足で民衆が動く。自分の意志が伝播していく様を眺めるといつことは為政者でもなければ味わえない悦楽である。

まさにギルバートの独壇場。独り舞台で唯一無二の主役を演じることができた。そう、独奏者の舞台に主役は2人要らないのではないか。

目の前には演説場へと続く長い通路をただ歩く。ふと後ろを振り向いた時、ラクス・クラインは淑やかな足取りでギルバートの後ろについていた。

「ラクス、演説は慣れた仕事だ。私だけでもいいと思うのだけれど

ね

「危急存亡の間際、後ろに下がっている訳にはこきません。わたくしも参ります」

ラクスは言い出したら聞かない。ここは諦めるしかないようだ。さて、これが何度目の諦めだつたろうか。

通路の先、軍服を身につけた兵士が扉の左右を守つてている姿が見えた。まだずいぶんな距離がある。それにも関わらず兵士たちは敬礼し、ギルバートが近づくまでその姿勢を維持した。

「『』苦労。そろそろ始めたいが、構わないかな？」

短くとも力強く返事をしてくれた。2人の兵士は左右対称の動きで観音開きの扉を開けると外気が静寂を運んでくる。

演説台が見えた。その奥には広間を埋め尽くす聴衆がいる。さて、1000人だろうか、2000、それとも3000、いや、それ以上か。これほどの人がいながら物音一つない。誰もがこのギルバート・デュランダルの言葉を待つている。

一步、また一步演説台を目指す度、聴衆の視線がそろつて動く。その焦点が演説台と重なる時、すなわち彼らの議長が演説の準備を整えたということである。

こきなり話始めるのは無粋だろう。聴衆をまずは見渡すことじた。若い者が多い。皆、コニウス・セブン世代と呼ばれる若者だ。

ト政府は教育カリキュラムを大幅に見直した。地球は敵であり、ナチュラルは不善。「一デイネーター」という優れた存在に嫉妬した愚か者の群だと。事実、ユニウス・セブン世代の子どもに自由に絵を描かせると燃える地球や死んだナチュラルを描くほど教育は徹底されている。

（そう、君たちは何も間違つてはいない。だが、敵はそれでも攻めてくる。戦わなくては守りたい人も、守りたいものも守れない）

演説を始めよう。

「今、プラントがどのような状況に置かれているのか、今更説明する必要はないと思う。不安でたまらないことだろう。だが、そんな時だからこそ聞いて欲しい」

君たちは何も悪くない。だが敵は攻めてくる。今遠く離れた月面からここを狙つている。

聴衆の中に徐々に高まる恐怖を掴み、それが膨れ上がるに合わせて言葉を乗せていく。

「人混みにまみれ恐怖に急ぐ人も、家に閉じこもりふるえている人も、今なお護国に立ち上がる人もみな、この声を聞いて欲しい。この姿を胸に焼き付けて欲しい」

ギルバートが言い終えたタイミングで、会場に設置されたモニターに画像が投影される。演説台を見下ろす壁にモニターは設置されている。ちょうど聴衆からはギルバートが映像を背負っているように見えていることだらう。

円面で繰り広げられる戦いと、そこで戦うザフトの兵士たちの姿が。

「戦つている人々の、国を、命を、未来を守りたいとする無言の声を！」

仕事を共にするよくなつて1年になるティレクターには、ここで命を失った傷ついたZGMF-1000ヅダがそれでも敵に突撃する画面を入れるように指示しておいた。ギルバートからでは映像を確認できないが、聴衆の中には祈るように手を合わせ傷ついたヅダの無事を祈る姿があった。演出は確実に効果を上げている。

「悪鬼を滅さんと剣携え進む姿を！」

次はZGMF-953ゼーゴックの編隊が一斉にビームを敵陣へと浴びせかける姿を映す。聴衆は予定通り沸き立つた。

「彼らは皆あなた方とともにあり、あなた方も彼らとともにいる。この一時だけ、政治家としてではなく、指導者としてでもなく、ただ1人の男に戻ることを許していただきたい！」

今、背後には一步も引くことなく、国を守ることをやめようとしないザフトの勇士たちを背負つている。

「私は彼らを信じる。たとえどのような苦難の道のりであろうとも必ずや国を守り、勝利をもたらしてくれると信じる！根拠なんていらない。だが、信じたくて信じたくて仕方がないのだ！彼らの勇姿に心奮わされた男として！私は彼らを信じている……」

予定ではここで拍手喝采の大号令が起るはずだった。議長であ

るギルバートの演説が終わったことを確認し、聴衆が喝采をあげるために息を大きく吸い込む。そんなわずかな間をつくように絶妙なタイミングでラクス・クライン議員は言葉を滑り込ませた。

「わたくしたちの信じた未来を得ることは並大抵のことではありません。ですが、わたくしも信じます。たとえ力ないわたくしたちでもその恐怖に負けないと心は彼らを支えると、そして彼らが勝利してくれると信じます」

議長の傍らでその存在感を確実に示している。言葉の長さも適切だ。吸い込んだ息をためておける程度の長さで喝采の準備をする聴衆の間をつき崩してしまつことはない。

「今日とこいつ日が、よい日でありますよつ」

ラクスの言葉が終わるとともに聴衆は一斉に歓声を上げた。

（やれやれ、すっかり手柄を横取りされてしまつたらしい……）

アームストロング船長のアポロ11号が月面に降りたとされる西暦1969年から246年が過ぎようとしている。偉大な一步と自ら称したその足跡は大気を持たない月面では風化を免れることで何百年にも渡つて残るとされていた。

今、この言葉を信じる者など、少なくとも耳にはいない。

爆沈させられたダーレス級MS運用戦艦が火煙に包まれながら地球のわずか6分の1の重力に引かれ落ちていく。この墜落を背景と

して、ジダがソード・ストライカー？を装備したGAT-01A1ストライクダガーに腹を横一文字に斬り裂かれたかと思うと、そのストライクダガーはすぐさま飛来したビームに胸部ジェネレーターを撃ち抜かれた。

大地が焼け、重火器の火線が上空で交錯する。

世界安全保障機構軍モビル・スーシュ総数約200。ダーレス級20隻、ドレイク級10隻、旗艦として3隻のアガメムノン級を従える大西洋連邦、ヨーラシア連邦、大洋州連合軍からなる混成部隊である。

ザフト軍モビル・スーシュ総数約250。ラヴクラフト級5隻、ナスカ級20隻、ローラシア級10隻。本国の防衛戦力さえ動員した宇宙軍による総力戦の構えである。

約3年前のヤキン・ドゥー工攻防戦以来の大決戦が今、月面では繰り広げられていた。

音のない無声映画のような戦争のただ中で、人の足跡など一体何故残るうか。

GAT-3333ディーウィエイトガンダムがモビル・アーマー形態のままそのウイングを撃ち抜かれた。地球軍の中で最大の機動力を誇るガンダム・タイプであろうと、重心をつき崩され、ミノフスキ・クラフトを有するバック・パックを破壊されれば軌道も歪む。月面に衝突する間際、変形し、薄い青のガンダムの姿に変わった途端、ガンダムは気づいた。

青い翼持つガンダムの接近に。

NN-X3N10ANガンダムヤーデシュテルンが全身を輝かせながら通り過ぎる。いつの間にやら頭部を破壊されたディーアイエイトはそのまま月面に叩きつけられ、月の乾いた大地に擦りつけられるようにして轍を刻む。ようやく止まつた時には、その腕を失っていた。

ヤーデシュテルンの侵攻は止まらない。

「エミリオ、敵の一 角を崩す。ついてこれるか？」

敵の防衛線へと突き進むヤーデシュテルンのすぐ後ろにインパルスガンダムが従う。まだ実戦経験に乏しい新入りのためか、エミリオ・フレデリック少尉は汎用性に優れたフォース・シリエットを使用することを好んだ。

「無論です。ナチュラル」ときに遅れはどりません！ それに、自分には、いえ、我々には仲間がいます！」

エミリオの言葉が示すものを、翠星石がモニター上に小さく表示してくれた。ヤーデシュテルンの後ろで隊列を組む友軍の姿があった。

「終わらせるんだ。こんな馬鹿げた戦争を！」

「エインセル・ハンターを倒せ！」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

作戦単位内の共用チャnnルに次々と吹き込まれるザフト兵の声と思い。誰もがこんな戦争をやめさせたいと考えている。そして、エインセル・ハンターさえ倒すことができればそれがかなうと信じている。

そう、間違いなどあるはずがない。エインセル・ハンターさえ倒せば地球各団は精神的指導者を失う。所詮利害関係で一致しているだけの世界安全保障機構などたやすく崩壊することだろう。

(これで、戦争が終わるんだよね、ラクス……)

戦争は、必ず終わらせなければならぬ。

出撃を控えたΖΖ-X1Ζ300SAガンダムメルクールランペのコクピット内で、シン・アスカは大きく深呼吸をした。

何から何まで落ち着かない。インパルスのよつてモニターを並べただけの狭苦しいコクピットとは違い、全天周囲モニターの球状コクピットは開放的でどこか落ち着かない。こんな広い空間を1人で独占していることなんてこれまでになかったからだろう。

もう一つ、出撃前のチェックを必要としないということが挙げられる。すべて機械が自己診断の上、結果をモニター上に投影してくれる。すべて機械に任せてよいものか、そんな不安もシンを落ち着かなくさせている。

これから、ただ一人で戦わなければならないのに。ジャブローの

戦いでバ렐隊は全滅。レイ・ザ・バ렐隊長も愛機であるΖGM F-X17Sガンダムローゼンクリスタルの修復を終えていなかっため今回は出撃を見合わせている。

ブリッジから入った通信は、そんなレイ隊長の声だった。

「シン、俺たちが撃墜しなければならないのは、恐らくフオイエリヒそのものだ」

モニターに顔は標示されていない。すでに第一種戦闘配備が発令されているのだ。

「お前は襲撃したコロニーでフオイエリヒと遭遇している。恐らく、屈折コロニーと同調を計るためにわざわざ持ち運ばれていたのだろう。そう考えれば、エインセル・ハンターがフオイエリヒを娘に預けていたことも説明がつく」

ΖΖ-X300A Aフオイエリヒガンダムそのものがあの巨大なビーム兵器の一部として機能しているとすれば、辺境の未完成コロニーにフオイエリヒがあつたことも今月面にフオイエリヒが運び込まれていることも確かに説明がつく。

(マッド隊長、あなたの読みは外れてなんかいませんでしたよ……)

ずいぶん遠い昔のことのように思える。コロニーを襲撃して返り討ちに遭つて何人の仲間を失つた。その後レイ隊長のミネルヴァに乗ることができて今に至る。

「あの時から、すべてが始まつたんですね」

「そうだ。だが用心しろ。予測ではまもなく第5射が放たれる。そして、第6射までは恐らくそう時間はかかるない。アブリリウス市を狙うのであれば、コロニーと要塞では破壊に必要な熱量が極端に異なるからだ」

「やっぱり隊長もアブリリウス市が狙われる、そう考へてるんですね」

「これほどの巨大兵器を地球軍が何故秘匿できたのか、それは大規模実験を行つていなかつたらだ。恐らく、実戦が実験を兼ねるという離業をしているのだろう。ジャブローにあつた同型の兵器で起動実験を、そして要塞を狙う度、徐々に精度が増している。奇襲として最適であるはずの初撃でアブリリウスを狙わなかつたのではなく、狙えなかつたと考へれば様々辻褄があつ。第6射がアブリリウス市を撃ち抜く蓋然性は極めて高い。そう、肝に銘じておくことだ」

「了解！」

操縦桿を握りしめる。シンが座るにはやや大きかつたシートの位置はすでに合わせてある。機体は、徐々にシンに馴染みつつあつた。

ZZ-X1Z300SHガンダムメルクールランペの足がミネルヴァのカタパルトを踏みつける。元々地球軍で使用されるはずだったメルクールランペの規格がどうしてザフト軍のものと合うのか不思議だつたが、レイ隊長に言わせれば何のことでもないらしい。ゼフィランサス・ズールという1人の天才によつて作られたガンダムといふものは、得てしてそつとつものなのだそつだ。

出撃準備を終えて、シンは前を見た。かつてコロニーを襲撃した時とは違ひ、宇宙の闇には幾本もの光の華が咲いている。

あの時とは何もかもが違う。

「シン・アスカ、メルクールランペ、行きます！」

エインセル・ハンターは、まさしく現人神としても過言ではないのではないだろうか。地球軍が向ける忠誠はもはや崇拜に近い。ザフト軍の畏れようは常軌を逸している。

正邪を問わず、信仰と力、奇跡を具現する存在を、人は神と崇める以外の術を知らないのだから。

誰もがエインセル・ハンターを信じていた。アルザツヘル基地を包囲するザフト軍の軍勢に引く者などいない。

ミサイル艦でしかないドレイク級が定石を破る。前線に出る。それどころか加速をやめぬままありつたけのミサイルを発射する。この時代モビル・スーツ搭載能力のない戦艦は戦力に数えられない。対艦戦を経験したことのない新米パイロットさえいる現実に、ザフト軍は反応することができなかつた。ありえないほどの至近距離から放たれたミサイルがこともあろうにザフトのモビル・スーツを捉えたのである。

爆裂する炸薬に消えるザフトのモビル・スーツ。

モビル・スーツが戦艦に撃墜される。ここでは、あり得ないことが起こりつつある。

幾本ものビームがドレイク級へと撃ち込まれる。戦艦の分厚い構造をビームは軽く突き破り炎が体のいたるところから吹き出す。破壊さ、墜ちていく戦艦。その影から地球軍のモビル・スーシが奇襲をかける。

刹那の混戦。ザフトがわずかな間に接近を許したことには局所的な混線が発生した。ビーム・サーベル、ビーム・アックス、足りなければライフルの銃身そのものを鈍器としてモビル・スーシとモビル・スーシとが斬り結ぶ。

何とも野蛮であり、何とも猛々しい。技巧、テクニック、戦術、戦法、技、技術。軍人として培つた技術をほっぽりだし、ただただ剥き出しの敵意をぶつけ合う光景は戦いと呼ぶよりは闘い。単純明快。立っている者こそが勝者であり、命を失つた者から脱落していく。

「クピットを正面から貫かれたGAT-01A1ストライクダガーが月面に叩きつけられる。胸にダガーが深々と突き刺さったZGMF-953ゼーゴックは落ちることもなく爆散する。

誰もが綺麗な背中をして死んでいく。逃げ出す者などなく、まるで抱き合つようになり合いのサーベルとサーベルを突き刺し合つたまま固まつたGAT-04ワインダムとジダの屍さえ放置されていた。

皆がそろつて地獄へと行進していく。振り返ることなく、省みることなく、エインセル・ハンターの姿と影を追いかけるそのままに。

軽く機体を動かす。そんなつもりで操縦桿を引くと、メルクール

ランペは全身からミニノフスキー・クラフトの輝きを放ちながら滑るように移動する。

NGMF-56Sインパルスガンダムとはスペックがまるで違う。機体が思うように動き、まるで翼を持っている。実際には金属板のバック・パックが翼状である。かのように月の空を飛ぶ。

大型のスカートを持つてここからシリエットがどこか女性的で、黒い天使という言葉がこれほど似合つ機体は他にはないだろう。武器は対艦刀のみ。西洋刀を思わせる長剣は白い刀身を赤熱させていた。高周波ブレードの特徴である振動の余剰エネルギーが刀そのものを熱しているために起こる現象だ。

元々白兵戦を得意とするシンにとって、これほど扱いやすい武装はない。

ウインダムがビーム・サーベルを抜いて接近てくる。全天周囲モニターはその姿を簡単に捉えた。白い色の装甲のところどころが青く塗装された機体で、ヒメノカリス・ホテルの機体ではない通常の量産型のようだ。地球軍の最新機だけあって動きがいい。

それでも、今のシンには遅くさえ見えた。

機体を翻す。その勢いさえ利用してメルクールランペを加速させる。相手は完全に動きが遅れている。あっさりと懷に潜り込む。その時にはすでに意識が加速し、体は次の動きに入っている。対艦刀を振り上げると、敵は腕を失っているはずで、次に振り下ろせば腕を裂くことができる。意識は準備を終え、体が動く。

メルクールランペがその場所を離れた時には、腕を斬り取られ胴

を裂かれたウインダムが爆発を引き起こす寸前であった。敵機の撃墜を確認した頃にはすでに次の動作に移っているのである。

(これがゲルテンリッターの力……)

力の次元が違う。

ライフルを構えたGAT-01デュエルダガーが向かつてくる。標準をこちらに合わせてくるよりも速く、引き金を引くよりも疾く加速したメルクールの剣はデュエルダガーの腹を通り抜けていた。

フル・ミノフスキー・クラフトのゲルテンリッターは羽根のように軽やかに動く。ジェット・ストライカーを装備したストライクダガーの1個小隊がビームを次々と浴びせてきたとしても、あらゆる方向への機動を可能とするメルクールは危なげなくかわしていく。外れたビームが月面に引き起こした爆発に紛れて一気に浮上すると、ストライクダガーの動きは完全に遅れていた。ライフルがいつまでも下を向いたままで、シンがすれ違いざまに1機斬り裂いたことでようやく銃口がメルクールランペを追う。

しかし、敵はシンの姿を完全に見失っていた。

直角に機動することで速度を落とさず、小さな旋回半径で機動方向を完全に入れ替える。この力も、メルクールランペならばより完全に再現することができる。

ストライクダガーのライフルが上を向いた時には、すでにメルクールランペの姿は敵の懷にあつた。突き出す対艦刀が鋼鉄をあつさりと貫通する。これで2機目。小隊は通常3機。そう認識した頃には、メルクールランペの剣は最後のストライクダガーの首をはねて

いた。

戦線が混乱していて組織立った戦いができることがあるとは言え、ガンダム・タイプでもない量産機では相手にならない。

これならエインセル・ハンターに勝てるだろうか。エインセル・ハンターは何故こんな機体をシンに渡したのだろう。

この答えは、地球軍の防衛線の先にある。遠く離れた月面に、例の大量破壊兵器が月に張り付いた皿のような姿をさらしていた。

あそこにエインセル・ハンターがいる。

「もう一度、俺はエインセル・ハンターに会いたい！」

そのためには乗り越えなければならない壁がいくつもあった。までは一つ。防衛線を抜けて来る白いワインダム、ヒメノカリスの機体だ。

「シンー！」

「ヒメノカリス！」

通信は当然のように繋がった。

ワインダムがノワール・ストライカーに装備されたレールガンを展開する。1対のウイングに格納されていた銃身が起き上がりメルクールランペを狙う。いくら初速が速くても射撃でガンダムを落とすことなんてできやしない。メルクールランペは装甲をわずか輝かせる程度の小さな動きでレールガンをかわした。

「まだお父様を狙うの？　あなたは、そんなにお母様に愛されたいの？　いえ、愛されていると思いまみたいの？」

「確かに俺は復讐者ではあっても復讐者じゃないのかも知れない。でも、こんなこと認められない！」

「やう。でも、どうでもいい。これで、私はあなたを殺すことができないから」

両手にビーム・サーベルを構えたウインダムの攻撃は、大きく飛び上がってかわす。宙返りを交えて軌道を変えながら逃げると、それだけでヒメノカリスは追いつくことさえできなくなる。

「やめてくれヒメノカリス。俺は君と戦いたくない。どうして君が戦わなくちゃいけないんだ？」

「私はお父様のために生きているの。だから、お父様のためなら何でもする！」

再び放たれるレールガン。高い速度を維持したままのメルクールランペを捉えることなく、月面にクレーターを付け加えただけで終わる。

「君も俺と同じだ！　お父様の役に立つてい。そうと実感できないと不安で仕方がないんじゃないのか？　戦わなくなつた自分や、役に立てなくなつた自分が捨てられることに怯えているだけじゃないのか！？」

だからきっと戦つんだ。ヒメノカリスは自分に、お父様のために

戦う自分はお父様に愛される資格があると言ふ聞かせるために。

「違う！」

否定されてもヒメノカリスのことがわかる。あまりにシンとよく似ているから。心にはつた水は鏡のようにヒメノカリスの姿を写す。

（俺は、こんな一方的な殺戮なんて認めることなんてできない。だから俺は、君を討つ！）

「違うとこ、なら剣を下ろせ。ここから逃げ出してくれ。エインセルさんなら、咎めなつて言ひながら！」

向かってくるワインダムへと剣を構え加速する。振り下ろすメルクールランペの大剣・表面にビームを弾く機構が備わっているらしく、ビーム・サーベルと斬り結ぶことができる・をワインダムへと叩きつける形で激突する。ワインダムはサーベルで斬撃こそ防いだが、激しい衝突は出力差からメルクールランペが押し切る形となつた。勢いを完全に殺され、月の重力にさえ抗えずゆっくりとワインダムが落ちていく。

「エインセルさんのことを愛してゐなら、信じてゐならできんはずだ！」

「うぬやーー！」

スラスター出力に頼つた無理な機動でワインダムが上昇してくる。

ヒメノカリスは、こんなにも動搖する人だつただろうか。ヒメノカリスの思いは理解できても心はわからない。何がヒメノカリスを

「ここまで焦らせていいのださう、騒がせているのだろ。」

無理矢理接近してくるだけなら迎撃は簡単にできてしまう。ミノフスキー・クラフトの力まで乗せて剣を突き出す。それだけでワインダムは左腕を失った。機体の重心が狂つたことでおかしな方向に流されていくワインダム。それでもまだヒメノカリスは戦つつもりでいた。

「お父様に近づくな～！」

こんなヒメノカリスの声なんて聞いたことがなかつた。声を張り上げることなんて、剥き出しの感情をぶつけてくることがあるなんて考えもしなかつた。

残された右腕をただでたらめに振り回しただけの動きが、ビーム・サーベルがメルクールランペを捉えることなんてない。スラスターに頼らずミノフスキー・クラフトの推進だけで機体を滑らせる。それだけでワインダムは追いついてくることさえできない。

そもそも機体性能がまるで違つ。

徐々にメルクールランペを加速させると、それだけでワインダムを引き離すことができた。そして、スラスター推力を交えて加速する。飛び上がり、急旋回。直角にも近い急激な方向転換を2度行うと、その先には月面を背にしたワインダムの姿があつた。その動きはとても遅くて、意識は、ワインダムの撃墜を予定した。

残された右腕をバック・パック」と切断されたワインダムが月面へと墜落していく。ヒメノカリスの声を聞きながら、シンはそれを見送つた。

「ハウinz・オブ・ティンダロスが、使えない……」

そこは大地が盛り上がり谷間となっている場所で、両腕を失ったワインダムは崖に背を預けるようにして動きをとめていた。墜落の直前、スラスターを噴かせて衝撃を緩和していたところを見るとまったく動けないということはないのだろう。ただ、武装を失つてゐる。もう戦うことはできない。

メルクールランペをワインダムの側に着陸させた。もちろんどぞめを刺す為じやない。理由は2つ。

ヒメノカリスに伝えたいことがあった。

「ヒメノカリス、俺は、君のお父さんに会いに行く！」

墜落の衝撃からまだ立ち直り切れていないのだろう。ヒメノカリスからの返事はなかつた。

モニターの先、メルクールランペが見つめる先には両端が切り立つた崖の回廊が延々と続いている。上空から確認した。この崖は地球軍の防衛線の下を抜けてエインセル・ハンターの元に続いていることは。

モニターには上空で記録した500mにもなる谷の概図が示されていた。非常に入り組んでいて少しでも壁に激突すれば墜落は免れない。反対に歩いていけば上空の防衛線から集中砲火を浴びせられてしまふ。敵に標準を絞らせないくらいの速度で、谷の間を通り抜ける。

少しでも早くエインセル・ハンターの元にたどり着くには他に方法はない。

(今の俺になら……)

「できるはずだ！」

誰もが笑った。よほどの馬鹿か、よほどの自殺志願者がいると。複雑に入り組んだ谷間を加速しながら通り抜ける敵機の存在を確認した地球軍の評価である。

確かに両岸を崖に囲まれる谷間は接近を困難にし、攻撃の方向を上空からに限定する。だが、飛行したままで通り抜けるには谷が入り組みすぎている。速度を落とすどころか加速を続けているようではいつか必ず壁に激突する。それを恐れて速度を落とせば、上空に待機する地球軍が集中砲火を浴びることになる。

確かに谷には守備隊は配置されていない。配置する必要がなかつたからだ。

通り抜けることができるはずがない。激突するか、撃墜されるか。この2択しか選択肢はないのである。

ガンダムメルクールランペは飛翔した。狭い谷間を縫いながら、盛り上がる壁面を身を翻しかわす。全身をさらに輝かせながら急な角度の谷さえ鋭い角度と速度を維持したまま通り抜ける。見えていたはずのない、そんな曲がり際の岩さえゲルテンリッター初号機は

回避する。

人の限界速度を超えている。あのよつた動きを続けて、慣性は一
体どうなっているのか。

時間の問題という言葉がある。結果は決まっている。後はそれが
いつ起こることかという問題でしかないという意味だ。敵が激突す
るか、速度を落とすはず。それは時間の問題だ。そんな地球軍の考
えを、地球軍そのものが否定始めた。

激突しない。それを持つていられるほどの余裕はない。速度を落
とさない。そんなこと構うことなく次々と眼下めがけてビームを発
射し始めた。捉えるにはメルクールランペの速度が速すぎる。ビー
ムは谷の内外で派手な爆発を引き起こしながらもそれは完全にテン
ポが遅れていた。すでにメルクールランペが通り過ぎた後をさらう
でしかない。

奇跡が起きていた。

意識の加速。上空から眺めた谷の映像から行動を事前に決めてお
く。意識が反応するよりも早く体を動かす、機体が谷の間を飛び去
つていく。

卓越した機動技術。エインセル・ハンターが見せたその技術を、
シン・アスカは高い段階でそれを再現する。あり得ない動きは、し
かしすでに既知の技である。

そして、メルクールランペは谷を抜けた。

開けた大地が広がる。風にも雨にもさらされることはなく幾星霜の

時を地球眺めて過ごした月の大地のその先に、ユグドラシルの姿があつた。敵と味方が、兵士と兵士が前線をぶつけ合い、命をすり減らしながら咲かせる戦火はすでに遠い。ユグドラシルの空は静謐に包まれ以前の人を見ていた静かな月のありよう、たたずまいを見せていた。

シンが、メルクールランペが進む先は、しかし静寂が約束されることはない。すべてはすでに始まり、そして、すべての始まりはこの場所で終わりを迎えようとしていた。

月。ここは、すべての始まりと終わりが集う場所。

すべては4年前、エインセル・ハンターのオーブ侵攻が始まりであつた。すべてはアポロン、シン・アスカがマッド・エイブスの部下として襲撃したコロニーから始まっていた。

アブデイエル。墮天しきれなかつた天使と蔑まれた少年を待ちかまえるのは鎌をかざすガンダム。かつてアポロンで刃を交えたGA T-X255インテンセティガンダム汎用型、そして、アウル・ニアダであつた。

すでに鎌は構えられている。本来全身を青で染められているはずのインテンセティでありながらそれは薄い緑で染められ、甲殻類を彷彿とさせるバック・パックからはアームで連結された1対のシリドが構えられている。ビーム全盛の今においてビームを弾くシリドを与えた死神が、黒い天使を待ち受けていた。

「行かせねえよ！　ここから先はなあ！」

月面を踏みつけ、インテンセティが一気に前へと飛び出す。大型のバック・パックに搭載されたミノフスキー・クラフトが生み出す膨大な推進力に任せた強引な加速で両者は瞬く間に距離を詰めた。

鎌と剣。刃が触れ合うと、互いが互いの刃を弾き合い、2機は大きく回り込むように距離を開けた。

「の一撃でアウルは理解した。こいつとは一撃必殺の戦いになるだろうと。

お互い、高周波ブレードを使用している。刃そのものを振動させることで目標の分子結合を直接断ち切るこの刃はフェイズシフト・アーマーにも有効に作用する。結局ミノフスキー粒子の結合そのものを破壊されてしまえば、あとは通常の装甲でしかないからだ。

インテンセティ自慢のシールドも意味がない。今更レールガンやビーム砲が通用する次元の話ではない。

鎌と剣。先に斬った方の勝ちだ。

インテンセティは鎌を構えたまま動かない。メルクールランペも剣を構えたまま動こうとしない。どうせ戦いは一瞬で終わる。相手の出方をうかがっている他仕方がなかつた。

「こいつがシン・アスカって奴か……」

（なんでエインセル・ハンターの奴、こいつなんかにゲルテンリッター渡すんだよ）

こいつはステイング・オークレーの仇で、ただの「コーディネーター」でしかない。敵にわざわざゲルテンリッターをくれてやる意味なんてないし、実際、このシンとかいう奴はまだゲルテンリッターに認められていない。

「訳わかんねえ」

エインセル・ハンターはこんな男に何を期待しているのだ？！
何もできるはずなんてないのに。

そう、ゲルテンリッターの初号機を睨んでいると、「クピット内のアラームが鳴った。ああ、時間か。アウルはそんな軽い気持ちで1つのモニターに目をやつた。

その時、月面の砂が一斉に跳ねた。

モニターが焼け付くんじゃないかとばかりの光が溢れ、それは上空へと突き抜けていく。ゴグドラシルの第5射が発射されたのだ。

「これでザフトの要塞はぜんぶおじょんだな」

どうせシンとかいう奴もゴグドラシルの穴から吹き出る光を眺めてことなどだらけ。アウルは口笛をえ吹いて見物していた。

これでザフトは本国を守るすべての要塞を失った。第6射はいよいよアブリリウス市、プラントの首都を直撃する。おまけにコロニーを吹き飛ばすくらいなら大したエネルギーは必要がないときている。反則なくらい楽なゲームだ。

「ま、お前にとつむや、ハード・モードまつしぐらだらうけどな」

通信は繋いでいない。まさか聞こえているはずがないのだが、メルクールランペは剣を構えなおした。仕掛けてくるつもりらしい。

「ステイングの仇、とらせてもらひやー。」

操縦桿を握る手に力がこもる。思い出されるのは、真紅に鍛えられた日々のこと。意識の加速を覚えた。エインセル・ハンターのフォイエリヒとだって32秒のレコードがある。ただいい機体もって喜んでるだけの「コーディネーターなんかに負けるつもりはない。

どちらが先に動いたとか、そんなものはなかつた。ただ同時に今しかないというタイミングで踏み出ると、それは完全に一致した。2機のガンダムが同時に前へと飛び出す。

復讐を捨てなさい、アウル。

何故か突然、真紅のこの言葉が思い出された。

復讐の鎌が振るわれる。

明鏡止水ですよ、シン。

翠星石に贈られた言葉を思い出す。

かつてシンはこのインテンセティと戦い、敗北している。

それからたくさんのことを学んだ。意識を加速させ、機動を発展

させ、何より敵を知るということを覚えた。正義といつ言葉の意味を考えた。

正義のために剣を払う。

ここは現在世界の中心とも言つべき場所である。『グドラシルの本体が眠る地下施設。王の間とも言つべき場所にZN-X300A Aフォイエリヒガンダムがたたずみ、玉座は王を迎えていた。

開かれたままの「クピット・ハッチ。その奥、パイロット・シートに眠ったように座るステラ・ルーシュの姫君のよつな姿。エインセル・ハンターは5度のコグドラシル照射に精根尽き果てたステラをシートから優しく抱き上げる。すると、ステラはその腕の中で瞳を開いた。

エインセルはステラを優しく見つめる。

「ステラ、ありがとうございました。ここからは私の仕事です

抱き抱えるステラを揺らしてしまわないよう、エインセルの足取りは確かに、ハツチへと着実な歩みを進めていく。決して広すぎることはない「クピットをあつさりと歩き終えるまでの間に、ステラはその手でエインセルのスースを掴んだ。

「ステラ、役に立てた?」

「ええ、とても。ですが、まだ仕事は終わっていません。頑張れますか?」

「うん、ステラ、がんばる」

ハッチの外には乗降用のリフトが用意されている。その上には眼鏡をかけた女性が一人。メリオル・ピスティスは顔を上げられずにいた。エインセルがステラをリフトに下ろす間も、メリオルは顔を上げられずに、エインセルのことを見られずにいる。

そんな妻へと、エインセルは言葉をかける。

「メリオル、ステラをお願いします」

ステラは、それでもなかなかエインセルから離れようとしない。

メリオルは、それでも必死にエインセルの姿を見ようとして、その唇を震わせた。涙が頬を伝い始める。

「あなたと結ばれた日から心に決めていました。この日が来たなら、心を強く、あなたのことを……、送り出すと……」

もはや言葉を紡ぐことさえできない妻を、エインセルは抱き寄せ

る。

「あなたがいなければ、この日を迎える」とさえできませんでした

15年。この戦争と殺戮、憎悪と争いに明け暮れた男のそばでともに戦い、支え続けてくれた妻を、エインセルは力を込めて抱きしめる。エインセルの胸の中でメリオルはその温もりを感じ、ただ涙を流す。

「ありがとう、メリオル。本当に、ありがとう

エインセルにその体を委ねるメリオルから眼鏡をそっと外す。涙で汚れてしまったその頬にそっと手を添えて、2人は唇を重ね合わせた。

言い残したことはありませんか。伝え切れていない思いはありますか。ほんの少しの勇気を奮い立たせてください。後悔なんてしないでください。これが最後の機会です。大切な言葉があるのなら、大事な思いがあるのなら。

あなたの思いが伝わりますように。あなたの言葉が届きますように。

あなたの祈りと願いを、あなたが聞いてくれますように。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
n Einbrecher~

「最後の恋」

ファンタム・ペイン。これが、あの人があなたたちに残した言葉です。

第33話「さじ」の恋

「はいはい、並んで並んで」

すっかり片づけられたシアター・ルームにタッド・エルスマンを中心として関係者が横に並んでいる。その正面にカメラを設置して準備するのはベルナデット・ルリー。ジャーナリストらしく、カメラの用意は手慣れたものである。相棒であるジェス・リブルは並ぶ人々の位置を調整していた。

「エルスマン議員は真ん中にお願いします。ディアッカ君はその隣で。ああ、アイリス、君もなるべく真ん中にいてくれ」

この中でも最も重要な人物であるタッド・エルスマン最高評議会議員を真ん中に、その子息を横に座させる。そのすぐ脇にはヴァーリを立たせた。

「なんだか、ただの記念撮影じゃない、って感じですよね」

アイリス・インディアがティアッカ・エルスマンの後ろからそつと耳打ちする。

「多分な。実際、この2人にただですますつもりはないんだろうからな」

疑う2人の前でジャーナリスト2人組はまったく打算を隠そうとはしていない。

「ヴァーリの2人は並べた方がいいと思う?」

「いや、エルスマン議員の左右に配置する形にしよう。並べた方が顔の印象が似ていることは示しやすいけど、見ている人の視点が中央に集まりすぎる」

そう言い終えると、ジエスが二ーレンベルギア・ノベンバーをエルスマンの人を挟んで反対側の位置に立たせた。二ーレンベルギアは同じ顔で、しかし違うやり方でアイリスに苦笑して見せた。

疑惑は確信に変わる。

「やつぱり……」

ただの集合写真にも手を手は抜かない。そんなジャーナリスト根性に、アイリスはため息をつく他なかった。

しばらくして、人々の位置が定まつたらしい。離島小さな小さなお人形 - - を含めて10人の決して大人数ではない人々がカメラの前に並ぶ。カメラの最後の操作をしているベルナデットだけがまだ参列していない。やがてカメラのタイマーをセットし終えたところでベルナデットも駆け足で集合に加わる。場所は、ちょうどアイリスのすぐ隣であつた。

「もつとあなたたちからいろいろなこと聞きたかったけど、残念ね」

ベルナデットはアイリスへとステイックを振つて見せた。ボイス・レコーダーで、アイリスや二ーレンベルギアに暇を見つけては聞いていたものだ。断片的で大した情報は得られなかつたなすだが、ベルナデットは嬉しそうに笑う。

「ベルナデットさんもいろいろありがとうございました」

いつシャッターが押されるかわからないため、基本的に前を向きながら時々横目でベルナデットを見る。アイリスはそんなおかしな行動をしながらお礼を述べた。

「これから何が起こるかわからないけど、気をしつかりね」

まもなくタイマーが切れる。誰もが正面のカメラを見ているなか、突然騒ぎ始めた少女がいた。

「雛、もっと大きく『写りたいの〜』

サイ・アーガイルの手の中で桃色のドレスを着た少女が大きく伸びしょくとしていた。単なる立体映像ではどれほど暴れても抗力は発生しない。サイはいつものようにロー・テンポで自分のゲルテンリッターを奢める。

「『J』のプロジェクトじゃ、『J』の大きさが限界だよ

「じゃあ、体、持つてくるのー！」

Jの中でZN-X6G102SAガンダムクライネベーレの機体を見たことがある者は限られる。しかし、知らない者でも一斉に巨人が町中を闊歩してやつてくる光景を想像してしまった。慌ててとめようと雛苺へと手を伸ばし、集合体制が一気に崩れ落ちる。

カメラは、そんな碎けた光景を撮影する羽田となつた

大気を持たない月の空。主を失った大鎌がゆっくりと回り、弱い重力に引かれて落ちる。高周波ブレードで覆われているはずのその刃は月面に浅く突き刺さるでしかない。

主が横たわっているのは、鎌が突き刺さったすぐ横のことである。GAT-X255インテンセティガンダムがうつ伏せに倒れていた。月面には轍が刻まれ、倒れた際の勢いのほどが知れる。どこかを損傷した様子はない。だがそれは、インテンセティが満身創痍の足取りで起きあがるまでの認識でしかない。

ゆっくりと踏ん張るようにインテンセティが起きあがると、その両腕が肘から先を失っていることがわかる。そればかりか、左膝にも深い裂傷が刻まれていた。もはや立っていることさえやっとである。普段は軽々持ち運ぶ大型バック・パックを重たげに背負い、インテンセティは月の重力さえ煩わしげに振り向いた。

「何でだよ……？　何でコクピットを外しやがった！？」

パイロットであるアウル・ニーダが叫ぶ先、無傷のΖΖ-X1ΖΖSAガンダムメルクールランペが背を向けている。いや、背を向けているのではない。ただユグドラシルの方を見ているにすぎない。

アウルは相手のコクピットを狙つたのだ。ところが、メルクールランペはアウルを狙わずインテンセティの戦闘力を奪うに留め、とどめを刺す様子もない。

「情けでもかけてるつもりかよ！？」

アウルはコクピットを狙つたのだ。では何故敵はアウルにとどめを刺そとはしない。声の限りに叫ぶアウルはふと真紅に言われた言葉を思い出し、思わず言葉を止めた。

復讐を捨てなさい、アウル。でなければ、あなたは自分自身を裏切つてしまうことになるから。

どれほど実力をつけようと、敵の動きを読もうとも怒りに任せた攻撃を選んでしまっては意味がない。そう、真紅は確かに言っていた。敵の狙いはアウルを殺すことでもなければインテンセティを撃墜することでもない。ただ戦力を奪うだけでよかつた。

アウルは敵を殺すということにこだわりすぎた結果、それが意識の加速も明鏡止水の境地も無意味にしてしまったのだ。

戦士である前に単なる復讐者でしかなかつた。それが、アウルが負けた唯一であり絶対の訳であつた。

「ちきょう……」

悲しいよりも情けない。もはやまともに動かすこともできないインテンセティの中で、アウルは歯を食いしばりながらメルクールランペの飛び去る姿をただ見送るしかできなかつた。

コグドラシルの第5射が放たれた。事態はそれほど逼迫している。急がなければ何から今まで手遅れになつてしまつ。

ヒメノカリス・ホテルはザフト軍でもなればプラント市民でも

ない。事実、プラントがどうなろうと興味はない。すべてはシン・アスカが悪い。

ここはダーレス級ガーティ・ルーの格納庫の中。ヒメノカリスはノーマル・スーツ姿で壁に傷だらけの姿をさらすかつての愛機を一瞥した。このGAT-04ウインダムはもう使えない。人々の動きが激しい格納庫の中を跳ねるように移動する。

小型のヘッドフォンはブリッジと繋がっている。艦長であるイアン・リーとまだ状況確認を終えていない。

「ステラとアウルは？」

「ステラ・ルーシュはすでに。アウル・ニーダについてもまもなく

聞けばアウルもシンに負けたそうだ。いくら性能に優れるゲルテンリッターを使っているとは言え、強くなつたアウルを破るほどにシンは成長している。なおいつそう焦りがつのつて仕方がない。

これまでシン・アスカという人間をこれほど強く意識したことなんてなかつた。お父様がメルクールランペなんて渡さなければこんな思いに駆られる必要もなかつた。

（お父様は死ぬおつもり……。シン・アスカに殺される」とで……）

そんなことをせない。させたわけにはつかない。

「アウルが着き次第退避して」

「ヒメノカリス中尉はどうされる？」

イアン艦長は奇妙なことを聞いてきた。あんな仏頂面をしていても、意外と人というものが見えているのかもしれない。現在、地球軍は徐々に撤退を開始している。拠点を捨てて、総大将であるはずのエインセル・ハンターを残して。

それでも、ヒメノカリスがエインセル・ハンターを、お父様を残して行くことなんてできないことはヒメノカリス自身、イアン艦長でさえ知っている。

当たり前のこと、当たり前のよう囁いた。

「お父様の元に行く」

足を止める。するとヒメノカリスの目の前には褐色の装甲をしたGAT-X370ディー・ヴィエイトガンダム特装型がある。ステラ・ルーシュが戦闘に参加しなくなつて以来使われてこなかつた機体は、いつでも使えるよ状態でステラと行動をともにしていた。

でも、戦うのはステラじゃない。

「シン、あなたはこんなところに来るべきじやなかつた……」

ジエネラル。最前線において唯一の将軍は仲間たちと酒を酌み交わしていた。

「やはり酒は仲間と飲むに限るなー。」

豪快な笑い方とともにバー・ボンを一気にあおる。南アメリカ合衆国將軍にして世界安全保障機構に代表として参加するエドモンド・デュクロ将軍が酒豪であることは広く知られている。ブルー・コスマスの現代表ロード・ジブリールに食つてかかるなどその竹を割つたような氣質を好む者は軍内に少なくない。

彼らも、そのような支持者たちである。將軍の前には黒い制服を着た軍人たちが思い思いの場所に座り、手には杯を持つ。ただ誰もが困惑したような表情を浮かべ、將軍と彼らの部隊長の間を視線が行き来する。

部隊長、レナ・イメリアはエドモンド將軍の前に座り、そつと息を吹いた。ノーマル・スーツを着ている時は目立たない首筋の火傷の痕が首の動きに合わせて揺れると花びらが動いているようにも見える。戦闘中は隠れて見えないところに咲く花。それは漆黒のデュエルダガーに搭乗し奇襲を得意とするレナの特徴を端的に顕している。

「私たちはまだ勤務時間中なのですが」

その眼差しに酔いは感じられない。杯の酒はまだ減っていないなかつた。レナの言葉にエドモンドはやはり大仰に笑つ。

「案ずるな。俺もだ！」

今度ため息をつかされるのはレナばかりではなかつた。ファンタム・ペインの面々がそろつて息を吹く。

「そんなに心配するな。今月でメイン・イベントが上演真っ最中だ。そんな時にステージ脇でしみつたれた出し物する奴があるか。知つ

てるか？ 200年以上前の話だが、ビートルズとかいうバンドが街でコンサートをしていた時間帯、その都市の少年犯罪が激減したなんて話があるそうだ

バー・ボンをグラスに注ぎながらエドモンド将軍がまだ饒舌である。酔っているわけではないだろう。その証拠に、酒を注ぐ手に震えは見られない。それどころか、その眼差しは必要と思えるほど力強くレナを見つめる。

「それよりも、俺には不思議でならんね。そんな一大事に、ファン・トム・ペインはその大半が地球を離れていない」

これが本題か。そう、レナはようやく一息つくことができた。将军のことを警戒していた訳ではないが、拠点防衛を任務とする者はまず相手の出方をうかがう妙な癖を持つ。隊員たちの中にはそんな話題なら隊長に任せておけばいいとグラスを傾ける者さえ出る始末である。

将军の言葉は何一つ間違っていない。ファン・トム・ペインは各国に部隊を12、約72機から構成されている。その大半は本国から出ないまま、事態を静観し続けている。国外で活動しているのは大西洋連邦の白銀の魔弾ネオ・ロアノーク少佐の部隊くらいなものであろう。

そう、ファン・トム・ペインはアルザツヘル基地に参戦してはいないのだ。

「我々はエインセル・ハンター直属の部隊であつて、親衛隊ではありません。エインセル・ハンターのために戦い、そして死ぬとしても、エインセル・ハンターを守る義務はないのです」

バー・ボンを口に流し込みながら、まさか酒の苦みに負けたわけではないのだろうがエドモンド将軍は渋い顔を作る。レナはエドモンドと挟んで座るテーブルにグラスを置く。

「イスカリオテのユダ。この名前をご存じでしょうか？」

「キリスト教における最大の裏切り者だな。銀貨30枚で主を売り、磔にしたとか」

「はい。しかし、他の多くの弟子が儀典をしたためたようにユダもまたユダの福音書を書いていたことが200年ほど前に判明します。いまだもって偽典のそしりを免れぬと聞きますが、そこには意外な事実が描かれていました」

12使徒の1人であつたユダが主を裏切った事実はあまりに有名である。最後の晚餐の人数が13名であつたことから13は忌み嫌われ、主を処刑した宗教団体はその後2000年にわたる流浪を強いられた。

それが、歴史上の定説。

「主、イエス・キリストは磔となることで人々の原罪を清めた。イスカリオテのユダとはそのことを理解し、そのためのお膳立てをしただけ、そんな説が存在するのです」

「面白い話だな。裏切り、主を殺した者が、実は最大の理解者だったという話か。實に寓意的だ」

「エインセルさまが求めているのは、まさにイスカリオテのユダな

のかもしません」

砂漠の夜は深々と冷える。破壊されたΖＧΜＦ - 888ヒルドルブの巨大な躯の側にGAT - 131イクシード・ガンダムの赤い体が3機分、膝をついていた。円陣を組むように座り、その中央の砂地には火が焚かれている。

南アフリカ統一機構軍に所属するファントム・ペインの面々が火を囲んでいる。

「また砂漠の虎をしとめられなかつたな」

ナイフで干し肉をプロックから切り取りながら体を小さくしているのはカイト・マティガン。夜闇の寒さに手が震える。危うく指を切ろうとしてほかの2人に笑われていた。

隊長であるエドワード・ハレルソンは湯気を立てるコーヒーを飲みながら火に当たっている。

「あちらさんも同じ」と考へてゐるだろ?よ。まあ、慌てないことだな

斬り裂きエドの通り名で呼ばれるこの男は、そんな名に似つかわしくないほど屈託なく笑つ。

南アフリカ統一機構軍は大規模基地の所有数が少なく、またMS搭載能力を備える戦艦も数少ない。そのため、このように野戦状態で休息をとることは少くはない。ファンтом・ペインから離れた

場所では追加装甲が施されたGAT-01デュエルダガーたちがイクシードと同じように片膝をついて座っている。おのおのの焚き火が、鋼鉄の巨人を赤黒く照らし出していた。

エドワードたちが囲む焚き火が小さく音を立てた。放り込まれた薪が弾けた音だ。

「燃料代もバカにならんのだがね」

レオンズ・グレイブスはさらにもう一つ薪を火の中に放り込む。焚き火は弾ける音とともにすぐに薪をその火で取り囲む。レオンズの発言は何かと金に関する話題が多い。だが、守銭奴を意味している訳ではない。使うべき時には使う。それを心得ているからだ。

「まったく砂漠の夜はよく冷える」

レオンズに放り込まれた薪が火を大きくする。場合によつては氷点下まで下がる砂漠の夜を甘く見てなどいないのである。

今は夜。ふとエドワード隊長が空を見上げた。つられて、カイト、レオンズの部下2人も首をあげる。

月が綺麗に見えていた。

「40万km彼方の大決戦か。ここからじゃ、見えやしないな」

地球上のどこよりも遠い場所で行われている戦いは、たとえユグドラシルの光でさえ見ることは難しいだろう。

そんな場所に、ファンタム・ペインの主であるヒインセル・ハン

ターはいる、戦っている。

「隊長はエインセル・ハンターに会つたことがあるんだろう？」

「誰もが月を見上げたまま、カイトが何気ない一言を発する。エドワードは吐息を白く答えた。

「俺だけじゃない。他にも大西洋連邦の白銀の魔弾ネオ・ロアノーグ。東アジア共和国の白鯨ジェーン・ヒューストン。コーラシア連邦の灰色熊キサト・ヤマブキ。大洋州連合の赤い悪魔ロウ・ギュール。ファンタム・ペイン参加を認められたエースはみんな集められた」

月はいつも地球に同じ面を見せている。それは月の自転と公転の周期が一致し、月が地球を一周すると同時に360度回転しているからだ。そのため、月は地球に対してもいつも同じ面を向けている。

そんな同じ光景に飽きたのか、レオンズは焚き火の管理へと戻る。また一つ、薪が放り込まれた。

「金言は聞けたか？」

エドワードは考える。褐色の肌で表情がわかりにくいにも関わらずその顔の変わりようはおもしろいほどだ。

「そうだな、こんな話を知ってるか？ キリスト教は、作ったのはイエス・キリストだが、広めたのは弟子たちだ。イエス・キリストが十字架にかけられた後、残された弟子たちが伝えたことで今日の発展があるんだそうだ」

「要するに原型は偉人の死後に作られたということか。それで、そのHピソードにどんな価値がある?」

「まるで俺たちファントム・ペインのやつじゃないか? 俺たちはエインセル・ハンター直属の部隊に変わりないが、別にエインセル・ハンターのためだけに戦つてる訳じゃない。実際、こうしてここでコーヒーを飲んでるくらいだしな」

そうコーヒーをするするHドワードもはや戻を見ていなかつた。

鉄と毒の森に日差しが差し込み、スクラップの山の上、突き出したモビル・スーツの指に小鳥が止まつていた。

エインセル・ハンター。魔王を倒すために攻めてきたザフト軍を片角の魔女は撃退した。その命と引き替えに。

あの男を誰もが殺せと憎み、誰もが守れと崇める。それほどの価値があるの男にあるのだろうか。少なくともソル・リューネ・ランジエは決意を揺らがせていた。赤道同盟代表として世界安全保障機構で徹底抗戦を謳つた氣概を維持できとはいいないのだ。

小鳥が飛び去つた。あの日のような大雨さえ降らなければこのボーパールの地も太陽が顔を見せる。恐ろしげな魔女の森ではなくただのゴミ捨て場になる。

あの田のことが嘘のように、しかし、片角の魔女は、セレーネ・マクグリフはもうどこにもいないのだ。

「エインセル・ハンターか……」

乾いた地面。散らばる屑鉄を踏まないよう歩く。

年齢はソルとさほど変わらない。財団の御曹司ということでもソルとエインセル・ハンターはよく似ている。では何が、何故ここまで違ひが生まれるのか、ソルは以前訪ねたことがあった。

魔王と出合つ前に。片角の魔女に。

あの時、セレーネは軍服を身につけていた。ファンタム・ペインの証である黒い軍服を。

「エインセル・ハンター？ そうね……」

椅子の上でくつろいで、セレーネは本を読みながらくつろいでいた。本のタイトルは聞けず仕舞だ。ただ、きっと面白い本なのだろう。セレーネは話をしている最中も本から田を離そつとはしなかつたから。

「こんなお話、知ってる？ ある偉人は修行中、悪魔に誘惑されたそうよ。もしも神を崇めることをやめ、私を崇めるのならばここから見える土地すべてをやろう。本当に神がおまえを助けてくれるならここから飛び降りてみせる。神の奇跡を起こせるというならば石をパンに変えてみせ」

さてその時、ソルは自分がどんな顔をしていたか覚えていない想像するに、きっと間の抜けた顔だろう。セレーネが言っていることの意味は今でもよくわかつていなか。

「エインセルなら、きっとこんなことを答えるでしょうね。自分の目の届く範囲では満足できない。神は崇めるものであつて頼るものではない。石には石の価値がある」

やや大きめの瓦礫を踏み越える。田差しは強く、わずかに体を動かしただけでも汗がまとわりつく。

セレー・ネは、それでも妙に自信満々であった。ページをめくる音とともに次の言葉が続く。その声は楽しそうでさえあつた。

「欲張りな人なのよ。ただ自分の手元にあるものだけじゃ満足できなくて、世界のすべてに手を差し伸べたいくらい。それに、何でもかんでも神様任せにするようないい加減な人でももちろんないわ。そして、私たちファンタム・ペインが彼に従うのは、パンで手懐けられたからじゃない」

開けた場所に出た。瓦礫が積まれていない訳ではない。詰まれ方がどれも均等に低く、この場所だけ秩序ある散らかり方をしているのだ。そしてこの場所の地下にはされることのなかつた魔王の力が眠っている。

一つ思い出した。あの時、セレー・ネは一度だけ顔を上げてくれた。

「理解できない？」

そう、笑いながら。

「まあ、あの人のこと理解できるなんて人はそうはないでしょうね。でも、これだけは覚えておいて。この世の中には、自分のためでも、誰かのためでもなくして、世界のために死ぬことができる人が

いふつてことを

モチャ・ディック。頭に白い傷跡を持つこのマッコウクジラの名前をご存じだろうか。「白鯨」に登場したモビー・ディックのモデルとなつたこの鯨はチリ沖合のモチャ島にて初めてその姿を現した。幾艘もの舟を沈め、その海域を長きにわたつて支配した。

しかし、最後はスウェーデン船籍の捕鯨船によつてその伝説に幕を下ろした。

どれほど雄大であれ、より大きな力に飲み込まれ消えていく。それが白鯨の一つの真実。何故自分が白鯨と呼ばれるのか、そんなことを、ジョーン・ヒューストンは皮肉混じりに考えた。

スペングラー級M S搭載型強襲揚陸艦の高い上甲板の上から眺めた海は荒れている。太陽が輝き、雲一つない青空の中でさえこの荒れようである。

海という者はすべてがすべてジョーンを皮肉つてゐるらしい。ファンタム・ペインであるはずの自分が参戦を許されずこんなところでただ海を眺めている。だが、心は穏やかではない。晴れ渡つた空のように体は苦痛一つなく、しかし心は荒れる。

時折空母の上を吹き抜ける風が体を叩くくらいなものだ。だが、それも皮肉である。

「なあ、ジョーン隊長~」

見ない。振り向かない。そこに何があるか知っている。敢えて語るなら、椅子に寝そべって日光浴を楽しむ若造が一人いるだけだ。マーレ・ストロードはファンタム・ペインの隊員としての自覚があるので足りていない。

「軍服に袖を通している間は態度を改めなさい」

特に黒い軍服を身につけている時は。もつとも、本当に態度が改まるこことを期待しているわけではない。マーレは口を開けばいつも皮肉と嫌みが飛び出す。以前ラリー・ウイリアムズ首相がトリンントン基地に視察に訪れた時も同じであった。

「俺たち、完全に厄介者だな。ラリー・ウイリアムズ首相殿は完全に厭戦気分だし、世論もきれいにまつぶたつだ。カーペンタリア攻略は2度にわたって失敗。3次はオープも軍を出してくれるそうだが・・・・、本当に戦いたがってる奴なんかいるのか？ 結局、エインセル・ハンターに戦えって言われてるから戦わされてるだけじゃないのか？」

思いの外風が強く、声を意識して大きくする必要がある。

「では、プラントの主張している地球の民はブルー・コスモスに扇動されている馬鹿だという主張を受け入れると？」

返事はない。マーレはあまり語りたがらないが、彼もまたエイプリルフール・クライシスでは誰かを亡くしているはずなのだ。

プラントは本当に考へてているのだろうか。この戦争を始めたのはブルー・コスモスであって、ブルー・コスモスを悪者にさえしていれば解決するのだと。戦争はそんなに単純なものでもなければ、プ

ラントの正義など地球の民は誰も信じていない。

エイプリルホール・クライシスの存在が、この戦争に地球対プラント、ナチュラル対コーディネーターという構図を持ち込んだ。

フィンブル落着阻止を事実上妨害したことで大西洋西岸は甚大な被害に見舞われた。

そんな恨み辛みがブルー・コスマスを悪と言い続け抹殺することで解消されると本気で考えているのだろうか。では試してみるがいい。エインセル・ハンターを殺すことで、貴様等が何を得て、そして失うのか。

「エインセル様はそれほど恐れられているということ。かつて預言者が生まれた時、権威を奪われることを恐れた時の国王は2歳以下の子どもを皆殺しにさせたことがあつたそうよ。エインセル様にはそれほどの影響力がある。ただそれだけのことでしょう」

格納庫は意外なほど静かだ。そう、ミリアリア・ハウには思えていた。キッチン・スタッフの間で大西洋連邦軍の上層部が最終兵器を使つたとか、決戦が近いだとそんなお話で持ちきりだったから、格納庫、じゃ大わらわになつてゐるに違ひない、そう考えてた。

それなのに、それは違つた。こんなこと、以前にもあつた気がする。確か、ミュー・ディー・ホルクロフトが戦死した時。

格納庫を訪れたミリアリアが目にしたのは、ずいぶん閑散とした広間の一角でトランプ遊びをしているファンтом・ペインの面々だ

つた。真剣な様子。特にシャムス・コーザが一で手札に手を伸ばしているところを見ると、きっとババ抜き。別にポーカーならいいとは思わないけれど、ずいぶん砕けた様子だつてことくらいわかる。

今回はアーノルド・ノイマン副隊長さえ混ざつてゐるよつた有様だ。

「ねえ、ファンタム・ペインって、エインセルさんの親衛隊じゃないの？」

とりあえず聞いてみることにした。答えてくれたのはアーノルド副隊長だつた。シャムスの手札からカードを引きながら。

「直属の部隊という方が正確だよ。だから、僕たちは命令がなれば動けない。今回は参戦を認めない。それが命令だからね」

よそ見しながら引いたのがいけなかつたのだろうか。まずその顔をして、反対にシャムスが喜んでいる。

（ババ抜きでビニにババがあるのかわかつたら意味ないでしょ……）

「の人たちと関わると本当に余計なことばかり考えさせられてしまう。

「でも、大決戦なんですね？ それなのにエースが参加しないのつて、何だか……」

それこそ全世界からファンタム・ペインが大集結してエインセル・ハンターを守るために獅子奮迅の活躍でも見せるのかと考えていた。

今度アーノルド副隊長の手札を引くのはスウェン・カル・バヤン。まさか手番で話す人を決めているとは思わないけれど。

「ミリイ、君は一つ思い違いをしている。我々はエインセル・ハンターのために戦っている訳ではない。エインセル・ハンターに理念に賛同するからに他ならない」

相変わらずポーカー・フェイスのスウェン。でも、副隊長殿から受け取ったカードを凝視している。もうわかった。確かに表情には乏しいかもしれないが、この人、結構感情的だということが。

スウェンに対してか、それともスウェンの言葉に呆れてしまったのか、とりあえず区別しないままため息をついておく。

「それって、どう違うの？」

「エインセル・ハンターは、必ずしも必要とされていない」とよ

少女の声だった。静かに思えた格納庫も意外と雑音がうるさいらしい。お人形を抱えたネオ・ロアノークーまだこの名前になじめないーが近くにまで来ていたのに気づくことができなかつた。返事をしたのは、もちろんお人形、小型プロジェクターから立ち上がる立体映像の少女の方である。

「真紅ちゃん……」

「エインセル・ハンターは、たとえるなら神像のよつなもの。たとえそれが壊されたとしても、神は消えない。もちろん、信仰も。ただ像が壊れたという事実だけだわ」

やつぱり言つてゐることの意味がよくわからない。わかる人にだけわかることを話す。これが軍人や、それに関わる人の特徴なのだろうか。どうして一言、こうこうこうこう理由で月には行かないと言つてくれないのである。随分とまどろつこしい。

誰か説明してくれる人はいないだろうか。シャムスが真剣な顔をしていた。間違いない。まったく役に立たない」と言い出す時の顔だ。

「とにかくミリアリア、一つ聞きたい。とても大切なことだ」

とりあえず無視しておく。それでもシャムスは構わず続けている。

「どうして、スウェンにはミコイって愛称で呼ばせてるんだ?」

田の前にカードを持つたまま、サングラスの奥で不必要なほど、本当に不必要的眼光が鋭い。その視線はスウェンを見ている。

「案ずるるな、シャムス。俺とミリィには、何もなかつた」

そう言いながらスウェンはいつも通りの顔のままシャムスの手札からカードを抜く。その途端、シャムスを睨み返した。どうやらババを引かされたらしい。

（この人たち、さつきからババをシャッフルしてるだけなんじゃないでしょ？）

愛称にしても以前話をしてくれたことをきっかけに堅苦しいからとお願いしただけだ。

結局、この人たちは役に立ちそうにない。そうなると、後はお人形を抱いている友人だけということになる。

「ねえ、キラ、どうこいつこと？　どうしてファンタム・ペインは戦わないの？」

「詳しい理由は軍事機密にあるけど、ペトロ、だからかな」

キラ・・別にネオでもいいが・・は近くのコンテナに腰を下ろすと話を始めた。

「ペトロは、イエス・キリストの12使徒の1人だったけれど、イエス・キリストが捕らえられた朝、夜明けから鳥が朝を告げて鳴くまでの短い間に3度イエス・キリストのことを知らないと答えた。その理由は諸説あるけど、事実として縛を免れたペトロは古代ローマで石打で殺されるまで伝道を続けた。イエス・キリストの言葉を伝え続けた。ファンタム・ペインは、ちょうどそんなペトロなんだと思うよ」

「ああ、やっぱり同じだ。わかる人にしかわからないことすぐにな煙に巻こうとしてくる。

「ま、なんとか間に合いましたわ」

背を向けた大きな椅子の前に座つて、キング・タケダは大きな声を挙げた。すぐ隣には同僚であるマール・ストークスとそろつてお茶を振る舞われていた。普段、主であるミーア・キャンベルにしか

振る舞おうとしないサラ・タイルが珍しげに馳走してくれることもキングが上機嫌である理由の一つであるようだ。

「『苦勞様です、キングさん、マールさん』

声は背もたれの向こう側から聞こえてくる。

マールは主からの声に照れくさそうに頭をかいた。

「いえ、お嬢様にそつ言つていただけるのでしたらこれくらい」「お嬢様にはすでにお相手がいるのです。変な気は起こりませんよ」「なんや、そんなに嫌わんでも……」

マールとキング。2人の前にサラがティー・カップを強く置いた。危うくお茶がこぼれそうなる。途端に男2人の表情が凍り付く。

「嫌つてはいるのではありません。ただお嬢様を優先しているだけです」

「それでも……」

「文句があるのでしたら、ニア様スペシャルをご馳走しまじょうか?」

それ以上の苦情はなかった。サラがサングラスの奥に見せた底冷えのする眼差し以上に砂糖を大量投入し、紅茶の原型を破壊しつくした飲み物を味わいたくないと観念したからだ。マールに至って

は両手をえ挙げて、ただでさえ氣弱に見える印象を強調している。

「アーネアは椅子の背もたれに隠れ、姿を見せない。

「皆さんは、エインセルお兄さまのことなどをどう思っていますか？」

砂糖が大量に組み込まれた紅茶を背もたれの向こう側に運びながらサラが答えた。地球での、アズラエルモで過いした日々を思い出しながら。

「私がアズラエル家に仕えて10年になります。当時のエインセルさまはそれは女性に優しく、私たちの間ではちょっとしたアイドルでした。ちょっと近寄っただけでメリオルさまに首にされかけたり、ヒメノカリスお嬢様に追いかけ回されたりしたのですが、今となつてはいい思い出……、ということにしておきます」

続いて答えるのはマール。まず紅茶を口に含むと、あれほど砂糖を恐れていた割にストレート・ティーの渋みに表情を曇らせながら答える。かの当主の姿を思い浮かべながら。

「正直なところ、あの人を考えることなんて僕にはわかりません。ただ、あの人がしようとしていることなら正しいんじゃないかつて思ひこんで、いつもその通りでした」

最後にキング。「けりは特に何も考えてはいない。

「せやから、今回もできることなんぞないって」

背もたれの後ろから白い指。黒い格調高いドレスの袖口とあしらわれた白いフリルが覗かせる。ニアの指は、中空に何かの模様を

描くように不規則な動きを見せる。

「昔々、こんな意地悪な質問があつたそうです。お聞かせください。現在、我々は重税に苦しんでいます。そこまでして税は納めなければならぬものなのでしょうか？ 聞かれた人がはい、と答えれば民の失望を買つてしまします。いいえ、と答えれば王様が兵隊を差し向けてきます。どう答へてもその人は窮地に追い込まれてしまいます。実際、質問した人はそれを狙つていたそうです」

これは、今から2000年以上も昔のお話。そんな時代に、エインセル・ハンターと同じ生き方をした人がいた。

「ところが、その人はこう答えました。このお金は誰の物ですか？ この国のものです。ならば本来の持ち主の元へ返しなさいと。国に返してしまいなさいと言つたそうです」

「結局税金は払わなかんちゅうことやな」

キングの言葉に、ミーアの淑やかな笑い声が聞こえてくる。

「エインセルお兄さまはドミニナントです。そして、ドミニナントはプラントの未来を担うために生み出されました。だから、エインセルお兄さまはプラントに戻らなくてはなりません」

雑払つた大剣が扉を斬り裂く。モビル・スー^ツが通るためのまさに巨人の扉はその分厚い断面を見せつけながら月の重力に引かれて倒れた。6分の1の衝撃が床を揺らした。

別にどうということはない扉だ。とも、魔王の謁見の間に通じてるなんて思えないほどに。

ここには、エインセル・ハンターがいる。

すべてを色を拒絶した白の空間の中に唯一許された黄金。人の姿をして、人の10倍を超える大きさをして中央にたたずんでいる。これは魔王じゃない。単なる玉座にすぎない。黄金の玉座にすぎない。

魔王はそこにいた。ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムに胸部、開かれたコクピット・ハッチにスーツ姿で腰掛けている。

青い瞳はこちらを見ていた。金の髪はなめらかな光を放つ。その態度は威風堂々。近づくモビル・スーツの姿を生身のまま見つめ続けていた。

大剣を携え、翼持つ黒い天使の姿を眺め続けている。

ZZ-X1Z300SHガンダムメルクールランペは足を止める。フォイエリヒの前。もしもモビル・スーツが人の大きさなら話をするには遠すぎず、そして近すぎない距離で。すると大きさの違いがよくわかる。フィエリヒは大きく、メルクールランペは小さい。エインセル・ハンターの場所はメルクールランペよりも高い場所にある。

ずっと、この位置関係だった。見上げて追いかけて、届くはずなんてなかつた。見えるなんて思いもよらなかつた。

位置関係は変わらない。それでも、距離は驚くほどに縮まつてい

た。

「クピットから出よう。それが当然のようを感じられた。操作をすると、メルクールランペはあっさりとハッチを開いた。」クピットは胸部にあるため、ハッチは斜め上の位置で展開する。差し込む光が、導いてくれているように思えた。

メルクールランペの胸部から体を出す。ここには酸素で満たされた空間である。ヘルメットを脱いで見上げると、そこにはエインセル・ハンターがいた。確かにこちらを見るエインセル・ハンターの姿があつた。

もしもこの世界に天使や神様がいるとしたら、きっとこんな姿をしているのかもしれない。綺麗だとか格好いいだとじゃない。完璧。そうとしかいいようのない姿で、エインセル・ハンターはこちらを見下ろしていた。

黄金の玉座に座る魔王が、黒い天使に導かれた少年と向かい合つ。

「エインセルさん……」

シン・アスカ。

エインセル・ハンター。

母を奪われた少年と、母を奪った男との邂逅は、世界が焼かれるその前に成し遂げられた。

あなたは誰よりも強い人でした。魔王と呼ばれた憎悪も怨嗟も何らあなたを弱くはしなかったからです。あなたは誰よりも美しい人でした。あなたの生き方をどれほどの人が慕つたことでしょう。あなたは誰よりも賢い人でした。死してなお、あなたの思いは世界を守り続けるからです。

だから私はあなたに炎を贈りました。火のようにもれられ、火のように崇められたあなたのために。

その最期を飾る華として。

次回、GUNDAM SEED Destiny ~Blume
Einbrecher~

「わが脇たし惡の華」

エインセル・ハンター。一つの時代の終わりです。

第34話「わが謫たし悪の華」

王は少年を眺め、少年は王を見る。

ΖΖ-X300AAフォイエリヒガンダム。黄金の玉座に座る王は穏やかな笑みを浮かべていた。

ΖΖ-X1Ζ300SAガンダムメルクールランペ。黒い天使に足を支えられて立つ少年は緊張した面もちで王を見上げていた。

同じ母の手で造られたガンダムが両者の出会いに立ち会ひ。今、世界にいるすべての人が心を寄せる部屋の中で。

「エインセルさん、俺、わかつた気がします。あなたがヒメノカリスを戦わせる訳が」

シン・アスカの声は白い壁に吸い込まれ消えていく。外ではまだ激戦が繰り広げられている最中だというのに、ここは静かに少年の声を染み渡らせた。

「あなたも怖いんじゃないですか？ ヒメノカリスがあなたに愛される対価として身を捧げていて、あなたはヒメノカリスに戦つてもらうことで愛されているという確信を、彼女に与えたかったんじやないんですか？」

王は答えず、ただ微笑み続ける。決して否定することなく、その眼差しはようやく歩き始めた我が子を見守るようである。

「あなたも俺と同じだ。どうしてヒメノカリスに聞いてあげなかつ

たんです？ 戰わなくともいいって、それでも愛してあげられるつてどうして言つてあげなかつたんですか？」

責めるではない純粋な疑問。少年は王に問いかけていた。

王は少年に応えた。

「私には狭量で高慢な父がいました。名をアル・ダ・フラガ。彼は優れた能力を持ちながら卑屈であり、絶えず周囲の人々に猜疑の眼差しを向けたそうです。他人を信じず、愛せない。そのような男が家庭を育み、子を育てるなどできようはずもありません。男は、ことあるうちに自らのクローンを作りだし、それを息子として育てようとしたしました。ですが、いくら遺伝子を複製したところで、クローンも他人であることに変わりありません。やがて、男は息子としたクローンさえ疑い始めました」

「20年以上も昔の話。プロト・ドミニナントと、後に魔王と呼ばれることになる男の昔話。一つの始まりの物語。

「クローンは悩みました。父は、自分たちを子供もとして愛してくれてはいないのではないかと。そして尋ねました。何があつても、私たちはあなたの息子でいられるのでしょうか。父はどう答えたか、私は忘れてしまいました。ただ、それが彼の最期の言葉であつたと記憶しています」

アル・ダ・フラガはクローンによつて殺害され、アズラエル家の家督は3人の息子たちへと引き継がれることになる。青い薔薇が狂い咲く。その芽生えはこの瞬間に遡る。

1人はムウ・ラ・フラガ。アル・ダ・フラガの息子を皮肉り、ジ

エネシス発射阻止のために命を落とした。

1人はラウ・ル・クルーゼ。現在はブルーノ・アズラエルに名を戻しているこの男こそ、父が唾棄した失敗作であつた。

1人はエインセル・ハンター。自分自身を意味する妖精の名を持つこの男は魔王と呼ばれ、黒い天使と対峙する。

「私はヒメノカリスを失うことが恐ろしい。ただの一言、言つてあげることができませんでした。戦いなどしなくとも、対価など示さなくともあなたは私たちの娘なのですと」

魔王の名に似つかわしくないほど優しく少年へと微笑みかける。

かつて最強であることを望まれ、最強であることを約束されて生まれきた男は立ち上がり、その黄金の髪を指で梳いた。

「答えはでましたか、シン・アスカ？　あなたは復讐者ですか？　それとも違いますか？」

時は静かに、まるで止まっているかのように穏やかに流れれる。

「わかりません。でも、俺は、あなたを倒す」

昼寝をする巨大な竜の上にいるかのよう。柔らかい日差しに照らされるようにのんびりと、そしてこの安寧は竜の目覚めによつて地獄の招来を招くほどに儚く脆い。

「それは叶いません。私を倒すことができる者は復讐者であり復讐者ではなく、敵であつて敵ではない者、何より、愛を知る者でなけ

ればならないのですから」

竜が大きなあぐびをする。その目覚めが近い」とを示して。

エインセル・ハンターは動かない。ほんのわずかにその足がフォイエリヒを蹴り、体が浮き上がる。フォイエリヒは体を上へとずらし、開かれたままのコクピット・ハッチが宙に浮かぶエインセルを包み込むように収容する。

その黄金の輝きは、竜の眼の輝きにも等しい。もはや、平穏は不誠実な言葉によつてしか語られないと。

「それでも、あなたのしてこる」とは、しようとしてこるとは間違っています」

シンは体を翻しコクピット・ハッチをぐぐり抜ける。シートにつくとともにコクピット・ハッチが閉ざされ、短い暗闇の後、全天周囲モニターが外の光景を映し出す。

黄金のガンダムがすぐ目の前にいた。誰もが認める最強の力が、誰もが最強と認める男の手によつて扱われる。この事実は、シンにただただ疑問の言葉を続けさせた。

「どうしてこんな手段しか選べないんですか、あなたほどの人があ

「目的のためには手段を選ばない。それだけのことではありませんか?」

聞かれる言葉がわかつていた。それほど返事は早く、そして、返される疑問も同じ早さを持つ。

「あなたは憎くはないのですか？ 母を殺した私のことが。それとも、あなたに力を求めるでしかない母のことなどかまいませんか？」

「わかりません」

何から何までわからない。少年は、ただひたすら王の間を目指し、しかしその熱意は、その目的と意義を考え始めた途端脆くも崩れさせた。

だが魔王は目の前にいる。たとえ勇者が伝説の剣を抜き放つことなどなくともその真の姿を現そうとしていた。黄金の神像ではなく、恐ろしいまでの凶暴性を秘めた魔獣の姿を、魔王は今一度さりす。

手が脚へ。足が脚へ。不自然に四方に引き延ばされたその手足は覆い被さるように床へと向けられ、昆虫のそれを思わせる四脚の脚となる。バック・パックが自然と起き上がりその上端には人のものではない鋭い眼が輝きを放つ。バック・パックが抱えるユニットのアームはまだ延ばされていない。その姿は、まさしく獲物を前にした蠍螂の構えに等しい。

3年前ジエネシス内部でただ一度だけを見せたその姿は蠍螂であった。時に最も進化した生物群と称される昆虫界最大の捕食者、黄金の蠍螂であった。

アームが延ばされる。4機のユニットに装備されたビーム・サークルはそのあまりに高い出力からいびつに曲がり、巨大な光を鎌を形作る。蠍螂でさえ1対で満足する致命的な凶器でさえ、魔王の歓心を買うことはできない。

まさに魔王。まさに怪物である。最大の捕食者が持つ凶暴性、残虐性、残酷さ、そのすべてをただ純粹に研ぎすませばこのような姿になるのではないだろうか。

それはもはや生物ではない。蝶を捕まえるために鉄をも引きちぎる腕力は必要とされない。飛蝗を捕らえるために成層圏を飛び越える必要などない。ではあまりに過剰とも言える力を備えたものを何と呼ぶ。

捕食者ではお話にならない。王者では物足りない。支配者、暴君、霸者、皇帝。現実に存在する王の称号そのすべてが役不足。

だから人は知らないのだ。この男を、この存在を魔王と呼ぶ以外に術を知らない。実在も存在もしない、空想上の称号。これでなければ、こう呼ばなければ他に呼ぶ術を持たない。

この男は魔王。人の想定するすべての上を行く存在なのだから。

「この力、この姿とともに、私はすべてを斬り刻む」

月の表面に十字の輝きが走る。ビームの輝きだと誰もが気づいた時、それは爆発に姿を変えた。大気のない月面に音でもなく空気の振動でもなく純粋な衝撃が叩きつけられる。

アームストロング、「リングス、オルドリン。あなた方の記した足跡はこうも儂く吹き飛ばされる。

爆発とともに吹き出す光の中、メルクールランペの姿があつた。

飛び上がったのではない。それこそ舞い上げられたように姿勢を崩したまま、月の空へと打ち上げられる。翼を思わせるバック・パックを輝かせるとともにメルクールランペがその姿勢を取り戻した頃には、月面の吹き出し口ははるか下に見えていた。

月の静寂があつてこそなお轟くように錯覚させられる。切り開かれた月面ははいまだ光放ち、爛れた熱が月は這う。だから魔王なのだろうか、それとも、魔王がいる故か。

それは、地獄の門以外の何者でもない。

地獄から帰還する。その足は黄金にして4脚。月を踏み、月を焼き、その腕は黄金の剣。異形の魔王が地獄から這いだした。

まがまがしいほどに目映い輝きが揺らいだ。ほんのわずかフオイエリヒの姿が揺れたようでしかない。ところが、全身を包むミノフスキー・クラフトの推進力は瞬きほどの一瞬でフオイエリヒを漆黒の空へと押し上げる。

腕は4本にして、それぞれが莫大な出力を誇るビーム・サーベルを構える。脚もまた4本。それもまた、ビーム・サーベルを発していた。八重の殺意がメルクールランペへと襲いかかる。

それは剣術と呼べるものではなかつた。ただ輝きが、黄金が荒れ狂つているようでしかない。これまで8本もの剣を同時に操つた剣客は存在しない。殺意。それをこれほどの次元で振るつた者など存在していないのだ。

光そのものが殺意を持つように、輝きそのものがすべての破壊を望むように、光がメルクールランペへと押し寄せる。

メルクールランペは、光をただ1本の大剣でさばこうとあがく。

メルクールランペの振るう大剣が一つの光の鎌を防ぐと、すでに第2、第3の光が刀身には突き立てられていた。そして、フォイエリヒはまだ5つの爪を持つ。後ろへ飛び。その動きでメルクールランペが攻撃を避けたとしても、フォイエリヒは果てしない。光はすぐさま追いすがり、メルクールランペを呑み込もうとする。

フォイエリヒを相手にすることは、まさに光と敵対するに等しい。何より速く、何より目映く、何より膨大な熱をもつて世界を睥睨する。

苦し紛れ。そんな一撃をメルクールランペは大きく振りかぶる。フェイズシフト・アーマーさえも通り抜けてメルクールランペは、しかしふォイエリヒを捉えることさえできない。

ハウinz・オブ・ティンダロス。悪夢の獵犬を手懐けた黄金のガンドムは、斬撃も黒い天使さえも通り抜けてメルクールランペの後ろへと通り過ぎた。

この光景を説明する術はない。

接近する2機のモビル・スーツがいた。1機は剣を振りおろし、2機は確かに衝突したはずであった。それが結論であり、2機は互いに傷一つなく通り抜けたことが結果。これを、人は説明できない。

メルクールランペが勢い、振り向きながら剣を薙ぎ払う。絶妙な間合いと呼吸。誰もがフォイエリヒが胸を斬り裂かれる姿を確信する。そしてそれは裏切られる。剣は確かにフォイエリヒを切断した

はずであった。しかし斬れてはいない。

別方向からビームが次々降り注ぐ。防衛線を突破したザフトのΖGMF-56Sインパルスガンダムが数機、遅らばせながらフォイエリヒへと襲いかかつた。ビームの狙いは正確である。よつて、フォイエリヒを破壊できない。結果が予測を愚弄し、人は目の前の現実を受け入れていく。ビームは当然のようにフォイエリヒを通り抜け、月面にいくつもの火柱を打ち立てた。

フォイエリヒは撃墜できない。その厳然たる事実は、人を蝕んでいく。

メルクールランペが斬りかかる。全身のミノフスキー・クラフトを輝かせ、その一撃は極限と言えるほどの速度を見せる。よつて、フォイエリヒは撃墜できない。メルクールランペは何事もなく通り抜け、フォイエリヒは何事もなくそこにいる。

インパルスがビームを乱射しながら接近する。もはや予想するまでもない。ビームはフォイエリヒを通り抜け、月に火の花を咲かせ続ける。

非現実的。あり得ない。夢幻。それが目の前の現実に現れた以上、人はそれを受け入れ、予測を変えざるを得ない。だが、果たして人に魔王を知ることなどできるのだろうか。予測。それさえ、魔王を見せた甘い幻でしかないのだ。

それは、インパルスが次々サーベルを抜き放ち、フォイエリヒめがけて加速した時に起こった。剣はかわされ、インパルスは次々に斬り裂かれる。これが予想。

だが、現実は違つてゐる。

フォイエリヒはインパルスに目もくれず、再びメルクールランペへと輝きを浴びせかけた。幾重にも重ねられた斬撃はすでに光をそのものとしてメルクールランペへと殺到する。

その時のことだ。しつこくフォイエリヒを追つていたインパルスが突然胴を裂かれた。別のインパルスは縦に割られた。攻撃をされた。そのことには何ら誤謬はあり得ない。事実、インパルスは撃墜されている。

だが、果たしてそれを攻撃と呼んでよいのだろうか。フォイエリヒはただメルクールランペに攻撃を続いているだけである。払った手が偶然虫に当たつた。そんな攻撃の形態さえ持たぬ致命の力がインパルスを払つた。ただそれだけのこと。

メルクールランペは後ろへ、後ろへと逃げながら迫りくる光の刃を受け止め、受け流し、さばきながら月面を擦るように後退を続ける。わずかに光がかすめた。それだけで月面は爆ぜ、フォイエリヒが突き進む道そのものが業火の絨毯を敷き詰める。

この魔王に率いられた地獄の行進のただ先で、メルクールランペはそのすべてを委ねる剣によつてすべての猛攻を防ぎきつていった。

それが、少年の心に疑惑の種を植え付ける。

(どうして……、俺、生きてるんだろう……？)

エインセル・ハンターの力が、魔王の暴威がこの程度のはずがない。シンに防ぎきることができることが信じられなかつた。

一瞬たりとも気なんて抜けないはずだつた。それが、こんな余計なこと考へてもフォイエリヒの刃はメルクールランペを、シンを貫かない。

メルクールランペが振るつていた大剣が大きく跳ね上げられた。モビル・スーツの全長ほどもある剣が軽いはずがない。剣に引っ張られる形でメルクールランペが大きく仰け反りながら後退する。

必死に体勢を立て直そうとしても、間に合つはずなんてない。崩れた構えのまま、フォイエリヒが、確実な死が膨大な光の姿を借りて追いついた。

全身を串刺しにされたような錯覚が心を焼いた。全身を貫くはずだった刃は止まつた。幾本ものビーム・サーベルが急所を目前にして止まつっていた。

寸止め。

エインセル・ハンターには初めからシンを殺すつもりなんてなかつた。

(一体、俺何回殺されてたんだ……?)

もしもエインセル・ハンターが本氣であつたとしたなら。

喉元に剣を突きつけられているにも等しい。そんな距離では、モーター一杯にフォイエリヒの姿が見えていた。とても大きい。ただ

でさえ1・5倍もの大きさの違いがある。それが、今は何倍にも大きく見えていた。

「勝てる訳なんて……」

それでも腕はまだ戦うつもりなのか、操縦桿を握ったまま離そうとしない。だからと言つて戦えるはずなんてない。腕にはまるで力が入つていない。心も体も、戦うことを見棄していた。

フォイエリヒが離れてもメルクールランペを動かすこともできない。そんなシンの姿に呆れ果てたのか、フォイエリヒはそのまま飛び去ってしまった。

もはや抜け殻のように、動くことさえやめてしまったシンを残して。

フォイエリヒガンダムのことはもう田でさえ追つてない。どこかに行つてしまつて、それでもシンはまだメルクールランペを動かしさえできない。

あれからどれくらいこうしていただろう。いつの間にか、操縦桿から手は離れていた。メルクールランペは月の上に立つ彫像みたいに動かない。何も見てしまわないようにしていふと、やっぱり月の上は静かだった。

(俺は、何がしたかったんだろ……?)

何となく母さんの仇がとりたい。それは確かヒメノカリスに動機になていないと否定された記憶がある。

(じゃあ、何なんだ……？)

どうしてこんな場所まで、月にまでエインセル・ハンターを追つてきたのだろう。敵にもらった力を使ってまで。

どうしてここにまで来てしまったのだろう。ほんの4年前まで、ただの子どもだったはずなのに。

あの日、すべてが変わってしまった。母が死に、その時からすべてが変わってしまった。

「母さん……」

この言葉が何かを引き起し、すきっかけになるとは思わない。本当に突然のことだった。

「クピットに光が満ちた。コンソールというコンソールが輝きを放ち、光は色とりどりに変わっていく。光が踊って歌っているみたいにめまぐるしく光が変化を繰り返す。それが終わったのはすぐのことだった。突然光が止んで、代わりにシンの目の前にこれまでとは異質な光が集まり始めた。

似たような光をこれまでにも見たことがある。翠星石を形作る光も、これと同じ色をしていた。

ゲルテンリッターが姿を現そうとしている。シンの予想を証明する形で、光は少女の姿を成す。

黒いドレスがまず目に入る。メルクールランペと似た花びらを思わせるロングスカートに、所々黒薔薇を模したアクセサリーが、全

体を黒い薔薇を思わせる印象に整えている。透き通りそうなほど白い肌にはゲルテンリッターに共通している。流れるような髪も白く、ゆっくりと開かれた目は、やはり赤い色をしていた。

ゲルテンリッターは誰を見ても本当に人形のようだ。整った顔立ちをしていて、簡単に抱えてしまえるくらい小さくて。

そんな顔が急に歪んだ。口の端を釣り上げ、瞳は見開かれる。次の瞬間、シンの皿に映ったのは靴底だった。

「うわあー！」

思わず両手で顔を覆つたものの、よくよく考えてみると単なる立体映像にすぎないこの黒薔薇の少女にシンを蹴ることはできない。それでも、シンが顔から手をどかした後も少女はシンを踏みつけようとした足の底を何度もシンへと叩きつけていた。

「クズ、グズ、なんてみつともない！」

そもそも大きさもまるで違う。いくら蹴られても堪えるはずがないこと、防ぐことよりもシンはシートに座り直すことを優先した。

「こきなり何なんだよ……！？」

シンのことを罵倒しながら足蹴にし続けていた少女は、くるりと体を翻すと適度な距離をとった。ゲルテンリッターはコクピット内であれば自由に動き回れるらしい。

間違いなくメルクールランペに宿る少女はシンのことを見ながら笑っている。妖艶とも、どこか残酷さとか邪悪さを含む笑みは、

その瞳の色と相まって氣味の悪いほど綺麗に見えた。

「私は水銀燈。お母様に光を与えた第1ゲルテンリッター。誇り高きメルクールランペの心よお」

「いかシンのことをからかつてゐるよつ・・いきなり足蹴にしてくるくらいだ・・に水銀燈は笑つてゐる。

「お母様は言われたわ。エインセルが選んだ人間をマスターになさいと。それがこれゝ？ 悪い冗談ねえ」

翠星石とは別の意味で扱はずらそうだ。でもきっと、同じくらいシンツが必要としている情報を持つてゐるはずだ。

「水銀燈は知つてゐのか？ エインセルさんがどうして俺なんかをゲルテンリッターに乗せたのか？」

「さあ？ 興味ないわ。私たちは兵器よお。主が命じた敵を倒し、物を壊すそれだけの存在なんだから」

シンの必死さがおかしいのか、それともこれが性格なのか、水銀燈は楽しげにさえ見える笑い方をする。シンは笑う気にさえなれない。戦う理由が未だに見つけられず、戦うことさえ放棄してしまつてゐる。自分のすべきことがわかつてゐる水銀燈のことがうらやましくさえ思えた。

結局、シートの上で体を小さくして震えていたしかできない。

「俺にはわからない。何をすべきなのか、何がしたいのかも……」

水銀燈が笑う。今度はすいぶん明るい笑顔で、その顔を見た途端、シンは全身が外へと吸い出される力に襲われた。いきなりハツチが開いたのだ。加圧されているコクピット内の大気が真空へと吸い出されるまでのわずかな間、シンは宇宙に放り出される恐怖を感じて過ごさなければならなかつた。ベルトがなければ今頃月の上を転がつていたかもしない。

パイロットを危うく放り出しそうになつたのに、水銀燈は笑つている。抗議するほどの気力は持てない。

「水銀燈からとつと降りなさい。あなたののような臆病者、私はふさわしくないわあ」

「冗談だとか、厳しい激励とかじやなくて本気なのだらう。ハツチは開かれたまま。水銀燈の肩越しに戦闘の光がはつきりと見えていた。

シン・アスカは、メルクールランペのパイロットとは認められなかつた。それだけのことと、当たり前のこと。それでもシンを奮い立たせたのは、これまでにもシンをつき動かした謎の衝動であつた。

とつぐに吸い出しは終わつてゐる - - 大気がなくとも水銀燈の声が聞こえているのはヘルメットの通信機に直接語りかけているかららしい - - のに、シートから手を離すことができない。そんな臆病な態度のまま、それでもシンは声を張り上げた。

「ち、ちょっと待つてくれ!」

「どうして? あなた、もう戦つつもりはないんでしょ。それなら、水銀燈に乗つてる必要なんてないじゃない。兵器なんて必要ないじ

やない」

「でも……」

声はすぐに萎んでしまった。自分でビーフしてしがみついてるのかわからない。答えなんてなかつた。

「あなた、一体どうしてここにいるの？ エインセル・ハンターと戦うため？ それなら戦いなさい。こんなところで震えてないで！」

（戦えないからここにいるんだ……）

エインセル・ハンターに勝てるはずなんてない。何をしたいのかもわからない。それでも、何かしなきやいけないことがあるようになるとばかりが焦つて仕方がない。そして焦れば焦るだけ、何もできなさい。

水銀燈に見下ろされたまま、シンは自分の足を抱いた。いつの間にか、ハツチは閉じられていた。しばらくこうしていた気がする。呆れてものも言えないのか、水銀燈は話かけてこない。

仕方ないからシンは話始めた。

「俺、母さんがいたんだ。でも4年前に死んだんだ……。エインセル・ハンターは、母さんの仇なんだ……」

C.E.71年8月に行われた大西洋連邦をはじめとする連合軍によるオープ侵攻作戦は主戦場となつたオノゴロ島で民間人に多数の被害者を出した。シンの母、マユ・アスカもその一人だ。港へと

逃げている途中、流れ弾だったのか、それとも爆発したモビル・スーツだったのか。炎が避難民を包み込んだ。焼け焦げた臭いが充満する中で、シンだけが助かつた。頬に、炎の傷跡を残しながら。

その作戦の総指揮は、エインセル・ハンターが執つた。

「母親の仇を討ちたいの？」

「いや、どうなんだ。俺、母さんのこと好きだったのかな？ いつも怖かったんだ。母さん、俺のこと、別に愛してるとかじゃなくて、単に優れた子どもがいるって言うステータスが欲しかつただけなんじやないかって」

母はよく他の母親にシンのことを自慢していた。運動もスポーツもできて親の言つことによく聞く聞き分けのいい子だつて。それは誇りしげに。血縁の息子だと。

別にシンでなくともよかつたんじやないだろうか。ただ、自慢できる子どもでさえあれば。血縁できる子どもしかいらなかつたんじゃないだろうか。

シンはより深く自身の足を抱ぐ。

「別に仇なんて討つ義理なんてないんじやないかって……。ビリせ無理だしちゃ……」

エインセル・ハンターに、勝てるはずなんてなかつた。

「トーリー！」

強い声が聞こえた。まだ付き合いの浅い水銀燈がこんな声を出すなんて思えなくてつい顔を上げて見ると、水銀燈は瞳を鋭くシンを睨みつけていた。

「性根まで臆病なのねえ、お前は！ 怖いんでしょ。愛しても愛されないことが。お母様を愛してる。でも、愛されてなかつたらみつともない。そう認めてしまつことができないだけでしょー！」

水銀燈は何をこんなに怒っているのだろう。瞳を大きく見開き、その顔は明らかにシンへの怒りを湛えていた。

「私たちは兵器よ。でも、そのことでお母様を恨んだことなんてないわ！ お母様が、私たちのために泣いてくれたからよ。それ以上は何も望まないわ！」

きっと水銀燈は母親のこと、設計開発してくれた人のことが好きなんだろ？ ゼフィランサス・ズールと言つ希代の天才のことが。その人がしてくれたことが。

でも、シンは違つ。水銀燈とは違つ。

「でも母さんは俺には……」

「あなたに何をしてくれたの？」

水銀燈から目をそらしのは後ろめたさとかじやなくて、ただ、昔のことを思い出してみたかった。

「母さん……、仕事人間でいつも家を空けてたけど、俺の誕生日の時は無理してまで帰つて来てくれたっけ。普段外食ばかりで料理な

んてしないくせにケーキ焼いてくれようとして、スポンジを焦がしてた……」

あの時の母さんはばつの悪そうな顔に、つい笑ってしまった。

「俺がテストでいい成績をとつたら褒めてくれた。そのことは、嬉しかった……」

母さんは本当に優しくしてくれていた。シンはその優しさを失うことが怖かった。

「オーブが攻められた時はさ、家の中でじつとしてた。そんな時、母さんが血相を変えて帰ってきて、俺の手をとるなり逃げ出したんだ。あの時は本当に怖かった」

詳しいことは今でもわからない。ただ、モルゲンレー^テ本社に爆弾が仕掛けられてるとか、上層部がオノゴロ島を放棄することを決めたとか、大人たちが日々に言っていた。

「他にも逃げる人が何人もいて、俺も母さんと一緒にその人たちの間を走ってた。そんな時、流れ弾か何かが落ちてきて俺たちを焼いたんだ」

駄目だ。あの時のこと思い出すとどうしても涙が出てくる。

それは怖かったから。人なんて簡単に死んでしまう。高熱に焼かれるとタンパク質は変質して、色を変える。人の体とは思えない人や部分があたり中に散乱していて、肉の焼ける臭いが充満していた。

（3年は、肉が食べられなかつたな……）

涙を拭うためにはヘルメットが邪魔だった。胸の前で抱えるようにして脱いで、ノーマル・スーツの袖を顔に擦りつける。

「みんなみんな、焼け死んだ……。母さんも……」

母さんも焼けた。黒こげで、もう人としての部分なんてシルエットくらいしか残ってなかつた。

涙を拭う手が、頬に痛みを覚えた。左頬のあたりだ。そこには、4年前につけられた痣がある。あの時、シンはこの傷を受けた。それでも、生還した。おびただしい死が敷き詰められたその中から。

母さんは全身を焼かれたのに。

あなたはお母様に愛されていると思いこみたいだけ、そう、ヒメノカリスは言っていた。

お母様はあなたに何をしてくれたの、そう、水銀燈は聞いてきた。

「母さん……」

荒れ狂う炎の中、どうしてシンだけが助かったのだろう。すぐ隣にいた母さんは死んだのに。まるで、シンに向かうべきだった炎と熱まで引き受けたみたいに。

痣に伝った涙が、傷にしみた。

「俺は……、俺は馬鹿だ……」

考えればわかるはずのことだった。それから目をそらし続けた。母への疑いは黒い霧となつてシンの心を覆つっていた。愛されていないかもしないという恐怖が単純な真実を見ることを拒み続けてきた。

母は、マコ・アスカは庇つてくれたのだ。シンのことを。燃え盛る業火から、息子であるシンのことを。

「母さんは、命がけで俺のこと愛してくれたのに……。身を挺して俺のこと助けてくれたのに……」

疑いのまなざしを向けてしまつた。そんなもの、何の意味もない。たとえ母の愛が優れた息子への愛着でしかなかつたとしても、シンは報いなければならない。その命をかけて愛を示してくれた。

今ならわかる。水銀燈が怒つた理由と、言つていたことの意味が。

シンは何をした。母の愛を疑い、その献身を否定し、ただ自分を慰めてばかりいただけだ。

「俺は……、俺は……」

本当に馬鹿だった。涙で荒れた呼吸を無理に戻す。そのために大きく息を吐いて、涙は無理矢理拭つてやつた。もう大丈夫だ。今、泣いてちゃいけない。

胸の前で抱えていたヘルメットを掴む手に力が戻る。

「水銀燈、俺は、もう一度エインセルさんに会わなきゃいけない」

「復讐のためえ？」

水銀燈の胸を指す言葉ももう大丈夫。

ヘルメットをかぶりなおした。指を動かしてみてグローブと指に変な隙間が生じてないか確認する。少し顔を上げただけで、月の空はまだまだ華々しく戦火が飛び交っていた。まだ戦いは続いている。

「多分、違う。俺も、きっと心のどこかで母さんが助けてくれたこと、わかつてたんだと思う。だから、死にそうな時、それでも必死に生きていたって思つてた。母さんが助けてくれた命だから」

操縦桿を握る。それもできた。ついさっきまで、震えた手で握るしかなかつたのに、今はしっかりと掴むことができた。エインセル・ハンターを倒す必要なんてないのだから。

「仇をとることだって、結局、ヒメノカリスが言つてた通りだ。ただ、自分は母さんに愛される資格があるからつて思いこませるためだつたんだ。俺はもう、母さんの愛を疑わない。母さんを愛してるつてはつきりと言える。俺は、母さんの仇をとる義務も必要もないんだ」

「それでもエインセルに会いたいの？」

「ああ。俺は、やっぱりエインセルさんをとめなきやいけない。ザラ大佐の時もそうだった。民間人を、戦えない人が犠牲になることが許せなかつた。それが許せなくて、エインセルさんにその気持ちをぶつけた。そしたら、君を与えられた」

シンにすべきことは、エインセル・ハンターを止めること、ただ

それだけ。それならば、エインセル・ハンターを超える力なんて必要ない。

「俺は母さんをエインセルさんに奪われた。でも、俺はそれとは別にエインセルさんをとめたい。止めなきやならないんだ。水銀燈、俺に力を貸して欲しい。エインエル・ハンターを止めるために」

シンの真摯な訴えを前にして、水銀燈はコンソールに腰掛けたまま笑っていた。赤い唇から漏れるような笑い声が徐々に大きくなつて、仕舞には耐えきれなくなつたように水銀燈は大きな声で高笑いをし始めた。おかしいというより愉快そうに、滑稽と言うより満足げに。

「お母様が言つていた通りね。この水銀燈のマスターになる人間で

水銀燈がコンソールから飛び立つと、ゆっくりとシンの前にまで移動した。その鋭い眼差しには、今は厳しさが宿っている。

「名乗りなさいシン・アスカ！ 水銀燈を従える者の名を！ 宣言なさい、輝く光の翼の主と！」

「俺はシン・アスカ。俺は、輝く光の翼の主！」

「翠星石、あの光は……？」

アスラン・ザラが目撃した光景は、ビームの発射口。その上を円を描きながら飛行する天使の姿であった。背中に光輝く翼を背負い、ゆっくりと円を描きながら飛んでいる。

「お母様が水銀燈に与えた力……。輝く光の翼……」

優雅とも言える輝きが、しかし意味するものは俊足。巨大な発射口よりもさらに大きな旋回半径をわずかな時間で回っている。遠くからでは緩慢にさえ見える動きは、その実、この戦場の誰よりも速い。

天使が、光の翼を広げて飛んでいた。

「この、力は……？」

「ミノフスキー・ドライブ・システム。エフィールドを翼状に展開することで莫大な推進力を生み出す水銀燈にのみ与えられた力よ。ゲルテンリッターにそれぞれ一つずつ与えられた、お母様の力」

そう、ガンダムメルクールランペの背中には大きくて、それでもとても澄んだ輝きを持つ翼が現れていた。翼のように思えていたバツク・パックは言つてしまふなら鞘でしかなかつた。メルクールランペの本来の姿は、光の翼を持つ天使の姿。

ミノフスキー・クラフトは表面積に比例して推進力を増す。翼ほど大きな表面積を持つミノフスキー・クラフトは、モビル・スーツに搭載するには破格の推進力を誇っていた。

光景が違つていた。大きなものが小さく見えた。速いものが遅く見えた。

コグドラシルの発射口が眼下に見えて、そんな巨大な穴さえメルクールランペはたやすくぐるりと回ってしまうことができる。

戦っているすべてのモビル・スーツの動きが遅くさえ見えた。きっと、どの機体もメルクールランペに追いつくことなんてできない。

装甲ほどの重さもなく維持されるノーフスキー・クラフトの膜は余剰エネルギーをビームとして輝かせながら、膨大な推進力を生み出している。それは通常のスラスターのように推進剤の燃焼速度によるラグが機体を揺らすこともなく、とても優しくシンの体を加速させていた。

その体を、目的とする場所にまで運ぼうとしていた。

それは月の上。インパルスガンダム、セイバー・ガンダム、ヅダニゼーゴックの残骸が散らばっている。離れた地点では撃沈されたナスカ級が月面に突き刺さっている。ザフトの墓場とも言えるその場所に、黄金の墓標がたたずんでいた。

ZZ-X300AAフォイエリヒ・ガンダムが傷一つない姿のままで、メルクールランペの着地を待っていた。光の翼を広げたまま、メルクールランペが月の砂を踏みつけた衝撃を体で感じた。

ガンダム同士が向かい合つ。この人と、エインセル・ハンターと会う時はいつもこうだった。周りに死が散りばめられ、死の臭いが充満している。

モニターは戦闘中であるにも関わらず、映像を出力さえして2機のガンダムの通信を繋いだ。

「水銀燈、あなたはシン・アスカをマスターに選ぶのですか?」

白いスーツ姿にヘルメットなんてつけていない。まるでモビル・スーツのコクピットの中にはいるとは思えない出で立ちで、Hインセル・ハンターがシートに優雅に腰掛けていた。

「お母様が選んだのよ。」この男を、あなたの願いを叶える存在として

「よい顔をしています。とてもよい顔になりましたね、シン・アスカ」

涙で汚れた顔がそんなにいいものだとは思わない。それでも、Hインセル・ハンターの存在感はシンに誇りを与えてくれる。これほど男が認めてくれたのだと。

シンは、ようやく、Hインセル・ハンターの前に立つことができた。

「Hインセルさん、こんなことはもうやめてください。あなただけきつとこんなこと望んでないはずだ。レイ隊長が言つてました。ユグドラシルが始めにアプリリウス市を狙わなかつたのは実験が不完全で精度が十分でないからだつて。でも、それなら要塞は4回狙つて、確實に間に合わせることのできた5回目で狙えばすむだけの話です。それでも、あなたは要塞を破壊しただけでアプリリウス市を、死ななくてもいい人たちを狙うことはなかつた」

本当にアプリリウス市を破壊したいなら逃げ回つていればいい。何も襲いかかる敵を相手にする必要なんてないのだから。

「あなたは、アブリリウス市を狙つつもりなんて元からなかつたんだ」

エインセル・ハンターはビームでも優雅に、その微笑みは優しげでさえある。

「やはり、あなたと私はよく似ています。母を殺したあなたが私であります」

「父を殺さなかつたあなたが俺なんだ」

当然のように、シンがエインセルの言葉を引き継いだ。言葉などなくとも、互いが理解できる。シンが手指す先にエインセルはいる。なのだとしたら、2人は同じ方向を見て歩いているということなんだから。

「シン・アスカ、復讐者にして復讐者ではない者に。敵であり敵ではない者に。何より愛を知る者に、私は倒されたいのです」

「それが、あなたの償いだからですか」

「復讐者では駄目なのです。それは新たな憎悪を上書きするでしかありません。せめて私の死は一つの憎悪を道連れとしなければなりません。私は、復讐者に倒されではありません。ですが、復讐者に倒されなければならないのです」

「敵でなければならぬのは何故ですか？」

「それはいずれわかることでしょう。ザフト軍曹長であるあなたが私を越えたその後に。そして、あなたほど私を理解していただけた

者は、友を除いて他にない。そして、愛を知る者に、私は希望の燈を託したい」

「俺は復讐者です。あなたに母を奪われたからです。でも、俺は復讐のために剣を持っているわけじゃありません。俺はザフトに所属するあなたの敵です。でも、俺は人としてあなたを止めたい。そして、俺は、母さんを愛しています」

シンは、たつた今この瞬間に、エインセルが望むすべての条件を満たしていた。

「もうやめてください、こんなことは。あなたがやめてくれれば、俺はあなたと戦う理由さえないんだ」

「私の死は贖罪であり、罷であり、そして必要なのです。世界が、その大いなる過ちに気づくために」

気迫というものが存在することを初めて知った。威嚇されているのではない涸渴されているのでもない。ただエインセル・ハンターは微笑んだまま、シンに体中の筋肉が緊張していくほどの中圧を浴びせかけてくる。

「シン・アスカ」

ただ語りかけられただけで、体中の血液が沸騰したように体が熱い。体を動かすとすると筋肉が悲鳴代わりに苦痛を与えてきた。

「あなたは私とよく似ています。ですが、あなたは私にはなりません。なつてはなりません。父を殺し、血で血を購う術しかなかつた魔王になぞなつてはなりません」

モニターが消えた。水銀燈も笑うことをやめ、その赤い瞳を真剣に田の前のフォイエリヒに送っている。

黄金の魔王が動き始めた。ビーム・サーベルが苛烈な輝きを放ち、装甲がさらなる輝きを放つ。何から何までもが輝きを放つ。

「私が踏み外した道を、あなたは歩いてゆきなさい。人を愛する心と共に」

エインセル・ハンターが、魔王が光を操る姿を、シンは動かず眺めていた。その太刀筋の一つ一つを、輝きの一つ一つを、フォイエリヒガンダムがわずか数瞬の間にメルクールランペを通り抜けるまでの間眺め続けた。

フォイエリヒは後ろへと抜けて行つた。メルクールランペは傷一つない。エインセル・ハンターは見せたのだ。フォイエリヒの持つ唯一絶対の欠陥を、エインセル・ハンターが敢えて残した（かし）を。

「シン。今のあなたなら見えたはず。刻の傷が」

シンには確かに見えた。たった一つだけ、フォイエリヒを撃墜する手段があることが。そして、エインセル・ハンターは撃墜されることを望んでいるのだと。ただ一つ、フォイエリヒを撃墜できる方法をシンに託すことで。

それならすべきことは決まつていてる。

「水銀燈、力を貸してくれ！ 僕は、この人を倒さなきゃならない

！ 倒してあげなきやならないんだ！ 僕が背負わなくちゃいけないんだ、エインセル・ハンターの業を！」

背中合わせに立つ2機のガンダム。まず、漆黒のガンダムが飛び上がった。高く、高く翼をさらに輝かせ飛んでいく。その光は軌跡となつてやがて月の空に輪を描く。大きく輝く天使の輪を描く。

天使の輪の中でメルクールランペは加速を続けていた。モビル・スーツの限界を超えて、ミノフスキー・ドライブに身をゆだねたままその姿は光の中へと溶けていく。

その時だ。フォイエリヒガンダムが天使の輪の中心を通り抜け、上昇したのは。輪をすぎて、さらに高く。

すべての準備が整おうとしていた。十分な加速。突撃できるだけの距離と位置。そして、シン・アスカの覚悟。

「いきなさい。シン・アスカ！」

ゲルテンリッターの声。光の輪が唐突に乱れた。一筋の光が輪から抜け落ちて月面を目指した。その輝きは突如方向を変えると、フォイエリヒが通り抜けた道筋を追うように光の輪をくぐり抜ける。

光と光。

フォイエリヒは8の刃を振りかざし、前後左右すべてを切り刻む斬撃を重ね、束ね、光の瀑布として迎え撃つ。

メルクールランペはただ飛んだ。早く、まぶしく、光の矢となつたメルクールランペが向かい撃つ。

それは呆氣ないほど一瞬の出来事であった。滂沱な光の洪水を、たつた一本の矢が貫いた。

人が認識できないほどの一瞬のことだつた。しかし、シンは確かにエインセルの声を聞いた。

「ヒメノカリスのことを頼みます」

現存するすべての物質を斬り裂くことを許された大剣を構えたメルクールランペ。その遙か後ろには、胴を両断されたフォイエリヒがわずかな時間その姿をさらした後、爆発し果てる姿があつた。

乳白色の闇の中、見えるものは何もない。ここがどこなのかわからぬ。つい今し方までしていたことさえ曖昧なまま、しかし彼の心は落ち着いていた。穏やかなほどに。

ここは、自分の姿さえ曖昧になつてしまつ。それでさえ、彼は気づいた白い闇が揺らめく向こう側、友が迎えに来たのだと。

「もつとゆつくりしてもよかつたんだぞ」

誰よりも軽口を好み、誰よりも人のために生きた友はきっと腕組みして笑っていることだろう。

「私は十分に生きました。何より、私はあまりに多くの命を奪つてしましました。もはや、世界に魔王は不要なのです」

友が肩をすくませる。どこか呆れたような吐息が漏れ聞こえてこよつと、しかし友は声の調子を朗らかで、剛毅とも言える態度を崩そつとはしない。闇の中で振り返りながら友は手で合図する。

「道案内は任せとけ。何なら、メリオルが来るまでの間、綺麗どころ紹介してやるうか」

「遠慮します。私が妻と呼ぶのは、彼女だけです」

友につれられ、3年遅れの歩みを始める。

彼は妻のことを思い描いた。財団の御曹司と令嬢。政略結婚でしかない始まりから愛し合った女性のことを。たえず死臭を漂わせる夫にそれでも死んでくれた女性のことを。

「メリオル。あなたは私にはすぎた女性でした」

彼は娘のことを思わずにはいられなかつた。敵として、救うべき存在として出会つた娘。別れの日が来ることがわかつていていたが故に、悲しみの涙を流し続けることを止めることがつづいぞできなかつた。

「ヒメノカリス……。私を許してくださいますか？」

彼は世界の行く末を案じていた。まだ始まつてもいい世界の終わりがまもなく訪れることとなる。人が一つになるにはあまりに時間が足りていない。世界はまだ割れている。

「シン・アスカ。願わくは、私の遺志が、あなた方をお守りくださることを」

巨星が落ちた。

今日この日、世界は偉大な男を失った。

フォイエリヒガンダムは最強のガンダムであった。そのことに異論を挟む者は誰もない。死角なく、何よりも鋭い剣に、何よりも穿つ銃に、何人とも寄せ付けぬ鎧をまとっていた。

それを破るためににはより鋭い剣が、より貫く銃が、装甲を突き破るにたる武器が必要であった。

万能な装甲など存在しない。フォイエリヒを破壊することは不可能ではない。

では剣はどうする。魔王が持つ剣よりも鋭いものなど存在しない。銃はどこで得る。魔王の宝物庫をあさる他ないのでないのではないか。それは鍵を閉じこめた宝箱のようなものだ。箱を開けるために鍵が必要であり、しかし箱を開けなければ鍵は手に入らない。

不毛な堂々廻りを繰り返すでしかない。

ところが、剣などなくとも、銃などなくとも魔王を打ち破る術はたつた一つ用意されていた。他ならぬ魔王の手によつて、メルクールランペに託される形で。

それは何か。

時間である。

魔王が剣を振るうことよりも前に、引き金を引くよりも速く、装甲を貫くことができたなら、魔王の心臓を打ち抜くことを可能とする。

ガンダムメルクールランペには時間が与えられていたのだ。フォイエリヒが性能上まだこれ以上速くは振り抜けないという速度で謁見することを唯一許された。

魔王が魔王を殺すために用意された力であった。

そして、時間は今この瞬間にも着実に時計の針を動かしている。
期限が訪れた。

数えて第6射にあたるゴグドラシルの照射が開始された。これまでと違い、要塞を破壊する必要などない。その照射はか細くさえ見えた。

細い光の柱が月から立ち昇り地球が浮かぶ空を目指す。

孤独な光。

その身にその美しさからはかけ離れた圧倒的な暴威を宿した光は、誰に触れられることなく、誰を傷つけることもなく、ただ独り、星々の輝く暗い海の底へと沈んで消えた。

「何故だ！ 何故老い先短い私だけが生き延びなければならぬ！」

人の思いは光の速ささえ超える。光さえ一秒を要する月と地球の間、しかし友の死を嘆く男は光さえ必要とはしていなかつた。光の速度を超えることはできない。

では何故か。

男は、ブルーノ・アズラエルは知つていたのだ。友は、エインセル・ハンターは死に場所をみつけたということを。それは約束された事実。シュレディンガーの猫であろうとラプラスの魔であろうと否定させない定められた事実。

エインセル・ハンターは自らの死を予定している。それは、量子力学の観測者効果を超えて約束された事実に他ならない。

ブルーノにはただ叫ぶという他、術がない。生まれながらにして体に欠陥を抱える失敗作は車椅子に乗せられた、己の無力を嘆きことしかできない。

友が遠く離れた月面で一人戦つている最中、安全な部屋の中でただわめき散らしていることしかできない。

「ムウも、エインセルも逝つてしまつた。私をおいて……！」

ザフト軍においてエースとして知られていた際も、地球軍の総指揮官の一人として戦場に降りた時にも、これほどこの男が取り乱す光景を見た者はいないことだらう。

異常な物音に気づき、この部屋の扉を開ける女性がいた。その手には水差しとコップを乗せたトレイ。扉を慌てて開いたその顔には驚愕を張り付けている。

無理もない。ブルーノが癪瘍を起こし部屋を荒らしている光景など、女性、メリュー・ラニアスは想像したことさえなかつたことだろつ。

床にはあらゆるものが散らばり、その中にブルーノが座つていた。

「メリュー、教えてくれ。何故彼らが死に、私が生き残らなければならぬ……。古い先短い私だけが……」

扉を閉め、室内に一步踏み出す。その頃には、メリューは平静を取り戻していた。何ら不思議なことなどない。ブルー・コスマス3巨頭として悪鬼と謗られてなお搖るがなかつた彼らの絆の強さをかつて敵とした眺め、今はそばで触れているメリューは知つているのだ。

倒れたテーブル。小さな木製の物でメリューが片腕でも簡単に起こすことができた。その上に、水差しのおかれたトレイを置いた。

「それが、あなた方の願いであつたからです」

気分が落ち着いた、いや、沈んだブルーノは否応なしに車椅子に座つたままメリューの言葉に耳を傾けている。

「遺伝子によつて人の生き方や価値が決められてはならない。そう、あなた方は誓い、確かめ合ひ、だからこそ刃をとつたのではありませんか？だからこそここまで来られたのではありませんか？」

その人がどれほど素晴らしい人でも、大切な人でも遺伝子に欠陥

「それこそ、生み出した側の都合でしかない」があるだけでも失敗作の烙印を押されてしまう。それに対抗するために3人のムルタ・アズラエルは立ち上がったのだから。

「あの2人は、純粹にあなたに生きてもうつことを望んだのです。失敗作だからではなく、あなたがあなたとして」

「そうだな。我らムルタ・アブラエルは目的のために手段を選ばない。そして選択した手段に悔恨など抱いてはならない。だが……」

どれほど理想を抱いていようと、どれほど優れていようと、人は人をやめることはできない。エインセル・ハンターが人として妻と娘を愛し、自身の非道の償いとして命を落としたように。

「今は泣かせてもらいたい。我が友のために」

「この世界は、あくまでも人によって形作られているのだから。

「俺は、取り返しのつかないことをしてしまった……」

涙をとめようがなくて、ヘルメットは脱いでしまった。18mという巨人の中から、長大な大剣を通してさえ、エインセル・ハンターを、殺してはならない人の命を奪ってしまったという感触はこの手に伝わってくる思いがした。

涙を拭つることもできなくて、指は操縦桿を掴んだまま動かせない。メルクールランペはゆっくりと月面へと降りて、砂を巻き上げて着地を果たした。

上空で爆発したフォイエリビの黄金の装甲が破片となつて降り注いでいた。まるで、黄金の雪のようだ。

「シン・アスカ。エインセル・ハンターはいつも悩んでたわあ。世界を動かすことができるほどの力を、富を持ちながら人々を犠牲にし続けることしかできないことを。だから償いを必要とした」

エインセル・ハンターの戦いを最も近くで眺め続けた電子の妖精はどこか退屈そうにコンソールの上に腰掛けている。ただ、その姿ほど、声からは不謹慎さや侮蔑は感じられない。

「わかつてる。俺はエインセル・ハンターを殺したんじやない。ただ、償いの手伝いをしただけなんだ……」

シン・アスカがエインセル・ハンターに勝てたんじゃない。フォイエリヒガンダム。あれほどの機体でさえ残されていた駆動の限界。それを唯一超えることができる機体がシンに与えられたにすぎない。

エインセル・ハンターはすべてを知っていた。最強である自分を倒す術さえも。

「復讐者に殺されなきゃだめだったんだ。でも、誰かの復讐のため死ぬこともできなかつたんだ……、あの人は……」

死は償いではければならず、そして、單なる復讐はエインセル・ハンターが唾棄すべきとしていたことの繰り返しでしかなかつたら。

エインセル・ハンターはどこまでも高潔な人だった。そんな人を

世界は否定し、抹殺してしまった。シン・アスカがこの手で、途方もない喪失感が、なかなか涙をとめてはくれない。

「敵を殺して泣くの？　お母様もエインセルもずいぶんおかしな人間を選んだものね」

シン・アスカはザフト軍に所属し、立場上はたしかに敵に当たる。それでも、シンにとつてエインセルは師にも等しい。彼を越えたいと考えた。彼のことを目標にしていた。そして、いざ対峙した時、エインセルは同じ道を辿った1人の男としてシンを導こうとしていた。

敵ではあった。しかし敵じやなかつた。

涙を拭う。ノーマル・スーツのグローブを顔に擦りつけるようにして。痛くて、涙もまともに拭えなくとも、急いで泣きやんてしまひたかった。あの人大って、こんなこと、望んでなんていらないだろうから。

シートに体重を預けて乱れてしまった息を整える。少しずつ、涙も気持ちも落ち着いてきた。

「水銀燈。力を貸してくれて、ありがとう

「別にあなたのためじゃないわ」

そう、シンも水銀燈も、エインセル・ハンターの償いに力をつくしたにすぎないのだから。それでもお礼を言いたい。

この、心を持つた兵器に。

シンの眼差しの中で退屈そうなのに楽しげに笑う水銀燈。しかし、その目つきが急に鋭力を増すとともにあらぬ方を見た。

「シンー。」

敵機の接近を告げるアラームが人の声でなされていにすぎない。ヘルメットをかぶる余裕はない。操縦桿を握り締めるとメルクールランペが大剣を水銀燈が示した方向へと構えた。

敵の姿はすぐに確認できた。褐色のガンダム。

「あの時の『ディーゼイエイト』。」

ずいぶんと昔に見た機体だ。シンがマッド・エイブス隊長やルナ・マリア・ホークとともに襲撃した屈折コロニーにいたGAT-333ディーゼイエイトガンダムの特殊装備型。本来水色であるはずの装甲を褐色に染めて、鉄球なんておかしな装備をした機体はひどく傷ついていた。

黄金の粒子が低重力に引かれて落ち続いている月面に不時着同時に叩きつけられ、その体中に被弾の痕跡が見られた。フェイズシフト・アーマーが疎らに輝きを放っていた。この宙域はザフト軍の手中に落ちつつある。そんな空をたつた1機で飛んできたのだとしたら、この状態は説明がついた。

ディーゼイエイトはうなだれた人のように墜落したまま動こうとしない。

「どうして……？」

通信から聞こえてきた声には聞き覚えがあった。オープで初めて聞いた。それからも幾度となく敵として機体越しに言葉を交わした。

「ヒメノカリス……」

ディーヴィエイトは、ヒメノカリスは動けなかつた訳ではなかつた。動こうとしているだけだ。そのすぐそばに月面に突き刺さつた黄金の破片が見えていた。もうどこの中のかもわからない。ただ、フォウイエリヒガンダムの残骸であることだけがわかる。

「どうしてあなたは私から奪つていいくの……、すべてを！」

その声は泣きじゃくるヒメノカリスの姿をシンの脳裏に投影させた。

突然立ち上がり、突進してくるディーヴィエイト。傷だらけで、その動きは日に見えて遅い。それでも、ディーヴィエイトは突撃をやめようとはしない。

雪は、まだ降り止んでなどいなかつた。

誰もが剣を取り合い、心重ねて魔王を打ち倒しました。でも、すべての始まりはこれからです。もう魔王はいない。生まれた勇者はその意義をなくし、鍛えられた剣はその標的を失つてしましました。勇者はどこに向かうのでしょうか？ 剣は誰に向けられるのでしょうか？

ともに戦い、勝利を分かち合つた友に？

意味を失つた勇者へ？

次回、GUNDAM SEED Destiny ∞ Blume
Einbrecher

「禁じられた遊び」

長いナイフの夜。長い長い一日が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415s/>

機動戦士ガンダム SEED Destiny ~BlumenEinbrecher~

2011年11月20日02時40分発行